

KARAO

唐 尾 遺 跡

KOUKOTUKA

高 古 塚 遺 跡

SUGAMUTA

菅 牟 田 遺 跡

NAKANOSAKO

中 之 迫 遺 跡

2008年3月

鹿児島県立埋蔵文化財センター

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書
(127)

唐尾遺跡・高古塚遺跡
菅牟田遺跡・中之迫遺跡

二〇〇八年三月 鹿児島県立埋蔵文化財センター



序 文

この報告書は、東九州自動車道建設（大隅 I C～末吉財部 I C）に伴って、平成16年度から平成18度にかけて実施した曾於市（旧曾於郡末吉町，同郡大隅町）に所在する唐尾遺跡，高古塚遺跡，菅牟田遺跡，中之迫遺跡の発掘調査の記録です。

唐尾遺跡，高古塚遺跡，中之迫遺跡は縄文時代早期から古代にかけての複合遺跡です。なかでも唐尾遺跡，高古塚遺跡では縄文時代早期の集石遺構が検出され，さらに高古塚遺跡では落とし穴が検出されています。また，両遺跡からは古代の焼土跡を伴った掘立柱建物跡が発見されました。高古塚遺跡の建物跡は，同一地点における建て替えを想起させるものです。

これら発見された遺構や遺物は，曾於地域の縄文時代から古代にかけてのシラス台地上における土地利用を考える上で貴重な資料といえます。

本報告書が，県民の皆様をはじめ多くの方々に活用され，埋蔵文化財に対する関心とご理解をいただくとともに，文化財愛護思想の普及の一助になれば幸いです。

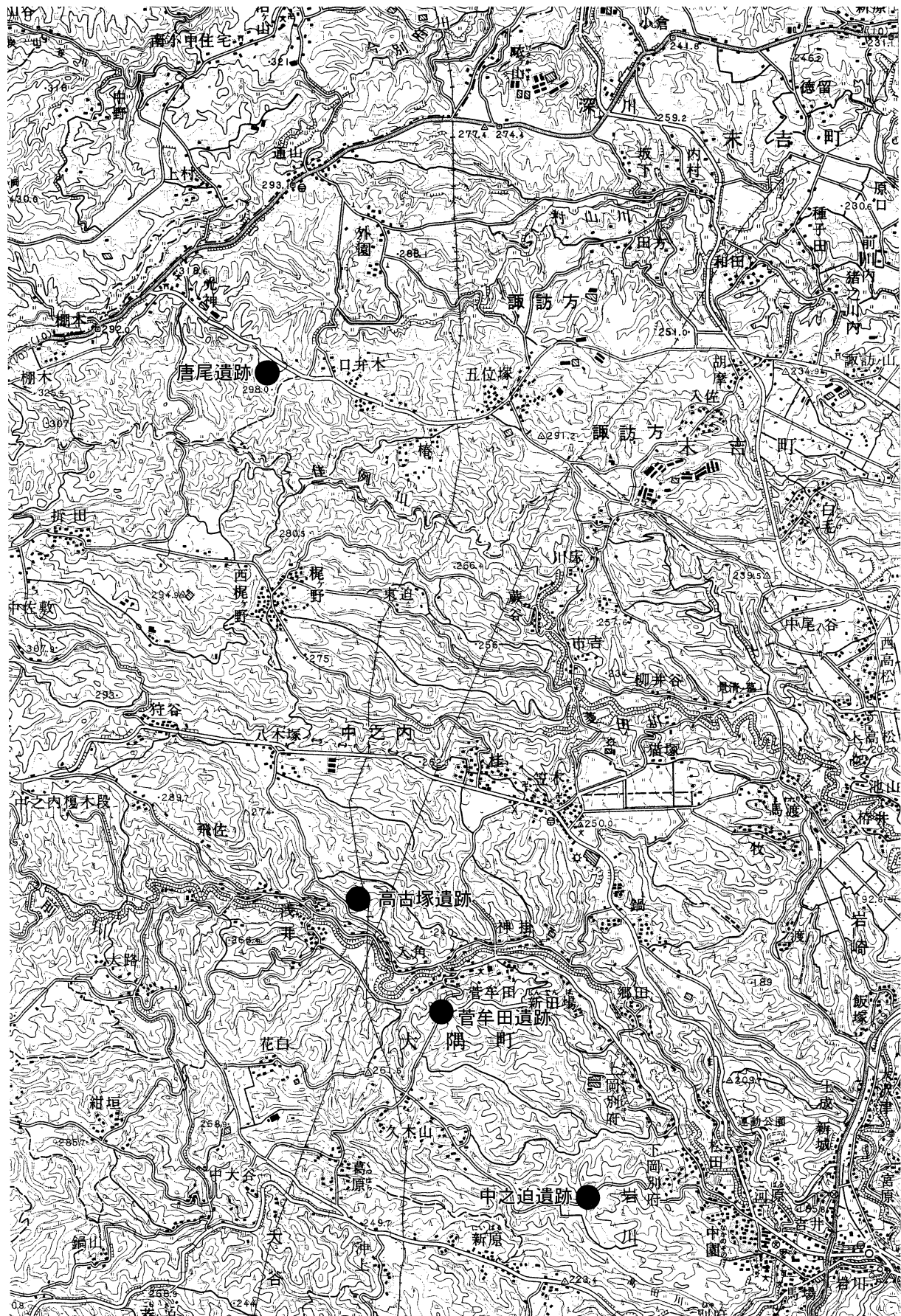
最後に，調査にあたりご協力いただいた国土交通省大隅国道事務所や曾於市教育委員会ならびに発掘調査に従事された地域の方々に厚くお礼を申し上げます。

平成20年 3 月

鹿児島県立埋蔵文化財センター
所長 宮 原 景 信

報告書抄録

ふりがな	からおいせき こうこつかいせき すがむたいせき なかのさこいせき							
書名	唐尾遺跡 高古塚遺跡 菅牟田遺跡 中之迫遺跡							
副書名	東九州自動車道建設（大隅IC～末吉財部IC）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次	Ⅲ							
シリーズ名	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	127							
編著者名	彌榮久志 福永修一							
編集機関	鹿児島県立埋蔵文化財センター							
所在地	〒899-4318 鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森2番1号 TEL0995-48-5811							
発行年月日	2008年3月19日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
唐尾遺跡	鹿児島県 曾於市 末吉町 諏訪方 938番地	46217	66-169	31° 40′ 14″	130° 56′ 15″	確認調査 20030111-20030320 本調査 20040507-20040728	4,260	東九州自 設（大隅I C～末吉 財部IC） に伴う埋 蔵文化財 発掘調査
高古塚遺跡	鹿児島県 曾於市 大隅町 岩川 2433-4他	46217	63-255	31° 37′ 30″	130° 56′ 44″	確認調査 20060110-20060127 本調査 20060509-20060928	300 6,410	
菅牟田遺跡	鹿児島県 曾於市 大隅町 岩川 2916-5他	46217	63-156	31° 37′ 02″	130° 57′ 18″	確認調査 20040517-20040521	154	
中之迫遺跡	鹿児島県 曾於市 大隅町 岩川 2916-5他	46217	63-156	31° 37′ 02″	130° 57′ 18″	確認調査 本調査 20040510-20040727	4,498	
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主 な 遺 物		特記事項
唐尾遺跡	集落 包含地	縄文時代早期 縄文時代中期 縄文時代晩期 古代		集石 落とし穴 竪穴住居 掘立柱建物跡		塞ノ神B式土器 春日式土器 入佐式土器 土師器・須恵器		
高古塚遺跡	散布地	縄文時代早期 縄文時代中期 縄文時代晩期 古代		落とし穴・集石 落とし穴 掘立柱建物跡		岩本式土器・前平式土器 吉田式土器・石坂式土器 条痕文円筒土器・下剥峯式土器・ 押型文土器・綾式土器・黒川式土器 土師器・須恵器		
中之迫遺跡	散布地	縄文時代早期 縄文時代前期 縄文時代晩期				岩本式土器，吉田式土器 石坂式土器，貝殻文円筒形土器（辻 タイプ），無文土器 甕土器 黒川式土器		
概 要	唐尾遺跡では，縄文時代早期，中期晩期，古代の遺構・遺物が検出された。特に中期の落とし穴が8基，晩期の入佐式土器を伴った竪穴住居跡1基が検出されている。また，古代では，焼土跡を伴う掘立柱建物跡が検出された。高古塚遺跡では，縄文時代早期，中期，晩期，古代の遺構遺物が検出された。特に早期の落とし穴が3基，集石が13基検出され当時の土地利用のあり方が注目される。また，早期前葉の土器が出土している。古代では焼土跡を伴い同一地点で主軸を変えて立て替えを行った掘立柱建物跡が検出された。菅牟田遺跡は確認調査の結果遺物遺構が発見されなかった。中之迫遺跡では，縄文時代早期，前期，晩期の遺物が出土している。							



遺跡位置図 (1:25,000)

例 言

- 1 本報告は、東九州自動車道建設（大隅 I C～末吉財部 I C）に伴う「唐尾遺跡・高古塚遺跡・菅牟田遺跡・中之迫遺跡」の発掘調査報告である。
- 2 発掘調査は、日本道路公団（平成16年度）、国土交通省（平成18年度以降）からの受託事業として、鹿児島県立埋蔵文化財センターが担当した。
- 3 整理作業及び報告書作成事業は平成18年度、平成19年度に国土交通省九州地方整備局大隅国道河川事務所の委託を受け、鹿児島県立埋蔵文化財センターが担当した。
- 4 本書で用いたレベル数値はすべて海拔高である。
- 5 本書の遺物番号は各節ごとの通し番号とし、挿図、表、図版の番号と一致する。
- 6 発掘調査の実施においては、曾於市教育委員会の協力を得た。
- 7 発掘調査における実測および写真撮影は、調査担当者が行った。
- 8 遺物に関する写真撮影等は、唐尾遺跡は吉岡康弘、高古塚遺跡、中之迫遺跡は福永修一が行った。写真図版の編集は、福永修一が行なった。
- 9 出土土器に付着した煤及び出土した炭化材放射性炭素年代測定を（株）加速器分析研究所に依頼し、その分析結果報告を掲載した。
- 10 本報告書の制作・整理作業の一部にはデジタル技術を導入し、図版等の作成および編集に係わるデータ処理は、福永修一が行い、馬籠亮道の協力を得た。
- 11 本書の執筆、編集は、鹿児島県立埋蔵文化財センターで彌榮久志、福永修一が行った。
- 12 本報告書に掲載した出土遺物・図面・写真等は、鹿児島県立埋蔵文化財センターで保管し活用する。なお、本報告書に使用したデータの一部は、鹿児島県立埋蔵文化財情報管理システムおよび埋蔵文化財情報データベース（<http://www.jomon-no-mori.jp>）で公開する予定である。
- 13 各遺跡の遺物注記の記号は、唐尾遺跡「カラオ」、高古塚遺跡「K T」、中之迫遺跡「N S」である。

凡 例

1 遺構

- (1) 遺構図の縮尺については1／20を基本としたが、大型の遺構についてはこの限りではない。各々、図中に示したスケールを参考とされたい。
- (2) 掘立柱建物跡、土坑の焼土跡については、その部分をスクリーントーンで表現している。
- (3) 集石遺構の断面図については、断面線から半分を見通している場合と、すべての礫を見通している場合がある。
- (4) 遺構番号については、調査時に付されたものから、報告書掲載順に新たに付け替えた。
- (5) 遺構観察表中（ ）で記した数値は、検出状況により正確な計測値を表示できないものについて現況及び参考値で表した。
- (6) 高古塚遺跡のV a層検出落とし穴の実測図は、平成18年9月17日（日）に台風13号により調査事務所が半壊し実測図を滅失したため、V a層検出落とし穴1号、4号、5号については写真より図を起こしたため数値等については、参考値として取り扱う。

2 遺物

- (1) 掲載遺物の縮尺は、土器が1／3、石器は1／1を基本とする。しかし、礫石器など大型のものについてはこの限りでない。各々、図中に示したスケールを参考とされたい。
- (2) 土器の外面に付着した煤跡、内黒土師器の内面については、スクリーントーンで表現している。

- 3 土器、石器等の出土位置については、各節ごとに記載した。スケールについては、原則として1／500で、図中にグリッドラインが表示されているので参考にされたい。

目 次

序 文	
報告書抄録	
例言・凡例	
目 次	
本文目次	
挿図目次	
表 目 次	
図版目次	
あとがき	

本文目次

第1章 唐尾遺跡		第2節 遺跡の位置と環境	94
第1節 調査の経過と調査及び整理作業の経過	1	1 遺跡の位置と特色	94
1 調査に至るまでの調査	1	2 遺跡を取り巻く地形・水文環境	94
2 調査の経過と整理作業の経過	1	3 遺跡を取り巻く地質環境	94
3 調査の組織	1	4 各遺跡の位置と特色	95
第2節 遺跡の位置と環境及び周辺遺跡	3	5 歴史的環境	95
1 遺跡の位置と環境	3	第3節 遺跡の層位	103
2 周辺遺跡	3	1 遺跡の層状	103
第3節 遺跡の層位	7	2 土層断面	103
第4節 調査の概要	11	第4節 発掘調査の成果	106
1 縄文時代早期	11	1 縄文時代早期の調査	106
(1) 分布状況	11	・ 遺構	107
(2) 遺構	11	・ 遺物	127
(3) 遺物	16	2 縄文時代中期の調査	148
2 縄文時代前・中期	32	・ 遺構	148
(1) 分布状況	32	3 縄文時代後期～晩期の調査	151
(2) 遺構	32	・ 遺構	151
(3) 遺物	40	・ 遺物	151
3 縄文時代晩期	40	4 弥生時代の調査	157
(1) 分布状況	40	・ 遺物	157
(2) 遺構	40	5 古代の調査	160
(3) 遺物	42	・ 遺構	160
4 奈良・平安時代	54	・ 遺物	173
(1) 分布状況	54	6 まとめ	177
(2) 遺構	54	付 編 自然科学分析	179
(3) 遺物	64	第3章 菅牟田・中之迫遺跡	187
第5節 まとめ	87	第1節 発掘調査の概要	187
1 縄文時代早期	87	1 調査の概要	187
2 縄文時代前・中期	87	2 調査の経過	187
3 縄文時代晩期	88	3 遺跡の層位	194
4 奈良・平安時代	88	第2節 発掘調査の成果	195
第2章 高古塚遺跡	91	1 縄文時代早期の調査	195
第1節 発掘調査の経過	91	2 縄文時代前期の調査	204
1 調査に至るまでの経緯	91	3 縄文時代晩期の調査	206
2 調査の組織	91	4 まとめ	210
3 発掘調査の経過	92		

挿 図 目 次

第 1 章 唐尾遺跡		第48図 奈良・平安時代の軽石集石 1 号	60
第 1 図 唐尾遺跡周辺遺跡	4	第49図 奈良・平安時代の軽石集石 2 号(1)	61
第 2 図 唐尾遺跡地層模式図	9	第50図 奈良・平安時代の軽石集石 2 号(2)	62
第 3 図 土層断面図(1)	9	第51図 土師器甕等集中出土状況	63
第 4 図 土層断面図(2)	10	第52図 ピット検出状況	63
第 5 図 唐尾遺跡地形及び調査範囲	12	第53図 焼土検出状況	63
第 6 図 縄文時代早期～晩期の遺物出土状況	13	第54図 奈良・平安時代出土遺物(1)甕	65
第 7 図 縄文時代早期集石の位置	14	第55図 奈良・平安時代出土遺物(2)甕	66
第 8 図 縄文時代早期第 2 号集石	14	第56図 奈良・平安時代出土遺物(3)甕	67
第 9 図 縄文時代早期第 1 号集石	14	第57図 奈良・平安時代出土遺物(4)甕	68
第10図 縄文時代早期土抗の位置	15	第58図 奈良・平安時代出土遺物(5)坏	69
第11図 縄文時代早期土抗	15	第59図 奈良・平安時代出土遺物(6)坏	70
第12図 縄文時代早期の土器(1)	17	第60図 奈良・平安時代出土遺物(7)埴	72
第13図 縄文時代早期の土器(2)	18	第61図 奈良・平安時代出土遺物(8)内黒埴	72
第14図 縄文時代早期の土器(3)	20	第62図 奈良・平安時代出土遺物(9)墨書土器	73
第15図 縄文時代早期の土器(4)	21	第63図 奈良・平安時代出土遺物(10)特殊遺物	73
第16図 縄文時代早期の土器(5)	22	第64図 奈良・平安時代出土遺物(11)焼塩土器	74
第17図 縄文時代早期の土器(6)	23	第65図 奈良・平安時代出土遺物(12)須恵器	74
第18図 縄文時代早期の石器(1)	24	第66図 奈良・平安時代出土遺物(13)砥石	80
第19図 縄文時代早期の石器(2)	25	第67図 奈良・平安時代出土遺物(14)軽石製品	81
第20図 縄文時代早期の石器(3)	26	第68図 奈良・平安時代出土遺物(15)軽石製品	82
第21図 縄文時代早期の石器(4)	27	第69図 奈良・平安時代出土遺物(16)軽石製品	83
第22図 縄文時代早期の石器(5)	28	第70図 奈良・平安時代出土遺物(17)軽石製品	84
第23図 縄文時代早期の石器(6)	29	第71図 奈良・平安時代出土遺物(18)軽石製品	85
第24図 縄文時代早期の軽石製品(1)	30		
第25図 縄文時代早期の軽石製品(2)	31		
第26図 縄文時代前・中期落とし穴配置	33		
第27図 縄文時代前・中期落とし穴 1 号・2 号	34		
第28図 縄文時代前・中期落とし穴 3 号・4 号・5 号	35		
第29図 縄文時代前・中期落とし穴 6 号・8 号	36		
第30図 縄文時代前・中期落とし穴 7 号	37		
第31図 縄文時代中期の土器	38		
第32図 縄文時代晩期の遺構配置	39		
第33図 縄文時代晩期の竪穴住居跡	41		
第34図 縄文時代晩期の焼土跡	42		
第35図 縄文時代晩期の土器(1)深鉢竪穴住居跡	43		
第36図 縄文時代晩期の土器(2)深鉢	44		
第37図 縄文時代晩期の土器(3)深鉢	45		
第38図 縄文時代晩期の土器(4)深鉢	46		
第39図 縄文時代晩期の土器(5)浅鉢	47		
第40図 縄文時代晩期の石器(1)	48		
第41図 縄文時代晩期の石器(2)	49		
第42図 奈良・平安時代の出土状況	54		
第43図 奈良・平安時代の遺構配置	55		
第44図 奈良・平安時代の掘建柱建物跡 1 号	56		
第45図 奈良・平安時代の掘建柱建物跡 2 号	57		
第46図 奈良・平安時代の掘建柱建物跡 3 号	58		
第47図 奈良・平安時代の掘建柱建物跡 4 号	59		

第2章	高古塚遺跡		第50図	V a 層～Ⅲ層出土石器実測図 2	156
第1図	周辺地形図	96	第51図	弥生時代遺物出土状況図	157
第2図	周辺遺跡地図	99	第52図	弥生時代土器実測図	157
第3図	高古塚遺跡周辺地形図 1	100	第53図	Ⅳ a 層遺構位置・遺物出土状況図 1	158
第4図	高古塚遺跡周辺地形図 2	101	第54図	Ⅳ a 層遺構位置・遺物出土状況図 2	159
第5図	グリット配置及びトレンチ配置図	102	第55図	掘立柱建物跡 1	160
第6図	基本土層柱状模式図	103	第56図	掘立柱建物跡 2	161
第7図	土層断面実測図 1	103	第57図	掘立柱建物跡 3	162
第8図	土層断面実測図 2	104	第58図	掘立柱建物跡出土遺物実測図	163
第9図	土層断面実測図 3	105	第59図	土坑 1	164
第10図	Ⅷ層～Ⅵ a 層遺構位置・遺物出土状況図 1	106	第60図	土坑 2	165
第11図	Ⅷ層～Ⅵ a 層遺構位置・遺物出土状況図 2	108	第61図	古代出土遺物実測図 1	166
第12図	Ⅷ層～Ⅵ a 層遺構位置・遺物出土状況図 3	110	第62図	古代出土遺物実測図 2	167
第13図	Ⅷ層落とし穴 1	112	第63図	古代出土遺物実測図 3	168
第14図	Ⅷ層落とし穴 2	113	第64図	古代出土遺物実測図 4	169
第15図	Ⅷ層落とし穴 3	114	第65図	古代出土遺物実測図 5	170
第16図	Ⅷ層集石 1 及び集石内出土遺物	115	第66図	古代出土遺物実測図 6	171
第17図	Ⅷ層集石 2 及び集石内出土遺物	116	第67図	古代出土遺物実測図 7	172
第18図	Ⅷ層集石 3	117	第68図	古代出土遺物実測図 8	173
第19図	Ⅷ層集石 4 及び集石内出土遺物	118			
第20図	Ⅷ層集石 5	119			
第21図	Ⅷ層集石 6	120	第3章	菅牟田・中之迫遺跡	
第22図	Ⅷ層集石 7	121	第1図	菅牟田遺跡周辺地形図 1	188
第23図	Ⅷ層集石 8	122	第2図	菅牟田遺跡周辺地形図 2	189
第24図	I 類～Ⅳ類土器実測図	125	第3図	菅牟田遺跡トレンチ配置図	190
第25図	V 類土器実測図 1	126	第4図	中之迫遺跡周辺地形図 1	191
第26図	V 類土器実測図 2	127	第5図	中之迫遺跡周辺地形図 2	192
第27図	Ⅵ類土器実測図 1	128	第6図	中之迫遺跡グリット配置及びトレンチ配置図	193
第28図	Ⅵ類土器実測図 2	129	第7図	基本土層柱状模式図	194
第29図	Ⅶ類土器実測図	130	第8図	土層断面実測図	194
第30図	Ⅷ類土器実測図	131	第9図	Ⅷ層～Ⅵ a 層遺物出土状況図	195
第31図	Ⅸ類土器実測図	132	第10図	I 類～Ⅲ類土器実測図	196
第32図	Ⅷ層・Ⅶ層出土石器実測図 1	135	第11図	Ⅳ類土器実測図 1	197
第33図	Ⅷ層・Ⅶ層出土石器実測図 2	136	第12図	Ⅳ類土器実測図 2	198
第34図	Ⅶ層・Ⅵ a 層出土石器実測図 3	137	第13図	V 類土器実測図	199
第35図	Ⅷ層・Ⅶ層出土石器実測図 4	138	第14図	Ⅷ層～Ⅵ a 層出土石器実測図 1	201
第36図	Ⅷ層・Ⅶ層出土石器実測図 5	139	第15図	Ⅷ層～Ⅵ a 層出土石器実測図 2	202
第37図	Ⅷ層・Ⅶ層出土石器実測図 6	140	第16図	V a 層遺物出土状況図	204
第38図	Ⅷ層・Ⅶ層出土石器実測図 7	141	第17図	Ⅵ類土器実測図	205
第39図	V a 層遺構位置・遺物出土状況図 1	143	第18図	Ⅳ a 層遺物出土状況図	206
第40図	V a 層遺構位置・遺物出土状況図 2	144	第19図	Ⅶ類土器実測図 1	207
第41図	V a 層落とし穴 1	145	第20図	Ⅶ類土器実測図 2	208
第42図	V a 層落とし穴 2	146	第21図	表採遺物実測図	209
第43図	V a 層落とし穴 3	147			
第44図	Ⅳ b 層遺構位置・遺物出土状況図 1	149			
第45図	Ⅳ b 層遺構位置・遺物出土状況図 2	150			
第46図	Ⅳ b 層集石	151			
第47図	X 類・X I 類土器実測図	152			
第48図	Ⅻ類土器実測図	153			
第49図	V a 層～Ⅲ層出土石器実測図 1	155			

目 次

第 1 章	唐尾遺跡		第 3 章	菅牟田・中之迫遺跡	
第 1 表	唐尾遺跡周辺の遺跡一覧表	5	第 1 表	I 類～V 類土器観察表	200
第 2 表	唐尾遺跡周辺の遺跡一覧表	6	第 2 表	VII 層出土石器観察表	203
第 3 表	縄文時代土器観察表	50	第 3 表	VI 類土器観察表	204
第 4 表	縄文時代土器観察表	51	第 4 表	VII 類～IX 類土器観察表	208
第 5 表	縄文時代土器観察表	52	第 5 表	表採遺物観察表	209
第 6 表	縄文時代石器観察表	53			
第 7 表	掘立柱建物跡 1 号の計測	56			
第 8 表	掘立柱建物跡 2 号の計測	57			
第 9 表	掘立柱建物跡 3 号の計測	58			
第10表	掘立柱建物跡 4 号の計測	60			
第11表	奈良・平安時代土器観察表	75			
第12表	奈良・平安時代土器観察表	76			
第13表	奈良・平安時代土器観察表	77			
第14表	奈良・平安時代土器観察表	78			
第15表	奈良・平安時代土器観察表	79			
第16表	奈良・平安時代石器観察表	86			
第 2 章	高古塚遺跡				
第 1 表	周辺遺跡地名表	98			
第 2 表	VIII 層落とし穴観察表	112			
第 3 表	VIII 層集石観察表	124			
第 4 表	I 類～V 類土器観察表	133			
第 5 表	VI 類～IX 類土器観察表	134			
第 6 表	VIII 層～VI a 層出土石器観察表	142			
第 7 表	V a 層落とし穴観察表	148			
第 8 表	IV b 層集石観察表	151			
第 9 表	X 類～XII 類土器観察表	154			
第10表	V a 層～III 層出土石器観察表	155			
第11表	弥生時代土器観察表	157			
第12表	掘立柱建物跡観察表 1	160			
第13表	掘立柱建物跡観察表 2	161			
第14表	掘立柱建物跡観察表 3	162			
第15表	古代土坑観察表	164			
第16表	古代出土遺物観察表 1	174			
第17表	古代出土遺物観察表 2	175			
第18表	古代出土遺物観察表 3	176			

図 版 目 次

唐尾遺跡

- 図版 1 唐尾遺跡周辺地形
- 図版 2 縄文時代早期集石 2 号ほか
- 図版 3 縄文時代早期遺物出土状況ほか
- 図版 4 落とし穴 1 号半裁状況ほか
- 図版 5 落とし穴 2 号半裁状況ほか
- 図版 6 落とし穴 3 号半裁状況ほか
- 図版 7 落とし穴 5 号半裁状況ほか
- 図版 8 落とし穴 4 号完掘状況ほか
- 図版 9 落とし穴 7 号半裁状況ほか
- 図版10 落とし穴 8 号半裁状況ほか
- 図版11 縄文時代晩期竪穴住居跡ほか
- 図版12 奈良・平安時代掘立柱建物跡 1 号ほか
- 図版13 奈良・平安時代掘立柱建物跡 3 号ほか
- 図版14 ピット 2 号半裁遺物検出ほか
- 図版15 奈良・平安時代軽石集石 1 号ほか
- 図版16 奈良・平安時代遺物出土状況ほか
- 図版17 縄文時代早期出土遺物（土器 1）
- 図版18 縄文時代早期出土遺物（土器 2）
- 図版19 縄文時代早期出土遺物（土器 3）
- 図版20 縄文時代早期出土遺物（石器 1）
- 図版21 縄文時代早期出土遺物（石器 2）
- 図版22 縄文時代早期出土遺物（石器 3）
- 図版23 縄文時代早期出土遺物（軽石製品 1）
- 図版24 縄文時代早期（軽石製品 2）・
中期出土遺物（土器）
- 図版25 縄文時代晩期出土遺物（土器 1）
- 図版26 縄文時代晩期出土遺物（土器 2）
- 図版27 縄文時代晩期出土遺物（土器 3）
- 図版28 縄文時代晩期出土遺物（石器）
- 図版29 奈良・平安時代出土遺物（甕 1）
- 図版30 奈良・平安時代出土遺物（甕 2）
- 図版31 奈良・平安時代出土遺物（坏）
- 図版32 奈良・平安時代出土遺物（埴・内黒埴）
- 図版33 奈良・平安時代出土遺物（墨書土器）ほか
- 図版34 奈良・平安時代出土遺物（焼塩土器）
- 図版35 奈良・平安時代出土遺物（須恵器・砥石）
- 図版36 奈良・平安時代出土遺物（軽石製品）

高古塚遺跡

- 図版 1 高古塚遺跡遠景
- 図版 2 高古塚遺跡周辺地形
- 図版 3 縄文時代早期 1 号落とし穴完掘状況ほか
- 図版 4 縄文時代早期 2 号落とし穴断面ほか
- 図版 5 縄文時代早期 2 号・3 号落とし穴検出状況ほか
- 図版 6 縄文時代早期 1 号集石ほか
- 図版 7 縄文時代早期 7 号集石ほか
- 図版 8 縄文時代中期 1 号落とし穴完掘状況ほか
- 図版 9 縄文時代中期 2 号落とし穴検出状況ほか
- 図版10 縄文時代中期 3 号落とし穴完掘状況ほか
- 図版11 縄文時代中期 2 号・3 号・4 号落とし穴ほか
- 図版12 縄文時代中期 5 号落とし穴完掘状況ほか
- 図版13 縄文時代中期 6 号落とし穴検出状況ほか
- 図版14 縄文時代早期遺物出土状況 1 ほか
- 図版15 No.50出土状況ほか
- 図版16 掘立柱建物跡
- 図版17 掘立柱建物跡検出状況ほか
- 図版18 古代遺物出土状況ほか
- 図版19 土層断面ほか
- 図版20 I 類～IV 類土器
- 図版21 V 類土器
- 図版22 VI 類土器
- 図版23 VII 類・IX 類土器
- 図版24 VIII 類土器
- 図版25 X 類・XI 類土器
- 図版26 XII 類・弥生時代土器
- 図版27 縄文時代出土石器
- 図版28 掘立柱建物跡出土遺物ほか
- 図版29 古代出土遺物 1
- 図版30 古代出土遺物 2
- 図版31 古代出土遺物 3

菅牟田遺跡・中之迫遺跡

- 図版32 中之迫遺跡周辺地形ほか
- 図版33 1 T 完掘状況ほか
- 図版34 I 類～IV 類土器ほか
- 図版35 IV 類・V 類土器
- 図版36 VI 類～IX 類土器

第Ⅰ節 調査の経過と調査及び整理作業の経過

1 調査に至るまでの調査

平成11年2月 末吉・財部インターから志布志インター間の分布調査を実施。

平成13年1月29日～2月6日 宮ヶ原遺跡，加治木堀遺跡，十三塚原遺跡の試掘調査を実施。

平成13年9月17日～12月25日 19遺跡，118か所に試掘溝を入れ，詳細分布調査を実施。

平成13年10月1日～平成14年3月22日 関山西遺跡，関山遺跡，狩俣遺跡の確認調査を実施。

平成15年11月18・19日 井出山遺跡試掘調査を実施。

平成16年1月14日～3月12日 定段・稲村遺跡工事用道路確認・本調査を実施。

2 調査の経過と整理作業の経過

平成16年5月7日～平成17年3月20日

中之迫遺跡工事用道路確認・本調査を実施。 菅牟田・唐尾遺跡の確認・本調査を実施。

平成17年5月7日～平成18年3月20日

関山西・関山・唐尾・定段遺跡の本調査を実施。

平成16年11月1日～28日

確認トレンチを設定後確認調査を実施。

平成16年12月1日～25日

確認調査 奈良・平安時代の範囲を確定

平成17年1月5日～28日

確認調査 縄文時代晩期と中期と早期の範囲を確定

平成17年2月1日～27日

本調査 奈良・平安時代と縄文時代晩期の全面調査を実施

平成17年3月1日から20日

本調査 奈良・平安時代と縄文時代晩期の全面調査を実施

平成18年5月8日～28日

本調査 奈良・平安時代と縄文時代晩期の全面調査を実施

平成18年6月1日～28日

本調査 縄文時代中期と早期の全面調査を実施

平成18年7月1日～28日

本調査 縄文早期の全面調査の実施

平成18年4月1日から平成19年5月31日

唐尾遺跡の整理作業を実施。

3 調査の組織

平成16年度

事業主体 日本道路公団九州支社鹿児島工事事務所・鹿児島県土木部

調査主体 鹿児島県教育委員会

調査総括 鹿児島県立埋蔵文化財センター 所 長 木原 俊孝

調査企画 鹿児島県立埋蔵文化財センター

	〃	次長兼総務課長	賞雅 彰
	〃	調 査 課 長	新東 晃一
	〃	課 長 補 佐	立神 次郎
	〃	主任文化財主事兼第二調査係長	彌榮 久志
調査担当者	〃	文 化 財 主 事	鶴田 静彦
	〃	〃	岩澤 和憲
調査事務	〃	主 事	福山恵一郎

平成17年度

事業主体 日本道路公団九州支社鹿児島工事事務所・鹿児島県土木部

調査主体 鹿児島県教育委員会

調査総括 鹿児島県立埋蔵文化財センター 所 長 上今 常雄

調査企画 鹿児島県立埋蔵文化財センター 次 長(総務) 有川 昭人

〃 次 長(調査) 新東 晃一

〃 調 査 第 二 課 長 立神 次郎

〃 主任文化財主事兼調査第二課第一係長 彌榮 久志

調査担当者 〃 文 化 財 主 事 鶴田 静彦

〃 文 化 財 主 事 内山 伸明

調査事務 〃 主 事 福山恵一郎

平成18年度

事業主体 国土交通省大隅河川国道事務所・鹿児島県土木部

調査主体 鹿児島県教育委員会

調査総括 鹿児島県立埋蔵文化財センター 所 長 上今 常雄 (4月～8月)

〃 所 長 宮原 景信 (9月～3月)

調査企画 〃 次 長(総務) 有川 昭人

〃 次 長(調査) 新東 晃一

〃 調 査 第 二 課 長 立神 次郎

調査企画及び整理担当者 〃 主任文化財主事兼調査第二課第一係長 彌榮 久志

調査事務 〃 主 事 五百路 真

平成19年度

事業主体 国土交通省大隅河川国道事務所

調査主体 鹿児島県教育委員会

調査総括 鹿児島県立埋蔵文化財センター 所 長 宮原 景信

調査企画 〃 次 長(総務) 平山 章

〃 次 長(調査) 新東 晃一

〃 調 査 第 二 課 長 立神 次郎

調査企画及び整理担当者 〃 主任文化財主事兼調査第二課第一係長 彌榮 久志

調査事務 〃 主 事 五百路 真

第Ⅱ節 遺跡の位置と環境及び周辺遺跡

1 遺跡の位置と環境

唐尾遺跡は鹿児島県曾於市末吉町大字諏訪方字唐尾に所在する。

曾於市は鹿児島県の北東部で大隅地方に入り、宮崎県都城市の南隣にあたる。曾於市は曾於郡財部町、同末吉町、同大隅町が平成16年の市町村合併で形成された市である。曾於市の中にある末吉町は同市の中部にあたり、北側に財部町、南側に大隅町が接している。

大字諏訪方は曾於市末吉町内でも西北部にあたり、北側には国道10号線が通り、同市財部町と隣接している。

遺跡の位置は北側の国道10号線の光神小学校から末吉町市街地方向に約1.2kmの入った県道の南側にあたる。

この地域は、鹿児島県で普通にみられるシラス台地にある。シラス台地は、約25,000年前の錦江湾奥部の現在「タギリ」と言われている海底火口が噴出源と考えられている火砕流が標高約300～100m級の台地を形成したものである。シラス台地は火砕流堆積物のため圧力には強いが、水には弱く、雨の浸食で小さく切り立った浸食谷が八つ手状に形成されるのが特徴である。

遺跡の立地しているこのシラス台地は東西約700m、南北400mの平坦面であるが、東西南北に浸食谷がある。遺跡の位地はこのシラス台地の南部で、その南端は第2図で示した様に垂直に切り立った約60mの崖を呈している。また、南端には標高298.0mの三角点がある。

遺跡の現状は、東西南北に区画整理された標高約295mの平坦に造成した畑地になっている。この平坦な畑地の北側には関山遺跡が存在する。調査の結果、台地の中央部には存在せず、台地の周辺部に立地している傾向が見られる。

また、関山遺跡の西側には江戸時代に関所が設けられた言われのある所があり、地名も関所関係の「関」が使われている。よって、歴史的にもこの付近は交通の要所にあたる意義深い所である。

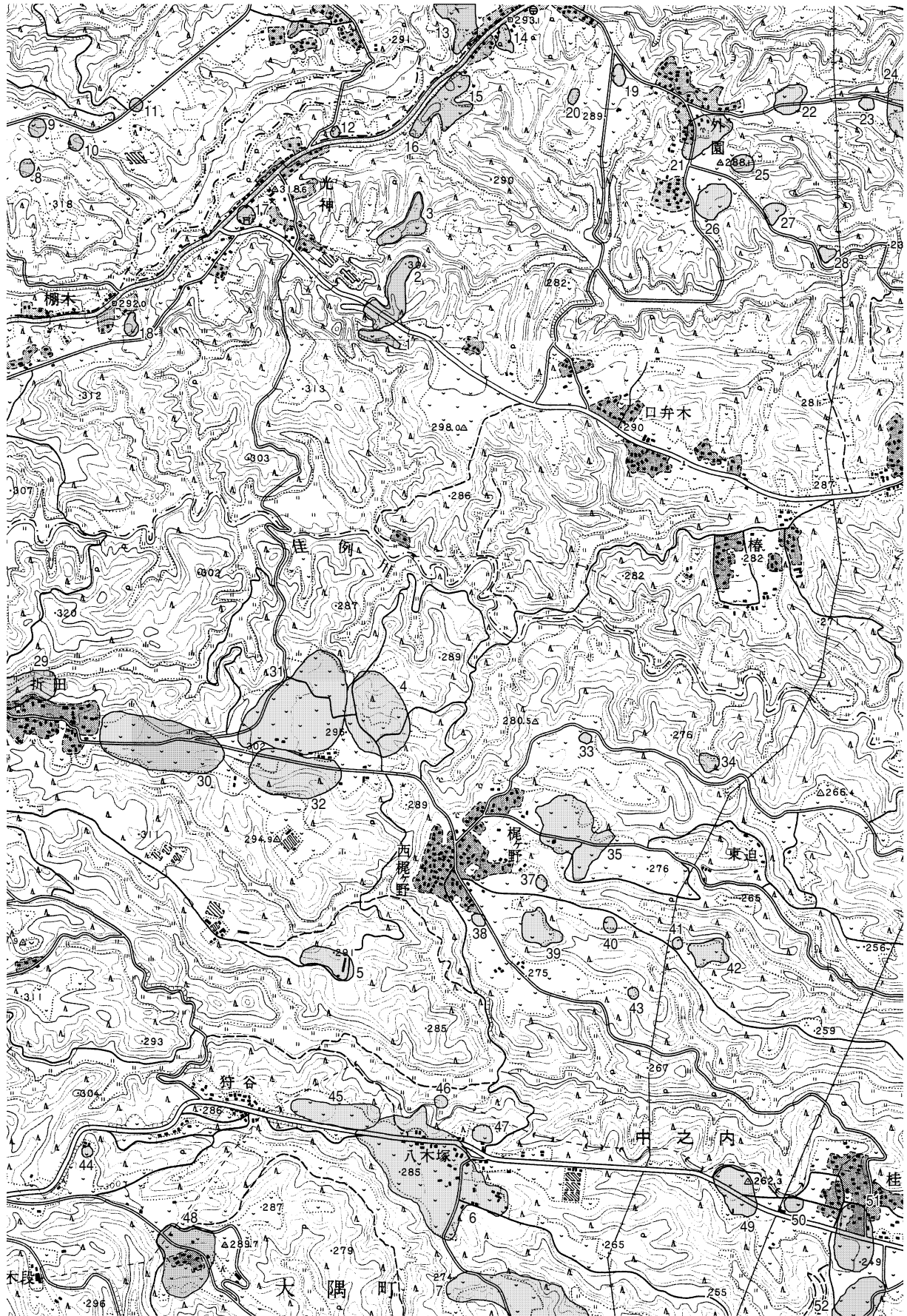
2 周辺遺跡（第1図）

1から7は東九州自動車道建設に伴う13次区間で平成17・18年度に調査した遺跡である。

1は本報告の唐尾遺跡である。2は同じ台地の北部にある関山遺跡である。遺跡は旧石器時代、縄文時代早期、古代等の時期が発見されている。その中でも、縄文時代早期は落とし穴群が列状に検出されている。3は関山西遺跡である。ここは、この台地より一谷挟んだ北側の台地である。遺跡が立地している所は台地が浸食で縊れている地形である。遺跡は主に縄文時代早期と古代から中世が発見された。4は西原段Ⅰ遺跡で台地の東側が周知されている。調査の結果、縄文早期の遺跡と古墳時代であることがわかった。5は野鹿倉遺跡で縄文早期と晩期の遺跡である。ここは、浸食谷が南側と東側にあり、馬の背状になっている。6は建山遺跡で、旧石器時代、縄文時代早期、古代の遺跡である。地形は広い台地で、調査場所は西側端を南北に調査している。7は狩俣遺跡で、縄文時代早期・晩期、古代、中世の遺跡である。特に中世の畠跡が全面に検出している。

後の遺跡番号は、9から13が曾於市財部町所在で、14から28が曾於市末吉町所在で、29から52が曾於市大隅町所在である。

これらの周辺遺跡の立地は、環境で示したようにシラス台地の周辺部に存在している。



第1図 唐尾遺跡周辺遺跡 (1:25,000)

第1表 唐尾遺跡周辺の遺跡一覧表

No.	遺跡名	所在地（曾於市）	地形	時代	出土遺物等	備考
1	唐尾	末吉町諏訪方唐尾	台地	縄文(晩期)		
2	関山	末吉町諏訪方関山	台地	旧石器 縄文(草・早・中・晩) 奈良・平安		
3	関山西	末吉町諏訪方関山西	台地	縄文(早・晩) 弥生・奈良・平安		
4	西原段1	大隅町中之内西原段	台地	縄文(後)	岩崎上層式	
5	野鹿倉	大隅町中之内野鹿倉	台地	縄文	土器	
6	建山	大隅町中之内建山	台地	縄文・古墳	土器	
7	狩俣	大隅町岩川狩俣	台地	縄文・古墳	土器, 石器	
8	梅田	財部町南俣字梅田		縄文・歴史	土師器	
9	荷床2	財部町南俣字荷床		歴史	土師器	
10	八畝	財部町南俣字八畝		縄文・歴史	土師器	
11	荷床1	財部町南俣字荷床		歴史	土師器	
12	野方	財部町南俣字野方	台地	縄文・平安	土師器 内黒土師器	
13	牧B	末吉町岩崎牧		縄文		県埋文報(29)
14	末吉通山 宿場跡	末吉町深川通山	台地	近世	宿場跡	(町)昭和43. 1
15	桐木	末吉町諏訪方桐木	台地	旧石器 縄文(草・早・中・後・晩) 古墳・奈良・平安・中世		H 8～11 発掘調査
16	桐木B	末吉町諏訪方桐木	台地	旧石器 縄文(草・早・中・後・晩) 古墳・奈良・平安		H 12～13 発掘調査
17	橋野居館跡	末吉町橋野椿	台地	中世		
18	大角豆ヶ迫	末吉町諏訪方棚木	台地	縄文・奈良～平安		H5農政分布調査
19	真方入口	末吉町深川 五位塚真方入口	台地	縄文	葬式	町埋文報(3)
20	通山上川路	末吉町深川 五位塚通塚上川路	台地	縄文・中世	夜臼式	町埋文報(3)
21	臼杵	末吉町深川外園	台地	縄文・古墳		町埋文報(4). (5)
22	楠木岡A	末吉町深川楠木岡	台地	縄文(晩期)・古代	土師器	町埋文報(4). (5)
23	楠木岡B	末吉町深川楠木岡	台地	縄文(晩期)・古代	土師器	町埋文報(4). (5)
24	楠木岡C	末吉町深川楠木岡	台地	縄文・古代	土師器	
25	下ノ窪	末吉町深川 五位塚下ノ窪	台地	縄文(晩期)・古代	入佐式 土師器	町埋文報(4)
26	四枝道	末吉町深川四枝道	台地	縄文(晩)・古代	土師器	町埋文報(4). (5)

第2表 唐尾遺跡周辺の遺跡一覧表

No.	遺跡名	所在地（曾於市）	地形	時代	出土遺物等	備考
27	仮牧	末吉町深川 五位塚仮牧	台地	古代	土師器 須恵器	町埋文報(4)
28	五位塚渡り下	末吉町深川 五位塚渡り下	台地	縄文(早)	山形押型文	町埋文報(4) H10農政
29	前畑段	大隅町中之内前畑段	丘陵	縄文(後)	岩崎上層式	
30	東原	大隅町中之内東原	台地	縄文(早～晩) 弥生・奈良・平安	縄文土器 打製石斧 土師器, 叩石	
31	西原段Ⅱ	大隅町中之内西原段	台地	縄文	縄文土器	
32	峯段	大隅町中之内峯段	台地	縄文・平安	土器, 土師器	町埋文報(6)
33	ノトロ	大隅町中之内ノトロ	台地	縄文(晩)	縄文土器 局部磨製石斧 叩石	
34	谷川内	大隅町中之内谷川内	丘陵	奈良～平安	土師器	
35	打込	大隅町中之内打込	台地	弥生・歴史	土師器	
36	わらび堂	大隅町中之内わらび 堂	台地	縄文(晩)	縄文土器 貝岩剥片	
37	前岡	大隅町中之内前岡	台地	歴史	土師器	
38	前畑	大隅町中之内前畑	台地	縄文・歴史	須恵器	
39	中崎迫	大隅町中之内中崎迫	台地	縄文(晩)・歴史	土師器	
40	重ヶ迫	大隅町中之内重ヶ迫	台地	古代	土師器	
41	重吉迫Ⅰ	大隅町中之内重吉迫	台地	古代	土師器 黒色土器	
42	重吉迫Ⅱ	大隅町中之内重吉迫	台地	縄文(後)・古代	土師器	
43	高尾迫	大隅町中之内高尾迫	台地	歴史	土師器	
44	観音段	大隅町中之内4300	台地	縄文(早)	石皿	
45	狩谷	大隅町中之内狩谷	台地	縄文(後)	叩石・石皿	「大隅町誌」
46	八木塚	大隅町中之内八木塚	台地	中世	墳丘（消滅）	
47	柿木渡	大隅町中之内柿木渡	台地	縄文	石錘（5例）	
48	赤松迫	大隅町大谷赤松迫	台地	縄文(早)	石坂式	
49	一里山	大隅町中之内一里山 サセフ	台地	縄文(早)	前平式 塞ノ神式	
50	一里山	大隅町中之内一里山 二本杉	台地	縄文(晩)・歴史	土師器, 青磁	
51	尾ノ迫	大隅町中之内桂	台地	縄文・中世・近世	土器, 石器 陶磁器	町埋文報(21)
52	吹切段A	大隅町中之内西笠木	台地	縄文・中世・近世	土器, 石器 陶磁器	町埋文報(21)

第Ⅲ節 遺跡の層位 (第2・3・4図)

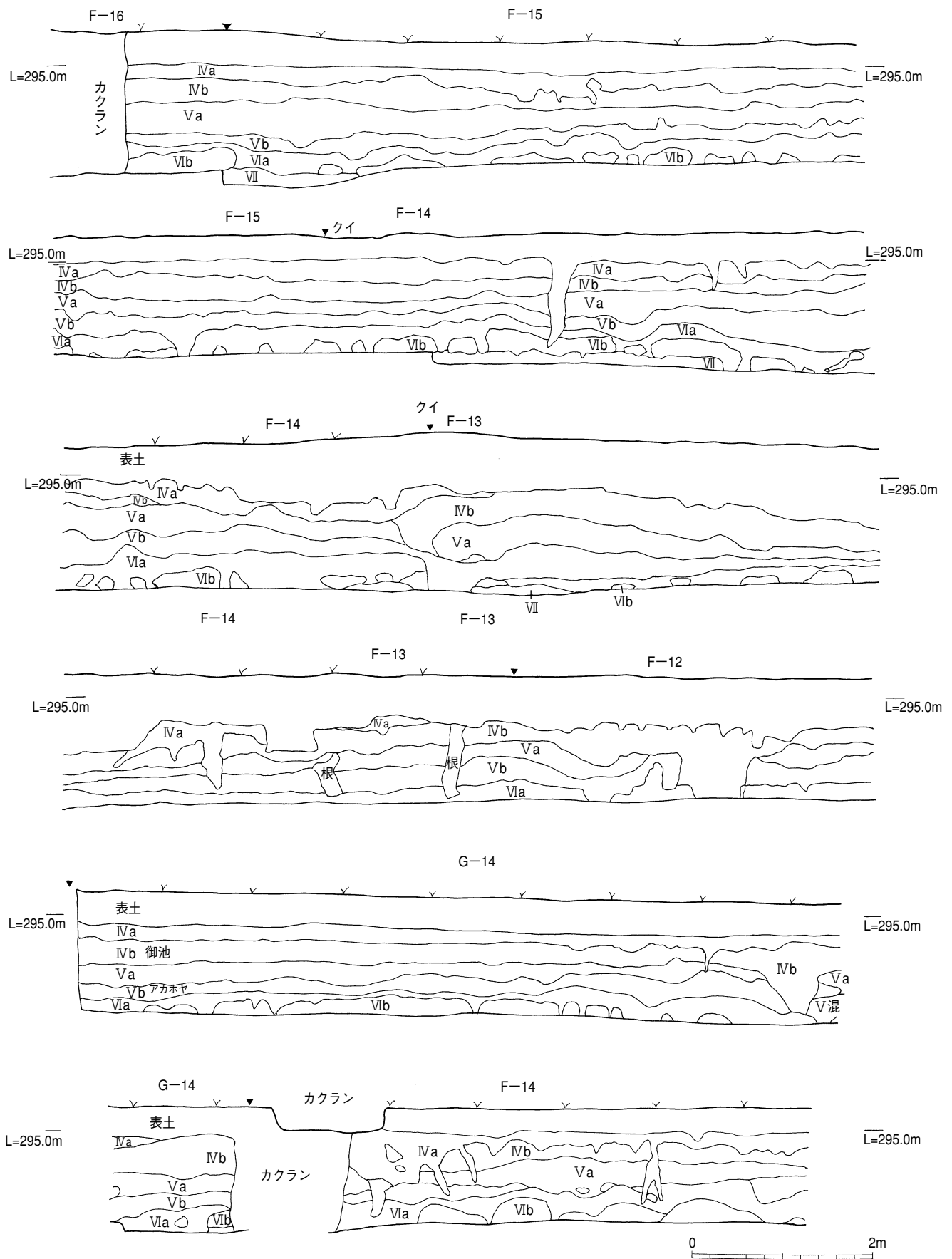
第3図の地層模式図で示したように第Ⅰ層が畑で使用された表土層である。第Ⅱ層は薄い黄色を呈した小粒の軽石層で、西暦1471年の桜島起源軽石層である。文明年間に噴火し、降下したことで文明ボラと言われている。ボラとは鹿児島県霧島市福山町牧ノ原地区を中心に言われている俗称で、軽石をさしている表現である。この軽石層はよく中世の遺構を覆っていることが多く、畠の畝跡等が発見されている。第Ⅲ層は粒の小さい土質でⅢa層とⅢb層に分けられる。第Ⅲa層は腐食が発達した黒色土でよく中世の遺物を出土する層である。第Ⅲb層は暗茶褐色土で奈良・平安時代の遺物が包含されている層である。本遺跡の遺物は、主にこの層から出土している。第Ⅳ層はⅣa層とⅣb層に分けられる層で、特に第Ⅳb層は霧島山御池起源の火山灰で、御池火山灰と言われている層である。第Ⅳa層は御池火山灰の二次堆積層に相当し茶褐色土層でやや腐食土層を呈している。縄文時代中期と晩期の遺物が出土している。第Ⅳb層は黄褐色砂粒土で、霧島山系の東端にある御池からの噴出物に相当する火山灰である。また、これらの層が流れ込んだ落とし穴遺構も第Ⅴ層で確認できる。第Ⅴ層はⅤa層とⅤb層に分けられる。この層は主に鬼界カルデラ起源のアカホヤ火山灰で形成された層に相当する。第Ⅴa層は褐色土で第Ⅴb層の二次体積土の腐植土層である。本遺跡では遺物が出土していないが縄文早期末から前期にかけての層である。それはこの層がアカホヤ火山灰約BP6,300年とその上の御池火山灰約BP4,300年の間である理由からである。第Ⅴb層はアカホヤ火山灰の一次層に相当し、赤褐色でさらさら感があり、下位に赤い火山豆石の堆積がみられる。第Ⅵ層はⅥa層とⅥb層に分けられる。第Ⅵa層は青灰色土層で霧島起源の火山灰が腐食した土層である。縄文時代早期の遺物が出土する。第Ⅵb層は桜島起源のP11の降下火山灰によるもので黄色や茶色軽石が下部に堆積し一次層を形成している。上部は軽石層が崩れた状態で堆積しているので2次的な層と判断できる。この層には軽石層のため遺物の出土はない。このP11のBP年代は約7,400年である。第Ⅶ層は明黄褐色をした腐食土層である。この層は縄文時代早期の遺物が出土する。第Ⅷ層は黒褐色をした腐植土層である。遺物の出土は少ない。第Ⅸ層は黄色火山灰堆積層で桜島起源のP14にあたる。別名薩摩火山灰である。BP年代は約11,400年と言われている。遺物の出土はない。第Ⅹ層は黒色粘質の発達した腐植土層である。別名チョコ層と呼ばれ、縄文時代草創期から旧石器時代の遺物が出土するそうである。本遺跡での出土はない。第ⅩⅠ層は軟質の黄褐色粘質土層で小形のナイフ形石器を出土する層である。本遺跡での出土はない。第ⅩⅡ硬質のブロックがある黒褐色弱粘質土層で、ナイフ形石器が出土する層である。本遺跡での出土はない。第ⅩⅢ層は硬質のローム層で暗黄褐色土層の中に白い径2・3mmのパミスが部分的に点在する。ナイフ形石器が出土する層であるがここでは出土していない。第ⅩⅣ層は硬質ロームの黄褐色土層の中に赤褐色パミスが点在する。このパミスは桜島起源のP15に相当する。本遺跡の出土はないがナイフ形石器を出土する層である。第ⅩⅤ層は硬質のローム層で暗灰色を呈している。これは、本遺跡では出土していないが下部にナイフ形石器を出土する層である。第ⅩⅥ層黄褐色の硬質ローム層である。中に赤茶褐色のP17のパミスを含む。本遺跡では出土していないが上部にナイフ形石器を出土する層である。第ⅩⅦ層は黄褐色土層でこの層の下位になるシラスの風化層である。第ⅩⅧ層は黄褐色土でシラスの二次堆積層である。

第4図はF-12～13区、G-13・14区で、第5図はB-2～5区の土層断面図である。樹痕や一部攪乱層があるが、少々乱れているが水平に近い堆積をしている。

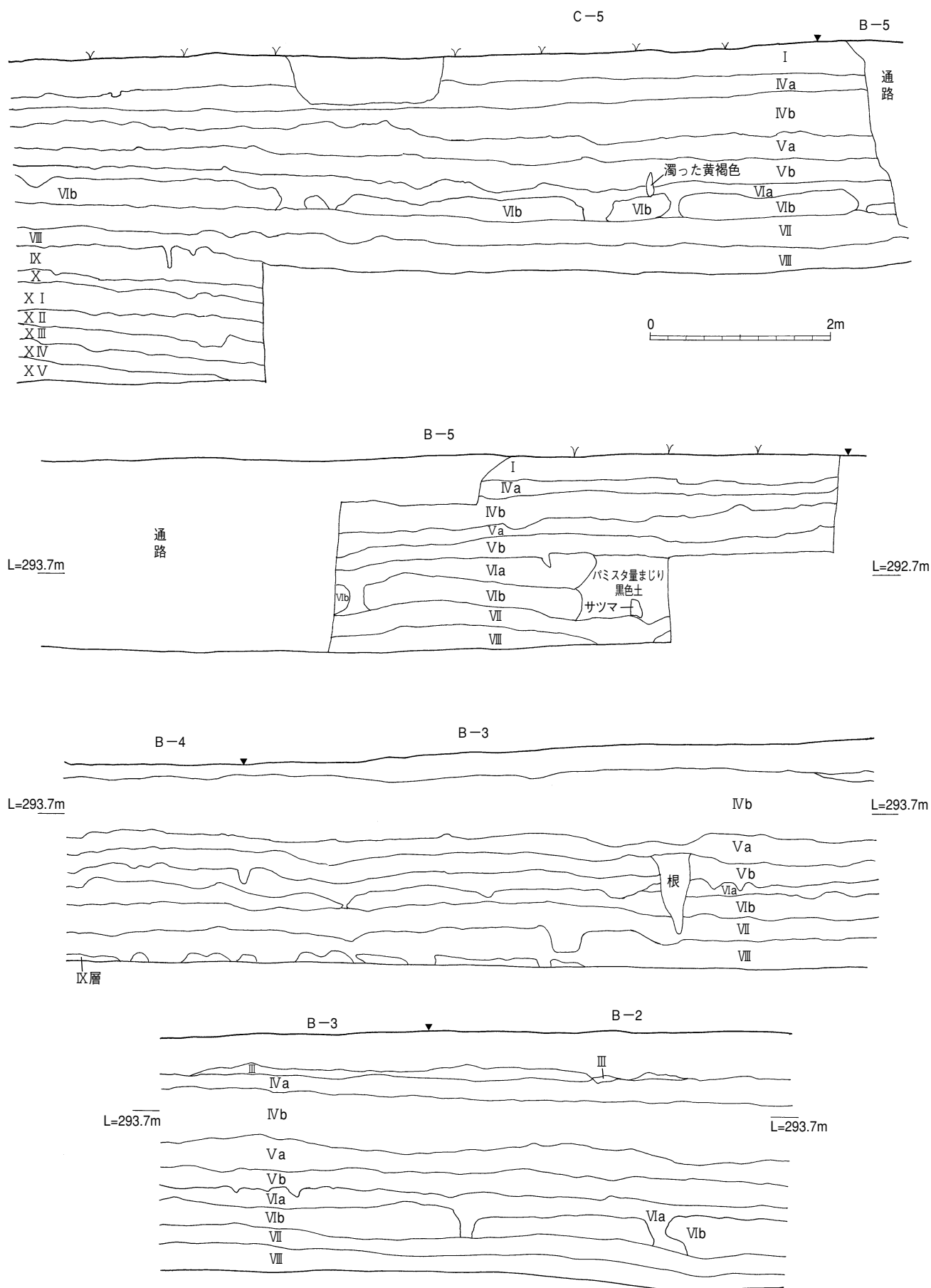
参考		
V	I 層	表土
V	II 層	文明ボラ層
V	IIIa層	黒色土
	IIIb層	暗茶褐色土
	IVa層	茶褐色土
	IVb層	黄褐色砂粒土
	Va層	褐色土
	Vb層	赤褐色土
	VIa層	青灰色土
	VIb層	黄色バミス
	VII層	明黄褐色土
	VIII層	黒褐色土
	IX層	黄色火山灰土
	X層	黒色粘質土
	X I 層	黄褐色粘質土
	X II 層	黒褐色弱粘質土
	X III 層	暗黄褐色土
	XIV層	黄褐色土
	XV層	暗灰色硬質土
	XVI層	黄橙色硬質土
	XVII層	黄褐色土
	XVIII層	黄褐色土

※土層柱状図は桐木遺跡をもとに作成

第2図 唐尾遺跡地層模式図



第3図 土層断面図(1)



第4図 土層断面図(2)

第Ⅳ節 調査の概要

1 縄文時代早期

(1) 分布状況（第2図・第6図）

確認調査は、11ヶ所の確認トレンチを入れて調査範囲を絞り込んだ。

調査範囲は第2図で示した様にA-2区、D-5区、A-10区を結んだ三角形の地域とB-11区、G-11区、G-16区、D-16区を結んだ長方形の地域を実施した。

調査の結果、縄文時代早期は第6図で示したようにB-2～B・D-5までに分布していた。遺物は礫類と土器類が出土している。

礫類は割れた状態のものを角礫、丸みが多くみられるものを円礫、両方持ち中間的なものものを礫として分類して分布状態を調べてみたのが第6図の角礫-赤点、円礫-青点、礫-水色である。礫はB-4の高所から南東と北西の両方に散在している。散在は集石が崩れた状態で、角礫がB-3・4区、円礫がD-4区に多くみられる。また、D-5区に小規模にもみられる。なお、燈色は剥片、黒は碎片である。剥片はB-5区、碎片はC-3・4区にみられる。石鏃はB-3、C-4区にみられ、磨製石斧はC-4区、石匙はC-4区に出土している。

土器はB-2・3区からC-5 D-4・5区を結ぶ帯状に出土している。その中でもB-3・4区、C-4区に多く出土している。

(2) 遺構

①集石（第9図）

1号集石

D-4区に検出した。集石としては崩れて広く散在している状態である。礫の大きさは10cmから3cm位で、南東部が高い位置にある。石材は砂岩、頁岩が多い。また、集石の下によくみられる土坑の形跡は見あたらない。

2号集石（第9図）

C-3区に検出した。約50cm角状に固まって検出した。礫は5～7cmのものが多く、一部詰まってない部分もみられるが、正方形に集めている。石材は砂岩、頁岩が多い。また、集石の下によくみられる土坑の形跡は見あたらない。

②土坑（第10図）

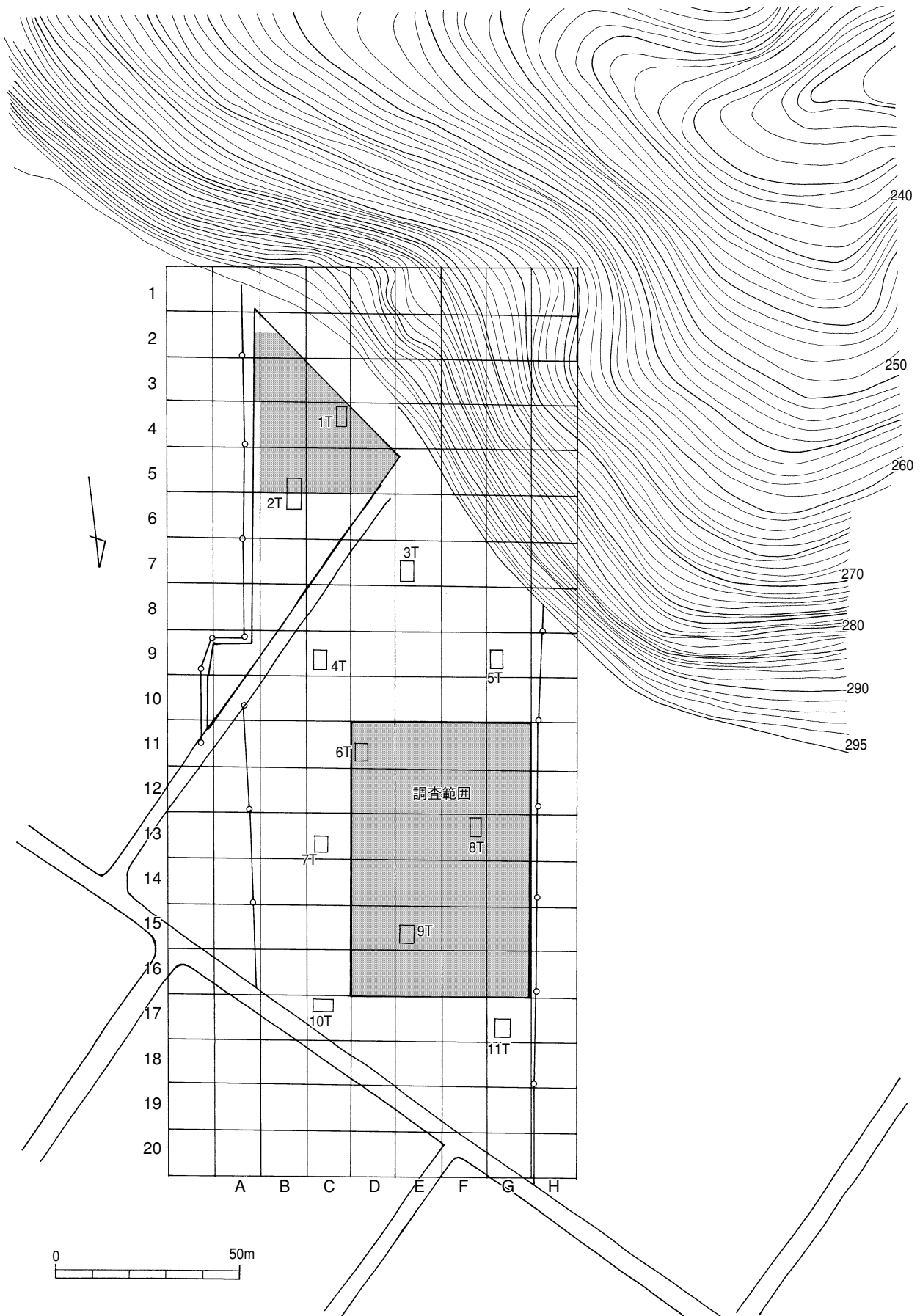
土坑は1号土坑がC-4区、2号土坑がB-3区に検出された。

1号土坑（第11図）

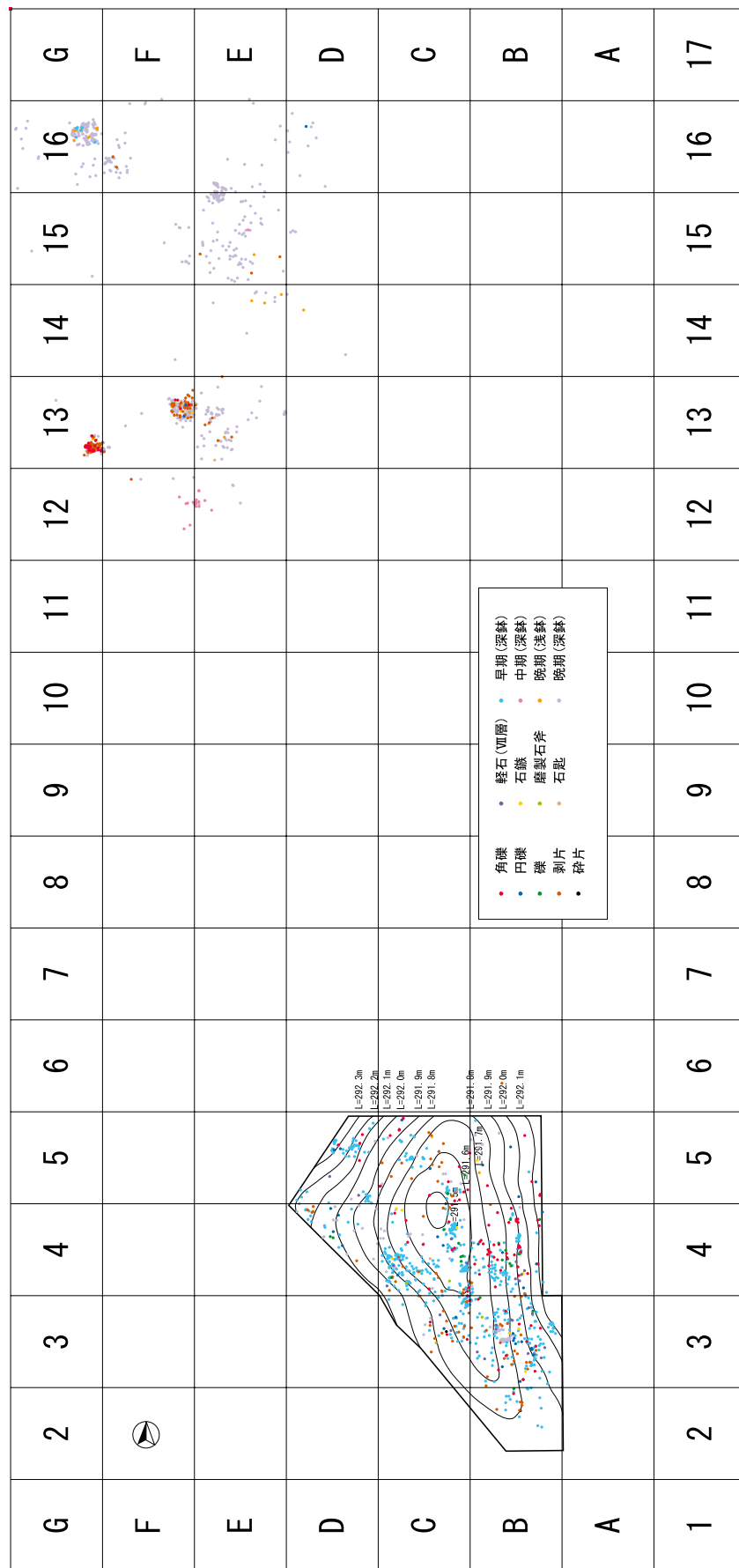
この土坑は第Ⅴ層上面より長軸を東西にして検出した。規模は長軸90cm、短軸72cm、深さ30cmで卵を半カットした形状である。埋土は第Ⅴ層を主とし、①は明茶褐色②は茶褐色軽石③は①より明るい明茶褐色の土層を呈し、軽石の量は①③②の順に多い。

2号土坑（第11図）

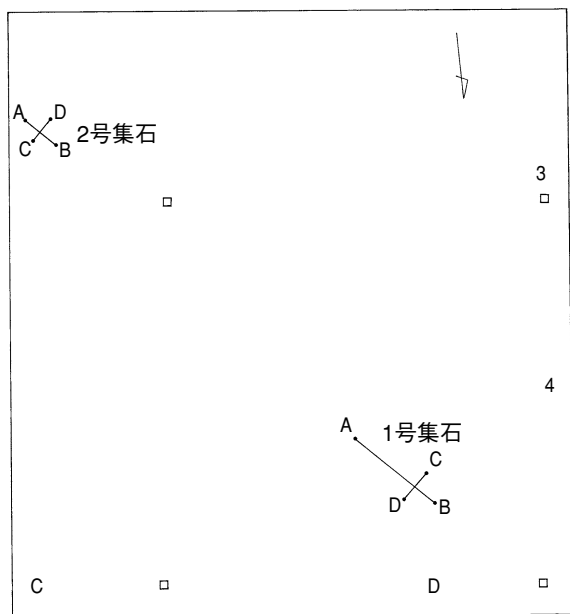
この土坑は東西50cm、南北52cm、深さ24cmで第Ⅶ層に検出した。埋土は①がP11と第Ⅶ層との混土、②がP11だが粒子が細かい、③がP11の大きめのパミスが入り込んでいる。



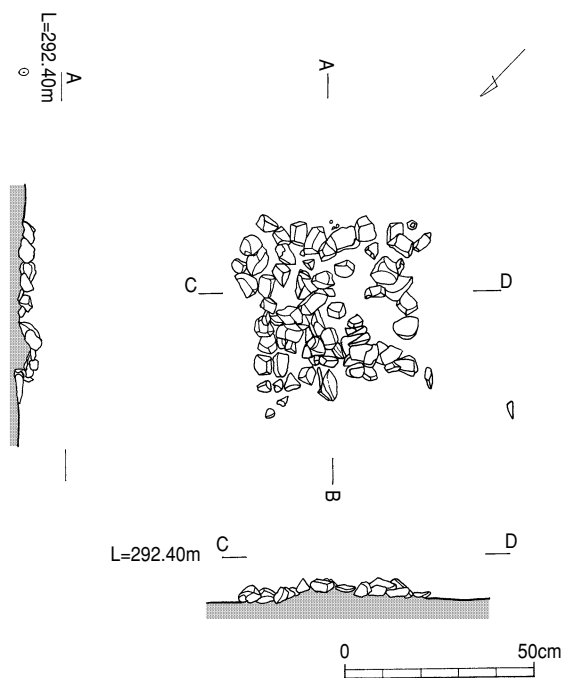
第5図 唐尾遺跡地形及び調査範囲



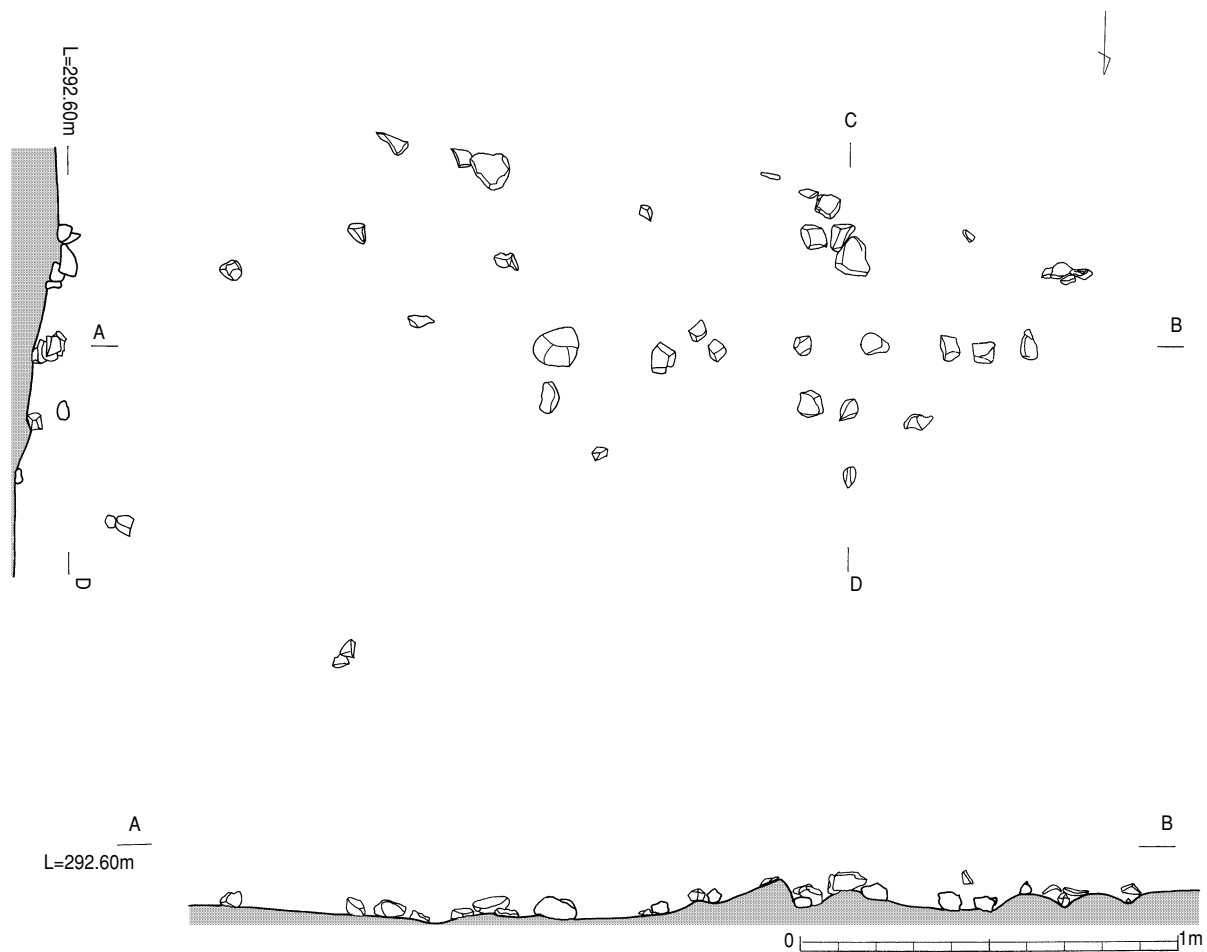
第6図 縄文時代早期～晩期の遺物出土状況



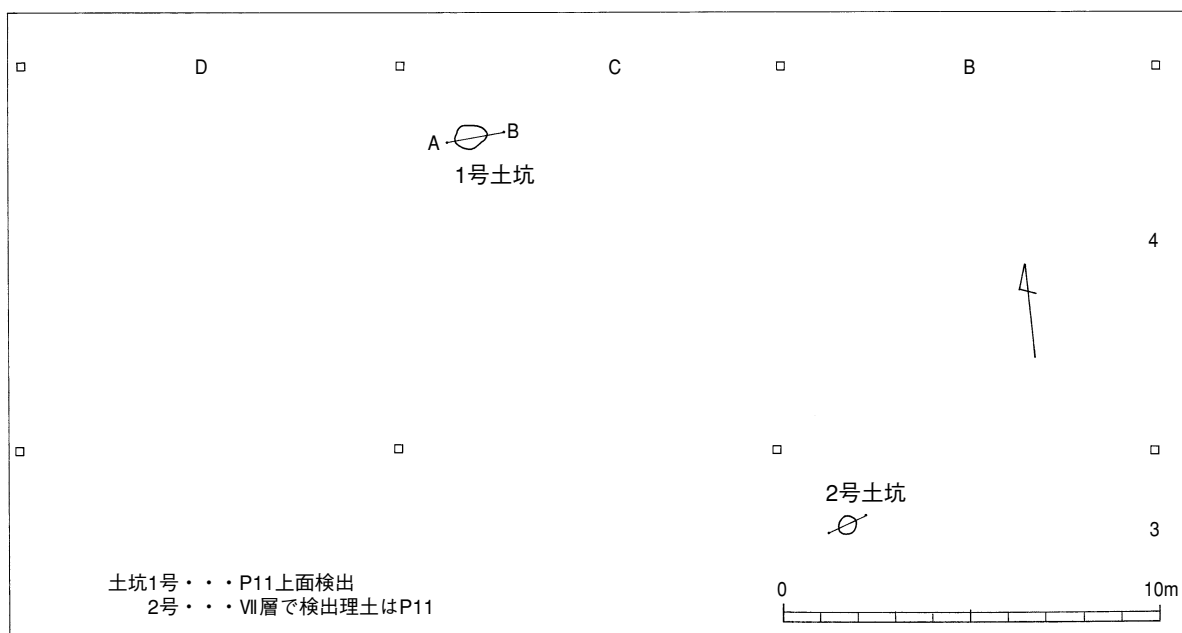
第7図 縄文時代早期集石の位置



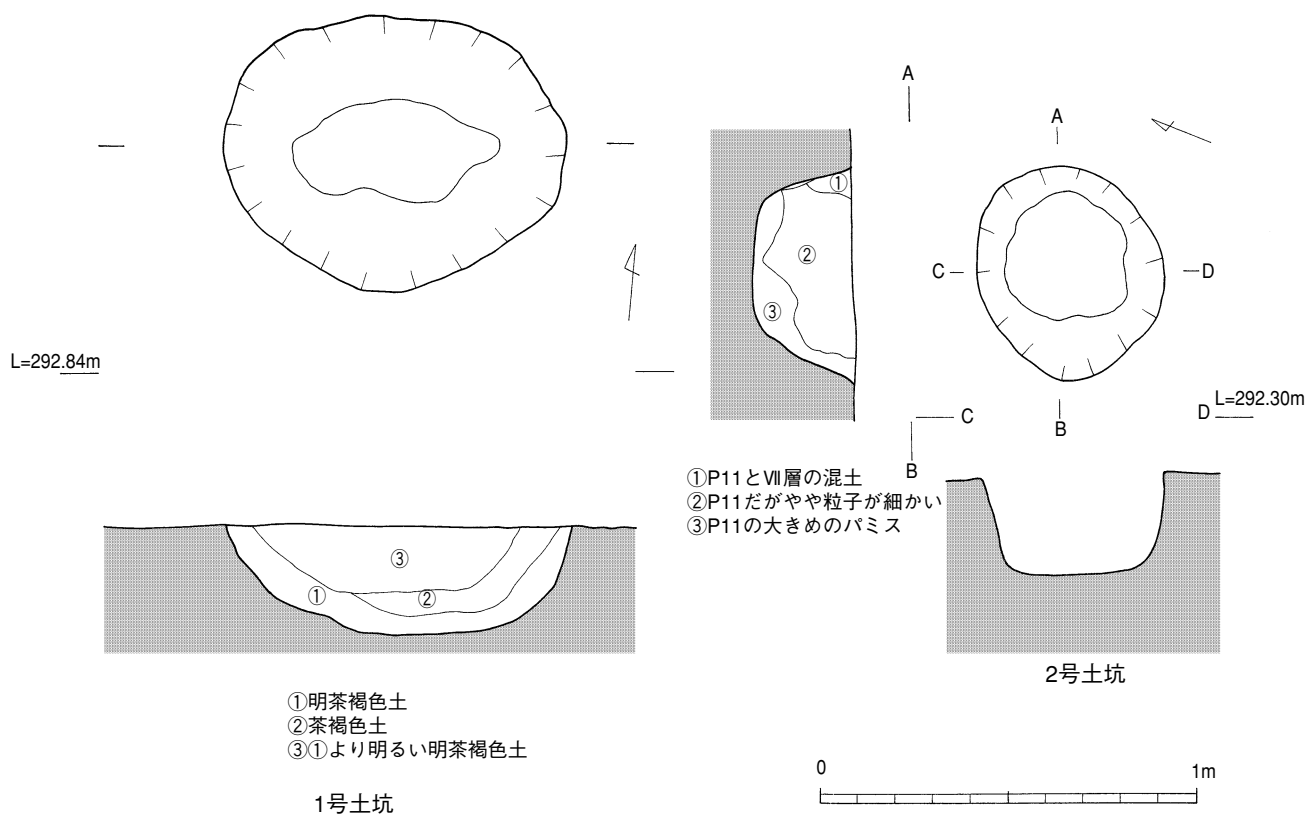
第8図 縄文時代早期第2号集石



第9図 縄文時代早期第1号集石



第10図 縄文時代早期土坑の位置



第11図 縄文時代早期土坑

(3) 遺物（第12～17図）

土器（1～47）

1と2は同一個体と思われる。これらは円筒形の胴部に、頸部で「く」の字状に外へ開く口縁部を持つ器形を持つ土器である。口径は28cmで、器高は現状で約20cmである。文様は口唇部と口縁部の外面と胴部に施されている。口唇部は刻みを入れ、口縁部には沈線で角状に描き、一部には横位の沈線を埋めるように施している。頸部には2条の沈線がみられる。胴部には縦位の撚糸文の上に2条の沈線で上下に区画をし、間に菱形の文様を描いている。器面は内面に磨き調整で外面は撫で調整である。外面には煤の付着がみられる。形式は塞之神A式の範疇に入るとと思われる。

3は波状で外反する口縁部である。器壁は頸部から肥厚し口唇部と口縁外面に文様を施している。口唇部の文様は刻みで、外面は3条の沈線と2列の刺突連続文を施している。器面調整は撫で調整である。外面には煤が付着している。形式は胴部がないので判断できない。

4は波状で外反する口縁部である。口唇部は2列の刻み目、口縁外面には刻み目のある微隆起突帯文を施している。外面には煤が付着している。形式は胴部がないので判断できない。

5は頸部から「く」の字状に外反する波状の口縁部である。口縁部には斜状の刻み目があり外面には3条の沈線を直及び丸く施している。頸部にも3条で横位の沈線を施している。器面調整は丁寧な撫で調整である。形式は胴部不明のため判断できない。

6は頸部から「く」の字状に外反する波状の口縁部である。口縁部には斜状の刻み目があるが、外面には文様が施されていない。頸部には3条で横位の沈線を施している。器面調整は丁寧な撫で調整である。形式は胴部不明のため判断できない。

7は円筒形をした薄手の胴部である。外面には撚糸文が縦位に、沈線が横位に施されている。器面調整は撫でである。形式は塞之神A式に比定できる。

8は底部に近い胴部である。薄手で撫で調整で仕上げている。器面には撚糸文が施され、塞之神A式に比定できる。

9は平底と思われる底部である。器厚は薄手で、器面は撫で調整をしたものである。

10は小形の土器で口縁部が外反する土器である。器厚は一定でなく整形が良くない。文様は口唇部に刻みを外面に2列の沈線を横位に施している。

11は平底の底部である。器厚は薄手で、器面は撫で調整の上に撚糸文を縦位に施している。

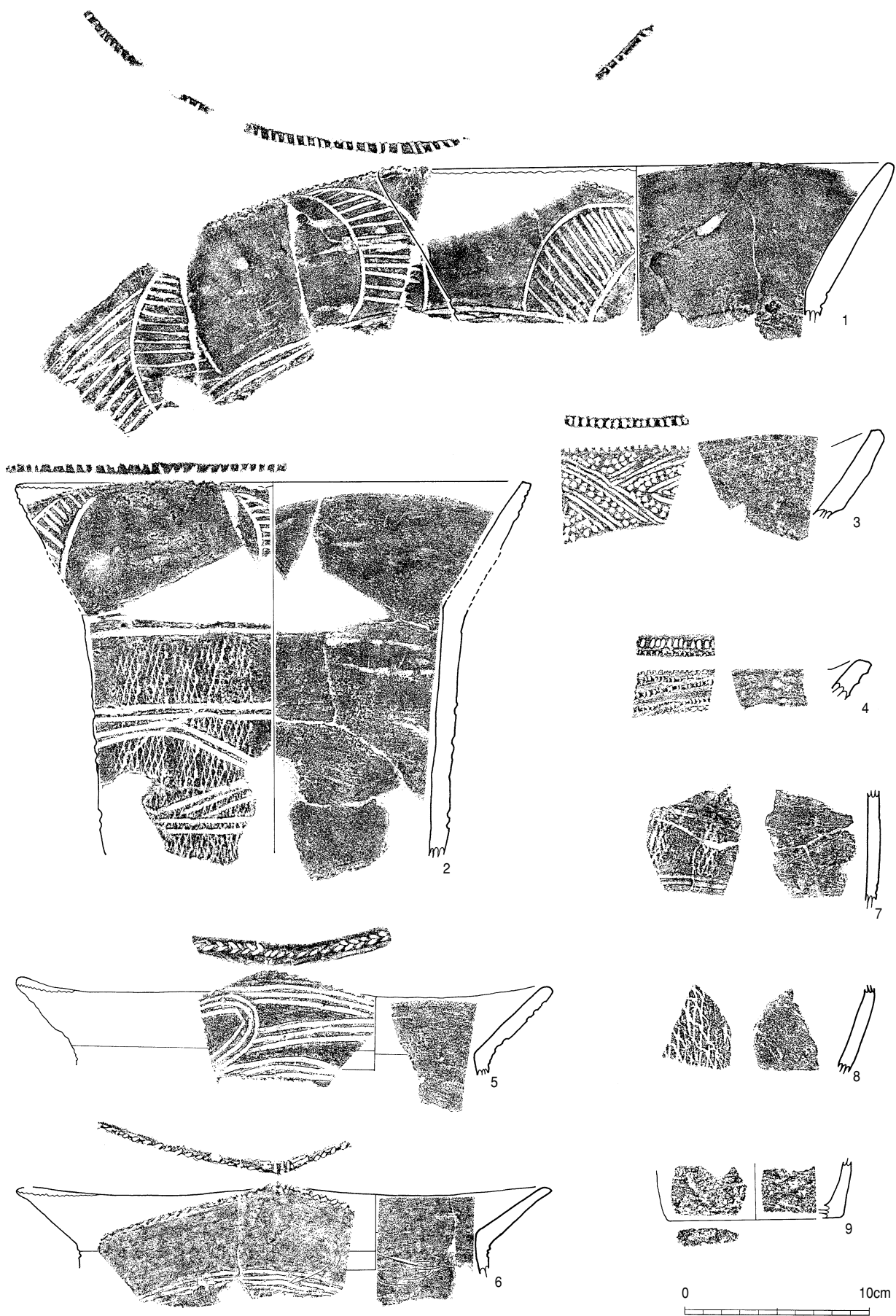
12は平底の底部である。器厚は薄手で、器面は撫で調整の上に沈線文と撚糸文を縦位に施している。

13は平底の底部である。器厚は薄手で、器面は撫で調整をしたものである。

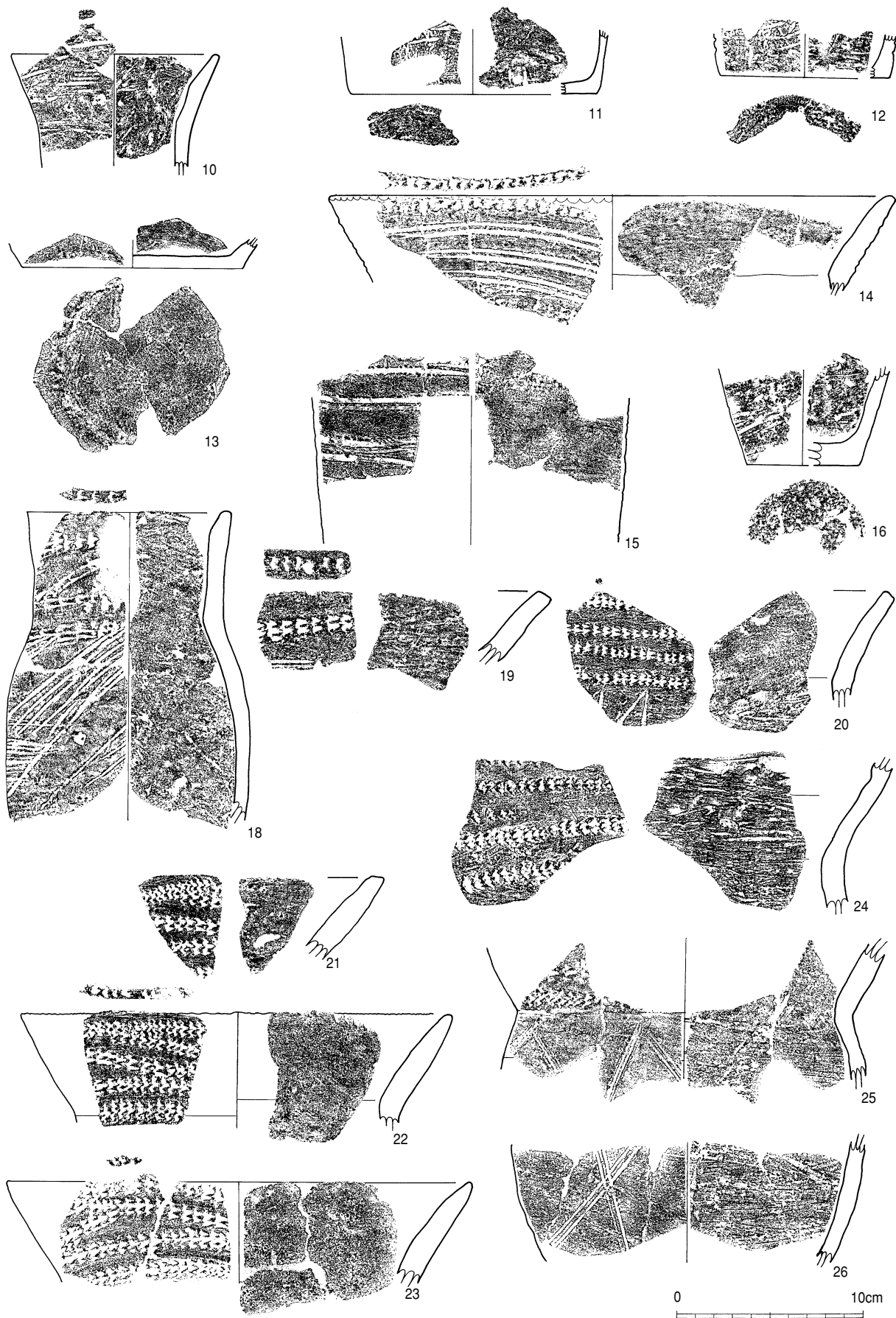
以上が塞之神A式の類とそれに近い土器類である。

14は頸部で「く」の字状に外向する厚手の口縁部である。器面は撫で調整している。文様は口唇部に貝殻で斜めから刺突した刻み目を施し、外面は2列の貝殻復縁による押し引き状の沈線を横位に施している。形式は塞之神B式に比定される。

15はやや膨らみを持つ円筒形をした厚手の胴部である。外面は撫で調整をした後に、頸部と考えられる部分に貝殻刺突文を横位に施し、胴部全体に2列の沈線文を曲線状に施している。塞之神B式に比定される。



第12図 縄文時代早期の土器(1)



第13図 縄文時代早期の土器(2)

16は厚手の底部で平底である。内器面は粗い調整で篋状施文具痕がみられ、外器面には貝殻条痕が斜位に若干みられる。形状は小形の土器である。

17は頸部で「く」の字状に締まり、口縁部は開き、肩部が丸みを持ち盛り上がる器形をし、口径は24.4cmで、現器高は32cmで深鉢である。なお、口唇部は波状を形成し、口縁部には補修孔がみられる。器面調整は内面に篋撫で調整痕が横位に残り、外面は若干残っている。文様は、口唇部に貝殻刺突文、口縁部は6条の貝殻刺突文を波状に、頸部には横位の貝殻刺突文を一条施している。また、胴部はやや大きめの平行線枠の中に細目の線を2・3条描き入れたものを斜位に櫛を巻くように施している。

18は小形の土器で、口径が11cm、頸部が10.3cm、胴部が13cm、現器高が16cmである。計測では壺であるが、雰囲気的には深鉢である。文様は口唇部に貝殻刺突による刻み目、口縁部に貝殻押し引き状の連続文を横位と斜位に施している。肩部から胴部にかけて斜位の枠線内に沈線を施し、一部に横位の沈線を重ねているところもある。

19～24は外反する深鉢の口縁部である。口唇部には貝殻刺突による刻み目文を施し、口縁部には数条の貝殻刺突文を横位に施している。中でも23は押し引き状に施している。なお、24の口唇部は欠損している。

20・25は深鉢で口縁部から頸部にかけてのものである。器形は頸部が締まり、口縁部が外反するものである。文様は1条ないし2条の沈線がみられるもので、20は頸部に鋸歯状に沈線を施し、25は平行沈線を鋸歯状に施している。

26～32は深鉢で胴部から底部にかけてのものである。文様は26が胴部にクロスさせ、27～31が枠内に沈線を施すグループである。

33・34は深鉢で網状に沈線を施すグループで、33が複数線で、34が単線で構成している。器形は両方とも上げ底で、調整は内外面に篋撫で痕がみられる。

34～36は締まった頸部が無く直線上に外開する器形に刻目文、貝殻刺突文や沈線文がみられるグループである。

34はバケツ形の器形である。口唇部と口縁部には篋状施文具による刻目文を横位に施し、胴部から底部近くは細い沈線を数条縦位と斜位に施している。器面は篋状施民具による撫で調整である。35は口縁部で、口唇部と口縁部に押し引き状の貝殻刻目文が横位に施されている。36は口唇部が欠損しているが、口縁部に貝殻刻目文が横位にみられるものである。

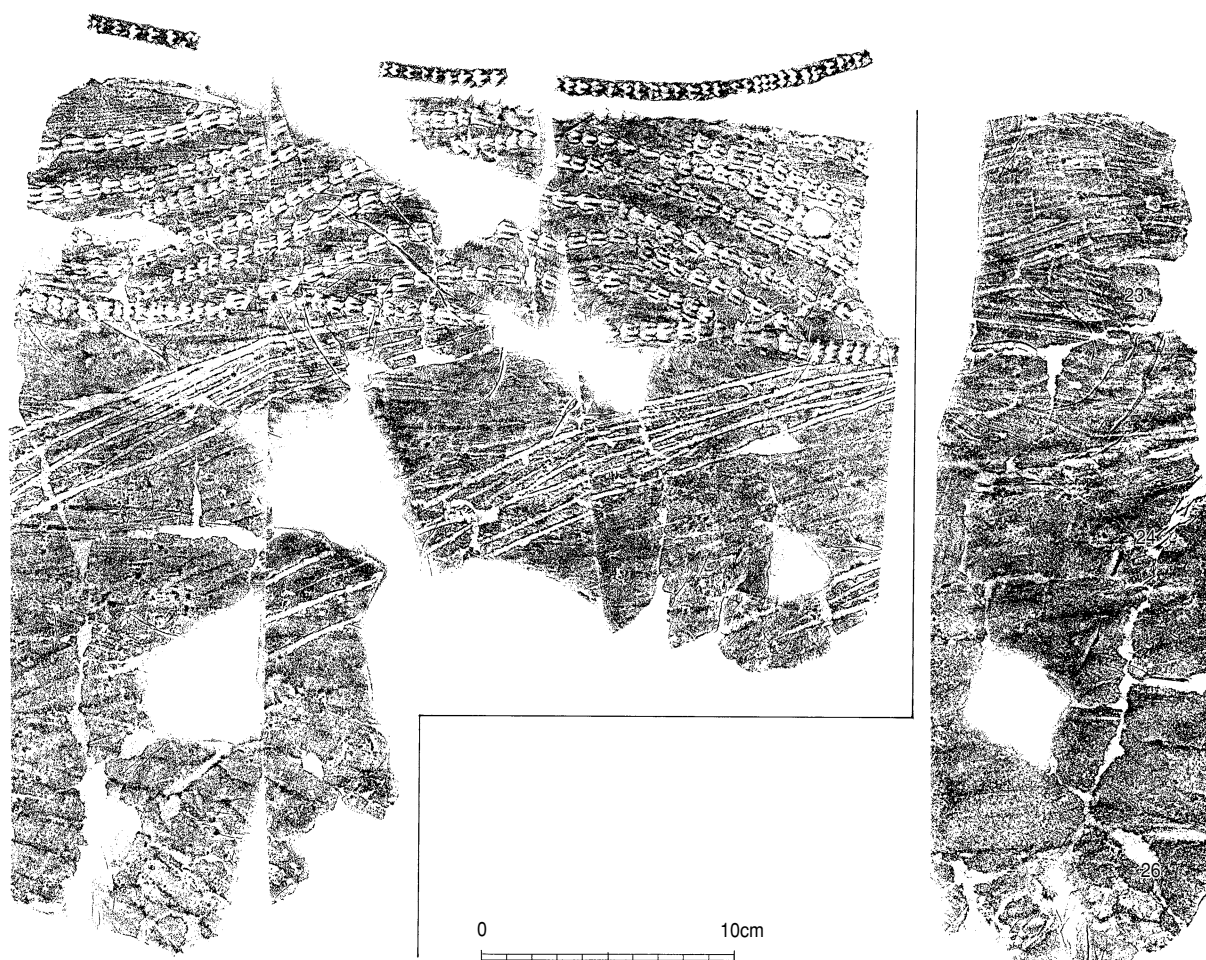
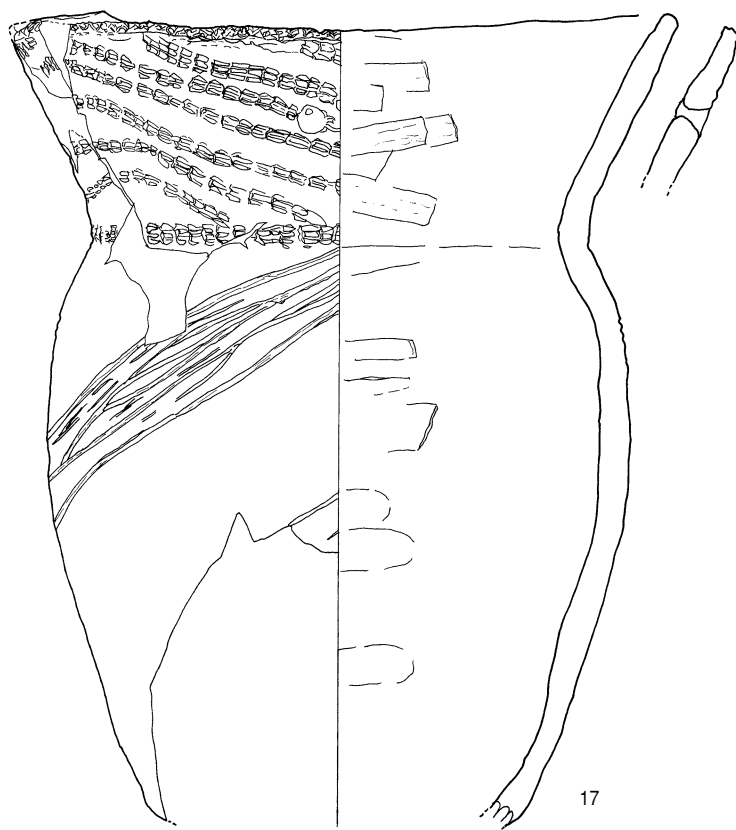
これらは塞之神B式に比定できる。

37～46は塞之神A式や塞之神B式の特徴がないグループで、条痕状の器面調整で無文土器として上げた。

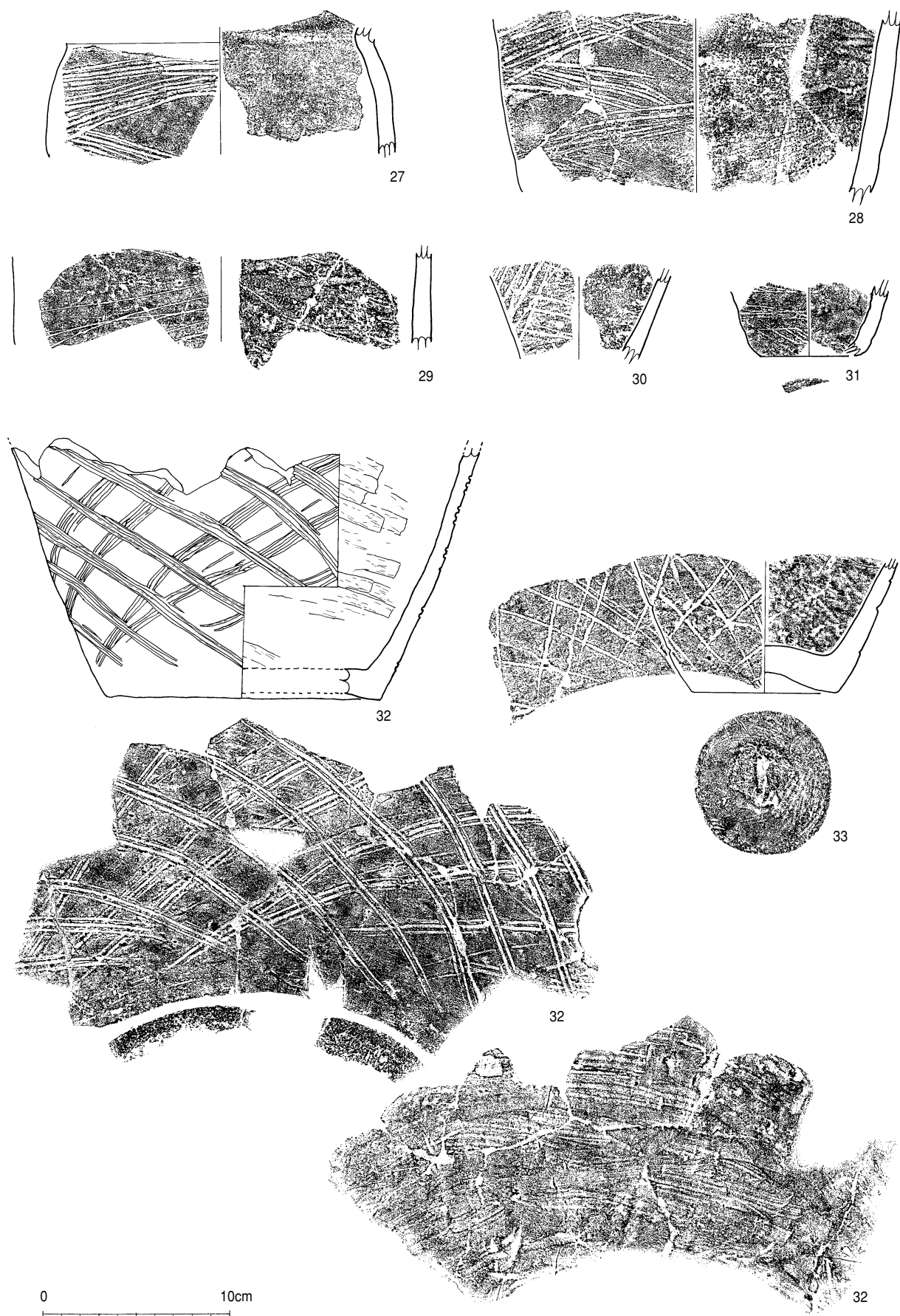
37は胴部で外器面に条痕が横位にみられるもので、やや厚手である。38は器面が良く撫で調整された薄手の深鉢である。39は薄手で良く調整された深鉢の底部である。40は薄手の平底である。41は直線上に外開した小形の鉢形土器である。器面は斜位に調整痕がみられるもので無文である。

42・43は小形の土器で平底、44は上げ底である。45は小形の土器の底部である。46は厚手の深鉢で平底である。

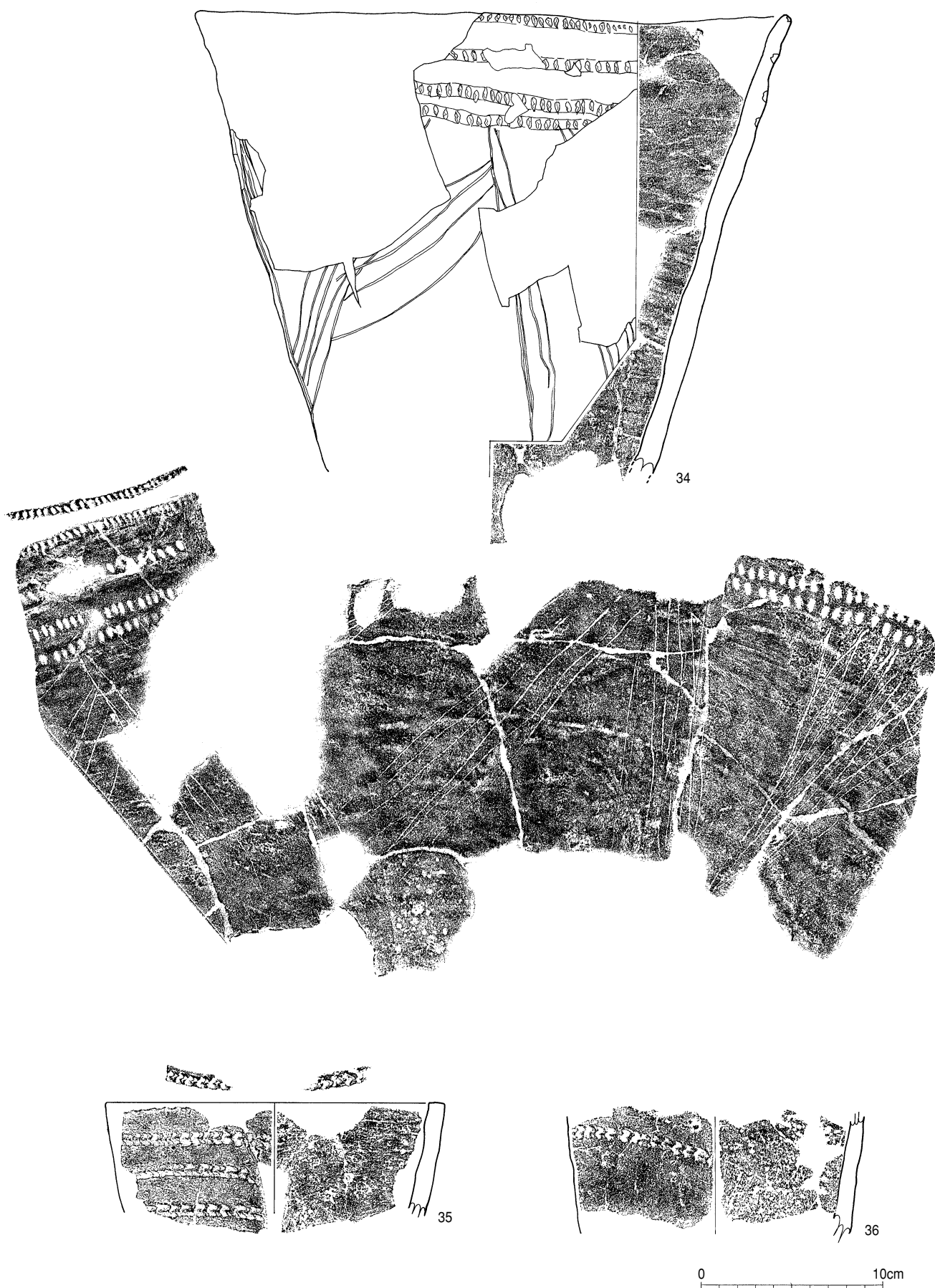
47は薄手の土器で、押型文の類に属するものである。



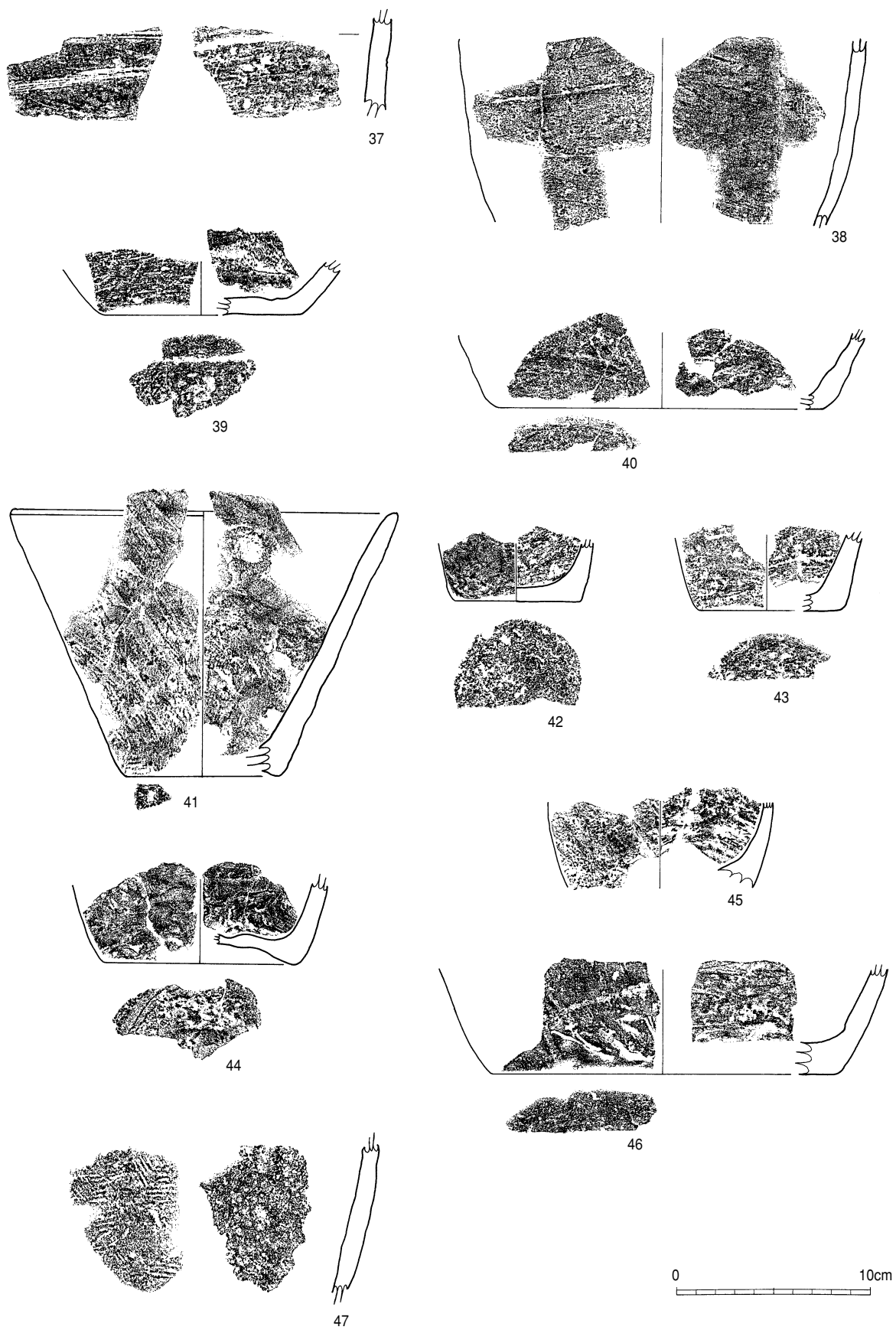
第14図 縄文時代早期の土器(3)



第15図 縄文時代早期の土器(4)



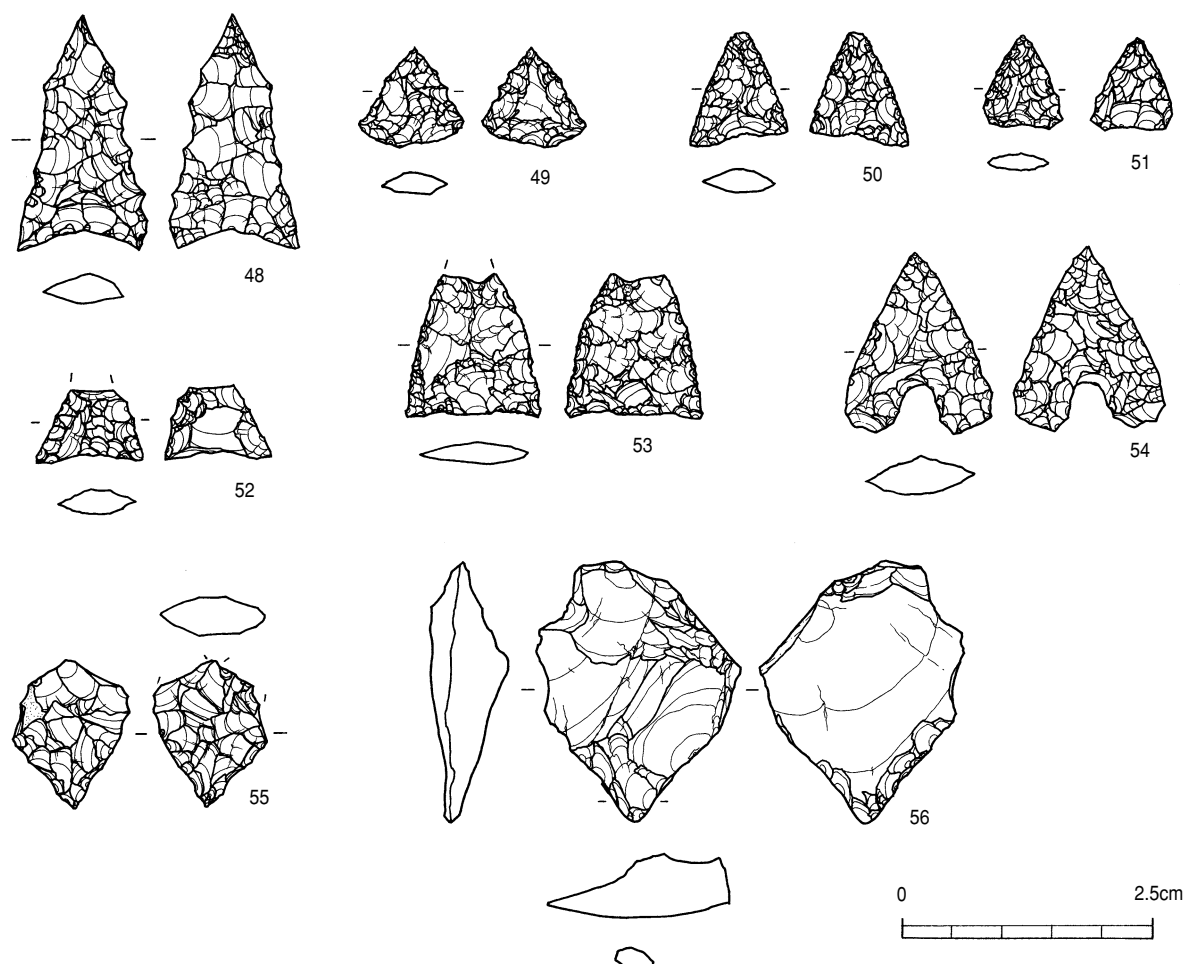
第16図 縄文時代早期の土器(5)



第17図 縄文時代早期の土器(6)

石器（第18～23図）（48～75）

48～52は石鏃である。48は若干抉りがみられる底辺部をもつ凹基式の五角形をした鏃である。49はやや膨らんだ底辺部をもつ凸基式の三角形をした鏃である。50はやや抉られた底辺部をもつ平基式の三角形をした鏃である。51はやや抉られた底辺部をもつ平基式の三角形をした鏃である。52はやや抉られた底辺部をもつ平基式の三角形をした鏃である。なお、これは先端部が欠損している。



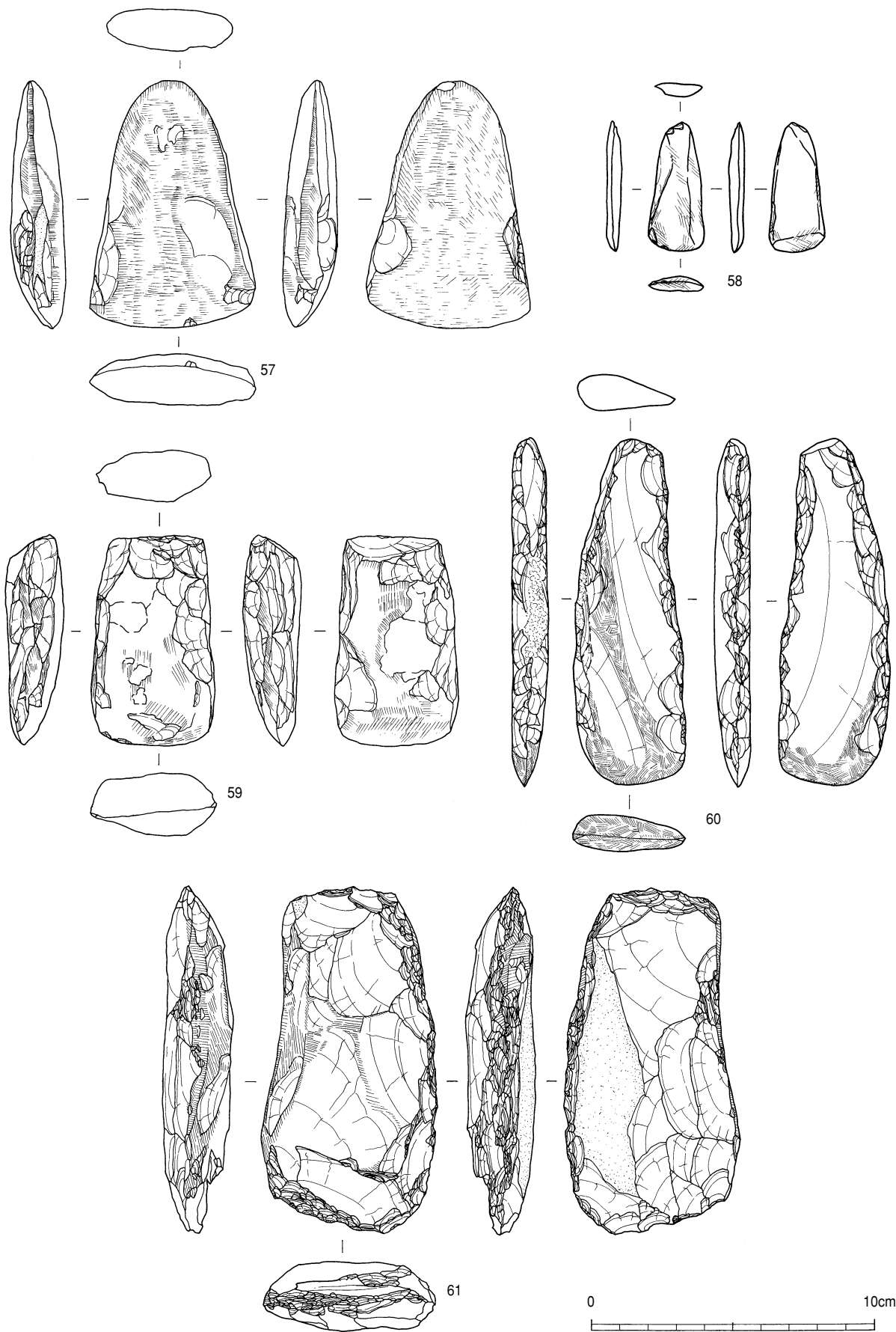
第18図 縄文時代早期の石器(1)

53はやや抉られた底辺部をもつ平基式で大型の三角形をした鏃である。なお、これは先端部が欠損している。54は大きく抉られた底辺部をもつ大型の三角形をした鏃である。厚みのある鏃である。

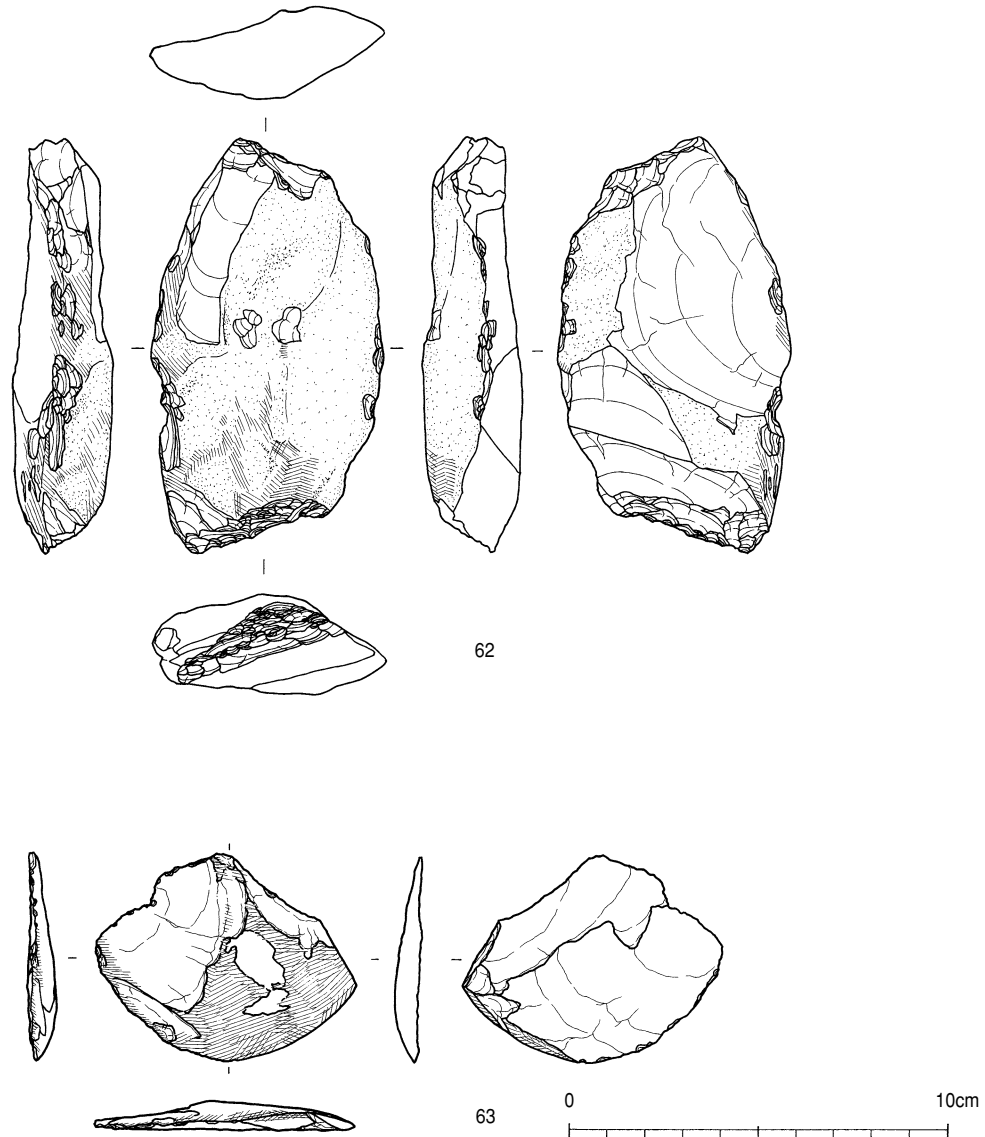
55・56は石錐と思われる石器である。55は小形であるが厚みがある石器である。先端の作業部はやや長くし、肩を張るように加工している。56はやや大形のため主要剥離面が残し、加工面も少ない粗い調整で整形している製品である。作業する先端部は剥片が尖った部分を利用して作っている。加工は主要剥離面側に歯つぶしの調整を入れて作業に対し強化をはかっている。

57～63は磨製及び局部磨製石斧である。

57は磨製石斧である。形状は三角形を呈したものであるが自然礫を利用して作られている。刃部は片歯状に削られ、頭部は尖らしている。両側面には刃部近くにノッチを入れている。研磨方向は横位及び斜位で調整され、特に刃部は横位である。58は扁平な自然礫を利用した小形の磨製石斧で



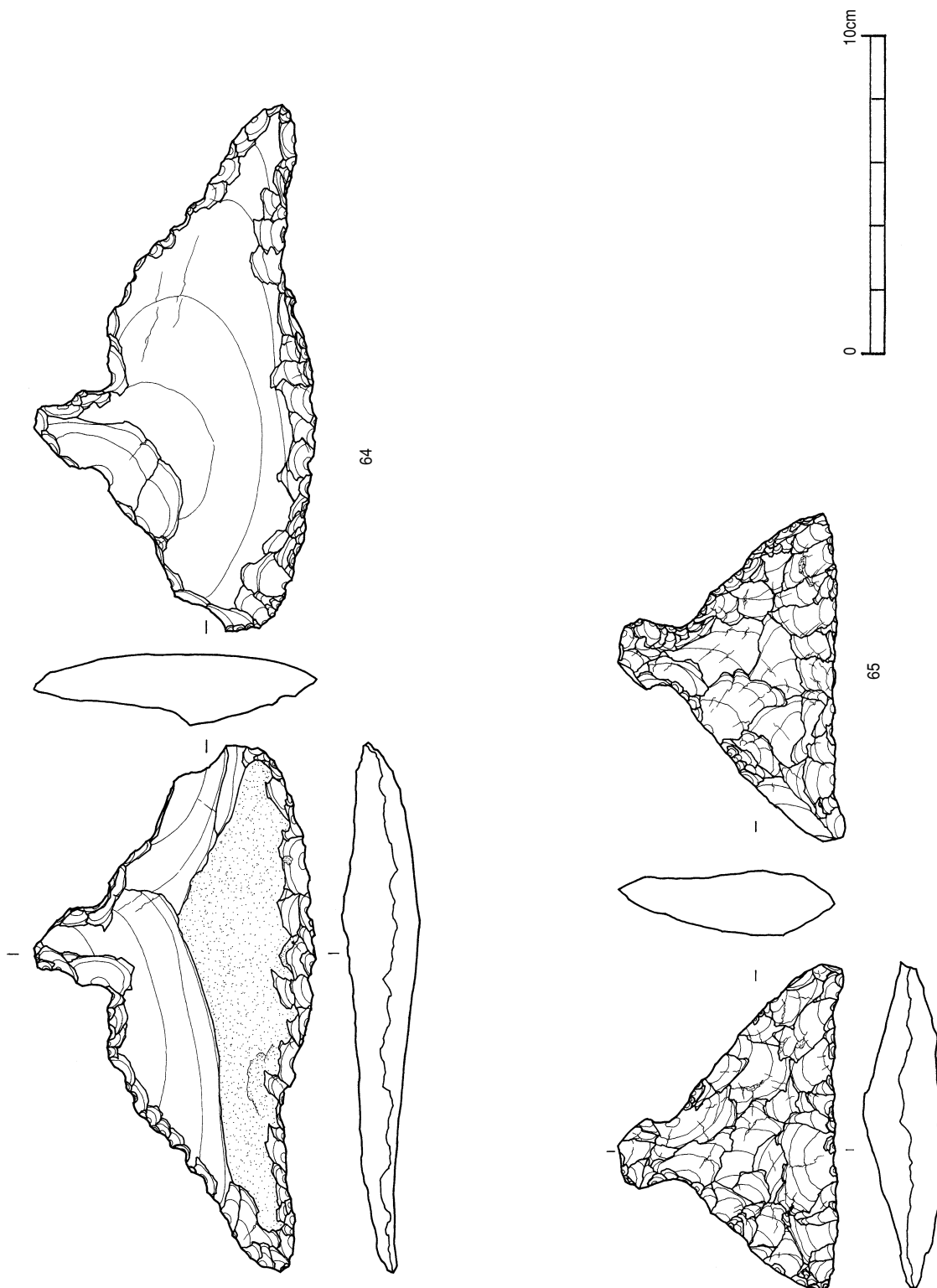
第19図 縄文時代早期の石器(2)



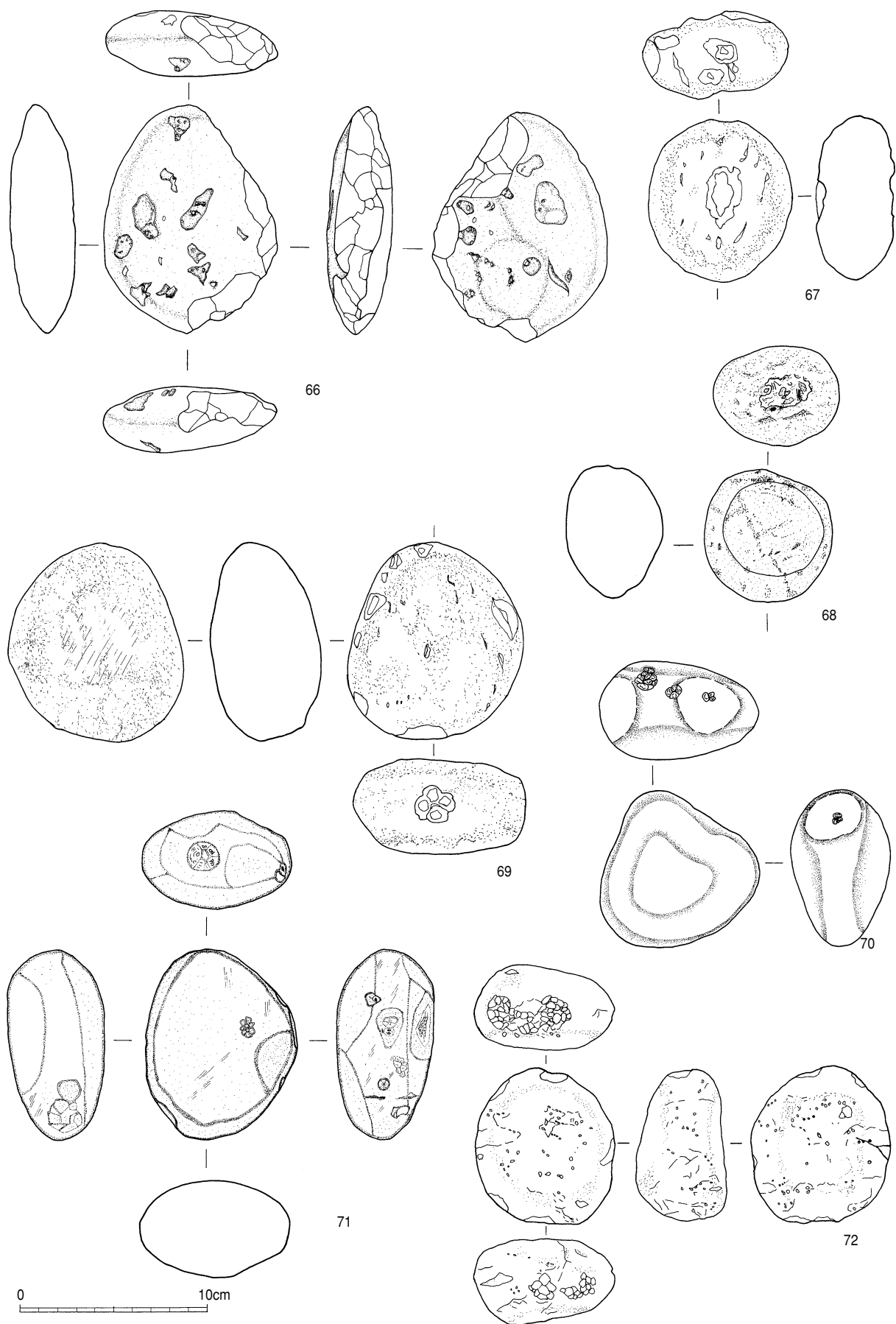
第20図 縄文時代早期の石器(3)

ある。刃部は片歯状に削られている。磨製調整痕は石の性質からみて風化が進んでいる。59は厚みのある自然礫を利用し、刃部を局部磨製に施したものである。頭部は欠損しているが、完形に近い。側部は両面ともノッチを入れた調整をしている。刃部は両歯に作っている。60は横剥の剥片を利用した長目に曲がった局部磨製石斧である。刃部は広くなった部分に局部磨製をしている。頭部は狭い部分になり、側辺は両剥ぎの調整で作っている。刃部は両歯形成である。61は自然礫を打ち欠いて作った局部磨製石斧である。刃部は使用時に剥がれ欠損し、一見打製石斧の状態である。研磨部分は装着部から側辺の一部に辛うじて残っている。62は自然礫を利用している局部磨製石斧である。刃部は使用時に欠損し一部側辺に磨製した刃部が残っている。また、これは全体的に粗く作られた石器である。63は磨製石斧の欠損部と思われる。丸く作った刃部で両方から磨製したものである。使用時に剥がされた可能性が高い。

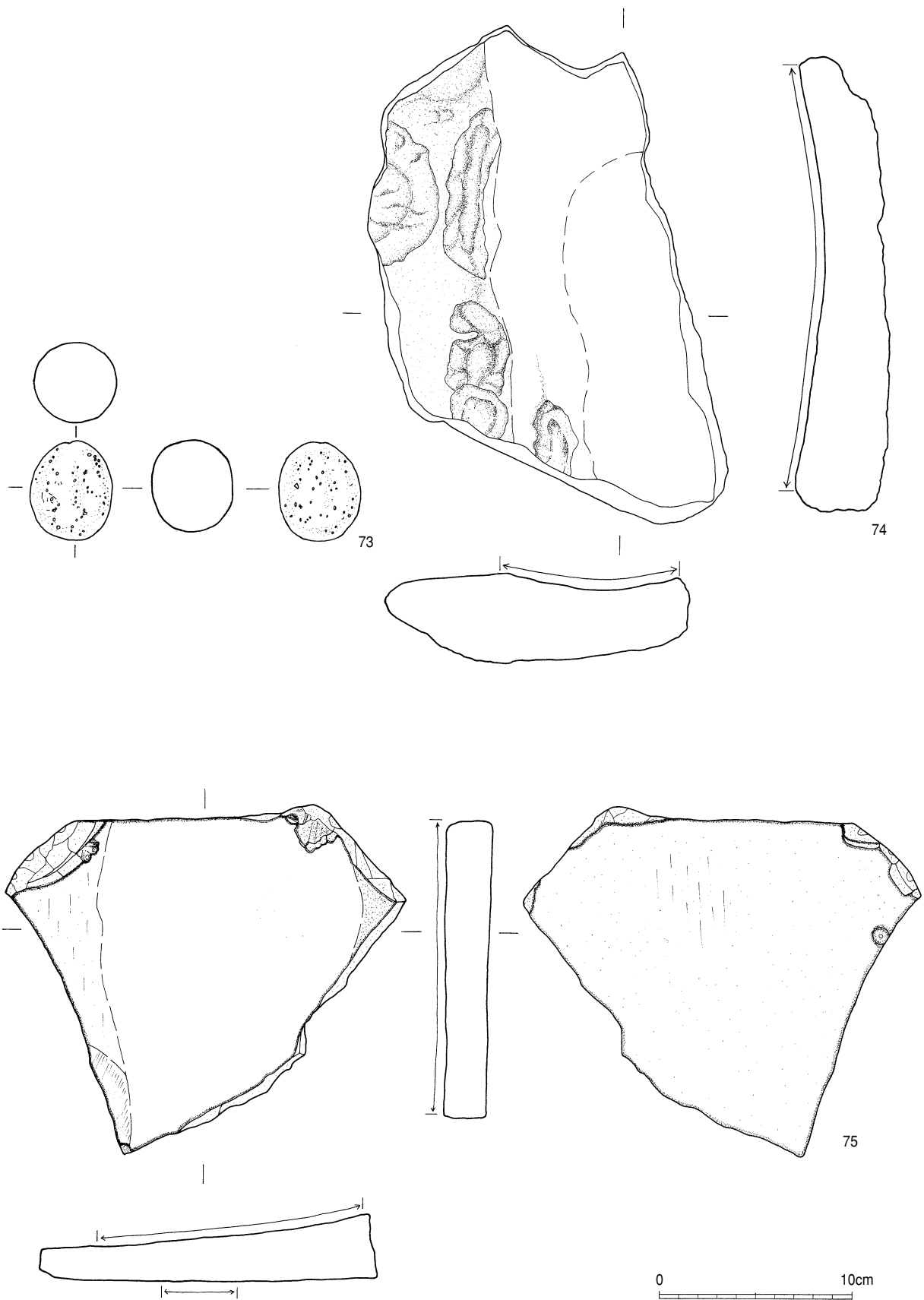
64・65は石匙である。64は自然礫から横剥ぎ剥片を使用し、交互剥離をしながら刃部を作り、摘み部からの一辺にも交互剥離で刃部を作っている。よって、鋭角な刃部が片方にみられる。摘み部



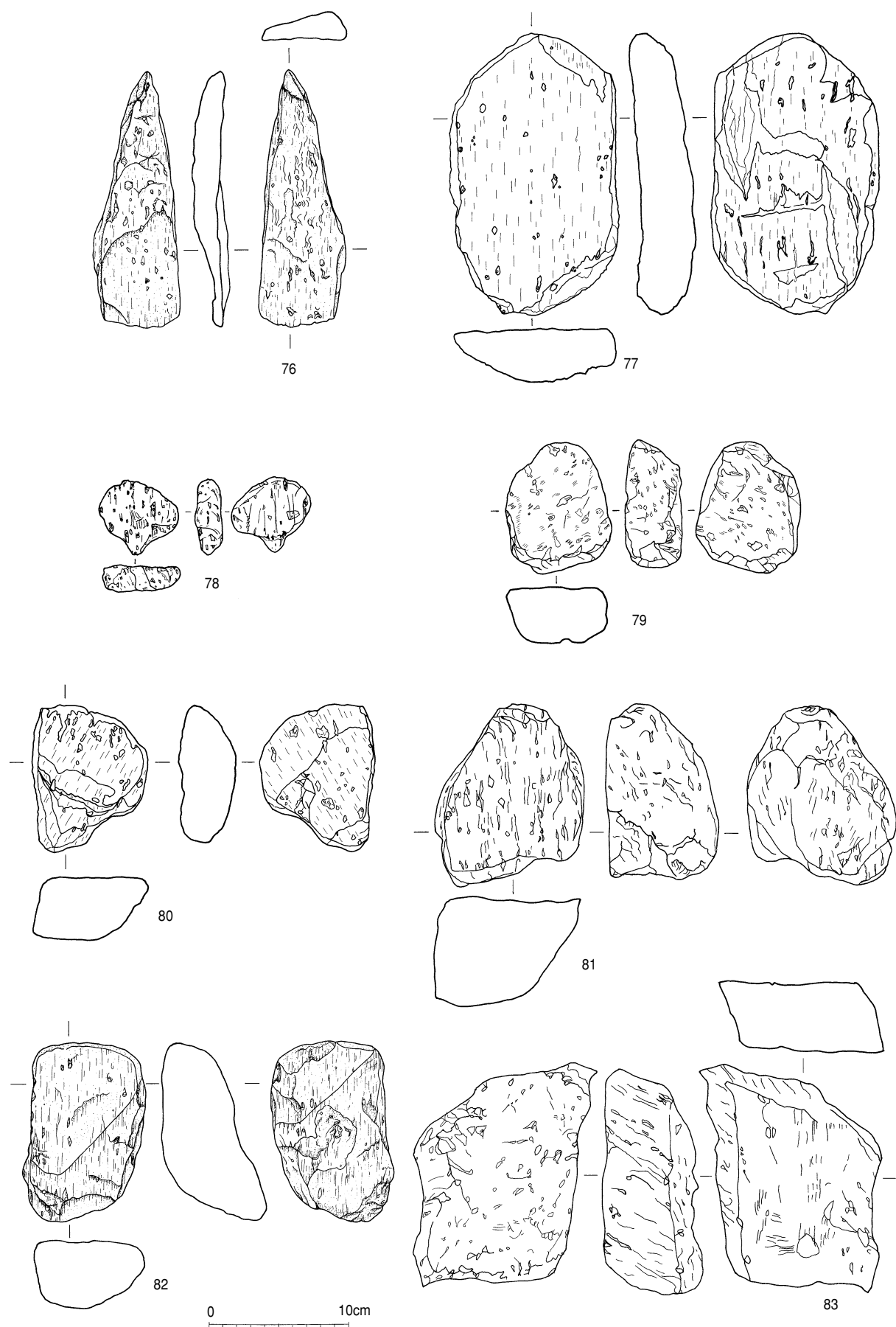
第21図 縄文時代早期の石器(4)



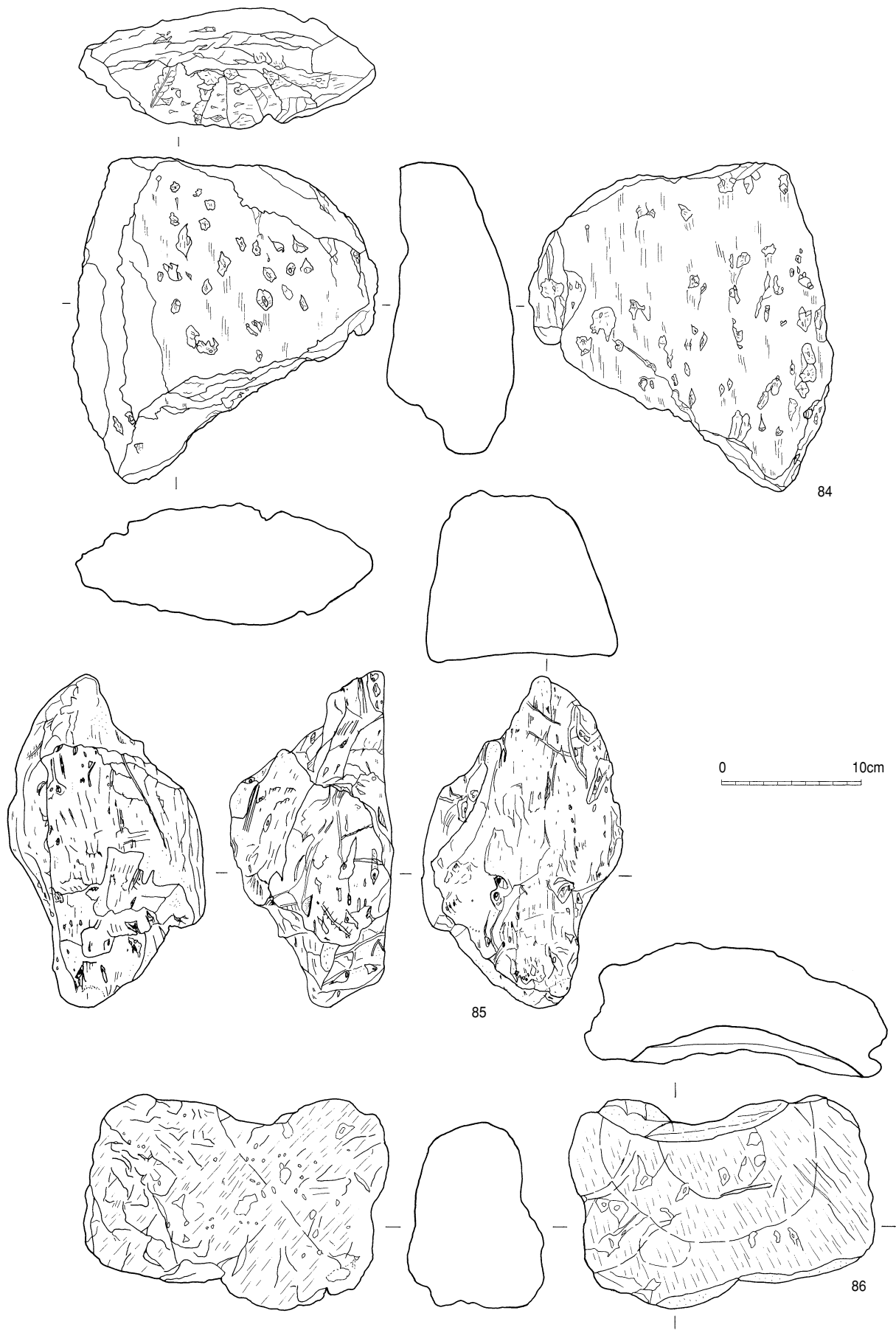
第22図 縄文時代早期の石器(5)



第23図 縄文時代早期の石器(6)



第24図 縄文時代早期の軽石製品(1)



第25図 縄文時代早期の軽石製品(2)

の調整は粗い。65は三角形を呈した厚みのある石匙である。摘み部は丸く丁寧に作られ、刃部の3面とも交互剥離を行っている。よって、両方に鋭利な刃部を形成している。

66は自然礫に交互剥離で粗く刃部を作った礫器である。刃部は片面に作られている。

67～72は凹石・敲石・磨石の類である。67は主に凹石使用痕が、68は敲石の使用痕が69は磨石と敲石使用痕がみられる。70は敲石使用痕が、71は敲石使用痕と磨石使用痕が、72は敲石使用痕がみられる。

73は磨石使用か投弾的な使用かどうか不明である。

74・75は石皿である。74は扁平な花崗岩に縦長状に作られ、三方が欠損している。底面は丸みがある。75は扁平な凝灰岩を利用した石皿である。二方が欠損しているが使用1面がみられ、使用初期段階と考えられる。

軽石製品（第24・25図）（76～86）

76はやや丸みを持って、篋状に加工したものである。形状は丸みの内側が1面、外側が2面で加工された柄杓状で広い部分は薄くなっている。なお、これは縦半分近くが欠損している。77はやや丸みを持って六角形に加工したものである。丸みの内側は1面で丁寧に、外側は2ないし3面に粗く加工している。78は小形の扁平で丸みのある加工品である。79・80は片面がフラットである扁平な加工品である。81は角状で、1面をフラットに加工してある。82は丸みを持った加工品である。83は厚みのある角がはっきりした扁平な板状に加工品したものである。84は大きな丸みを持つ軽石で半分近く欠損している。これは加工途中か残核と考えられる。85は両端が尖ったもので、加工途中か残核と思われる。86は扁平な軽石の中を挟った加工品である。形状は半分近くが欠損しているが、形態としては容器状である。

2 縄文時代前・中期

(1) 分布状況（第6図・第23図）

出土分布は第6図で示したようにE・F-12区に纏まって出土した。

遺構の分布は第26図で示したように落とし穴と考えられる土坑がB・C・D-2～6区に8基検出した。いずれも逆茂木痕跡の穴がみられたため落とし穴として取り扱うことにする。落とし穴跡は第26図で示したように2列を基本に弧状に配置されてるかのようには検出した。検出面は地形的には平坦である。この時期は御池火山灰層降下期頃である。

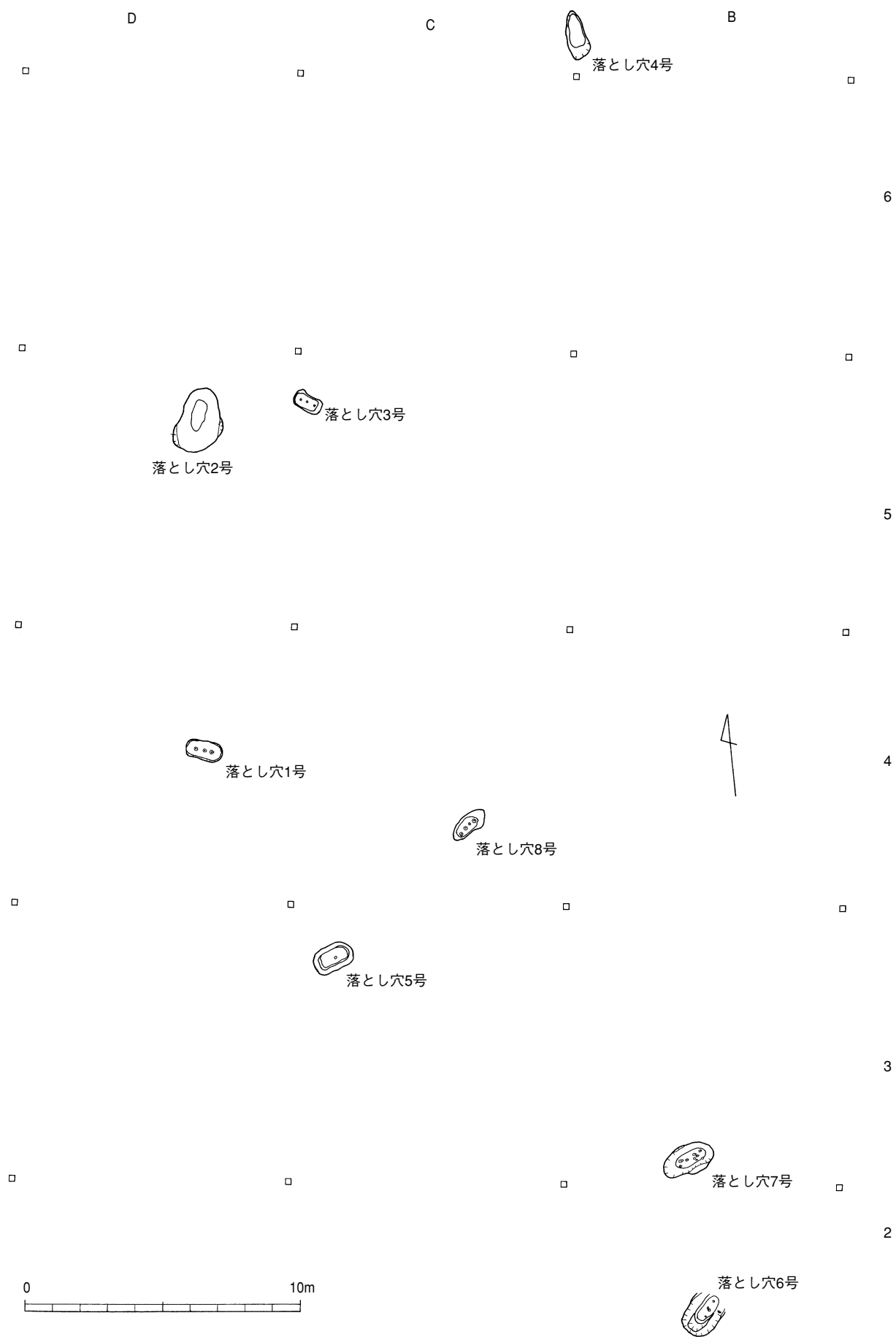
(2) 遺構

落とし穴1号（第26・27図）

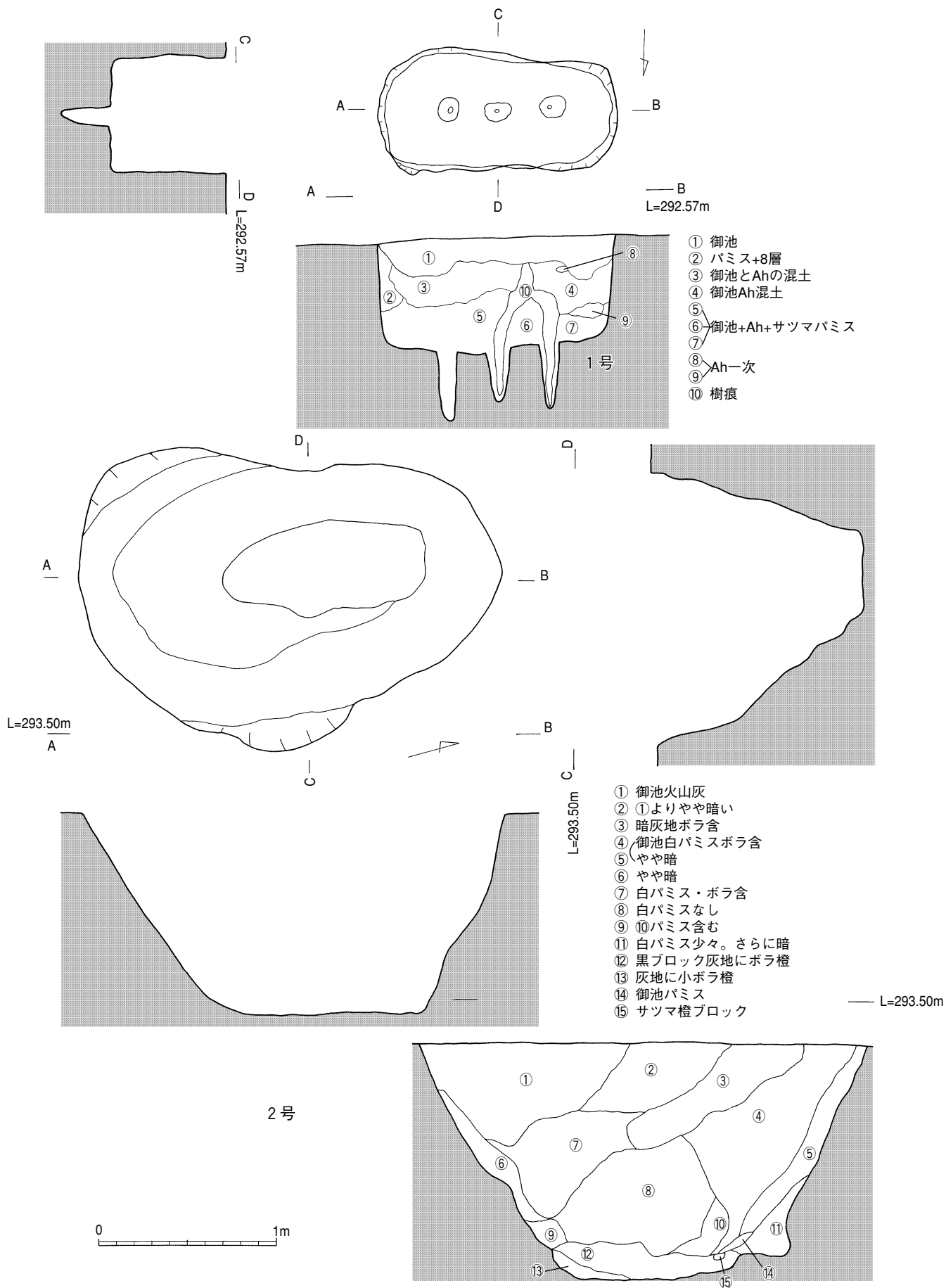
この遺構はD-4区に位置し、長軸が東西に検出した。計測は平面の長軸が130cm、短軸が65cmで、深さは60cmである。床面には径10cm、深さ30cm程度の逆茂木穴が3ヶ所一列にみられた。この逆茂木穴の2ヶ所には樹痕がみられた。埋土は上面に御池火山灰があり、その下には御池火山灰とアカホヤ火山灰の混土があり、その下には御池火山灰とアカホヤ火山灰とP14パミスが混ざった土がみられた。

落とし穴2号（第26・27図）

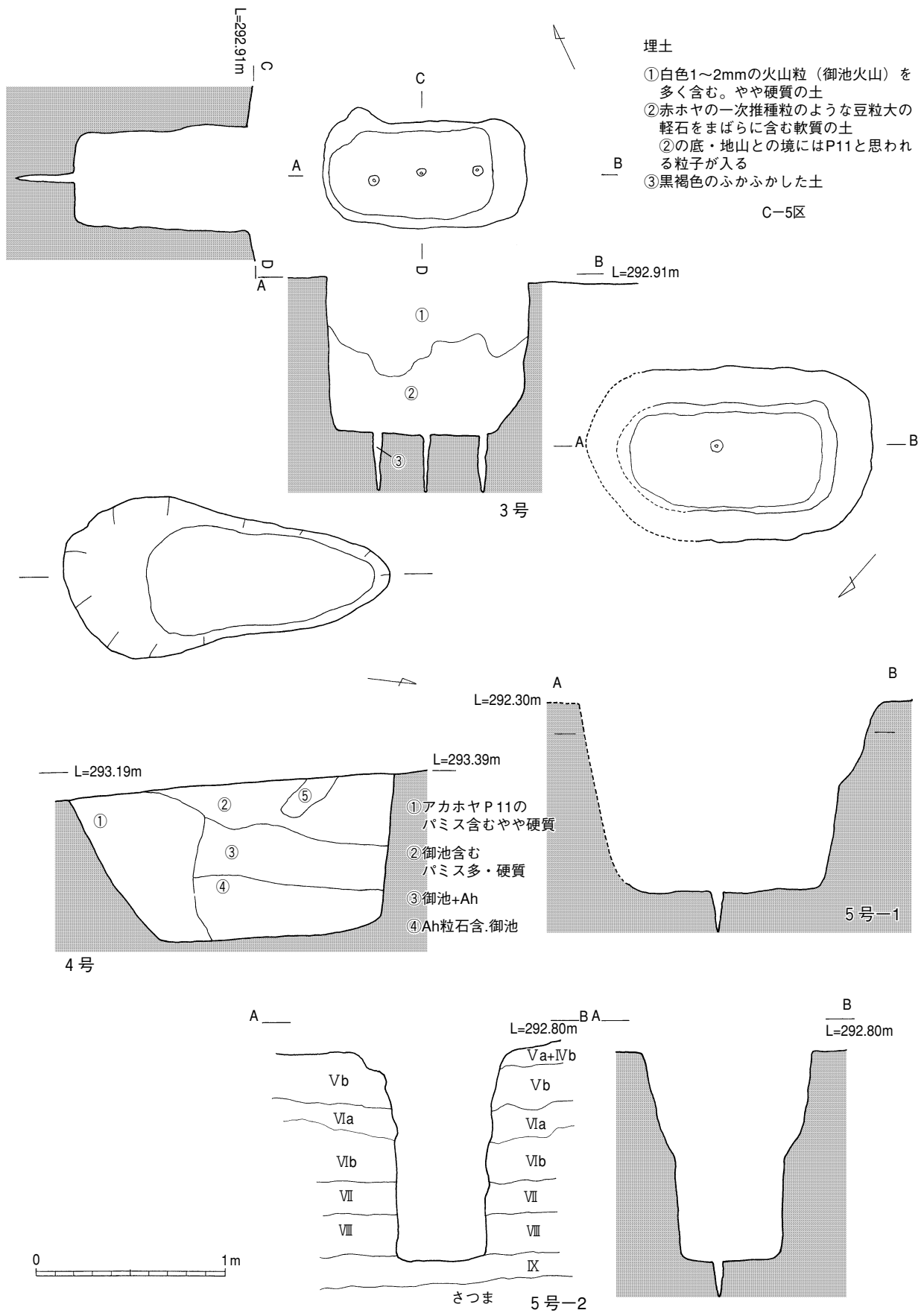
この遺構はD-5区に位置し、長軸が南北に検出された。計測は平面の長軸が238cm、短軸が160cm、深さが115cmである。平面は長楕円で、掘方は一部崩れた跡があるが二段になっている。床面

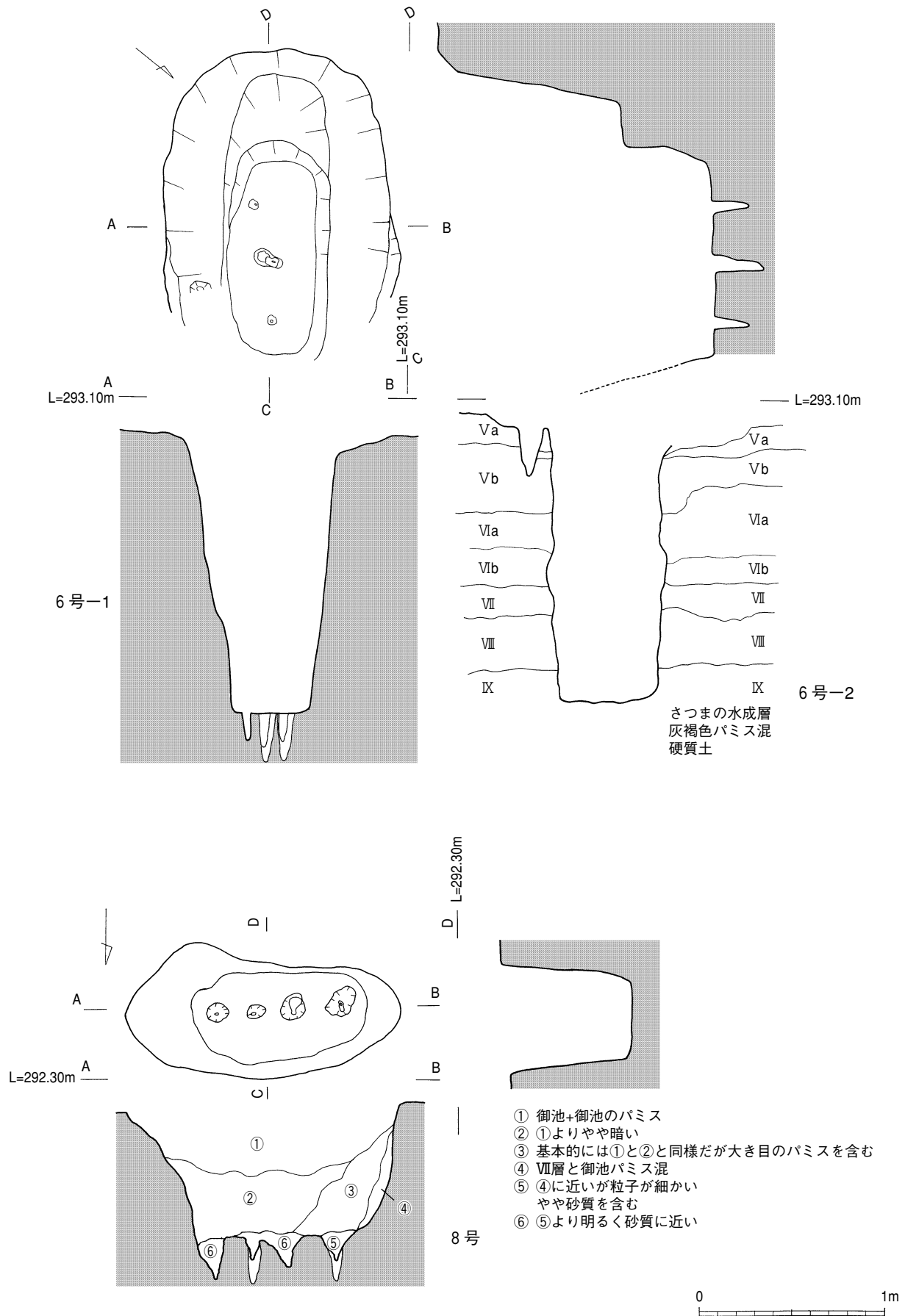


第26図 縄文時代前・中期落とし穴配置

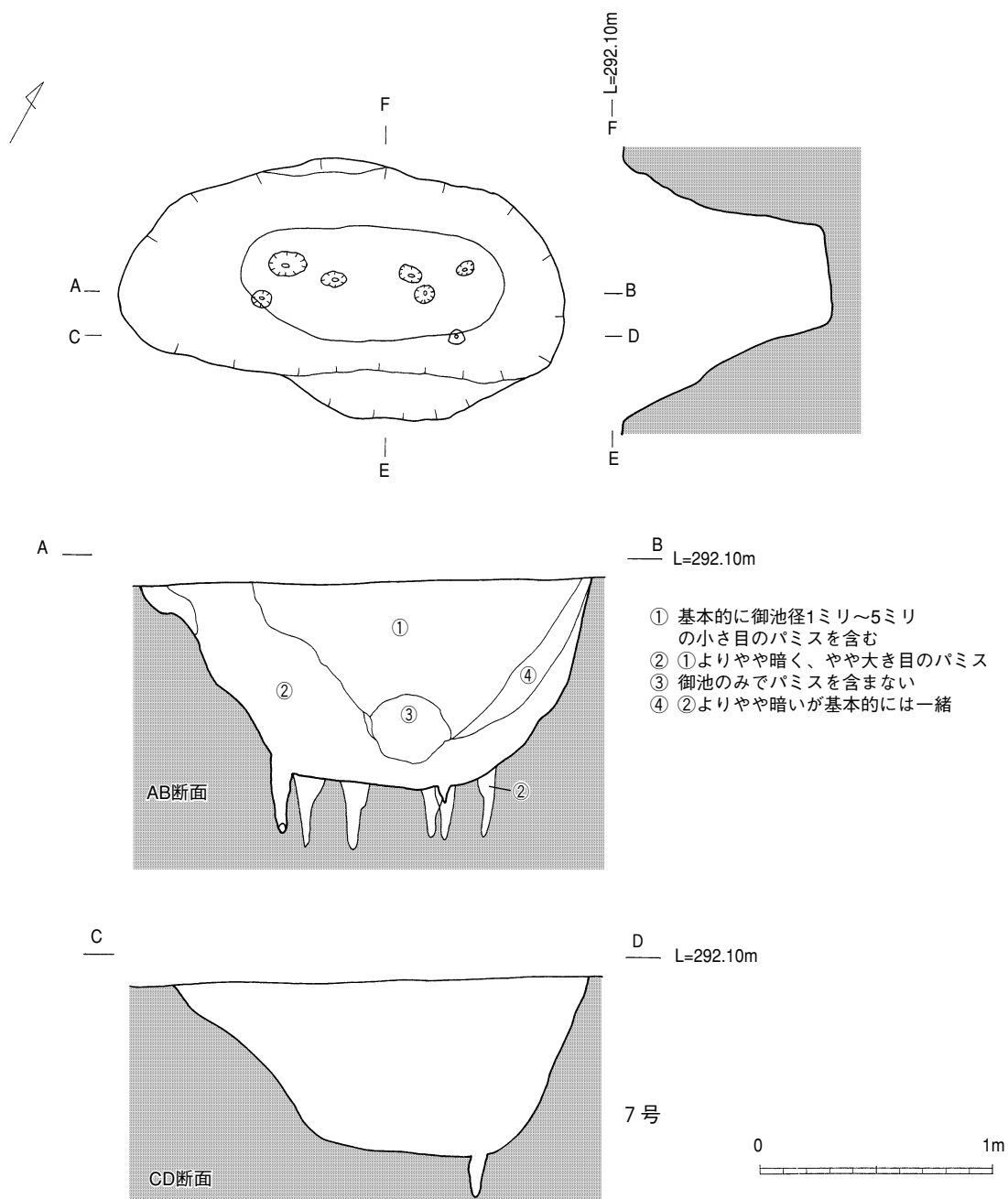


第27図 縄文時代前・中期落とし穴1号・2号





第29図 縄文時代前・中期落とし穴6号・8号



第30図 縄文時代前・中期落とし穴7号

は狭く、逆茂木跡は検出されなかった。埋土は③の暗灰地ボラ含み層がある。この層は樹痕の可能性はある。上層には④⑤の御池火山灰層がみられ、下層は白パミス層が目につく。この下層は御池火山灰の一次の可能性が強い。その他、底には流れ込みやP14のブロックもみられる。

落とし穴3号（第26・28図）

この遺構はC-5区に位置し、長軸が東西に検出した。計測は平面の長軸が110cm、短軸が55cmで、深さは75cmである。床面には径5cm、深さ25cm程度の逆茂木穴が3ヶ所一列にみられた。埋土は上部の①に御池火山灰があり、その下部の②にはアカホヤ火山灰の混土があった。

落とし穴4号（第26・28図）

この遺構はB-6区に位置し、長軸が南北に検出した。計測は平面の長軸が175cm、短軸が65cmで、深さは75cmである。床面には逆茂木穴がなく、平坦である。埋土は上面に御池火山灰があり、

南からアカホヤ火山灰が入り，その横の中位には御池火山灰とアカホヤ火山灰の混土があり，下位には御池火山灰とアカホヤ火山灰土がみられた。

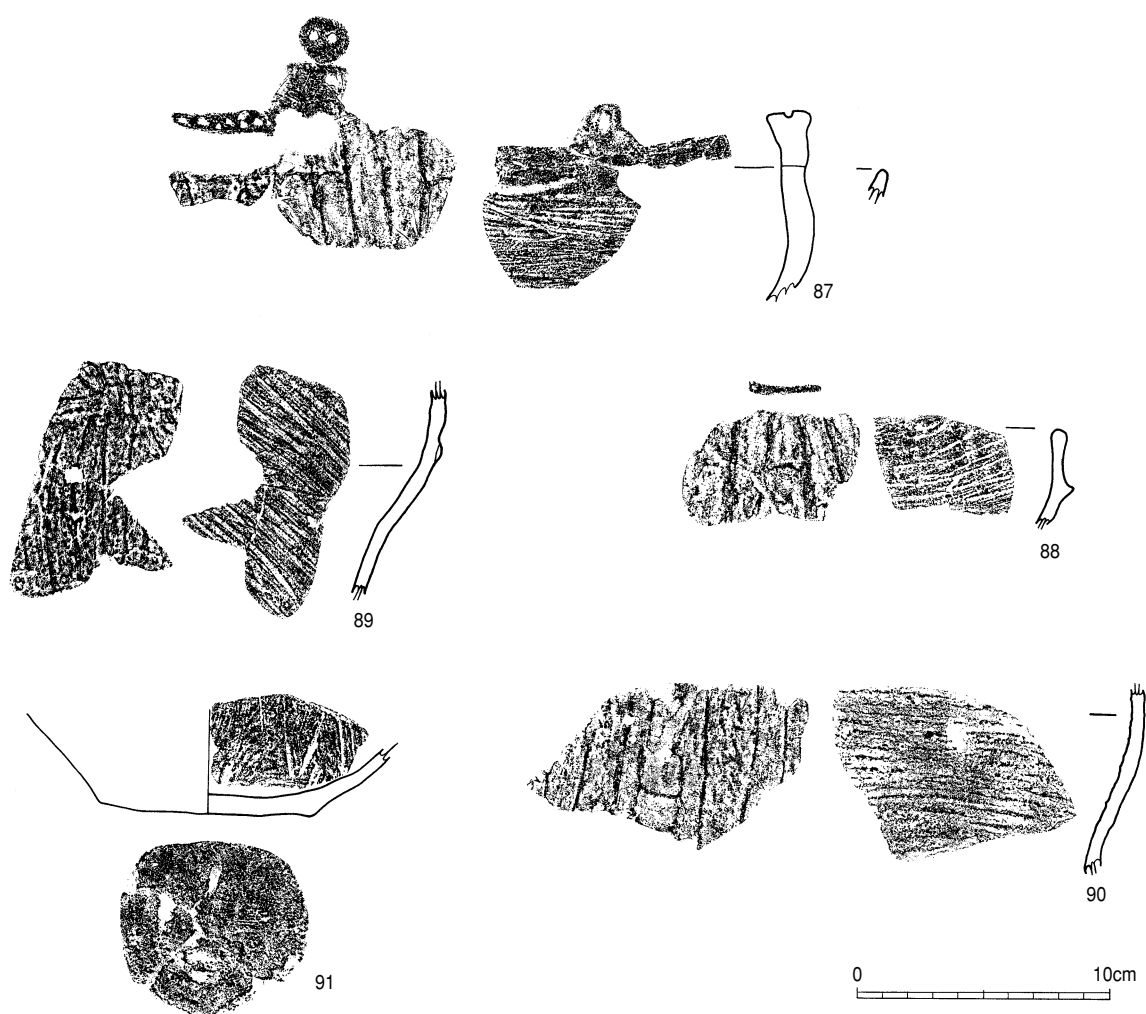
落とし穴5号（第26・28図）

この遺構はC－3区に位置し，長軸が東西に検出した。計測は平面の長軸が120cm以上，短軸が95cmで，深さは100cmである。床面には径7cm，深さ20cm程度の逆茂木穴が1ヶ所みられた。この逆茂木穴の2ヶ所には樹痕がみられた。埋土は上面に御池火山灰があり，その下には御池火山灰とアカホヤ火山灰の混土がみられた。

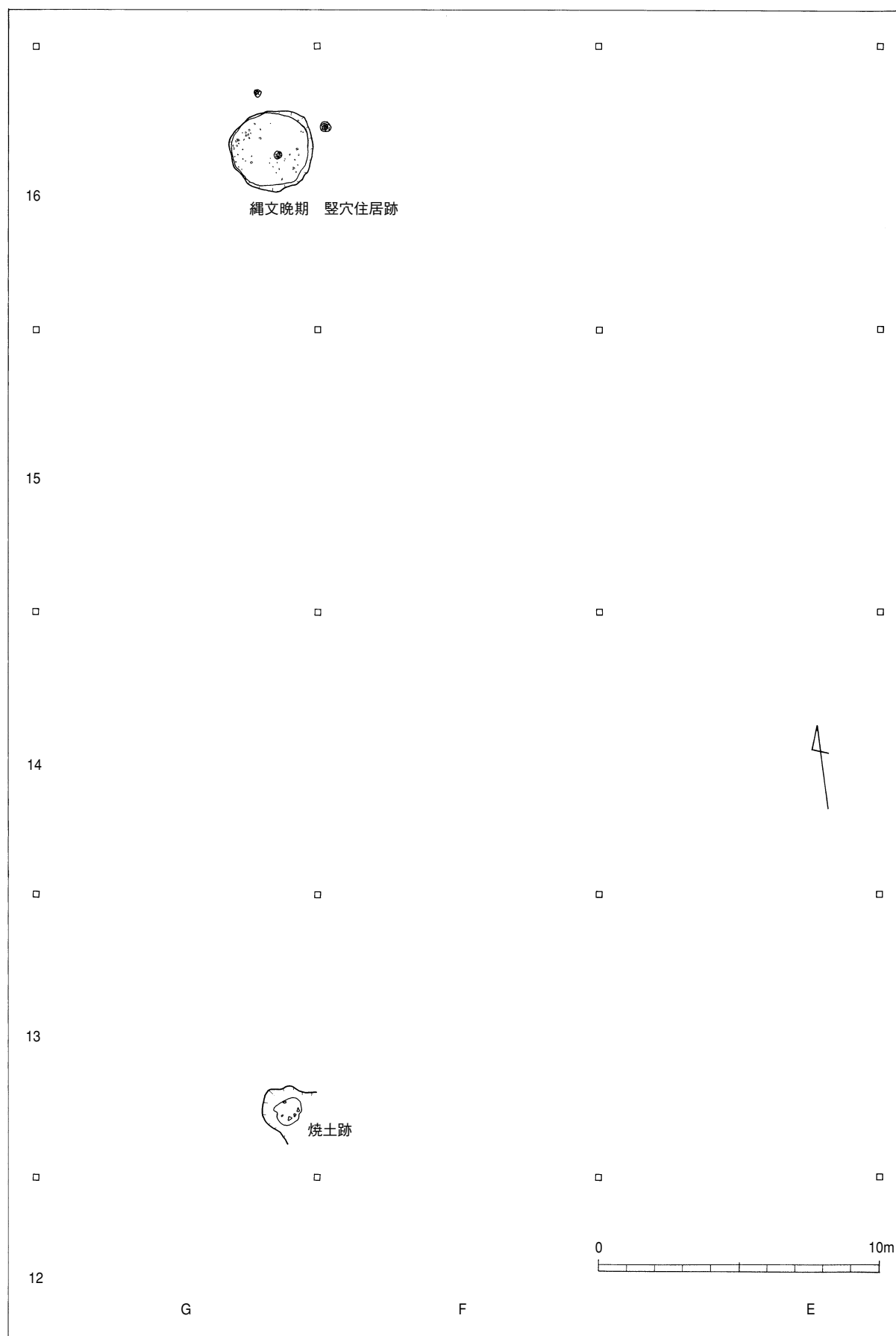
なお，この落とし穴が掘られた地層断面はアカホヤ火山灰二次堆積層のV a層と御池火山灰層のIV b層が混ざった層であった。

落とし穴6号（第26・29図）

この遺構はB－2区に位置し，長軸が北東・南西に検出した。計測は平面の長軸が165cm以上，短軸が125cmで，深さは150cmである。床面には径7～10cm，深さ15～30cm程度の逆茂木穴3ヶ所が一行検出した。また，側面にも浅い落ち込みがみられるほか，この中央の部分の逆茂木穴は掘方が重なって検出している。南西の掘方は途中で段があり，2段になり床面に繋がっている。北東側の



第31図 縄文時代中期の土器



第32図 縄文時代晩期の遺構配置

掘方は崩落か堀込み判断できないがのり面が2段になっている。このことにより、複数回の掘方が考えられる。なお、掘込み面はV a層である。埋土は上面に御池火山灰があり、その下には御池火山灰とアカホヤ火山灰の混土があり、その下には御池火山灰とアカホヤ火山灰が混ざった土がみられた。

落とし穴7号（第26・30図）

この遺構はB-3区に位置し、長軸が東西に検出した。計測は平面の長軸が195cm、短軸が110cmで、深さは95cmである。床面には径10cm、深さ30cm程度の逆茂木穴が7ヶ所検出された。埋土は①②③④に御池火山灰があり、逆茂木穴には御池火山灰とアカホヤ火山灰とP14パミスが混ざった土がみられた。

落とし穴8号（第26・29図）

この遺構はC-4区に位置し、長軸が北東・南西に検出した。計測は平面の長軸が150cm、短軸が65cmで、深さは75cmである。床面には径15cm位、深さ20cm程度の逆茂木穴が3ヶ所一列にみられた。埋土は上部の①②③に御池火山灰があり、その下部の④には第Ⅶ層と御池火山灰の混土があった。⑤⑥は基本的に御池火山灰である。

(3) 遺物（第31図）（87～91）

これらは薄手で黒褐色を呈するもので、文様、胎土、器面調整、焼成等からみて一個体の土器と考えられる。

87は口縁部で、器形はキャリッパー形を呈している。口唇部に突起を付け、その上面に2つの刺突痕を施している。また、平坦部の口唇部にも刺突痕がみられる。外面には縦位に微隆起突帯を施している。内面は篋状施文具での調整痕が横位に施している。88はキャリッパー状の口縁部で、縦位の微隆起突帯がみられる。89・90はキャリッパー状に外反する頸部である。口縁部近くには微隆起突帯がみられ、器面は篋状施文具による調整痕が縦位と斜位にみられる。91は若干上げ底気味の底部である。器面は篋状施文具で調整している。

3 縄文時代晩期

(1) 分布状況（第6図・第32図）

この土器の分布は第6図で示したようにE・F-12区からD～G-17区にかけて出土した。中でもE・F-12・13区、E-15区、F・G-16区に集中して出土している。出土層は御池火山灰の上面であった。

遺構は第32図で示したように竪穴住居跡がG-16区に、焼土跡がG-13区に検出した。

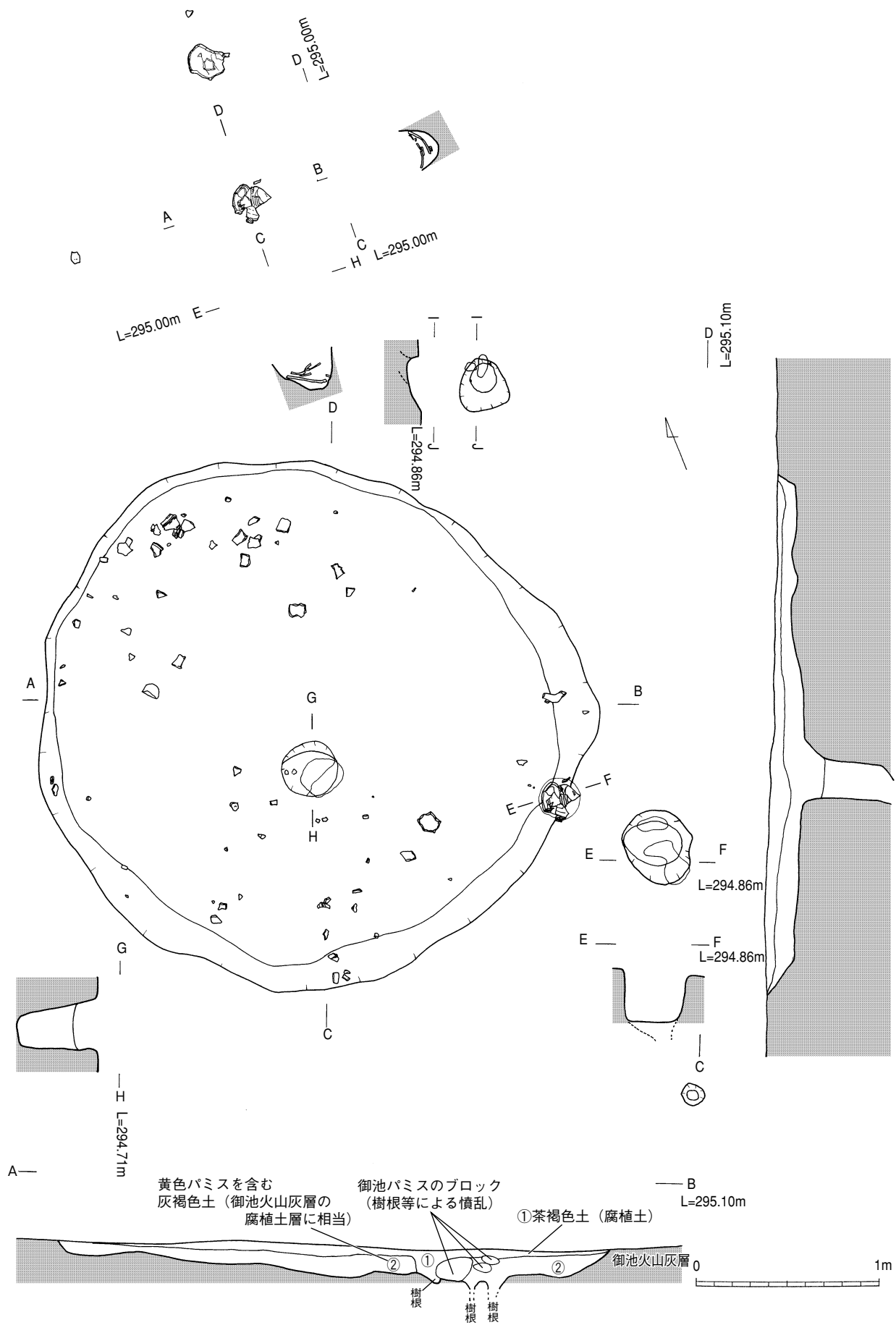
(2) 遺構

竪穴住居跡（第33図）

この遺構は御池火山灰の一次層に御池火山灰の腐植土層が2層入り込んだ状態で検出された。

形態は3×2.9mの円形で、中央に柱穴1ヶ所みられるものである。竪穴の壁は15～10cm斜めに掘られ、中央の柱穴は約45cmで、樹痕と重なっているため底が斜めになっている。南東側の壁には約30cmの円形の堀込みに土器が敷き詰められて検出した。

出土遺物の広がりには北部と南部に散乱してみられる。遺物は深鉢が主であった。また、竪穴住居跡の周辺は落ち込みが2ヶ所、土器の固まりが1ヶ所みられた。





第34図 縄文時代晩期の焼土跡

焼土跡（第34図）

この遺構は、安山岩等のフレイクやチップの集中出土により気づく。上層は削平によりほとんど残存していなかったため掘込みはほとんど確認できなかったが、第8トレンチの断面に立ち上がりらしきものの線が見えたので、それに沿って実測をした。その後、埋土を除去したところ床面近くに約1mの円形に炭化物と焼土跡が確認できた。なお、周囲には柱穴は検出しなかった。

(3) 遺物

竪穴住居跡の遺物（第35図）（92・93）

92は深鉢の口縁部から頸部にかけての部分である。器形としては肩部から頸部まで直行し、頸部で「く」の字状に折れ、口縁部が外反する。口縁部には3条の沈線が横位に施されている。器面は外面が研磨気味で丁寧に調整され、頸部の外面には煤が付着している。内面は、口縁部が丁寧であるが頸部の下部は横撫で調整である。形式としては入佐式土器の古い段階に位置すると考えられる。

93は深鉢の胴部である。器面調整は外面が縦撫で、内面が横撫でである。大きさ的にも92と類似している。

包含層の出土遺物

土器（第36～39図）（94～119）

94は口縁上部に肥厚を持たず、頸部から外反する深鉢の口縁部である。調整は外面が横位と斜位の研磨で、内面が横位の撫でである。95はやや厚めの口縁部に肥厚を持ち、頸部から外反する深鉢の口縁部である。調整は外面が横位の丁寧な撫で、内面が横位の撫でである。96は口縁部に肥厚を持ち、頸部から外反する深鉢の口縁部である。調整は外面が横位の丁寧な撫で、内面が横位の撫でである。97は口縁部がキャリッパー状で外反し、肩部から上がる頸部は直行する深鉢である。器面調整は横撫でである。98の器形は深鉢で肩部から上がる直行する頸部で、口縁部には「く」の字状に

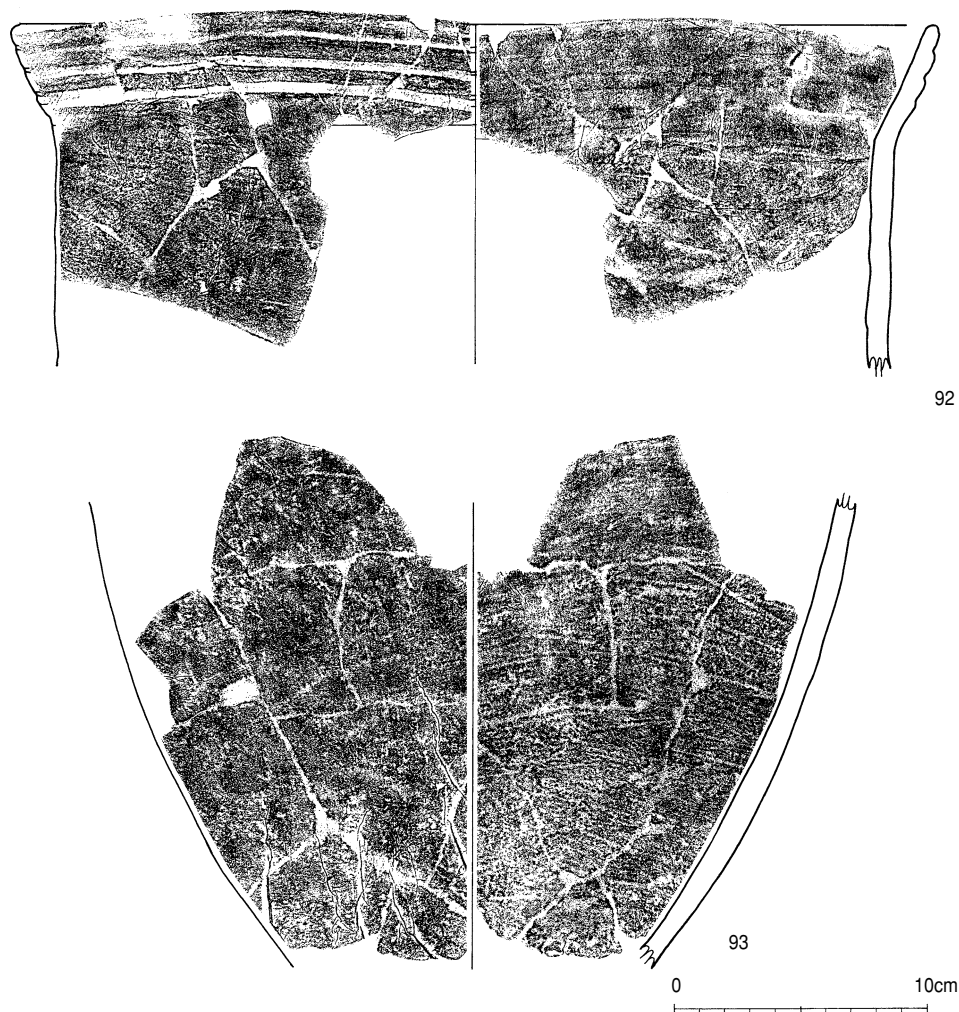
折れて繋がる。口縁部は直線的に外反する。器面調整は丁寧な横撫でである。99は外反する頸部に直行する口縁部の深鉢である。口唇部は平坦に調整しているため角張る。器面調整は丁寧な横撫でである。

以上94～99が無文の口縁部である。なお100～103が有文の口縁部である。

100は2条の沈線が施されている土器である。下部が不明であるので、器形は深鉢か鉢か判断できない。器面調整は外面が研磨気味で、内面は丁寧な横撫でである。101は外反する肥厚した深鉢の口縁部である。文様は3本の沈線を横位に施している。内器面は撫で調整で、外面はやや研磨調整である。102は頸部で「く」の字に外反する口縁部をもつ深鉢である。口縁部はやや肥厚し、3条の沈線を横位に施している。器面調整は、外面が研磨気味で、内面は横撫でである。103は外反する深鉢の口縁部である。3条の沈線を横位に施している。器面調整は、外面が研磨気味で、内面は横撫でである。

104～109は肩部から胴部までである。

104は肩部で「く」の字状に折れた頸部から肩部にかけての深鉢である。器面調整は、外面が研磨気味で、内面は横撫でである。なお、107は胴部までである。105は肩部で「く」の字状に折れた頸部から肩部にかけての深鉢である。器面調整は、外面が研磨気味で、内面は横撫でである。106

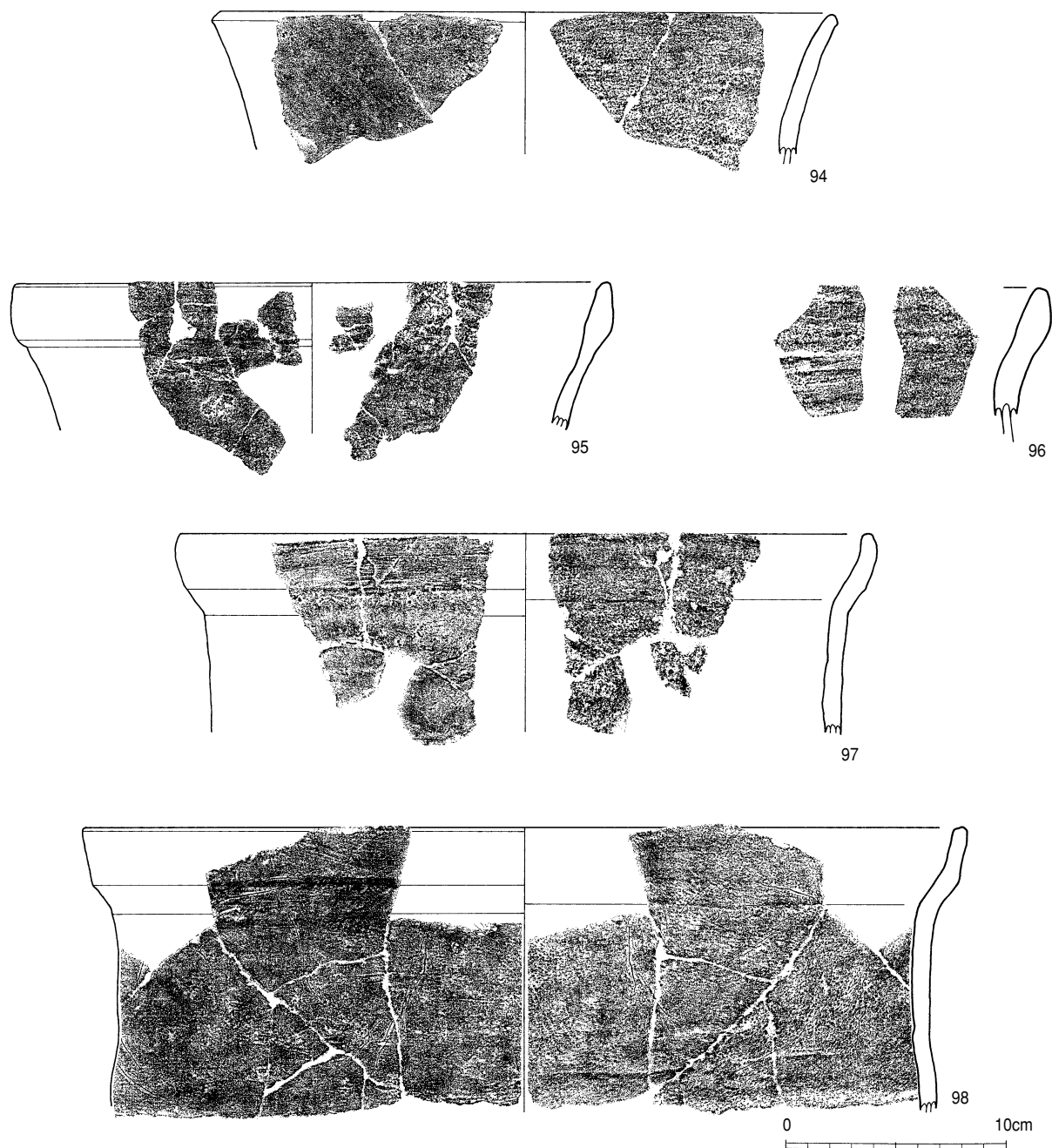


第35図 縄文時代晩期の土器(1)深鉢竪穴住居跡

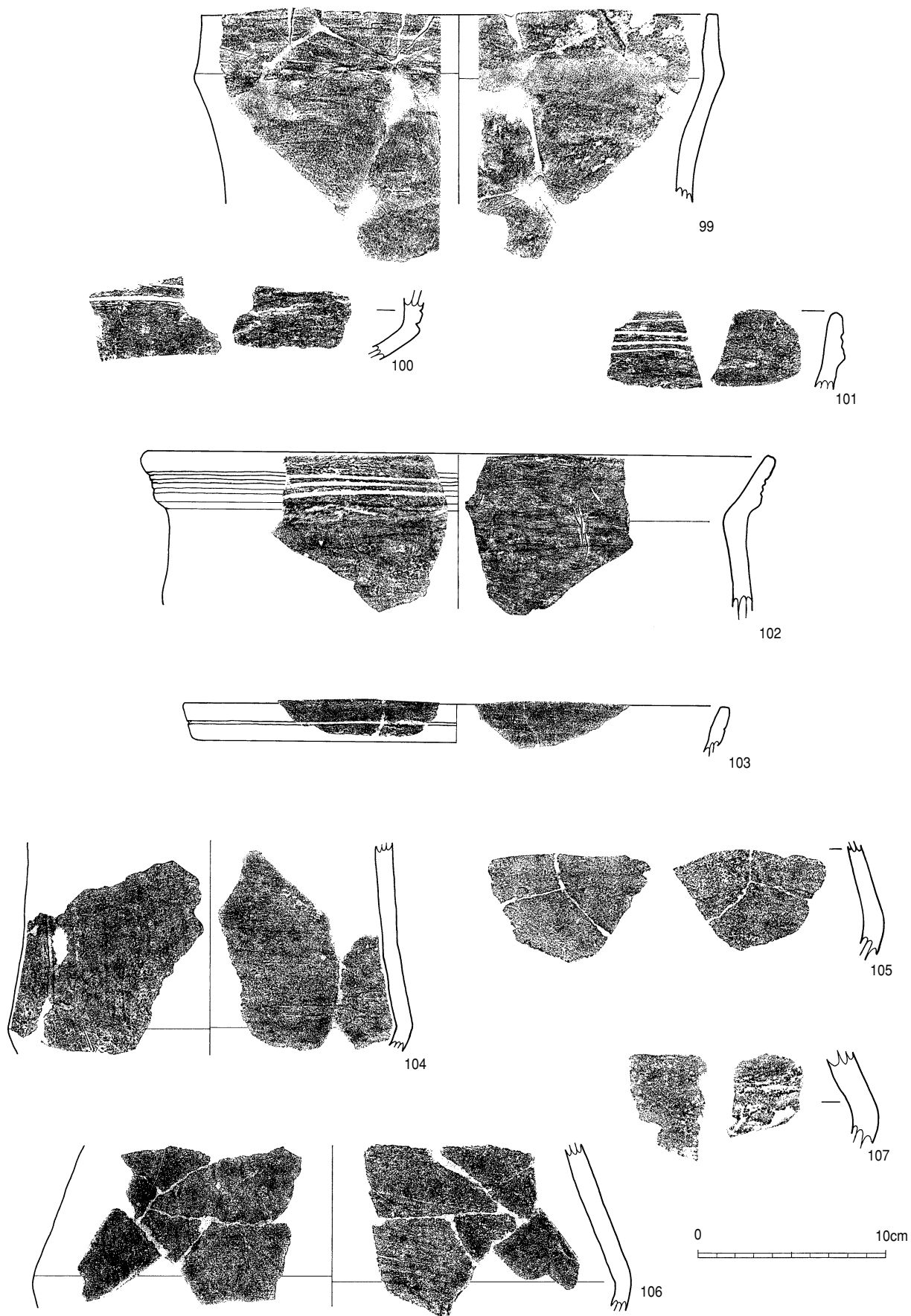
は肩部で「く」の字状に折れた頸部から肩部にかけての深鉢である。器面調整は、外面が研磨気味で、内面は横撫である。107は肩部で「く」の字状に折れた頸部から胴部にかけての深鉢である。器面調整は、外面が研磨気味で、内面は横撫である。108は肩部で「く」の字状に折れた頸部から肩部にかけての深鉢である。器面調整は、外面が研磨気味で、内面は横撫である。109は深鉢の胴部から底部近くである。器形は半球状で、器面調整は外面が、横撫でと斜撫で、内面が横撫である。

110～113は底部である。

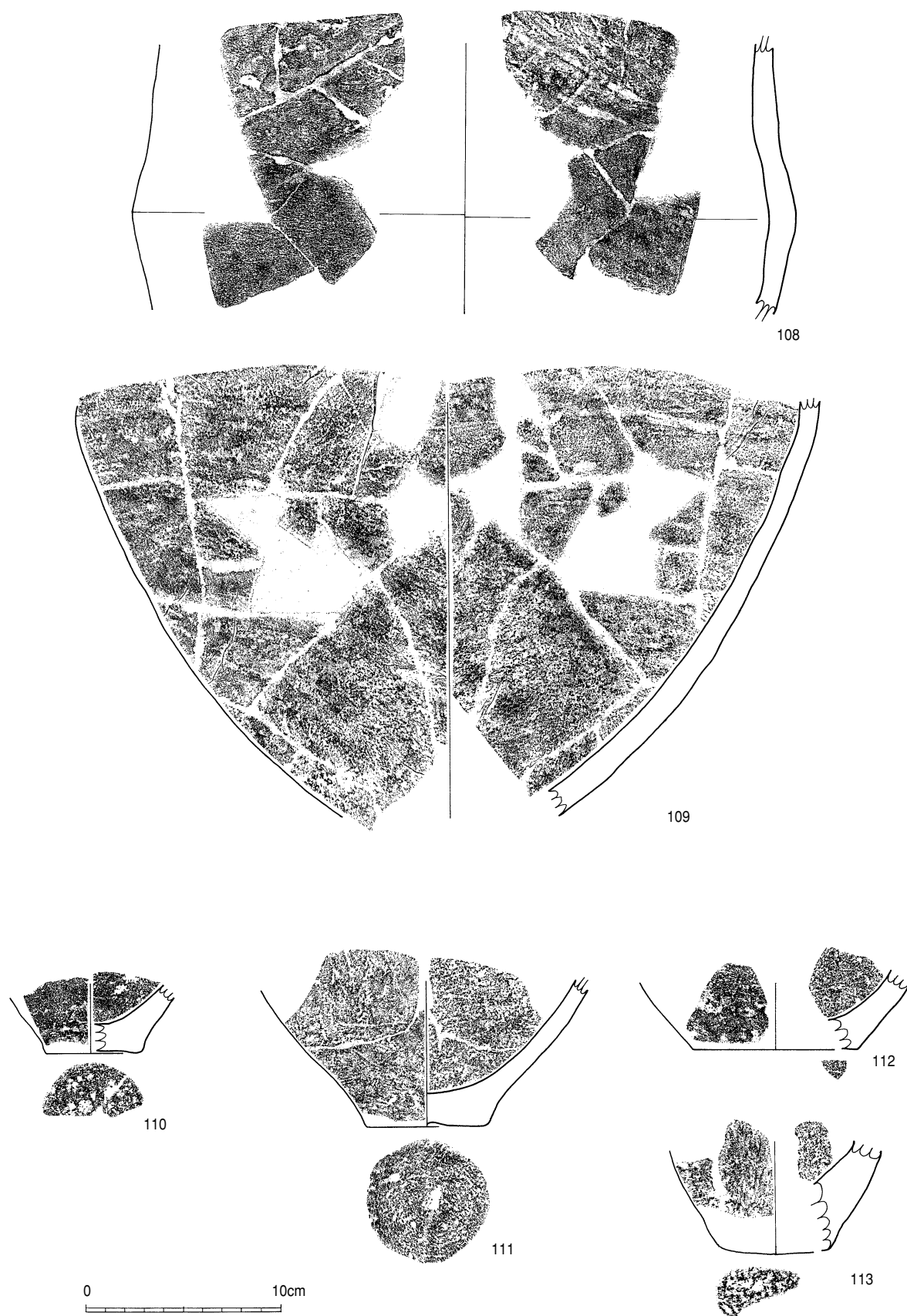
110は平底の底部で径が小さい。111は球状をもつ胴部から径の小さい平底をもつ底部で、器面調整は丁寧である。112は平底で、器面調整は良い。113はやや丸みをもつ平底である。器面調整は雑



第36図 縄文時代晩期の土器(2)深鉢



第37図 縄文時代晩期の土器(3)深鉢

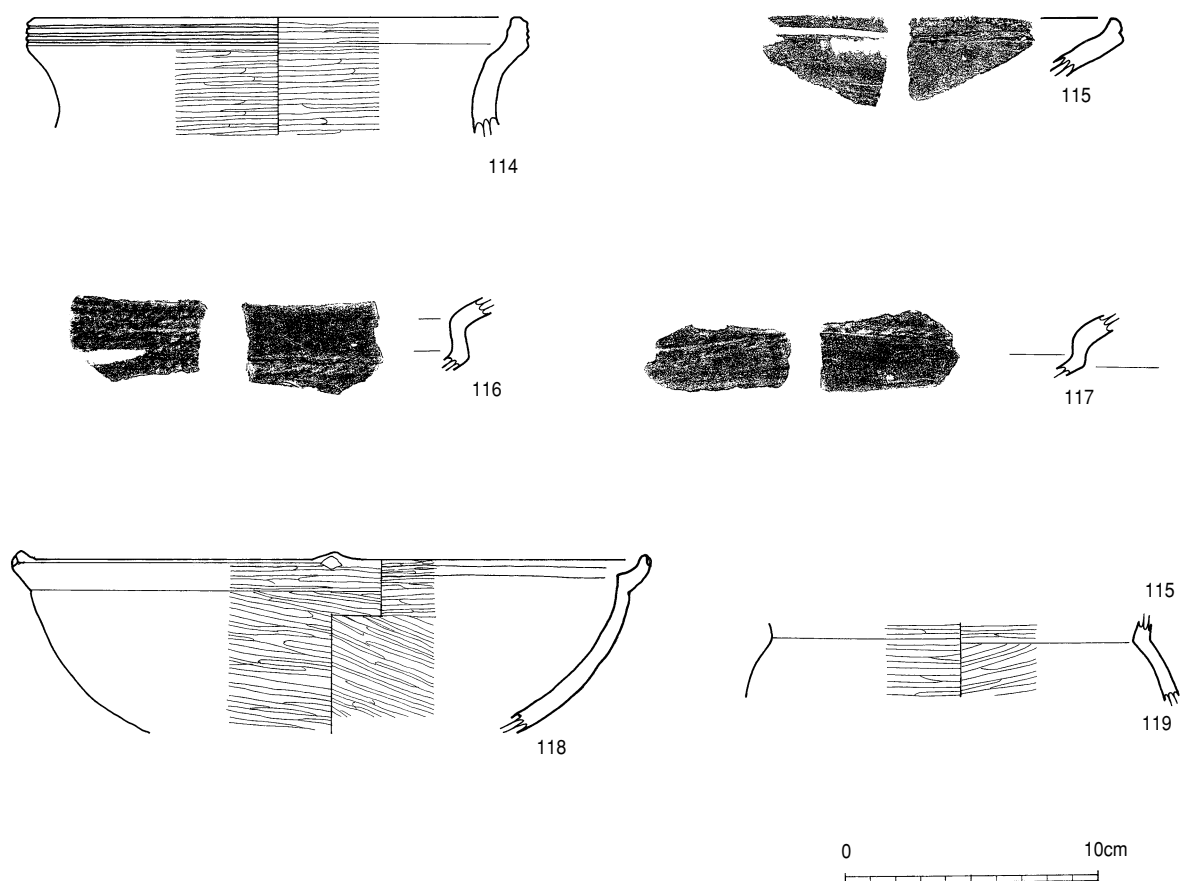


第38図 縄文時代晩期の土器(4)深鉢

な撫である。

114～119は浅鉢である。

114はやや厚みの土器で、口縁部が立ち、頸部の長さが広い器形である。口縁部には3条の沈線が横位に施されている。器面調整は両面とも研磨である。115は口唇部立ち上がり、口縁部に沈線が1条施されている。部位は大きく外反する口縁部である。器面調整は両面とも研磨である。116は頸部から肩部にかけての部位である。各部位で「く」の字に折れた器形である。器面調整は両面とも研磨である。117は頸部から肩部にかけての部位である。各部位で「く」の字に折れた器形である。器面調整は両面とも研磨である。118は半球状の浅鉢である。口縁部は短く受皿状に広げ、4ヶ所に窪みをつけた突起をつけている。器面調整は両面とも研磨である。119は球状の胴部をもつ浅鉢である。頸部から口縁部は「く」の字状に折れる器形である。器面調整は両面とも研磨である。



第39図 縄文時代晩期の土器(5)浅鉢

石器（第40・42図）（120～135）

石鏃，石錐，磨石，凹石，敲石が出土している。

石鏃は120～127である。

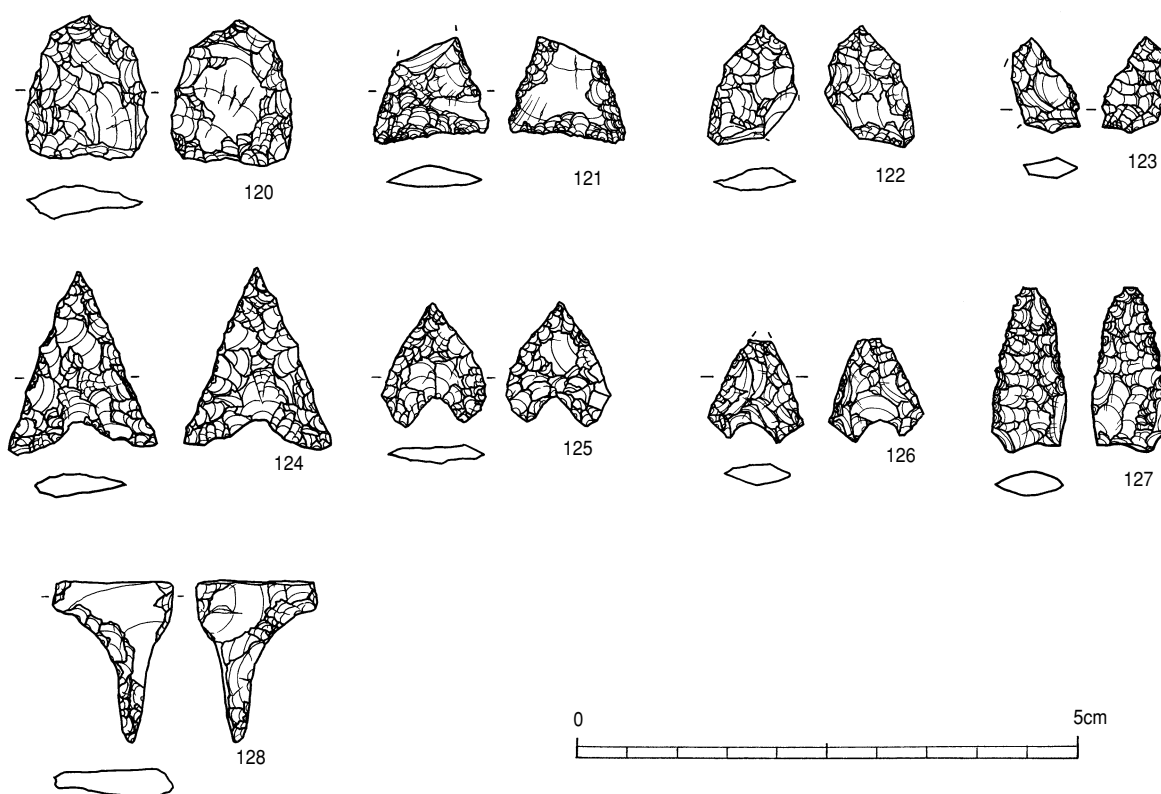
120は丸みをもった五角形鏃で平基式の石鏃である。121は平基式のもの三角鏃の上部が欠損している。122は五角形鏃で脚部が欠損している。123は三角形鏃で，凹式である。脚部が一部欠損している。124は三角形鏃で凹式である。125は変則五角形鏃で凹式である。126は変則五角形鏃で，頭部が欠損している。127は長三角形鏃で平基式に近い。

128は石錐である。平坦面が両面につくられた略「L」字状の形をしている。錐部の先端はノッチを入れ鋭利に作っている。

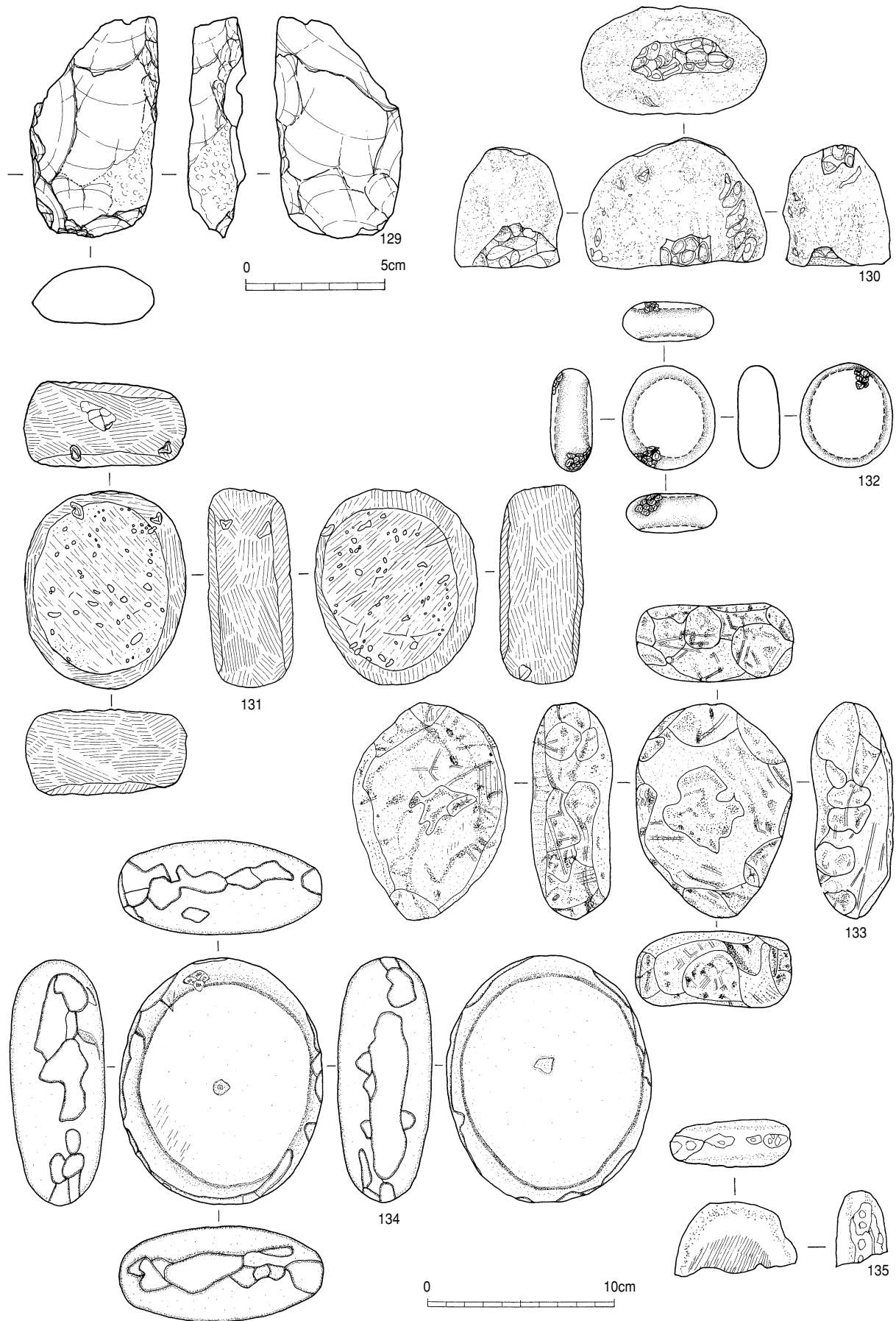
129は局部磨製石斧である。頭部や刃部がかなり欠損している状態である。

130～135は敲石・磨石・凹石の類である。

130は敲石と凹石に使用されたもので使用中か使用後に割られた半欠損品である。131は各面を磨石に使用したもので，全面に使用面がみられる。132は一部に敲石に使用した痕跡のある円礫である。133は敲石と凹石に使用されたもので，円礫がかなり使用されているため変形されている状態である。134は敲石を主に使用されているため円礫の縁部に使用痕がみられる。凹石に使用された部分は円礫の中央部に狭くみられる。135は敲石と磨石に使用され，使用中か使用後に割れている半欠損品になっている。



第40図 縄文時代晩期の石器(1)



第41図 縄文時代晩期の石器(2)

第3表 縄文時代土器観察表

挿図 番号	遺物 番号	出土区	層位	分類	器種	部位	調整・文様		胎土	色調		焼成	法量(cm)			注記 番号	備考
							外面	内面		外面	内面		口径	底径	器高		
早期 12	1	B-4	VIa	塞A	深鉢	口縁	沈線	ミガキ	石英, 長石, 角閃石	橙	橙	良好	28.0			7097 7101 7102 7104 7105	
	2	B-4	VII VIa	塞A	深鉢	口縁～胴	撚糸沈線	口縁(ミガキ) 胴(ナデ)	長石, 角閃石, 小石	黒褐	橙	良好	28.0			7732 7186 7097	
	3	B-5	VII			口縁	沈線	ナデ	長石, 角閃石, 輝石, シロ岩片	明赤褐	明赤褐	良好			5.9	7073	
	4	D-4	VII		深鉢	口縁	微突	ナデ	石英, 長石, 角閃石, 輝石	にぶい黄橙	灰黄褐	良好			2.4	6922	
	5	B-5	VII		深鉢	口縁	沈線	ナデ	石英, 長石, 角閃石, シロ岩片	明赤褐	明褐	良好	20.8		4.8	7070	
	6	B-6	VII	塞A	深鉢	口縁	撚糸	ナデ	石英, 長石	赤褐	明赤色	良好	22.6		4.6	8145 8148	
	7	D-5	VIII VII	塞A	深鉢	胴	撚糸	ナデ	長石, 角閃石, シロ岩片	褐	褐				5.9	6978 6999 6984	
	8	B-4	VII	塞A	深鉢	胴	撚糸	ナデ	石英, 長石, 角閃石	橙	にぶい橙	良好			4.5	7195	
	9	D-5	VII	塞A	深鉢	底	撚糸	ナデ	長石, 角閃石	褐	にぶい赤褐	良好		9.0		6980	
13	10	C-4	VII	塞A	深鉢	口縁	沈線	ナデ	長石, 雲母, 輝石, シロ岩片, アカ岩片	橙	橙	良好	8.8		6.1	6181	
	11	D-5	VII	塞A	深鉢	胴～底	撚糸	ナデ	石英, 長石, 角閃石, 輝石	にぶい赤褐	明赤褐	良好		13.2	4.5	6994	
	12	D-5	VII VIII	塞A	深鉢	底	撚糸沈線	ナデ	長石, 角閃石, 輝石, シロ岩片	褐	明赤褐	良好		9.0	4.3	6985 6974	
	13	D-5	VIII VII	塞A	深鉢	底	無文	ミガキ	石英, 長石, 角閃石, 輝石, シロ岩変, アカ岩片	にぶい褐	黄褐	良好		11.8	1.6	6941 6942 6957	
	14	C-4	VII	塞B	深鉢	口縁	貝殻	ナデ	長石, 角閃石, シロ岩片, アカ岩片	黄褐	黄褐	良好	30.0		5.0	7450 7288	
	15	C-4	VII	塞B	深鉢	胴	貝殻沈線	ヘラナデ	石英, 長石, 角閃石, 輝石, シロ岩片	にぶい赤褐	暗灰黄	良好	16.0 (胴)		7.1	7287 7439 7449 7452 7456 7459 7460 7714 7716	
	16	C-4	VII	塞B	深鉢	底	沈線	ナデ	長石, 輝石, シロ岩片, アカ岩片, 雲母	にぶい橙	橙	良好		6.3	5.1	6182 6183	
14	17	C-4	VII	塞B	深鉢	口縁～ 下胴	貝殻 ナデ	粗い工具 ナデ	長石, 角閃石, 雲母, シロ岩片, アカ岩片	にぶい褐	にぶい褐	良好	26.4		31.0	7027 7029 7031 7033 7040 7043 7046 7048 7051～7 7060 7241 7255～8 7260 7261	
	18	B-3	VII	塞B	深鉢	胴	貝殻刺突, 沈線	ナデ	石英, 長石, 角閃石, 輝石	にぶい橙	にぶい橙	良好	11.0		16.5	7772 7773	
	19	B-4	VII	塞B	深鉢	口縁	貝殻沈線	ヘラナデ	石英, 長石, 角閃石, 輝石	浅黄橙	にぶい黄橙	良好			4.6	7476	
	20	B-3	VII	塞B	深鉢	口縁	貝殻沈線	ナデ	石英, 長石, 角閃石, 輝石	黒褐	灰黄褐	良好			5.9	7776	
	21	C-4	VIII	塞B	深鉢	口縁	貝殻	ナデ	長石, 角閃石, 輝石, シロ岩片, アカ岩片	にぶい橙	にぶい橙	良好			4.4	7355	
	22	C-3	VII	塞B	深鉢	口縁	貝殻	ナデ	長石, 輝石	にぶい褐	にぶい橙	良好	27.8		5.7	7848	
	23	B-4	VII	塞B	深鉢	口縁	貝殻刺突	ナデ	石英, 長石, 角閃石, 輝石, シロ岩片, アカ岩片	にぶい橙	にぶい黄橙	良好	25.0		5.4	7120 7125	
	24	B-3	VII	塞B	深鉢	頸	貝殻刺突	ナデ	長石, 角閃石, シロ岩片, アカ岩片	褐	橙	良好	18.6 (首)		7.8	7820	
	25	B-3	VII	塞B	深鉢	頸	貝殻刺突沈線	ヘラナデ	長石, 輝石, シロ岩片, アカ岩片	明褐	にぶい黄橙	良好	16.0 (首)		6.7	7752 7775	
	26	B-4 B-3	VII VII	塞B	深鉢	胴	沈線	ヘラナデ	長石, 角閃石, 輝石 シロ岩片, アカ岩片	明赤褐	にぶい黄橙	良好	18.3 (胴)		6.2	7163 7756 7759	
15	27	C-4	VII	塞B	深鉢	胴	沈線	ナデ	長石, シロ岩片	赤褐	黒褐	良好	16.3 (胴)		5.9	269	
	28	B-3	VII	塞B	深鉢	胴	沈線	ヘラナデ	長石, 角閃石, シロ岩片	にぶい赤褐	にぶい赤褐	良好	18.6 (胴)		9.3	7225 7226 7227 7799	

第4表 縄文時代土器観察表

挿図 番号	遺物 番号	出土区	層位	分類	器種	部位	調整・文様		胎土	色調		焼成	法量(cm)			注記 番号	備考
							外面	内面		外面	内面		口径	底径	器高		
早期 15	29	B-2 B-3	Ⅶ Ⅶ	塞B	深鉢	胴	沈線	ナデ	長石、角閃石、 シロ岩片	橙	灰褐	良好	22.4 (胴)		4.7	7873 7825	
	30	B-3	Ⅶ	塞B	深鉢	胴	沈線	ミガキ	石英、長石、角閃石、 シロ岩片	橙	明赤褐	良好	6.6 (胴)		5.0	7879	
	31	C-4	Ⅶ	塞B	深鉢	底	沈線	指痕	長石、角閃石、シロ岩片	橙	明黄褐	良好		6.4	3.6	290	
	32	C-4 D-4	Ⅶ Ⅶ	塞B	深鉢	胴～底	沈線	工具ナデ	石英、長石、角閃石	橙	にぶい橙	良好		14.6	13.3	267 291 6185 6960 6965 6967 6969	294 6184 7265 6961 6955 6968
	33	D-5	Ⅶ	塞B	深鉢	底	沈線	ナデ	石英、長石、角閃石、 アカ岩片	明褐	にぶい赤褐	良好		8.0	7.0	—	
	34	B-4 B-3 C-4 D-4 D-5	Ⅵa Ⅶ Ⅷ Ⅶ Ⅶ Ⅶ	塞B	深鉢	口縁～胴	貝殻沈線	ナデ	長石、角閃石、雲母、 アカ岩片	明赤褐	明赤褐	良好	32.9		25.0	7094 7191 7189 7110 7190 7002 7216 297 7437 7469 6954 6948	7099 7198 7111 7790 7026 7467 6958
	35	B-4	Ⅶ	塞B	深鉢	口縁	貝殻	ナデ	長石、角閃石、 シロ岩片	褐	灰褐	良好	18.8		6.0	7134 7183	7175
	36	B-4	Ⅶ	塞B	深鉢	胴	貝殻	ナデ	長石、角閃石	橙	灰褐	良好	15.9 (胴)		6.4	7147 7181	
	37	D-4	Ⅶ	塞B	深鉢	胴	沈線	ヘラナデ	長石、角閃石、シロ岩片 アカ岩片、小石	にぶい黄橙	にぶい黄橙	良好			4.6	6971	
17	38	D-5	Ⅶ	塞B	深鉢	胴	無文	ナデ	長石、角閃石、シロ岩片 アカ岩片	にぶい黄橙	灰黄褐	良好	20.4 (胴)		9.3	7809 8177	
	39	D-5	Ⅶ	塞B	深鉢	底	無文	ナデ	長石、角閃石、小石	にぶい黄橙	褐	良好		10.4	2.8	8178 8187	
	40	D-5	Ⅶ	塞B	深鉢	胴～底	無文	ナデ	石英、長石、角閃石	にぶい黄橙	灰黄褐	良好		17.0	3.9	8175 8191	
	41	B-3	Ⅶ	塞B	深鉢	口～底	沈線 無文	ナデ	長石、角閃石、シロ岩片	橙	にぶい黄褐	良好	19.8	8.0	13.6	7788 7819 7877	7818 7877
	42	B-4	Ⅶ	塞B	深鉢	底	貝殻	ナデ	長石、角閃石、シロ岩片	にぶい褐	褐	良好		6.5	3.0	7206	
	43	B-4	Ⅶ	塞B	深鉢	底	無文	ナデ	長石、角閃石	にぶい橙	黒褐	良好		8.0	4.0	7177 7182	
	44	B-4	Ⅶ	塞B	深鉢	底	貝殻 無文	ナデ	長石、角閃石	にぶい黄橙	暗褐	良好		10.0	4.2	7201 7204	7202
	45	C-4	Ⅶ	塞B	深鉢	底	無文	ナデ	角閃石、シロ岩片	にぶい黄橙	黄褐	良好		9.6	4.4	256 289	
	46	B-2	Ⅶ	塞B	深鉢	底	無文	ナデ	長石、雲母	橙	暗灰黄	良好		18.0	5.4	7871	
	47	B-7	Ⅶ		深鉢	胴	押型山形	ナデ	石英、長石、角閃石	黄橙	にぶい黄	良好			7.5	8144	
	87	E-12	Ⅳa	春日	深鉢	口縁	微隆起突帯	ナデ	長石、輝石、シロ岩片、 アカ岩片	オリーブ褐	オリーブ黒	良好			7.7	—	
中期 31	89	E-12 F-12	Ⅳ Ⅳb Ⅳ	春日	深鉢	胴	微隆起突帯	ナデ	長石、輝石、シロ岩片、 アカ岩片	オリーブ褐	黒褐	良好			8.1	6175 8110 6286	6286
	88	F-12	Ⅳ	春日	深鉢	口縁	微隆起突帯	ナデ	シロ岩片、アカ岩片	オリーブ褐	オリーブ黒	良好			3.8	6288	
	90	E-12	Ⅳb	春日	深鉢	底	微隆起突帯	ヘラナデ	長石、輝石、シロ岩片、 アカ岩片	オリーブ褐	オリーブ褐	良好	8.0		3.9	8113 8116	8114
	91	F-12	Ⅳ	春日	深鉢	胴	ヘラナデ	ナデ	長石、輝石、シロ岩片、 アカ岩片	オリーブ褐	オリーブ褐	良好		8.0	7.0	6287	
	92	G-16 G-16	Ⅳ Ⅳ		深鉢	口縁～胴	沈線	ナデ	石英、長石、角閃石、 輝石、シロ岩片	黒褐	橙	良好	36.6		14.5	6121 6135 7304 7308 7336 7380	6128 5933 7306 7310 7423
晚期 35																	1号住

第5表 縄文時代土器観察表

挿図 番号	遺物 番号	出土区	層位	分類	器種	部位	調整・文様		胎土	色調		焼成	法量(cm)			注記 番号	備考
							外面	内面		外面	内面		口径	底径	器高		
晩期 35	93	G-16	IV		深鉢	胴	ナデ	ヘラナデ	石英、長石、角閃石、 輝石、シロ岩片	橙	にぶい橙	良好	26.8 (胴)		18.4	6104 6110 6111 6114 6118 6123 6133 6136 7295 7315 7375 7419	1号住
		G-16	IV														1号住
36	94	D-4	IV上 Ⅲ下		深鉢	口縁	ナデ	ナデ	長石、角閃石、輝石、 シロ岩片、アカ岩片	褐	にぶい褐	良好	28.6		6.3	5295 5296	
	95	E-15	IV		深鉢	口縁	ナデ	ナデ	石英、長石、角閃石、 輝石、シロ・アカ岩片	黒褐	橙	良好	27.0		6.7	5738	
	96	G-7	IVa		深鉢	口縁	ナデ	ナデ	石英、長石、角閃石、 輝石、シロ岩片	にぶい黄橙	にぶい橙	良好			5.8	7382	
	97	E-15,16 E-15	IV IV		深鉢	口縁～胴	ナデ	ナデ	石英、長石、角閃石、 輝石、シロ岩片	灰黄褐	にぶい黄	良好	29.0		9.0	7992 7993 8025 8029 8034	
	98	E-15	IV		深鉢	口縁～胴	ナデ	ナデ	石英、長石、角閃石、 シロ岩片	橙	にぶい橙		40.0		12.8	5920 5986	
37	99	G-16	IV		深鉢	口縁～胴		ナデ	石英、シロ岩片	黒褐	にぶい黄橙	良好	28.2		9.8	5847 5849 5848 7428 7429 7430	1号住
	100	E-13	IV上		深鉢	胴	沈線	ナデ	長石、角閃石、シロ岩片	赤褐	灰褐	良好			3.8	5683	
	101	F-13	IVa		深鉢	口縁		ナデ	石英、長石、角閃石	にぶい黄橙	にぶい黄褐	良好			3.4	302	
	102	G-16	IV		深鉢	口縁	沈線	ナデ	石英、角閃石	黒褐	にぶい黄橙	良好	33.8		8.0	7305 7307	1号住
	103	F-13	IVb IV		深鉢	口縁	沈線	ナデ	長石、シロ岩片	黒褐	褐灰	良好	29.0		2.0	7648 7966	
	104	E-15	IV		深鉢	胴		ナデ	長石、角閃石、輝石、 シロ岩片	黒褐	褐灰	良好	21.4 (胴)		11.0	5920 5921	
	105	F-13	IV IVb		深鉢	胴		ナデ	長石、角閃石、シロ岩片、 アカ岩片	にぶい赤褐	褐灰	良好			5.2	6568 6598 7638	
	106	G-16	IV		深鉢	胴		ナデ	長石、角閃石、輝石、 シロ岩片	暗赤褐	褐	良好	31.8 (胴)		8.7	6096 6097 6098 6109	
	107	F-17	IVa		深鉢	胴		ナデ	長石、角閃石、シロ岩片、 アカ岩片	橙	にぶい橙	良好			5.0	7395	
38	108	F-13	IV		深鉢	胴	ナデ	ナデ	石英、長石、角閃石、 輝石、シロ岩片	にぶい黄橙	にぶい黄橙	良好	21.4 (胴)		13.4	5991 6346 6629 6656 6650	
	109	F-13	IV		深鉢	胴	無文	ナデ	石英、長石、角閃石、 輝石、シロ岩片	にぶい黄橙	黄橙	良好	32.0 (胴)		24.4	6424 6428 5985 6440 6900 7624 7628 7957 7958 7959 8069 8467 7630 7634	
		F-13	IVb														
	110	E-15	IV		深鉢	底	ナデ	ナデ	石英、長石、角閃石、 輝石、シロ岩片	にぶい黄橙	橙	良好		5.2	2.8	5787 5789	
	111	G-16	IV		深鉢	底	無文	ナデ	石英、長石、角閃石、 輝石、シロ岩片	にぶい黄橙	橙	良好		6.4	7.3	7330	
	112	G-16	IV		深鉢	底	無文	ナデ	石英、長石、角閃石、 輝石、シロ岩片	橙	にぶい橙	良好		8.6	3.4	5873	
	113	E-15	IV		深鉢	底	無文	ナデ	石英、長石、角閃石、 輝石、シロ岩片	にぶい黄橙	黄橙	良好		6.0	5.7	5922	
39	114	D-17	IV		浅鉢	口縁	研磨	研磨	長石、角閃石、輝石	暗赤褐	にぶい赤褐	良好	9.9		4.6	一括	
	115	E-15	IV		浅鉢	口縁	研磨	研磨	長石、輝石、シロ岩片、 アカ岩片	明黄褐	にぶい黄橙	良好			2.3	5744	
	116	E-15	IV		浅鉢	頸	研磨	研磨	長石、角閃石、シロ岩片	にぶい橙	黒褐	良好			2.2	5749	
	117	D-14	IV上		浅鉢	頸?	研磨	研磨	長石、シロ岩片	にぶい黄橙	黒褐	良好			2.4	5732	
	118	G-16	IV		浅鉢	口縁～胴	研磨	研磨	長石、シロ岩片	赤褐	黒褐	良好	32.4		7.3	7425 7426 7431 7432 4733	1号住
	119	B-5	Ⅶ		浅鉢	頸	研磨	研磨	長石、輝石、シロ岩片	褐	にぶい褐色	良好	15.2 (頸)		3.2	7068	

第6表 縄文時代石器観察表

挿図No.	報告No.	出土区	層位	器 種	石材	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	取上No.	備考
18	48	C-6	Ⅶ	石鏃	玉髄	31.5	17.0	4.0	1.60	8142	
	49	C-4	Ⅶ	石鏃	黒曜石	13.5	13.5	3.0	0.49	259	
	50	D-5	Ⅶ	石鏃	頁岩	16.0	9.0	3.4	0.49	6988	
	51	B-3	Ⅶ	石鏃	ob姫島	12.5	11.5	25.0	0.23	7784	
	52	B-3	Ⅶ	石鏃	ob姫島	10.0	14.5	35.0	0.43	7831	
	53	C-4	Ⅷ	石鏃	黒曜石	19.5	15.0	3.2	1.01	7353	
	54	B-6	Ⅶ	石鏃	玉髄	24.0	20.0	5.0	1.58	8153	
	55	B-3	Ⅶ	石鏃	ob姫島	20.0	15.0	5.5	1.40	7886	
19	56	D-4	Ⅶ	石鏃	頁岩	35.0	24.0	9.0	6.88	6972	
	57	B-3	Ⅶ	磨製石斧	頁岩	87.0	58.5	18.0	116.84	7862	
	58	C-4	Ⅶ	磨製石斧	頁岩	46.0	44.0	5.1	5.50	7478	
	59	C-3	Ⅶ	局部磨製石斧	頁岩	75.0	44.0	22.5	98.95	7709	
	60	D-4	Ⅶ	局部磨製石斧	頁岩	123.0	40.0	13.0	77.38	6963	
20	61	B-4	Ⅶ	局部磨製石斧	頁岩	123.5	63.0	25.0	225.57	7167	
	62	D-5	Ⅶ	局部磨製石斧	頁岩	111.0	62.5	27.0	178.44	6946	
21	63	C-4	Ⅶ	局部磨製石斧	頁岩	55.0	68.5	7.5	20.39	292	
	64	C-4	Ⅶ	石匙	頁岩	45.0	83.5	10.5	28.39	7446	
22	65	F-13	Ⅷ	石匙	玉髄	36.0	52.0	12.5	13.17	308	
	66	B-5	Ⅶ	礫	凝灰岩	121.5	93.0	35.0	430.00	7082	
	67	D-5	Ⅶ	凹石	凝灰岩	87.0	76.5	41.0	332.96	6949	
	68	C-4	Ⅶ	敲石	凝灰岩	72.0	68.0	52.0	360.00	7028	
	69	B-5	Ⅶ	磨・敲石	安山岩	101.0	93.0	51.0	670.00	7067	
	70	B-3	Ⅶ	敲石	凝灰岩	83.0	83.0	53.0	460.00	7815	
	71	C-3	Ⅶ	磨・敲石	砂岩	110.0	81.0	51.0	540.00	7363	
	72	C-3	Ⅶ	敲石	凝灰岩	83.0	64.5	46.0	440.00	7720	
23	73	C-4	Ⅶ	磨・敲石?	凝灰岩	51.0	43.0	41.0	117.49	7263	
	74	C-4	Ⅶ	石皿	花崗岩	259.0	187.0	47.0	2920.00	7352	
	75	B-2	Ⅶ	角礫(石皿)	凝灰岩	175.0	206.0	31.0	1280.00	7834	
24	76	B-4	Ⅶ	軽石製品	軽石	182.0	63.0	24.0	43.24	7138	
	77	D-5	Ⅶ	軽石製品	軽石	200.0	118.0	38.0	289.56	6950	
	78	B-3	Ⅶ	軽石製品	軽石	52.0	57.0	19.0	12.57	8092	
	79	B-4	Ⅶ	軽石製品	軽石	89.0	72.0	39.0	65.01	7109	
	80	B-3	Ⅶ	軽石製品	軽石	104.0	83.0	44.0	109.19	7769	
	81	B-3	Ⅶ	軽石製品	軽石	120.0	101.0	78.0	214.30	7846	
	82	B-3	Ⅶ	軽石製品	軽石	125.5	89.0	85.0	171.65	7774	
	83	C-4	Ⅶ	軽石製品	軽石	125.0	98.0	46.0	305.00	263	
25	84	B-3	Ⅶ	軽石製品	軽石	234.0	218.0	90.0	1100.00	7762	
	85	B-4	Ⅶ	軽石製品	軽石	238.0	146.0	123.0	798.00	7205	
	86	C-4	Ⅶ	軽石製品	軽石	143.0	216.0	79.0	780.00	7020	
40	120	F-16	Ⅳa	石鏃	ob姫島	19.0	16.0	4.5	1.37	7406	1号住
	121	G-13	Ⅳ	石鏃	黒曜石	14.0	15.0	30.0	0.46	5996	
	122	B-5	Ⅲ下	石鏃	黒曜石	16.0	12.0	3.0	0.47	5412	
	123	F-13	Ⅳ	石鏃	ob姫島	13.0	9.0	3.0	0.27	6697	
	124	C-3	Ⅳ	石鏃	黒曜石	24.0	20.0	3.5	0.84	4928	
	125	F-15	表採	石鏃	黒曜石	17.0	14.0	2.5	0.43		
	126	F-13	Ⅳ	石鏃	ob姫島	14.0	13.0	3.5	0.37	8077	
	127	E-15	Ⅳ	石鏃	黒曜石	22.0	10.0	3.8	0.69	一括	
	128	F-13	Ⅳ	石鏃	ob姫島	22.0	16.0	4.0	0.95	7489	
	129	D-16	Ⅳ	局部磨石石斧	玉髄	78.0	47.0	21.0	92.41	5822	
41	130	F・G-16	Ⅳa	敲石・凹石	砂岩	67.0	95.0	55.0	565.00	7378	1号住
	131	F-13	Ⅳ	磨石	凝灰岩	106.0	87.0	46.0	650.00	7896	
	132	F-13	Ⅳ	磨・敲石	砂岩	55.0	50.0	23.0	85.99	6658	
	133	F-3	Ⅳ	凹石	安山岩	115.0	83.0	42.0	510.00	8103	
	134	E-16	Ⅳ	磨・敲石	砂岩	131.0	125.0	50.0	1100.00	8004	
	135	F-13	Ⅳ	磨・敲石	安山岩	37.0	65.0	27.0	86.59	6337	

4 奈良・平安時代

(1) 分布状況

この時期の遺物の出土層は主に第Ⅲb層で、第42図はその出土状況である。

地形はD－4・5区、B－2区、B・C－6区を頂点とした三角形の皿状になり、C－4区が最も低く291.6mで窪みの中心があり、東側は292.1m、西側は292.3mに高くなっている。

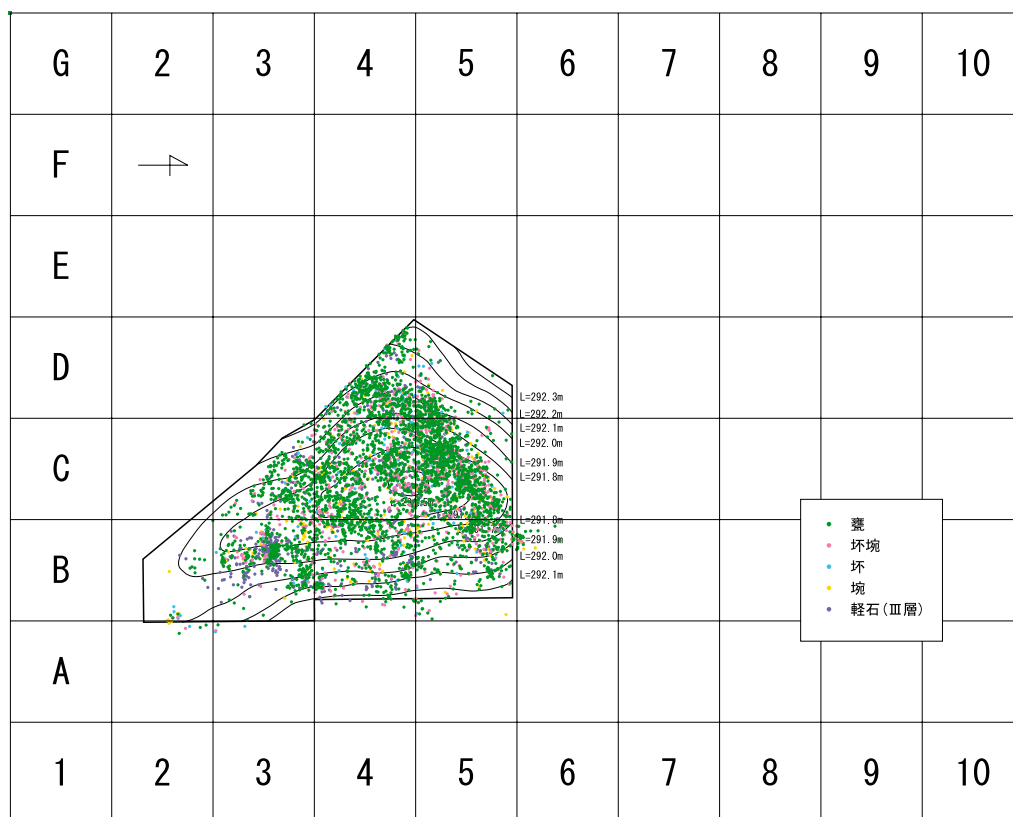
遺物はこの三角形皿状地形の底部に集中して出土している。甕は北側に帯状で検出し、南側は薄い特徴がみられる。坏・埴類はB・C－3・4区、C・D－4・5区、B－5区等に集中して出土している状況である。軽石はB－3・4区に出土し、これらは軽石集石遺構との関係がみられる。

(2) 遺構

遺構は掘立柱建物跡が4棟、軽石集石遺構2ヶ所、焼土跡、その他のピット等が検出している。第43・44図はその検出状況である。

掘立柱建物跡1号はB・C－5区に、掘立柱建物跡2号はB・C－6区に、掘立柱建物跡3号はC－6区に桁軸が北西・南東方向でみられる。掘立柱建物跡4号はB－3区に桁軸が北・南方向でみられる。

焼土跡はD－4区に、ピットはC－5区に、軽石集石1号はB－5区に、軽石集石2号はB－3区にそれぞれ検出している。



第42図 奈良・平安時代の出土状況



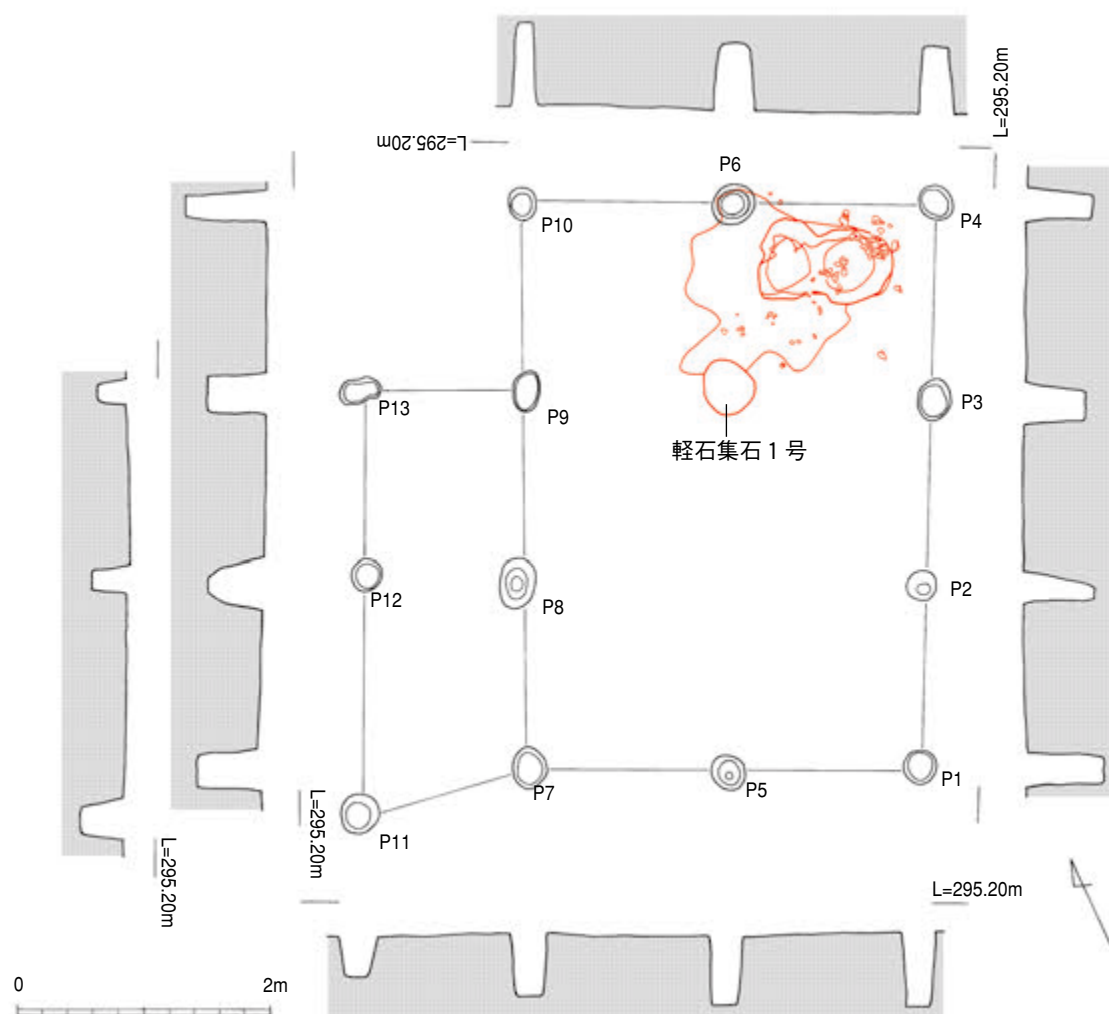
第43図 奈良・平安時代の遺構配置

掘立柱建物跡 1 号（第44図）

本遺構はB－5区に検出し、梁間が2間、桁行が3間の上屋で、西側に梁間半間、桁行間2間強の下屋を付けている掘立柱建物跡である。なお、桁行の方向は東24°である。

上屋の梁間は1.52～1.70m、桁行間は1.47～1.57m、下屋の梁間は1.25～1.38m、桁行間は1.46～1.93mである。全体的に不揃いであり、特に下屋の柱間が広い。

柱穴の長径は28～40cmで、短径は18～32cm、深さは31～67cmである。



第44図 奈良・平安時代の掘立柱建物跡 1 号

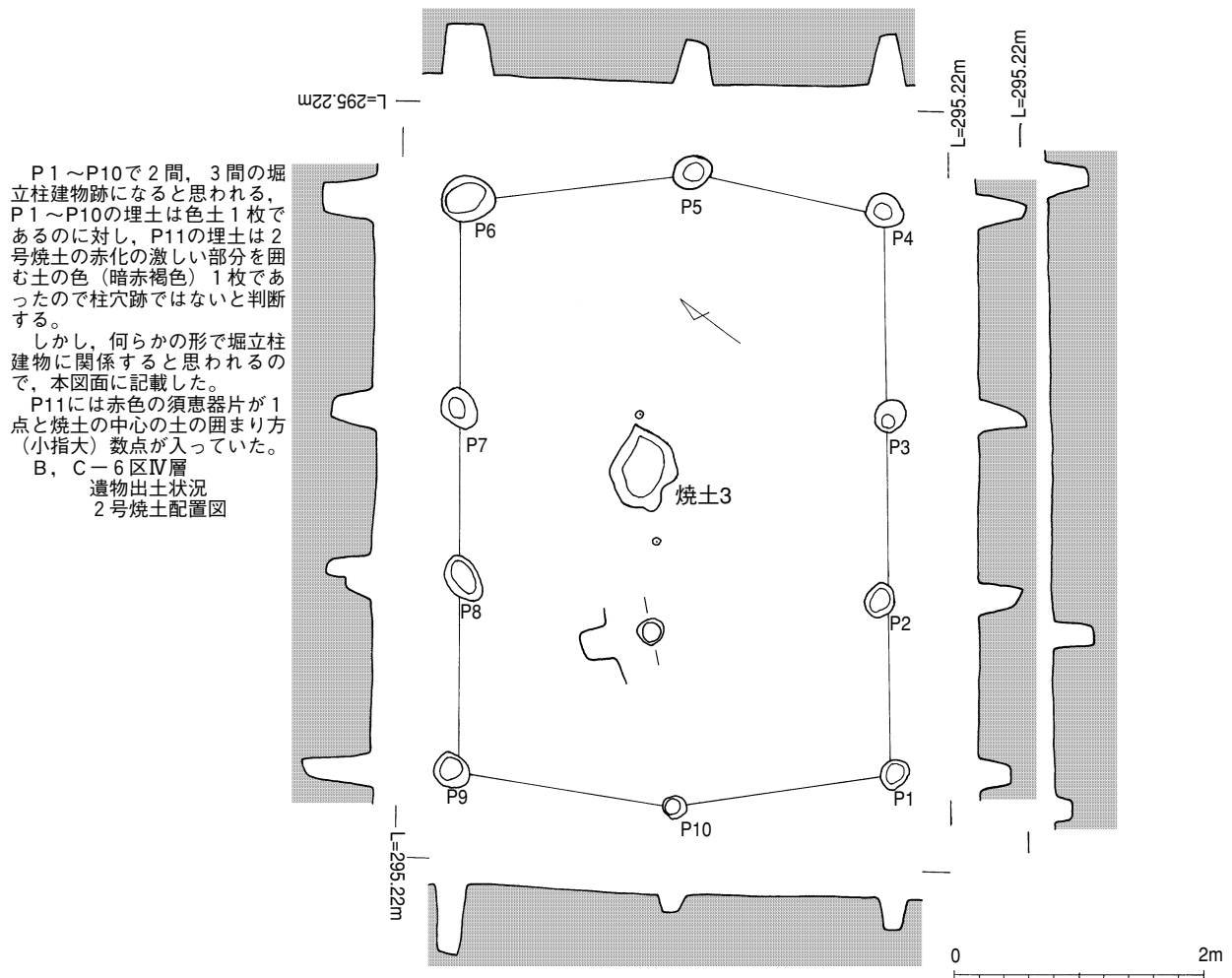
第 7 表 掘立柱建物跡 1 号の計測

建物	梁間間		桁行間		上屋梁間	下屋梁間	上屋桁行	下屋桁行	検出区
SH 1	北側上屋2間	北側下屋半間	東側上屋3間	西側下屋2間	3.31m	1.25m	4.51m	3.39m	B・C-5
	南側上屋2間	南側下屋半間	西側上屋3間		3.14m	1.38m	4.54m		方位 E 24°
上屋梁間柱間		下屋梁間柱間		上屋桁行柱間		下屋桁行柱間		柱穴の長径×短径×深さ(cm)	
P 1～5	1.52m	P 7～11	1.38m	P 1～2	1.47m	P 11～12	1.93m	P 1. 28×27×62	
5～7	1.62	9～13	1.25	2～3	1.47	12～13	1.46	2. 25×24×57	
4～6	1.61			3～4	1.57			3. 34×27×53	
6～10	1.70			7～8	1.48			4. 30×27×53	
				8～9	1.54			5. 30×26×53	
				9～10	1.52			6. 34×32×67	
								7. 34×28×48	
								8. 40×28×45	
								9. 33×22×51	
								10. 27×22×23	
								11. 32×31×31	
								12. 26×24×34	
								13. 34×18×56	

掘立柱建物跡 2 号（第45図）

本遺構はB－6区に検出し、梁間が2間、桁行が3間の掘立柱建物跡である。桁行の方向は東53°で、梁間は1.58～1.88m、桁行間は1.42～1.67mである。

柱穴の長径は21～40cmで、短径は17～37cm、深さは14～58cmである。



第45図 奈良・平安時代の掘立柱建物跡 2 号

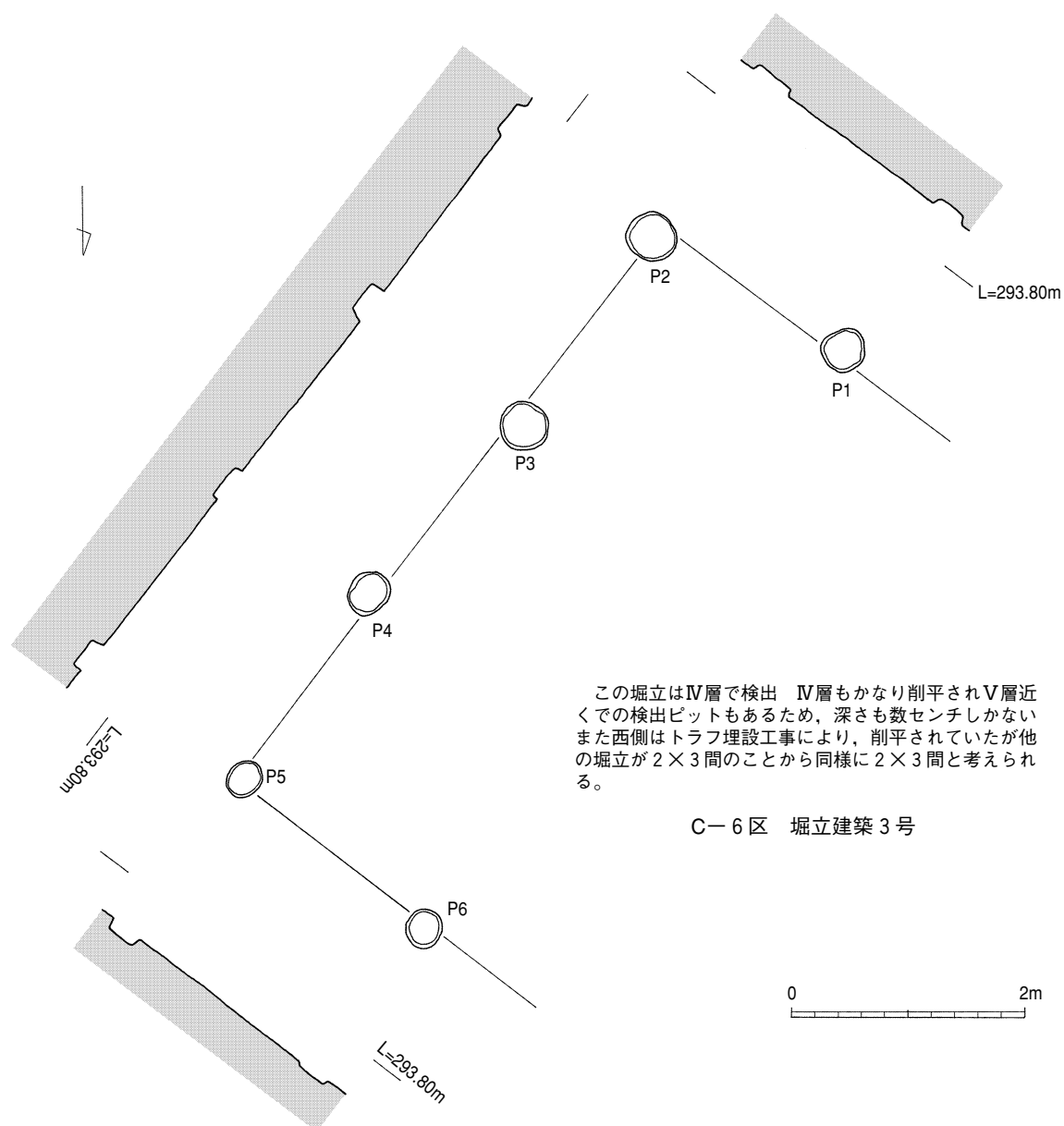
第 8 表 掘立柱建物跡 2 号の計測

建物	梁間間	桁行間	上屋梁間	下屋梁間	上屋桁行	下屋桁行	検出区
SH 2	東側上屋2間	北側上屋3間	3.46m	m	4.63m	m	B・C-6
	西側上屋2間	南側上屋3間	3.52m	m	4.54m	m	方位 E 53°
上屋梁間柱間		下屋梁間柱間	上屋桁行柱間		下屋桁行柱間		柱穴の長径×短径×深さ(cm)
P 1～10	1.79m		P 1～2	1.42m			P 1. 25×24×25
9～10	1.73		2～3	1.48			2. 29×25×36
4～5	1.58		3～4	1.63			3. 28×23×39
5～6	1.88		6～7	1.67			4. 30×28×40
			7～8	1.38			5. 32×27×36
			8～9	1.58			6. 43×37×41
							7. 35×28×36
							8. 40×27×36
							9. 30×28×58
							10. 21×17×14
							11. 23×21×32

掘立柱建物跡 3 号（第46図）

本遺構はC－6区に検出し、梁間が推定2間、桁行が3間の掘立柱建物跡である。桁行の方向は東52°で、梁間は1.87～2.50m、桁行間は1.96～1.97mである。

柱穴の長径は34～40cmで、短径は28～41cm、深さは6～12cmである。



第46図 奈良・平安時代の掘立柱建物跡 3号

第9表 掘立柱建物跡 3号の計測

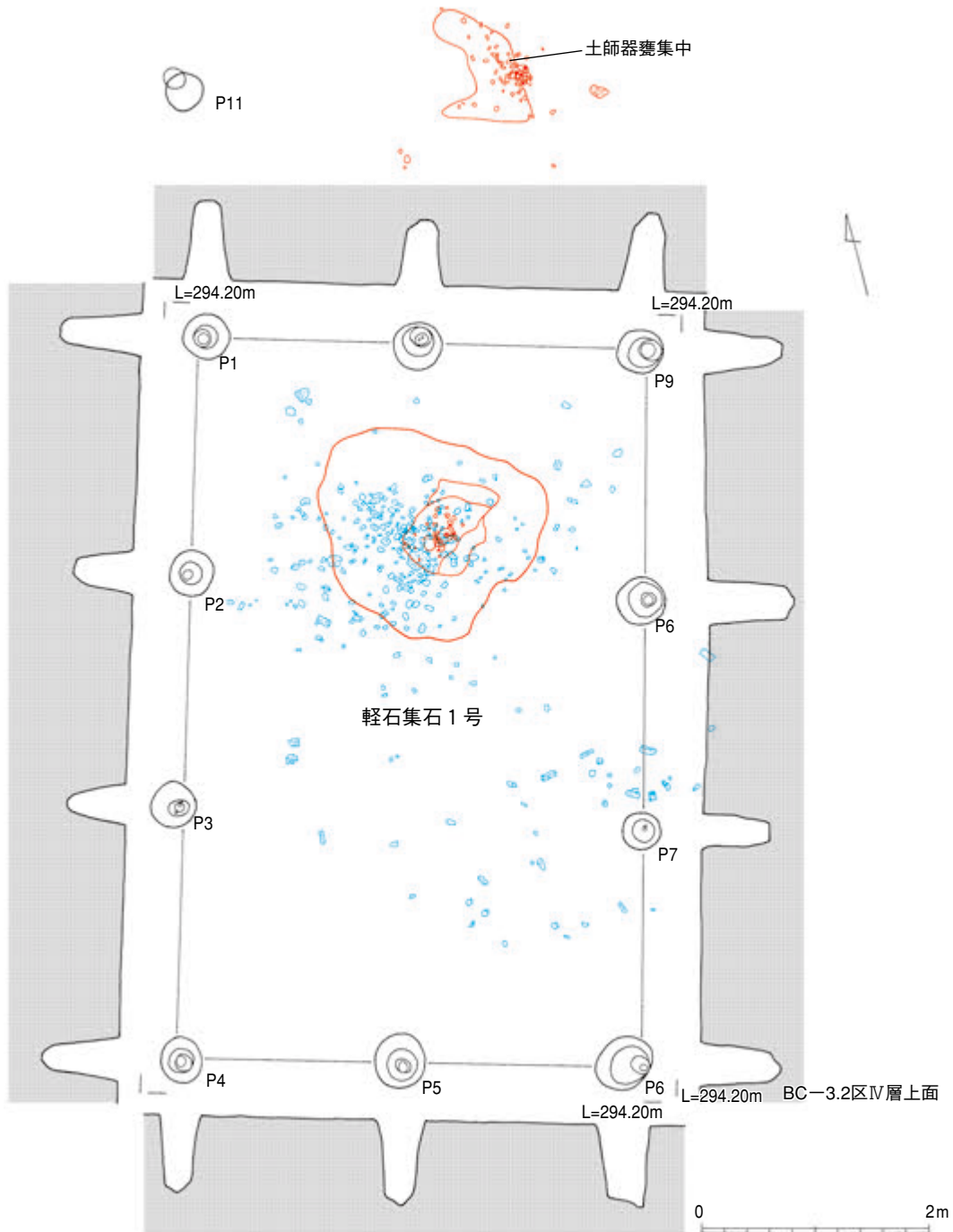
建物	梁間間		桁行間		上屋梁間	下屋梁間	上屋桁行	下屋桁行	検出区
SH 3	北側上屋1間		東側上屋3間		2.50m	m	5.90m	m	C-6
	南側上屋1間				1.87m	m	m	m	方位 E 52°
上屋梁間柱間		下屋梁間柱間		上屋桁行柱間		下屋桁行柱間		柱穴の長径×短径×深さ(cm)	
P 1～2	1.87m			P 2～3	1.96m			P 1. 40×35×9	
5～6	2.50			3～4	1.97			2. 45×41×7	
				4～5	1.97			3. 44×43×12	
								4. 40×33×7	
								5. 35×28×10	
								6. 34×30×6	

掘立柱建物跡 4 号（第47図）

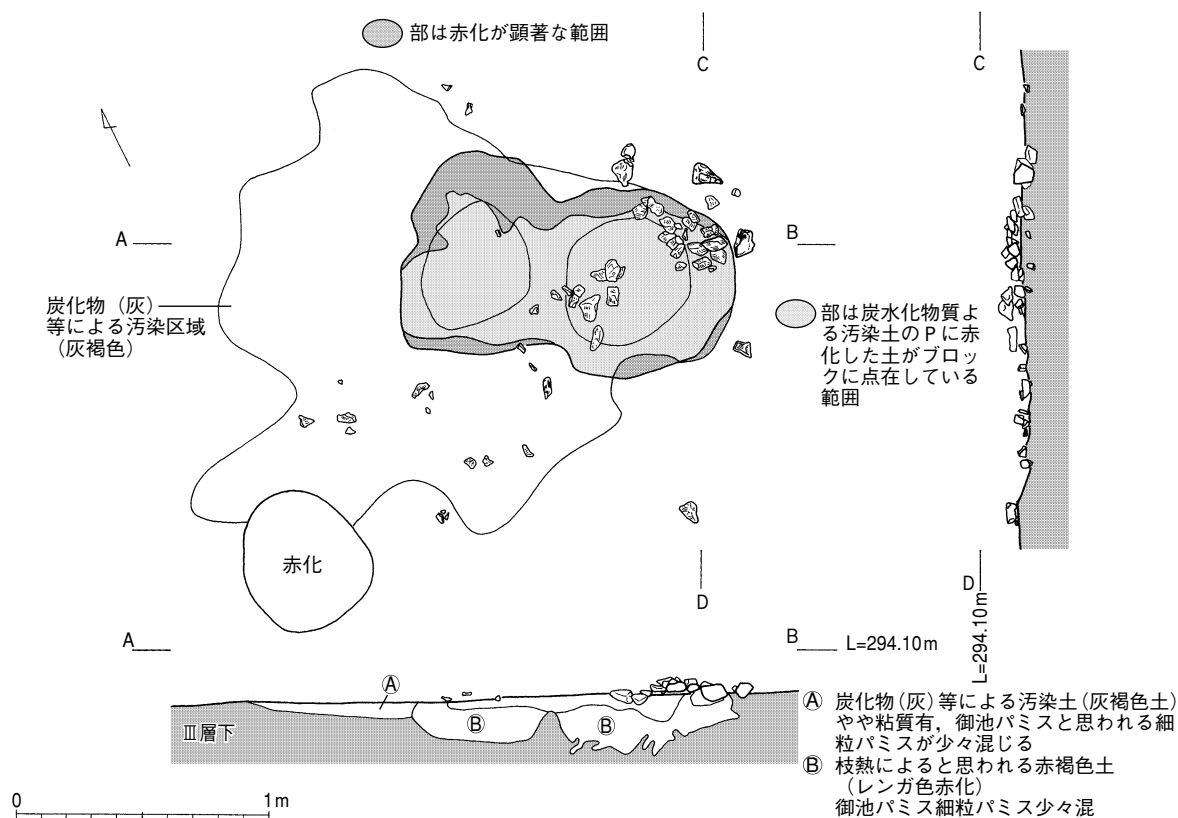
本遺構は、B－3区に検出し、梁間が2間、桁行が3間の掘立柱建物跡である。桁行の方向は東15°で、梁間は1.91～2.12m、桁行間は2.05～2.23mである。

柱穴の長径は41～50cmで、短径は32～45cm、深さは52～77cmである。

この掘立柱建物跡には焼土と割れた軽石散乱していた、これは供伴関係強いと考えられ、土間の可能性が高い。



第47図 奈良・平安時代の掘立柱建物跡 4 号



第48図 奈良・平安時代の軽石集石 1 号

第10表 掘立柱建物跡 4 号の計測

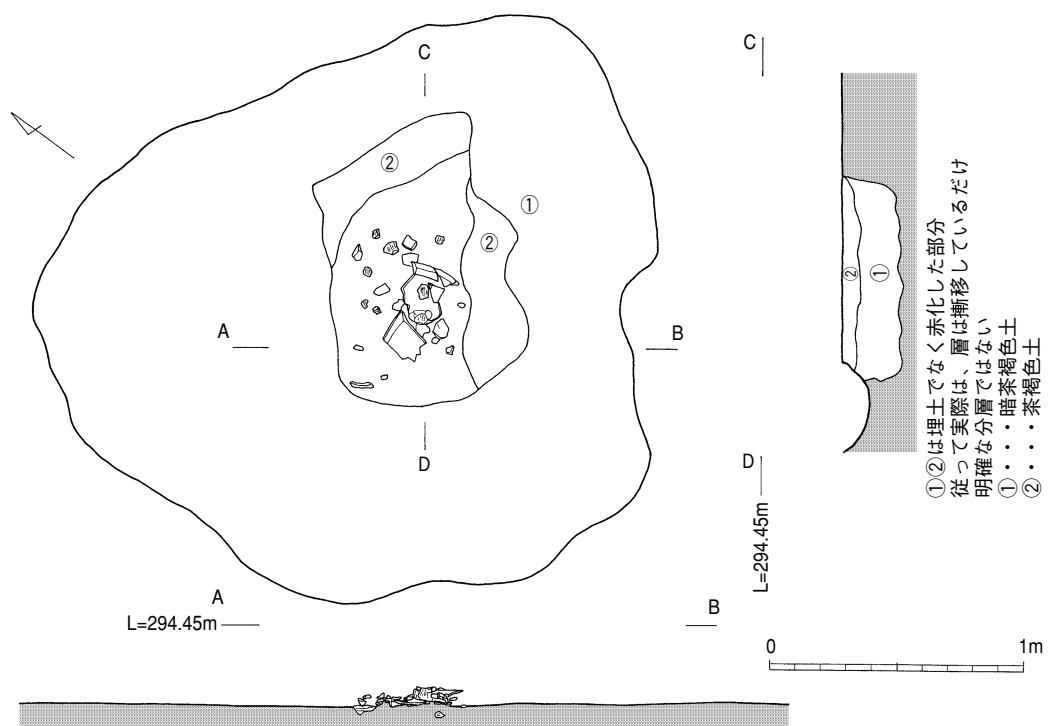
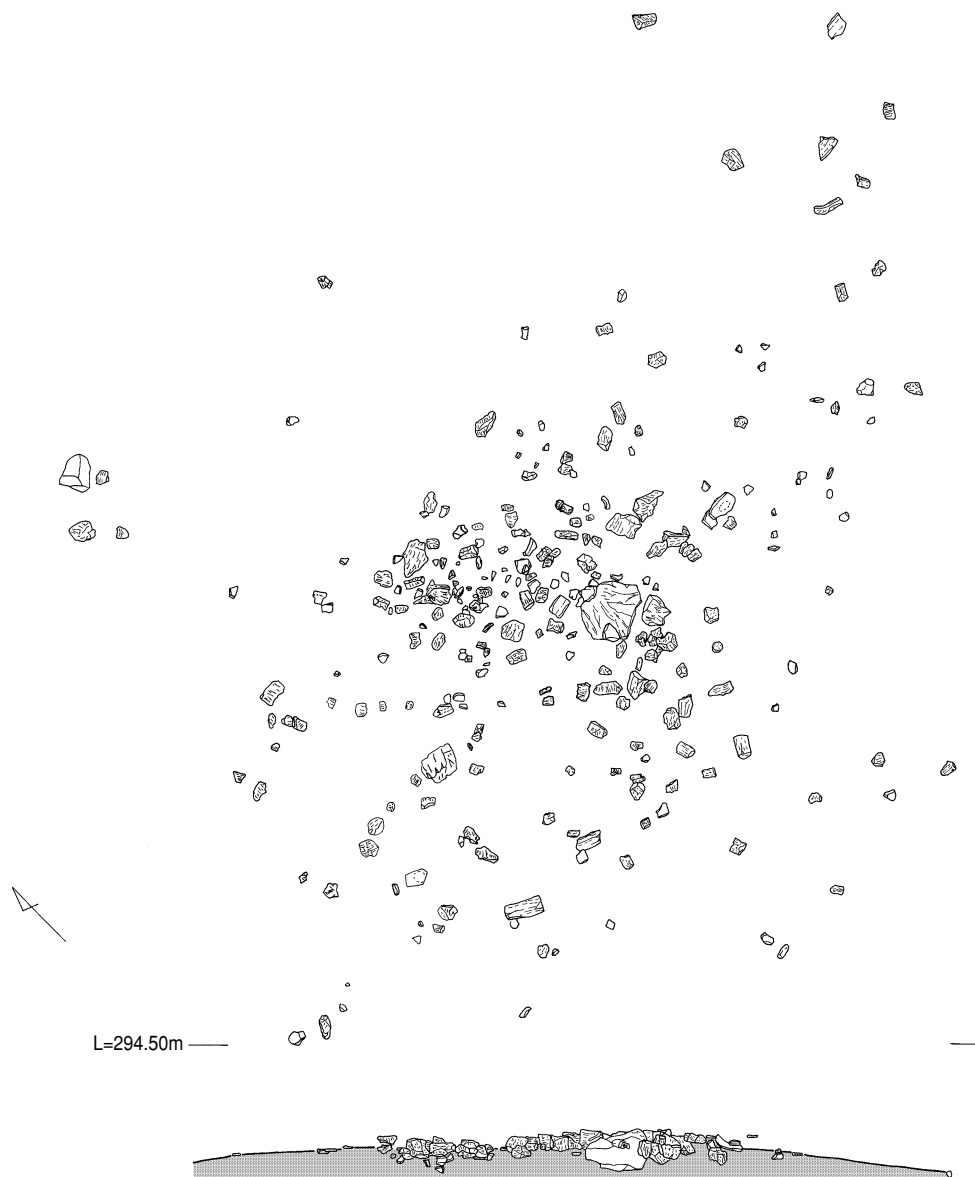
建物	梁間間	桁行間	上屋梁間	下屋梁間	上屋桁行	下屋桁行	検出区
SH 4	北側上屋2間	東側上屋3間	3.99m	m	6.44m	m	B-3
	南側上屋2間	西側上屋3間	4.12m	m	6.42m	m	方位 E 15°
上屋梁間柱間		下屋梁間柱間		上屋桁行柱間		下屋桁行柱間	
P 1 ~ 10	1.91m			P 1 ~ 2	2.10m		P 1. 43×39×70
9 ~ 10	2.08			2 ~ 3	2.05		2. 41×38×55
4 ~ 5	2.00			3 ~ 4	2.27		3. 42×39×52
5 ~ 6	2.12			6 ~ 7	2.12		4. 40×36×68
				7 ~ 8	2.09		5. 50×45×75
				8 ~ 9	2.23		6. 50×45×73
							7. 35×32×59
							8. 43×42×77
							9. 42×41×70
							10. 44×42×59

軽石集石 1 号（第48図）

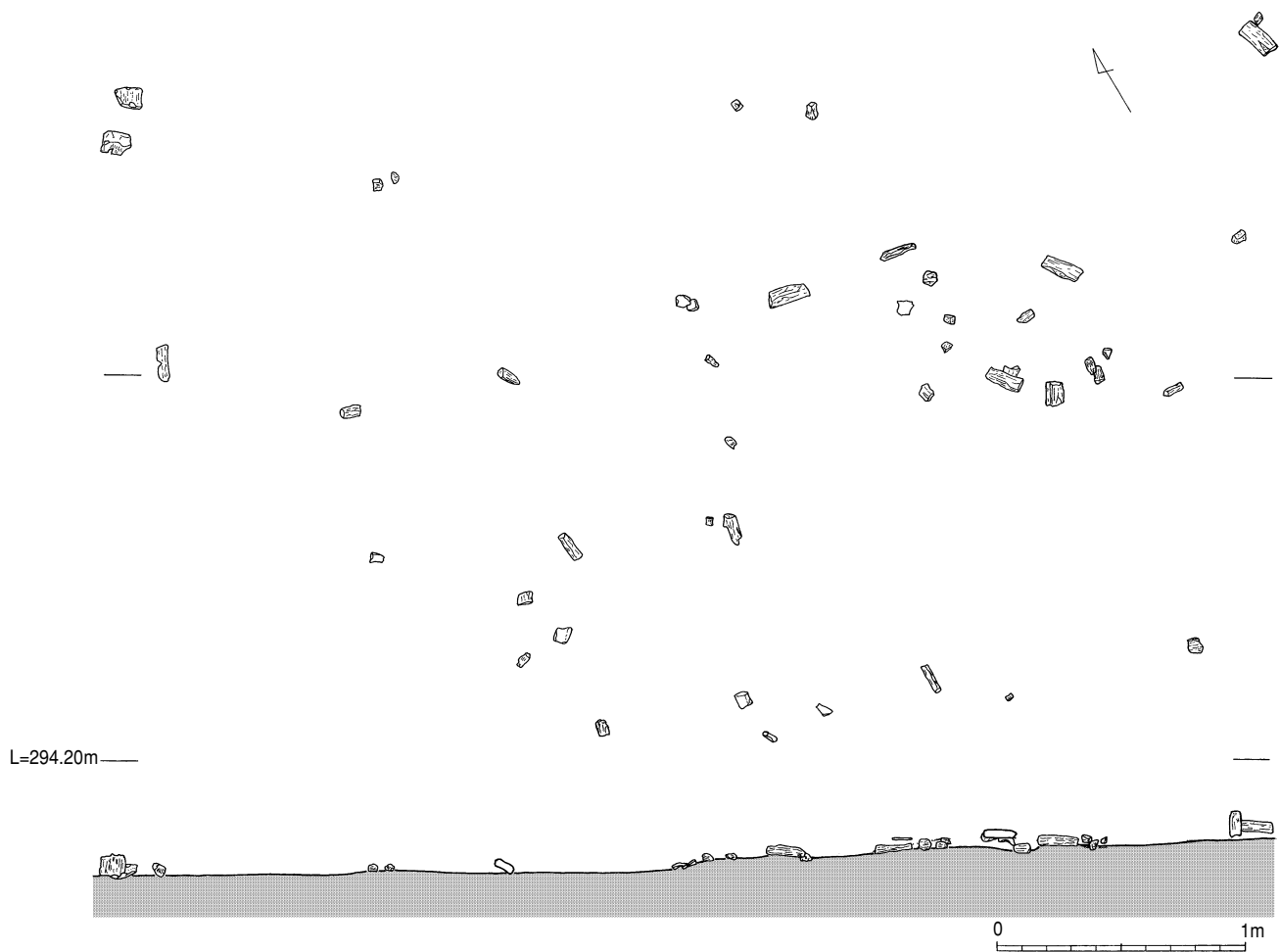
本遺構はB－5区の掘立柱建物跡1号の東北角に焼土跡とセットで検出している。

焼土跡の大きさは1.3m×0.75mで、二つの円が接した達磨形をしている。その円は赤色の強い10～15cmのベルトが輪になり、中部はピンク状に変色している。その焼土跡の上には炭が散乱し、東側に軽石集積がみられる。

軽石群は大きな軽石がブロック状に割れたもので、一部赤化している。焼土が2ヶ所にわかれているが、東側の焼土の上に散乱しており、東側部が後からの施設と考えられる。



第49図 奈良・平安時代の軽石集石 2号(1)



第50図 奈良・平安時代の軽石集石 2号(2)

軽石集石 2号（第49・50図）

本遺構はB-3区に検出し、掘立柱建物跡4号の北部に検出されている。下面には約2.5mの赤化した暗茶褐色の焼土がみられ、中央部には土師器甕形土器が1個体検出している。なお、焼土は2段階に変色し、上部の暗茶褐色土の下に茶褐色土がみられる。

軽石集石は焼土の上の径2.5mを中心に、南側約5mまで散布している。

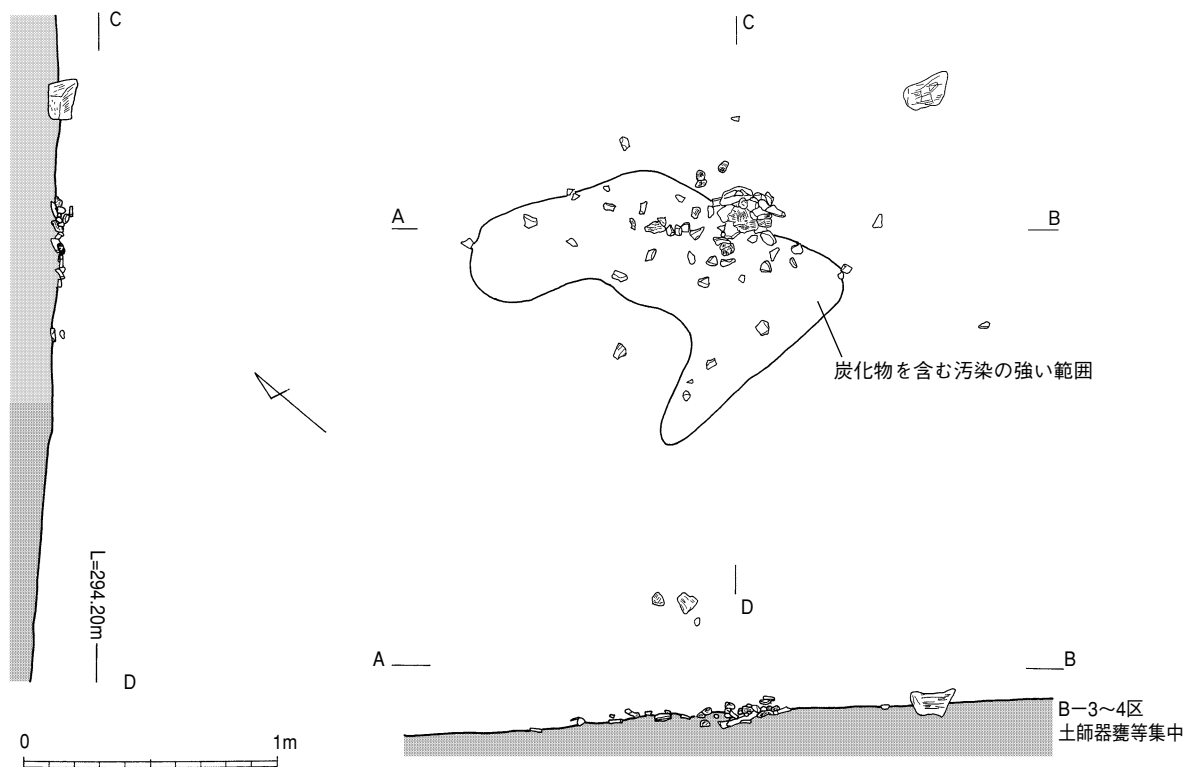
この軽石は遺物の方で説明するが、棒状に割れているのが目に付くが、これらの軽石群は、約30cmの加工された赤色化した軽石と、整形された両面が赤化している状況で火を受けて割れた軽石、コア状に割れた軽石がみられる。

よって、下部の焼土と軽石群はセットとして考えて良い。

また、掘立柱建物跡とは位置的にセットとして考えられ、建物自体は土間である可能性が高い。

土師器集中ヶ所（第51図）

土器集中ヶ所はB-3・4区に掘立建物跡4号の北側で、梁間に面して検出した。近くには軽石があるが掘込みはない。土師器の甕形土器口縁部が下になりつぶれた状態で出土した。その範囲に炭化物を含む汚染した範囲がみられる。



第51図 土師器甕等集中出土状況

ピット（第52図）

ピット1号

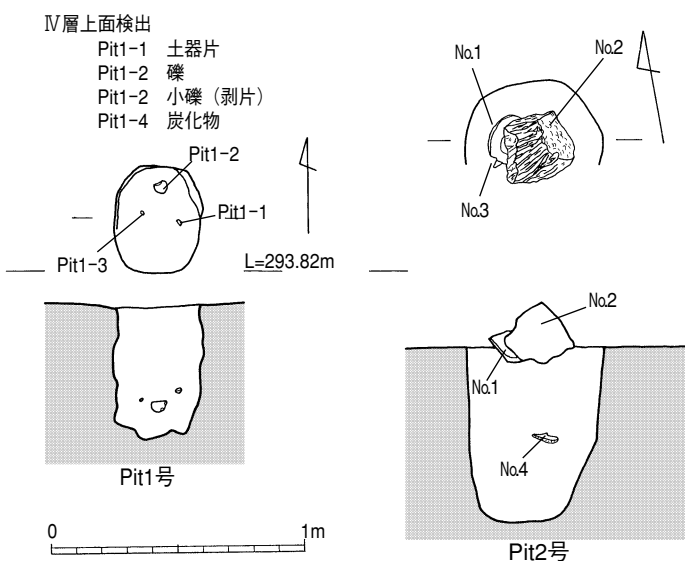
この遺構は掘立建物跡2号の注穴5号にあたる。この中には、土師器片、礫、小礫、炭化物が入っている。意図的に混入させたか不明である。

ピット2号

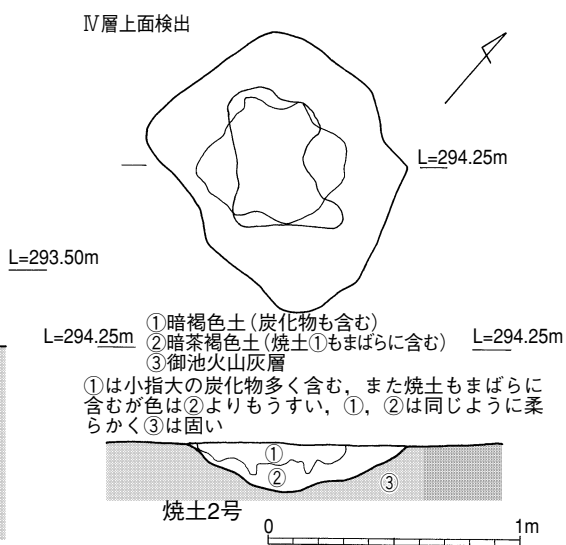
軽石がピットの上面にあり、中央に土師器がみられる。

焼土跡（第53図）

D-4区に検出し、径は約1mでやや窪みがみられる形状をしている。表面には赤化した部分が輪状にみられる。



第52図 ピット検出状況



第53図 焼土検出状況

3 遺物

甕形土器（第54～57図）（136～190）

136は口唇部がやや薄くなり、頸部で丸みを持ちながら外反する口縁部で、胴部がやや膨らみを持つ器形である。器面調整は外面が縦位と横位の刷毛目、内面は篋削りが斜位にみられる。137は頸部が「く」の字状に折れ、胴部がやや膨らみをもつ器形である。器面調整は外面が横位の刷毛目で、内面が斜位と横位の篋削りである。138は頸部が「く」の字状に折れ、胴部の膨らみがなく、底部は尖り気味の丸底である。器面調整は外面が横位と縦位の刷毛目で、内面が斜位と底部では横位の篋削り調整がみられる。139は頸部で丸みを持ちながら外反する口縁部を持つ土器である。器面調整は刷毛目と篋削りである。140～148は外反する口縁部である。器面調整は刷毛目調整で、内面に篋削りがみられるものもある。

149は頸部が「く」の字状に折れ、胴部の膨らみがない土器である。器面調整は外面が横位と斜位の刷毛目で、内面が斜位の篋削りである。150～154は外反する口縁部である。器面調整は刷毛目調整で、内面に篋削りがみられるものもある。155は頸部が「く」の字状に折れ、器面調整は外面が横位の刷毛目で、内面が斜位の篋削りである。156は頸部が「く」の字状に折れ、器面調整は外面が横位の刷毛目で、内面が縦位に近い斜位の篋削りである。157は頸部が「く」の字状に折れ、器面調整は外面が横位の刷毛目で、内面が斜位の篋削りである。158は頸部が「く」の字状に折れ、器面調整は外面が横位の刷毛目で、内面が縦位に近い斜位の篋削りである。159は頸部が「く」の字状に折れ、器面調整は外面が横位の刷毛目で、内面が斜位の篋削りである。160～164は頸部が「く」の字状に折れ、器面調整は外面が横位の刷毛目で、内面が篋削りである。

165～168は口唇部が薄く断面が尖る口縁部である。器形は頸部が浅く「く」の字状に折れ、器面調整は外面が横位の刷毛目で、内面が斜位の篋削りである。169・170は口縁部の長さが短いタイプで、170は鉢の器形である。器面調整は外面が横位の刷毛目で、内面が斜位の篋削りである。171は170のタイプであるが、口縁部が長いものである。器形は頸部が浅く「く」の字状に折れ、器面調整は外面が横位の刷毛目で、内面が斜位の篋削りである。なお、178は縦位の篋削りである。

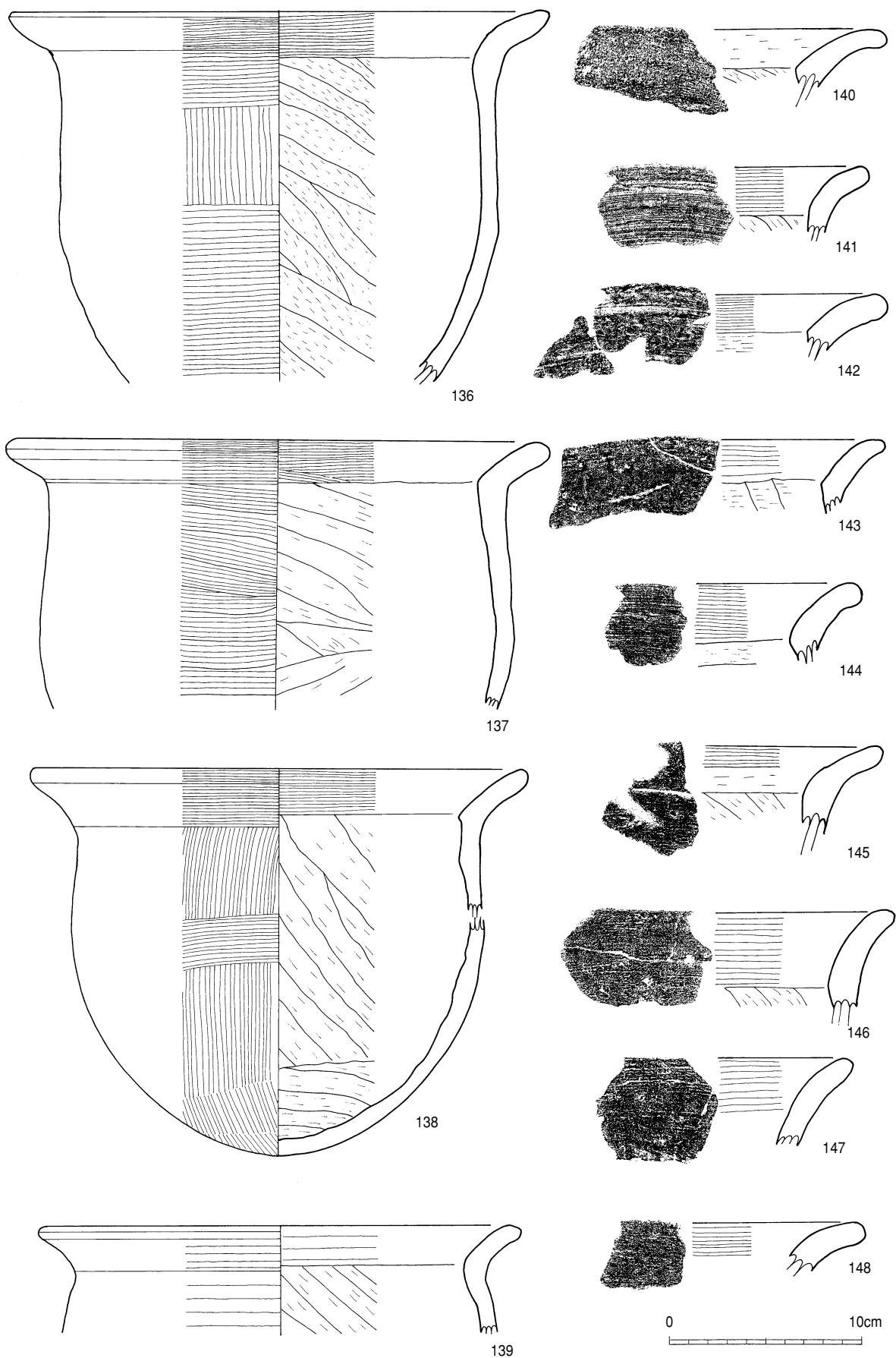
179～185の器形は頸部が浅く「く」の字状に折れ、器面調整は外面が横位の刷毛目で、内面が斜位の篋削りである。186は丸みの器形をもつ口縁部である。器面調整は外面が横位の刷毛目で、内面が斜位の篋削りである。187は胴部で、内面に篋削りがみられる。188～190は丸底の底部である。外面は刷毛目調整で、内面は篋削りである。

坏（第58図）（191～225）

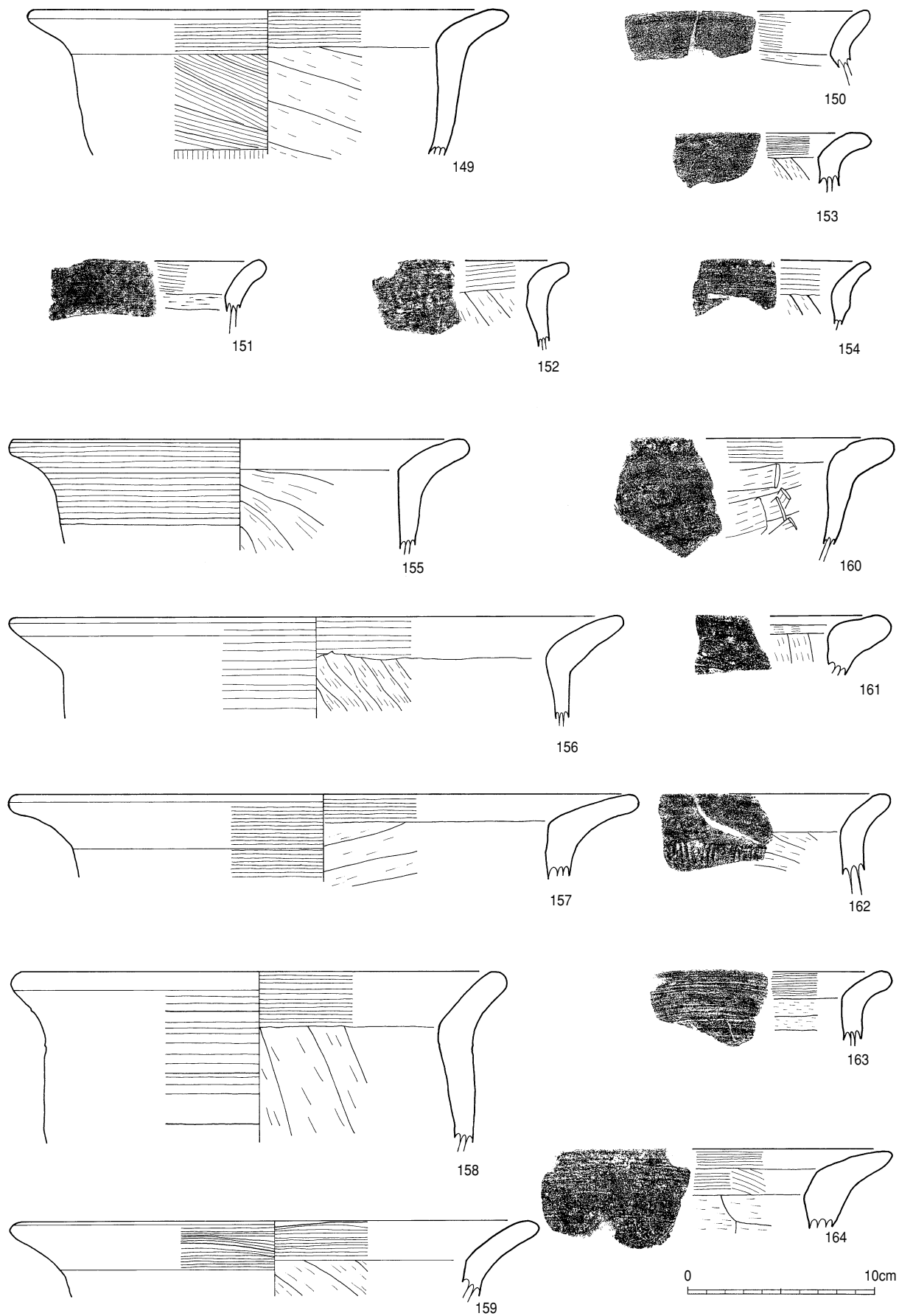
坏は篋切り後の底部の断面がややみ出し段をもつタイプである191～207とはみ出さずに段がないタイプ208～225に分けられる。

段をもつタイプの中で191～201は底部から口縁部までであるものである。底部は篋切り離しで、坏口縁部への立ち上がりは直線的に開いている191～196とやや外反している197～199に分けられる。

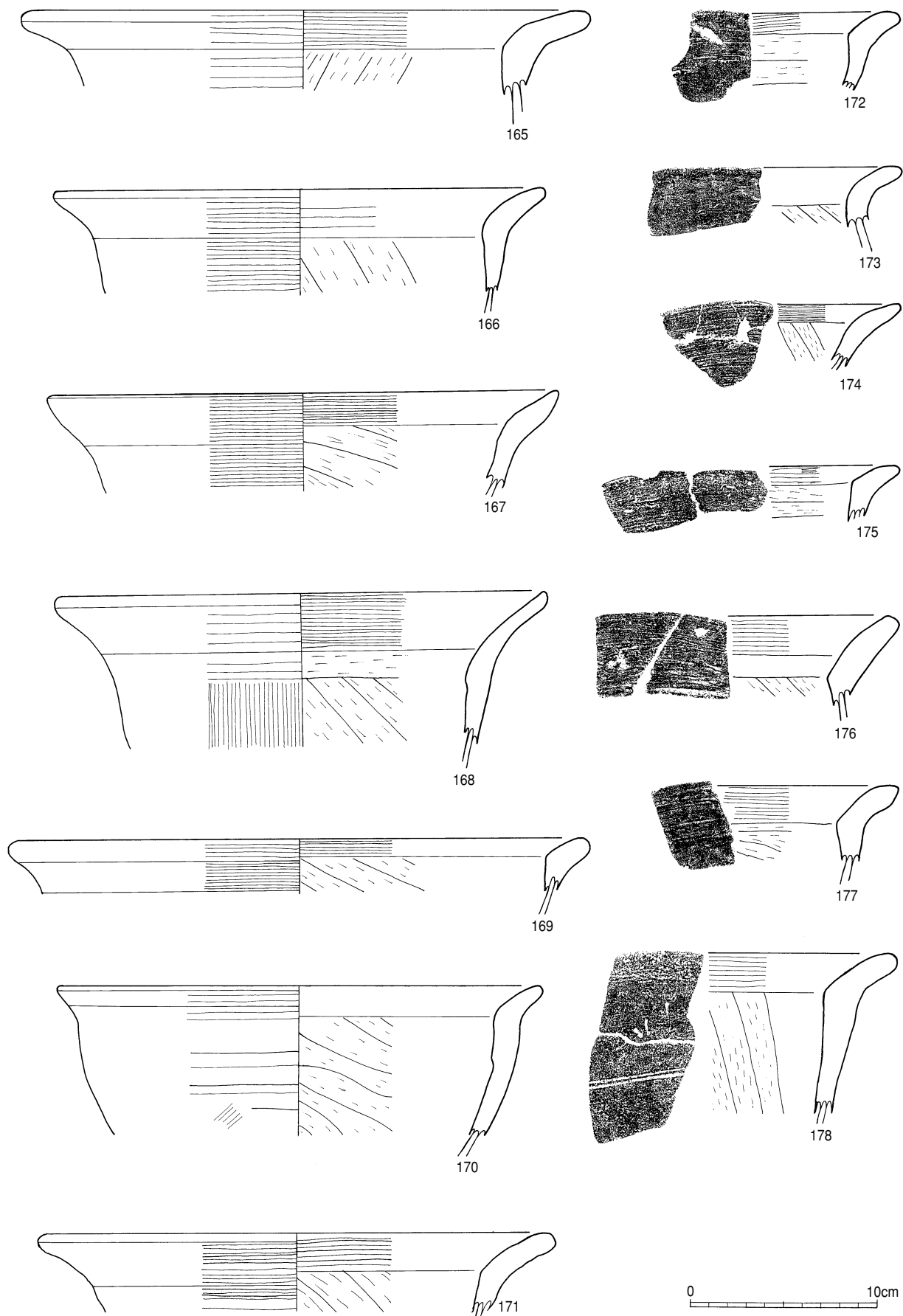
段を持たないタイプの中で208～213が底部から口縁部までであるものである。立ち上がりは、底部から直線的にみられるものが多く、209と213が立ち上がりが内湾状にみられる。底部の特徴としては215と224が厚い。



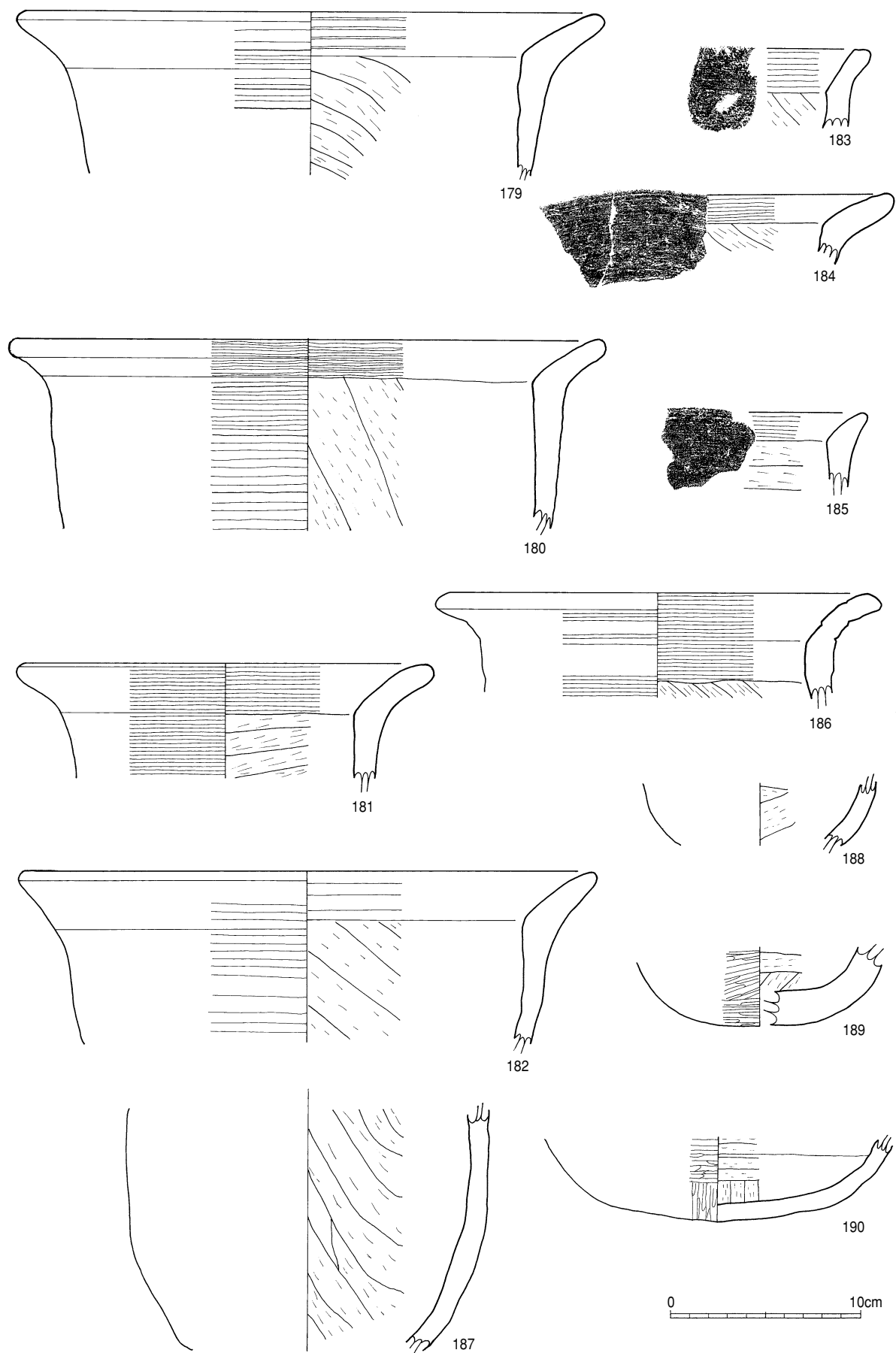
第54図 奈良・平安時代出土遺物(1)甕



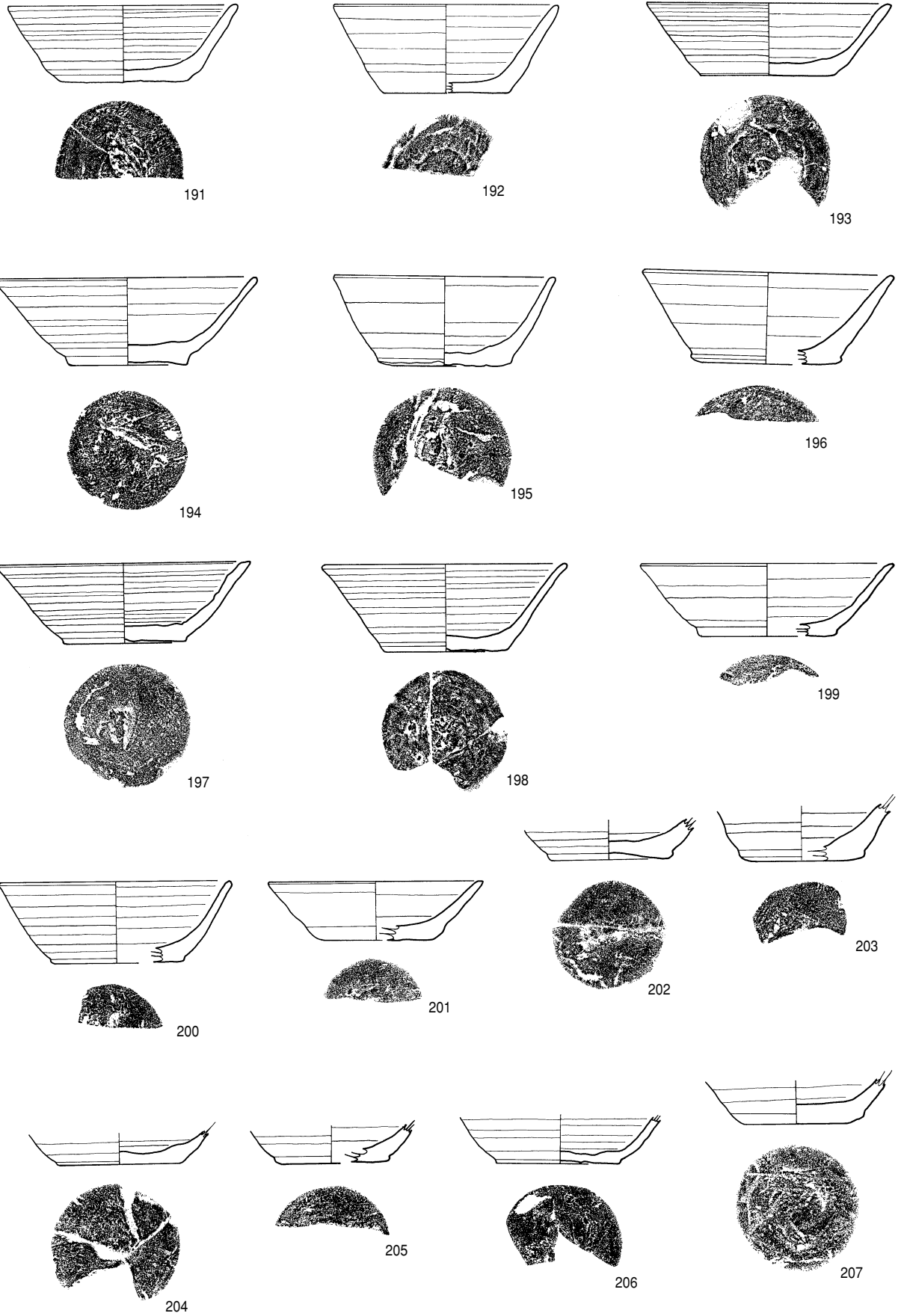
第55図 奈良・平安時代出土遺物(2)甕



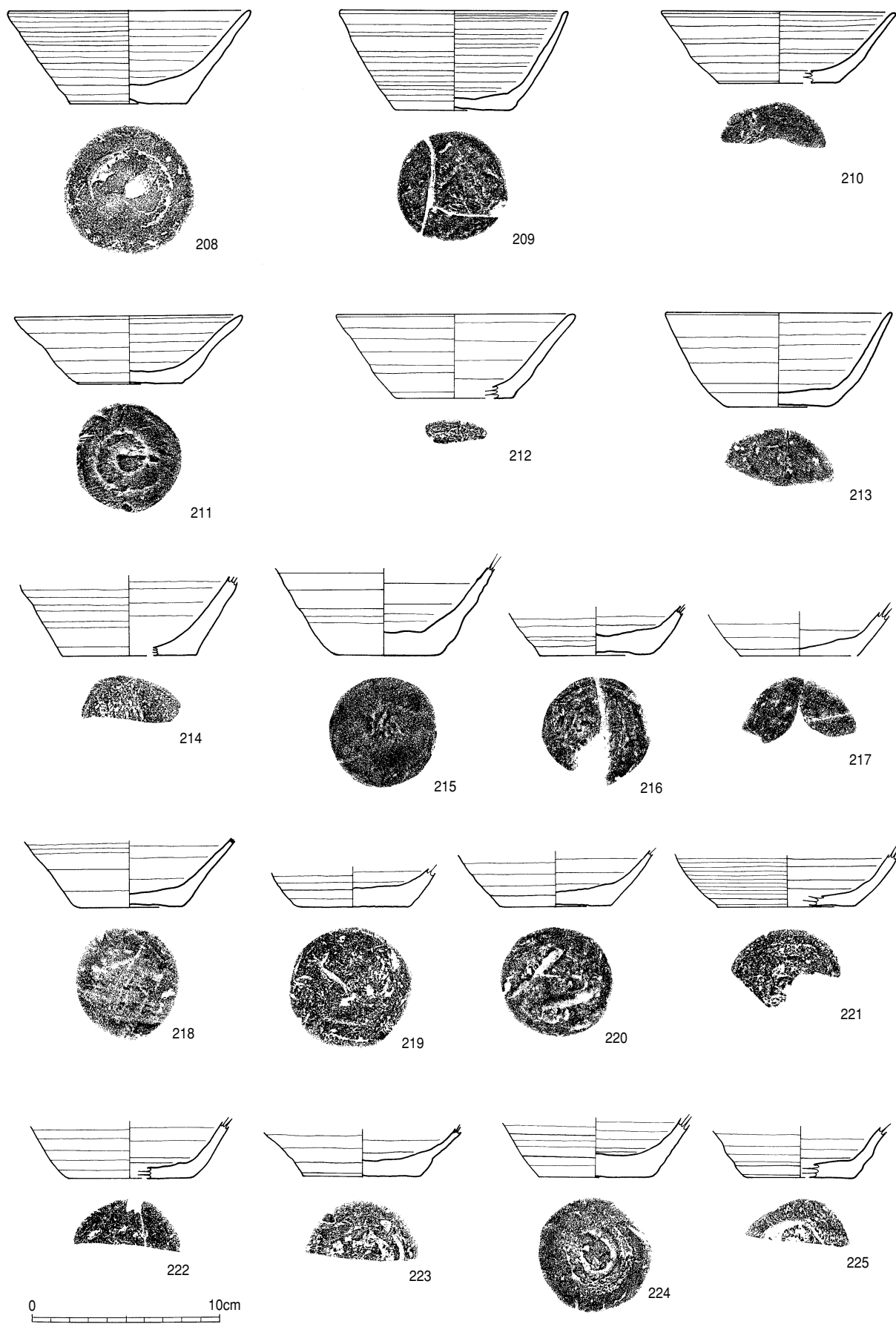
第56図 奈良・平安時代出土遺物(3)甕



第57図 奈良・平安時代出土遺物(4)甕



第58図 奈良・平安時代出土遺物(5)坏



第59図 奈良・平安時代出土遺物(6)坏

脚台付皿・碗（第60図）（226～242）

脚台付皿は226で碗は227～242である。

226は口縁部が外反する立ち上がりの器形である。なお、脚台は高く外反する器形である。

227は脚台が低く立ち上がりは直線的である。228は脚台が低く227と同形である。229・230はやや低い脚部で直に貼り付けられている底部である。

231～242は脚の高い底部で、脚は外開きに貼り付けている。

黒色土器 碗（第61図）（243～255）

これらは黒色の内面の上に研磨で仕上げている土器である。

243は内湾しながら立ち上がる器形で、脚台は外側に向けて貼り付けている。244は脚台部が剥がれている土器である。245は低い脚台で、立ち上がりは直線的に外にのびている器形である。

246～249は低い脚台を持つ底部で、250～255は高い外開きに貼り付けた脚台をもつ底部である。

墨書土器（第62図）（256～280）

256は坏の外面にあり、文字は丸の中に書かれ、文字の解読は困難である。257は坏の外面にかかれ、文字の解読は困難である。258は碗の底面に書かれ、文字の解読は困難である。259は土師器の外面に太めの墨書がみられる。260～266は土師器の口縁部外面に細めの墨書がみられる。267～280は土師器の胴部外面に細めの墨書がみられ、268・269・276・277・278には複数の線が描かれている。文字の解読は困難である。

特殊遺物（第63図）（281～288）

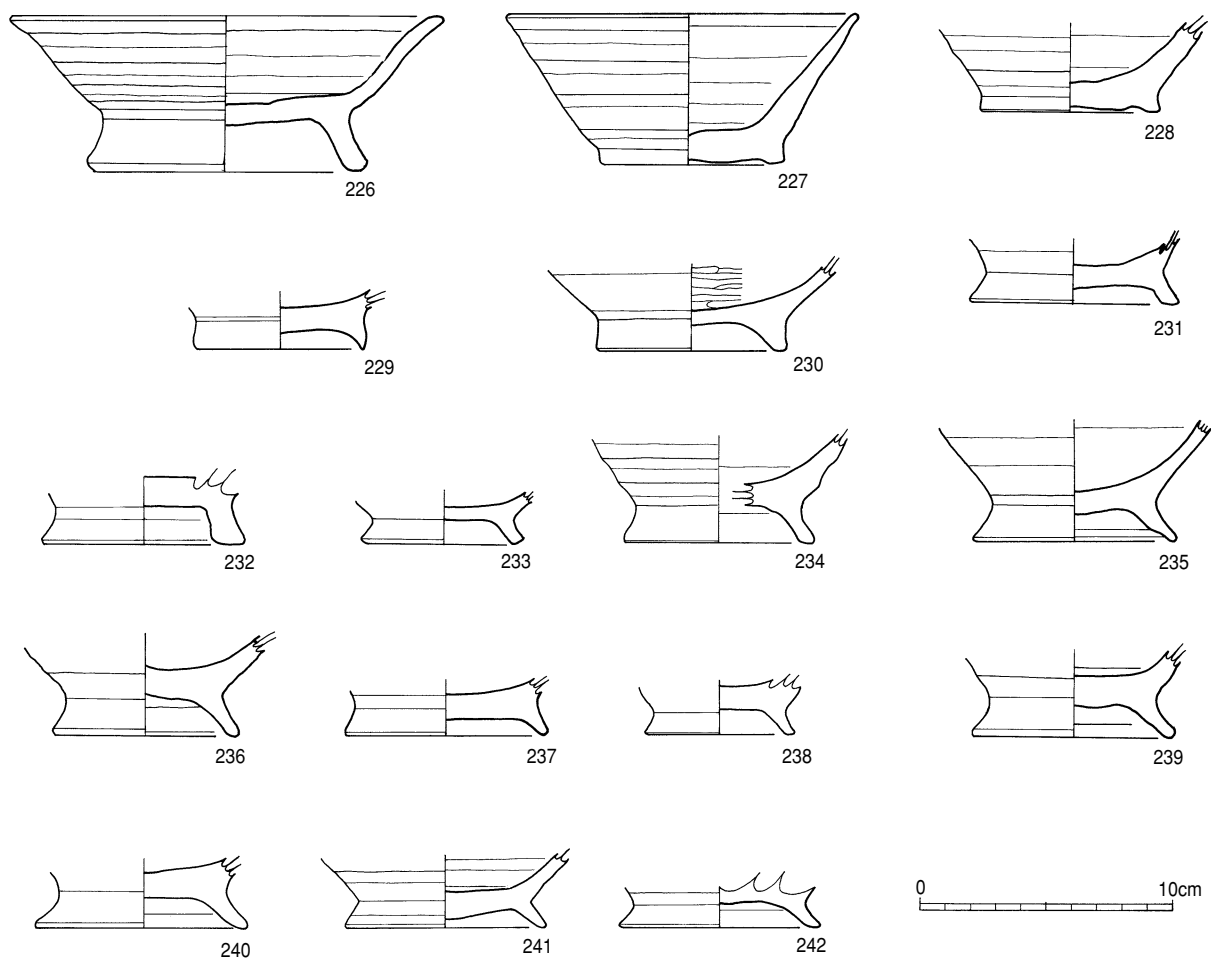
281は蓋のつまみの部分である。器面には水引痕がみられ、土師器の紐部と思われる。282は土師器の高坏の脚部と思われ、器面には水引痕がみられる。283・284は轡の羽口と思われる。285・286は土製の紡錘車と思われる。287は器面調整をして焼き上げた土製円盤である。288は土器の底部を加工した土製円盤と思われる。器面には状痕がみられるため、蓋の紐部の可能性もある。

製塩土器（第64図）（289～303）

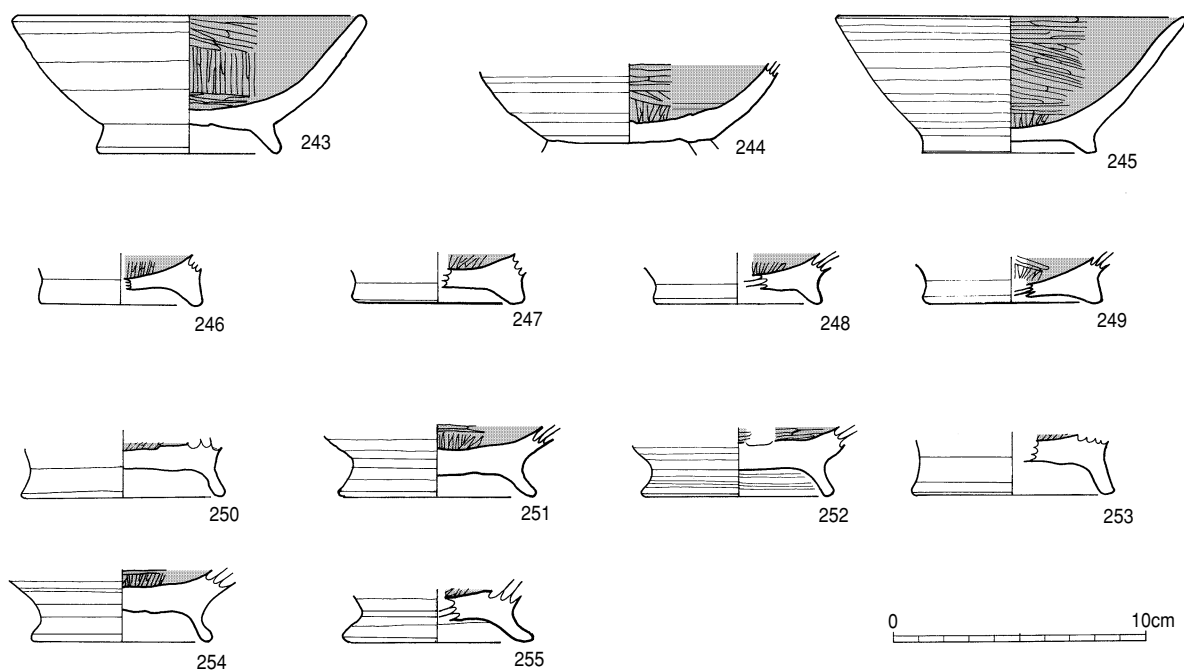
これらは、内面に布目痕があるもので、焼き塩壺と言われているものである。289～300は口縁部である。器形は口唇部で断面三角形に切り、やや膨らみをもつ胴部で底部に至る。301～303は胴部である。301は底部で尖底である。

須恵器（第65図）（305～313）

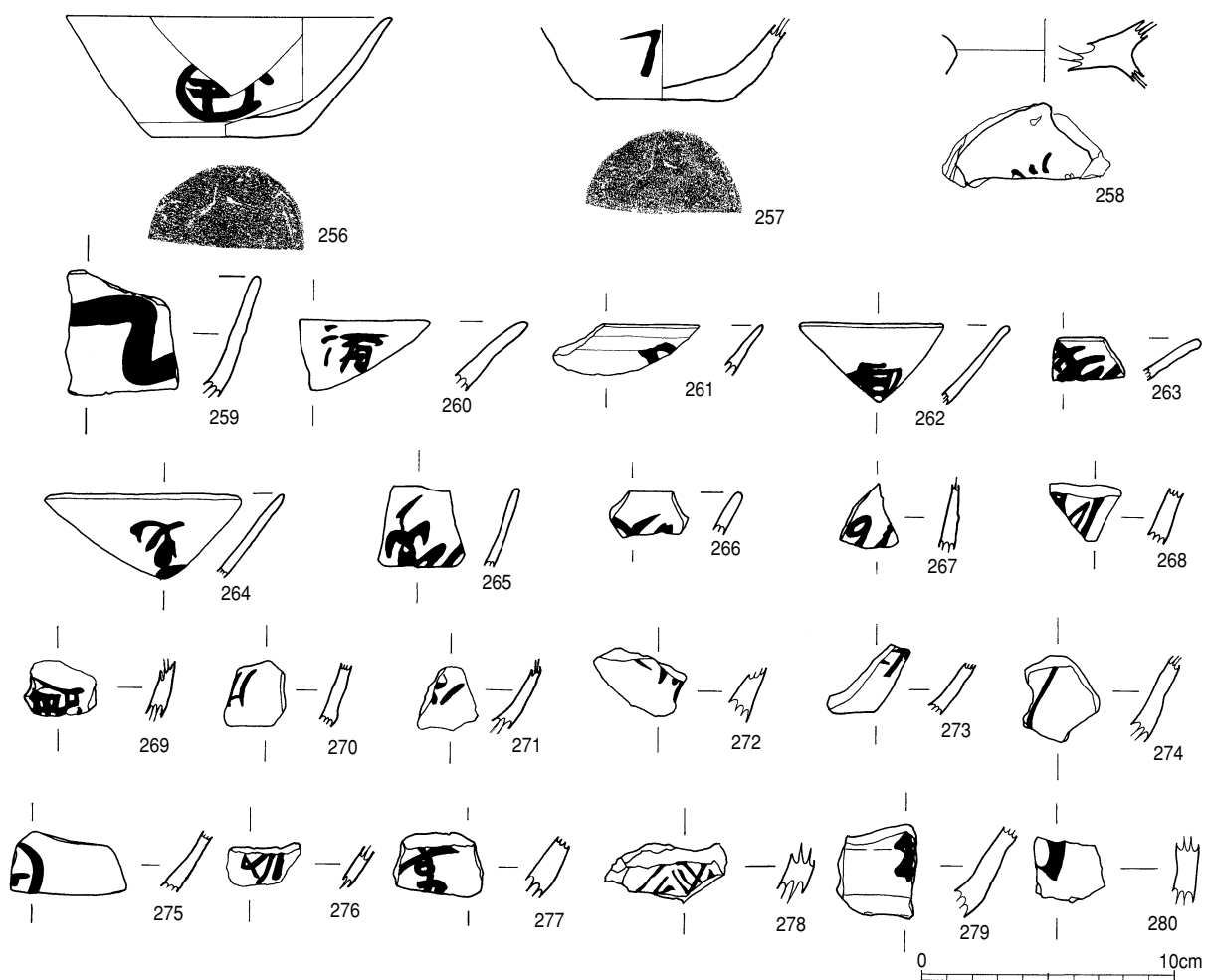
305は甕形土器の口縁部で、大きく外反し、口縁端部の外面に断面四角形の帯をもつ土器である。306はやや外反する口縁部で、口唇部に溝をもつものである。307は甕形土器の肩部で、丸みをもつ器形である。器面調整は内面の上部が青海波タタキ目で下部は縦長のタタキ目である。外面は縦長のタタキ目である。308は甕形土器の胴部で、内面に縦長のタタキ目、外面に格子状になったタタキ目が見られる。309は壺形土器である。器部は肩部から下で、平底である。器面調整はロクロ調整痕がみられる。310壺の胴部で、ロクロ調整痕がみられる。311は壺の底部で、ロクロ調整痕がみられる。312は坏か碗か不明であるが、外面に焼成時の藁筋痕がみられる。313は瓦泉の口縁部である。器形は二段に外反し、頸部では締まる。器面はロクロ調整痕がみられる。



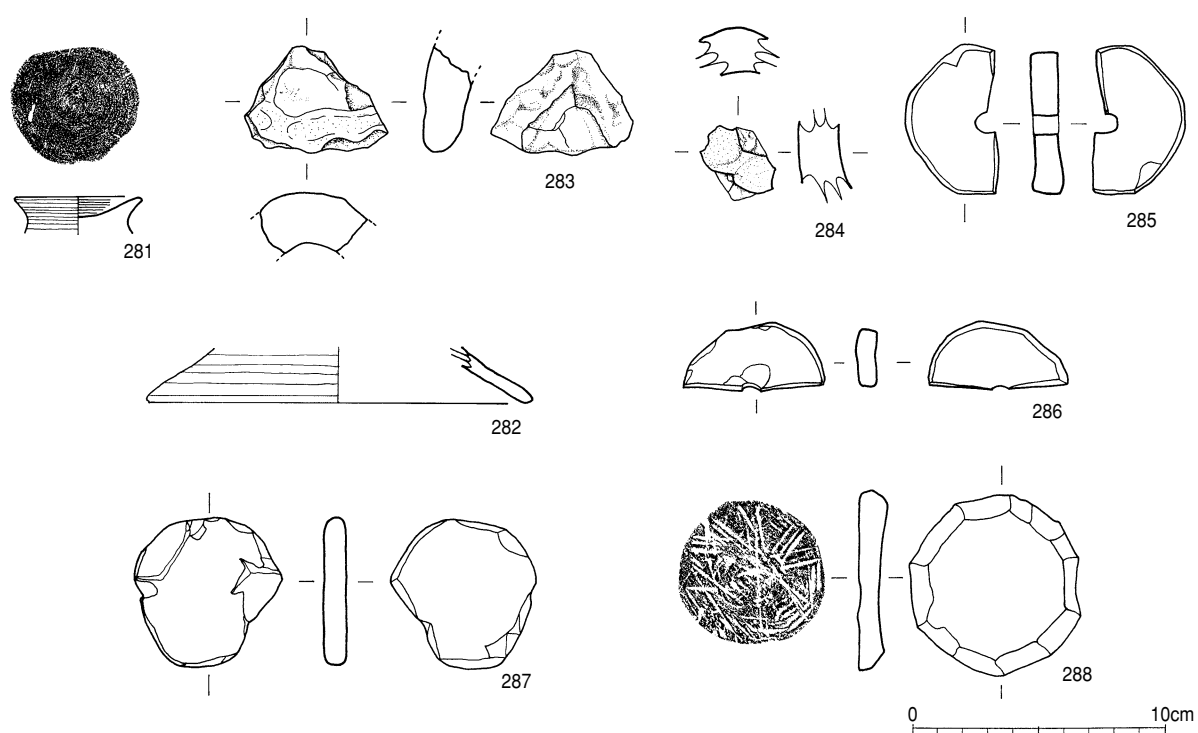
第60図 奈良・平安時代出土遺物(7)碗



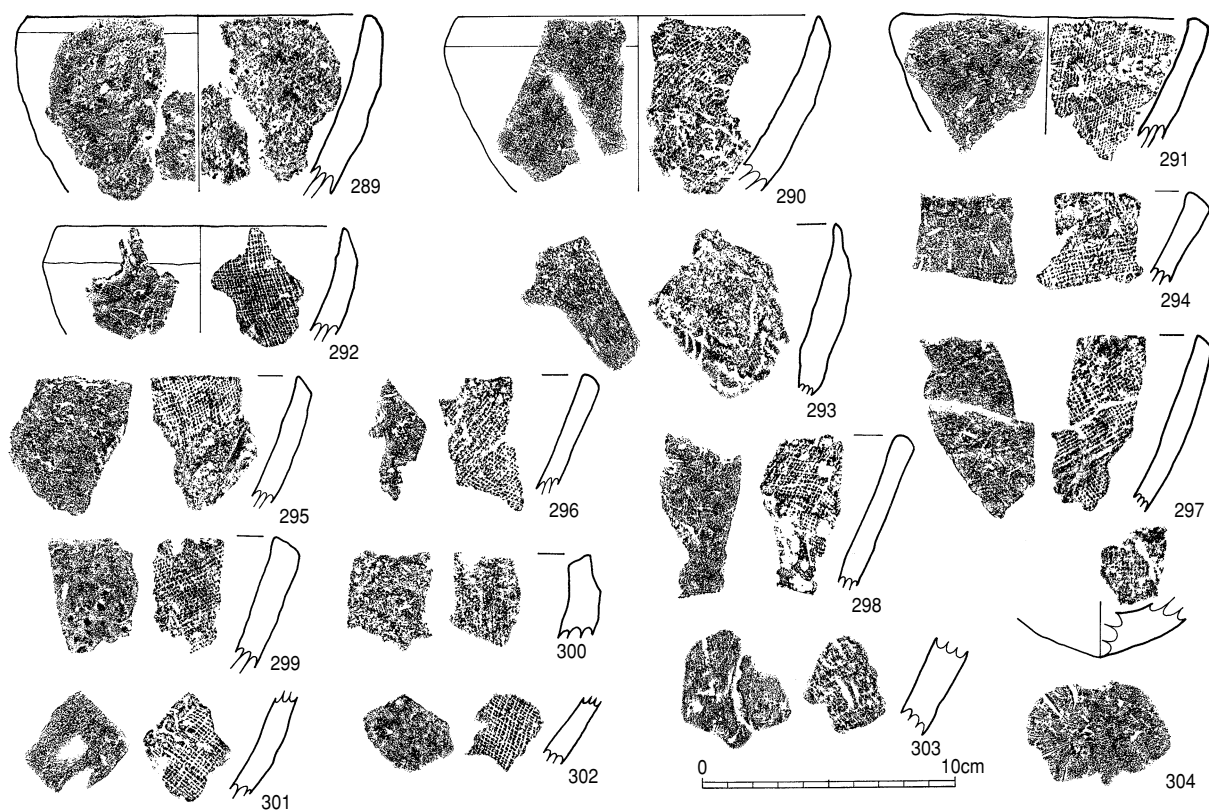
第61図 奈良・平安時代出土遺物(8)内黒碗



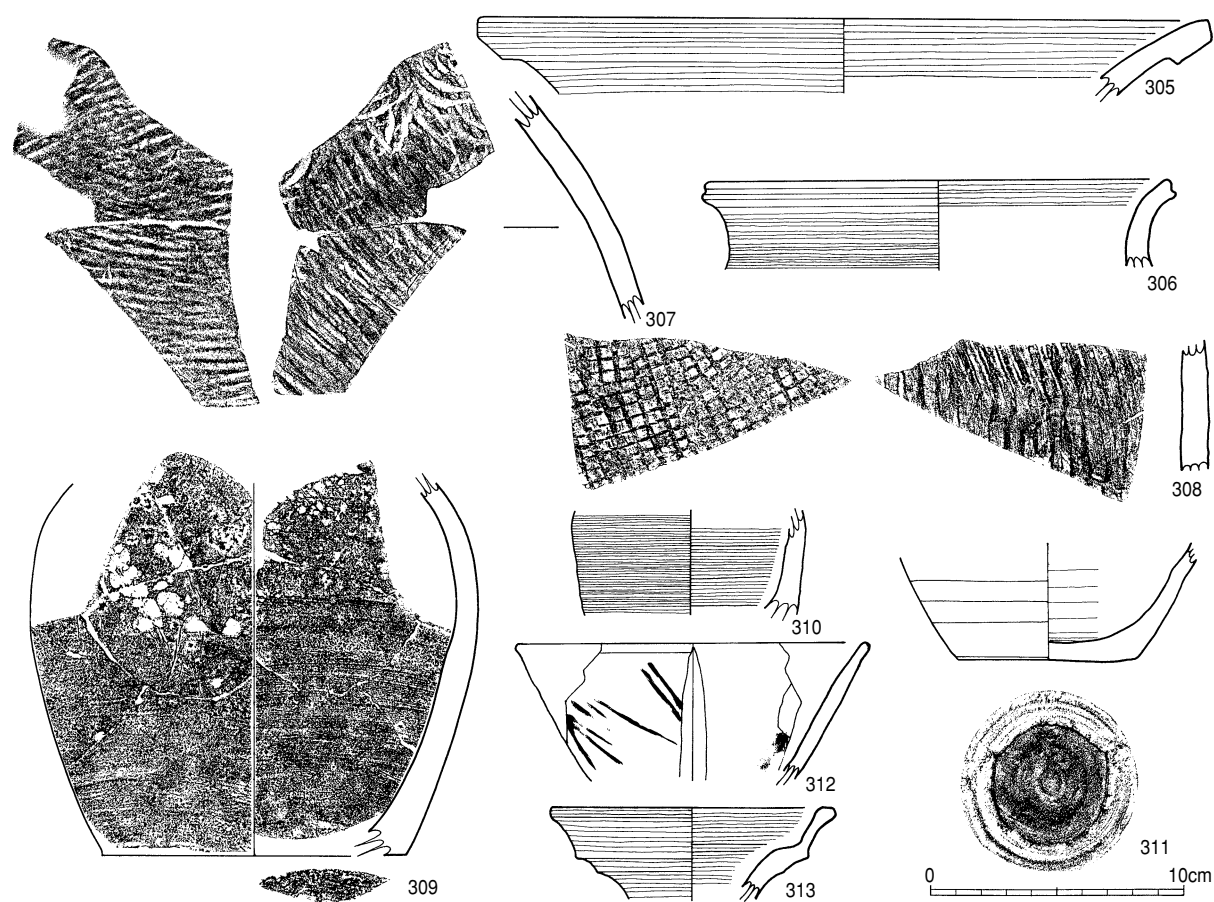
第62図 奈良・平安時代出土遺物(9)墨書土器



第63図 奈良・平安時代出土遺物(10)特殊遺物



第64図 奈良・平安時代出土遺物(11)焼塩土器



第65図 奈良・平安時代出土遺物(12)須恵器

第11表 奈良・平安時代土器観察表

挿図 番号	遺物 番号	出土区	層位	分類	器種	部位	調整・文様		胎土	色調		焼成	法量(cm)			注記 番号	備考	
							外面	内面		外面	内面		口径	底径	器高			
土師器54	136	B-3	Ⅲ		甕	口縁～胴	ヘラナデ	ハラケズリ	長石, 角閃石, シロ岩片	橙	にぶい橙	良好	47.2		19.2	315 318	316 323	軽集2
	137	B-5	Ⅲ下		甕	口縁～胴	ヘラナデ	ハラケズリ	長石, 角閃石, シロ岩片	赤褐	にぶい褐	良好	28.2		14.0	1106 1448 5166	1447 1449	
	138	B-3	Ⅲ下		甕	口縁～底	ナデ	ヘラカキ	角閃石, アカ岩片	にぶい黄橙	にぶい黄橙	良好	26.0		20.1	1838		
	139	B-4	Ⅲ下		甕	口縁	ヘラナデ	ヘラカキ	角閃石	にぶい赤褐	にぶい赤褐	良好	24.4		5.5	2143		
	140	C-5	Ⅲ下		甕	口縁	ヘラナデ	ハラケズリ	石英, 長石, 角閃石, 輝石, シロ岩片	にぶい橙	橙	良好			3.0	2999		
	141	C-5	Ⅲ下		甕	口縁	ヘラナデ	ハラケズリ	長石, 角閃石, 輝石	にぶい赤褐	暗赤褐	良好			3.5	4669		
	142	C-5	Ⅲ下		甕	口縁	ヘラナデ	ハラケズリ	長石	にぶい黄褐	にぶい橙	良好			2.8	1297	1302	
	143	C-5	Ⅲ下		甕	口縁	ヘラナデ	ハラケズリ	長石, 角閃石	橙	橙	良好			3.9	345		
	144	C-4	Ⅲ下		甕	口縁	ヘラナデ	ハラケズリ	長石	黒褐	黒褐	良好			4.7	3601		
	145	C-4	Ⅲ		甕	口縁	ヘラナデ	ハラケズリ	長石, 角閃石, 輝石, シロ岩片	にぶい黄橙	橙	良好			3.5	2653		
	146	D-4	Ⅲ下		甕	口縁	ヘラナデ	ハラケズリ	石英, 長石, 角閃石, シロ岩片	にぶい褐	橙	良好			5.0	4079		
	147	C-5	Ⅲ下		甕	口縁	ヘラナデ	ハラケズリ	長石, 角閃石, シロ岩片, アカ岩片	橙	にぶい黄橙	良好			4.6	733		
55	148	B-3	Ⅲ		甕	口縁	ヘラナデ	ハラケズリ	長石, シロ岩片	にぶい橙	灰黄褐	良好			2.5	274		
	149	B-3, C-4	Ⅲ下		甕	口縁	ヘラナデ	ハラケズリ	石英, 長石, 角閃石, 輝石, シロ岩片, アカ岩片	暗赤褐	にぶい赤褐	良好	25.8		7.8	2794 3220 3234 4780	3219 3233 3699 5635	
	150	B-4	Ⅲ下 Ⅲ		甕	口縁	ヘラナデ	ハラケズリ	石英, 長石, 角閃石, 輝石, シロ岩片	にぶい橙	橙	良好			2.8	2046 2104		
	151	C-4	Ⅲ下		甕	口縁	ヘラナデ	ハラケズリ	石英, 長石, 輝石	にぶい褐	橙	良好			2.0	3297		
	152	B-5	Ⅳ		甕	口縁	ヘラナデ	ハラケズリ	石英, 長石, 輝石	にぶい褐	にぶい橙	良好			4.6	5519		
	153	D-4	Ⅲ下		甕	口縁	ヘラナデ	ハラケズリ	石英, 長石, 輝石	褐色	橙	良好			2.8	2341		
	154	B-5	Ⅲ下		甕	口縁	ヘラナデ	ハラケズリ	石英, 長石, 輝石	にぶい橙	橙	良好			3.3	1211		
	155	C-5	Ⅲ下		甕	口縁	ヘラナデ	ハラケズリ	石英, 長石, 角閃石, 輝石	橙	橙	良好	24.3		11.2	1388	2917	
	156	C-5	Ⅲ下		甕	口縁	ヘラナデ	ヘラカキ	石英, 長石, 角閃石, 輝石	橙	橙	良好	32.3		5.4	295 3082 3930	3020 3347 3938	
	157	C-5	Ⅲ下		甕	口縁	ヘラナデ	ヘラカキ	石英, 長石, 輝石	橙	橙	良好	33.8		4.6	883 3866	3083 4379	
	158	B-3	Ⅲ		甕	口縁	ヘラナデ	ヘラカキ	石英, 長石, 輝石	浅黄橙	浅黄	良好	26.6		9.1			軽集2
	159	B-5	Ⅲ下		甕	口縁	ヘラナデ	ヘラカキ	石英, 長石, 輝石, シロ岩片	にぶい褐	にぶい橙	良好	28.4		4.0	1017	1031	
	160	C-5	Ⅲ下		甕	口縁	ヘラナデ	ハラケズリ	石英, 長石, 輝石	にぶい橙	橙	良好			5.7	2991		
	161	C-3	Ⅲ下		甕	口縁	ヘラナデ	ハラケズリ	石英, 長石, 輝石	にぶい橙	橙	良好			3.7	3784		
	162	C-5	Ⅳ		甕	口縁	ヘラナデ	ハラケズリ	石英, 長石, 輝石	にぶい橙	にぶい橙	良好			4.7			一括
	163	C-5	Ⅲ下		甕	口縁	ヘラナデ	ハラケズリ	石英, 長石, 輝石	橙	橙	良好			3.6	434		
164	D-4	Ⅲ下		甕	口縁	ヘラナデ	ハラケズリ	石英, 長石, 輝石	にぶい褐	橙	良好			5.0	4079			
56	165	B-4	Ⅲ下		甕	口縁	ヘラナデ	ハラケズリ	石英, 長石, 角閃石, アカ岩片	にぶい橙	にぶい赤褐	良好	30.6		4.5	2123 4055	4040 5231	
	166	B-4	Ⅲ下		甕	口縁	ヘラナデ	ハラケズリ	石英, 長石, シロ岩片	にぶい褐	明黄褐	良好	26.4		5.5	1473	4567	
	167	C-4	Ⅲ下		甕	口縁	ヘラナデ	ヘラカキ	石英, 長石, 角閃石, シロ岩片	にぶい橙	にぶい黄橙	良好	27.4		5.2	1582 4447	4293 2472	
	168	B-3 C-4	Ⅲ Ⅲ下 Ⅲ下		甕	口縁～胴	ヘラナデ	ハラケズリ	長石, 角閃石	灰褐	にぶい黄橙	良好	26.4		8.0	1919 1922 4952 2835	1925	
	169	C-4	Ⅲ下		甕	口縁	ヘラナデ	ヘラカキ	長石, 角閃石	橙	にぶい橙	良好	31.2		2.9	3293		
	170	D-4 C-5 B-4	Ⅲ下 Ⅲ下 Ⅲ下		甕	口縁～胴	ヘラナデ	ヘラカキ	長石, シロ岩片	橙	にぶい褐	良好	23.6		9.0	3499 1140 4515	4143	
	171	C-4	Ⅲ下		甕	口縁	ヘラナデ	ヘラカキ	長石, 角閃石, シロ岩片	橙	にぶい橙	良好	27.6		4.1	3292		
	172	B-5	Ⅲ下		甕	口縁	ヘラカキ	ハラケズリ	石英, 長石, 角閃石, シロ岩片	黒褐	褐灰	良好			4.2	1007		

第12表 奈良・平安時代土器観察表

挿図 番号	遺物 番号	出土区	層位	分類	器種	部位	調整・文様		胎土	色調		焼成	法量(cm)			注記 番号	備考
							外面	内面		外面	内面		口径	底径	器高		
土 師 器 56	173	D-4	Ⅲ下		甕	口縁	ヘラナデ	ヘラケズリ	長石, 角閃石, シロ岩片	にぶい橙	灰褐	良好			3.9	2372	
	174	B-4	Ⅲ下		甕	口縁	ヘラナデ	ヘラケズリ	長石, 角閃石, アカ岩片	明赤褐	にぶい褐	良好			3.3	4024 5241	5242
	175	C-3	Ⅲ下		甕	口縁	ヘラナデ	ヘラケズリ	長石, 角閃石	にぶい橙	にぶい褐	良好			2.6	2640	3678
	176	C-5	Ⅲ下		甕	口縁	ヘラナデ	ヘラケズリ	長石, 角閃石, シロ岩片	にぶい橙	にぶい褐	良好			5.5	928	937
	177	D-4	Ⅲ下		甕	口縁	ヘラナデ	ヘラケズリ	長石, シロ岩片, アカ岩片	橙	にぶい褐	良好			4.0	4427	
	178	B-3	Ⅲ		甕	口縁～胴	ヘラナデ	ヘラケズリ	長石, 角閃石, 輝石, シロ岩片	橙	にぶい黄橙	良好			8.5	314	328 軽集2
57	179	B-3, 4	Ⅲ		甕	口縁	ヘラナデ	ヘラケズリ	長石, 角閃石, 輝石	橙	にぶい黄橙	良好	31.0		8.5	8201	集中区
	180	B-4	Ⅲ下		甕	口縁～胴	ヘラナデ	ヘラカキ	長石, 角閃石, 輝石, シロ岩片	橙	橙	良好	31.4		9.9	2030 5571	2108
	181	B-3	Ⅲ		甕	口縁	ヘラナデ	ヘラカキ	長石, 角閃石	にぶい橙	にぶい橙	良好	22.0		6.0	1910	
	182	B-3, 4	Ⅲ		甕	口縁	ヘラナデ	ヘラケズリ	長石, 輝石, シロ岩片	橙	橙	良好	30.4		9.0		一括
	183	C-5	Ⅲ下		甕	口縁	ヘラナデ	ヘラケズリ	長石, 角閃石, 輝石	にぶい黄褐	にぶい橙	良好			4.0	3015	
	184	C-3	Ⅲ Ⅲ下		甕	口縁	ヘラナデ	ヘラケズリ	長石, 輝石, アカ岩片	暗褐	褐	良好			3.7	2614 3728	
	185	C-3	Ⅲ下		甕	口縁	ヘラナデ	ヘラケズリ	長石, 輝石, シロ岩片	にぶい黄橙	にぶい黄橙	良好			3.7	3259	
	186	C-4 D-4	Ⅲ Ⅲ下		甕	口縁	ヘラナデ	ヘラナデ	長石, シロ岩片, アカ岩片	浅黄橙	浅黄橙	良好	23.4		5.5	2410 2217 4425	3440
	187	C-5	Ⅲ下		甕	胴～底	ヘラナデ	ヘラケズリ	長石, 輝石, シロ岩片, 小石	にぶい橙	にぶい黄橙	良好	17.0 (胴)		13.1	874 1407 3000	997 2970 3003
	188	C-4	Ⅲ下		甕	胴	ヘラナデ	ヘラケズリ	長石, 輝石, シロ岩片	にぶい黄橙	にぶい黄橙	良好			3.3	5137	
	189	C-3	Ⅲ下		甕	底	研磨	ヘラケズリ	長石, 輝石	赤褐	黒褐	良好			4.1	4313	5351
	190	C-3	Ⅲ		甕	胴～底	研磨	ナデ	長石, 輝石, シロ岩片, アカ岩片	赤褐	暗褐	良好			4.4	2599 3689 5354 2671 2811	2615 4314
		C-4	Ⅲ下 Ⅲ下														3177
坏 58	191	B-4	Ⅲ下		坏	口縁～底	ヘラ切りはなし	ロクロ	長石, 輝石, シロ岩片, アカ岩片	橙	橙	良好	6.8	12.2	4.0	1984 5592 2064	1995
		B-4	Ⅲ下														
	192	B-3	Ⅲ下 Ⅲ		坏	口縁～底	ヘラ切りはなし	ロクロ	長石, 角閃石, アカ岩片	橙	橙	良好	6.5	11.9	4.6	1661 1665	1662
	193	B-3	Ⅳ Ⅲ		坏	口縁～底	ヘラ切りはなし	ロクロ	長石, アカ岩片	橙	橙	良好	7.0	13.0	3.8	6860 6894 6918	6861 6864
	194	C-5	Ⅲ下		坏	口縁～底	ヘラ切りはなし	ロクロ	長石, 輝石, アカ岩片	橙	橙	良好	13.8	3.4	4.6	507 4616	514
	195	C-4 B-3	Ⅲ下 Ⅲ下		坏	口縁～底	ヘラ切りはなし	ロクロ	長石, シロ岩片, アカ岩片	橙	橙	良好	11.7	7.2	4.7	2900 101	軽集2
	196	B-4	Ⅲ下		坏	口縁～底	ヘラ切りはなし	ロクロ	長石, 角閃石, アカ岩片	にぶい橙	にぶい橙	良好	13.3	7.8	4.8	1480	
	197	C-4	Ⅲ下		坏	口縁～底	ヘラ切りはなし	ロクロ	長石, 角閃石, シロ岩片, アカ岩片	橙	明赤褐	良好	13.4	6.8	4.2	2993 4714	3310 4715
	198	B-4	Ⅲ下		坏	口縁～底	ヘラ切りはなし	ロクロ	長石, 角閃石, 輝石, アカ岩片	黄橙	にぶい黄橙	良好	12.9	6.6	4.6	5196	
	199	B-3, 4	Ⅲ		坏	口縁～底	ヘラ切りはなし	ロクロ	長石, 角閃石, シロ岩片, アカ岩片	橙	橙	良好	13.2	7.2	4.9		
	200	C-4	Ⅲ下		坏	口縁～底	ヘラ切りはなし	ロクロ	角閃石, シロ岩片, アカ岩片	橙	灰黄褐	良好	12.2	7.0	4.3	2791	3666
	201	B-5	Ⅲ		坏	口縁～底	ヘラ切りはなし	ロクロ	輝石, シロ岩片, アカ岩片	にぶい橙	にぶい黄橙	良好	11.2	7.0	3.1	1046	
	202	C-4	Ⅲ下		坏	底	ヘラ切りはなし	ロクロ	角閃石, 輝石, アカ岩片	浅黄橙	浅黄橙	良好		6.4	2.1	2549	3295
	203	B-3	Ⅲ下		坏	胴～底	ヘラ切りはなし	ロクロ	角閃石, 輝石, シロ岩片, アカ岩片	にぶい橙	橙	良好		6.6	2.9	1762	
	204	C-4 D-4	Ⅲ下 Ⅲ下		坏	底	ヘラ切りはなし	ロクロ	角閃石, 輝石, シロ岩片, アカ岩片	橙	橙	良好		6.8	1.6	3140 2407 3460	3542 1632
	205	B-4	Ⅲ下		坏	胴～底	ヘラ切りはなし	ロクロ	長石, 角閃石, アカ岩片	にぶい黄橙	にぶい黄橙	良好		6.0	2.0	5240	

第13表 奈良・平安時代土器観察表

挿図 番号	遺物 番号	出土区	層位	分類	器種	部位	調整・文様		胎土	色調		焼成	法量(cm)			注記 番号	備考
							外面	内面		外面	内面		口径	底径	器高		
58	206	C-4	Ⅲ下		坏	胴～底	ヘラ切りはなし	ロクロ	長石、角閃石、輝石、アカ岩片	黄橙	黄橙	良好		6.4	2.5	2450 3554	
	207	C-4	Ⅲ下		坏	底	ヘラ切りはなし	ロクロ	長石、角閃石、シロ岩片、アカ岩片	にぶい黄橙	にぶい黄橙	良好		7.2	2.3	4779	
59	208	C-4	Ⅲ下		坏	口縁～底	ヘラ切りはなし	ロクロ	長石、角閃石、シロ岩片、アカ岩片	にぶい黄橙	にぶい黄橙	良好	13.0	6.6	4.9	122	
	209	C-3 E-13	Ⅲ下 Ⅳ上		坏	口縁～底	ヘラ切りはなし	ロクロ	角閃石、アカ岩片	浅黄橙	浅黄橙	良好	12.2	6.2	5.3	4316 5702 2号ビットNo1	
	210	C-5	Ⅲ下		坏	口縁～底	ヘラ切りはなし	ロクロ	角閃石、輝石、シロ岩片、アカ岩片	橙	橙	良好	12.4	6.4	3.8	3755	
	211	C-4	Ⅲ下		坏	口縁～底	ヘラ切りはなし	ロクロ	角閃石、輝石、アカ岩片	橙	橙	良好	12.0	5.6	3.6	5475	
	212	D-4	Ⅲ下		坏	口縁～底	ヘラ切りはなし	ロクロ	長石、輝石、シロ岩片	橙	橙	良好	12.8	6.2	4.4	3463	
	213	B-3	Ⅲ下		坏	口縁～底	ヘラ切りはなし	ロクロ	長石、角閃石、シロ岩片	浅黄橙	橙	良好	12.0	6.0	5.0	4879 5678	
	214	C-5	Ⅲ下		坏	胴～底	ヘラ切りはなし	ロクロ	角閃石、輝石、アカ岩片	にぶい橙	浅黄橙	良好		7.2	4.3	1135	
	215	B-4	Ⅲ		坏	胴～底	ヘラ切りはなし	ロクロ	長石、角閃石、輝石	にぶい黄橙	にぶい橙	良好		6.0	4.5	802	
	216	C-5 D-5	Ⅲ下 Ⅲ下		坏	底	ヘラ切りはなし	ロクロ	長石、角閃石、アカ岩片	橙	橙	良好		6.0	2.5	321 2305	
	217	B-5	Ⅲ下 Ⅲ		坏	底	ヘラ切りはなし	ロクロ	長石、輝石、アカ岩片	にぶい黄橙	にぶい黄橙	良好		6.2	2.3	1095 5	軽集1
	218	B-3	Ⅲ		坏	胴～底	ヘラ切りはなし	ロクロ	角閃石、輝石、アカ岩片	浅黄橙	浅黄橙	良好		6.0	3.5	311	
	219	D-4	Ⅲ下		坏	底	ヘラ切りはなし	ロクロ	長石、角閃石、輝石、アカ岩片	浅黄橙	浅黄橙	良好		6.2	2.0	3447	
	220	C-4	Ⅲ下		坏	胴～底	ヘラ切りはなし	ロクロ	長石、角閃石、シロ岩片、アカ岩片	浅黄橙	浅黄橙	良好		6.0	2.9	116	
	221	D-5	Ⅲ下		坏	胴～底	ヘラ切りはなし	ロクロ	石英、長石、角閃石、アカ岩片	橙	橙	良好		7.4	2.7	4097	
	222	C-5	Ⅲ下		坏	胴～底	ヘラ切りはなし	ロクロ	長石、角閃石、シロ岩片、アカ岩片	橙	橙	良好		6.6	3.0	884 3944	
	223	D-4	Ⅲ下		坏	底	ヘラ切りはなし	ロクロ	長石、角閃石、輝石、シロ岩片	浅黄橙	浅黄橙	良好		6.2	2.9	3795	
	224	B-4	Ⅲ下		坏	底	ヘラ切りはなし	ロクロ	長石、角閃石、アカ岩片	浅黄橙	浅黄橙	良好		6.4	3.15	2156	
	225	C-4	Ⅲ下		坏	底	ヘラ切りはなし	ロクロ	石英、長石、シロ岩片、アカ岩片	にぶい黄橙	にぶい橙	良好	16.4		2.7	3568	
60	226	C-5 C-4	Ⅲ下 Ⅲ下		台付皿	口縁～底	ロクロ	ロクロナデ	長石、輝石、アカ岩片		にぶい橙	良好	17.2	11.1	6.1	708 987 2820 2831 2832 4735 4747	
	227	B-3	Ⅲ下 Ⅲ		碗	口縁～底	ロクロ	ロクロナデ	長石、角閃石、シロ岩片、アカ岩片	橙	橙	良好	14.1	7.0	5.5	1717 1721 1722 1723 1725 1726 1771 1775 5641 5642 5643 5645 39 40	軽集2
	228	C-3	Ⅲ下		碗	胴～底	ロクロ	ロクロナデ	長石、角閃石、シロ岩片、アカ岩片	橙	橙	良好		7.2	3.5	312	
	229	B-6			碗	底	ロクロ	ロクロナデ	長石、角閃石、アカ岩片	橙	橙	良好		6.6	2.3	ビット1	掘立2
	230	B-3	－		碗	底	ロクロ	ロクロナデ	長石、角閃石、シロ岩片、アカ岩片	にぶい黄橙	浅黄	良好		3.8	3.3	－	
	231	C-4	Ⅲ下		碗	底	ロクロ	ロクロナデ	長石、シロ岩片、アカ岩片	橙	橙	良好		4.1	2.5	2523	
	232	B-4	Ⅲ下		碗	底脚	ロクロ	ロクロナデ	長石、角閃石、アカ岩片	にぶい橙	にぶい橙	良好		4.0	2.4	2141	
	233	B-5	Ⅲ下		碗	底脚	ロクロ	ロクロナデ	石英、長石、雲母	浅黄	浅黄	良好		6.4	2.1	1219	
	234	B-3 B-4 B-5	Ⅲ下 Ⅲ下 Ⅲ下		碗	底	ロクロ	ロクロナデ	長石、輝石、アカ岩片	にぶい黄橙	にぶい黄橙	良好		7.5	4.25	4946 1497 4061	1498
	235	C-4	Ⅲ下		碗	胴～底	ロクロ	ロクロナデ	長石、角閃石、アカ岩片	浅黄橙	浅黄橙	良好		8.1	4.8	4721	
	236	C-5	Ⅲ下		碗	胴～底	ロクロ	ロクロナデ	長石、角閃石	浅黄橙、 橙(脚)	浅黄橙	良好		7.4	3.9	1411	
	237	C-4	Ⅲ下		碗	底	ロクロ	ロクロナデ	石英、長石、角閃石	にぶい黄橙	にぶい黄橙	良好		7.4	2.2	2898	

第14表 奈良・平安時代土器観察表

挿図 番号	遺物 番号	出土区	層位	分類	器種	部位	調整・文様		胎土	色調		焼成	法量(cm)			注記 番号	備考
							外面	内面		外面	内面		口径	底径	器高		
60	238	C-5	表層		碗	底	ロクロ	ロクロナデ	長石, 輝石, シロ岩片, アカ岩片	浅黄橙	灰黄	良好	6.0	2.1		—	
	239	C-5	Ⅲ下		碗	胴～底	ロクロ	ロクロナデ	長石, シロ岩片	黄橙	にぶい黄橙	良好	8.0	3.5	2996		
	240	C-3 C-4	Ⅲ下 Ⅲ		碗	底	ロクロ	ロクロナデ	長石, シロ岩片, アカ岩片	浅黄橙	浅黄橙	良好	6.8	2.8	2609 2872		
	241	C-5	Ⅲ下		碗	底	ロクロ	ロクロナデ	長石, シロ岩片, アカ岩片	明黄褐	浅黄橙	良好	7.8	2.9	403		
	242	C-4	Ⅲ下		碗	底	ロクロ	ロクロナデ	長石, 輝石, シロ岩片	橙	浅黄橙	良好	7.8	1.7	5089		
61	243	B-2 B-3 C-4	Ⅲ下 Ⅲ下 Ⅲ下		内黒	口縁～底	ロクロ	研磨	長石, シロ岩片	にぶい黄橙	黒	良好	13.7	7.0	5.5	309 1652 1603	
	244	C-4 C-5	Ⅲ下 Ⅲ下		内黒	胴～底	ロクロ	研磨	長石, 角閃石, シロ岩片	淡黄	黒	良好	7.2	3.1	1641 682	5043	
	245	B-5 D-4	Ⅲ下 Ⅲ下		内黒	口縁～底	ロクロ	研磨	長石, 角閃石, アカ岩片	にぶい黄橙	黒	良好	13.8	7.0	5.4	5378 3382	
	246	C-4	Ⅲ下		内黒	底	ロクロ	研磨	長石, 角閃石, シロ岩片	にぶい黄橙	黒	良好	6.6	2.0	2769		
	247	C-4	Ⅲ下		内黒	底	ロクロ	研磨	長石, 角閃石, シロ岩片	にぶい橙	黒	良好	3.3	2.0	2560		
	248	B-3	Ⅲ下		内黒	底	ロクロ	研磨	長石, 角閃石, シロ岩片	にぶい黄橙	黒	良好	6.7	2.0	1826	5557	
	249	C-3	Ⅲ下		内黒	底	ロクロ	研磨	長石, 角閃石, 輝石	黄橙	黒	良好	7.2	1.8	2708		
	250	B-5	Ⅲ下		内黒	底	ロクロ	研磨	長石, 角閃石, 輝石	にぶい橙	黒	良好	3.8	2.5	1454		
	251	C-5	Ⅲ下		内黒	底	ロクロ	研磨	長石, 角閃石, 輝石, アカ岩片	橙	黒	良好	7.9	2.7	2986		
	252	C-6			内黒	底	ロクロ	研磨	長石, 角閃石, 輝石, シロ岩片	橙	黒	良好	7.7	2.7			掘立 3-1
	253	C-4	Ⅲ下		内黒	底	ロクロ	研磨	長石, 角閃石, シロ岩片, アカ岩片	橙	黒	良好	3.6	2.1	5144		
	254	D-4	Ⅲ下		内黒	底	ロクロ	研磨	長石, 角閃石, 輝石, シロ岩片	にぶい黄橙	黒	良好	6.8	2.8	3507		
	255	D-5	Ⅲ下		内黒	底	ロクロ	研磨	長石, 角閃石, 輝石, アカ岩片	橙	黒	良好	7.6	2.0	3890		
墨書 62	256	B-4	Ⅲ下		坏	口縁～底	ヘラ切刃なし	ロクロ	長石, 角閃石, シロ岩片	橙	黄橙	良好	12.9	6.4	4.8	801	
	257	C-4	Ⅲ下		坏	胴～底	ヘラ切刃なし	ロクロ	長石, 角閃石, シロ岩片, アカ岩片	橙	にぶい橙	良好	5.4	3.0	2413		
	258	D-3	Ⅲ		碗	底	ロクロ	ロクロナデ	角閃石, シロ岩片, アカ岩片	にぶい橙	にぶい橙	良好		2.4	8126		
	259	C-5			坏碗	口縁～胴	ロクロ	ロクロナデ	長石, 角閃石, アカ岩片	橙	にぶい橙	良好		4.8	2号ビットNo4		
	260	B-13	Ⅲ下		坏碗	口縁	ロクロ	ロクロナデ	長石, 角閃石, シロ岩片 アカ岩片	橙	橙	良好		2.8	1932		
	261	C-5	Ⅲ下		坏碗	口縁	ロクロ	ロクロナデ	長石, 輝石	にぶい黄橙	にぶい黄橙	良好		2.0	3051		
	262	C-5	Ⅲ下		坏碗	口縁	ロクロ	ロクロナデ	長石, シロ岩片,	橙	橙	良好		3.1	4565		
	263	C-5	Ⅲ下		坏碗	口縁	ロクロ	ロクロナデ	長石, 輝石	橙	橙	良好		1.7	3326		
	264	C-5	Ⅲ下		坏碗	口縁	ロクロ	ロクロナデ	長石, シロ岩片, アカ岩片	黄橙	黄橙	良好		3.3	4174		
	265	C-5	Ⅲ下		坏碗	口縁	ロクロ	ロクロナデ	長石, シロ岩片, 輝石	にぶい黄橙	にぶい黄橙	良好		3.3	3061		
	267	B-4	Ⅲ下		坏碗	胴	ロクロ	ロクロナデ	長石, 角閃石, シロ岩片	橙	にぶい橙	良好		2.6	5189		
	266	C, D- 4, 5	Ⅲ下		坏碗	口縁	ロクロ	ロクロナデ	角閃石, 輝石, シロ岩片	橙	浅黄橙	良好		1.7		一括	
	268	B-4	Ⅲ下		坏碗	胴	ロクロ	ロクロナデ	角閃石, 輝石, アカ岩片	にぶい黄橙	明黄褐	良好		2.1	1489		
	269	C-4	Ⅲ下		坏碗	胴	ロクロ	ロクロナデ	長石, アカ岩片	浅黄橙	浅黄橙	良好		2.2	4725		
	270	B-5	Ⅲ下		坏碗	胴	ロクロ	ロクロナデ	長石, 角閃石, シロ岩片, アカ岩片	橙	橙	良好		2.6	4484		
	271	D-5	Ⅲ下		坏碗	胴	ロクロ	ロクロナデ	長石, 角閃石, アカ岩片	橙	橙	良好		2.5	3470		
	272	C-5	Ⅲ下		坏碗	胴	ロクロ	ロクロナデ	角閃石, アカ岩片	にぶい黄橙	にぶい黄橙	良好		2.2	4235		
	273	B-5	Ⅲ下		坏碗	胴	ロクロ	ロクロナデ	角閃石, シロ岩片, アカ岩片	にぶい黄橙	明褐	良好		2.6	1001		
	274	C-5	Ⅲ下		坏碗	胴	ロクロ	ロクロナデ	長石, 角閃石, シロ岩片, アカ岩片	橙	橙	良好		3.4	4233		
	275	C-5	Ⅲ下		坏碗	胴～底	ロクロ	ロクロナデ	長石, 輝石, 角閃石	浅黄橙	浅黄橙	良好		2.6	3981		
	276				坏碗	胴	ロクロ	ロクロナデ	長石, 角閃石, シロ岩片	橙	にぶい褐	良好		1.6		集石	
	277	B-5	Ⅲ下		坏碗	胴	ロクロ	ロクロナデ	長石, 角閃石, 輝石	にぶい黄橙	褐灰	良好		2.4	1221		
	278	D-3	Ⅲ		坏碗	胴	ロクロ	ロクロナデ	角閃石, シロ岩片, アカ岩片	にぶい黄橙	にぶい黄橙	良好		2.3	8127		

第15表 奈良・平安時代土器観察表

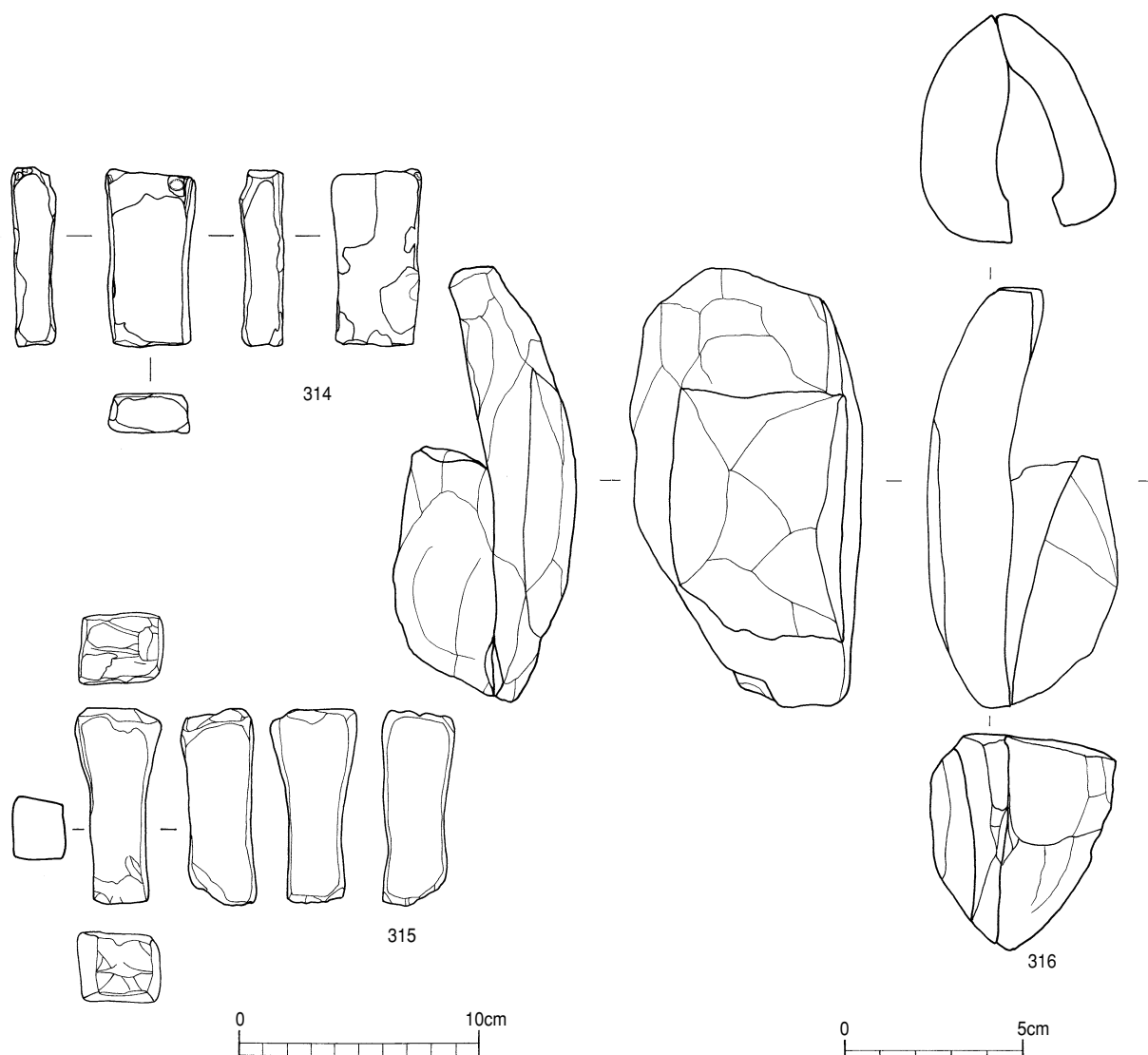
挿図 番号	遺物 番号	出土区	層位	分類	器種	部位	調整・文様		胎土	色調		焼成	法量(cm)			注記 番号	備考
							外面	内面		外面	内面		口径	底径	器高		
墨書 62	279	C-4	Ⅲ下		坏境	胴～底	ロクロ	ロクロナデ	長石、輝石、シロ岩片、アカ岩片、石英	橙	橙	良好			3.7	3579	
	280	B-3	Ⅲ下		坏境	胴	ロクロ	ロクロナデ	長石、角閃石、輝石	にぶい橙	にぶい黄橙	良好			2.3	1912	
特殊 遺物 63	281	B-5	Ⅲ下		蓋のつまみ	ナデ	ナデ	ナデ	石英、長石、角閃石	にぶい黄橙	にぶい黄橙	良好	4.9		1.5	164	
	282	B-5	Ⅲ下		土師 器皿	口縁	ナデ	ナデ	長石、小石 2mm	橙	橙	良好	6.6		2.0	4562	
	283				フィゴの羽口	ナデ			長石、シロ岩片	灰オリーブ	暗赤灰	良好					
	284	D-4	Ⅲ		フィゴの羽口	ナデ			長石、輝石、アカ岩片	灰オリーブ	暗赤褐	良好				2250	
	285	C-5	Ⅲ下		紡錘車		ナデ	ナデ	長石、角閃石、輝石、シロ岩片、アカ岩片	浅黄	浅黄	良好	5.8			4408	
	286	C-4	Ⅲ下		紡錘車		ナデ	ナデ	長石、角閃石、輝石、アカ岩片	浅黄	浅黄	良好				2505	
	287	B-4	Ⅲ下		土製品		ナデ	ナデ	長石、輝石、シロ岩片、アカ岩片	橙	橙	良好	6.0			1505	
	288	B-4	Ⅲ下		坏	底	ナデ	ナデ	長石、角閃石、輝石、アカ岩片	明黄褐	橙	良好	6.0		1.2	5603	
焼塩 土器 64	289	C-3	Ⅲ下		焼塩壺	口縁	手づくね	布目痕	石英、シロ岩片、アカ岩片	橙	橙	良好	13.6		6.9	2589 3680	
	290	C-5	Ⅲ下		焼塩壺	口縁	手づくね	布目痕	石英、長石、角閃石、シロ岩片	橙	橙	良好	13.6		6.9	3942	
	291	C-5	Ⅲ下		焼塩壺	口縁	手づくね	布目痕	石英、長石、角閃石、アカ岩片	橙	橙	良好	11.6		4.7	468	
	292	B-5	Ⅲ下		焼塩壺	口縁	手づくね	布目痕	石英、角閃石、シロ岩片、アカ岩片	橙	橙	良好	11.3		4.2	4599	
	293	C-5	Ⅲ下		焼塩壺	口縁	手づくね	布目痕	石英、長石、角閃石、輝石、シロ岩片、アカ岩片	橙	橙	良好			6.7	3050	
	294	D-4	Ⅲ下		焼塩壺	口縁	手づくね	布目痕	長石、角閃石、アカ岩片	橙	橙	良好	15.8		3.7	3471	
	295	C-5	Ⅲ下		焼塩壺	口縁	手づくね	布目痕	長石、角閃石、輝石、シロ岩片、アカ岩片	橙	橙	良好			4.9	4400	
	296	C-5	Ⅲ下		焼塩壺	口縁	手づくね	布目痕	長石、角閃石、アカ岩片	にぶい橙	橙	良好			4.4	466	
	297	C-4 D-4	Ⅲ下 Ⅲ下		焼塩壺	口縁	手づくね	布目痕	長石、角閃石、シロ岩片、アカ岩片	橙	橙	良好			7.0	5140 4417	
	298	C-5	Ⅲ		焼塩壺	口縁	手づくね	布目痕	長石、角閃石、シロ岩片、アカ岩片	橙	橙	良好			6.3	55	
	299	C-5	Ⅲ下		焼塩壺	口縁	手づくね	布目痕	長石、シロ岩片、アカ岩片	橙	橙	良好			5.1	2946	
	300	C-5	Ⅲ下		焼塩壺	口縁	手づくね	布目痕	長石、アカ岩片	橙	橙	良好			3.3	3873	
	301	B-5	Ⅲ下		焼塩壺	胴	手づくね	布目痕	長石、アカ岩片	橙	橙	良好			3.4	5478	
	302	C-5	Ⅲ下		焼塩壺	胴	手づくね	布目痕	長石、シロ岩片、アカ岩片	にぶい黄橙	にぶい黄橙	良好			2.7	1142	
	303	C-4	Ⅲ下		焼塩壺	胴	手づくね	布目痕	長石、角閃石、アカ岩片	橙	橙	良好			3.4	1598	
	304	C-4	Ⅲ下		焼塩壺	底	手づくね	布目痕	長石、輝石、シロ岩片	橙	橙	良好	2.4	2.2	1630		
須恵 器 65	305	C-4 C-5	Ⅲ下 Ⅲ下		甕	胴	ロクロ	ロクロ	長石	灰	灰	良好	28.6		2.4	3307 552	
	306	C-3	Ⅲ下		甕	口縁	ロクロ	ロクロ	長石、シロ岩片	暗灰黄	暗灰黄	良好	18.0		3.5	2668	
	307	B-4 B-5	Ⅲ下 Ⅲ下		甕	胴	平行たたき	同心円 青海波	長石、角閃石、シロ岩片	灰白	灰白	良好			8.6	2072 152	
	308	C-4	Ⅲ下		甕	胴	格子たたき	タタキ	石英、長石、輝石、シロ岩片、アカ岩片	にぶい赤褐	橙	良好			5.1	4295	
	309	B-5 C-4 C-5 D-4	Ⅲ下 Ⅲ下 Ⅲ下 Ⅲ		壺	胴～底	ロクロ	ロクロ	石英、長石、シロ岩片	明赤褐	灰白	良好	12.0	14.6	4458 4702 2984 2204	3975	
	310	C-4	Ⅲ下		壺	底	ロクロ	ロクロ	長石、輝石、アカ岩片	灰	灰	良好	8.4	4.1	4007		
	311	C-4	Ⅲ下		椀	胴～底	ロクロ	ロクロ	長石、アカ岩片	橙	橙	良好	7.0	4.7	1529		
	312	B-5	Ⅲ下		坏椀	口縁	薬の燃えがら跡	ロクロ	長石、シロ岩片	にぶい黄橙	黄褐	良好	14.0		5.3	1222	
	313	B-5 C-5	Ⅲ下 Ⅲ下		瓦泉	口縁	ロクロ	ロクロ	長石、シロ岩片、アカ岩片	にぶい黄	黄褐	良好	11.2		3.6	4068 391	

砥石（第66図）（314～316）

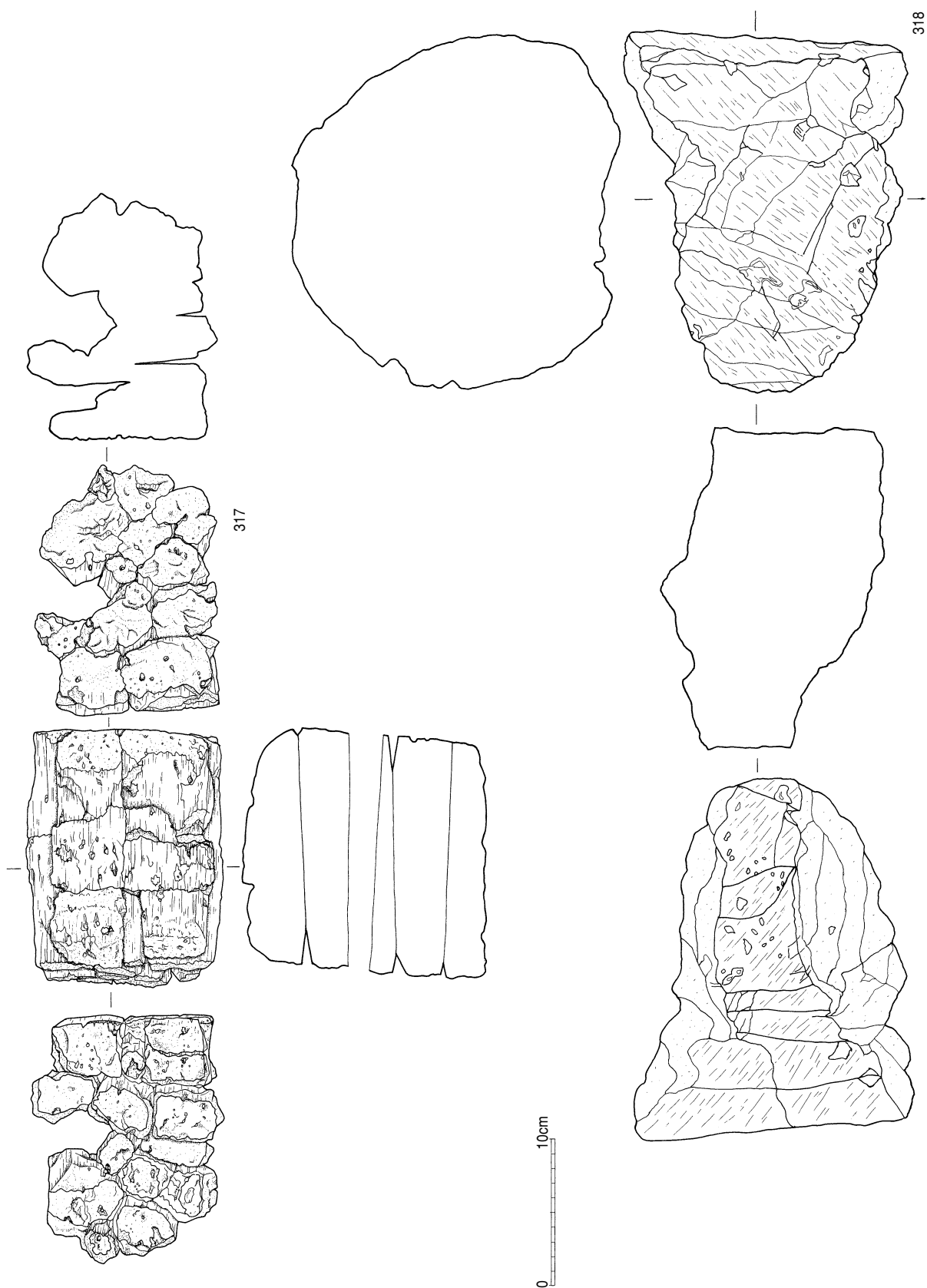
314は扁平の角柱状のもので2面の使用面がみられる。315は厚みのある角柱状のもので4面の使用面がみられる。316は長楕円の円礫の片面を砥石に使用している。火がかかったために曲板状に割れている。これは接合の状態で図化したものである。

軽石加工品（第67図）（318～334）

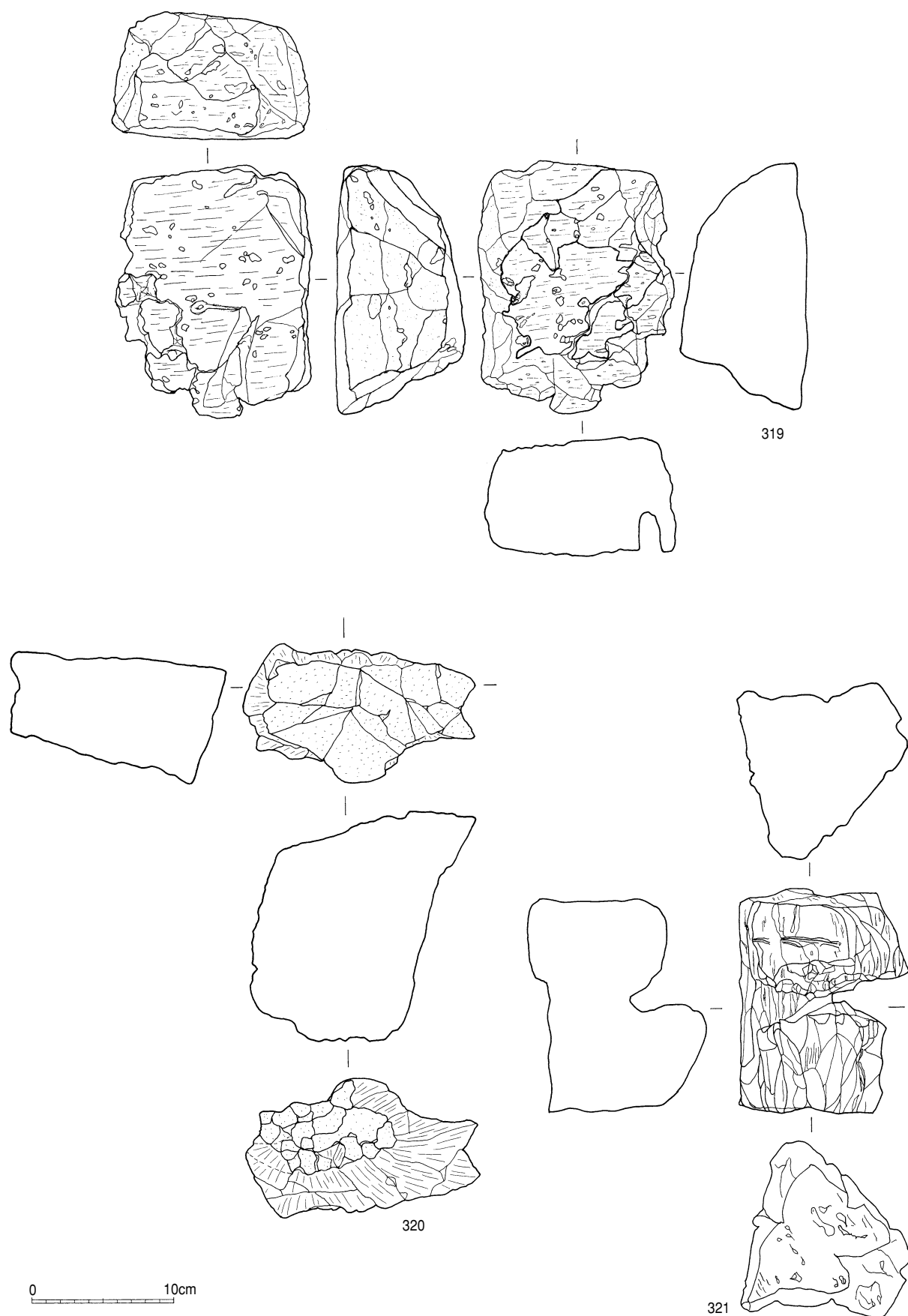
317は幅13cm，奥行き16cm，高さ16.5cmの製品で，両面が平面に加工され，表面が火を受けたように赤化している。この製品は6面とも加工されているが，2～5cmの角面柱状に割れているものを15個前後接合したものである。318は径21～24cmの円筒状に加工したものである。一部挟って加工しているが周りの加工方向は縦位に面を造るように施している。なお，両面は割られて欠損している。319は幅12cm長さ15cmの底面に，高さ9cmの角張ったかまぼこ状に加工したものである。加工面は磨りきりで調整している。320は幅8cm，高さ15cmの円錐状に加工したもので，頂上部は潰されている。321は一辺が約11cm，長さ15cmの三角柱に加工したものである。322は長さ17cm，幅12cm，高さ10cmにやや丸みを施し加工したものである。323は長さ15cm，幅10cm，高さ9cmで，一部



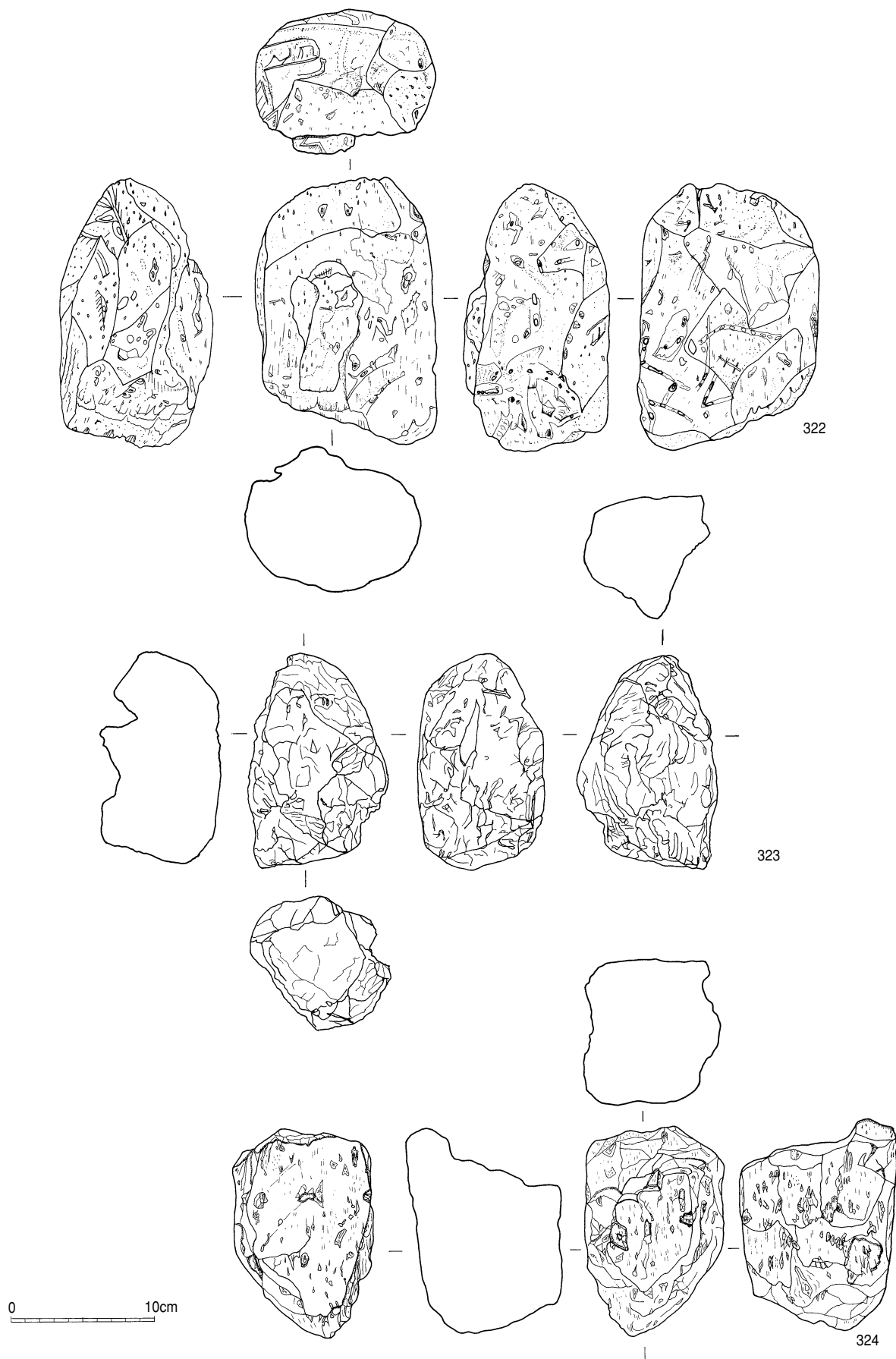
第66図 奈良・平安時代出土遺物(13)砥石



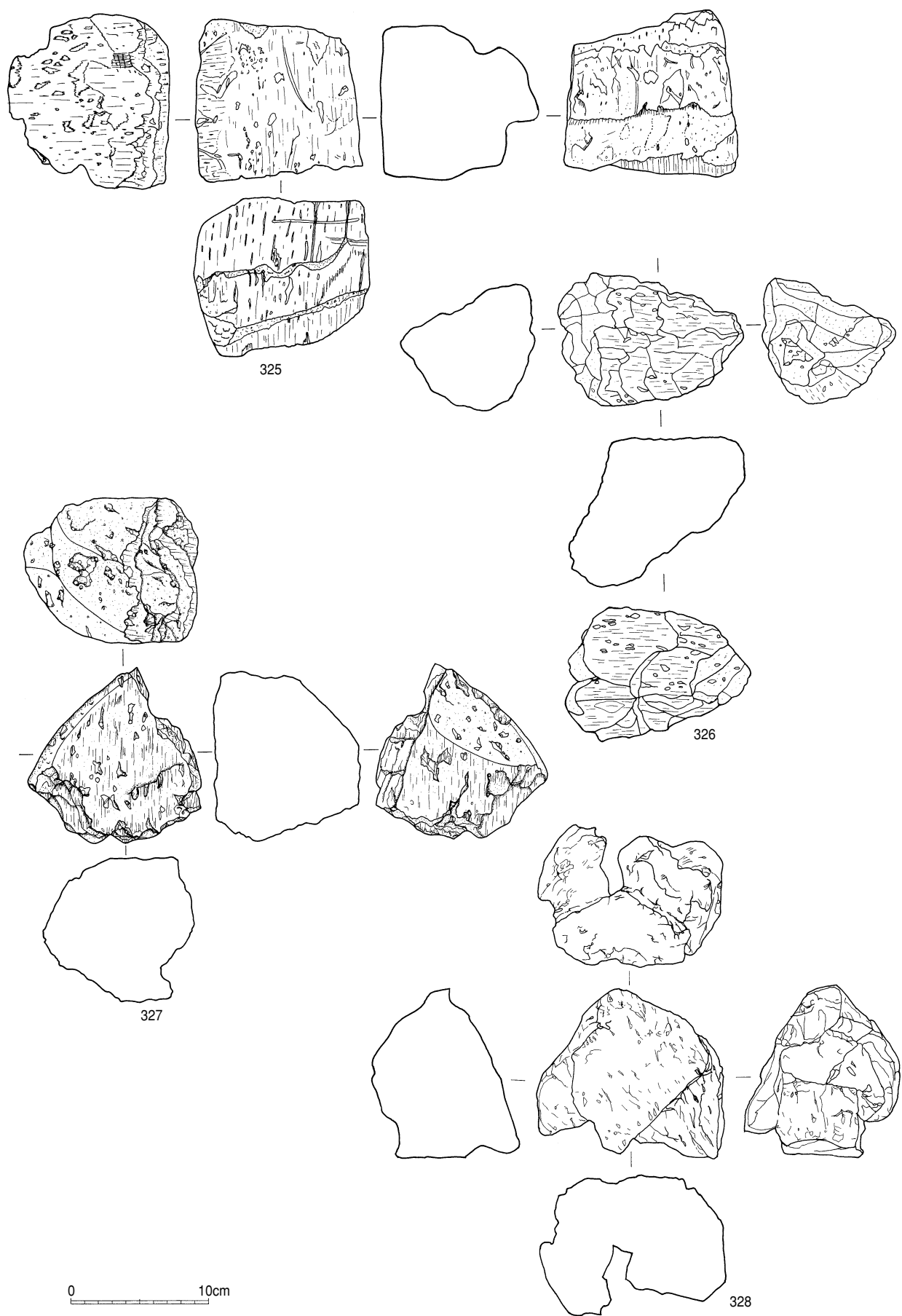
第67図 奈良・平安時代出土遺物(14)軽石製品



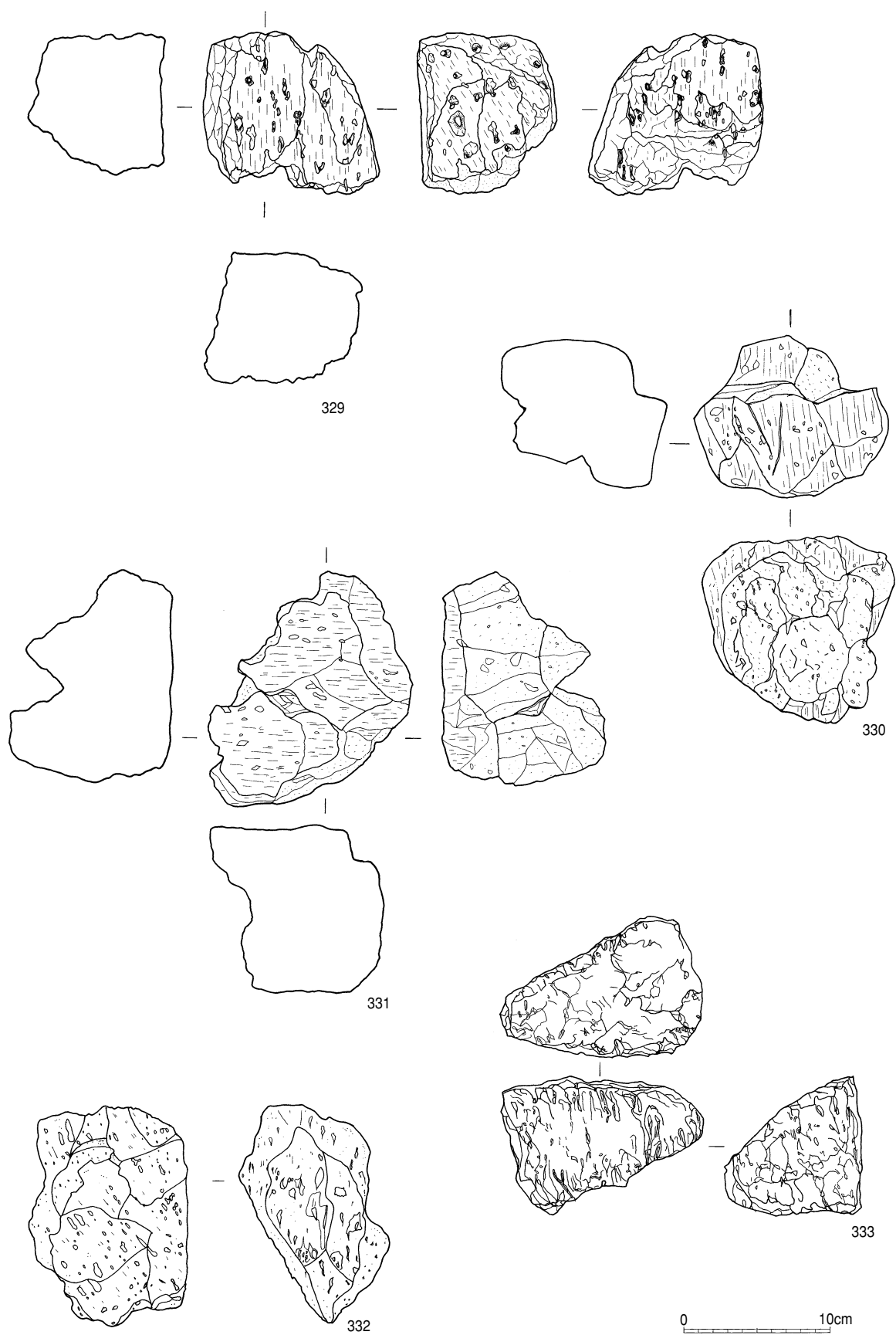
第68図 奈良・平安時代出土遺物(15)軽石製品



第69図 奈良・平安時代出土遺物(16)軽石製品



第70図 奈良・平安時代出土遺物(17)軽石製品



第71図 奈良・平安時代出土遺物(18)軽石製品

を尖り気味に施し加工したものである。324は長さ14cm、幅11cm、高さ10cmで、一部を尖らせ五角柱状に施し加工したものである。325は長さ10cm、幅12cm、高さ12cmで、四角柱状に施し加工したもので、一部が欠損している。326は長さ13cm、幅10cm、高さ10cmで、一部を尖らせ円錐状に施し加工したものである。327は長さ11cm、幅12.5cm、高さ12cmで、円盤状に施し加工したもので、大半が欠損している。328は長さ11.5cm、幅13.5cm、高さ11cmで、一部を尖らした四角柱状に施し加工したもので、一部が欠損している。329は長さ11cm、幅12cm、高さ10cmで、四角柱状に施し加工したもので、一部が欠損している。330は長さ13cm、幅13cm、高さ10cmで、円盤状に施し加工したもので、大半が欠損している。331は長さ14cm、幅12cm、高さ11cmで、四角柱状に施し加工したもので、一部が欠損している。332は長さ12.5cm、幅10cm、高さ7cmで、四角柱状に施し加工したもので、一部が欠損している。333は長さ9cm、幅14cm、高9.5cmで、三角柱状に施し加工したもので、一部が欠損している。

第16表 奈良・平安時代石器観察表

挿図No.	報告No.	出土区	層位	器 種	石材	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	取上No.	備考
66	314	C-5	Ⅲ下	砥石	砂岩	73.0	38.0	15.0	80.62	1386	
	315	B-3 C-3	Ⅲ Ⅲ下	砥石	砂岩	81.0	35.0	32.0	114.34	1963 2704	
	316	B-3	Ⅲ	砥石	砂岩	112.0	65.0	49.0	360.00	140 242	
67	317	B-3	Ⅲ	軽石製品	軽石	176.0	135.0	168.0	1280.00	8245(26) 8246(27) 8250(31) 8254(34) 8263(44) 8281(62) 8456(237)	軽集2号
	318	B-3	Ⅲ	軽石製品	軽石	192.0	245.0	155.0	3150.00	8444(225)	軽集2号
68	319	B-6	Ⅳ	軽石製品	軽石	179.0	137.0	90.0	780.00		大型掘立建物 ビット1号
	320			軽石製品	軽石	161.0	71.0	161.0	600.00		
	321	B-3	Ⅲ	軽石製品	軽石	156.0	114.0	116.0	540.00	8265(46) 8303(84)	軽集2号
69	322	B-3	Ⅲ下	軽石製品	軽石	185.0	125.0	102.0	620.00	1684	
	323	C-5	Ⅲ下	軽石製品	軽石	150.0	98.0	93.0	330.00	742	
	324	B-6	Ⅳ	軽石製品	軽石	134.0	110.0	97.0	517.50	243	
70	325			軽石製品	軽石	118.0	118.0	115.0	700.00		
	326	B-3	Ⅲ	軽石製品	軽石	136.0	95.0	107.0	360.00	8335(116)	軽集2号
	327	B-3	Ⅲ	軽石製品	軽石	126.0	125.0	105.5	460.00	1798	
	328	C-5	Ⅲ下	軽石製品	軽石	122.0	134.0	103.0	310.00	3973	
71	329	B-3	Ⅲ	軽石製品	軽石	111.0	121.0	93.0	380.00	8441(222)	軽集2号
	330	B-3	Ⅲ	軽石製品	軽石	127.0	138.0	108.0	410.00	8350(131) 8352(133)	軽集2号
	331	B-3	Ⅲ	軽石製品	軽石	140.0	146.0	113.0	670.00	1945	
	332	B-3	Ⅲ下	軽石製品	軽石	150.0	111.0	105.0	360.00	1683	
	333	C-5	Ⅲ下	軽石製品	軽石	97.0	136.0	92.0	288.36	439	

第V節 まとめ

1 縄文時代早期

(1) 遺構

ア 集石

集石が2基検出されている。1号集積は散乱状態であるため、使用後の可能性が高い。2号集石は正形状に集められ、使用前の準備段階の可能性はある。ともに、窪みの掘りこみは検出されていない。

イ 土坑

土坑は2基検出されている。ともに、P11火山灰が入り込んでいるので、早期の土坑である。用途は不明である。

(2) 土器

土器は塞ノ神A式土器と塞ノ神B式土器、押型文土器が出土している。この中でも塞ノ神B式土器が主体で、次に塞ノ神A式土器がみられる。また、押型文土器が少量で出土している。

塞ノ神A式土器は口縁部に沈線や列点で文様を施すタイプと微隆起突帯をもつタイプがある。胴部の文様は沈線と撚糸文で構成している。

沈線や列点を施すタイプは1・2・3・5・6である。微粒起突帯をもつタイプは4である。なお、1と2は同一個体である。この施文は塞ノ神A式としては珍しい。

塞ノ神B式土器は14・15・17～35である。文様は貝殻刺突と沈線文を組み合わせた文様構成をしている。土器の整形は全体的に厚手で粗雑な器面調整である。

器形は頸部で締まる17～24とバケツ状になる34・35、また、同類の無紋と考えられる41がある。胴部の沈線は17・18・27・28・30・34にみられるような枠線内に沈線を施し、大きく描くものと、25・26・32・33にみられる1～3本で格子を施すものが出土している。

これらは、分布的にも層位的にも分けられない状態で検出している。

石器は石鏃のほか石錐、磨製石斧、局部磨製石斧、石匙が出土している。この中で局部磨製石斧は、使用して刃こぼれがみられる形状をしている。

2 縄文時代前・中期

(1) 遺構

落とし穴が8基検出され、時期的な課題を除けば配置は弧状にみられる。

時間差を加味して分析すると、2基近くにあるところが2号と3号、4号と8号、6号と7号で、単独にあるところが1号と5号である。また、落とし穴の逆茂木痕については、無しが2号と5号、1本が4号、3本が1号と3号と6号、4本が8号、7本が7号である。そして、形状では長方形が1号と3号と4号と6号で、楕円形が2号と5号と7号と8号に分かれる。

これらをまとめると、時間差は形状での配置が妥当な線ではないかと考えられる。

(2) 遺物

遺構とは重ならずG-13区に出土しているために遺構との関係は判断がつかない。土器は春日式土器が1個体出土している。

3 縄文晩期

(1) 遺構

遺構は竪穴住居跡が1基、焼土跡が1基検出されている。竪穴住居跡は円形プランで浅い掘り込みである。柱穴は中央に1本である。また、壁に土器を埋め込んだ跡があるが、住居跡に周りにもピットがみられ、住居跡との関係は不明である。なお、遺物は住居跡の竪穴内に出土しているので住居跡は縄文晩期と思われる。

その縄文晩期の時期は口縁部に沈線を施す入佐式土器の時期と考えられる。

焼土跡は、若干の窪みにあり、層的に縄文晩期の範疇に含めたが、縄文晩期という確証はない。

(2) 遺物

深鉢からみると住居跡で示した縄文晩期の入佐式土器とその無紋の土器が出土している。この無紋の土器から判断すると、上加世田式土器に近いものと考えられる。なお、浅鉢も上加世田式土器に近い形をしている。

石器は粗く作られた石鏃のほか、石錐がある。また、磨石や敲石類が出土している。

4 奈良・平安時代

(1) 遺構

掘立柱建物跡が三角形の窪地に4建検出された。建物跡は2間3間を基本としたもので、規模は1号から3号が類似し、4号は一回り大きい。また、桁行の方位は1号から3号までが北西と南東方向で、4号が略南北である。よって、時期的なものは、1号～3号と4号の2時期の可能性がある。

これらの特徴は建物跡内に焼土跡と焼けた軽石がみられるもので、掘立柱建物内に土間があり何らかの工房施設に使用した可能性がある。

焼土跡は建物跡内のほかに周りに柱穴が見つからない状態で西側に離れて検出されている。この性格は判断材料がなく、記録だけに終わった。

(2) 遺物

分布は、遺構が窪地にあるため遺物もその地形の中に出土している。中には、掘立柱建物跡の近くに土師甕が集中して出土している所もある。

遺物は土器類が、土師器の甕形土器、坏、台付皿、碗、黒色土器の碗、須恵器の甕形土器、壺形土器、瓦泉、それに製塩土器が出土している。

土師器の甕形土器は口縁部が「く」の字状に外反し、底部はやや尖り気味の丸底を呈している。土師器の坏は篋切り無しで、口縁部は立ち上がりから直線的に整形している。この坏には墨書土器が含まれている。

また、高坏の脚部も出土している。

脚がある土器の中で、台付皿が出土している。器形の特徴は高台が深い。

碗はやや平木気味の高台の浅いものから深いものまで出土している。黒色土器も同様である。

須恵器は甕形土器の口縁部に帯びを付けたものと、沈線を入れたものが出土している。壺は肩部までで口縁部は見あたらなかった。その他に珍しい瓦泉の口縁部が出土している。

その他では、轆の羽口や紡錘車、それと円盤状に作った製品が出土している。

石の道具としては角状に整形された砥石が3点、丸みのある砥石が1点出土している。角状のものは扁平に整形されたものが1点、厚く作られたものが2点あり、かなり使用され半欠の状態である。丸みのものは後から火を受けたらしく板状に剥がれている。砥石に使用された面は1面だけである。

軽石製品は、表面が焼けた状態のものとそうでないもののが出土した。一部を除きブロック状に割られ、器面はカット面や傷が見られる。出土状況は建物内の焼土跡にあり、韃の羽口も出土しており何らかの火を使う工房に使用される時かその直後にブロックに割られた可能性がある。

〈参考文献〉

- ・ 河口貞徳 昭和63年『日本の古代遺跡38鹿児島』保育社
- ・ 鹿児島県教育委員会1979「木佐貫原遺跡・三代寺遺跡」『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書』（11）
- ・ 枕崎市教育委員会1995「二本木遺跡」『枕崎市埋蔵文化財発掘調査報告書』（9）

高古塚遺跡

菅牟田遺跡

中之迫遺跡

第1節 発掘調査の経過

1 調査に至るまでの経緯

日本道路公団（現西日本高速道路株式会社）鹿児島工事事務所は、東九州自動車道（末吉財部IC～鹿屋串良IC）建設を計画し、当該事業区における埋蔵文化財の有無について鹿児島県教育委員会（以下文化財課）に照会を行った。

これを受けて、文化財課と埋蔵文化財センターは、平成11年度に分布調査を実施した結果、33ヶ所の遺跡の存在が明らかになった。この結果をもとに、道路公団、県土木部高速道路対策室、文化財課、埋蔵文化財センターの4者で協議を重ね、対応を検討してきた。

しかし、その後、道路公団民営化の政府方針が提起され、事業計画の見直しが行われ、建設コストの削減も検討されることとなった。このような社会情勢の変化に伴い、遺跡の緻密な把握が要求されるようになり、分布調査の再実施や試掘調査及び確認調査などの事前調査を重ね、遺跡の把握に努めてきた。分布調査、試掘調査及び確認調査の期日は、次のとおりである。

詳細分布調査	平成13年7月10日～平成13年7月26日
試掘調査	平成13年9月17日～平成13年12月25日
確認調査	平成13年10月1日～平成14年3月22日

（関山西・関山・狩俣遺跡）

その後、道路公団の民営化閣議決定と新直轄方式に基づく道路建設が確定し、平成15年度から埋蔵文化財の発掘調査が開始された。

平成15年度は、井山遺跡の試掘調査、定段遺跡及び稲村遺跡の工事用道路建設予定地の調査、平成16年度は中之迫遺跡の確認調査と本調査、菅牟田遺跡の確認調査、前年度に続いて定段遺跡の確認調査及び唐尾遺跡の確認調査と本調査を行った。平成17年度は、前年度に引き続いて唐尾遺跡・関山西遺跡・関山遺跡・定段遺跡の本調査及び建山遺跡・狩俣遺跡・稲村遺跡・高古塚遺跡の確認調査と本調査を行った。平成18年度は、昨年度に引き続いて建山遺跡・狩俣遺跡・高古塚遺跡の本調査を行い、鳥居川遺跡・チシャノ木遺跡及び西原段I遺跡の確認調査・本調査、野鹿倉遺跡の確認調査を実施した。

2 調査の組織

菅牟田遺跡・中之迫遺跡

平成16年度 確認調査・本調査

事業主体者

日本道路公団九州支社鹿児島工事事務所
鹿児島県土木部高速道路対策室

調査主体者

鹿児島県教育委員会

企画・調整

鹿児島県教育庁文化財課

調査責任者

県立埋蔵文化財センター 所長 木原 俊孝

調査企画者

次長兼総務課長	賞雅 彰
調査課長兼南の縄文調査室長	新東 晃一
調査課長補佐	立神 次郎
主任文化財主事兼第二調査係長	彌榮 久志
主任文化財主事	長野 眞一

調査担当者

文化財主事	鶴田 静彦
〃	岩澤 和徳

事務担当者

総務係長	平野 浩二
主 事	福山恵一郎

高古塚遺跡

平成17年度 確認調査

事業主体者

西日本高速道路株式会社鹿児島工事事務所
鹿児島県土木部高速道路対策室

調査主体者

鹿児島県教育委員会

企画・調整

鹿児島県教育庁文化財課

調査責任者

県立埋蔵文化財センター 所長 上今 常雄

調査企画者

次長兼総務課長	有川 昭人
次長兼南の縄文調査室長	新東 晃一
第二調査課長	立神 次郎
主任文化財主事兼第一調査係長	彌榮 久志

調査担当者

文化財研究員	木内 敏生
〃	馬籠 亮道

事務担当者

主幹兼総務係長	平野 浩二
主 事	福山恵一郎

平成18年度 本調査

事業主体者

国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所
鹿児島県土木部高速道路対策室

調査主体者

鹿児島県教育委員会

企画・調整
 鹿児島県教育庁文化財課
 調査責任者
 県立埋蔵文化財センター 所長 上今 常雄
 (～H18. 7. 31)
 宮原 景信
 (H18. 8. 1～)

調査企画者
 次長兼総務課長 有川 昭人
 次長兼南の縄文調査室長 新東 晃一
 第二調査課長 立神 次郎
 主任文化財主事兼第一調査係長 彌榮 久志

調査担当者
 文化財主事 福永 修一
 文化財研究員 木内 敏生
 文化財調査員 市末 真澄

事務担当者
 総務係長 寄井田正秀
 主 事 五百路 真

平成19年度 報告書作成
 事業主体者
 国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所
 鹿児島県土木部高速道路対策室

作成主体者
 鹿児島県教育委員会

作成統括者
 県立埋蔵文化財センター 所長 宮原 景信

作成企画者
 次長兼総務課長 平山 章
 次長兼南の縄文調査室長 新東 晃一
 調査第二課長 立神 次郎
 主任文化財主事兼第一調査係長 彌榮 久志

作成担当者
 文化財主事 福永 修一

事務担当者
 総務係長 寄井田正秀
 主 事 五百路 真

報告書検討委員会 平成19年12月17日 所長他11名
 報告書指導委員会 平成19年12月13日 次長他3名

指導者・協力者
 鹿児島大学法文学部準教授 本田道輝
 福岡大学人文学部準教授 桃崎祐輔
 曾於市教育委員会

助言者
 池畑耕一, 長野眞一, 中村耕治, 堂込秀人, 東 和幸,
 内山伸明, 前迫亮一, 中村和美, 長崎慎太郎, 内村光伸,

黒川忠広, 横手浩二郎, 西園勝彦, 上床 真, 川口和之,
 馬籠亮道

3 発掘調査の経過

高古塚遺跡

試掘調査 (平成13年度)

試掘調査は, 工事施工区域内を対象としてトレンチを6カ所設定して行った。試掘調査の結果, 施工区域内の全域に縄文時代早期から前期の包含層と区域内の一部に縄文時代後晩期から古代の包含層が残存することが判明した。

確認調査 (平成17年度)

確認調査は, 工事施工区域内を対象として平成18年1月10日～1月27日までの期間実施した。確認調査の結果, 縄文時代早期及び古代の遺物・遺構が発見された。調査の経過については, 日誌抄を持ってかえる。

日誌抄

1月10日～13日

・トレンチ設定 (1 T～6 T) 表土剥ぎ, IV a 層～VII 層掘り下げ

1月16日～20日

・トレンチ (2 T～6 T) IV a 層～VIII 層掘り下げ

1月23日～27日

・トレンチ (1 T, 2 T, 5 T) VI 層～XVI 層掘り下げ, 遺物取り上げ, 写真撮影

本調査 (平成18年度)

本調査は, 確認調査の結果に基づき, 工事施工区域内6,410㎡を対象に実施した。調査では, 計画路線センター杭STA286+20杭とSTA286+60杭を結んだ線を基準軸とし, 10m間隔の区画 (グリッド) を設定して調査を実施した。グリッドは東西方向へA～N, 南北方向に1～22とし, A-1区, D-8区というようにアルファベットと数字を組み合わせた呼称とした。

調査は, 東側から着手し古代の包含層から掘り下げを開始し, 土坑2基を検出した。センターライン西側からは, 多量の遺物と伴に焼土跡を検出し, 遺構の把握に努め, 焼土跡を伴う掘立柱建物跡2棟を検出した。この建物跡は, 同一の場所で主軸方向を変更して建て替えられたものである。

縄文時代の調査では, 下層確認中にアカホヤ火山灰層の直上から縄文時代中期に該当する落とし穴が検出されたため, 調査区全体での検出に移行し, 6基の落とし穴を検出した。縄文時代早期の調査は, 先行トレンチを駆使し遺物の出土状況の把握に努め, 全面調査を行い集石13基を検出した。また, 薩摩火山灰層上面で遺構検出を行い, 3基の落とし穴を検出している。

また、本遺跡の各層状が厚いため確認調査時に旧石器時代の調査を実施出来なかった区域については、確認調査を行ったが、遺物・遺構の発見には到らなかった。

本調査の実施期間は、平成18年5月9日～9月28日（実働76日）である。調査の経過については、日誌抄を付けてかえる。

日誌抄

5月9日～26日

- ・調査開始、（東側から調査を開始）表土剥ぎ
- ・グリッド設定掘り下げ（古代～縄文後期）
- ・C～E-14～20区Ⅳa～Ⅴa層掘り下げ、遺物取上げ、1号～3号土坑実測、写真撮影
- ・C～F-7～10区Ⅲ～Ⅴa層掘り下げ、遺物取上げ、コンタ図作成、写真撮影

6月1日～28日

- ・C～E-14～20区Ⅴb層上面精査、コンタ図作成、1号～3号土坑実測、写真撮影
- ・C～F-7～10区Ⅳa～Ⅴa層掘り下げ、遺物取上げ、Ⅳb層上面コンタ図作成、写真撮影、Ⅴb層上面精査、1号～3号落とし穴検出、実測、写真撮影、Ⅴb層上面コンタ図作成
- ・G-8～9区表土剥ぎ、Ⅲ～Ⅳa層掘り下げ、遺物取上げ、写真撮影

7月3日～28日

- ・C～E-14～20区Ⅶ層掘り下げ、遺物取上げ、1号・2号集石検出、写真撮影、実測、コンタ図作成
- ・C～D-6区表土剥ぎ、Ⅳa層掘り下げ、Ⅴb層上面精査、コンタ図作成
- ・C～F-7～10区Ⅶ層掘り下げ、遺物取上げ
- ・G-8～9区表土剥ぎ、Ⅲ～Ⅳa層掘り下げ、遺物取上げ、写真撮影
- ・落とし穴3号・4号検出、実測、写真撮影

8月1日～28日

- ・C～F-6区Ⅳa層掘り下げ、遺物取上げ、Ⅴb層上面精査、遺構検出、写真撮影、コンタ図作成
- ・C～F-7～10区Ⅶ層掘り下げ、遺物取上げ、Ⅸ層上面精査、写真撮影
- ・C～D-11～13区表土剥ぎ、Ⅴb層上面精査、遺構検出、コンタ図作成、Ⅶ層掘り下げ、遺物取上げ、写真撮影
- ・C-14～16区、F-8～10区下層確認トレンチ（旧石器）Ⅹ層～ⅩⅦ層掘り下げ
- ・集石3号～7号集石検出、実測、写真撮影
- ・落とし穴1号～5号半裁、逆茂木痕検出、実測、写真撮影

9月4日～9月28日

- ・C～F-7～10区Ⅸ層上面遺構検出、コンタ図作成、写真撮影
- ・C～D-11～20区Ⅸ層上面精査、コンタ図作成
- ・F-8～10区下層確認トレンチ（旧石器）Ⅹ層～ⅩⅦ層掘り下げ
- ・G～I-5～12区表土剥ぎⅣa層・Ⅶ層掘り下げ、遺物取上げ、遺構検出、Ⅳb層、Ⅸ層上面、コンタ図作成、写真撮影
- ・K～L-4区トレンチ掘り下げ、Ⅶ層～ⅩⅦ層掘り下げ
- ・掘立柱建物跡、検出、実測、写真撮影
- ・落とし穴6号～9号検出、半裁、実測、写真撮影
- ・集石8号～13号検出、実測、写真撮影
- ・調査終了（埋め戻し作業）
- ・9月17日（日）事務所、作業員詰所が台風13号の被害を受ける

第2節 遺跡の位置と環境

1 位置と特色

唐尾遺跡は、鹿児島県曾於市末吉町諏訪方、高古塚、菅牟田、中之迫の3遺跡は、いずれも同県同市大隅町岩川に所在する。

遺跡の所在する曾於市は、鹿児島県の北東部、宮崎県との県境に位置し、北及び東は宮崎県都城市、西は霧島市と垂水市、南は鹿屋市・大崎町・志布志市に隣接している。北部の財部、末吉市街地は、都城盆地の一角をなし大淀川上流にあたる溝ノ口川、横市川に沿って水田や集落が点在している。中心部の大隅町は、菱田川支流の佳例川、前川、月野川、梅渡瀬川の4河川によって南北に3つの台地に大きく分けられ、これらの河川や支流の小河川に沿って水田が点在し、岩川市街地は菱田川に前川が合流する岩川低地にある。

曾於市域は、西部は瓶臺山(543m)、白鹿岳(604m)、陣ヶ丘(430m)と山地が南北に連なり、北東部の都城盆地と南部の肝属平野に傾斜する台地からなっている。そして、この台地間を大淀川の支流である溝ノ口川、横市川が東流し、菱田川の支流である佳例川、前川、月野川が南東に流れる。地質は、大部分がシラス、ボラなどの火山灰土壌となっている。年平均気温は、17.6℃、年間降水量は、約2,230mm程度である。

さて、唐尾、高古塚、菅牟田、中之迫の4遺跡が所在する諏訪方、岩川地区は、曾於市のほぼ中央部にあたり、西部の牧ノ原台地から東部の岩川低地に漸移する標高200m～300mの丘陵性台地が卓越する地域である。さらに、この丘陵性台地は、大淀川水系と菱田川水系に属する諸河川により浸食を受け、小台地群に分断されている。4遺跡はいずれもこうした小台地群に立地している。

2 遺跡を取り巻く地形・水文環境

5万分の1の地形図図幅の範囲において行った地形分類によって、遺跡のおかれた地形を概観すると、最大特色は広大なシラス台地(火山灰砂台地)の発達であり、図幅面積の約8割に達している。図幅西部を南北に走る高隈山地があって、東側に緩やかに傾くシラス台地の地域と西側の急傾斜で鹿児島湾に臨み始良カルデラの東壁を形成する地域を分かっている。

(1) 山地及び丘陵地

① 山地

高隈山地は、南部より北部に向かって七岳(881m)、鵜岳(885m)、次第に高さを減じ狐ヶ岳(557m)に達し、その中心部は南接する鹿屋図幅内にある。起伏量によって分類すれば大部分が起伏量200m～400mの中起伏山地に該当する。

② 丘陵地

高隈山地に付着するように東側に広がるのがシラス台地で、平行して流れる小河川によって寸断され、きわめて狭長な台地面となった物が多く、さらに頂部の平坦面を失ってほぼ水平な稜線によって過去の台地地形を暗示するに過ぎなくなったものが多い。また、山地の一部がシラスに埋積されず台地上に島状に浮かんでいるものもある。大起伏丘陵は、成因的にみても周辺山地と深い関係であるので、ほぼシラス台地群の西辺、東辺をかこむようにあらわれている。

(2) 台地

高隈山地東斜面から鵜塚山地まで広がる地域はかつて一続きのシラス台地を形成していたと思われる。西高東低のこの原台地はその後高隈山地から東流する諸河川によってきわめて狭長な多くの台地に分断され、その台地もまた台地縁辺部に食い込む谷の頭部侵食によってさらに小さい台地に分断されてしまった。唐尾遺跡、高古塚遺跡、菅牟田遺跡、中之迫遺跡もこのような小台地の縁辺上に位置する。

(3) 低地

本図幅内の低地は、特に大きいものはなく、菱田川の支流である佳例川、前川、月野川、大鳥川の本支流に沿った小河谷平野と鹿児島湾沿岸の扇状地性と三角州性の低地であり、ほとんどが台地の間にある谷底低地である。

3 遺跡を取り巻く地質環境

本図幅中にみられる最も古い岩石は、大隅半島の他の地域と同じく、中生界に属するもので、砂岩頁岩の互層よりなる。比較的砂岩部に富んだ急峻な山地を形成し、山体全体の大部分が中生層によって構成されている。西南部の高隈山地では中生層に属する砂岩頁岩の互層を貫いた第三紀中新世の花崗岩がみられる。この花崗岩は風化が著しく、新鮮な露頭はほとんどみられない。これら図幅西側の山地地域では中生界や花崗岩などの基底岩類を覆って溶結凝灰岩、シラスが分布し、局部的に安山岩もみられる。上記すべての岩類を覆って広くローム層が分布するため、平坦部や傾斜の緩やかな斜面ではローム層下位の岩類の露出するところは極めて少ない。

山地地域の東側には広大なシラス台地が広がり、図幅全域のおよそ2/3の面積を占めている。この台地においては、シラスの下位に普遍的に溶結凝灰岩が存在するが、実際に露出しているのは、佳例川、前川、月野川、大鳥川など菱田川上流の本支流の下床部に限られる。同じことがシラスについてもいえ、一般的にはシラスを覆って広くローム層が分布するため直接これが露出する

のは、台地を切る河谷の斜面か切り取り面、あるいはかつての崩壊地などである。シラス台地の基底にも西部の高隈山地を構成する中生界あるいは古第三系に属する固結堆積岩類が全面的に伏在するが、実際には河谷の一部にわずかに露出するか、台地上に島状の小丘を形成して点在するに過ぎない。このシラス下面の中生界と溶結凝灰岩との間には降下軽石層、砂礫層、泥岩層などをはさむことが多い。西部の海岸は大隅半島と鹿児島湾を画するもので、急峻な崖をもって湾内に没し、急傾斜を示しつつ海深200m前後の深度に達する。この斜面は当地域をはじめ大隅半島北部に広く分布するシラスと溶結凝灰岩の大部分が放出された始良カルデラの東縁を画するカルデラ壁にはほぼ相当するものと考えられている。図幅北西部にはシラス上位に角礫層がみられるほか、最上部にはおもに桜島火山より放出された降下軽石層が数10cmの厚さで分布し「ボラ」とよばれ農耕上の障害をなしている。

4 各遺跡の位置と特色

(1) 唐尾遺跡

唐尾遺跡は、東西に広がる高松台地の南端に位置する。遺跡の北側には、県道をはさみ関山遺跡が所在し、南側は急峻な崖地で下部に菱田川支流の佳例川が東流する。同河川に付随する狭小の谷底平野を挟んで佐敷台地が広がる。

(2) 高古塚遺跡

高古塚遺跡は、笠木台地の西に位置する。遺跡の北西側には、小さな谷を挟んで同一台地縁辺に狩俣遺跡、建山遺跡が所在し、谷底低地を挟んで佐敷台地が広がる。遺跡の南側は、急峻な崖地で菱田川支流の前田川が東流し、同河川に付随するように谷底平野が広がる。対岸の久木山台地には溶結凝灰岩の台地が前田川に沿って広がっている。

(3) 菅牟田遺跡・中之迫遺跡

菅牟田遺跡と中之迫遺跡は、久木山台地にあり、菅牟田遺跡は台地の北端に、中之迫遺跡は中央に位置する。菅牟田遺跡は南北を谷に挟まれた狭小の台地上にあり、遺跡の南東に定段・稲村遺跡が所在する。中之迫遺跡は、小台地の縁辺上にあり、南側は急峻な谷状地形を呈し、菱田川支流の高田川上流部分にあたる。

5 歴史的環境

古代の唐尾遺跡、高古塚遺跡、菅牟田遺跡、中之迫遺跡の立地する場所は、「続日本紀」に日向の国から「贈於」など4郡が分置されたと大隅国分立（和銅6年）の記事に記載されている。律令制下では、日向国諸県郡財

部郷に属したとする説が有力である。

中世に島津新立庄としてみえる深川院は、財部郷から分立したものと考えられ、大隅国建久図田帳に島津庄の新立庄七五〇丁のうち「深川院百五十余丁」とあり、財部院などとともに保延年間（1135～41）以降の新庄で、近衛家領で惣地頭は中原親能（島津忠久とも）、国務に従わなかったと記されている。

また、中世に入ると延文元年（1356）8月6日の「足利義詮袖判安堵下文」（島津家文書）に大隅国本庄内として「岩河村」の名があり、島津貞久に安堵されている。この地は菱田川上流の右岸一帯を中心とし、現曾於市大隅町岩川から同市末吉町南西部にわたる地に比定される。

近世に入ると、文禄3年（1594）8月に北郷忠虎領内として末吉など15カ所・六万九千石の検地が行われている（「北郷忠虎譜」旧記雑録）。庄内の乱（1599）後、島津氏の直轄領となり外城の一つとして末吉郷が置かれ7か村が属した。それぞれの遺跡の所在する村は、唐尾遺跡が諏訪方村、高古塚遺跡は中之内村、菅牟田遺跡、中之迫遺跡は五拾町村である。

中之内村の梶ヶ野には、鹿児島藩が末吉野牧といわれる馬牧を置き、その領域は西側の坂元村に及び福山野牧と隣り合っていた。中之内村と五拾町村は、島津氏家老職伊勢家の私領となったが、戊辰戦争後岩川郷として独立（1869）した。

当地は、明治4年の廃藩置県後7月に鹿児島県、同年11月に都城県に属し、同6年鹿児島県に編入された。同20年東嶺郡の管轄となり、同22年町村制の施行に伴い、末吉村、岩川村が成立。同29年成立の嶺郡に属し、末吉村が大正11年町村制施行して末吉町に、岩川村が同13年町村制を施行して岩川町となり、昭和30年に岩川町・恒吉町・月野村が合併し大隅町となり、同年4月に荒谷地区を編入し、平成17年に財部町・末吉町・大隅町が合併し曾於市となった。

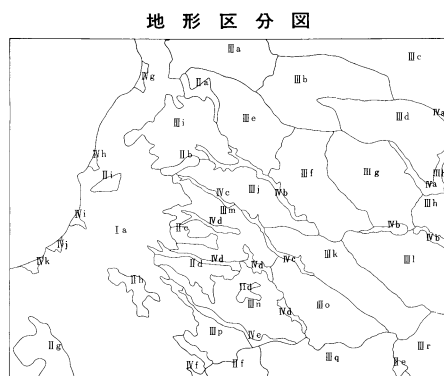
遺跡の所在する曾於市末吉町と大隅町の考古学的発掘調査は、末吉町では1930年に鳥井竜蔵博士による姥石（住吉神社）の調査が行われた。本格的な調査は、1963年に河口貞徳氏により入佐遺跡が、1969年には中岳洞穴遺跡が発掘され、それぞれ縄文時代晩期の入佐式土器及び中岳式土器の標識遺跡となった。平成8年から東九州自動車道建設（国分IC～末吉財部IC～大隅IC）に伴う大規模な発掘調査が行われ、桐木遺跡、関山西遺跡、関山遺跡では旧石器時代から近世にかけての遺構、遺物が確認された。

大隅町では1956年に同志社大学の酒詰伸男博士が行った上八合遺跡の発掘調査である。調査では、縄文時代の遺物が出土したといわれている。その後、本格的な発掘調査は長く行われていなかったが、平成4年以降からは町教育委員会が調査主体となって各種農業基盤整備に伴

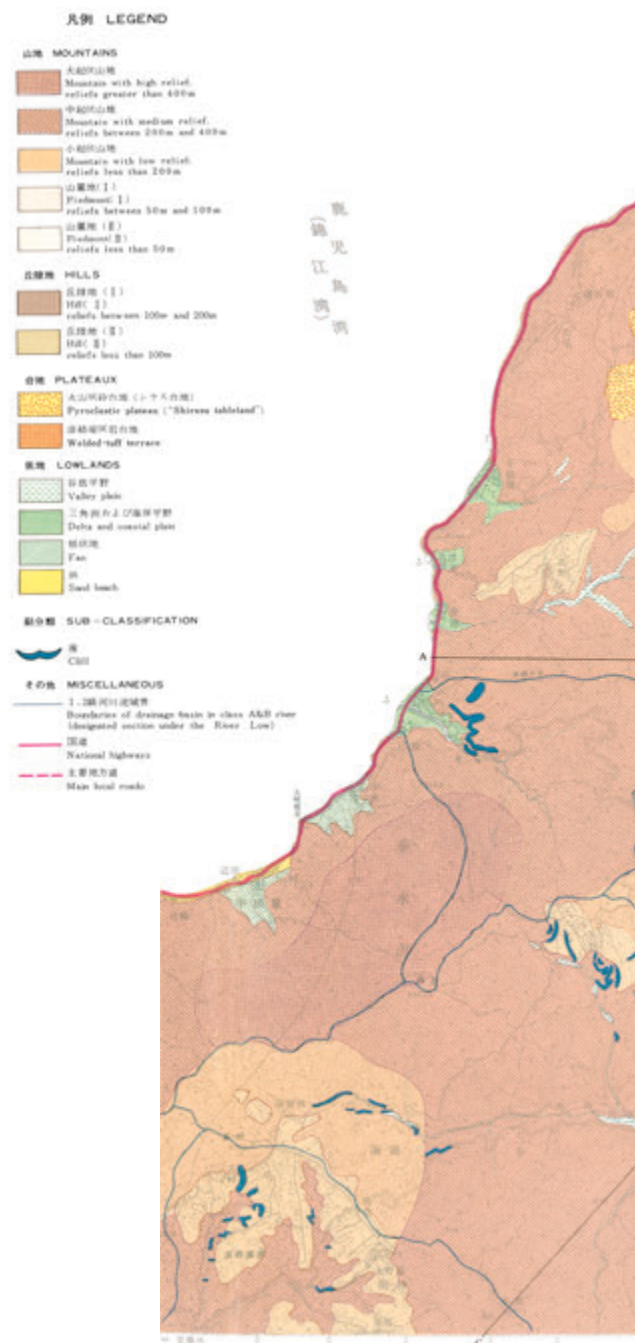
う発掘調査が実施され、鳴神遺跡（縄文時代晩期）、宮田遺跡（縄文時代早期）、炭床Ⅰ遺跡（縄文時代早期、平安時代）、川路山遺跡（縄文時代後期）、向ノ段・大丸・小迫遺跡（縄文時代早期、後期）、立馬遺跡（縄文時代早期）などの発掘調査が実施されたが、調査結果の報告は概報がほとんどであるために詳細な内容は不詳である。平成11年には、県道改良事業に伴い出水平遺跡の発掘調査が行われ、縄文時代早期、晩期、弥生時代前期の遺物が出土し遺構では縄文時代早期の集石が8基検出された。中でも特筆するものは縄文時代早期の耳栓状土製品が出土している。平成13年から東九州自動車道建設（末吉ⅠC～大隅ⅠC）に伴う大規模な発掘調査行われ、旧石器時代から近世にかけての遺構、遺物が確認された。

参考文献

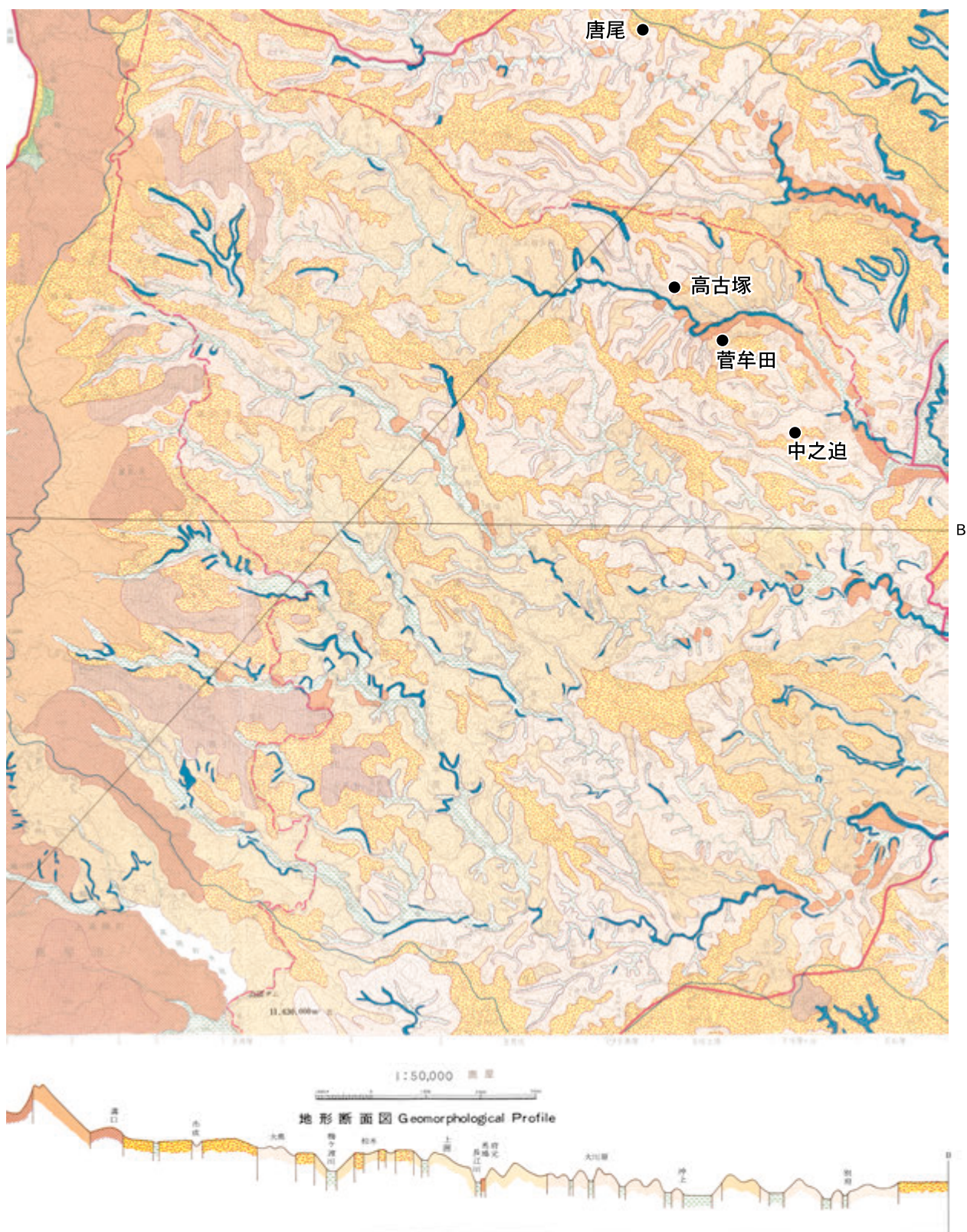
- 1 「土地分類基本調査－岩川」国土調査1972
- 2 「出水平遺跡」鹿児島県立埋蔵文化財センター調査報告書（43）
- 3 「九養岡遺跡・踊場遺跡・高篠遺跡」鹿児島県立埋蔵文化財センター調査報告書（71）
- 4 「桐木耳取遺跡」鹿児島県立埋蔵文化財センター調査報告書（91）
- 5 「末吉町郷土史」
- 6 「大隅町郷土史」
- 7 「鹿児島県風土記」芳 即正・塚田公彦編 旺文社
- 8 「鹿児島県の地名」日本歴史地名大系47 平凡社



Ia 高嶺山地	III f 神牟礼台地	IV c 梅ヶ渡川低地
II a 福沢丘陵	III g 久木山台地	IV d 平房川低地
II b 仏山丘陵	III h 岩川台地	IV e 堂籠川低地
II c 沢津丘陵	III i 国師台地	IV f 高嶺低地
II d 百引丘陵	III j 諏訪原台地	IV g 磯脇低地
II e 松ヶ鼻丘陵	III k 宮ヶ原台地	IV h 牛根境低地
II f 立小野丘陵	III l 月野台地	IV i 二川低地
II g 大野原高原	III m 市成台地	IV j 中浜低地
II h 岳野高原	III n 百引台地	IV k 牛根低地
II i 高野高原	III o 水之谷台地	
III a 牧ノ原台地	III p 上古園台地	
III b 佐敷台地	III q 荒佐台地	
III c 高松台地	III r 中沖台地	
III d 五木台地	IV a 岩川低地	
III e 新原台地	IV b 月野川低地	

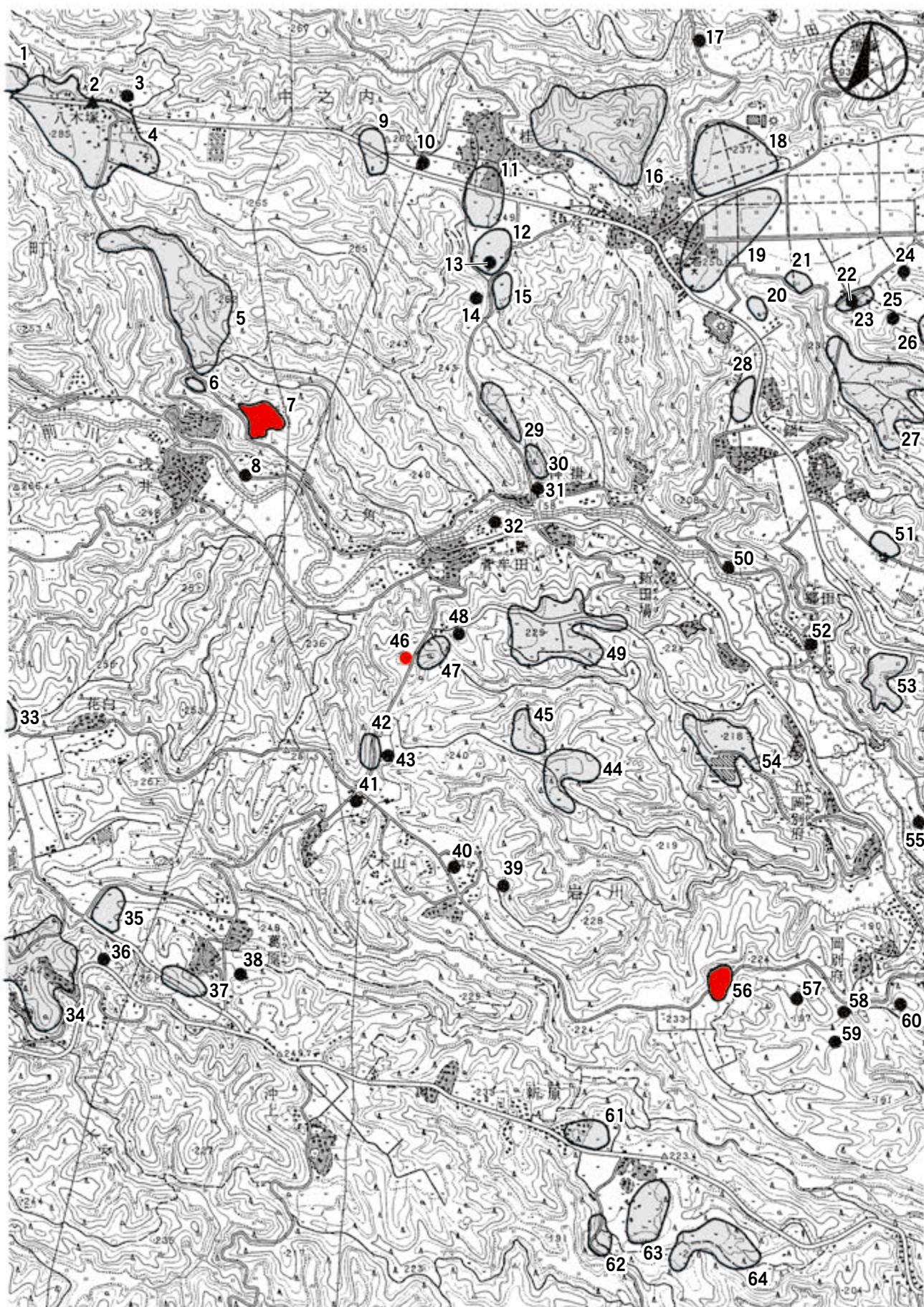


第1図 周辺地形図

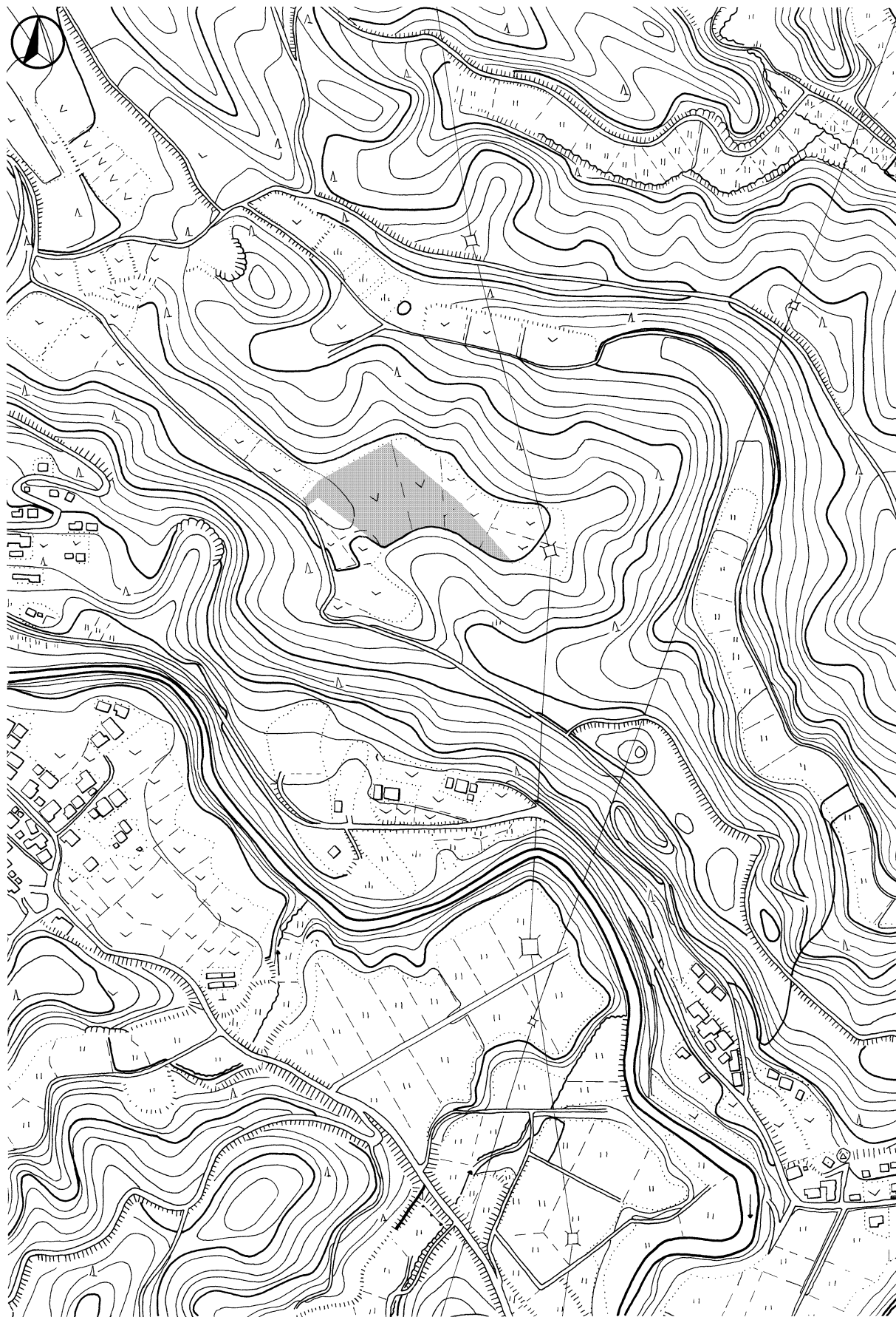


第1表 周辺遺跡地名表

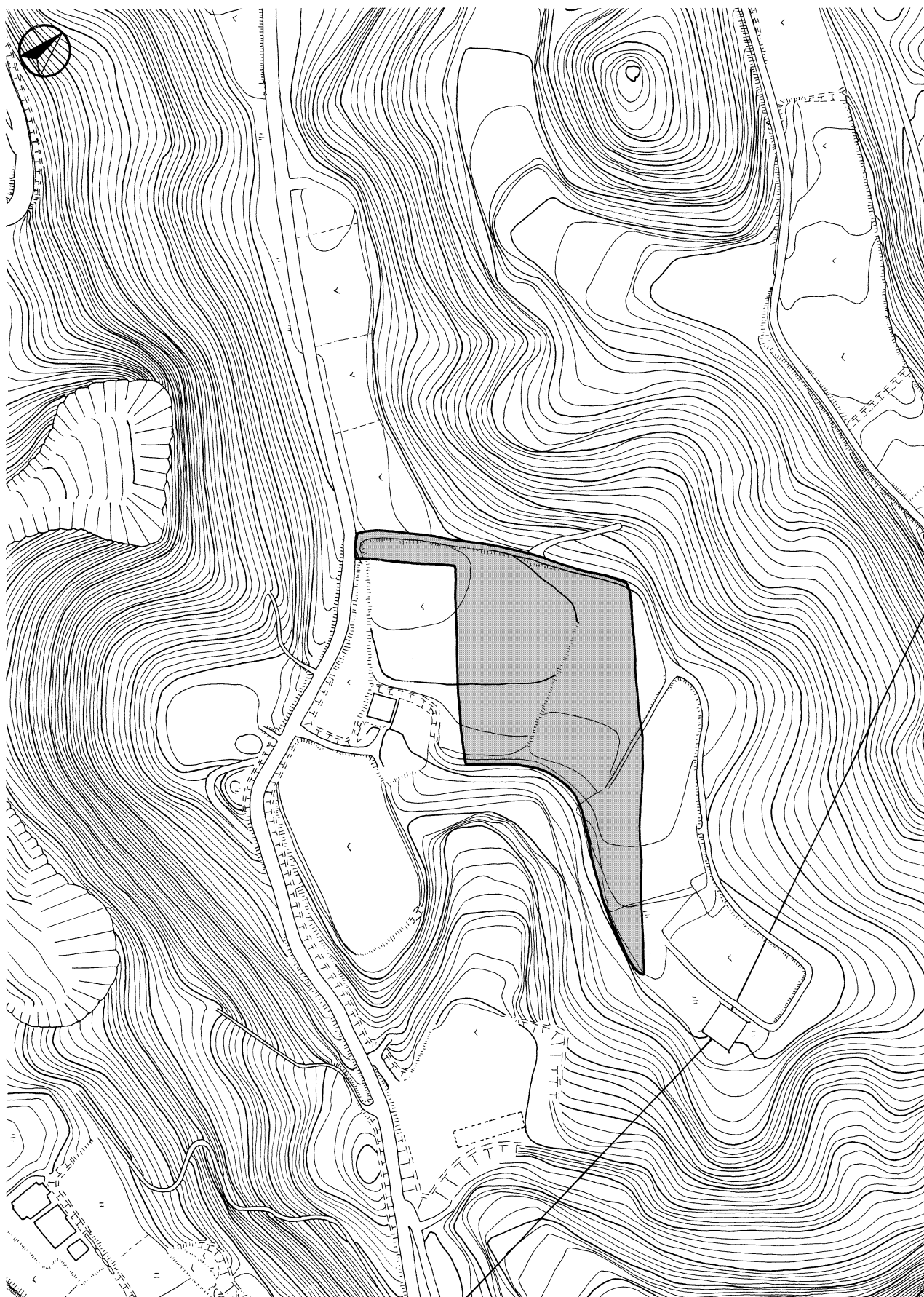
番号	遺跡台帳番号	遺跡名	所在地	地形	時代	遺物等	備考
1	63-29-0	狩谷	曾於市大隅町中之内狩谷	台地	縄文(後)	叩石・石皿	「大隅町誌」
2	63-187-0	八木塚	〃 中之内八木塚	台地	中世	墳丘(消滅)	
3	63-102-0	柿木渡	〃 中之内柿木渡	台地	縄文	石錘(5例)	
4	63-253-0	建山	〃 中之内建山	台地	旧石器, 縄文, 古墳	土器	H18年発掘調査
5	63-254-0	狩俣	〃 岩川狩俣	台地	縄文, 古代	土器・石器	H17年, 18年発掘調査
6	63-234-0	入角	〃 岩川入角	台地	古墳?	墳丘?	
7	63-255-0	高古塚	〃 岩川高古塚	台地	古墳, 古代	土器	H17年, 18年発掘調査
8	63-61-0	浅井	〃 岩川向上・仮屋ヶ段	丘陵	縄文	石斧・叩石	「大隅町誌」
9	63-213-0	一里山	〃 中之内一里山サセフ	台地	縄文(早)	前平式・塞ノ神式	
10	63-166-0	一里山	〃 中之内一里山・二本杵	台地	縄文(晩), 歴史	土師器・青磁	
11	63-239-0	尾ノ迫	〃 中之内桂	台地	縄文, 中世, 近世	土器・石器・陶磁器	町埋文報(21)
12	63-240-0	吹切段A	〃 中之内西笠木	台地	縄文, 中世, 近世	土器・石器・陶磁器	町埋文報(21)
13	63-41-0	吹切段I	〃 中之内吹切段	台地	縄文(晩)	(布目文)	「大隅町誌」
14	63-118-0	吹切段II	〃 中之内吹切段	台地	縄文(早・晩), 弥生, 古代, 中世	弥生土器	
15	63-241-0	松ヶ迫田	〃 中之内笠木	台地	縄文	土器・石器	町埋文報(21)
16	63-168-0	手取城跡	〃 中之内手取・陣之元	丘陵	中世, 近世		「日本城郭体系」18, 町埋文報(15)
17	63-18-0	不動平	〃 中之内不動平	丘陵	縄文(早)	円筒土器	
18	63-236-0	陣之元	〃 中之内東笠木	台地	縄文, 中世	土器・陶磁器	町埋文報(15)
19	63-223-0	笠木	〃 笠木	台地	縄文(晩), 奈良～近世		H5年農政分布調査, 町埋文報(15)
20	63-224-0	中田	〃 笠木中田	台地	縄文(晩)		H5年農政分布調査, 町埋文報(15)
21	63-222-0	前田・外戸堀	〃 笠木前田外戸堀	台地	縄文(中・後)		H5年農政分布調査, 町埋文報(15)
22	63-42-0	論所迫	〃 中之内論所迫・外戸田	台地	縄文(晩), 歴史	石刃・土師器	
23	63-221-0	外戸田	〃 笠木外戸田	台地	縄文(後), 奈良, 平安		H5年農政分布調査, 町埋文報(15)
24	63-133-0	井手間I	〃 中之内井手間	台地	古墳		
25	63-77-0	論所谷	〃 中之内論所谷	台地	縄文	石斧	
26	63-148-0	井手間II	〃 中之内井手間	台地	歴史	土師器	
27	63-30-0	曲迫	〃 中之内曲迫	台地	縄文(後), 歴史	石鏃・打製石斧・土師器	
28	63-225-0	津風呂ヶ山	〃 笠木津風呂ヶ山	台地	縄文(後・晩)		H5年農政分布調査, 町埋文報(15)
29	63-52-0	松ヶ迫田	〃 中之内松ヶ迫田	台地	縄文(早・後・晩), 歴史	縄文土器	
30	63-242-0	長迫A	〃 中之内神掛	段丘	縄文, 中世, 近世	土器・陶磁器	町埋文報(21)
31	63-119-0	長迫	〃 中之内長迫	丘陵	縄文(晩), 弥生, 歴史	石斧・叩石・土師器	
32	63-136-0	光神免	〃 岩川2828-3	丘陵	古墳	土師器	削平を受けているが墳丘らしきものが残存
33	63-212-0	船窪	〃 岩川船窪	台地	縄文, 古墳, 平安～近世	土師器	町埋文報(9)
34	63-191-0	中大谷城跡	〃 大谷字中大谷	丘陵	中世(戦国末～慶長4年)	腰郭・空堀・たて堀・大手・からめ手	県埋文報(29)
35	63-24-0	大丸	〃 大谷2040	台地	縄文(中・後)	阿高式・指宿式・岩崎式	「大隅町誌」
36	63-25-0	向段	〃 大谷向段	丘陵	縄文(中・後)	阿高式・指宿式・市来式	「大隅町誌」, 「郷土の史跡」第4号
37	63-227-0	小迫頭	〃 岩川葛原	台地	縄文(前～晩)	土器・石器	町埋文報(5)
38	63-4-0	葛原	〃 岩川葛原	台地	縄文(早・晩)	押型文	「大隅町誌」
39	63-157-0	舟窪迫	〃 岩川舟窪迫	丘陵	歴史	土師器	
40	63-185-0	久木山経塚	〃 岩川3357	台地		一字一石経塚	
41	63-70-0	久木山	〃 岩川麦ヶ迫	台地	縄文	叩石・石皿・石斧	「大隅町誌」
42	63-244-0	井手山A	〃 岩川久木山	台地	縄文(早), 近世	土器・石器・陶磁器	報告書有
43	63-62-0	井手山	〃 岩川井手山・定塚	台地	縄文, 歴史	土師器	
44	63-63-0	稲村	〃 岩川稲村	丘陵	縄文		H17年, 18年発掘調査
45	63-2-0	定段	〃 岩川定塚・入佐	台地	旧石器, 縄文(早), 歴史	前平式・塞ノ神式・土師器	H16年, 17年発掘調査
46	63-156-0	菅牟田	〃 岩川菅牟田	丘陵	縄文, 古代	土師器	町埋文報(21), H16年発掘調査
47	63-243-0	菅牟田A	〃 岩川菅牟田	山腹	縄文, 中世, 近世	土器・陶磁器	町埋文報(21)
48	63-43-0	イチノ木	〃 岩川イチノ木・前畑上	台地	縄文(晩)		
49	63-44-0	上山	〃 岩川上山	台地	縄文(晩), 歴史		
50	63-100-0	郷田II	〃 中之内鍋山	丘陵	縄文(晩), 弥生	押型文・網目状文・弥生土器・土師器	
51	63-226-0	般久保	〃 笠木	台地	縄文		H5年農政分布調査, 町埋文報(15)
52	63-120-0	郷田I	〃 中之内郷田	丘陵	縄文, 弥生, 歴史	土師器	
53	63-149-0	片水段	〃 中之内片水段	丘陵	縄文(早・前・晩), 歴史	集石遺構・落とし穴3基等(縄文早期)・土師器	確認調査
54	63-3-0	段	〃 岩川小豆穴・段・赤称迫	台地	縄文(早・晩), 歴史	押型文・石匙・土師器	
55	63-150-0	上松田	〃 中之内上松田	低地	縄文, 歴史	土師器	
56	63-256-0	中之迫	〃 岩川中之迫	台地	縄文	土器	H16年発掘調査
57	63-158-0	中迫I	〃 岩川中迫	丘陵	歴史	土師器	
58	63-45-0	中迫II	〃 岩川中迫	丘陵	縄文(晩)	黒川式	
59	63-64-0	池ノ段	〃 岩川池ノ段	丘陵	縄文		
60	63-46-0	所迫	〃 岩川所迫	丘陵	縄文(晩)	刃器	
61	63-216-0	新原	〃 岩川1257	台地	縄文(晩)	石斧	
62	63-259-0	岩川前段	〃 岩川前段	台地	縄文	土器	
63	63-257-0	鳥井川	〃 岩川鳥井川	台地	縄文	土器	H18年発掘調査
64	63-258-0	チシャノ木	〃 岩川チシャノ木	台地	縄文, 古代	土器	H18年発掘調査



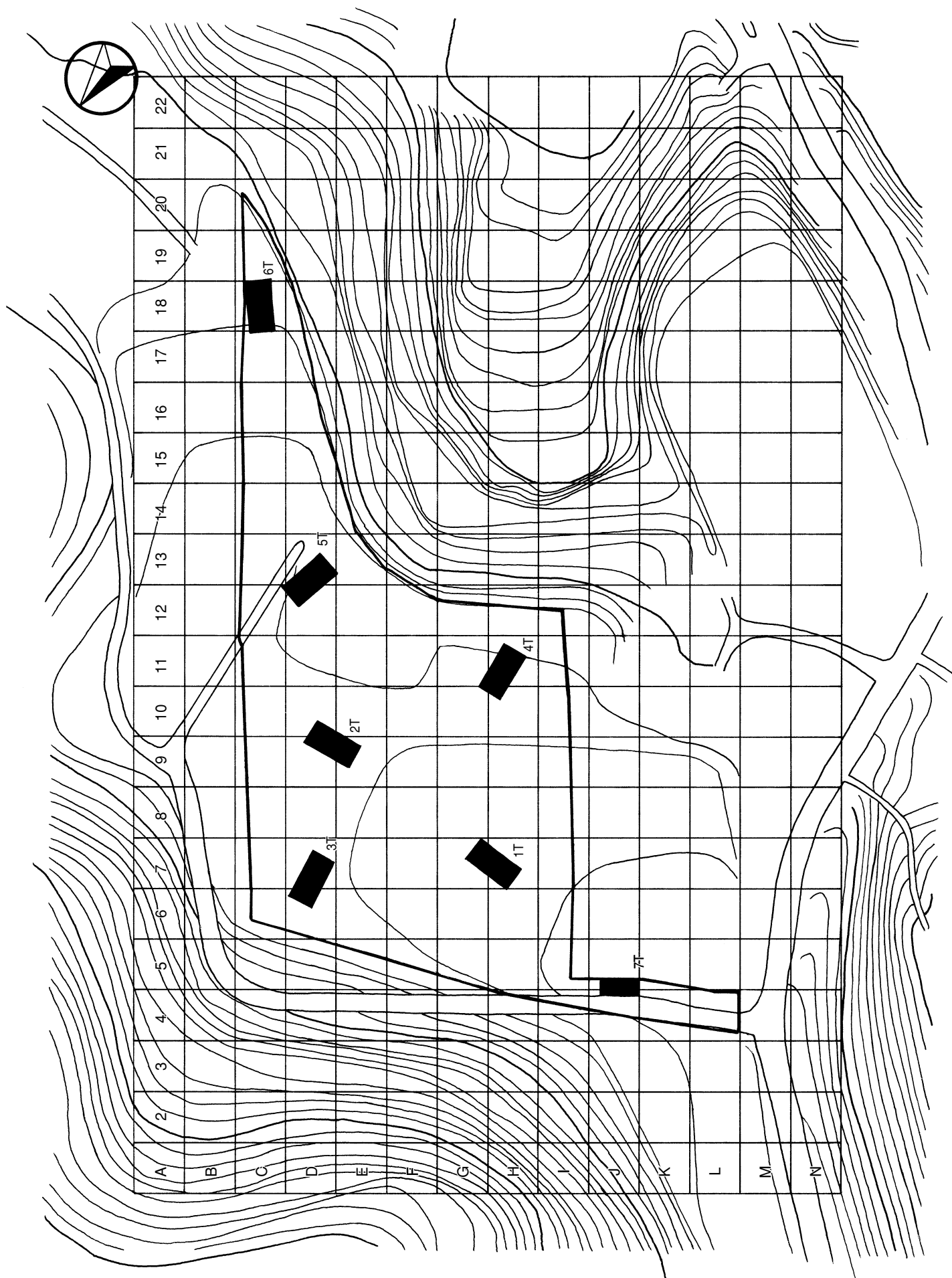
第2図 周辺遺跡地図 (1 : 25, 000)



第3図 高古塚遺跡周辺地形図1 (1 : 5,000)



第4図 高古塚遺跡周辺地形図2 (1 : 2,000)

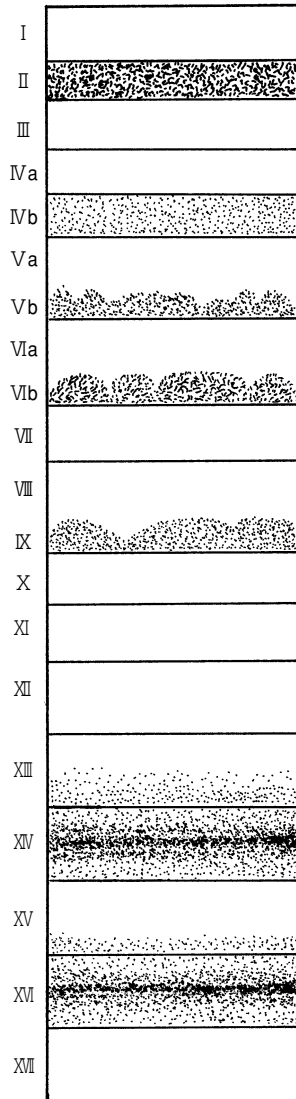


第5図 グリッド配置及びトレンチ配置図 (1 : 1,000)

第3節 遺跡の層位

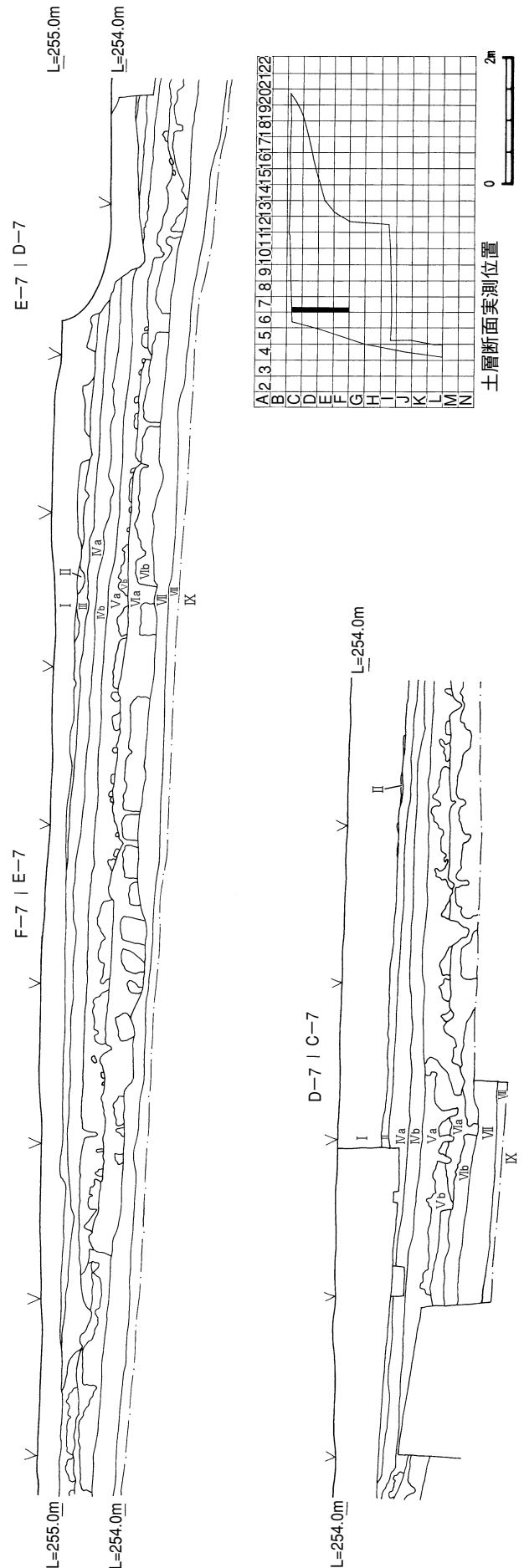
1 遺跡の層状

- I層 暗褐色土 現表土
- II層 黄白色軽石層P-3 通称文明ボラ1471年頃の桜島の噴出物 一部に残存
- III層 黒色土 古代遺物包含層
- IVa層 黄褐色土 IVb層の腐植土 縄文時代晩期及び後期遺物包含層
- IVb層 黄褐色細粒軽石混硬質土 御池軽石 約4,200年前の霧島御池の噴出物
- Va層 暗橙色土 Vb層の腐植土 縄文時代中期遺物包含層
- Vb層 明橙色火山灰 通称アカホヤ火山灰約6,400年前の鬼界カルデラの噴出物
- VIa層 黄褐色軽石混淡茶褐色土 縄文時代早期の遺物包含層
- VIb層 黄褐色軽石層 P-11 約7,400年前の桜島の噴出物
- VII層 明茶褐色土 縄文時代早期遺物包含層
- VIII層 黒褐色土 P-13約9,500年前の桜島の噴出物点在 縄文時代早期遺物包含層
- IX層 黄白色火山灰 P-14サツマ火山灰 約11,000年前の桜島の噴出物
- X層 黒褐色土
- XI層 黄褐色軟質ローム
- XII層 暗茶褐色軟質ローム
- XIII層 褐色土
- XIV層 暗褐色硬質土 当該層上部及び下部付近に赤褐色パミスP-15が点在する
- XV層 暗褐色硬質土
- XVI層 暗褐色硬質土 赤褐色パミスP-17が点在する
- XVII層 濁黄白色砂質土
- シラス 礫混明黄白色砂質土 約25,000～28,000年前の始良カルデラの噴出物
- ※ P=パミス=軽石
- 桜島の噴出物はP-1（大正3年）を基準に、新しいものから順に番号を付している

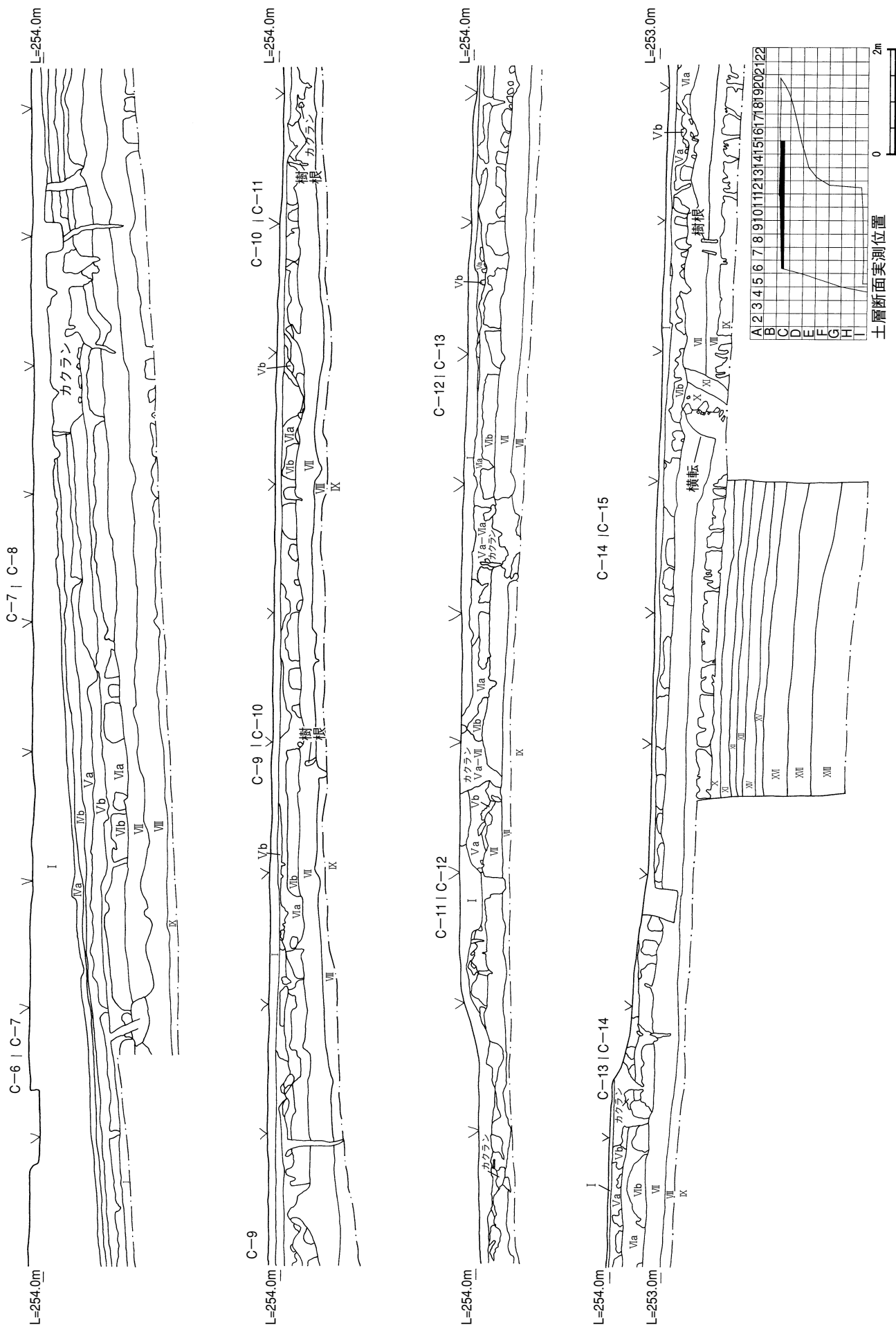


第6図 基本土層柱状模式図

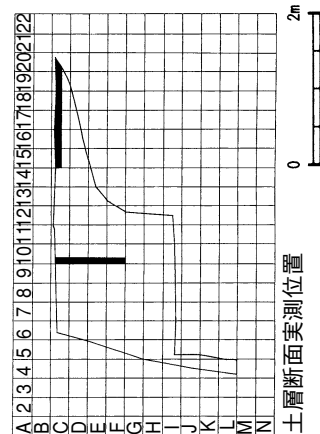
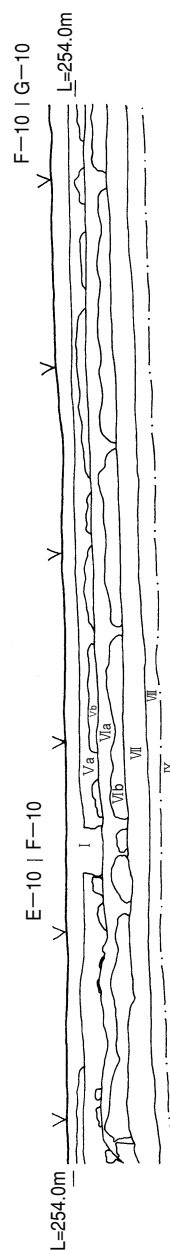
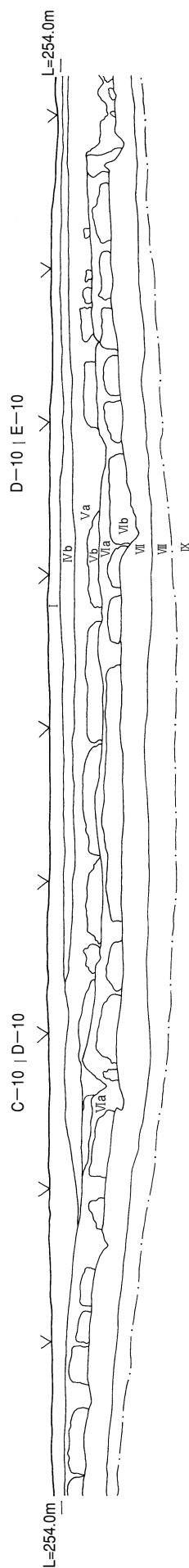
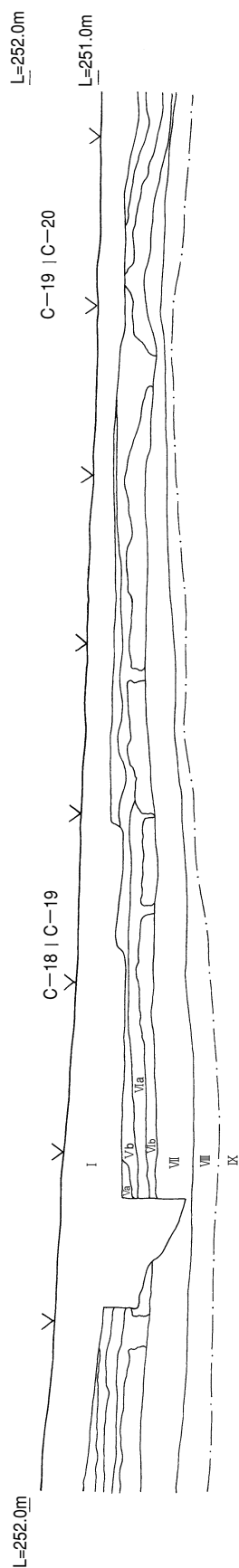
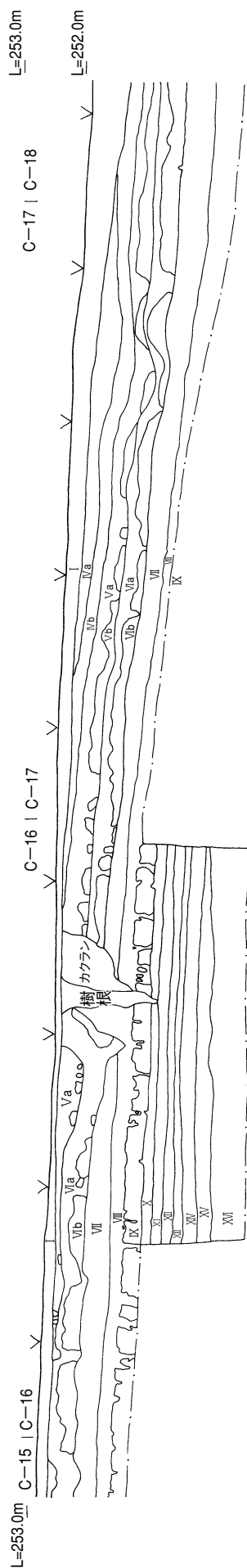
2 土層断面



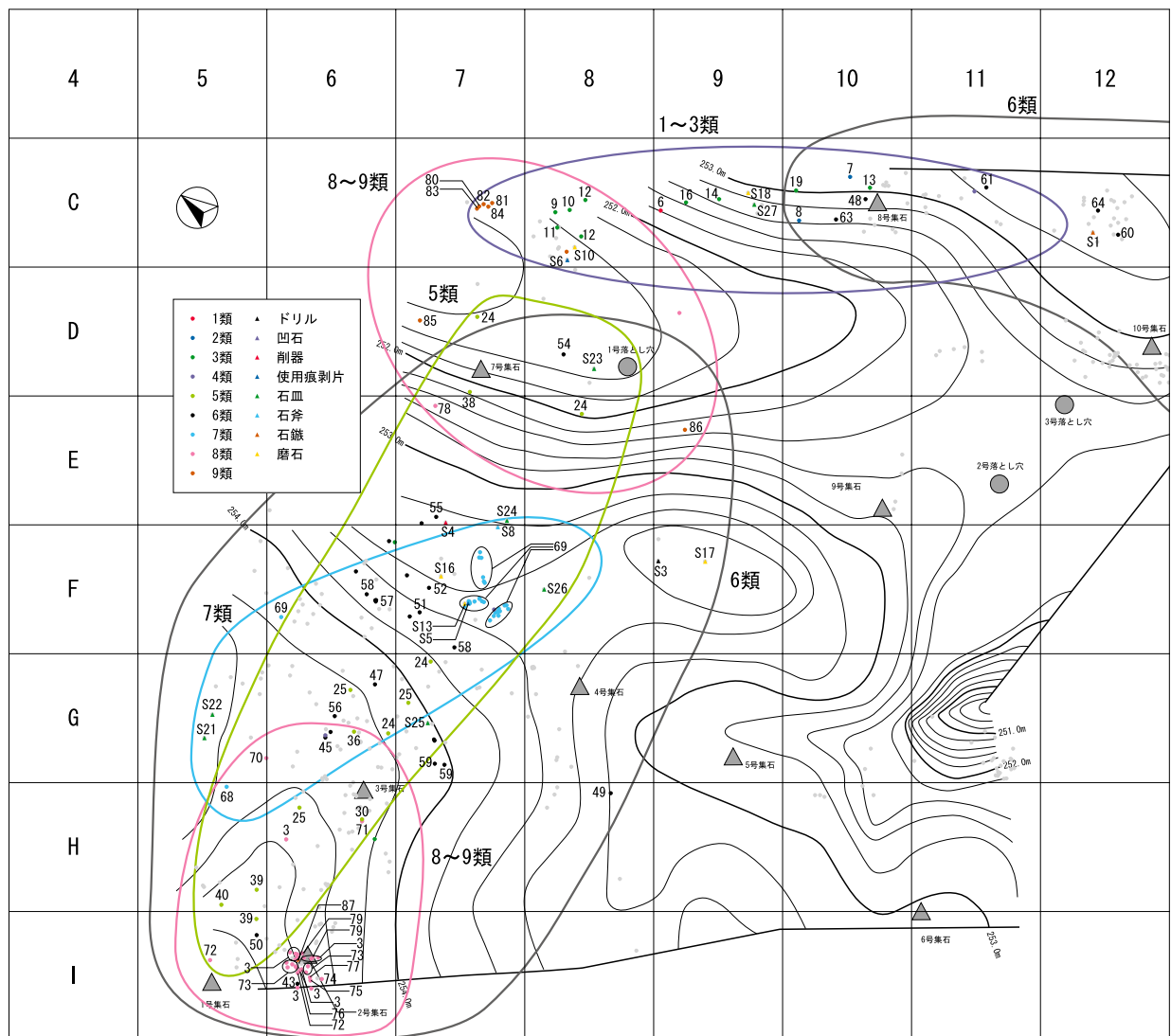
第7図 土層断面実測図1



第8図 土層断面実測図2



第9図 土層断面実測図3



第10図 VIII層～VIa層遺構位置・遺物出土状況図 1

第4節 発掘調査の成果

1 縄文時代早期の調査

縄文時代早期の調査は10m四方のグリッドを設定し、全面発掘調査を行った。

調査区内の縄文時代早期の包含層は、整然と堆積した複数の火山噴出物に挟まれ良好な保存状態が確認された。VIII層中には、桜島起源の黄橙色とゴマ塩状のパミスP-13が点在し、VII層とVIa層間には、桜島起源のP-11テフラが良好な堆積を示していた。

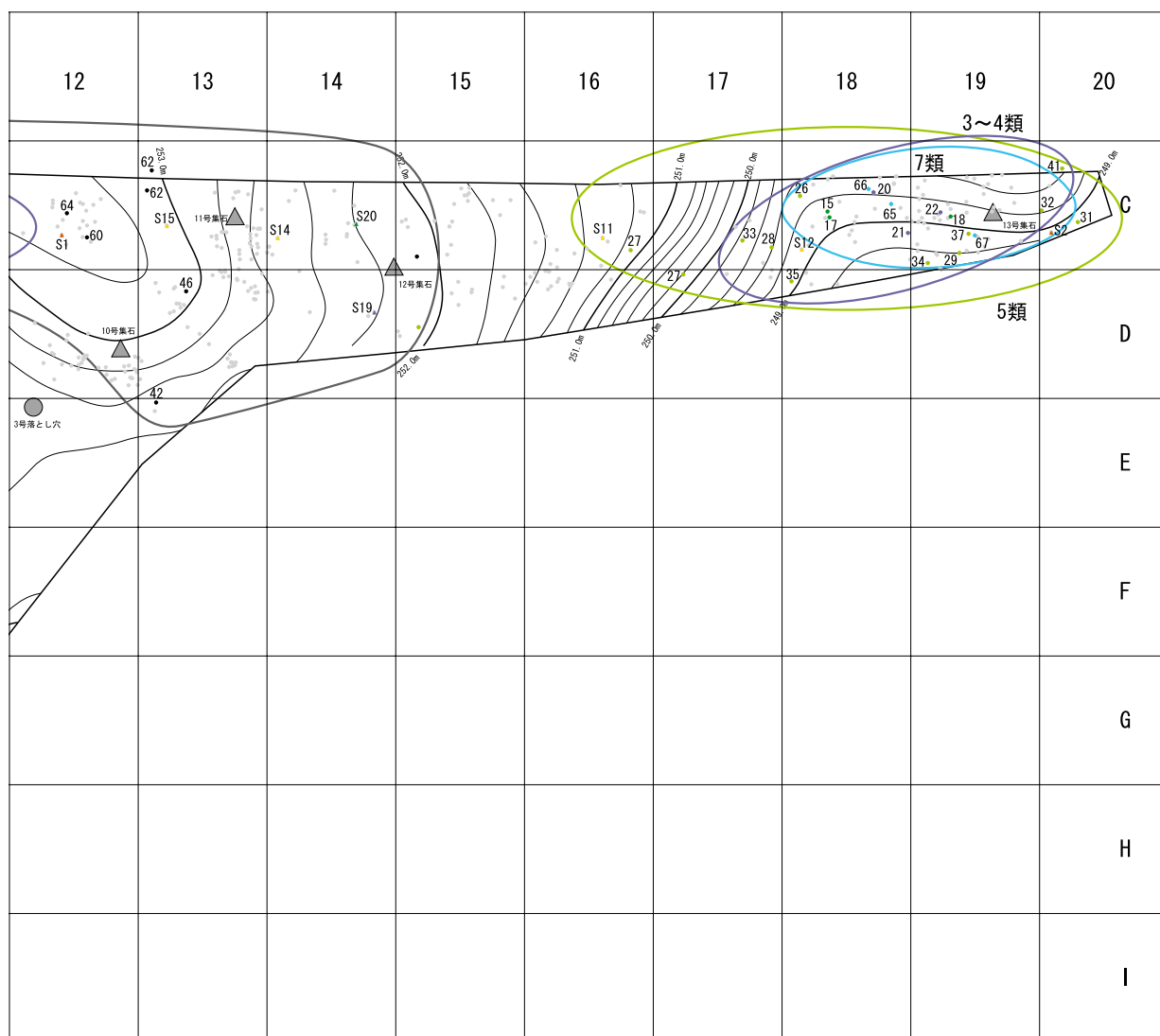
遺構は、IX層上面で落とし穴3基、VIII層～VII層中で集石13基を検出した。遺物は、調査区のF～I-5～C-20区（東向き緩斜面～南向き緩斜面）のVIII層、VII層、VIa層から出土し、分布状況は集石と遺物が近接する状況を提示している。これら遺物の出土状況及び遺構配置は、第10図～第12図に示した。

IX層（サツマ火山灰層）上面の地形は、遺跡の西側（I-5区）から東方向（C-12～20区）に緩やかに下る地

形で、中央部分で台地を東西に分かつように谷状地形が南北それぞれの方向に入る馬の背状の地形である。

遺構・遺物は、この地形上の制約を受けるように広く東西に分布し、さらに土器型式別の偏りと重複が認められる。I～IV類土器が東側のC-8～11区と17～19区に、V類土器が西側D-7、8区～I-5区と東側C、D-16～20区に、VI類土器が西側D-8区～I-5区と東側C、D-10～13区に、VII類土器が西側F-6～8区、H-5区と東側C-18、19区に、VIII類土器が西側G-5区～I-6、7区に分布し、IX類土器のみ北側C-7区～E-9区谷状地形に分布するため原位置ではない可能性がある。

また、C-7～20区に分布する遺物は、出土する地形から、調査区外の東側台地に広がる可能性を指摘できる。



・遺構

落とし穴

調査区中央部の北向き斜面の上下より3基の落とし穴をⅨ層上面から検出した。いずれも埋土は、P-13を多く含む黒褐色土（Ⅷ層）が主体である。

落とし穴の分布は、1号落とし穴がD-8区北側谷状地形の最底部付近に、2号、3号がD-12区～E-11区にまたがる尾根上に位置する。落とし穴の周辺からは、埋土に該当する包含層の遺物は出土していないが、1号落とし穴から10mほど離れた東側C-8～10区では、Ⅰ類～Ⅲ類の土器が出土している。

1号落とし穴（第13図）

D-8区で検出した。平面プランは、東西方向に主軸をもつ楕円形で長軸109cm、短軸78cm、深さは検出面から120cmである。壁面は底面から斜めに立ち上がる形状で、中央部に小ピットを1つ検出した。深さが56cmで垂直にすぼまる形状であることから逆茂木痕と思われる。

埋土は、上部にP-13の黄橙色のパミスを多く含み、下部は黒褐色土が主体となっている。

2号落とし穴（第14図）

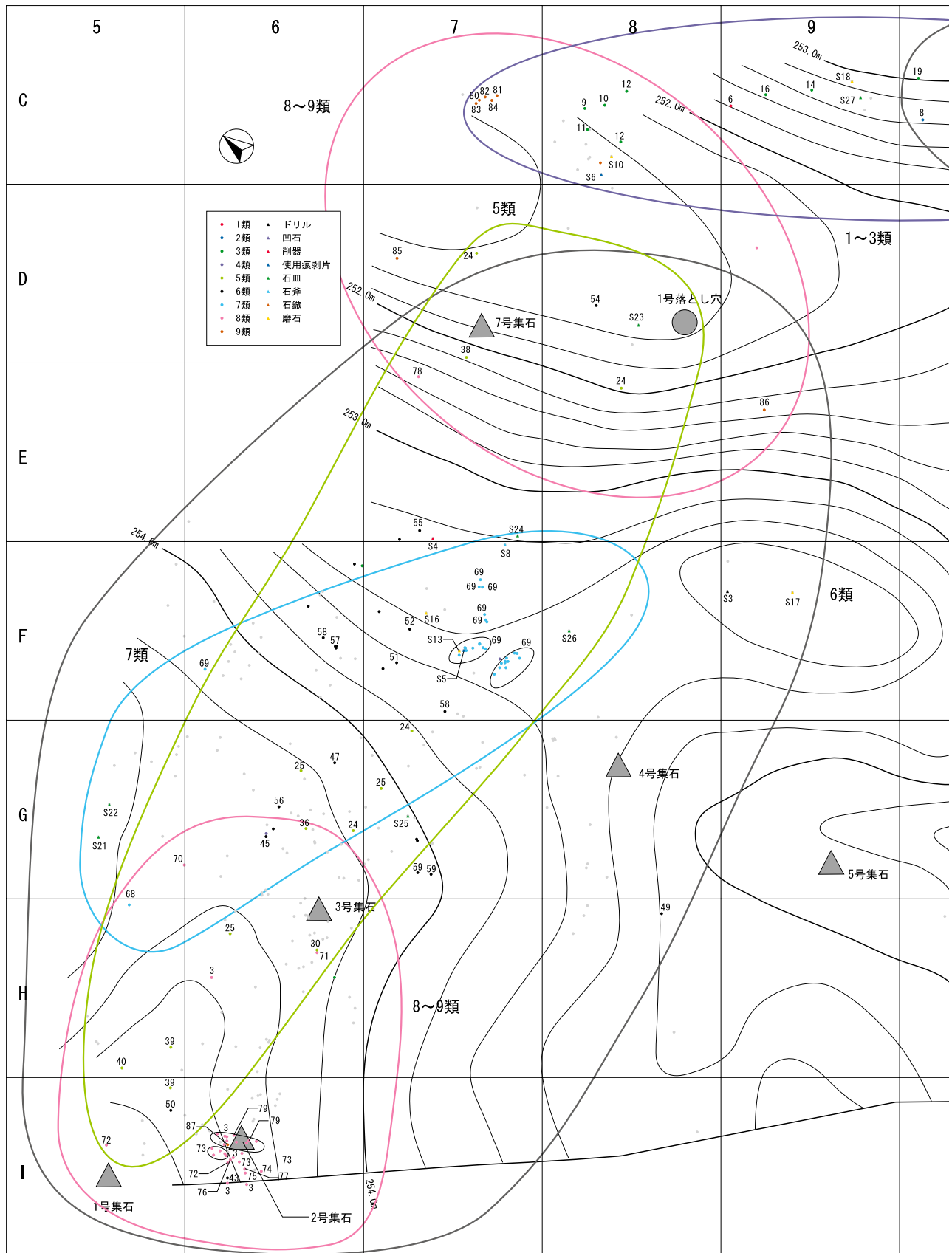
E-11区の尾根上平坦面で検出し、同じ平坦面上に隣接する3号落とし穴との間隔は8.3mである。平面プランは東西方向に主軸をもつ楕円形で、長軸142cm、短軸88cmで、深さは検出面から169cmであり、壁面が底面からほぼ垂直に立ち上がる形状である。底面は平坦で小ピットは検出されなかった。

埋土は、上部にP-13の黄橙色パミスを多く含み、下部は暗茶褐色土が主体となっている。中央部にサツマ火山灰層のブロックが少量見られるが、壁面から崩れ落ちたものと考えられる。

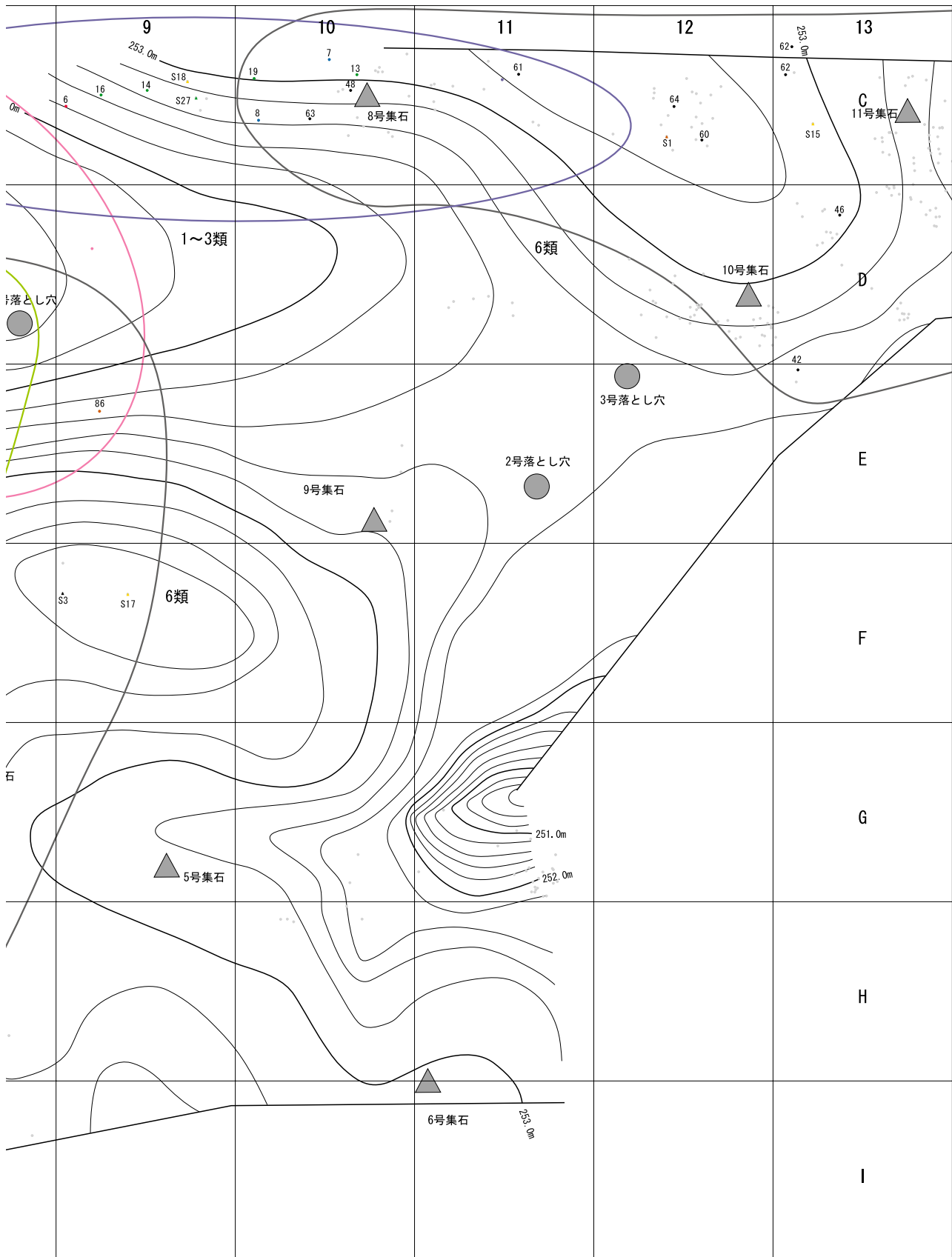
3号落とし穴（第15図）

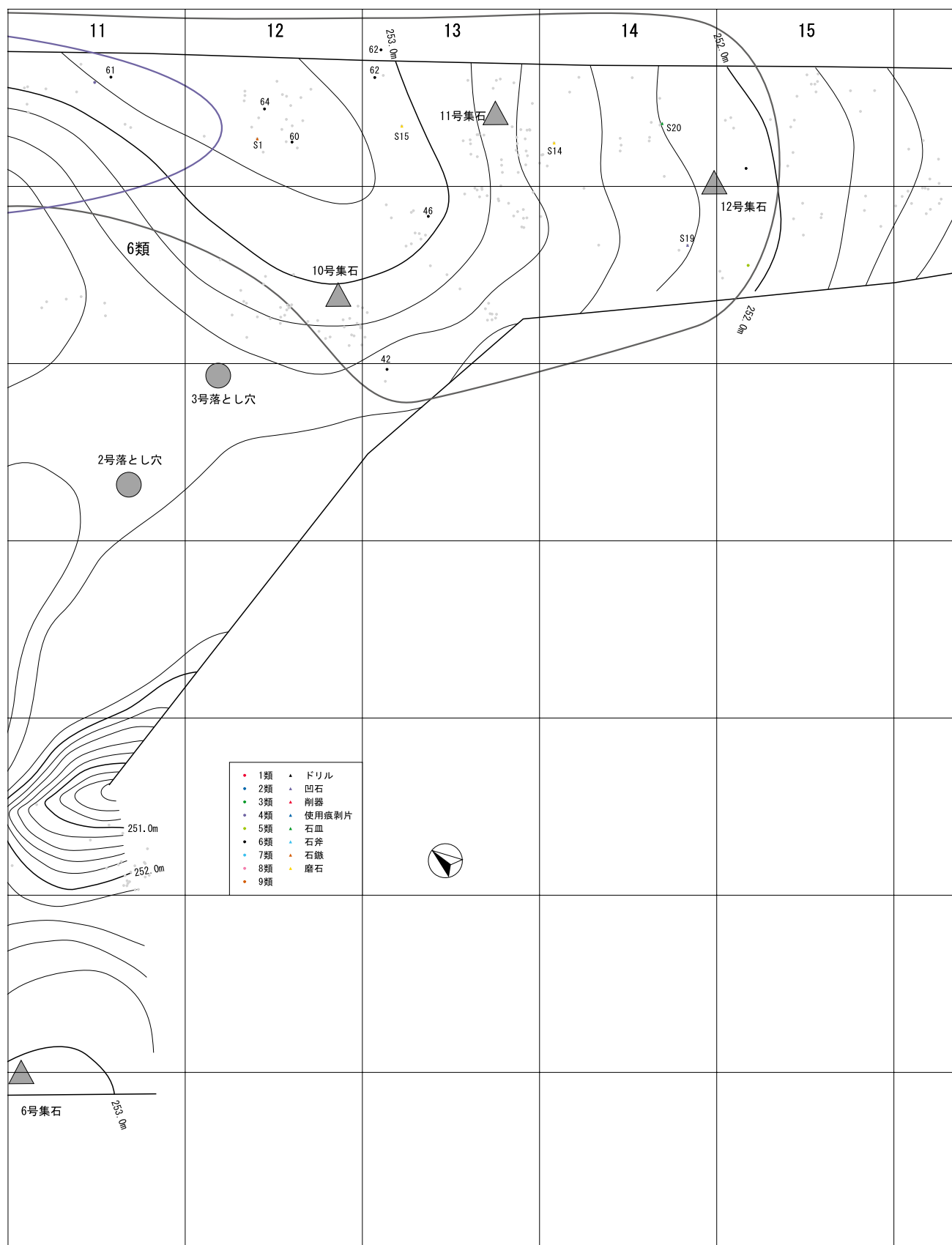
E-12区の尾根上平坦面で検出した。平面プランは、長軸124cm、短軸113cmの円形である。深さは検出面から95cmで壁面が底面からほぼ垂直に立ち上がる形状であるが南側に段を有する。底面は平坦で小ピットは検出されなかった。

埋土は、上部にP-13のゴマ塩状のパミスを多く含み、下部は暗茶褐色土が主体となっている。形状、深さが1号、2号と異なるため、土坑の可能性も指摘できる。

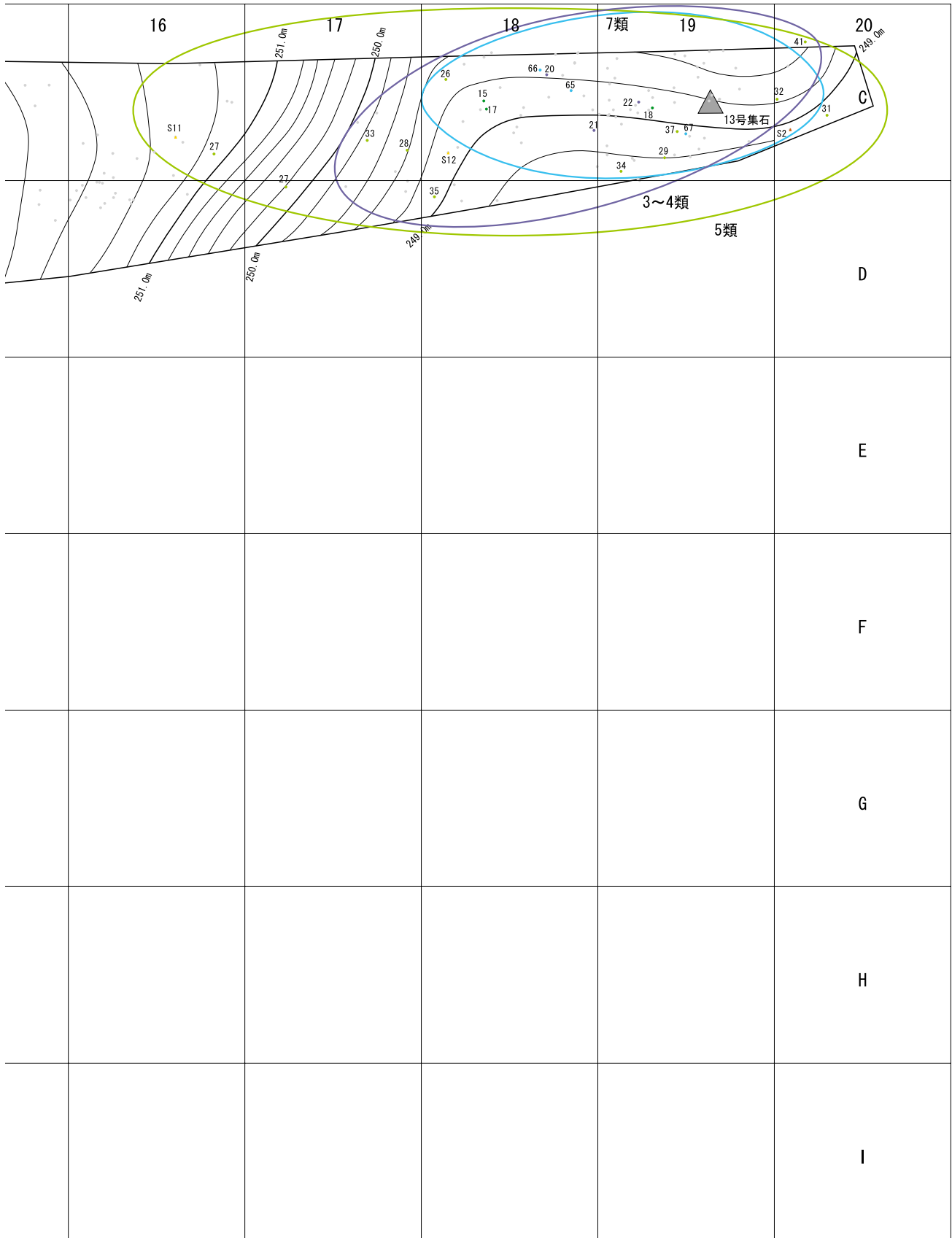


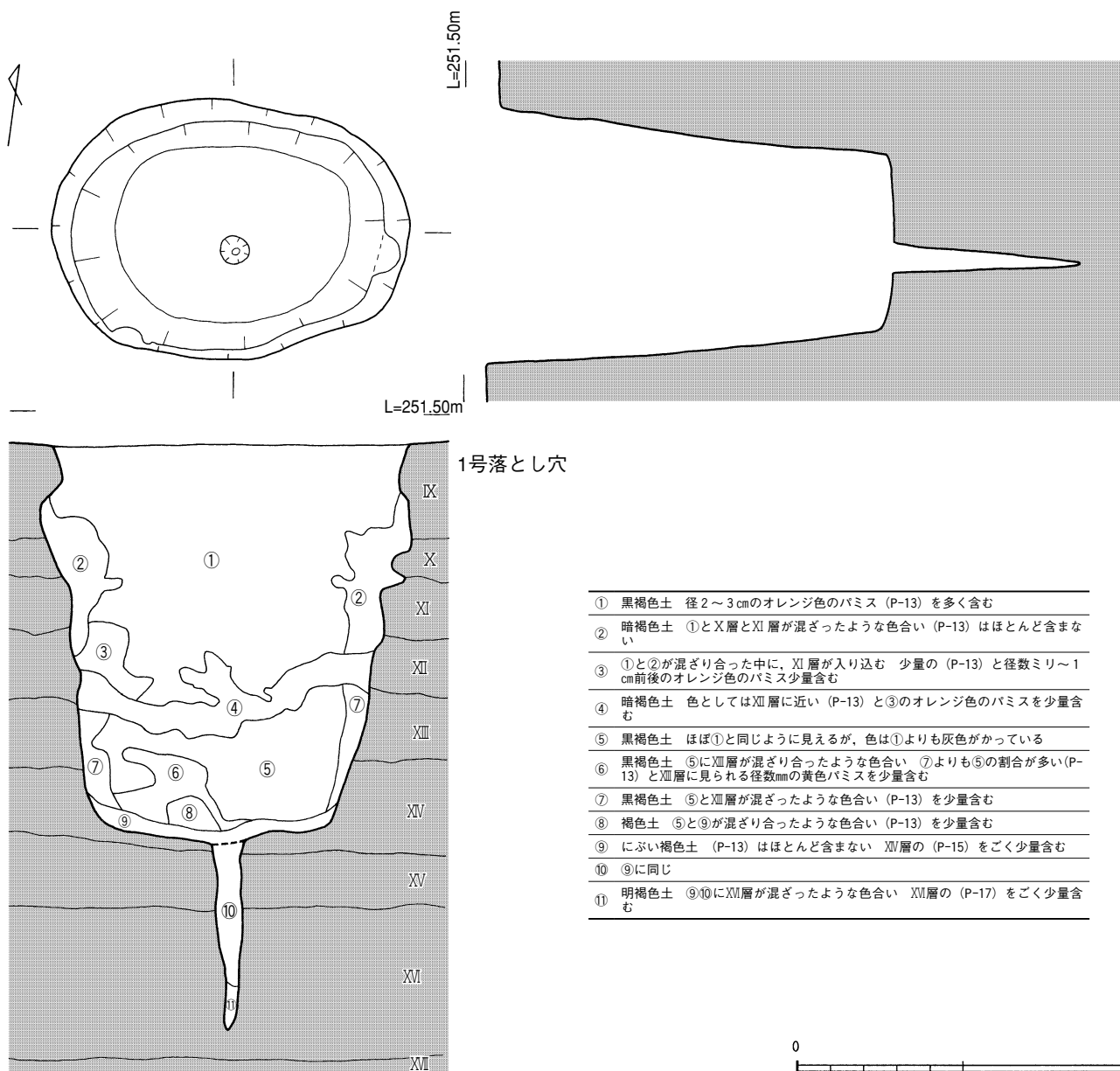
第11図 VIII層~VIa層遺構位置・遺物出土状況図2





第12図 VIII層～VIa層遺構位置・遺物出土状況図 3

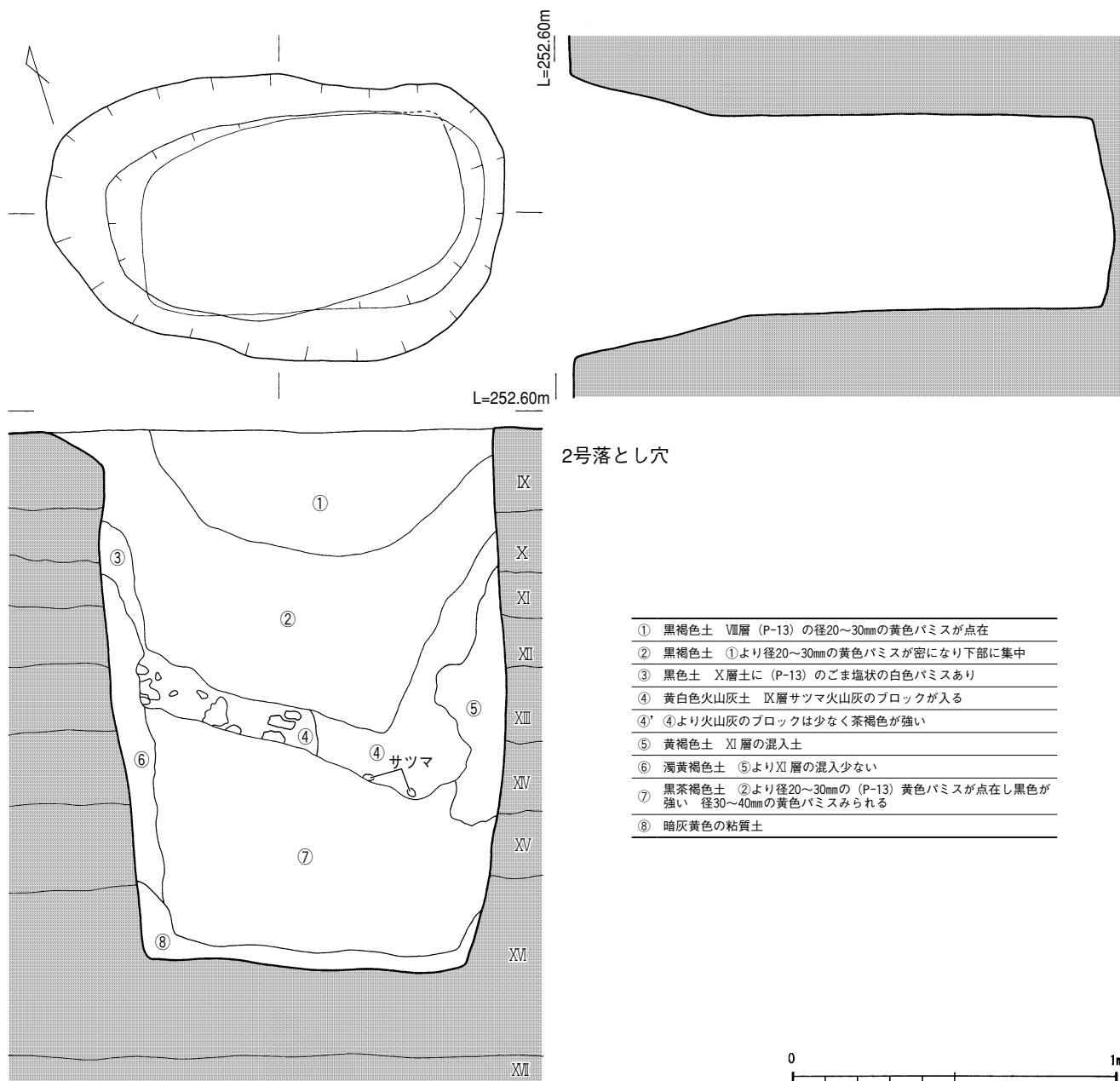




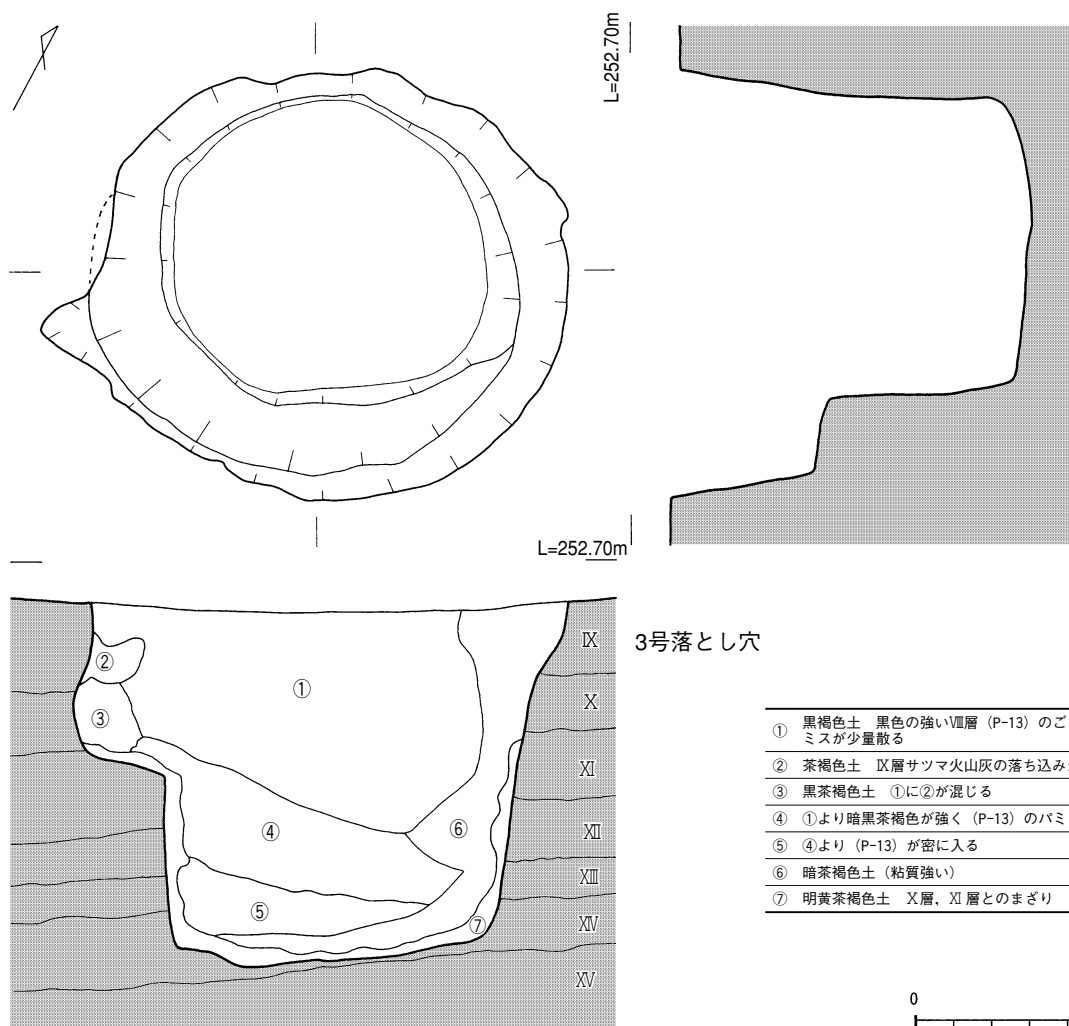
第13図 VIII層落とし穴1

第2表 VIII層落とし穴観察表

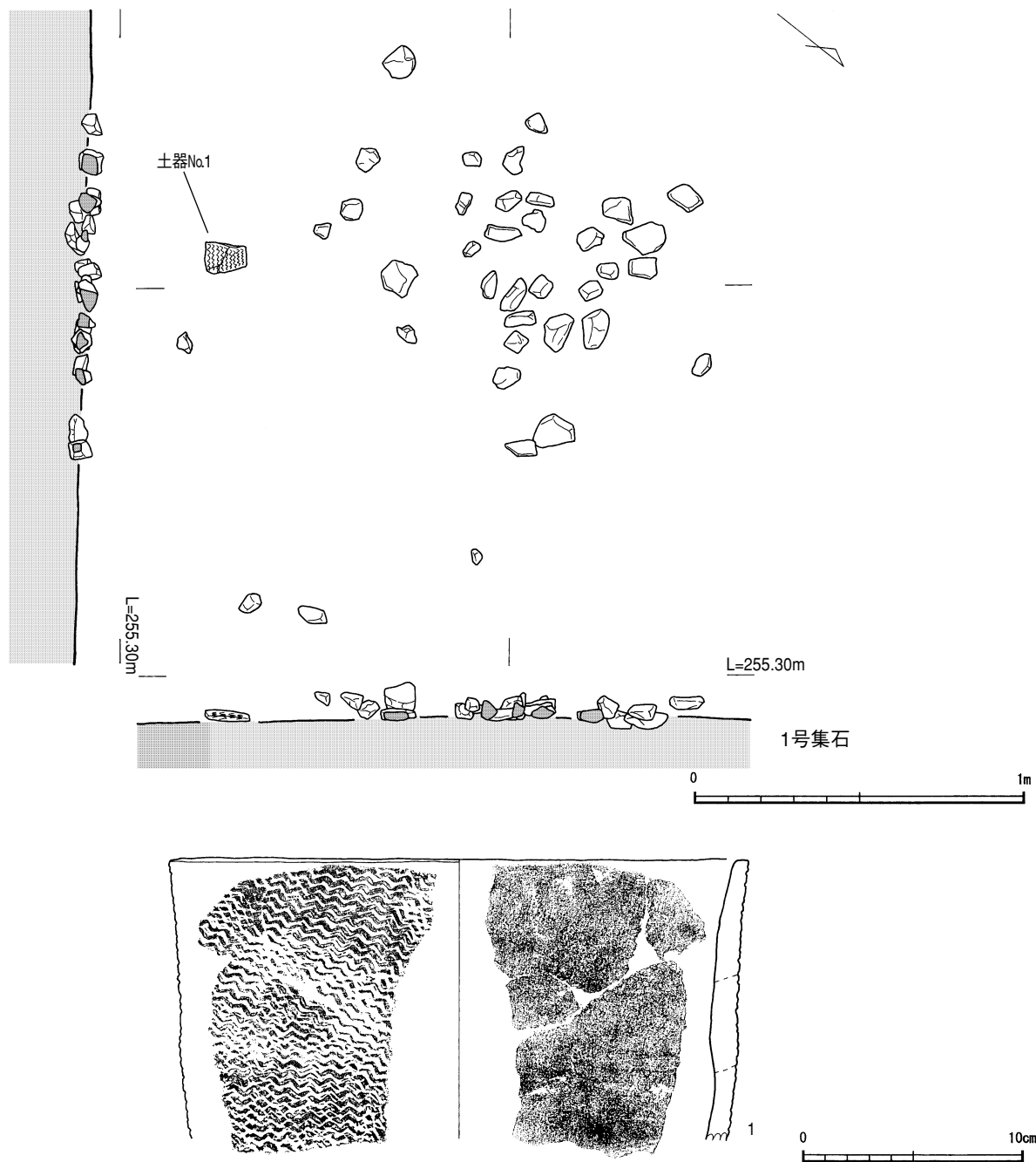
挿 図 No.	報 告 No.	長 径 (cm)	短 径 (cm)	深 さ (cm)	小ビット				備 考
					ビット 数	ビット No.	径 (cm)	深さ (cm)	
13	1	109	78	120	1	1	9	56	
14	2	142	88	169	—	—	—	—	
15	3	124	113	95	—	—	—	—	



第14図 VIII層落とし穴2



第15図 Ⅷ層落とし穴 3



第16図 VIII層集石1及び集石内出土遺物

集石

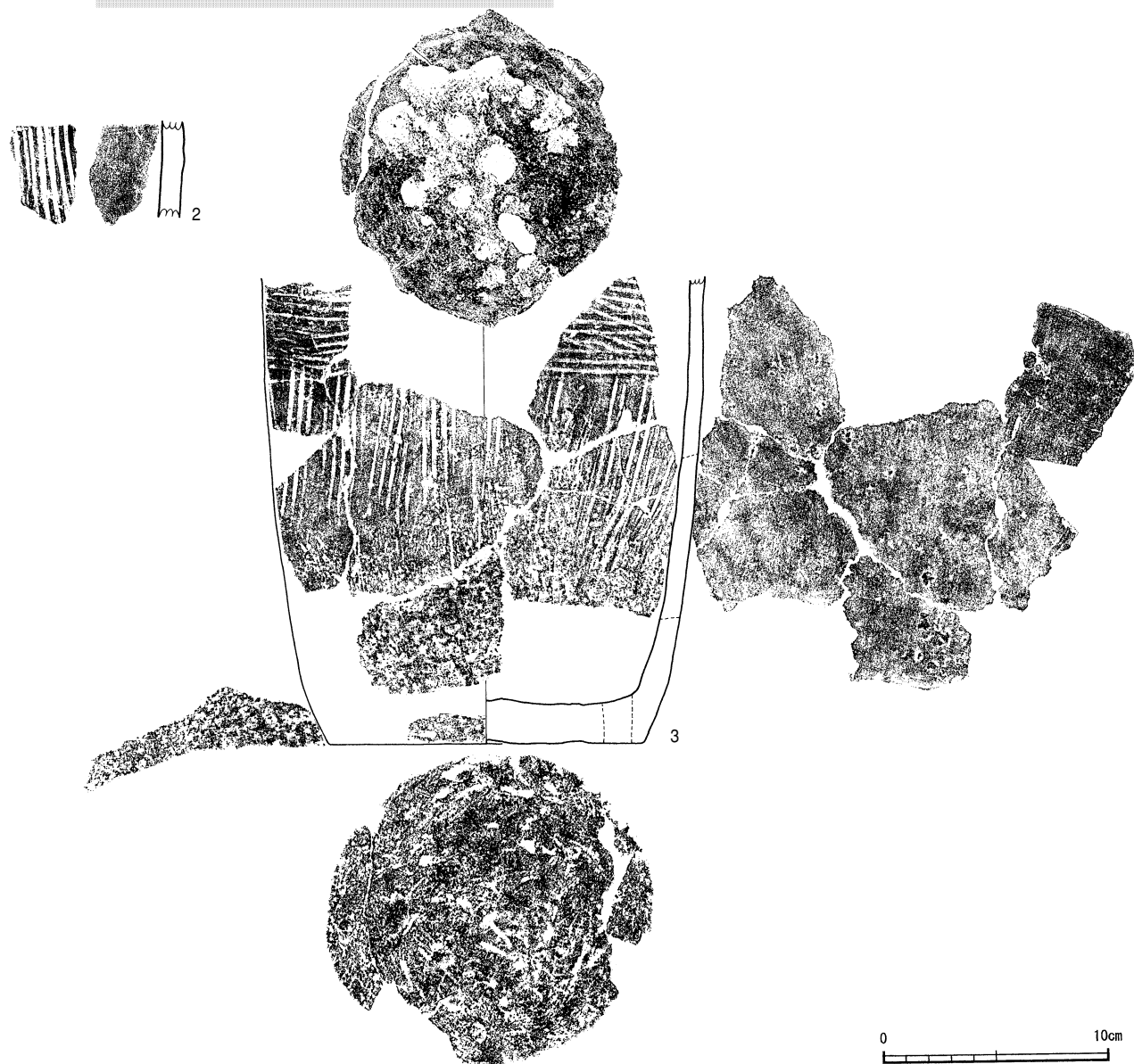
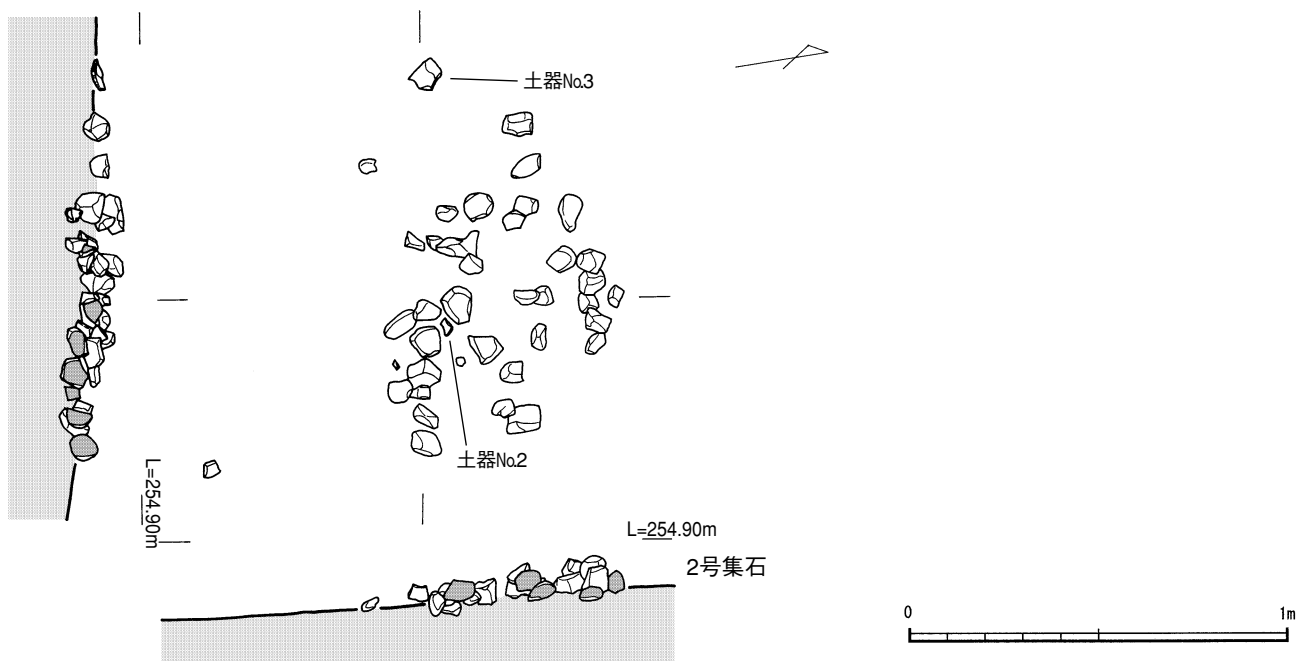
VIII層上面からVII層中に検出された集石13基は、西側から東側に緩やかに傾斜する微高地に沿って位置する。西側（I-5～11～D-7，E-10区）に8基が点在し、東側（C-10，D-12～C-19区）に5基が点在する。これらの集石は、遺物の出土状況とも重なり、東西に分かれながらも土器型式ごとに重複した地点利用が伺える。

集石と遺物の関係は、1号集石内にVII類土器、2号集石内にVIII類土器が出土している。また、VI類土器が12号集石内から出土し、VI類土器群のエリア内に10号、11号

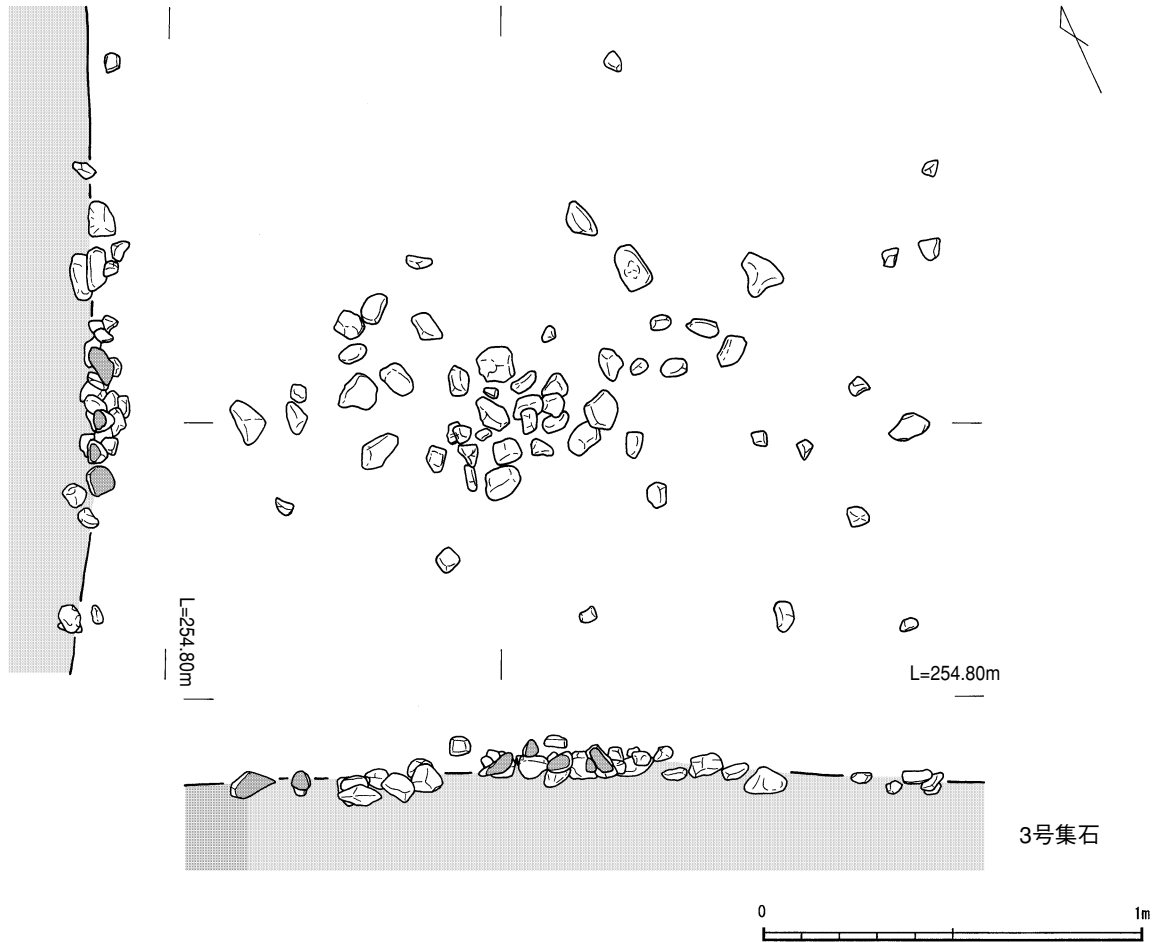
集石が位置している。3号と7号集石の近くにはV類土器、8号集石の近くからはIII類、VI類土器が出土している。13号集石はIII類、V類、VII類土器が近くから出土しているが、西側に下る傾斜地に集石が位置しているため所属型式は定かでない。

4号～6号集石、9号集石の遺物との相関関係は、遺物の分布状況からは把握できない。

これら、13基の検出された集石は、いずれも掘り込みを持つものではなく、まばらに散在する礫が一定範囲に集中する状況で把握した。



第17図 VIII層集石 2 及び集石内出土遺物



第18図 VIII層集石 3

1号集石（第16図）

I-5区に位置し、Ⅶ層で検出した。礫は1.62m×1.75mの平坦面にまばらに散在し、南側にⅦ類土器の土器片が1点含まれる。構成する礫は、安山岩26個、砂岩10個、頁岩1個を用い、被熱で赤化し熱破碎した小礫もみられる。礫の平均重量は310gである。

集石内から出土した土器No.1は、Ⅶ類土器の口縁部で、口唇部は平坦面を呈し、口縁部が直行し、胴部が屈曲して小さな平底の底部まで直線的にすぼまる器形で、外面に山形押型文を横位に施す。口唇部内面の施文は施されず、包含層出土遺物No.69に類似する。

2号集石（第17図）

I-6区Ⅶ層で検出し1号集石に隣接する。東西1.1m、南北1.12mの狭い範囲の平坦面に礫が散在するが、北側にまとまりを有する。安山岩28個、頁岩7個、砂岩3個平均重量235gの礫で構成する。

集石内から出土したⅦ類土器No.2, 3は同一個体の胴部片で周囲から出土した土器片と接合した。なお、包含層出土のNo.74~77は同一個体である。口唇端部が外傾する平口縁を呈し、口縁部から底部にかけて円筒状の器形

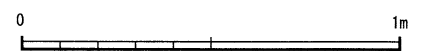
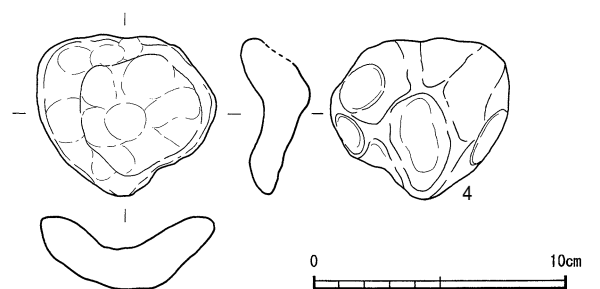
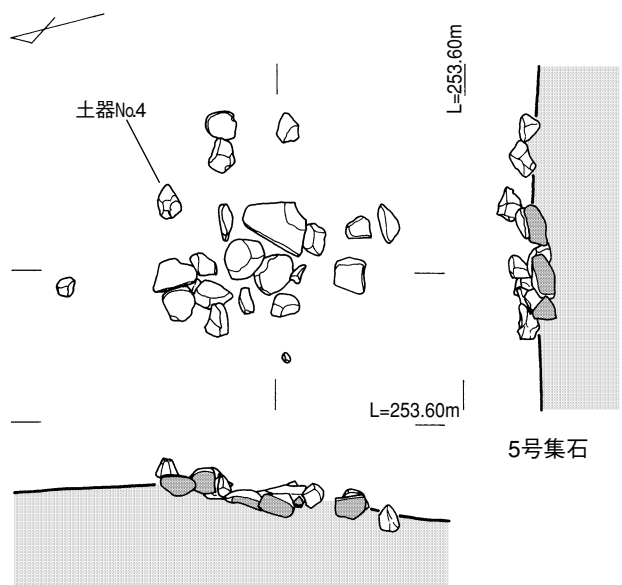
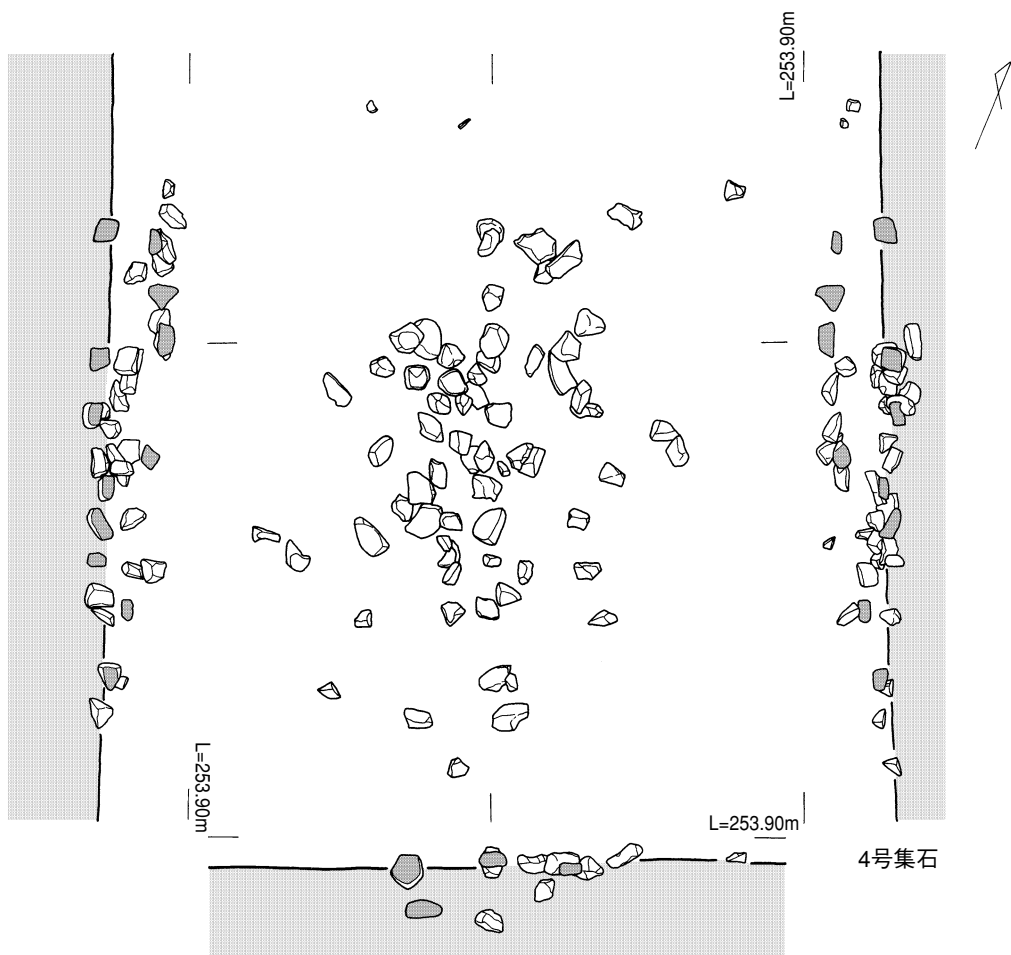
を呈する。器面調整は、内面をミガキに近い丁寧なナデ調整を施し、外面には縦位の貝殻条痕を先行させ、横方向の貝殻条痕を口縁部から胴部中央の真っ直ぐ立ち上がる部分に施す。底部内面には指頭痕が顕著に残り底部側面の接合痕が明瞭に認められ、底部から胴部を立ち上げる状況が見られる。胎土中に角閃石と小礫を多く含む。

3号集石（第18図）

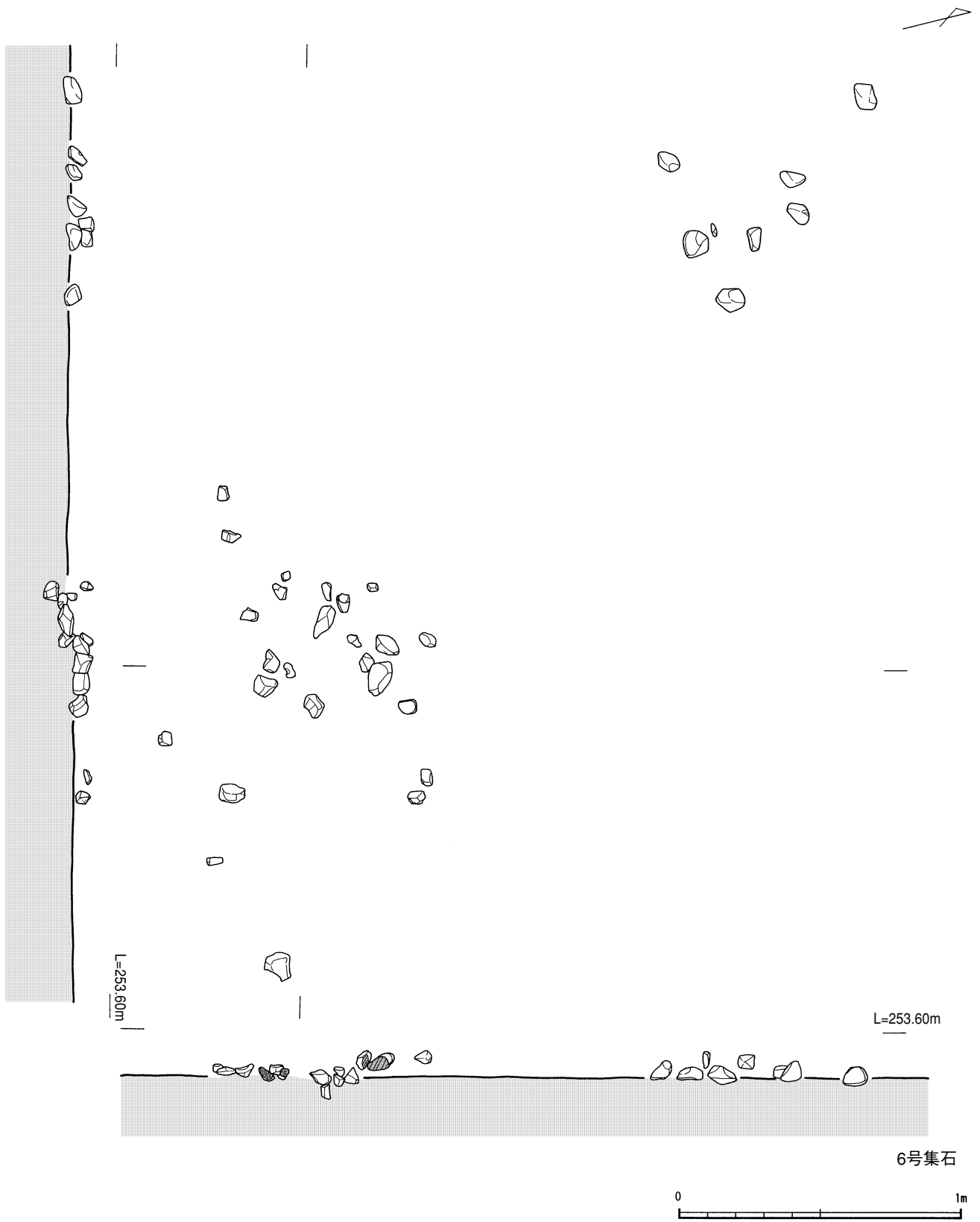
H-6区に位置し、Ⅶ層で検出した。安山岩45個、粘板岩9個、砂岩4個平均重量289gの礫で構成し、チャートの剥片を1点含む。東西1.88m、南北1.25mの範囲に散在し、中央部に礫が集中する。

4号集石（第19図）

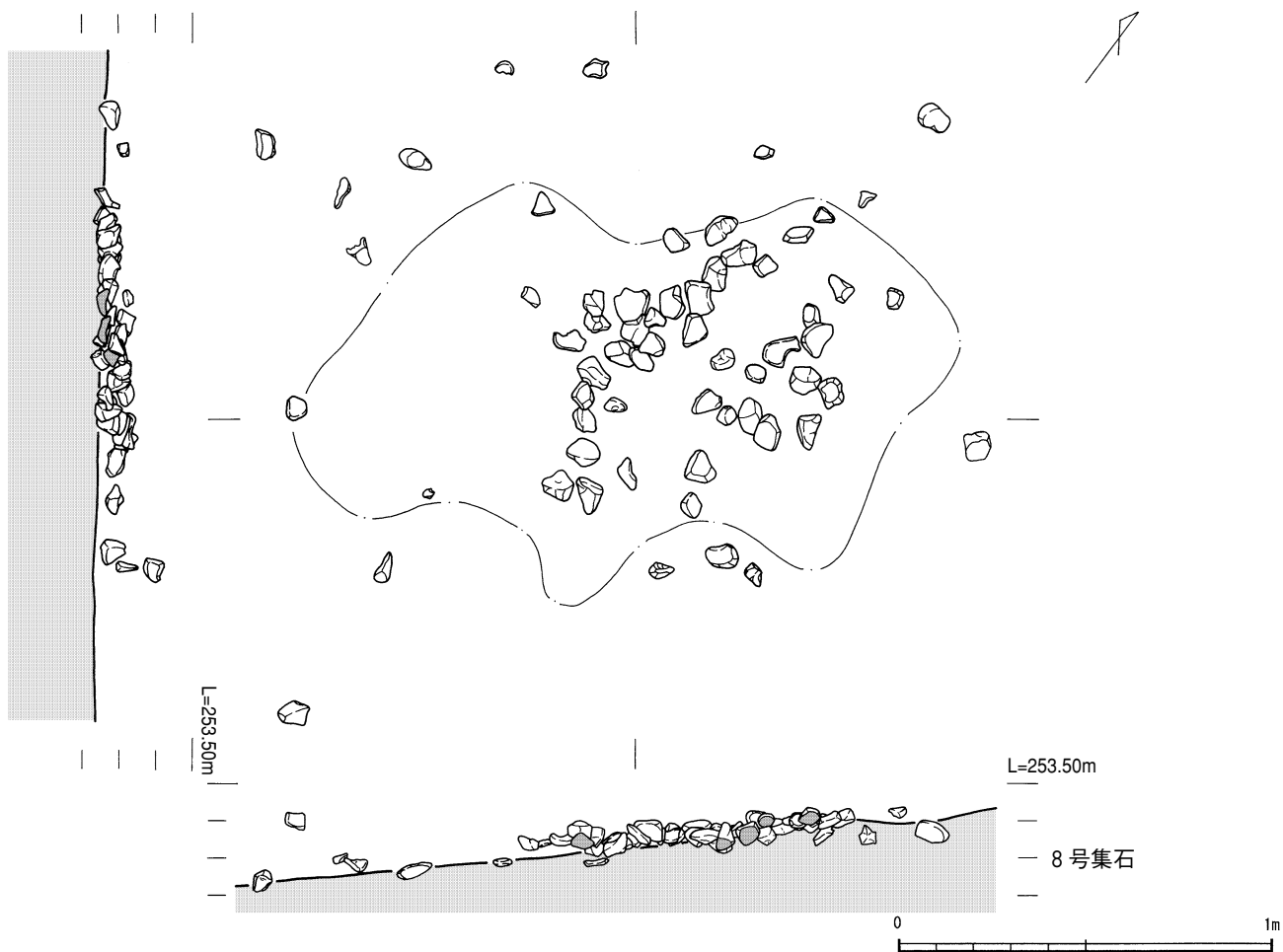
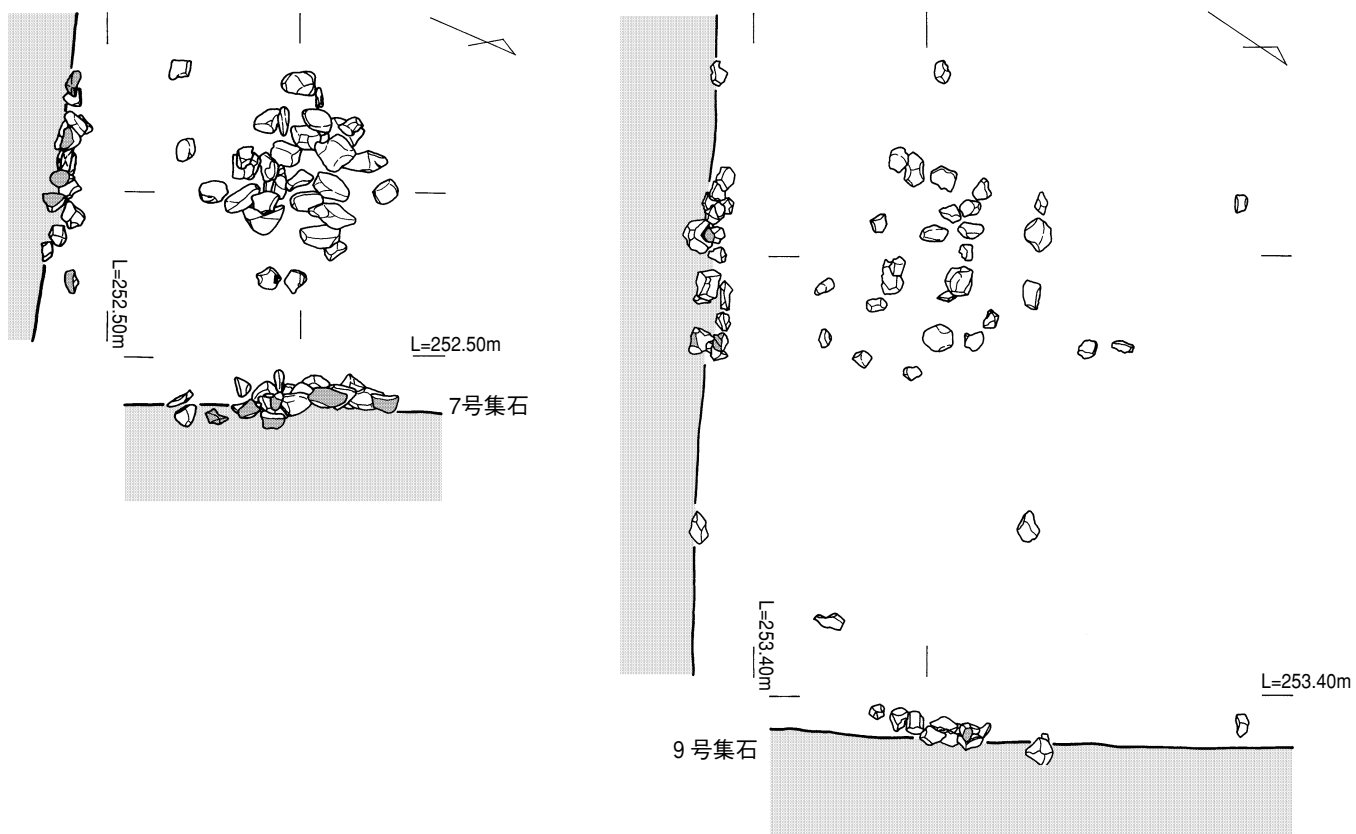
G-8区に位置し、Ⅶ層で検出した。東西1.31m、南北1.73mの平坦面にあり、安山岩62個、頁岩5個、砂岩1個とチャート礫14個で構成し、礫の平均重量は259gである。中央部に礫が集中するが、樹痕等の影響かⅦ層中に上位層が入り込む攪乱状態のために礫の上下動が認められる。



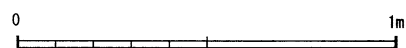
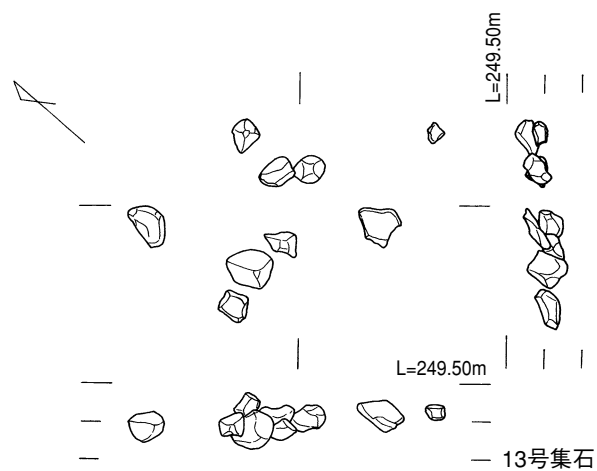
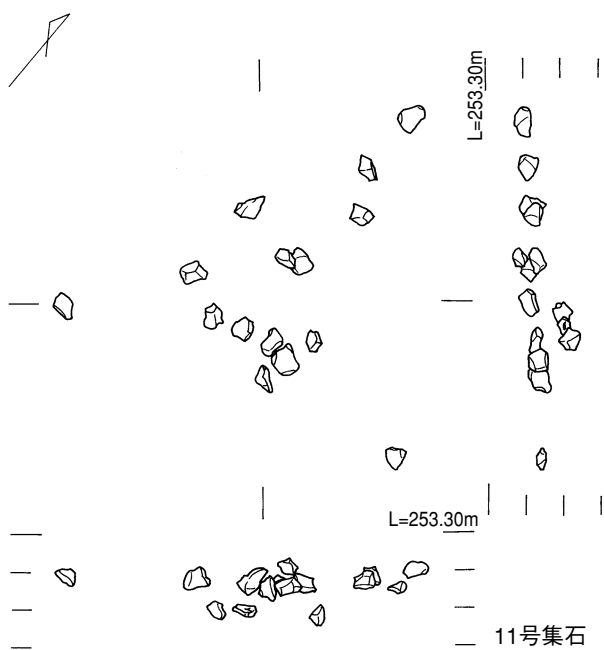
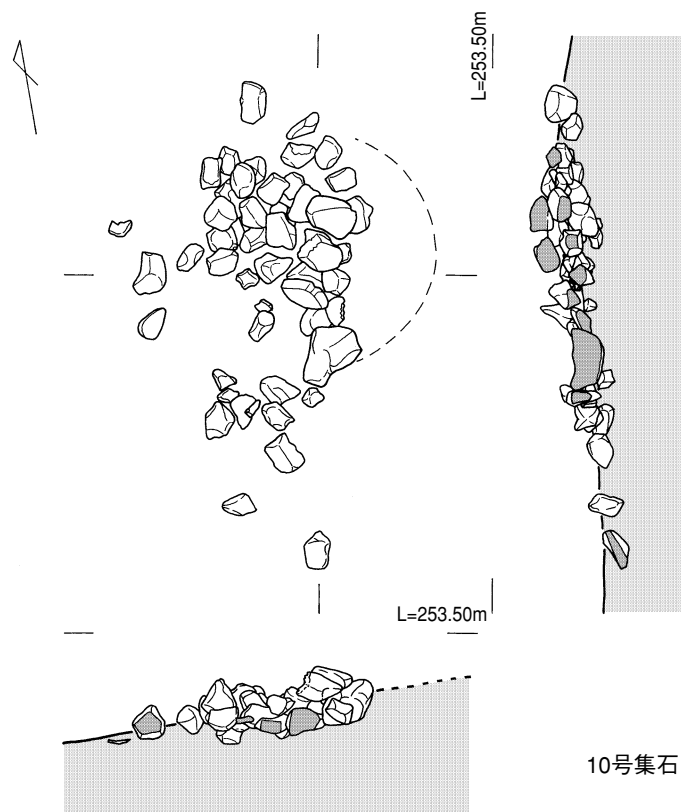
第19図 VIII層集石 4 及び集石内出土遺物



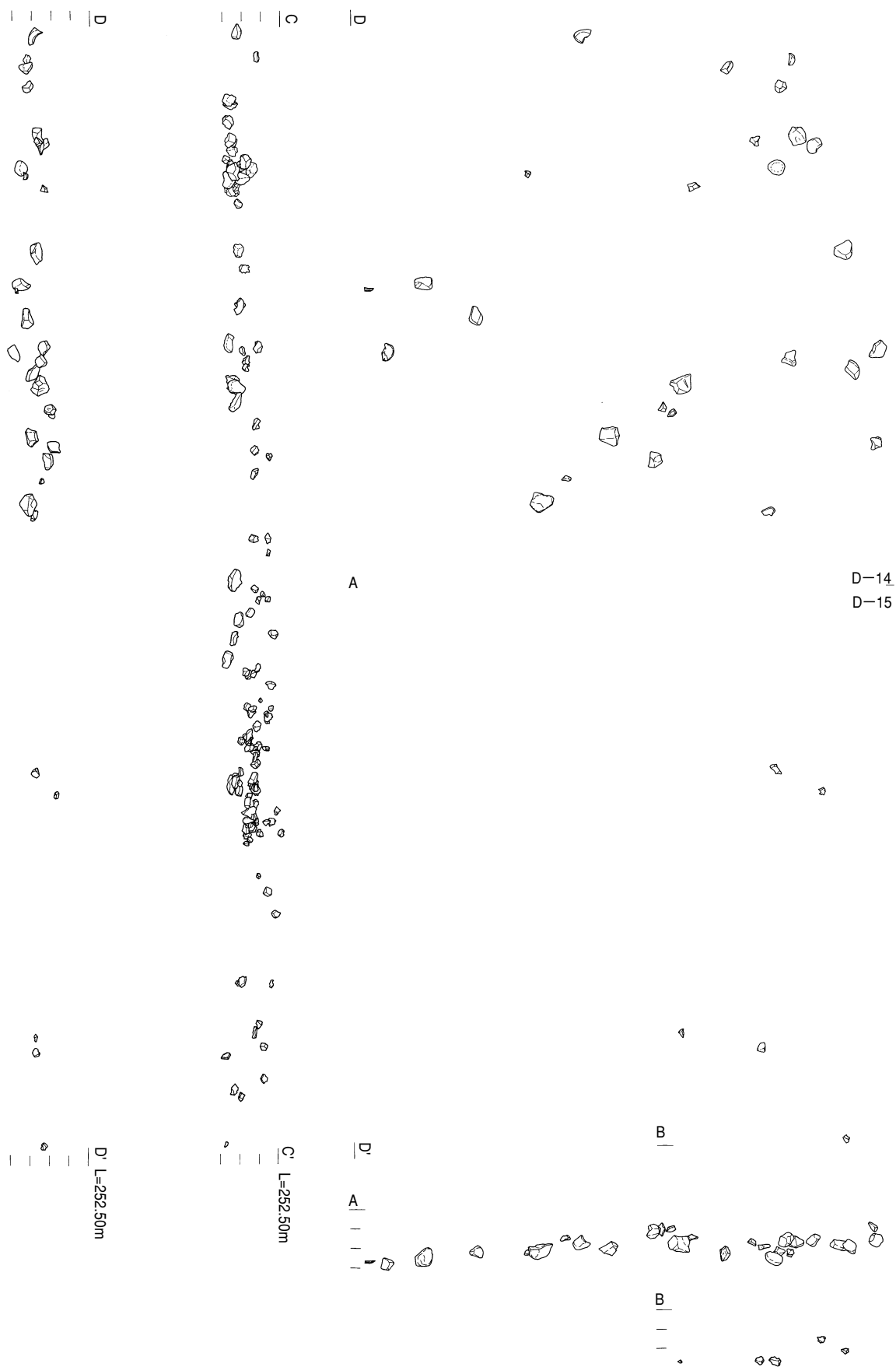
第20図 VIII層集石 5



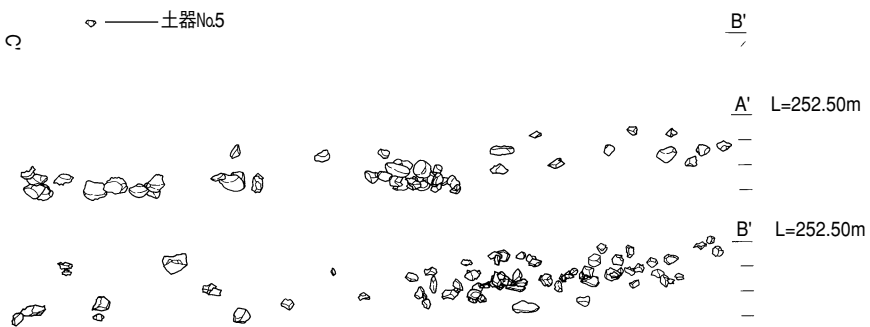
第21図 VIII層集石 6



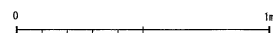
第22図 VIII層集石 7



第23図 VIII層集石 8



12号集石



5号集石（第19図）

G-9区に位置し、Ⅶ層で検出した。平均重量391gの安山岩22個で構成し、手づくね土器1点を含む。東西0.65m、南北0.66mの平坦面にあり、礫のまとまりが見られる。集石内から出土したNo.4の手づくね土器には、内外面に指頭痕が明瞭に残る。

6号集石（第20図）

H～I-11区の調査区境界付近に位置し、Ⅶ層で検出した。東西2.64m、南北3.19mの範囲に安山岩18個、頁岩10個、砂岩6個平均重量250gの礫で構成し、2つのまとまりに分かれる。

7号集石（第21図）

D-7区Ⅶ層の緩斜面で検出した。東西0.62m、南北0.61mの小範囲に礫が集中する。平均重量242g安山岩13個、砂岩14個、頁岩5個で構成し、Ⅴ類土器が近くから出土している。

8号集石（第21図）

C-10区Ⅷ層上面の集石は1.49m×1.15mの緩斜面で検出した。安山岩39個、頁岩12個、砂岩10個の平均重量197gの礫で構成し、礫が斜面上に散在した様子である。集石の近くからはⅡ類土器No.7、Ⅲ類土器No.13、Ⅵ類土器No.48、63が出土している。

9号集石（第21図）

E-10区に位置し、Ⅶ層で検出した。安山岩12個、頁岩11個、砂岩9個の平均重量155gの小ぶりの礫で構成し、東西1.98m、南北1.77mの範囲に礫が散在する。

10号集石（第22図）

D-12区Ⅶ層で検出した。集石の一部が5Tで検出されたが波線の部分を消失している。東西0.70m、南北1.29mの範囲に安山岩38個、砂岩11個、頁岩1個平均重量455gの大型の礫で構成し礫が集中する。集石の近くからはⅥ類土器No.42、44、46が出土している。

11号集石（第22図）

C-13区Ⅶ層で検出した。東西0.97m、南北0.97mの方形の範囲に安山岩10個、砂岩5個、頁岩1個平均重量149gの小ぶりの礫少数で構成する。集石の近くからはⅥ類土器No.60、62が出土している。

12号集石（第23図）

C、D-14、15区Ⅶ層で検出した。礫は、広範囲（5.82m×5.64m）にまばらに散在し、北側に礫集中部を有する。安山岩75個、砂岩46個、頁岩35個平均重量169gの

小礫で構成しⅥ類土器が1点含まれる。

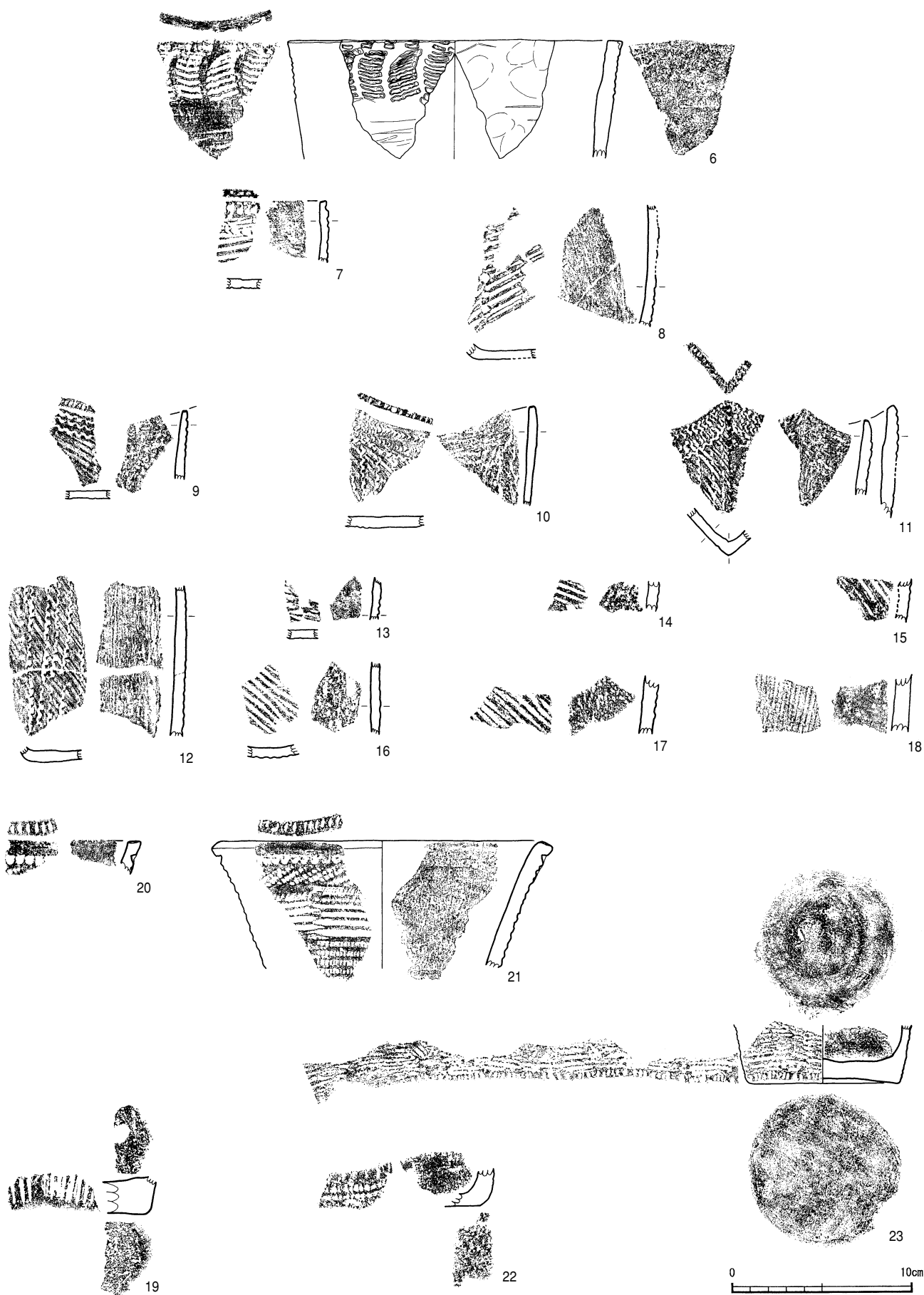
集石内から出土したⅥ類土器No.5は、口縁部がわずかに内湾し、胴部が直線的にすぼまり底部は平底をなす器形で、施文的特徴として縦位あるいは横位に貝殻刺突文を羽状に施す土器の胴部片である。内面は、丁寧なナデ調整が施されている。

13号集石（第22図）

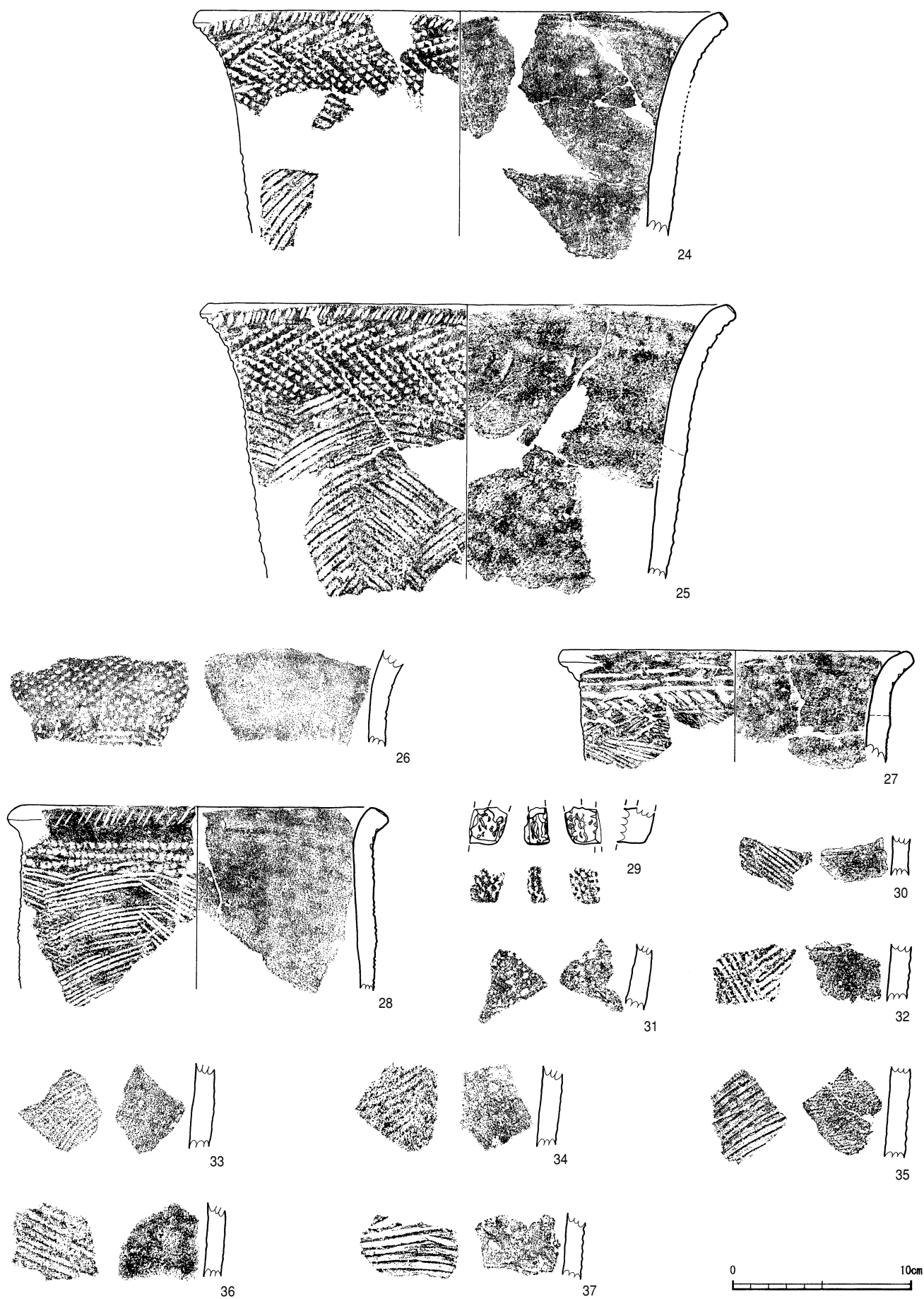
遺跡の南端C-19区Ⅶ層上面、西向き傾斜面で検出した。0.86m×0.53mの範囲に安山岩1個、砂岩7個平均重量488gの大型の礫が少数点在する。周囲からはⅢ類土器No.18、Ⅴ類土器No.37、Ⅵ類土器No.67が出土している。

第3表 Ⅷ層集石観察表

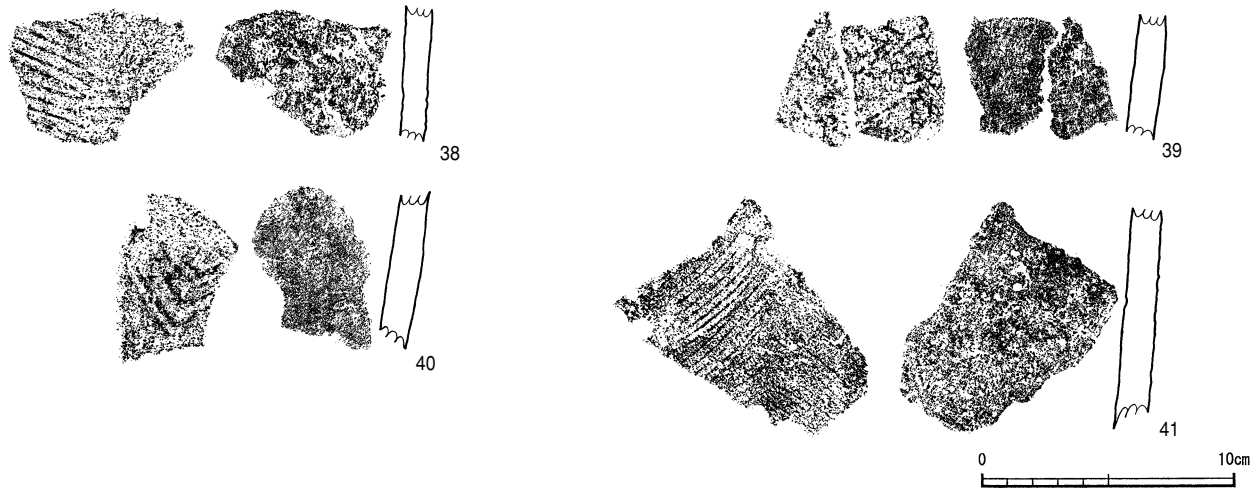
挿図 No.	報告 No.	長径(cm)	短径(cm)	備考
16	1	162	175	No.1Ⅶ類土器出土
17	2	112	110	No.2, 3Ⅷ類土器出土
18	3	188	125	
19	4	173	131	樹根による礫の上下動
19	5	66	65	No.4手づくね土器出土
20	6	319	264	
21	7	62	61	
21	8	149	115	
21	9	198	177	
22	10	97	97	
22	11	129	(70)	
23	12	582	564	No.5Ⅵ類土器出土
22	13	84	53	



第24図 I 類～IV類土器実測図



第25図 V類土器実測図1



第26図 V類土器実測図2

遺物（土器）

縄文時代早期に該当する土器は総数167点出土した。これらの土器全てを型式分類及び細別を行い、Ⅰ類～Ⅹ類の類型として分類し、図化不可能な小破片を除き147点87個を本報告書に掲載した。

Ⅰ類土器（第24図No.6）

No.6は、直行する口縁部で、口唇部は横方向のナデ調整により平坦面をなし外端部に2条のキザミ目を施す。

施文的特徴は、外面にヘラ状の物で丁寧にナデ調整を施し、口縁部に7条から8条の棒状工具或いは貝殻腹縁による押し引き文を施す。内面には、指押さえの残るナデ調整が施されている。外面の調整関係は、ナデ調整→押し引き→口唇部キザミの順である。胎土中には、砂粒を多く含み焼成も良好で堅緻である。Ⅰ類土器はⅧ層より1点のみ出土したため全体の器形は不明であるが円筒形をなすと推定される。

Ⅱ類土器（第24図No.7, 8）

Ⅷ層より出土したNo.7, 8は角筒土器の口縁部及び胴部で、No.8には角部が残る。No.7は口唇部は平坦でキザミ目が施され、口縁部外面に縦位の貝殻刺突文を2条施し、その下に斜位の貝殻条痕文を施す。No.8は外面に貝殻状痕文を施すが斜位が先行し、縦位の流水状の条痕文が続き角部に刺突文が施される。内面にはケズリ痕が残り薄い器壁である。

Ⅲ類土器（第24図No.9～19, 23）

Ⅲ類土器は、縄文時代早期前葉の口縁部から底部まで直線的にいたる円筒形、角筒形、レモン形の器形の土器で胴部に横位、斜位の貝殻条痕文を施すものを包括した。層位的にはⅧ層を中心に出土している。

No.9～11は器形が角筒を呈する波状口縁部で、わずかに内傾する口唇部に細かなキザミ目を施す。No.9は口縁部に3条の横位の貝殻刺突文を巡らす。No.10, 11は口縁部に縦位の貝殻刺突文、その下に横位の貝殻刺突文を1条巡らす。No.9～12の下部調整は、斜位の貝殻条痕文を地文とし、その上に貝殻刺突文を施す。内面調整は、口縁部は横方向に下部は縦方向にケズリ痕が残り器壁を薄く仕上げる。

No.13～18は外面に貝殻条痕文を施す胴部片で、No.13～17は内面調整にケズリ痕が残る。No.13は器壁を薄く作り上げている。No.18は縦方向の貝殻条痕文が施され内面にナデ調整を施し器壁が厚い。No.19, 23は底部で平底を呈し、No.19の外面には縦位の貝殻条痕文が施されている。No.23は横位の貝殻条痕文を施文後、端部にキザミ目を施し、底面に丁寧なナデ調整がされ若干上げ底状である。内面には、器面調整の跡が明瞭に残り、胎土は精選された物を用い堅緻である。

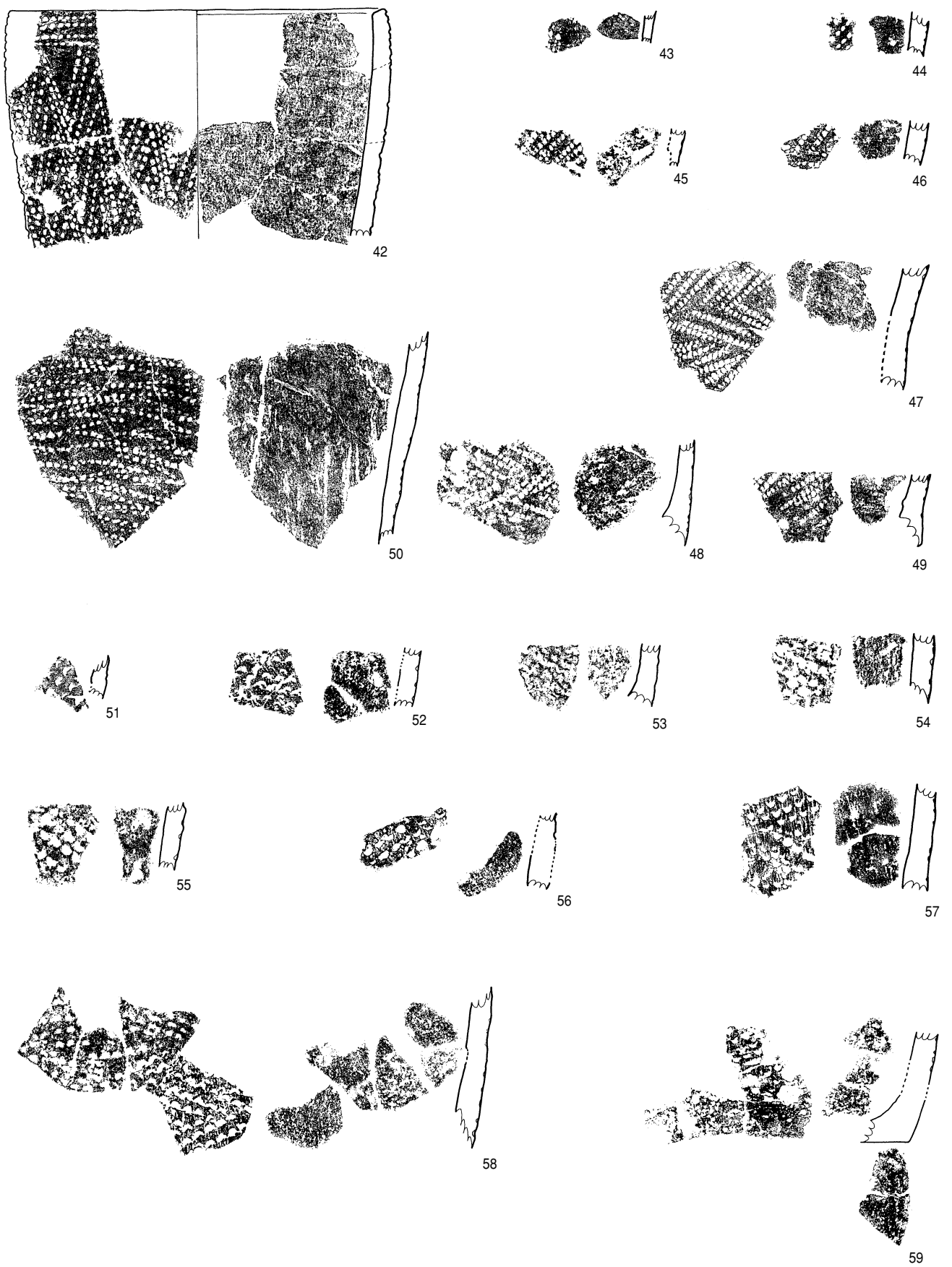
Ⅳ類土器（第24図No.20～22）

Ⅷ層から出土したNo.20, 21は、口縁部が外反し円筒形をなす土器の口縁部で、口唇部は平坦面を有して、規則的なキザミ目が施される。口縁部には、横位の貝殻刺突文を巡らし、密接な貝殻刺突文を斜めに巡らす。下部には、密な貝殻押引文間に貝殻の成長線が明瞭に残る条痕文を横位に施す。内面は丁寧なナデ調整が施されている。No.22は底部で、外面に横位の貝殻押引文を施す。いずれも胎土中に雲母と砂粒を多く含む。

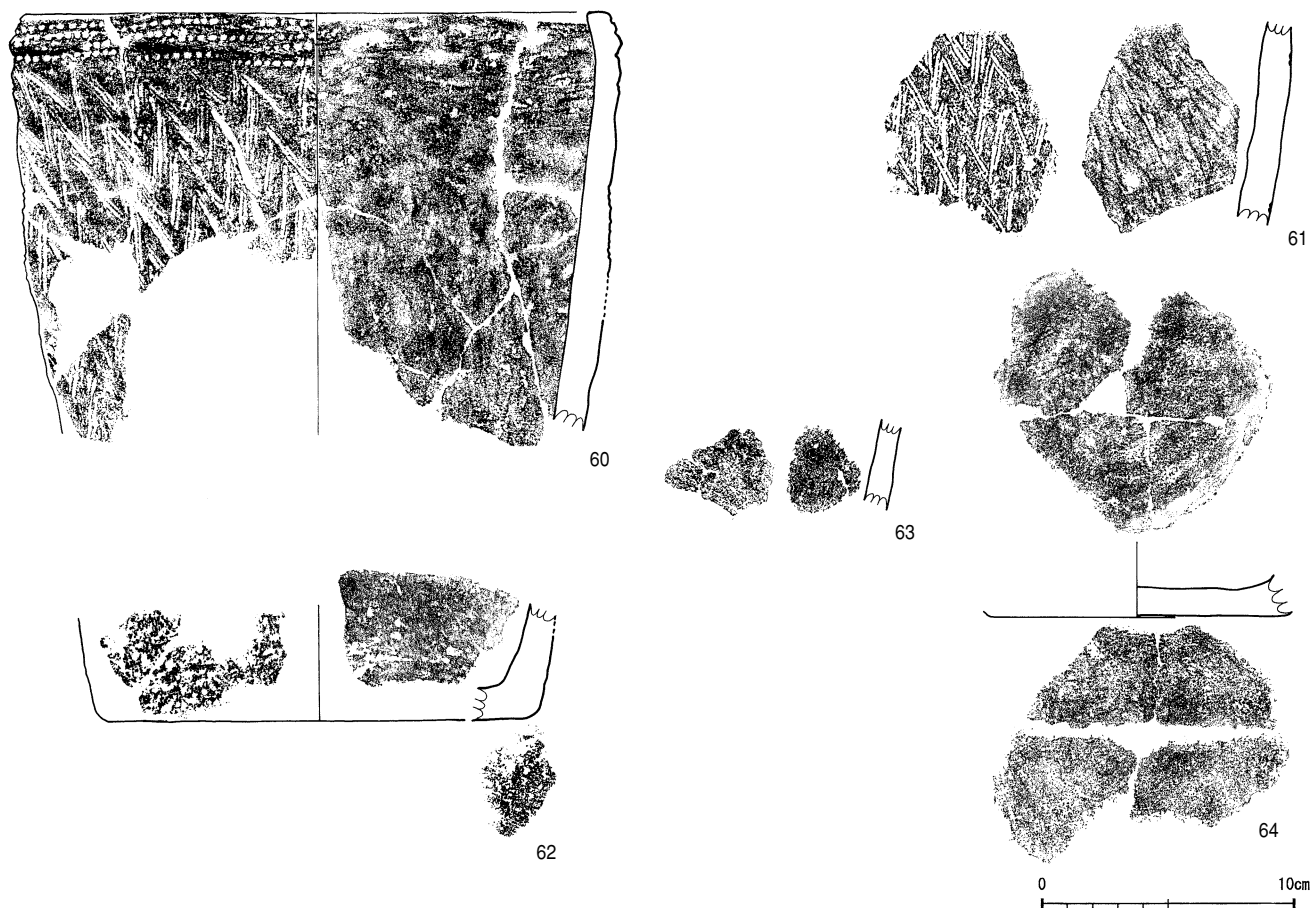
Ⅴ類土器（第25, 26図No.24～41）

Ⅴ類土器は、口縁部に貝殻刺突文、胴部に貝殻条痕文を綾杉状に施す円筒土器でⅧ層を中心に出土した。

No.24～26は、口縁部が外反し胴部がわずかにふくらむ器形で、No.24, 25は口唇部にキザミ目を施し、口縁部に



第27図 VI類土器実測図 1



第28図 VI類土器実測図 2

貝殻刺突文を羽状に施す。内面はナデ調整が施され、胎土中に砂粒と小礫を多く含み、No24の胴部外面は破裂痕のため剥落している。No26の胴部には縦位の貝殻刺突文が施される。

No27は、丸みを帯びた口唇部で文様が施されず、短く外反する口縁部に横位単節の貝殻刺突文を3条巡らし、その下に斜位の貝殻刺突文を巡らす。内面はナデ調整で胎土中に小礫を含む。

No28は、平坦面を有する口唇部にキザミ目を施し、短く外反する口縁部に横位の連続する貝殻刺突文を2条、単節を1条巡らす。内面は丁寧にナデられ胴部が張る器形である。胎土中に小礫を含むが精選され堅緻である。

No29は、V類土器口縁部に付く瘤部で、縦位の貝殻刺突文を施し、穿孔跡が残る。No30～41は胴部片で、No30, 32, 35, 36, 39, 39, 40は内面に丁寧にナデ調整が施され、No35は内面が黒色化している。

VI類土器（第27, 28図No.5, 42～64）

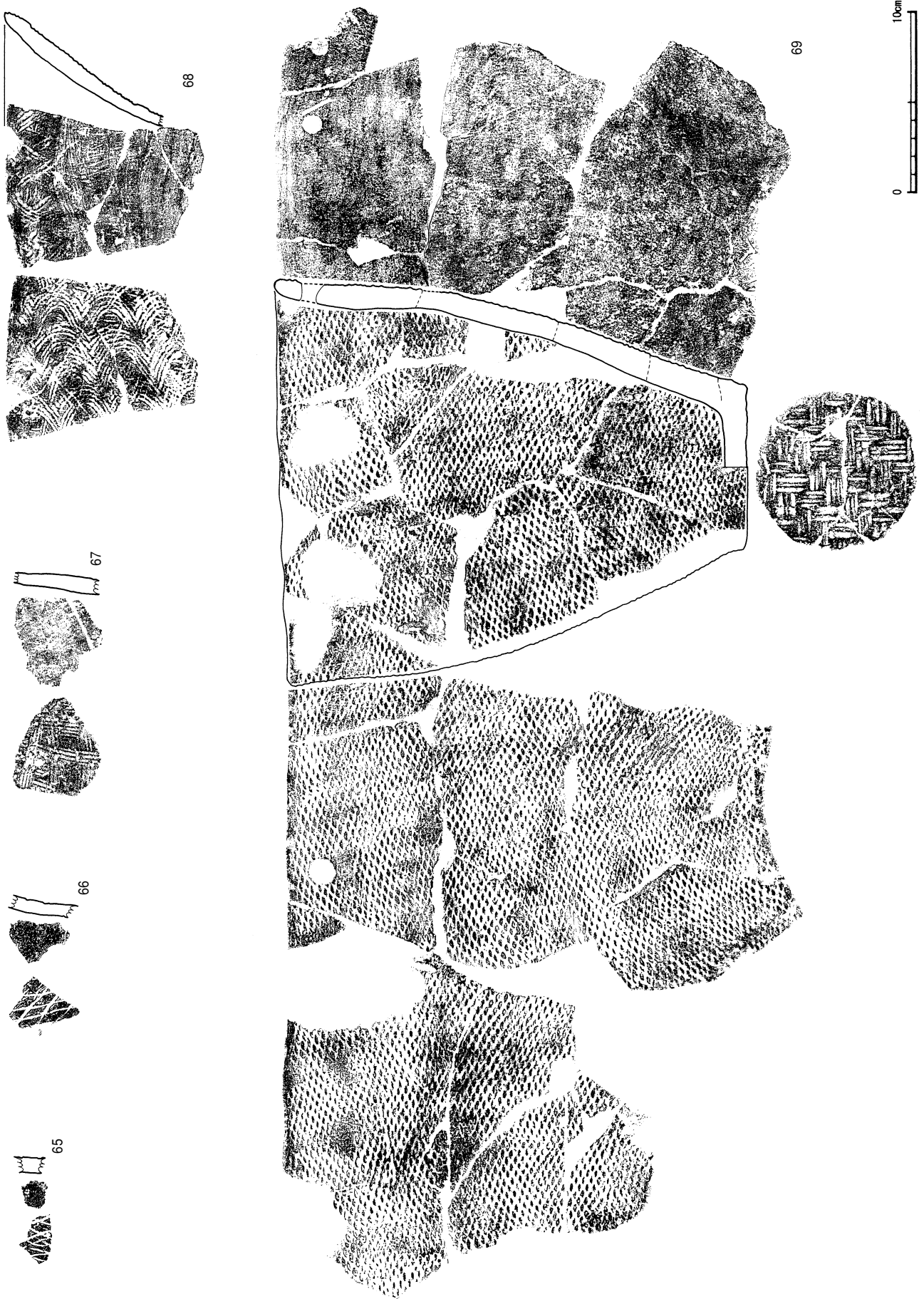
VI類土器は、口縁部がわずかに内湾し、胴部が直線的にすばまる器形で、底部は平底を呈する。施文的特徴として貝殻刺突文を鋸歯状或いは、羽状に施す。内面調整はナデ調整で、胎土中に雲母と小礫を含む物と含まない

物に大別される。No42は、内傾し平坦面を呈する口唇部を有し、口縁部は横位の貝殻刺突文が4条巡り、胴部には、鋸歯状の貝殻刺突文を施す。No45～59は横方向に羽状の刺突文を施す。No60, 61は、胴部文様帯に鋸歯状の貝殻条線文を施す。No60の口唇部は平坦面を呈し、口縁部文様帯に微隆起の突帯を有し、横位の貝殻刺突文を4条巡らす。この突帯は、下部に刺突文を施すことから口縁部と胴部の文様体を区画するものではない。No62, 64は底部で。No62の内面に炭化物が付着している。VI類土器は、Ⅷ層とⅦ層を中心に出土した。

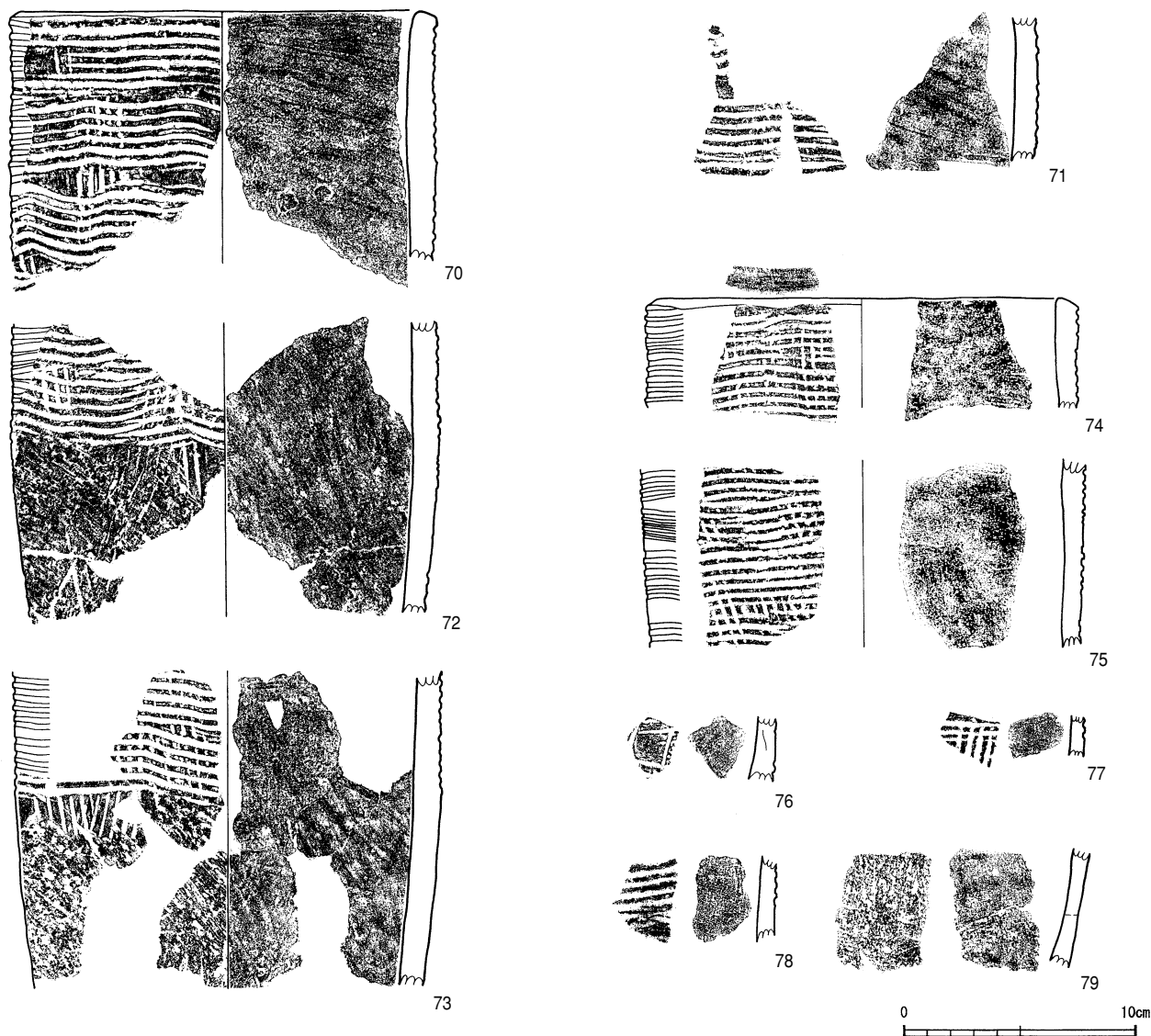
Ⅶ類土器（第16, 29図No.1, 65, 66, 68, 69）

Ⅶ類土器は、外面の施文に押型文を施す土器で、No65～68は口縁部が外反し、胴部が屈曲して小さな底部にいたる土器の口縁部と胴部で、No65, 66は、撚糸を格子状に巻き付けた回転原体を縦位に施す。No68は、大きく緩やかに外反する口縁部で、薄く尖った口唇部をなし、変形撚糸文を外面に縦位、口縁部内面には横方向に施す。内面にはケズリの跡をナデ消した跡が残る。

No69は、口縁部が直行し、胴部が屈曲し小さな平底の底部まで直線的にすばまる器形で、器面調整は外面全面に横位の楕円押型文を施し、口縁部内面は無紋に仕上げ、



第29図 VII・IX類土器実測図



第30図 VIII類土器実測図

内面は丁寧にナデ調整が施される。また、口縁部に補修孔一対が確認でき、破裂痕も認められ底部には、綾編みの網代痕が残る。

1号集石内から出土したNo.1はNo.69と器形、内面調整が類似する。Ⅶ類土器は層位的にはⅦ層から出土した。

Ⅷ類土器（第17, 30図No.2, 3, 70~79）

器形的特徴は、平底で厚手の底部から直線的に立ち上がり、胴部中央部付近で緩やかに膨らみ口縁部にかけて直行する器形で、口唇部が外形し、若干開くものNo.70と直行するものNo.74がある。

施文の特徴としては、縦位の貝殻条痕文を口縁部から胴部に施し、口縁部から胴部中央部の直線的に立ち上がる部位にのみ横位の貝殻条痕文を施す。その下位から底部にいたるまではケズリの跡が残る。

内面は丁寧にナデ調整が施され、No.2, 3, 74~77は

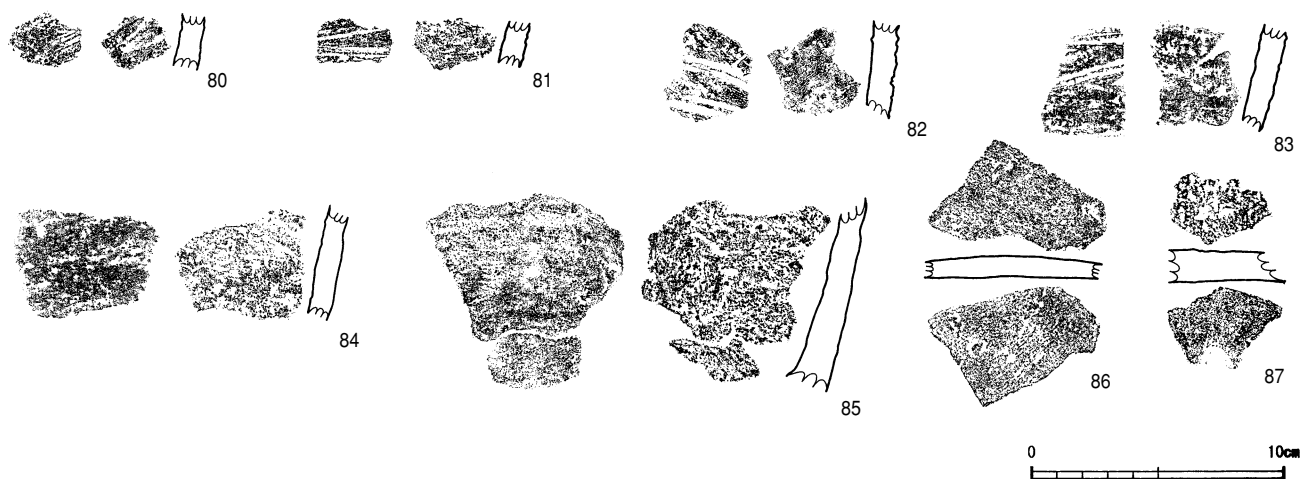
ミガキに近い調整がなされている。

胎土中に砂礫を多く含み器壁は厚手である。Ⅷ類土器はⅧ層とⅦ層より出土し、分布状況は2号集石内とその周囲に集中している。

Ⅸ類土器（第29, 31図No.67, 80~87）

Ⅶ層から出土した土器で他の類に属さないものを包括した。胴部片、底部片のため全体の器形は不明である。No.67は、格子状条痕文を施し、胎土中に多くの砂粒を含む。No.80~85は、Ⅵb層（P-11）直下、Ⅶ層上面から出土した土器の胴部で、外面に貝殻条痕文を施し、内面はナデ調整が施され胎土中に砂粒を多く含む。No.86は、薄手で胎土が精選された底部である。

No.87は厚手の底部で、胎土に石英、角閃石を含む。また、出土状況などからⅧ類土器の可能性がある。



第31図 IX類土器実測図

・遺物（石器）

縄文時代早期の石器は、総数44点出土した。これら全ての器種分類をし、図化不可能なチップや小剥片を除き27点を本報告書に掲載した。大別すると石鏃3点、削器1点、使用痕剥片2点、石核1点、石斧1点、剥片1点、磨石9点、凹石2点、石皿7点と剥片石器が少数で礫石器、磨石、石皿類がその主体を占めている。石器の分布状況は土器の分布と基本的に重なり、Ⅷ層、Ⅷ層段階の土器に平行すると判断できる。

石鏃（第32図S1, 2, 3）

合計2点出土している。石鏃S1は、良質の黒曜石で、自然面の残る縦長剥片を用い、右側縁に両面からの整形剥離を施すが未完成品である。S2はチャートを用い、両面に丁寧な整形剥離を施し深い抉りをもつ。S3は、頁岩の厚手の剥片を用いた石鏃の未完成品で、断面形がレンズ状に厚く、先端部を薄く鋭い整形で作出するが腹面には打面、主剥離面が残る。

削器（第32図S4）

S4は安山岩の横長剥片を用い、右側縁と左側縁に整形剥離を施し、先端部を欠損する。

使用痕剥片（第32図S5, 6）

使用痕剥片S5, 6は、チャートの剥片で、S5は右側縁に、S6は縁部に使用痕が見られる。

石核（第32図S7）

S7は、良質の黒曜石を用い、原礫面を打面とした石核で、両面から丈の短い横長剥片剥出を目的としている。

石斧・剥片（第32図S8, 9）

S8は頁岩を用いた磨製石斧から剥落した刃部で、入念な研磨により斜刃に仕上げている。S9は、側面に整形の跡が残る頁岩の剥片で、焼けたためか脆弱である。

磨石・敲石（第33～35図S10～18）

両面または片面に摩耗が進行し平滑面が認められるものS10, 12, 13, 18と、平滑面と敲打痕の両機能を兼ねたものS11, 14, 15, 16, 17を扱った。S14は、側縁全面に敲打による面取りを施す。S15は、側縁部の面取りが丁寧に施され、両面が平滑面をなす。S16は、表面に敲打痕が、裏面に摩耗による平滑面が認められ両面を使い分けている。

凹石（第35, 36図S19, 21）

S19, 21は、敲打による凹みが明瞭に残り、S21は、凹みの周囲に磨った痕跡が認められる。

石皿（第36～38図S20, 22～27）

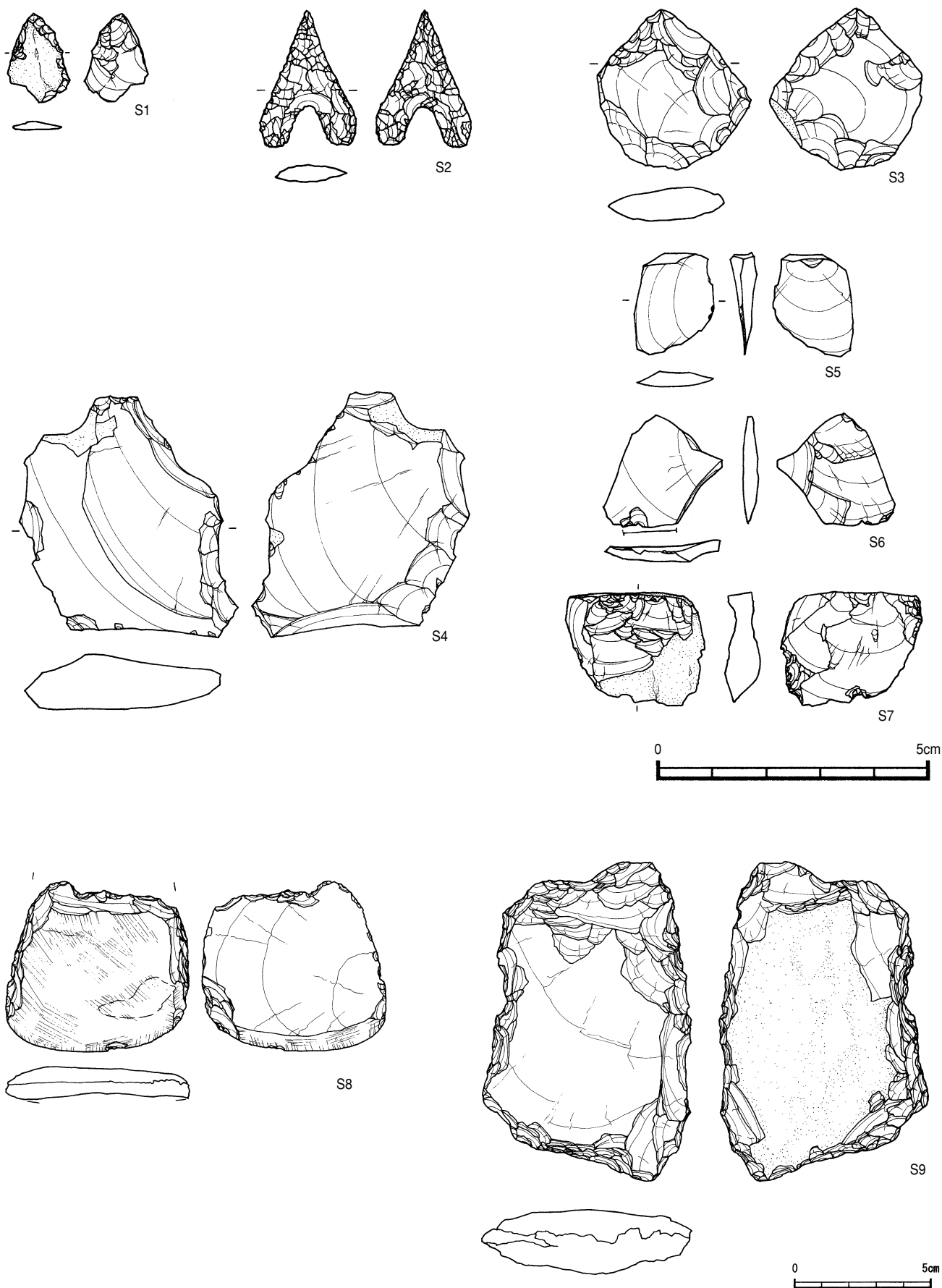
石皿は、7点出土しているが、S27以外大部分を欠損している。S20, 22, 24は、光沢のある平滑面を持ち、S23, 25, 26は、皿状の作業面をなしていた物と見られる。S27は、全域に作業面が認められる。

第4表 I類～V類土器観察表

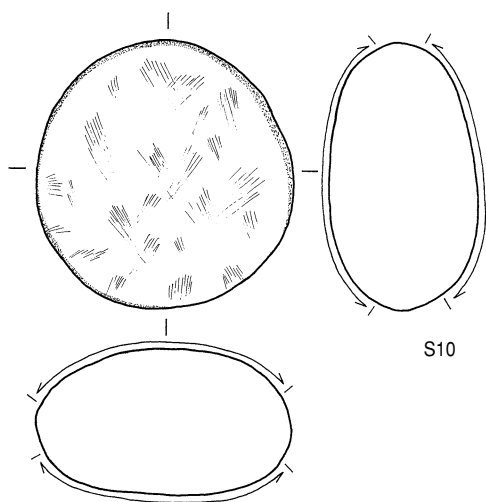
挿図No.	報告No.	取上No.	出土区	層位	分類	器種	内面調整	外面調整	胎土	備考
16	1	シ-1-8	集石1	—	7	深鉢	指押さえ, 工具によるナデ	山形押型	石, 長	
17	2	シ-2-31	集石2	—	8	深鉢	ナデ	縦位貝殻条痕	角, 長, 雲	
	3	シ-2-4	集石2	—	8	深鉢	ナデ	縦位→横位貝殻条痕, 下端ケズリ	角, 長, 軽	
		2008	I-6	VIII						
		2009								
		2010								
		2011								
		2013								
		2022	↓	↓						
		2026	I-6	VI						
		2027	↓	VIII						
		2032	I-6	VI						
		2034	↓	↓						
		2035	I-6	VIII						
		2061	H-6	↓						
19	4	シ-2-4	集石2	—	—	手ずぐね	指押さえ	指押さえ	長, 砂	
		シ-2-19		—						
		シ-2-31	↓	—						
23	5	シ-1-13	集石1	—	6	深鉢	ナデ	貝殻刺突	石, 長, 角, 雲	
24	6	1199	C-9	VIII	1	深鉢	指押さえ, 工具によるナデ	貝殻押引, 工具によるナデ	長, 雲, 砂	口唇部押引によるキザミ
	7	1204	C-10	VI	2	角筒	工具によるケズリ	口縁部貝殻条痕→縦位貝殻刺突	長	口唇部キザミ
	8	1202	C-10	VIII	2	角筒	工具による縦方向の削り	貝殻条痕, 貝殻刺突	石, 長	
	9	1187	C-8	VI	3	角筒	工具によるケズリ	口縁部横位貝殻刺突, 貝殻条痕→縦位貝殻刺突	長	口唇部キザミ
	10	1186	C-8	VIII	3	角筒	工具によるケズリ	口縁部縦位→横位貝殻刺突, 貝殻条痕→縦位貝殻刺突	石, 長	口唇部キザミ
	11	1188	C-8	VI	3	角筒	工具によるケズリ	口縁部貝殻刺突縦位→横位, 貝殻条痕→縦位貝殻刺突	長, 角	口唇部キザミ, 角部刺突
	12	1184 1185	C-8 ↓	VI ↓	3	角筒	工具による縦方向ケズリ	貝殻条痕→縦位貝殻刺突	石, 長, 角	角部刺突
	13	1365	C-10	VIII	3	角筒	ケズリ	貝殻条痕, 貝殻刺突	長	
	14	491	C-9	IVa	3	深鉢円筒	ケズリ	貝殻条痕	長, 角	
	15	1020	C-18	VIII	3	深鉢円筒	ケズリ	貝殻条痕	長, 雲	
	16	1200	C-9	VIII	3	深鉢円筒	ケズリ	貝殻条痕	長	
	17	1021	C-18	VIII	3	深鉢円筒	ケズリ	貝殻条痕	長	
	18	1059	C-19	VI	3	深鉢円筒	ナデ	貝殻条痕	長, 雲	
	19	1201	C-10	VIII	3	角筒	ケズリ	縦位貝殻条痕	石, 長	
	20	1030	C-18	VI	4	深鉢円筒	ナデ	口縁部貝殻刺突	長, 雲, 砂	口唇部キザミ
	21	1048	C-18	VIII	4	深鉢円筒	ナデ	口縁部貝殻刺突, 横位貝殻押引, 条痕文(成長線)	長, 雲, 砂	口唇部キザミ
	22	1061	C-19	VI	4	角筒	ケズリ	貝殻押引	長, 雲, 砂	
	23	一括	C-11	VIII	3	深鉢円筒	ナデ	貝殻条痕, 下端部キザミ	長	
25	24	1205	E-8	↓	5	深鉢	ナデ	貝殻刺突, 貝殻条痕	長, 雲	口唇部キザミ
		1208	D-7	↓					砂, 礫	
		2116	G-6	VIII						
		2151	G-6	VI						
	25	2081	H-6	VIII	5	深鉢	ナデ	貝殻刺突, 貝殻条痕	長, 雲	口唇部キザミ
		2112	G-6	VI					砂, 礫	
		2148	G-7	VIII						
	26	1015	C-18	VI	5	深鉢	ナデ	貝殻刺突, 貝殻条痕→縦位貝殻刺突	石, 長, 砂	
	27	996	D-16	VI	5	深鉢	ナデ	横位→斜位貝殻刺突, 貝殻条痕	石, 長, 角, 砂, 礫	
		1000	D-17	VIII						
	28	1005	C-17	VIII	5	深鉢	ナデ	口縁部横位貝殻刺突, 貝殻条痕	石, 長, 砂, 礫	口唇部キザミ
	29	1067	C-19	VI	5	深鉢	—	貝殻刺突, 穿孔	長, 砂	
	30	2074	H-6	VIII	5	深鉢	ナデ	貝殻条痕	長, 軽, 砂	
26	31	1092	C-20	VI	5	深鉢	ナデ	貝殻条痕	長, 砂	
	32	1090	C-20	VI	5	深鉢	ナデ	貝殻条痕	石, 長, 角, 砂	
	33	1002	C-17	VI	5	深鉢	ナデ	貝殻条痕	石, 長, 砂, 礫	
	34	1051	C-19	VI	5	深鉢	ナデ	貝殻条痕	石, 長, 輝, 砂	
	35	1009	D-18	VI	5	深鉢	ナデ, 黒色	貝殻条痕	長, 角, 砂, 礫	
	36	2136	G-6	VI	5	深鉢	ナデ	貝殻条痕	石, 長, 角, 砂, 礫	
	37	1074	C-19	VI	5	深鉢	ナデ	貝殻条痕	長, 雲, 砂	
	38	1166	D-7	VI	5	深鉢	ナデ	貝殻条痕	石, 長, 雲, 砂, 礫	
	39	2047	I-5	VIII	5	深鉢	ナデ	貝殻条痕	長, 砂, 礫	
		2053	H-5	VI						
	40	2048	H-5	VI	5	深鉢	ナデ	貝殻条痕	長, 砂, 礫	
	41	1093	C-20	VI	5	深鉢	ナデ	貝殻条痕	長, 角, 砂, 礫	

第5表 VI類～IX類土器観察表

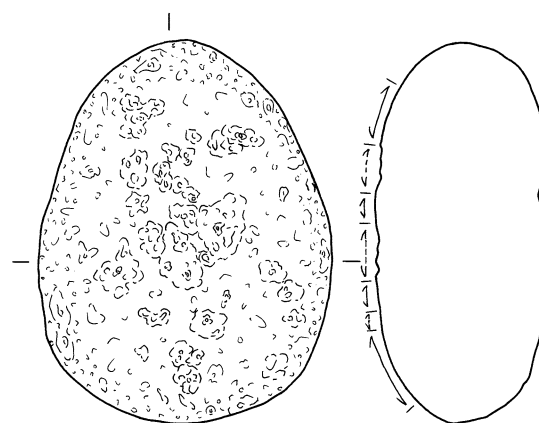
挿図No.	報告No.	取上No.	出土区	層位	分類	器種	内面調整	外面調整	胎土	備考
27	42	10	D-13	Ⅶ	6	深鉢	ナデ	貝殻刺突	長, 砂	
		11 ↓ 1793	E-13	Ⅶ						
		43	2025	I-6	Ⅷ	6	深鉢	ナデ	貝殻刺突	長, 軽, 砂
		44	15	D-13	Ⅶ	6	深鉢	ナデ	貝殻刺突	長, 砂
		45	2126	G-6	Ⅷ	6	深鉢	ナデ	貝殻刺突	長, 砂
		46	1273	D-13	Ⅶ	6	深鉢	ナデ	貝殻刺突	長, 角, 砂
		47	2114	G-6	Ⅷ	6	深鉢	ナデ	貝殻刺突	長, 砂
		48	1366	C-10	Ⅷ	6	深鉢	ナデ	貝殻刺突	長, 砂, 礫
		49	1956	H-8	Ⅳa	6	深鉢	ナデ	貝殻刺突	長, 砂, 礫
		50	2003	I-5	Ⅷ	6	深鉢	ナデ	貝殻刺突	長, 砂, 礫
		51	1158	F-7	Ⅷ	6	深鉢	ナデ	貝殻刺突	長, 角
		52	1159	F-7	Ⅶ	6	深鉢	ナデ	貝殻刺突	石, 長
		53	21	H-7	Ⅶ	6	深鉢	ナデ	貝殻刺突	長, 軽, 砂, 礫
		54	1167	D-8	Ⅶ	6	深鉢	ナデ	貝殻刺突	石, 長, 角
		55	948	E-7	Ⅶ	6	深鉢	ナデ	貝殻刺突	長, 砂
		56	2130	G-6	Ⅶ	6	深鉢	ナデ	貝殻刺突	長, 角, 砂, 礫
		57	1813	F-6	Ⅶ	6	深鉢	ナデ	貝殻刺突	石, 長, 角
		58	1146	F-7	Ⅶ	6	深鉢	ナデ	貝殻刺突	石, 長, 輝, 軽
		1816	F-6	Ⅶ						
		59	26	H-7	Ⅶ	6	深鉢	ナデ	ナデ, 貝殻刺突	長, 角, 輝, 軽
		27 ↓ 2140 ↓ 2180	G-7	Ⅷ						
28		60	1303	C-12	Ⅶ	6	深鉢	ナデ	口縁部貝殻刺突, 突帯, 貝殻条線	長, 雲, 砂, 礫
		61	1325	C-11	Ⅶ	6	深鉢	縦方向のナデ	ナデ, 貝殻条線	長, 雲, 砂, 礫
		62	1321	C-13	Ⅶ	6	深鉢	ナデ	条痕	長, 雲, 砂, 礫
		1367	C-13	Ⅷ						
		63	1203	C-10	Ⅷ	6	深鉢	ナデ	ナデ	長, 雲, 砂, 礫
		64	1313	C-12	Ⅶ	6	深鉢	ナデ	ナデ	長, 雲, 砂, 礫
29		65	1035	C-18	Ⅶ	7	深鉢	ナデ	格子状押型文	長, 雲, 砂
		66	1029	C-18	Ⅶ	7	深鉢	ナデ	格子状押型文	石, 長, 雲, 砂
		67	1073	C-19	Ⅶ	9	深鉢	ナデ	格子状条痕文	長, 角, 砂
		68	2097	H-5	Ⅶ	7	深鉢	変形撚糸文	ナデ, 変形撚糸文	石, 長, 角
		69	1122	F-7	Ⅶ	7	深鉢	ナデ	楕円押型文	石, 長, 角
		1128 ↓ 1130 ↓ 1133 ↓ 1135 ↓ 1142 ↓ 1145 ↓ 1147 ↓ 1152 ↓ 1832								
		1832	F-6	Ⅶ						
		70	2096	G-5	Ⅶ	8	深鉢	ナデ	縦位→横位貝殻条痕	長, 雲, 軽, 砂, 礫
		71	2075	H-6	Ⅷ	8	深鉢	ナデ	貝殻条痕	長, 雲, 軽, 砂, 礫
		72	1999	I-5	Ⅷ	8	深鉢	ナデ	縦位→横位貝殻条痕, 下端ケズリ	長, 雲, 軽, 砂, 礫
30		2020	I-6	Ⅶ						
		73	2015	I-6	Ⅷ	8	深鉢	ナデ	縦位→横位貝殻条痕, 下端ケズリ	長, 雲, 軽, 砂, 礫
		2016 ↓ 2023 ↓ 2176 ↓ 2177 ↓ 2017 ↓ 2024								
		74	2031	I-6	Ⅶ	8	深鉢	ミガキ	縦位→横位貝殻条痕	長
		75	2028	I-6	Ⅷ	8	深鉢	ミガキ	縦位→横位貝殻条痕	長
		76	2021	I-6	Ⅷ	8	深鉢	ミガキ	縦位→横位貝殻条痕	長, 軽
		77	2029	I-6	Ⅷ	8	深鉢	ミガキ	縦位→横位貝殻条痕	長
		78	1164	E-7	Ⅶ	8	深鉢	ナデ	貝殻条痕	石, 長, 角
		79	2033	I-6	Ⅶ	8	深鉢	ミガキ	ケズリ	石, 長, 角
		2178								
31		80	1195	C-7	Ⅶ	9	深鉢	ナデ	貝殻条痕	長, 角, 砂
		81	1192	C-7	Ⅶ	9	深鉢	ナデ	貝殻条痕	長, 砂
		82	1194	C-7	Ⅶ	9	深鉢	ナデ	貝殻条痕	長, 雲, 砂
		83	1196	C-7	Ⅶ	9	深鉢	ナデ	貝殻条痕	長, 雲, 砂
		84	1193	C-7	Ⅶ	9	深鉢	ナデ	ナデ	石, 長, 角, 砂
		85	1165	D-7	Ⅶ	9	深鉢	ナデ	ナデ	長, 角, 砂
		86	1101	E-9	Ⅶ	9	深鉢	ナデ	ナデ	石, 長, 角
		87	2012	I-6	Ⅶ	9	深鉢	ナデ	ナデ	石, 長, 角



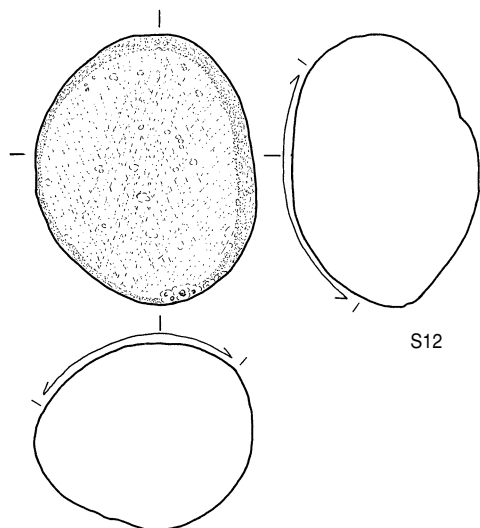
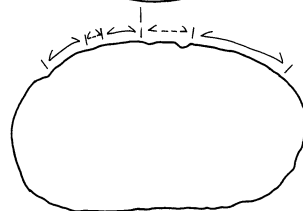
第32図 VIII層・VII層出土石器実測図 1



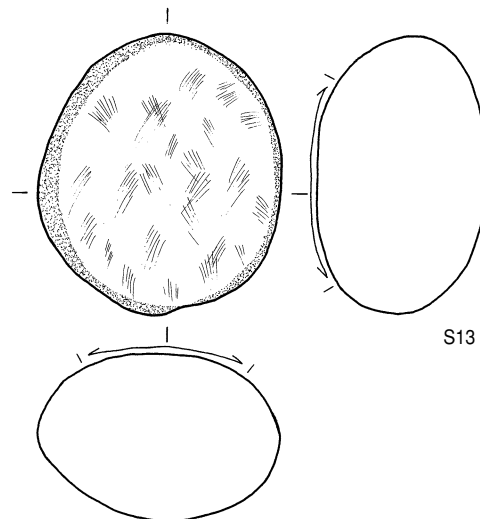
S10



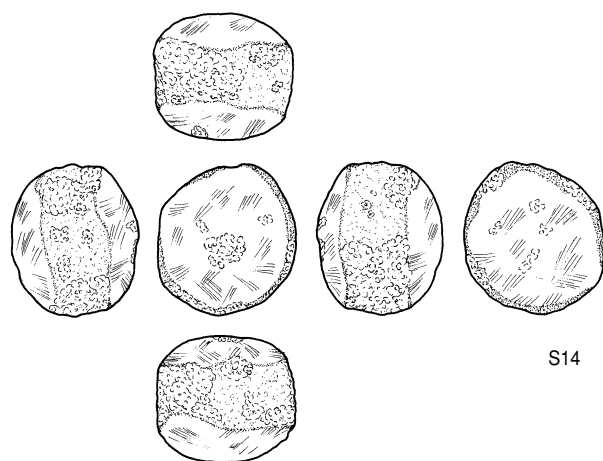
S11



S12



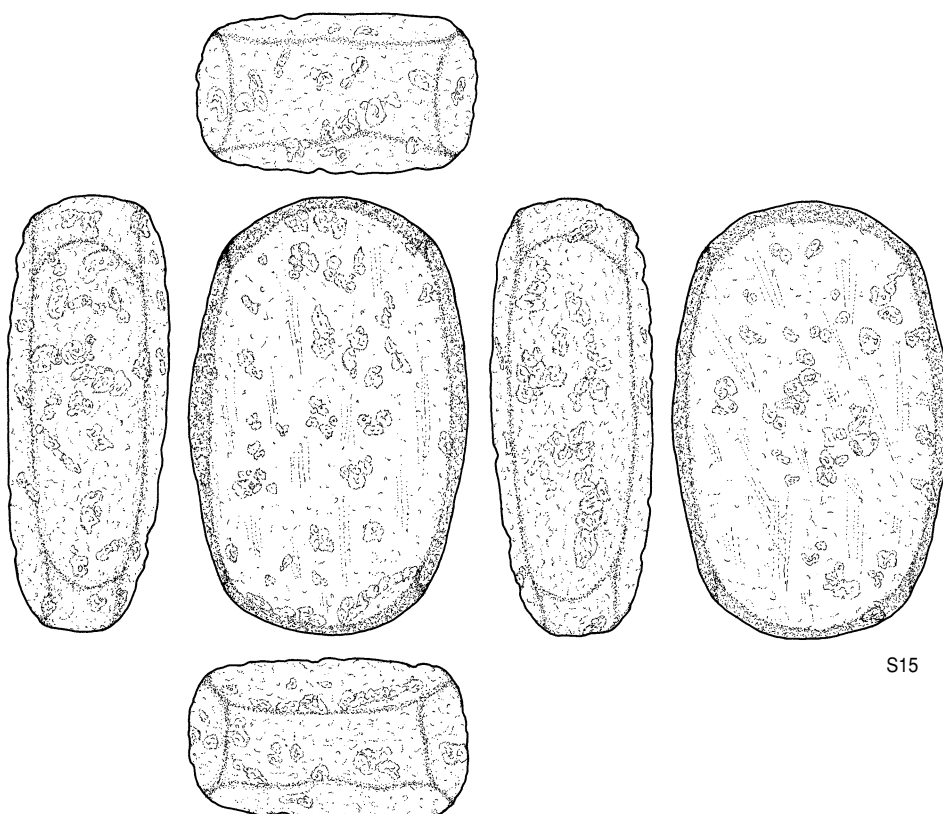
S13



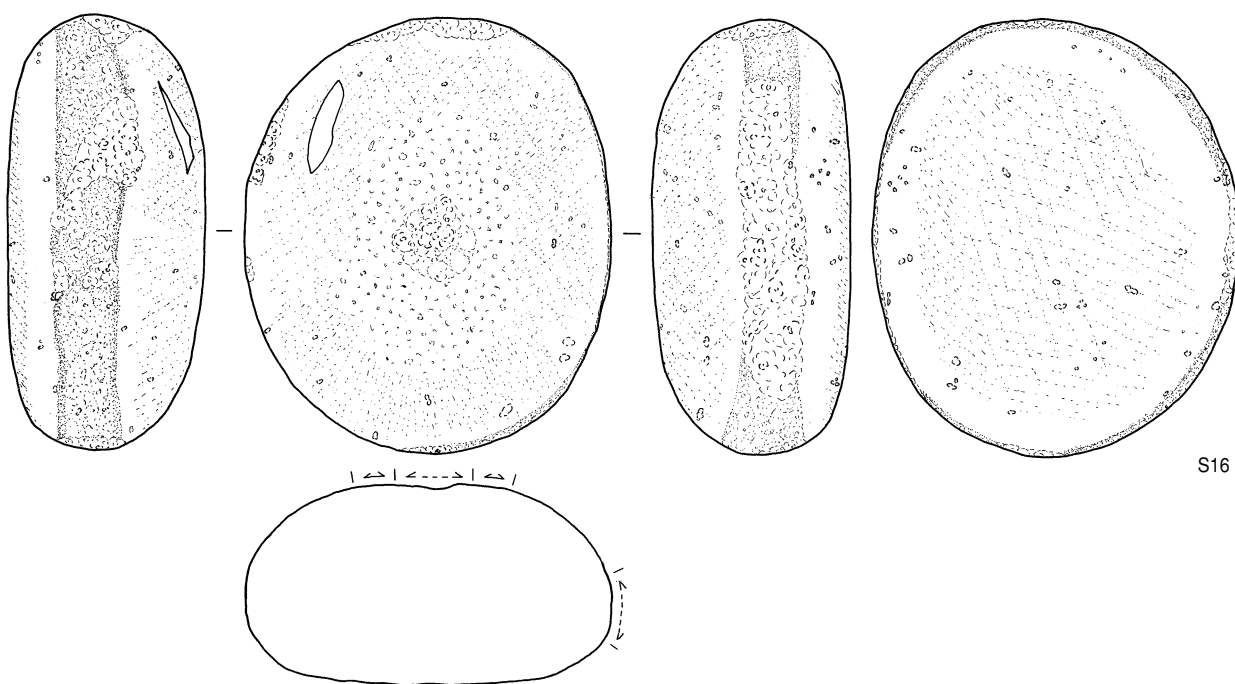
S14



第33図 VIII層・VII層出土石器実測図2



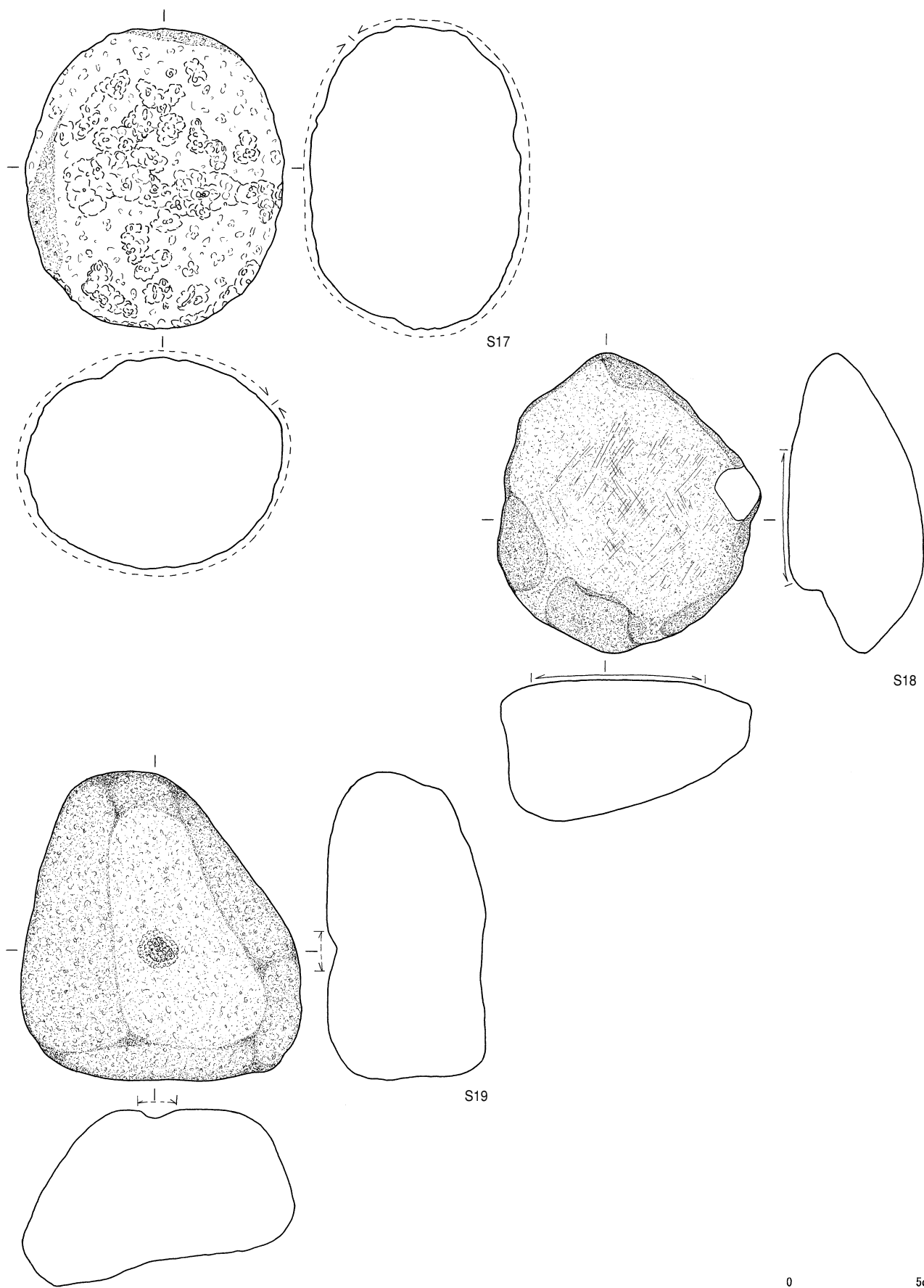
S15



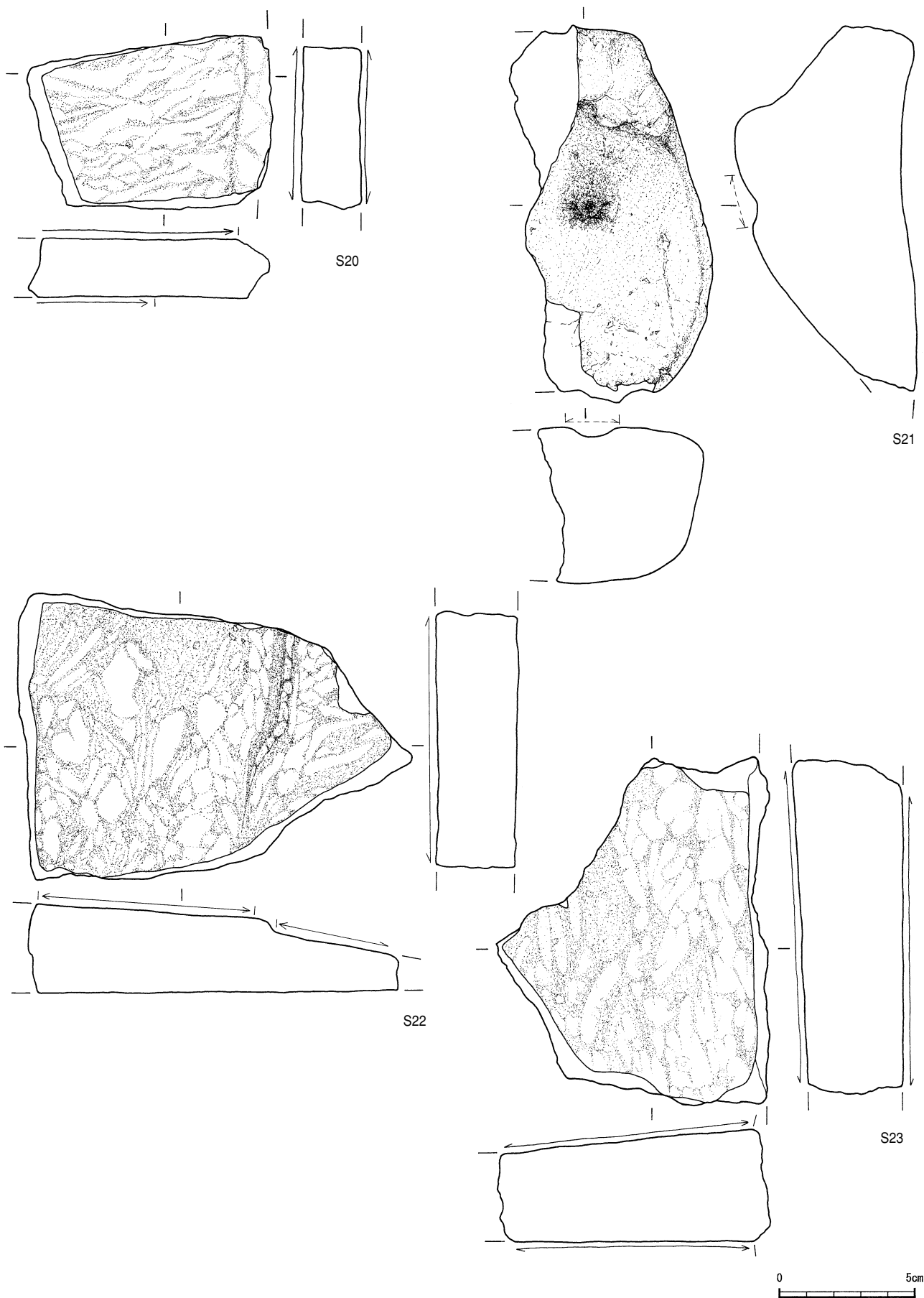
S16



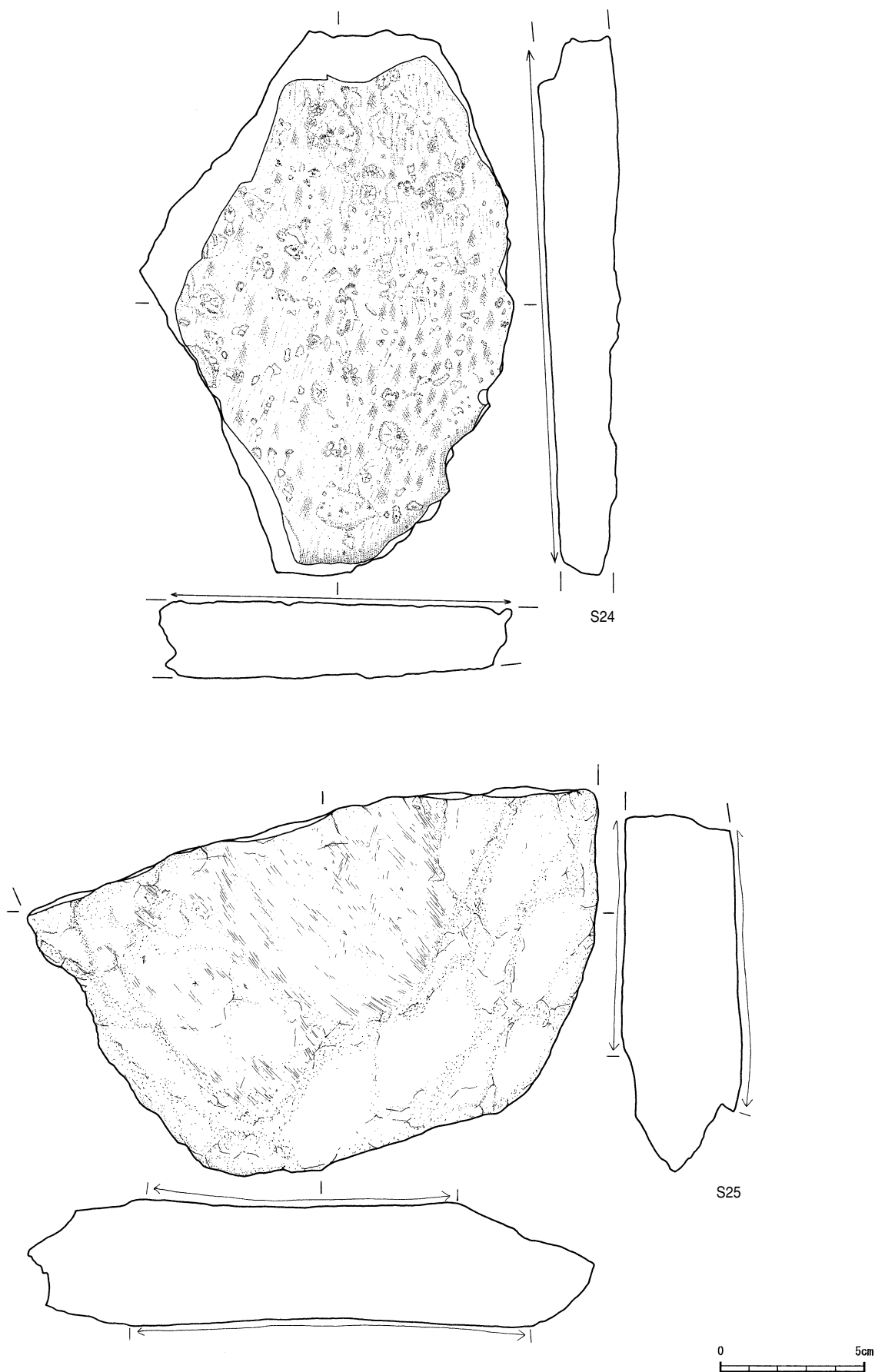
第34図 VII層・VIa層出土石器実測図 3



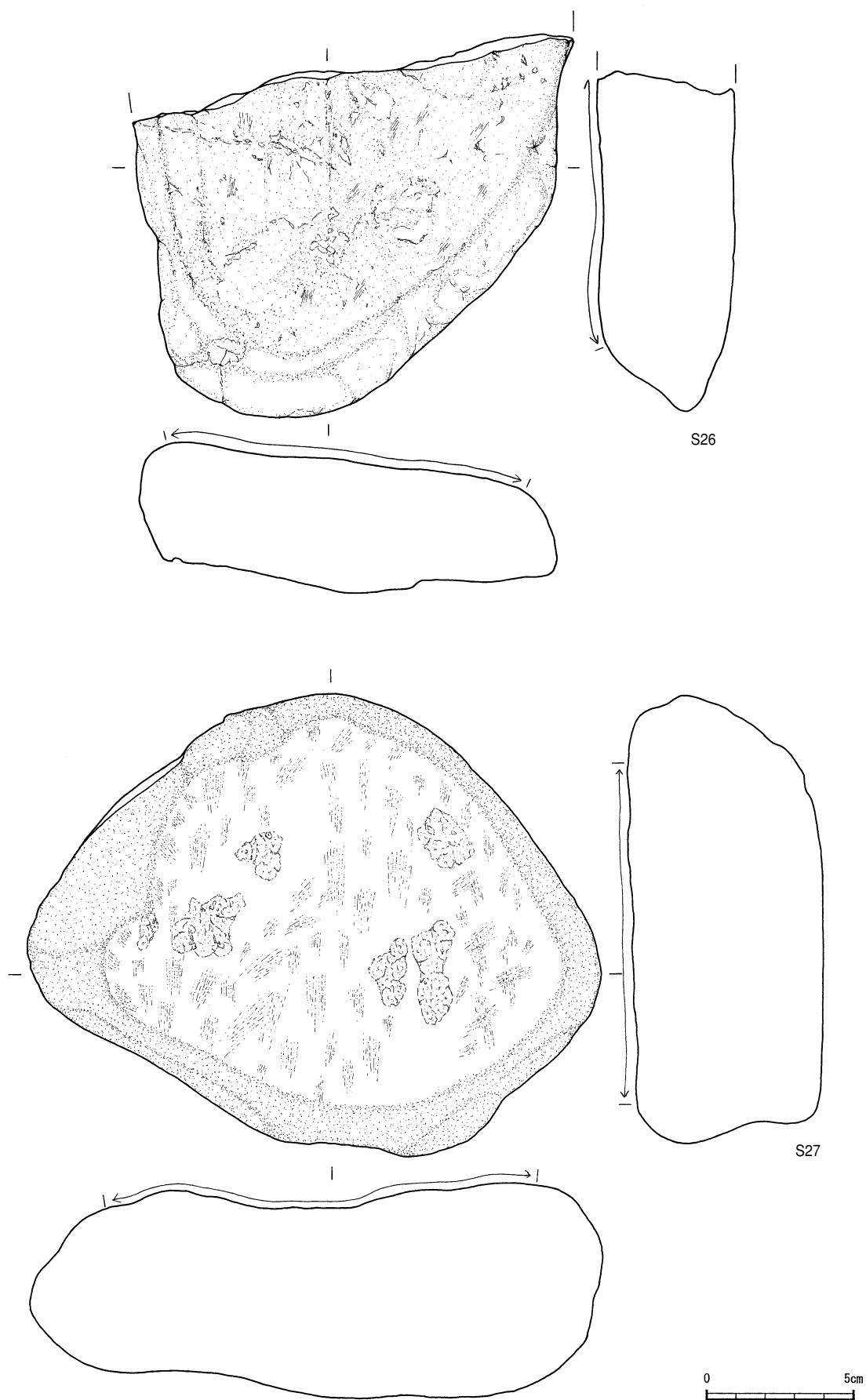
第35図 VIII層・VII層出土石器実測図 4



第36図 VIII層・VII層出土石器実測図 5



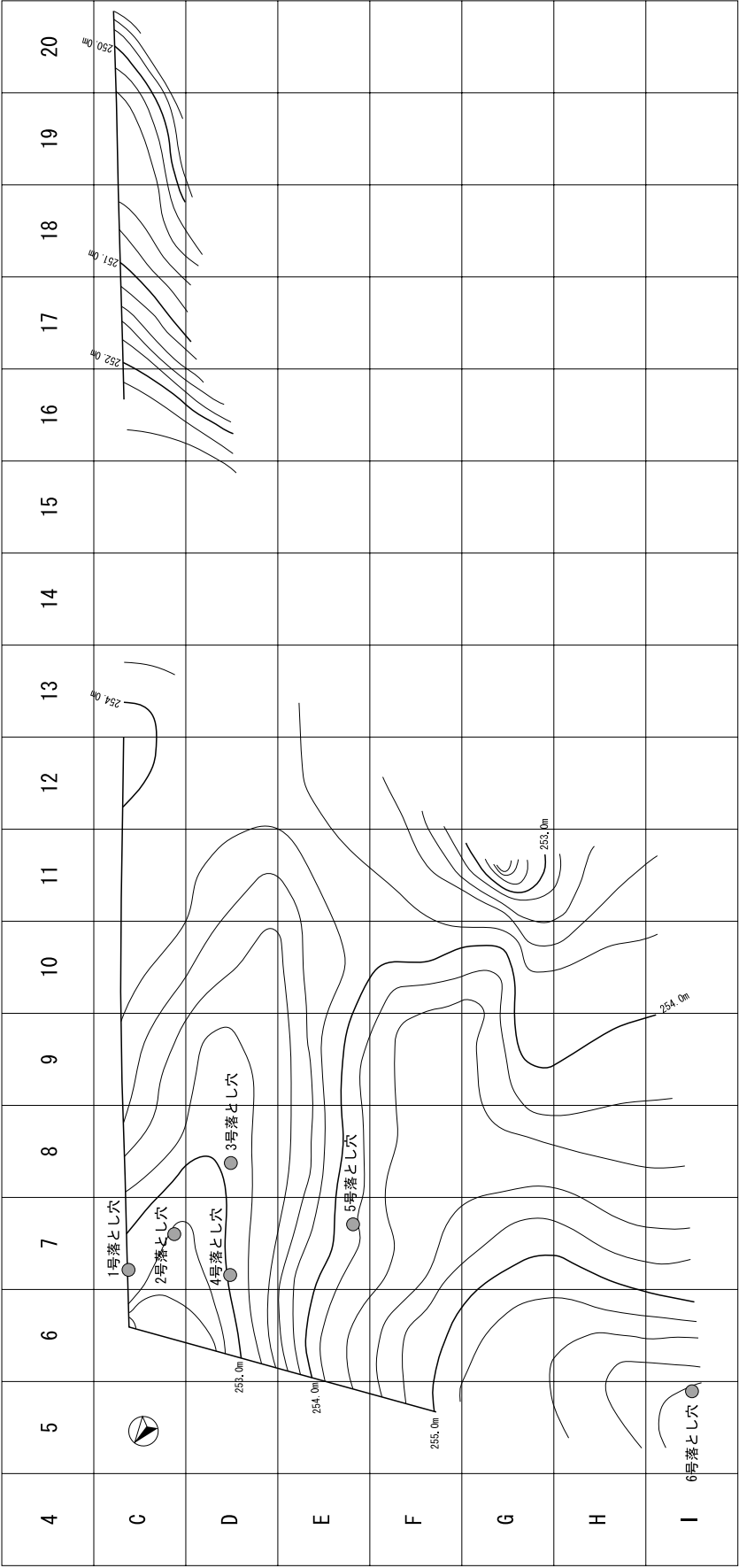
第37図 VIII層・VII層出土石器実測図 6



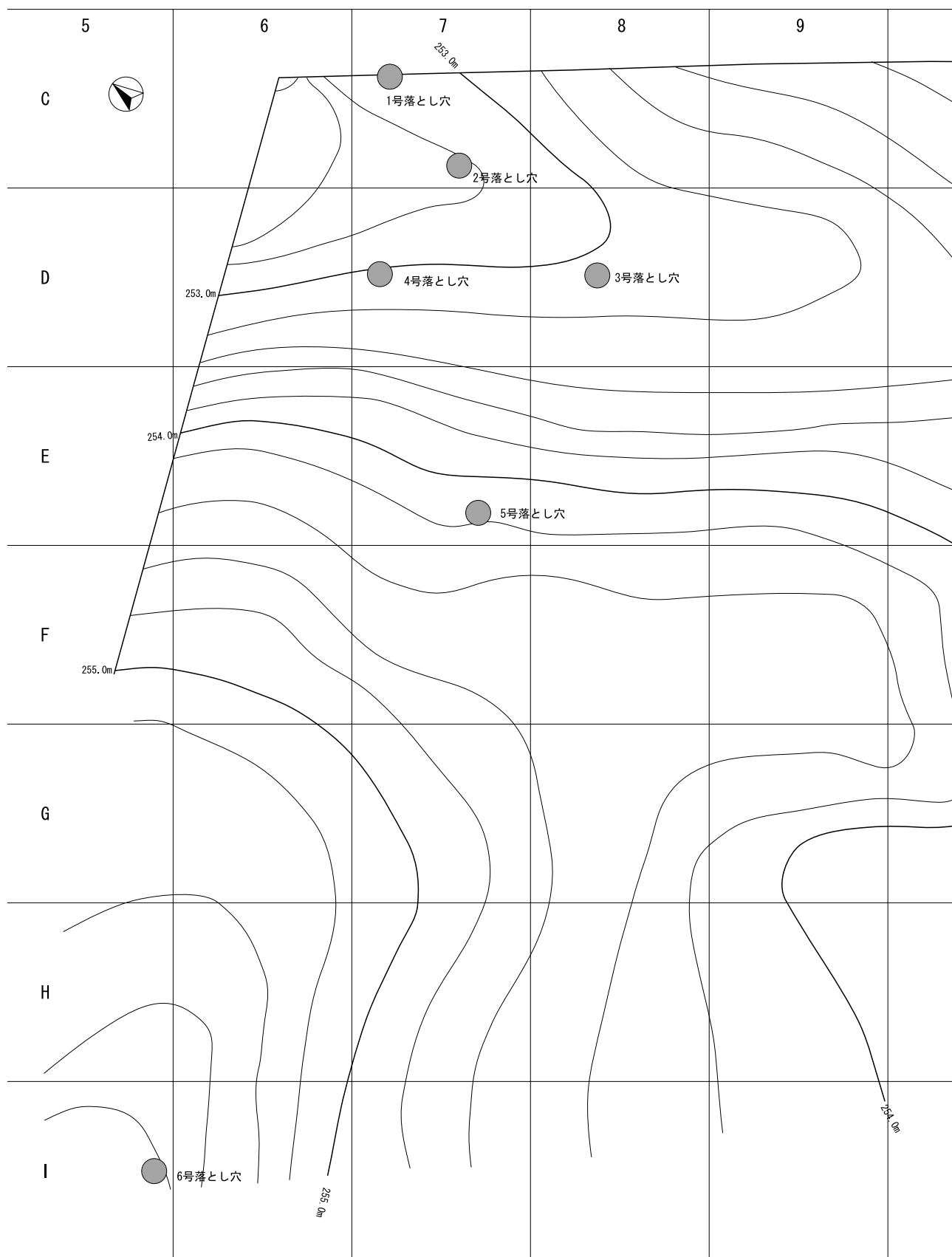
第38図 VIII層・VII層出土石器実測図 7

第 6 表 VIII層～VIa 層出土石器觀察表

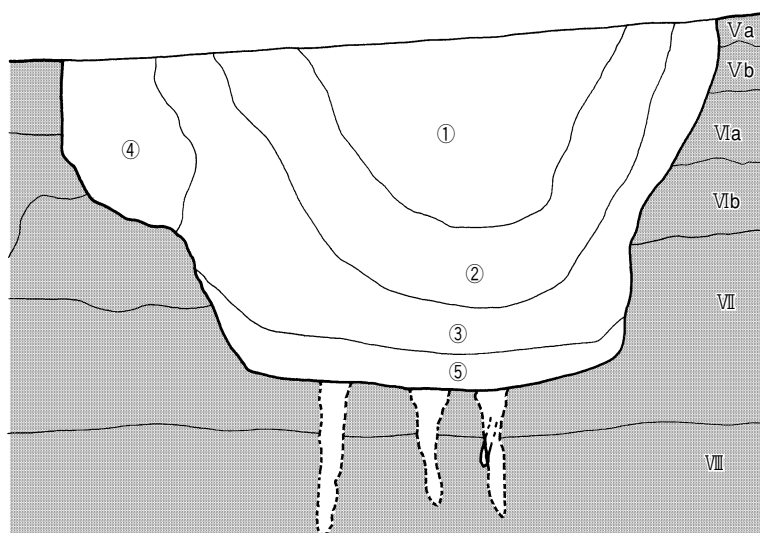
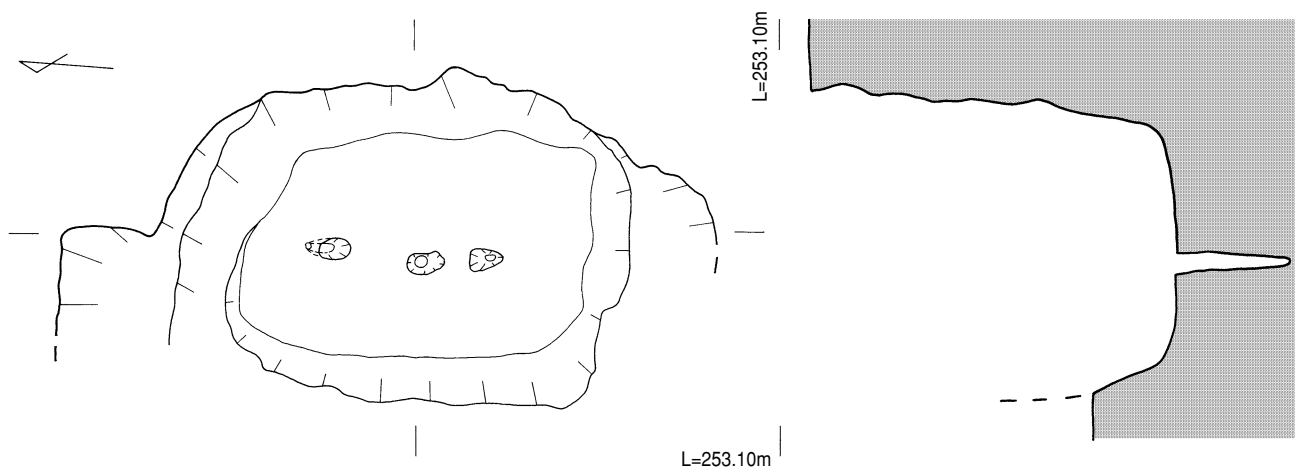
挿図No.	報告No.	取上No.	出土区	層位	器種	石材	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大高(cm)	重量(g)	備考
32	1	1319	C-12	VIII	石鏃	OB	1.6	1.15	0.15	0.36	
	2	1089	C-20	VII	石鏃	CH	2.5	1.8	3.5	1.04	
	3	1169	F-9	VII	石鏃	SH	3	2.85	0.6	5.31	
	4	1156	E-7	VII	削器(石匙)	AN	4.5	4.05	1	18.9	
	5	1143	F-7	VII	使用痕剥片	CH	2.05	2.2	0.3	1.29	
	6	1178	D-8	VII	使用痕剥片	CH	1.9	1.5	0.5	1	
	7	3	D-13	VII	石核	OB	2.1	2.6	0.65	3.61	
	8	1154	E-7	VII	石斧	SH	6.3	6.7	1.2	65.95	
	9	1172	E-9	VII	剥片	SH	11.7	6.6	2.35	27.34	
33	10	1183	C-8	VIII	磨石	KAN	7.1	6.9	4.2	295	
	11	992	C-16	VIII	磨石	KAN	10.2	7.9	4.5	450	
	12	1012	C-18	VII	磨石	KAN	7.2	5.9	5	290	
	13	1144	F-7	VII	磨石	KAN	7.5	6.5	4.5	310	
	14	1222	C-14	VII	磨石	KAN	4.1	3.7	3.4	70	
34	15	1349	C-13	VII	磨石	SA	11.7	7.5	4.3	545	
	16	1160	F-7	VII	磨石	SA	11.6	9.8	5.3	890	
35	17	1171	F-9	VII	磨石	SA	11.1	9.5	7.8	1,115	
	18	1098	C-9	VIa	磨石	SA	11.1	9.7	5.2	680	
	19	1112	D-14	VIII	凹石	SA	11.4	10.3	6.5	1,005	
36	20	1106	C-14	VIII	石皿	SA	6.4	9.1	2.2	260	
	21	2098	G-5	VII	凹石	SA	14	7	5.8	790	
	22	2099	G-5	VIII	石皿	KAN	10.6	14.7	3.3	815	
	23	1207	D-8	VII	石皿	KAN	12.9	10.1	4.2	880	
	24	1155	E-7	VII	石皿	KAN	19	13	2.7	775	
37	25	2145	G-7	VIII	石皿	SA	13.5	19.8	4.4	1,435	
	26	1121	F-8	VII	石皿	KAN	13.1	15.1	5.1	1,280	
38	27	1099	C-9	VIa	石皿	SA	158	19.6	7.3	2,720	



第39図 Va層遺構位置・遺物出土状況図1

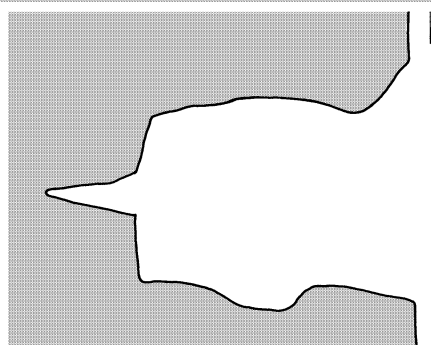


第40図 Va層遺構位置・遺物出土状況図2

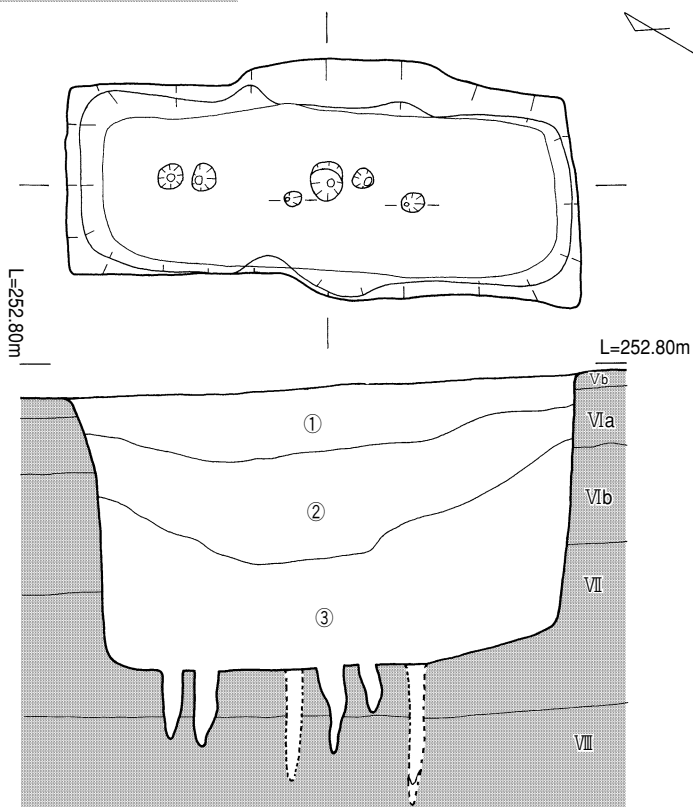


1号落とし穴

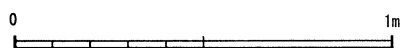
- | | |
|---|---|
| ① | 黄褐色火山灰 IVb 層（御池火山灰）径 1 mm 強の明黄白色バミスが密に入り硬い 径20～40mmの大きなバミスも点在する |
| ② | ①より径 1 mm 強の明黄白色バミスが少なくなり 径20～40mmの大きなバミスが密に入る |
| ③ | 黄褐色の柔らかい土の中に径 1 mm 強の明黄白色バミスと径20～40mmの大きなバミスが見られる |
| ④ | 黄橙色土 Va 層に③黄褐色土が混ざる |
| ⑤ | 暗灰褐色土 |



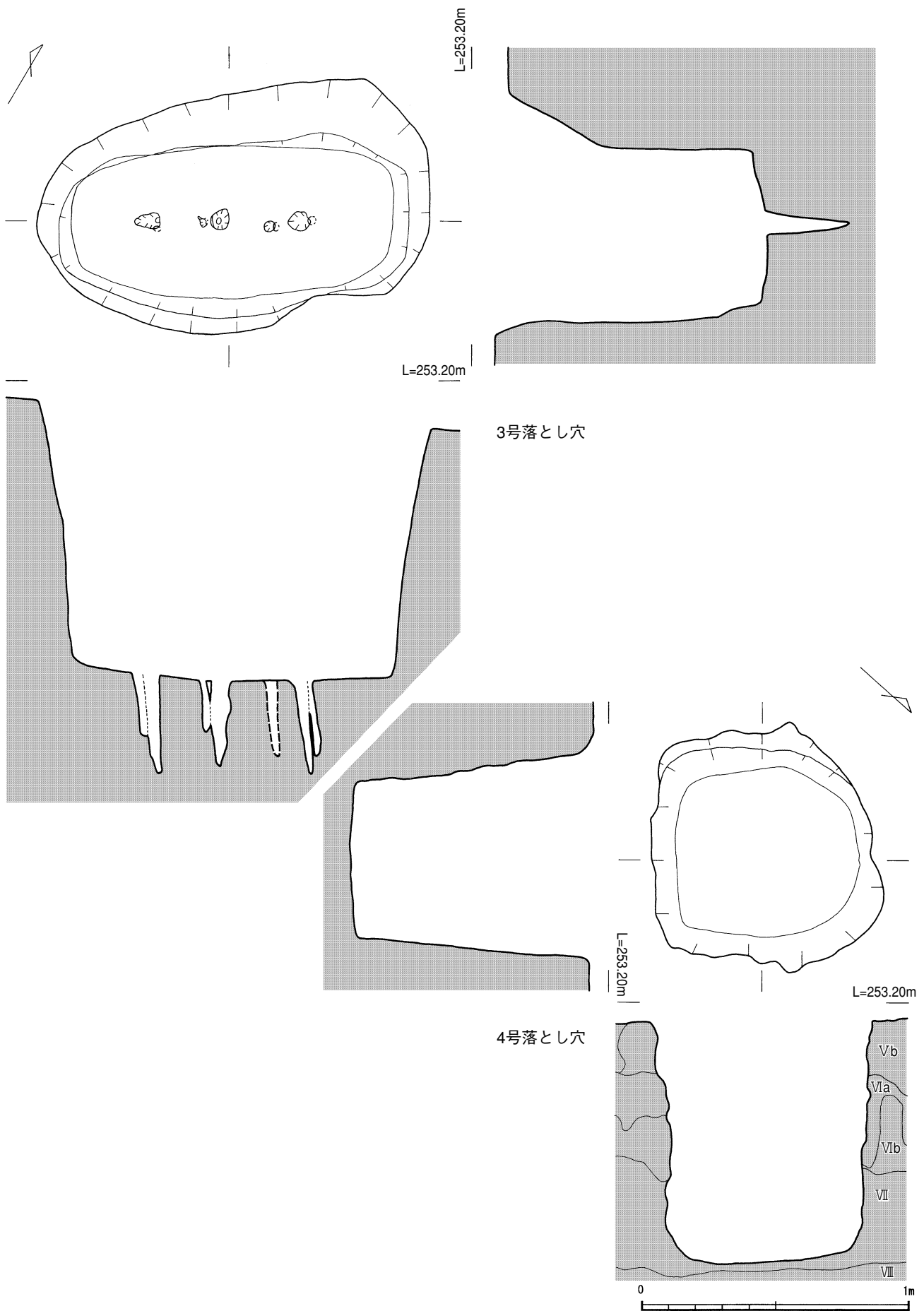
2号落とし穴



- | | |
|---|--|
| ① | 黄褐色火山灰 IVb 層（御池火山灰）径 1 mm 強の明黄白色バミスが密に入り硬い |
| ② | ①に径 5 mm 大の明黄白色バミスが入り①より明るい |
| ③ | 径 5 mm～10mm 大の明黄白色バミスが密に入る |



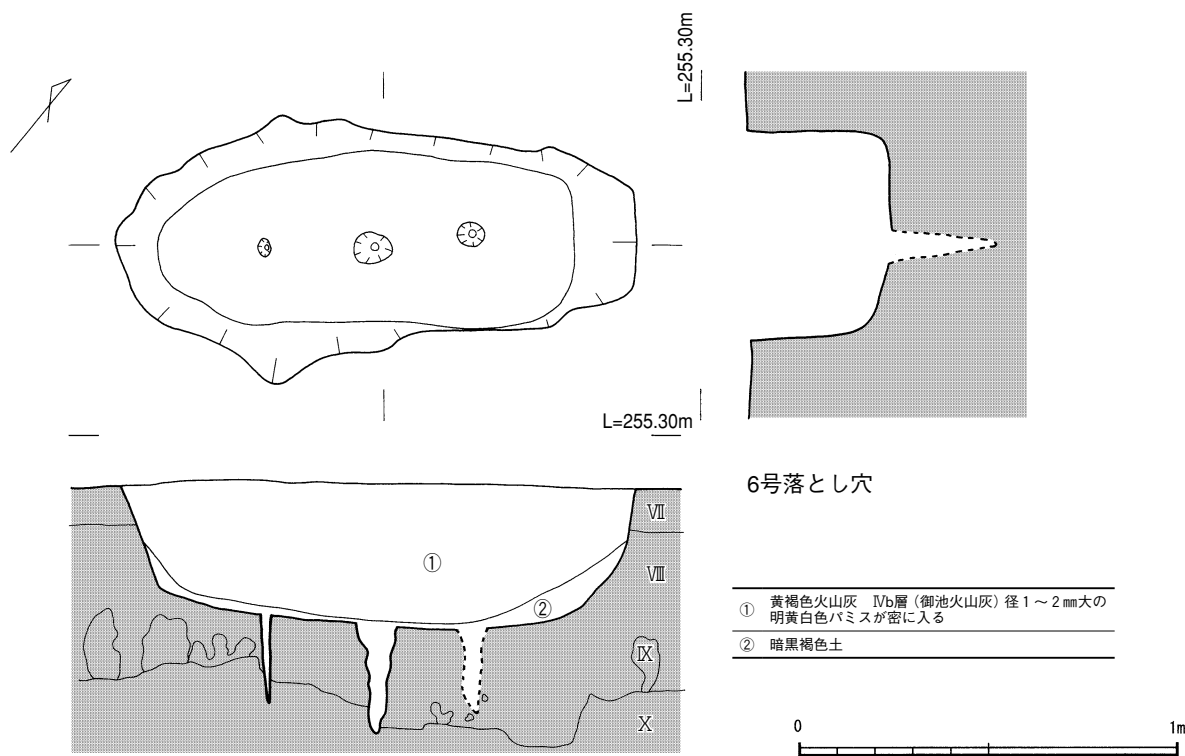
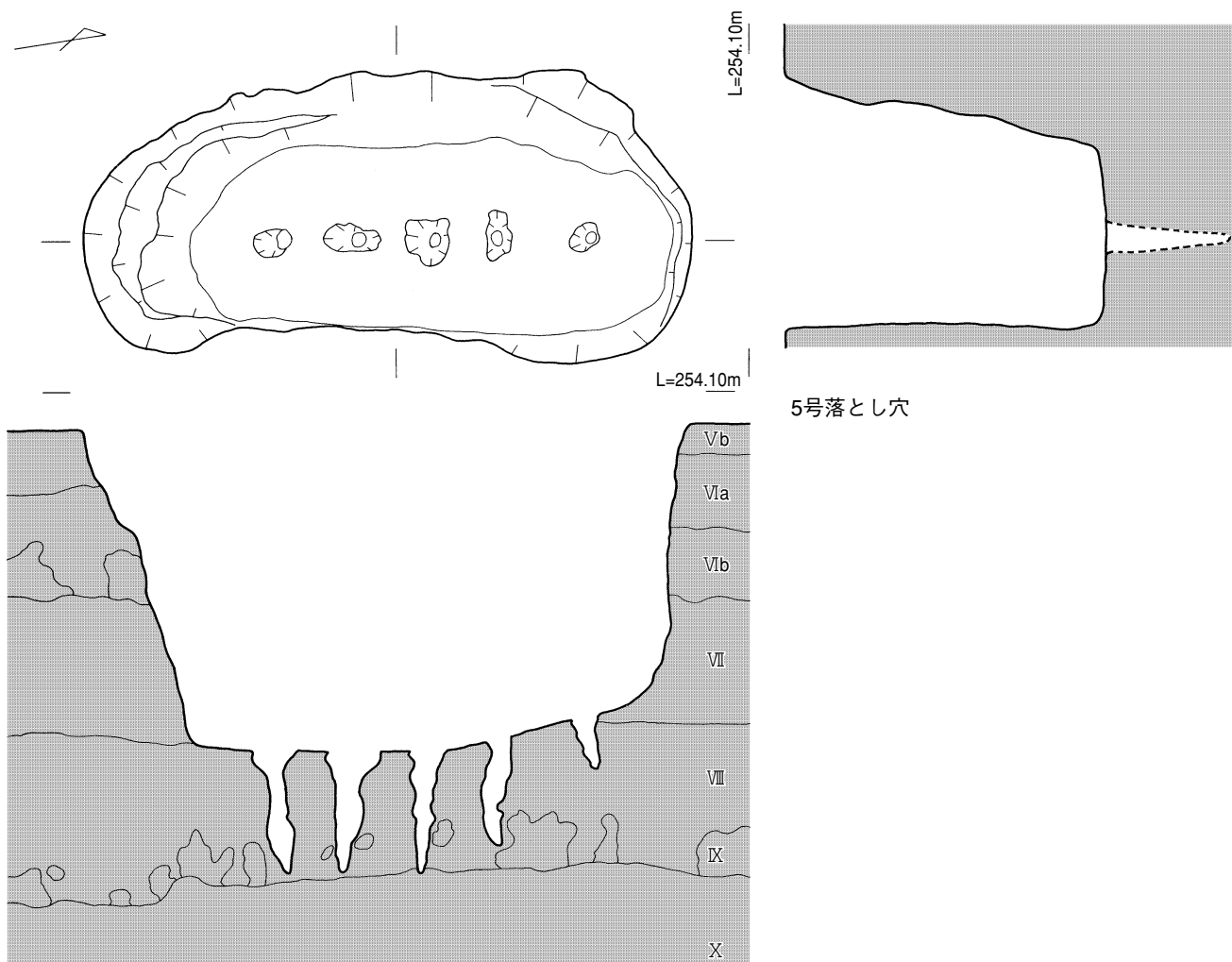
第41図 Va層落とし穴1



3号落とし穴

4号落とし穴

第42図 Va層落とし穴2



第43図 Va層落とし穴3

2 縄文時代中期の調査

縄文時代中期の調査は、Vb層（アカホヤ火山灰層）からVa層間で落とし穴が検出されたため、調査区全体で検出作業を行い、調査区北側（C～E-7、8区）と西側（I-5区）から計6基の落とし穴を検出した。

落とし穴が検出されたVb層上面は、西側から東側にかけて緩やかに傾斜する微高地が続き、調査区中央部分で南北それぞれの方向に傾斜していく谷状地形で、1号～4号落とし穴が北側の谷状地形に位置し、5号がその傾斜地、6号が西側の微高地に位置している。

地形に対する落とし穴の主軸の方向は、1号、2号、5号、6号が傾斜に対し直行し、3号が傾斜に対し平行する。4号は方形のため判断できない。（第39、40図）

検出された落とし穴の埋土は、IVb層の黄褐色軽石（御池火山灰）が主体となり、下部には流入した土が入っている。1号～3号、5号、6号の落とし穴の底面からは、小ピットが検出された。先細りにすぼまる形状であったため、逆茂木痕と判断した。

1号落とし穴（第41図）

C-7区の東側、調査区境で検出した。西側部分が一部掘削されている。平面プランは、南北に主軸をもつ楕円形で、壁面は長軸方向に段を有する形状である。底面からは、長軸方向に3本の小ピットが検出された。

小ピットは、深さがそれぞれ異なり、南側の小ピットでは、逆茂木を挿し換えた痕跡を断面で確認している。

2号落とし穴（第41図）

C-7区で検出した。平面プランは、南北に主軸をもつ長方形である。壁面は垂直に立ち上がる形状で、底面の長軸方向に小ピットを6本検出した。

小ピットの検出状況と断面形状の観察から、逆茂木の挿し換えが、数回におよぶ事を指摘できる。

3号落とし穴（第42図）

D-8区で検出した。平面プランは、東西方向に主軸をもつ楕円形で、検出面からの深さが100cmである。壁面は上方に開く形状で、底面の長軸方向に小ピットを7本検出した。

小ピットの断面形状から、同一のピットを使用しているものと、ピットの下部で重なりあうものが確認できる。このことから、逆茂木を浅く挿し込む方が先行し、後に深く挿し換えを行った事が伺える。

4号落とし穴（第42図）

D-7区で検出した。長軸86cm、短軸84cmの方形の形状で、壁面は垂直に立ち上がる。他の落とし穴とは形状ピットの有無が異なる。

5号落とし穴（第43図）

E-7区で検出した。平面プランは、東西に主軸をもつ楕円形で、底面の北側が浅い形状である。壁面は長軸方向に開く形状で、底面の長軸方向に小ピットを5本検出した。底面の浅い部分の小ピットは底面からの深さが15cmと浅く、他の4本は、深さ33cm前後と均一である。

6号落とし穴（第43図）

I-5区の平坦面に位置し、上位層に横転による攪乱が入っていたため、VII層上面で検出された。平面プランは、東西に主軸をもつ楕円形で、長軸137cm、短軸57cm大のため、上面形状、大きさが5号に類似すると思われる。底面の長軸方向に小ピットを3本検出した。

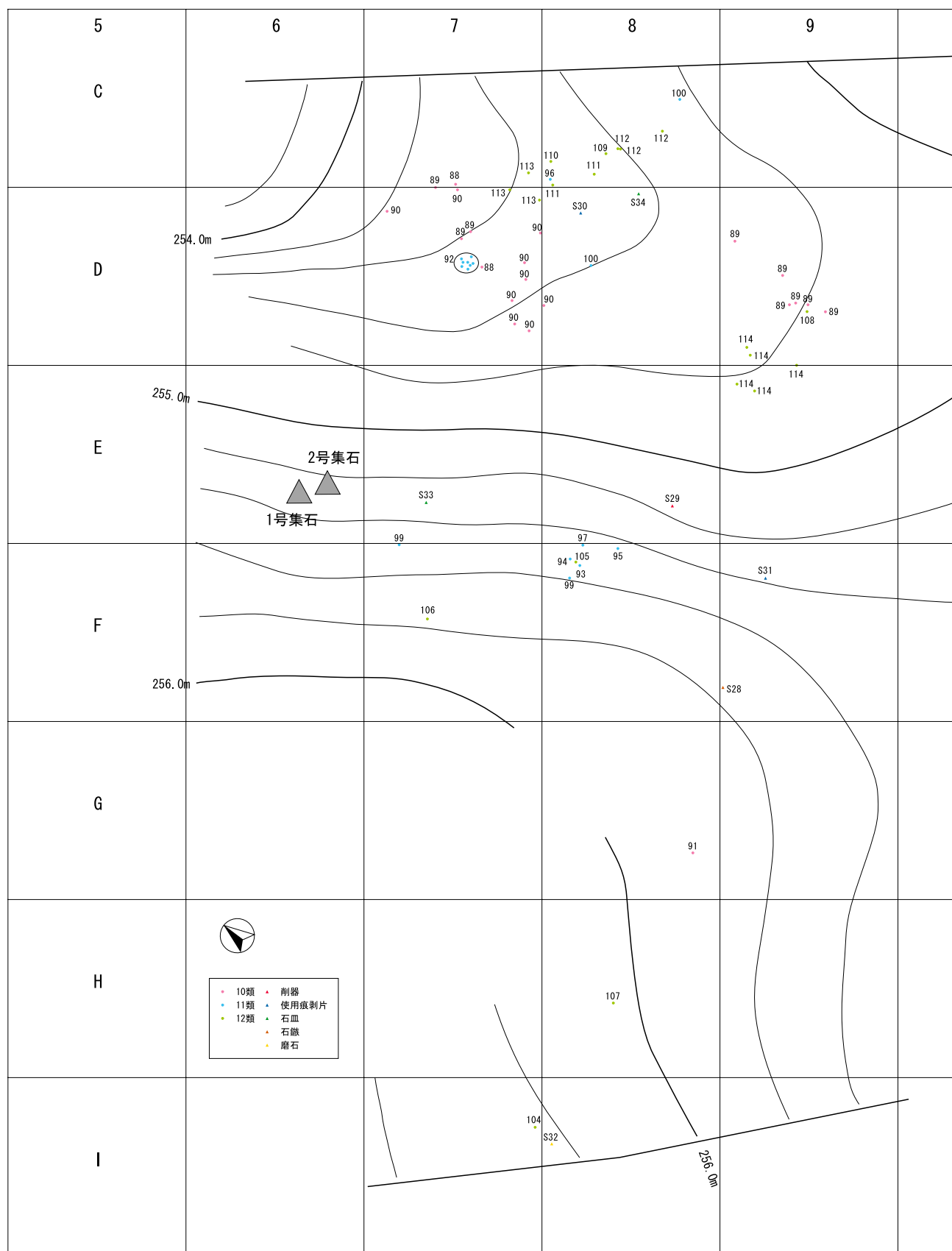
第7表 Va層落とし穴観察表

挿 図 No.	報 告 No.	長 径 (cm)	短 径 (cm)	深 さ (cm)	ピット 数	小ピット			備 考
						ピット No.	径 (cm)	深 さ (cm)	
41	1	(150)	(82)	(91)	3	1	8	41	
						2	10	30	
						3	8	33	
	2	136	62	75	6	1	6	37	
						2	4.5	30	
						3	5	14	
						4	8	22	
						5	6	20	
						6	6	18	
						1	9	34, (28)	
	42	3	148	90	100	2	4.5	28	
						3	6	32	
						4	3.5	19	
						5	10	36, (23)	
						4	(86)	(84)	(90)
43	5	(172)	(72)	(92)	5	1	8	15	
						2	7	32	
						3	12	34	
						4	16	34	
						5	11	34	
	6	137	57	37	3	1	3	22	
						2	10	28	
						3	7	22	

上位層攪
乱のため
VII層検出



第44図 IVb層遺構位置・遺物出土状況図1





第46図 IVb 層集石

3 縄文時代後期～晩期の調査

縄文時代後期・晩期の調査は、遺物包含層であるIVa層の残存する調査区北側（C～I-6～9区）と南端を中心に行った。（第44，45図）

・遺構（第46図）

縄文時代後期では、IVa層より2基の集石を検出した。1号，2号集石はE-6区に位置し，礫がまばらに散在する。遺物との相関関係は分布状況からは把握できない。

・遺物（土器）（第47，48図No88～114）

X類土器（第47図No88～91）

器形的特徴としては，胴部上位に最大幅がある深鉢形土器で，内傾する頸部に直立する口縁部がつく器形で，口縁部は平口縁を呈する。

第8表 IVb 層集石観察表

挿図 No.	報告 No.	長径 (cm)	短径 (cm)	備考
46	1	175	83	
	2	173	70	

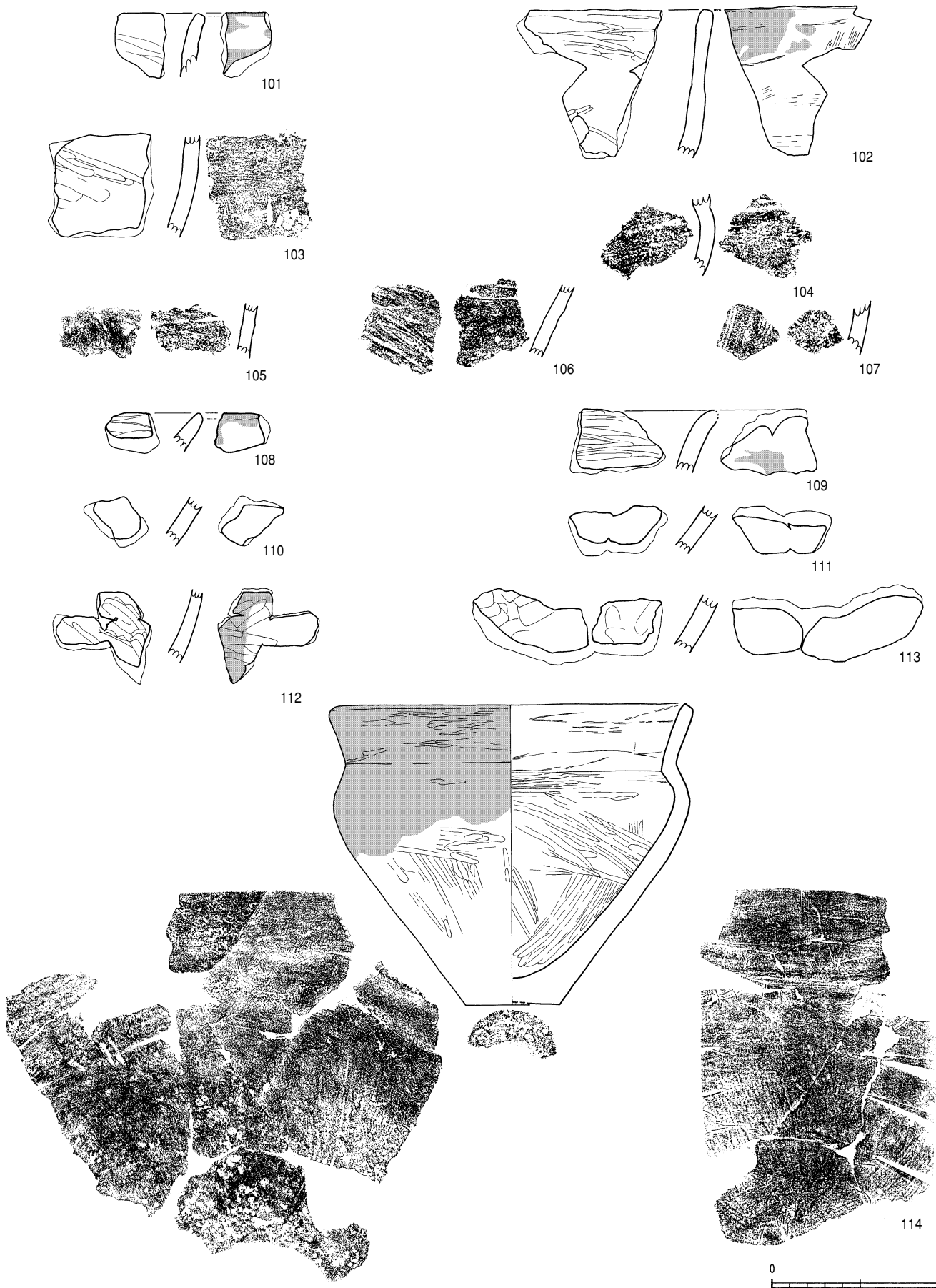
口唇部は平坦面をなしわずかに外傾する。

施文の特徴としては，口縁部の平行する2本の凹線文間に貝殻刺突文を縦位に施し，胴部上位に平行する2本の凹線文を曲線状に施文し，刺突文も施す。

器面調整は，両面にナデ調整が施されるが，No90の内面には貝殻条痕が残る。No91は底部で，外面に網代痕が残る。本類土器の胎土中には軽石が多く含まれている。



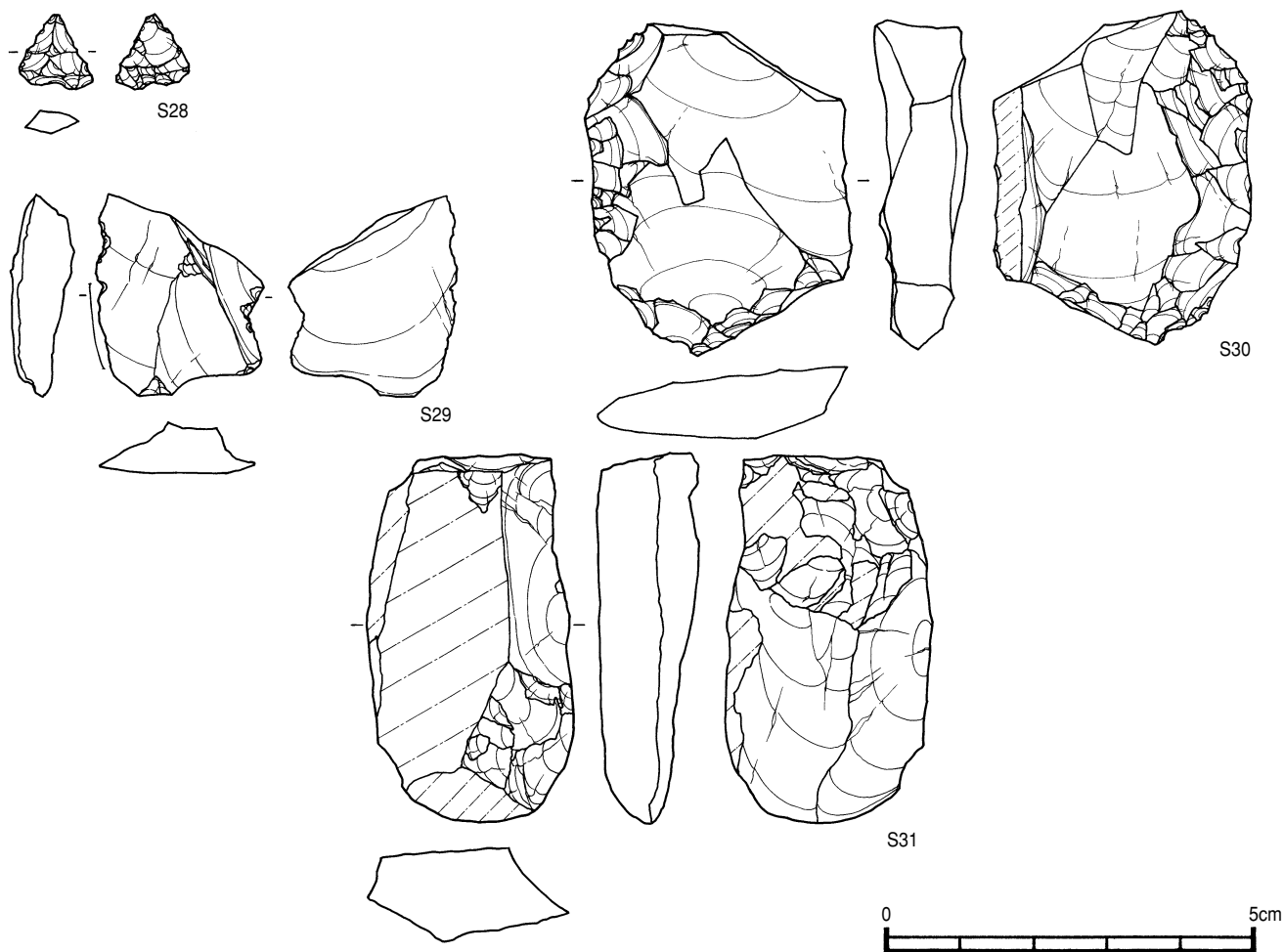
第47図 X類・XI類土器実測図



第48図 XII類土器実測図

第9表 X類～Ⅺ類土器観察表

挿図No.	報告No.	取上No.	出土区	層位	分類	器種	内面調整	外面調整	胎土	備考
47	88	168	D-7	Ⅳa	10	深鉢	ナデ	ナデ→凹線→貝殻刺突、 工具刺突	長, 角, 軽, 砂	
		181	C-7	Ⅳa						
		103	D-9	Ⅲ	10	深鉢	ナデ	ナデ→凹線→貝殻刺突、 工具刺突	長, 角, 軽, 砂	
		136	D-9	Ⅳa						
		138								
		139								
		140								
		489	↓	↓						
	89	176	D-7	Ⅳa						
		224	↓	↓						
		180	C-7	Ⅳa						
	90	158	D-7	Ⅳa	10	深鉢	工具によるナデ	工具によるナデ	長, 角, 軽, 砂	
		162								
		163								
		165								
		166								
		167								
		179								
		182	↓	↓						
	91	161	D-8	Ⅳa						
		851	G-8	Ⅳa	10	深鉢	ナデ	網代痕	石, 軽, 砂	
	92	169	D-7	Ⅳa	11	深鉢	指押さえ→工具によるナデ	ナデ→凹線→口唇部キ ザミ, 工具刺突	石, 長, 角	
		170								
		171								
		172								
		174								
		175								
		225								
		226	↓	↓						
	93	601	F-7	Ⅳa	11	深鉢	ナデ	ナデ, 凹線	石, 長, 角	
	94	598	F-7	Ⅳa	11	深鉢	ナデ	ナデ, 凹線	長, 軽	
	95	604	F-7	Ⅳa	11	深鉢	ナデ	ナデ, 凹線	石, 長, 角, 軽	
	96	183	C-8	Ⅳa	11	深鉢	ナデ	ナデ, 凹線	石, 長, 軽	
	97	597	F-7	Ⅳa	11	深鉢	ナデ	ナデ, 凹線	長, 軽	
	98	一括	—	—	11	深鉢	ナデ	ナデ	長, 雲, 砂	
	99	602	F-7	Ⅳa	11	深鉢	ナデ	工具によるナデ, 網代痕	長	
		947	↓	↓						
	100	150	D-8	Ⅳa	11	深鉢	工具によるナデ	ナデ, 網代痕	長, 角	
		204	C-8	Ⅳa						
48	101	931	D-18	Va	12	深鉢	ミガキ	工具によるナデ	石, 長, 輝	
	102	210	C-19	Ⅳa	12	深鉢	ミガキ	工具によるナデ	石, 長	
		211	↓	↓						
	103	930	D-18	Va	12	深鉢	ミガキ	工具によるナデ	長	
	104	1913	I-7	Ⅳa	12	深鉢	ナデ	工具によるナデ	長, 輝, 角, 砂	
	105	600	F-7	Ⅳa	12	深鉢	ナデ	ナデ	長, 砂	
	106	346	F-7	Ⅳa	12	深鉢	工具によるナデ	条痕	石, 長, 砂	
	107	1922	H-8	Ⅳa	12	深鉢	ナデ	条痕	長	
	108	488	D-9	Ⅳa	12	深鉢	ミガキ	ミガキ	長, 角	
	109	227	C-8	Ⅳa	12	深鉢	ミガキ	ミガキ	石, 長, 角, 砂	
	110	191	C-8	Ⅳa	12	深鉢	ミガキ	ミガキ	石, 長, 角, 砂	
	111	189	C-8	Ⅳa	12	深鉢	ミガキ	ミガキ	石, 長, 角, 砂	
		194	↓	↓						
	112	198	C-8	Ⅳa	12	深鉢	ミガキ	ミガキ	長, 角, 砂	
		199								
		203	↓	↓						
	113	184	C-7	Ⅳa	12	深鉢	ミガキ	ミガキ	石, 長, 角, 砂	
		187	D-7	Ⅳa						
		190	↓	↓						
	114	141	E-9	Ⅳa	12	深鉢	ミガキ, ナデ	ミガキ, ナデ	石, 砂	
		144								
		146	↓	↓						
		142	D-9	Ⅳa						
		143	↓	↓						



第49図 Va層～Ⅲ層出土石器実測図 1

第10表 Va層～Ⅲ層出土石器観察表

挿図No.	報告No.	取上No.	出土区	層位	器種	石材	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大高(cm)	重量(g)	備考
49	28	420	F-9	IVa	石鏃	OB	1	1	0.3	0.26	
	29	154	D-8	IVa	使用痕剥片	CH	2.7	2.3	0.7	4.07	
	30	490	E-8	IVa	削器	CH	4.6	3.7	1.3	22.44	
	31	476	F-9	IVa	使用痕剥片	SH	5	2.8	1.3	20.17	
50	32	1848	I-7	Ⅲ	磨石	KAN	10.5	8.1	3.1	395	
	33	228	E-7	Ⅲ	石皿	SA	9.9	12.9	5.6	1,150	
	34	759	D-8	Va	石皿	SA	9.9	15.2	5.5	815	

XI類土器（第47図No.92～100）

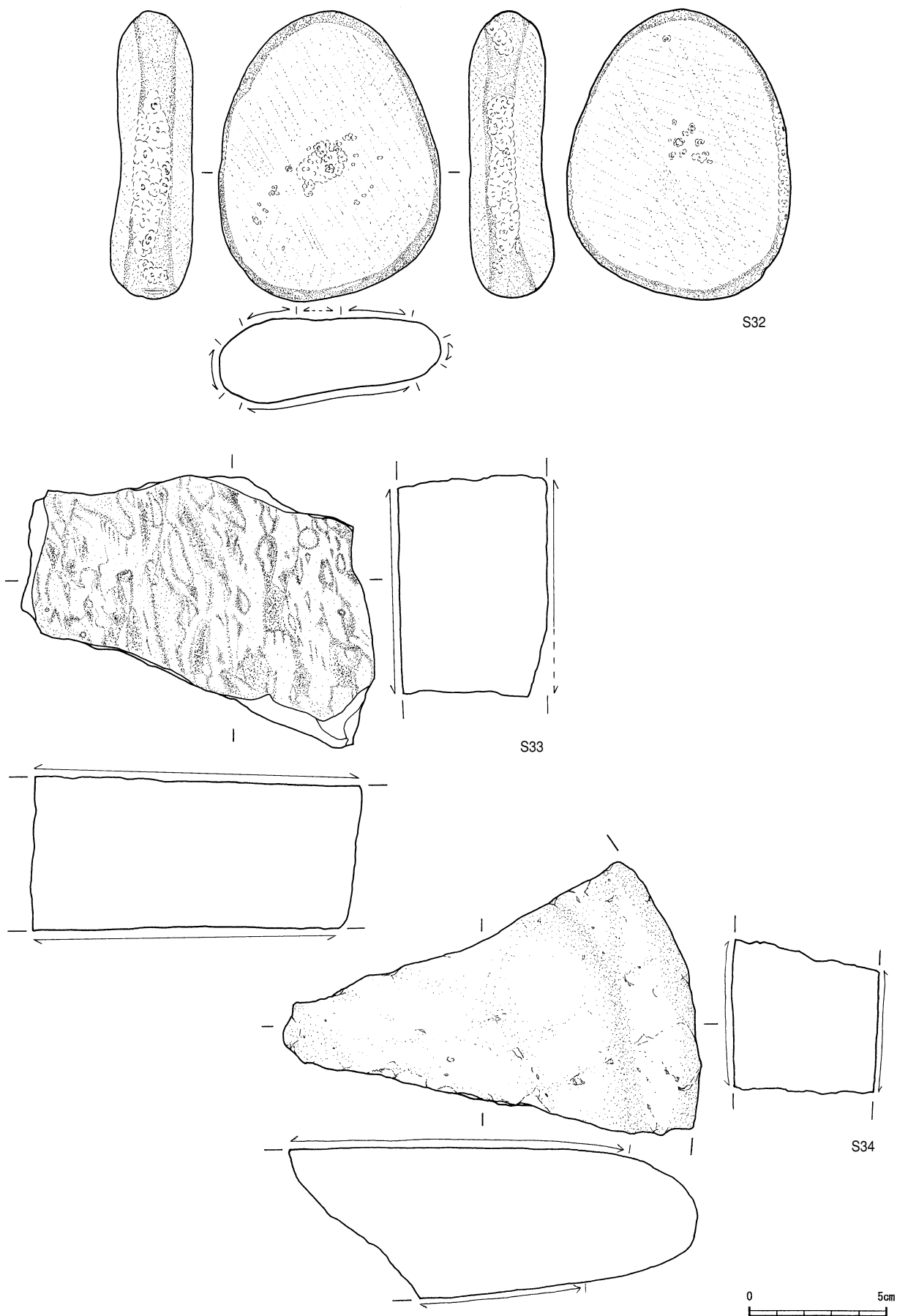
器形的特徴としては、胴部上位に最大幅がある深鉢形土器で、内傾する頸部に直立する口縁部がつく器形で、口縁部は波状を呈し、口唇部は平坦面をなし内傾する。

施文は、棒状工具で口唇外面にキザミ目を斜めに施し、口唇直下に、凹線文を1条巡らす。胴部上位と最大幅をはかる部位に2本の平行する凹線文を巡らし、凹線文間には刺突文を施す。幅広の部分には、山形の凹線文や刺突文を充填させる。器面調整は、両面ともナデ調整が施されている。No.99, 100は底部で、外面には、網代痕が明瞭に残る。胎土は、精選された物が用いられ赤橙色を呈している。

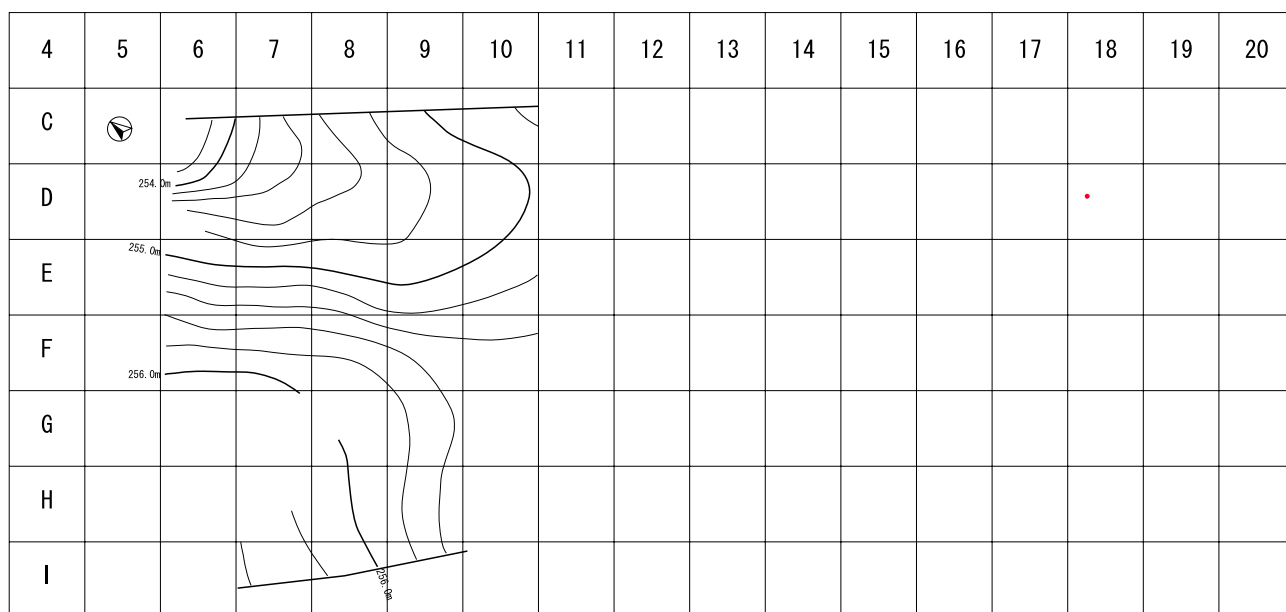
XII類土器（第48図No.101～114）

縄文時代晩期に該当する土器を本類に包括した。

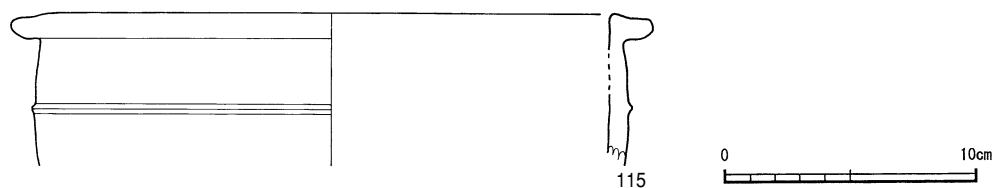
No.101～104は、外面が細条痕を伴う工具によるナデ、内面がミガキ或いはナデにより丁寧に仕上げられる浅鉢形土器である。No.105～107は、外面に工具による調整痕が残る深鉢形土器である。No.108～114は、平口縁の外反する口縁部で、胴部が曲線的に張り、小さい上げ底の底部を持つ器形で、精製土器の深鉢形土器である。No.114の外面には煤が付着し、内面のミガキ調整の跡が底部から口縁部まで明瞭に残る。



第50図 Va層～Ⅲ層出土石器実測図2



第51図 弥生時代遺物出土状況図



第52図 弥生時代土器実測図

第11表 弥生時代土器観察表

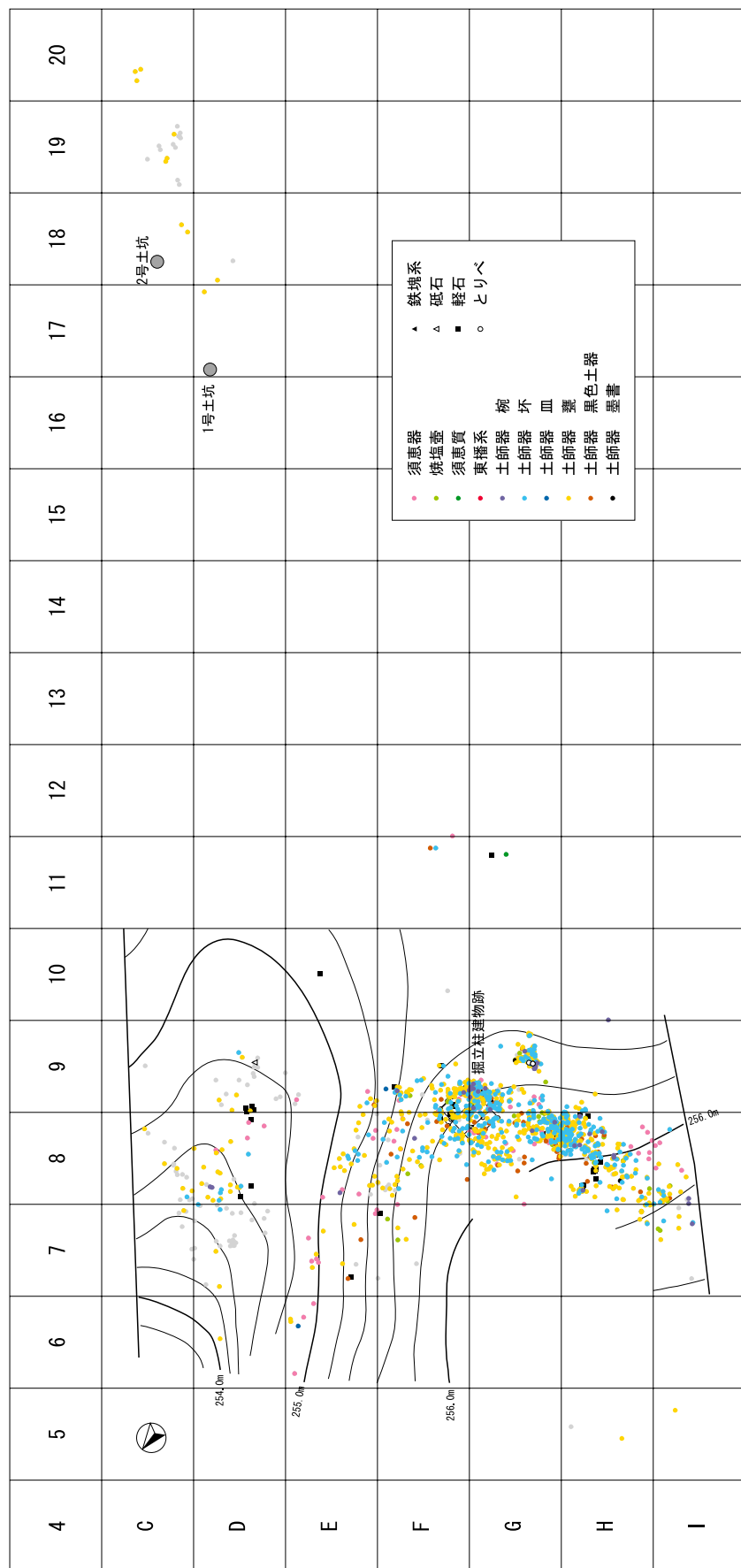
挿図No.	報告No.	取上No.	出土区	層位	分類	器種	内面調整	外面調整	胎土	備考
52	115	207	D-18	IVa	13	弥生	ナデ	横ナデ	石, 長, 雲	

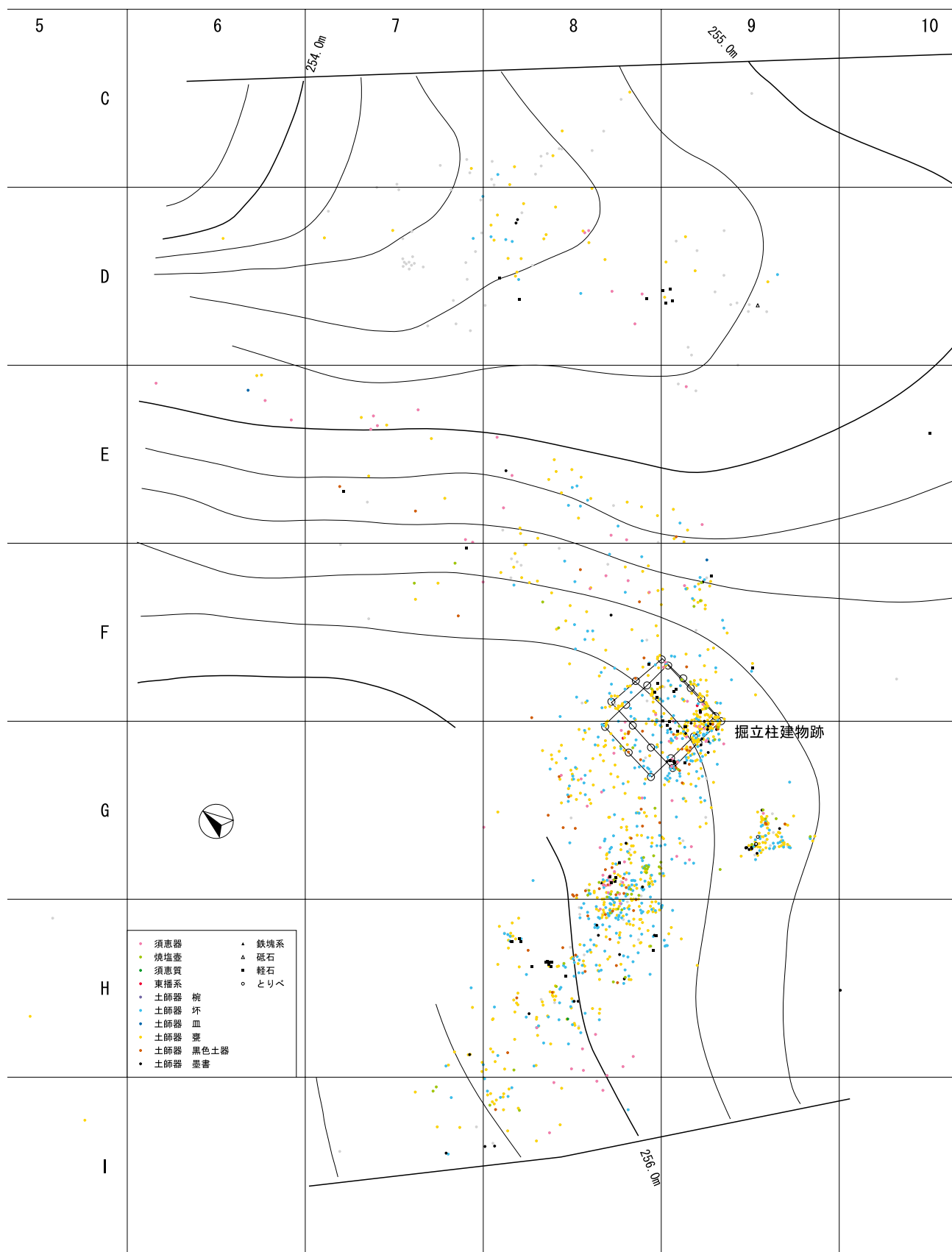
・遺物（石器）（第49, 50図S28～34）

縄文時代後期・晩期に該当する石器は、7点出土している。S28は、良質の黒曜石を用いた小型三角形鏃で浅い抉りを施している。S30は、チャート製の削器で、左側縁に刃部を形成する。使用痕剥片S29は、左側縁に、S31は右側縁に使用痕が観察できる。S32は、表面と側縁部に浅い敲打痕が見られる。S33, 34砂岩を用いた石皿で、S33は表面に光沢のある平滑面が見られる。

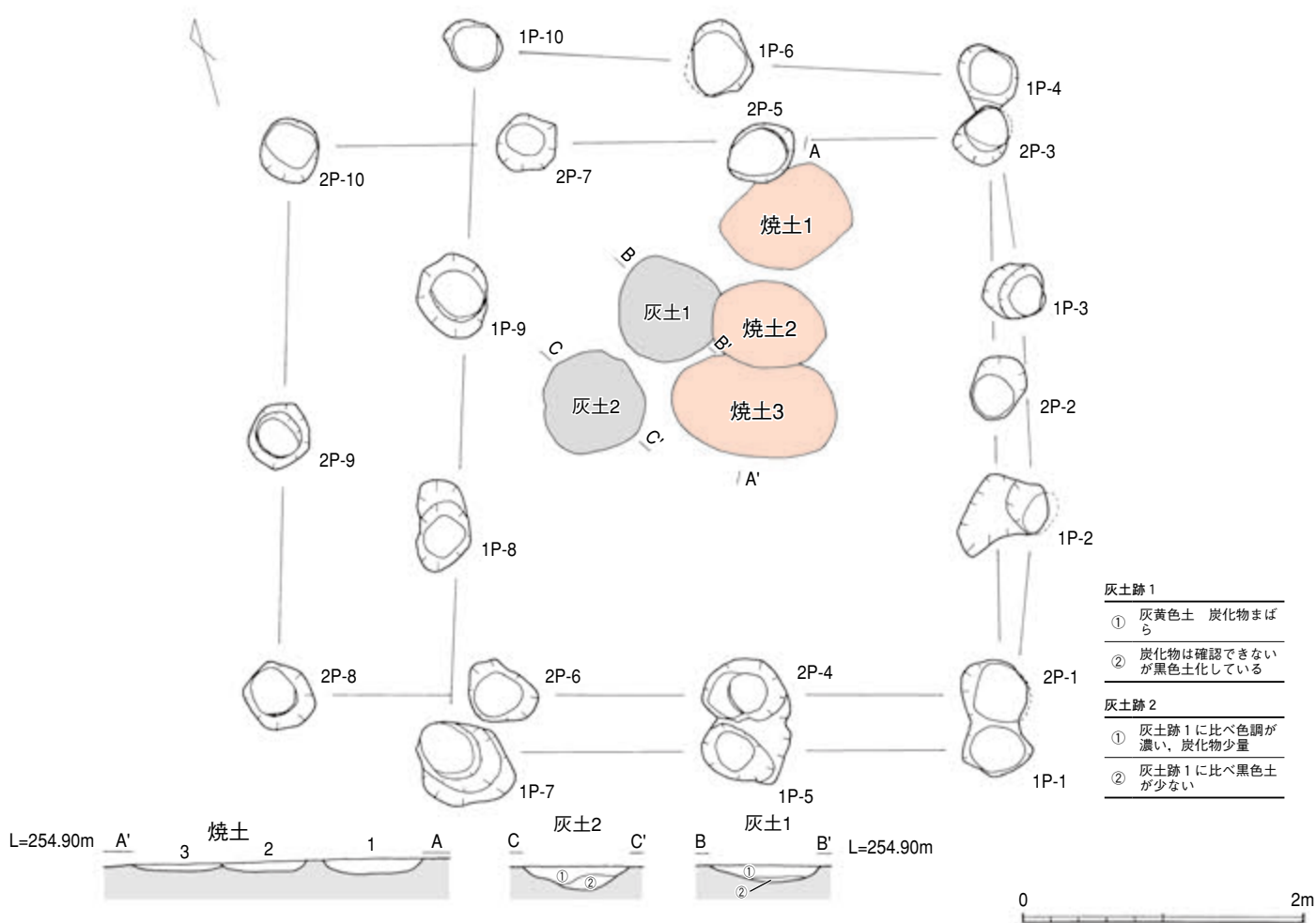
4 弥生時代の調査

弥生時代の遺物は、掲載した土器1点が出土したのみであった。No.115は、甕形土器の口縁部で、口縁部突帯が水平に張りだし、平坦口縁を形成する。胴部突帯は、口縁部突帯より小さい。内外面ともナデ調整である。弥生時代中期の incoming 式土器である。





第54図 IVa層遺構位置・遺物出土状況図2



第55図 掘立柱建物跡 1

5 古代の調査

奈良・平安時代に該当する古代の調査は、遺物包含層であるⅣa層とⅢ層の残存する、調査区北側（C～I-6～9区）を中心に行い、他のエリアでは、遺構の検出に努めた。

遺構は、Ⅳb層上面から掘立柱建物跡2棟とⅤa層より2基の土坑を検出した。遺物は、I～F-8、9区を中心に出土し、分布状況は遺構との重なりを見せている。

Ⅳb層上面の地形は、西側の微高地から北側に緩やかに傾斜する地形で、遺物はこの傾斜に沿って分布する。

遺物の出土状況と遺構の位置は、第53、54図に示した。

・遺構（第54～60図）

掘立柱建物跡1号、2号

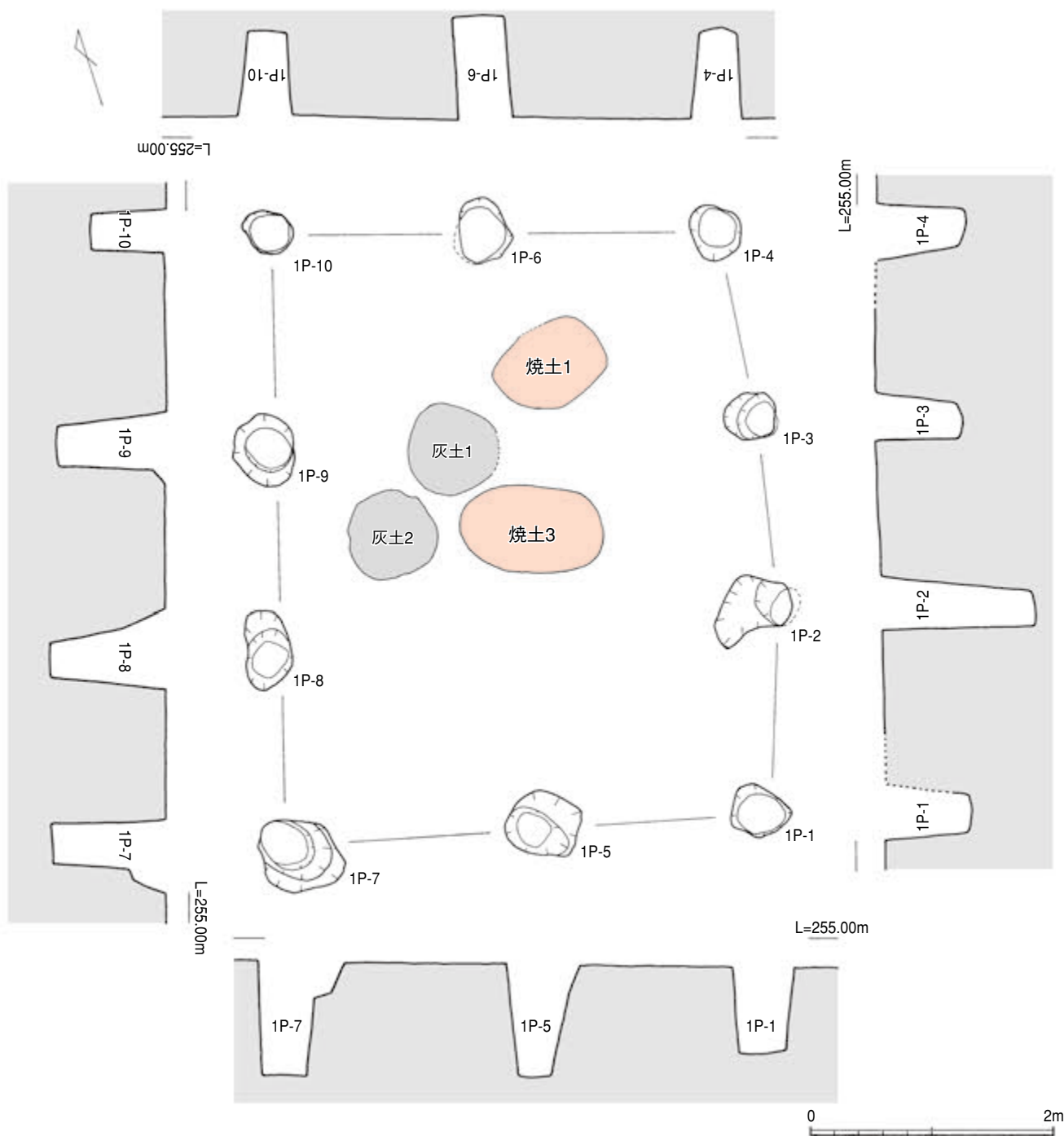
調査区西側の平坦面（F、G-8、9区）から掘立柱建物跡2棟を検出した。この掘立柱建物跡は、1号建物跡の東側桁行の軸と、2号建物跡の東側梁行の軸が重なる状態で検出された。これは、建物跡の主軸方向を90度反時計回りに回転させて建替えられたものである。建物内部には、焼土跡と灰土跡を伴い建物の規模は2間×3間の同規模である。

焼土跡は、火力の使用による被熱によって土壌が赤色化したもので、掘立柱建物跡の中から南北に、連なって3基検出された。また、灰土跡は検出状況下では、燃料に用いた木材の最終廃棄工程の箇所であると推測できる。これら焼土跡と灰土跡の検出状況は、焼土1が独立し、焼土3に焼土2が重なり、炭化物を含む灰黄色の灰土跡2基が付随する。灰土1に焼土2が重なるため、灰土1が焼土2より先行する。

建物跡の建替えの先後関係は、焼土1を2号建物跡の柱穴（2P-5）が掘り抜いていたために判明した。焼土1が2号建物跡に付属するものであるならば、柱穴（2P-5）に立つ柱と上屋構造に火熱を避ける措置を採らねばならず、構造上合理的ではないため、焼土1が先行する建物跡に付属するものと判断した。

第12表 掘立柱建物跡観察表1（焼土跡・灰土跡）

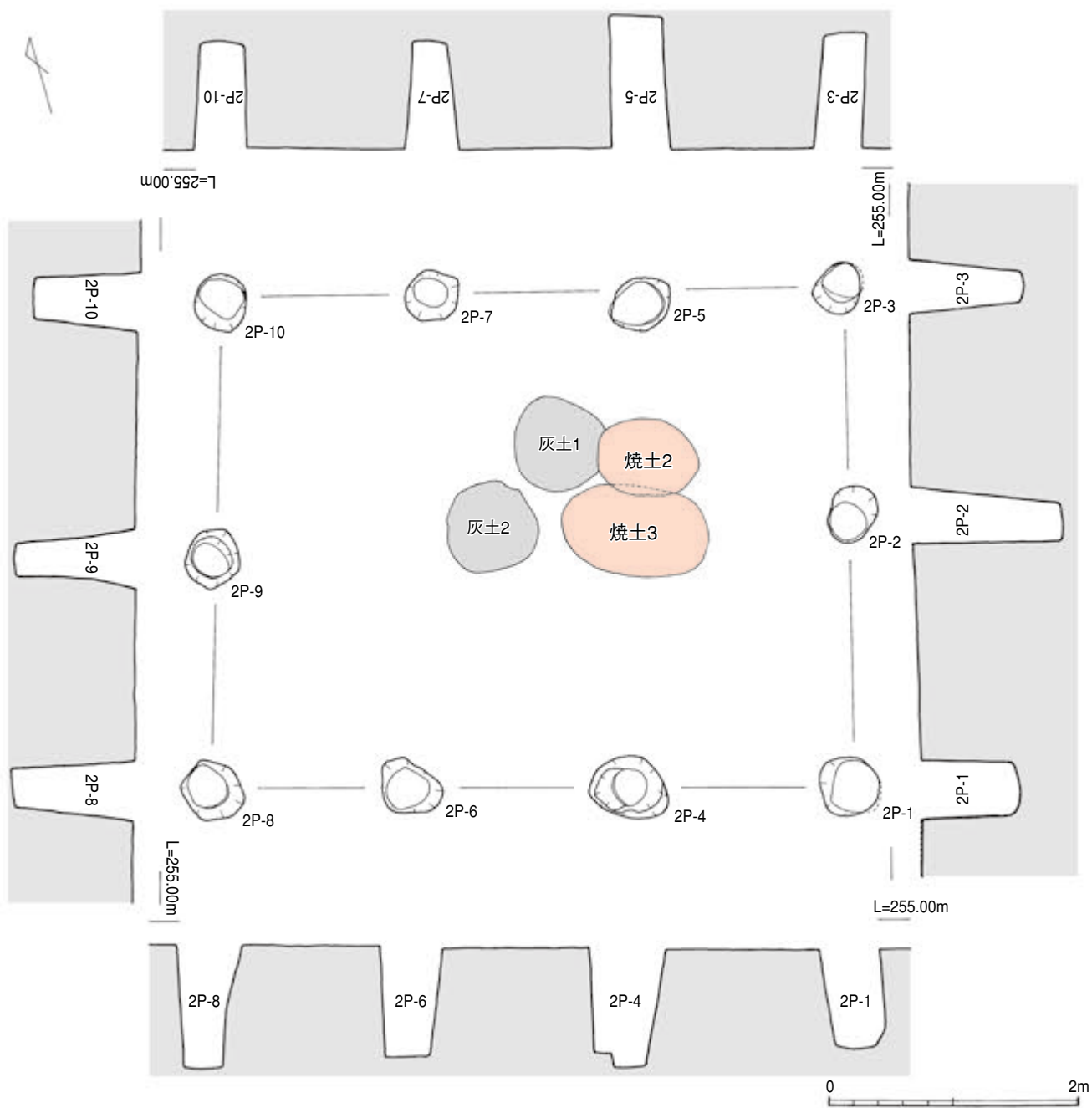
挿図 No.	報告 No.	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	備考
55	1	96	68	11	2号掘立柱建物跡Pit5に切られる
	2	80	62	6	
	3	118	(68)	4.5	2号焼土跡に切られる
	灰1	75	74	14	
	灰2	75	72	11	



第56図 掘立柱建物跡 2

第13表 掘立柱建物跡観察表 2 (1号掘立柱建物跡)

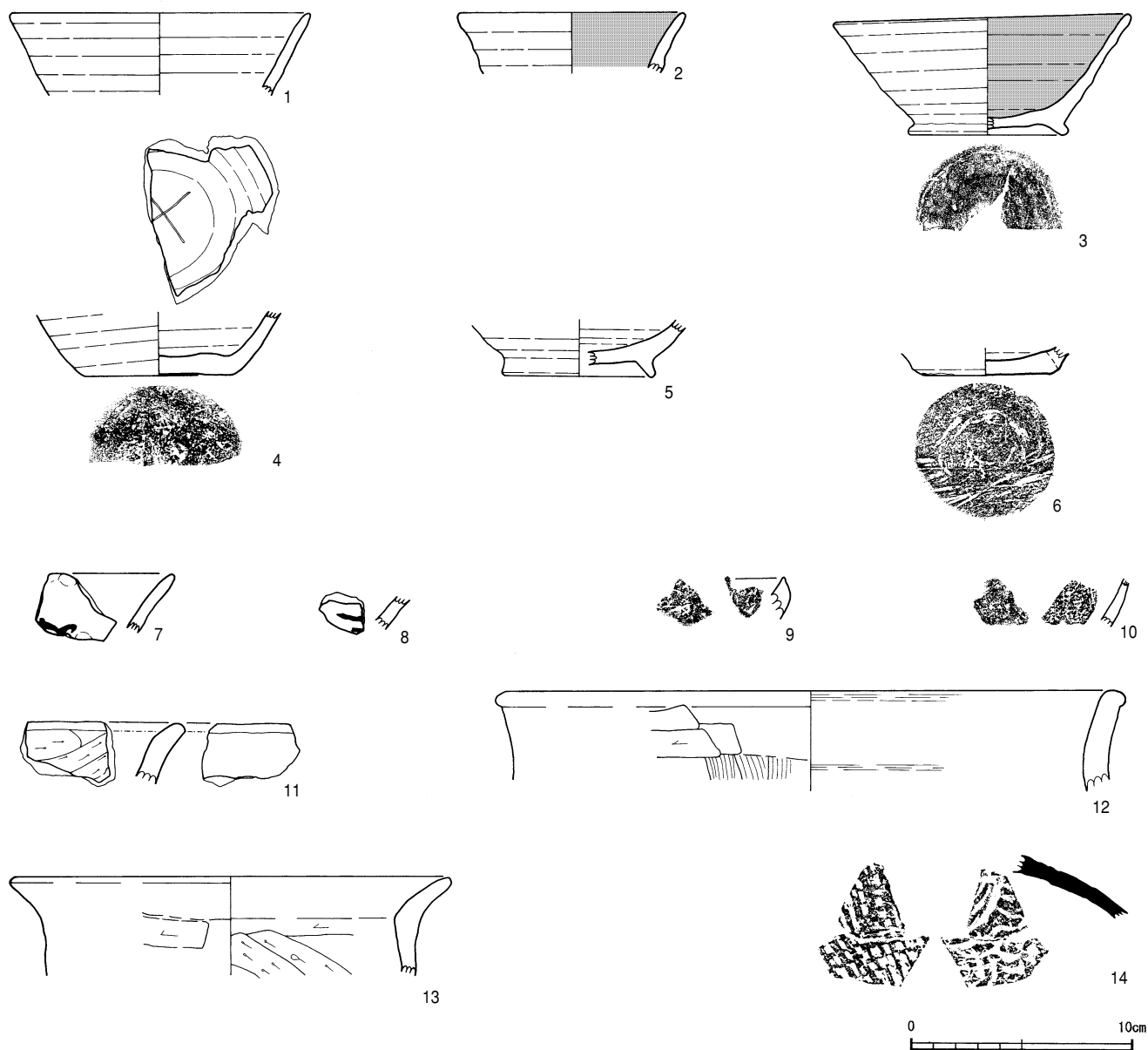
2間×3間	梁間柱間 (cm)	梁間間 (cm)	N-18-E (cm)	桁行柱間 (cm)	桁行間 (cm)	Pit	深さ (cm)	長径 (cm)	短径 (cm)	掘り方	床面積 (㎡)	備考
1-5	180	382	1-2	170	490	1	71	(50)	(38)	楕円	18.2	
5-7	202	—	2-3	158	—	2	127	67	36	変則的		
2-8	—	422	3-4	162	—	3	73	43	39	円形		
3-9	—	404	5-6	—	485	4	74	(48)	(38)	楕円		
4-6	192	367	7-8	152	496	5	92	(60)	(36)	楕円		
6-10	175	—	8-9	168	—	6	87	54	41	楕円		
			9-10	176	—	7	93	75	61	楕円		
						8	97	64	38	楕円		
						9	91	60	50	楕円		
						10	52	42	35	楕円		
平均	187	394		164	490		86	56	41			



第57図 掘立柱建物跡 3

第14表 掘立柱建物跡観察表 3 (2号掘立柱建物跡)

2間×3間	梁間柱間 (cm)	梁間間 (cm)	N-74-W (cm)	桁行柱間 (cm)	桁行間 (cm)	Pit	深さ (cm)	長径 (cm)	短径 (cm)	掘り方	床面積 (㎡)	備考
1-2	210	400	1-4	180	516	1	79	(50)	(45)	円形	19.35	
2-3	190		4-6	176		2	121	47	34	楕円		
4-5	—	382	6-8	160		3	91	(46)	(35)	楕円		
6-7	—	390	2-9	—	508	4	94	(62)	(42)	楕円		
8-9	180	387	3-5	166	500	5	106	53	42	楕円		
9-10	207		5-7	166		6	88	54	40	楕円		
			7-10	168		7	87	44	42	円形		
						8	98	49	47	円形		
						9	98	47	43	円形		
						10	87	47	45	円形		
平均	197	390		169	508		95	50	42			



第58図 掘立柱建物跡出土遺物実測図

1号掘立柱建物跡（第55，56，58図）

主軸方向は、N-18-Eで北北東方向に取り、東側の桁行の並びに乱れが見られる。焼土1と灰土1が付属される施設と考えられる。焼土3は、建物中央に位置する。

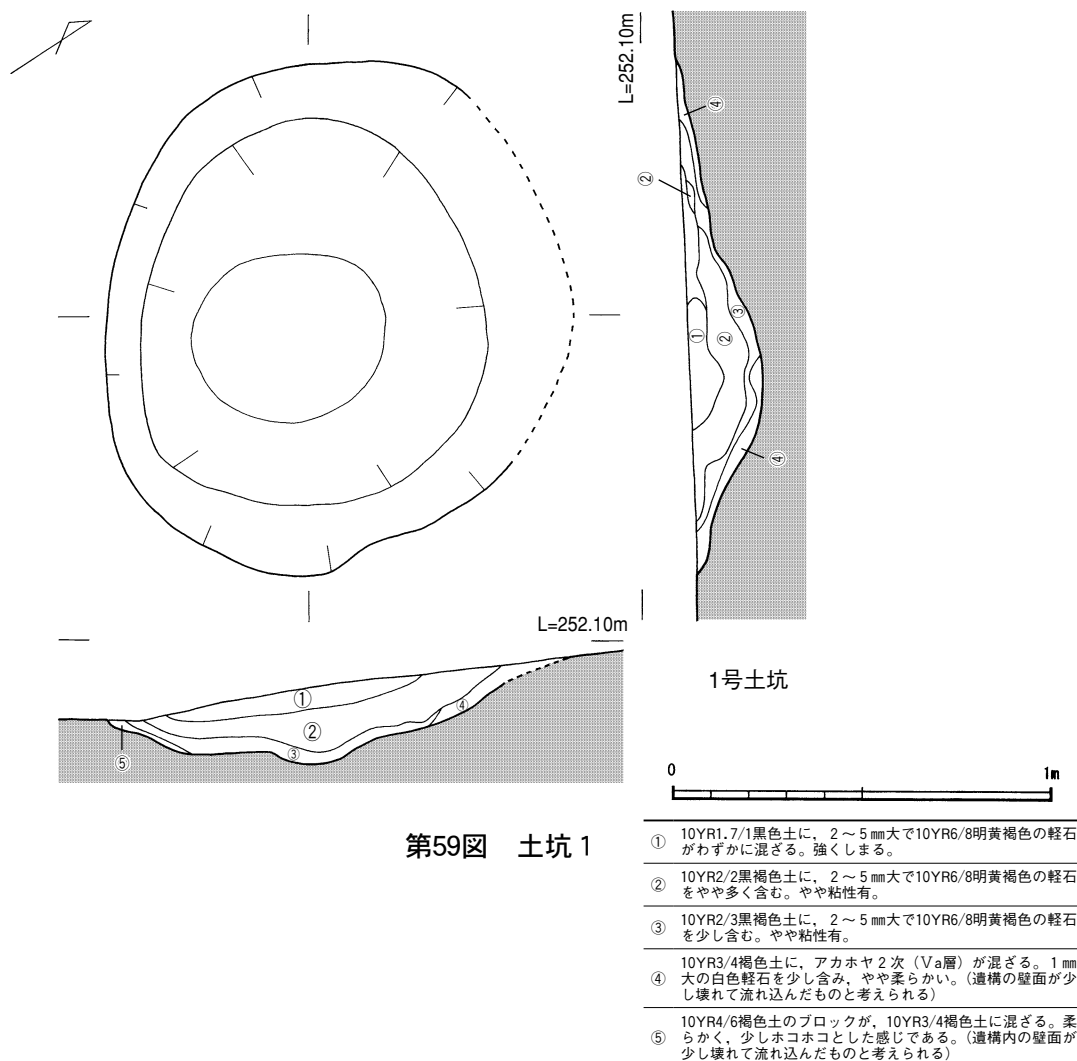
柱穴跡から出土した遺物は、Na1～4と、Na11，12，14で、Na3は体部が真っ直ぐ延びる内黒椀で、短い高台が底端部に付き外開きである。Na4はわずかに内湾する体部の坏で内面底部に×字のヘラ記号が確認できる。Na11，12は、口縁部の外反が弱い土師甕である。Na14の須恵器は2号掘立柱建物跡のものと接合した。

2号掘立柱建物跡（第55，57，58図）

主軸方向は、N-74-Wで西北西方向に取り、桁行と梁行の柱穴が整然と並ぶ。先述したとおり焼土2が付属さ

れると考えられる。焼土3は、柱穴（2P-4，5）間の中央に位置する。

柱穴跡から出土した遺物は、Na5～10と、Na13，14で、Na5は外開きの高台を持つ。Na6は底部切り離しが認められる。Na7，8は墨書土器であるが字体が不明である。Na9，10は焼塩土器の口唇部が失る口縁部と胴部片である。Na13は土師甕の口縁部で、短く先細りで外反する。Na14は1号掘立柱建物跡出土のものと接合した。



第59図 土坑 1

1号土坑（第59図）

南側調査区のD-17区に位置し、上位層が削平されていたためにVa層で検出された。平面プランは円形で、底面は平坦面を持たないボール状で、Vb層まで掘り込まれている。埋土はⅢ層の黒色土が主体である。

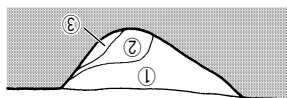
2号土坑（第60図）

調査区の南端C-18区に位置し、Va層で検出された。土坑の上部が、後世の削平を受けているため原型をとど

めていない。検出状況下での平面形は、人が横たわった形状で、長方形の掘り込みの短辺に方形の掘り込みが付く形状である。埋土は、Ⅲ層の黒色土が主体で、残存状況の良い炭化物が多く含まれている。底面はしっかりした平坦面を持たないが、一部から赤色化した焼土跡が確認された。形状や埋土の状況、焼土跡の状況から、炭窯遺構が考えられ、小さい方形の掘り込みは煙出し施設と思われる。

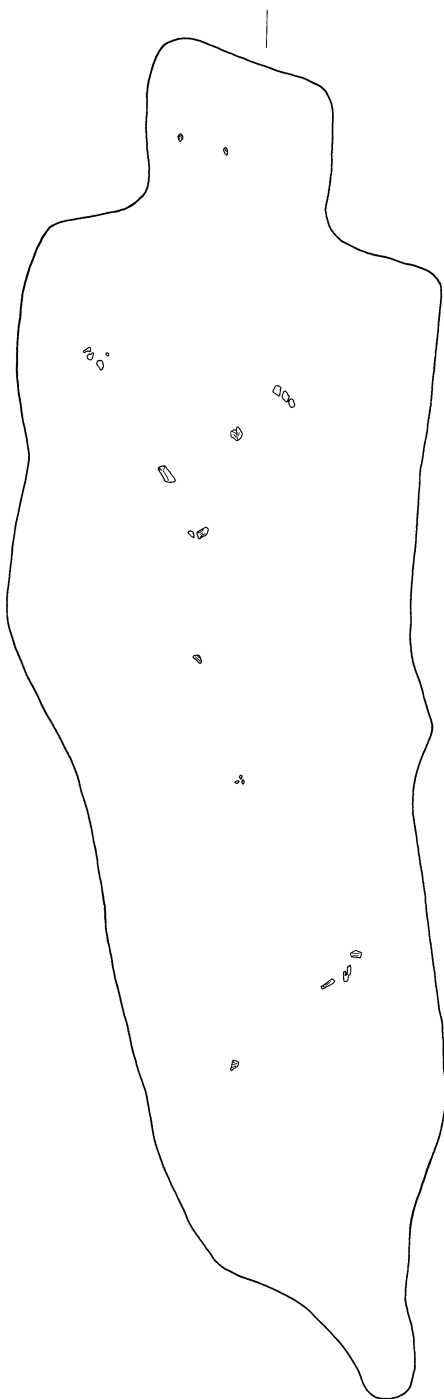
第15表 古代土坑観察表

挿図 No.	報告 No.	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	備考
59	1	135	(123)	20	IV a 層検出
60	2	358	105	14	V a 層検出

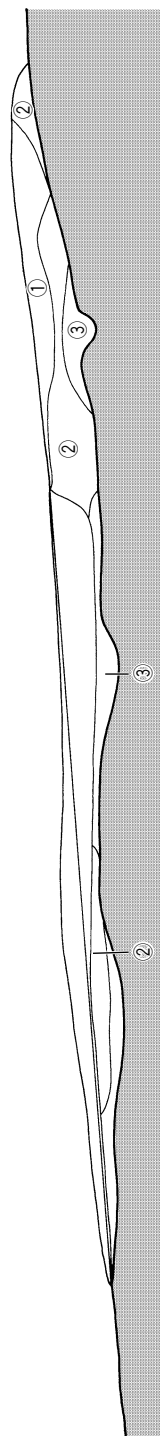
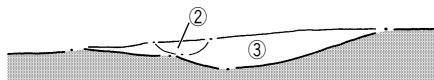
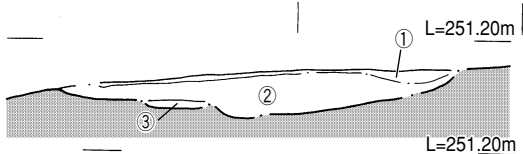
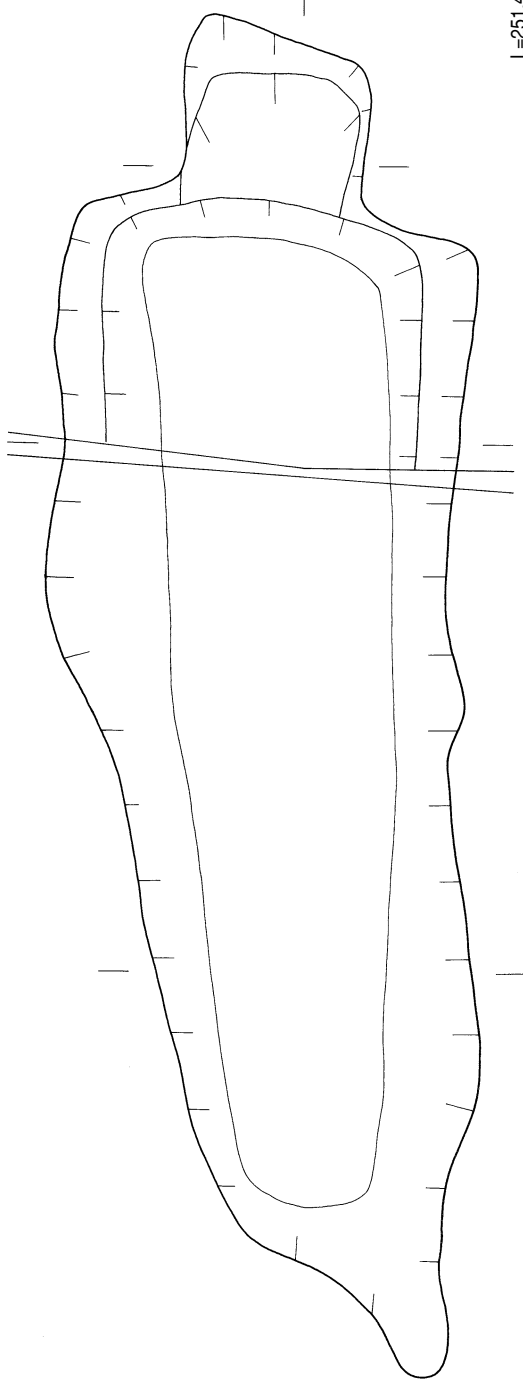
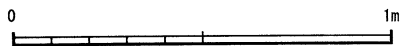


L=251.40m

L=251.40m

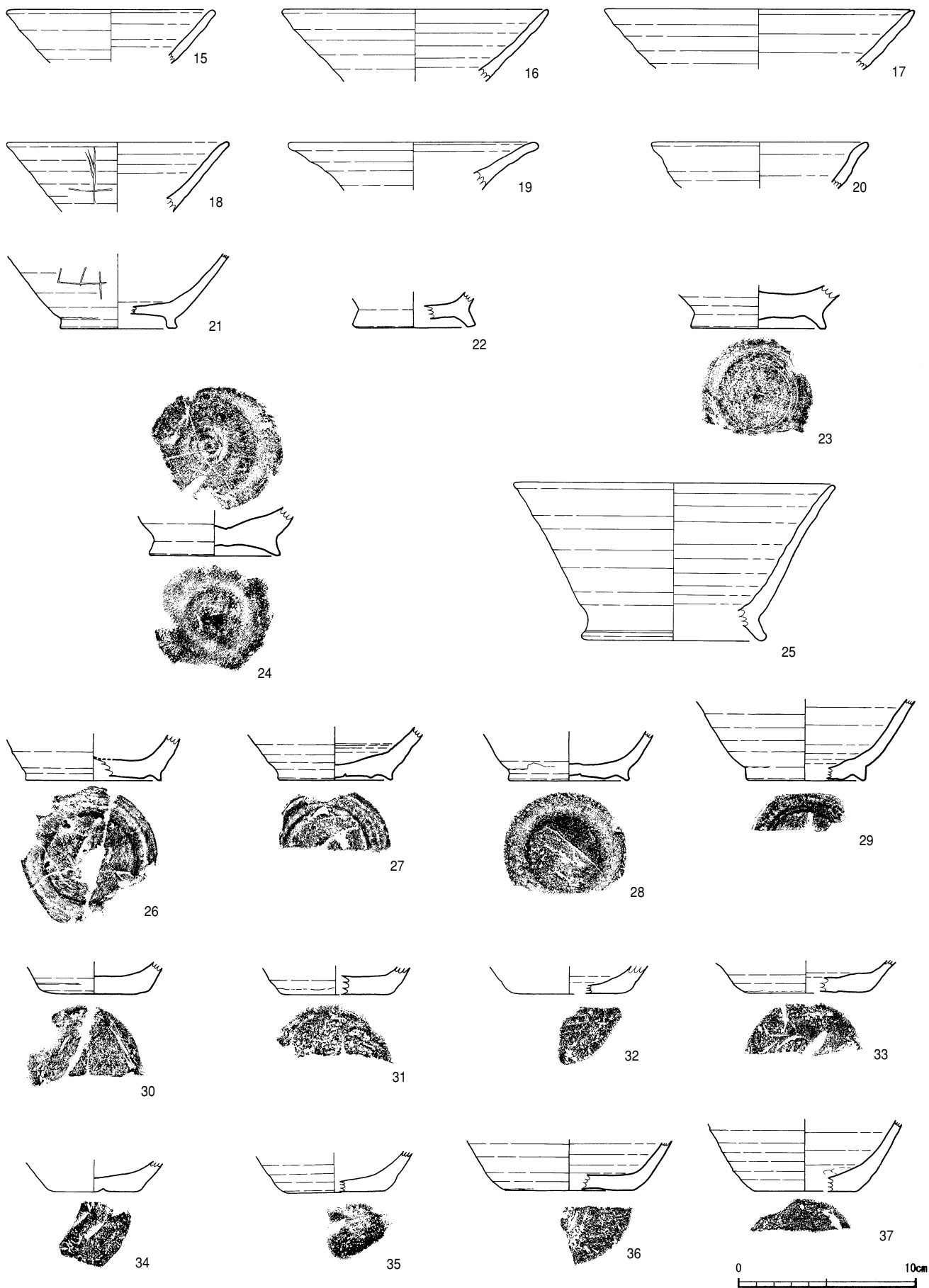


- ① 10YR2/1黒色土に1～2mmの極小軽石が混ざり、柔らかくサラサラしており、しっかりした状態の炭化物を多く含む。
- ② 10YR1.7/1黒色土に1～2mmの黄色の軽石が混ざりサラサラしている。炭化物は①より小さく少ない。
- ③ 10YR1.7/1黒色土に2～5cm大のアカホヤブロックが混ざる。炭化物片を少し含み、遺構の南側は赤く焼けている。

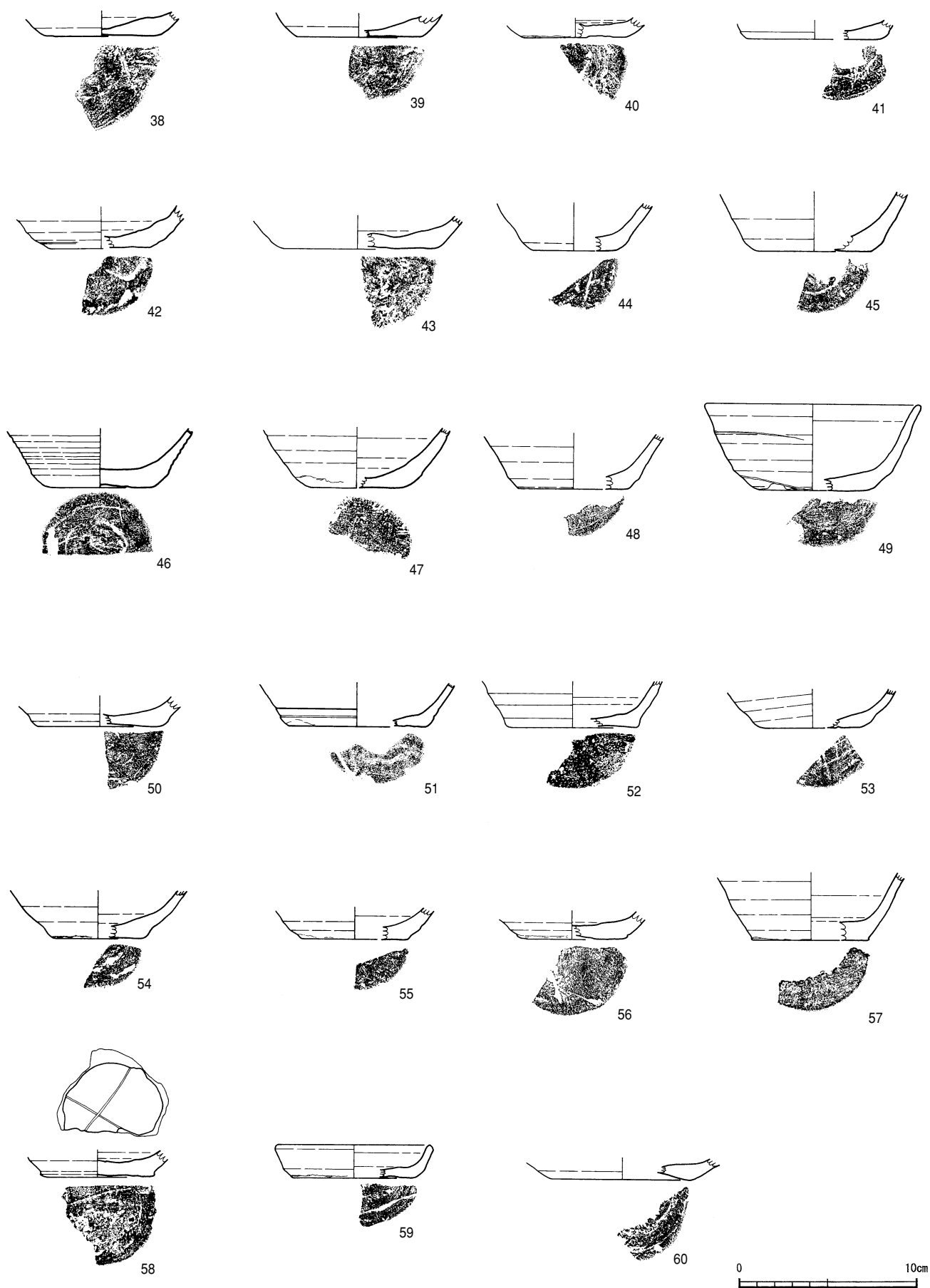


2号土坑

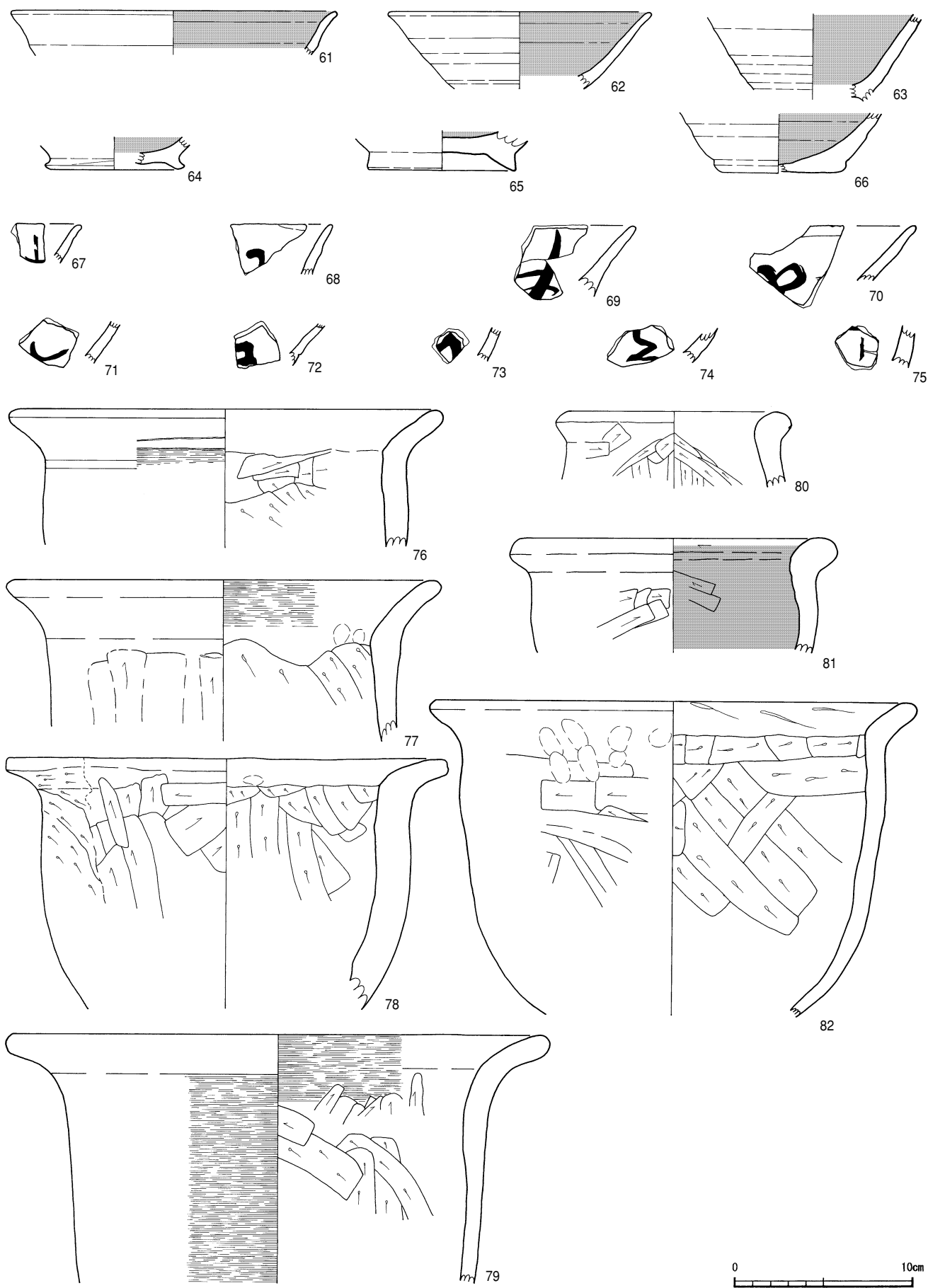
第60図 土坑 2



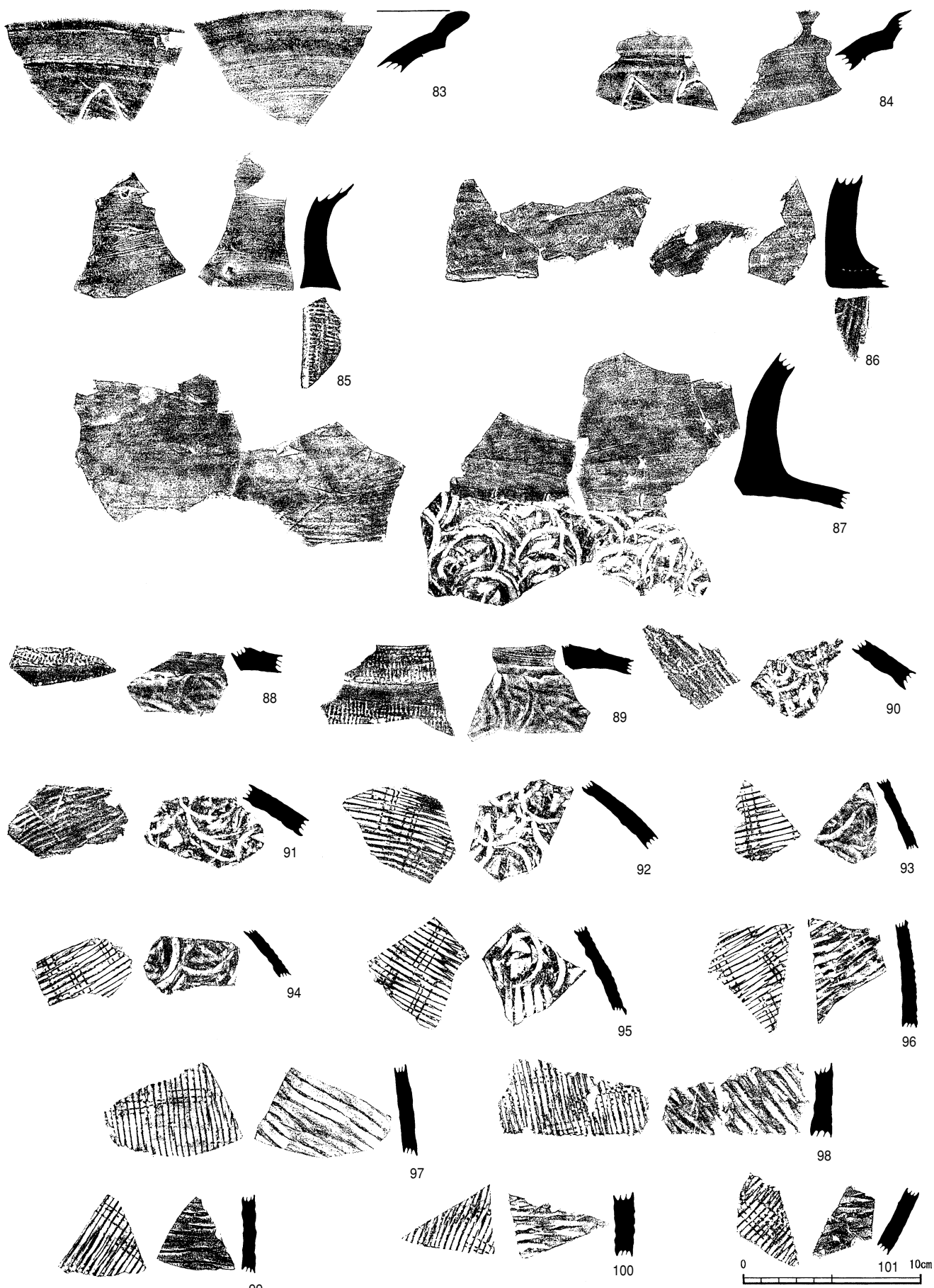
第61図 古代出土遺物実測図 1



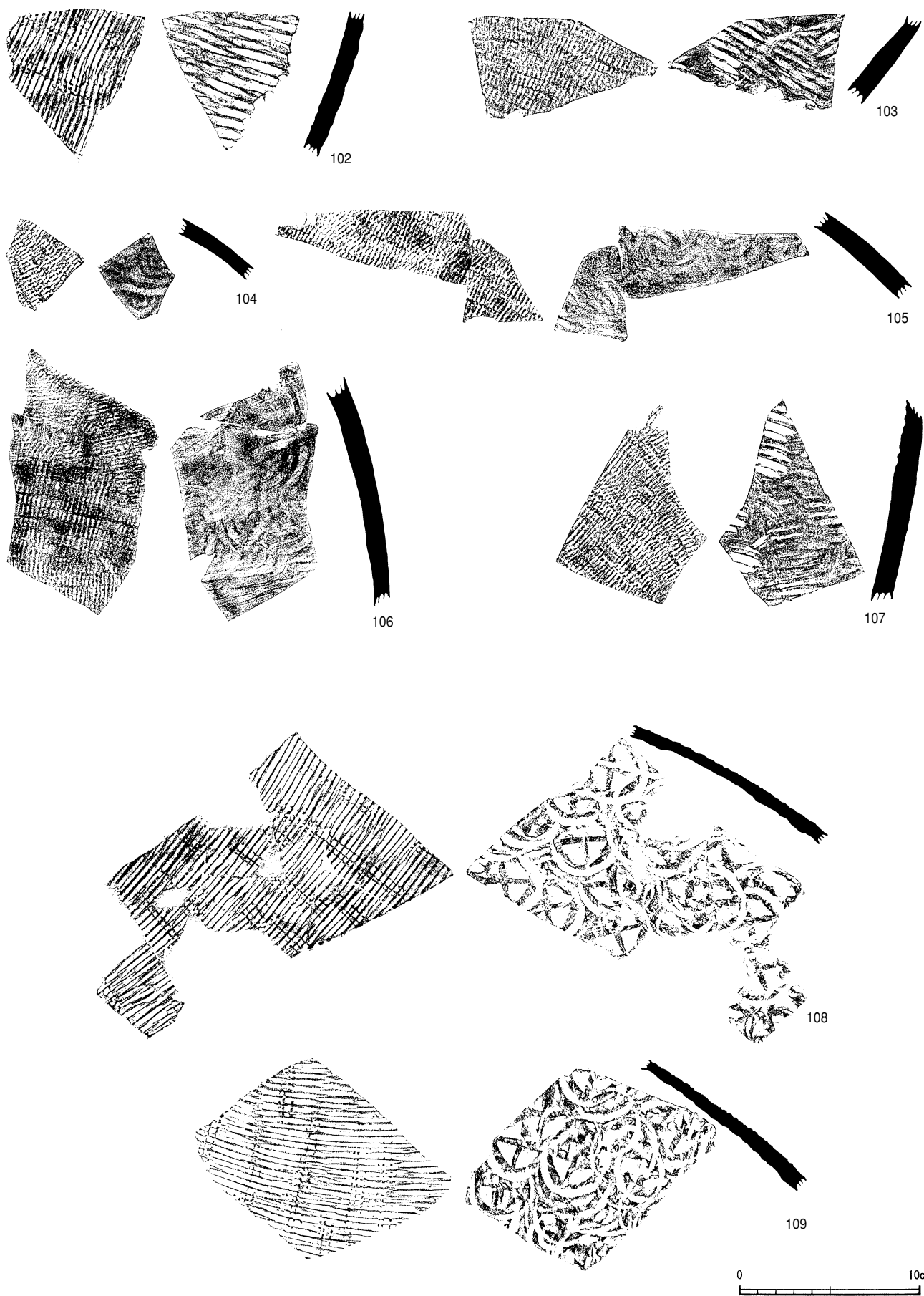
第62図 古代出土遺物実測図 2



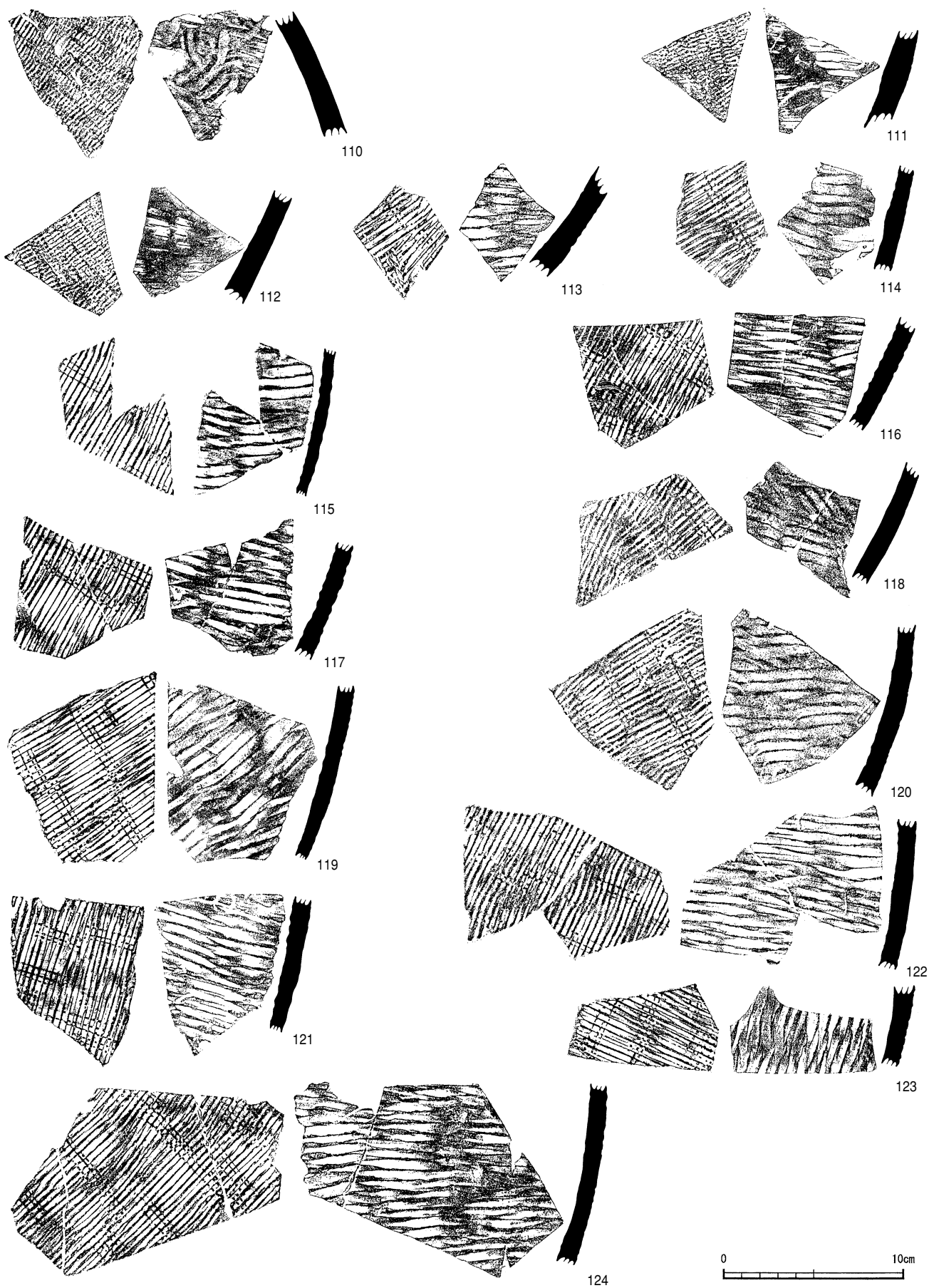
第63図 古代出土遺物実測図 3



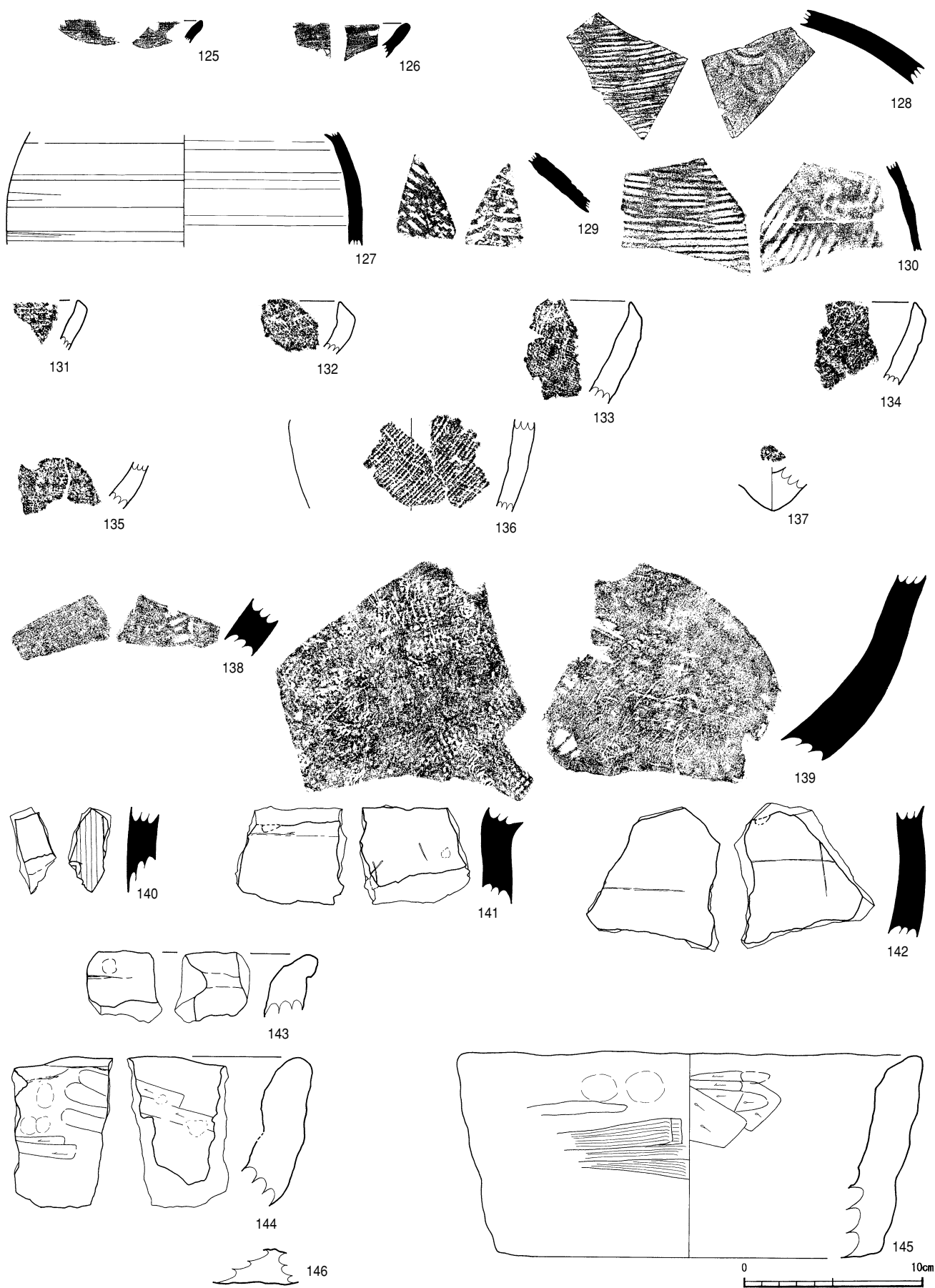
第64図 古代出土遺物実測図 4



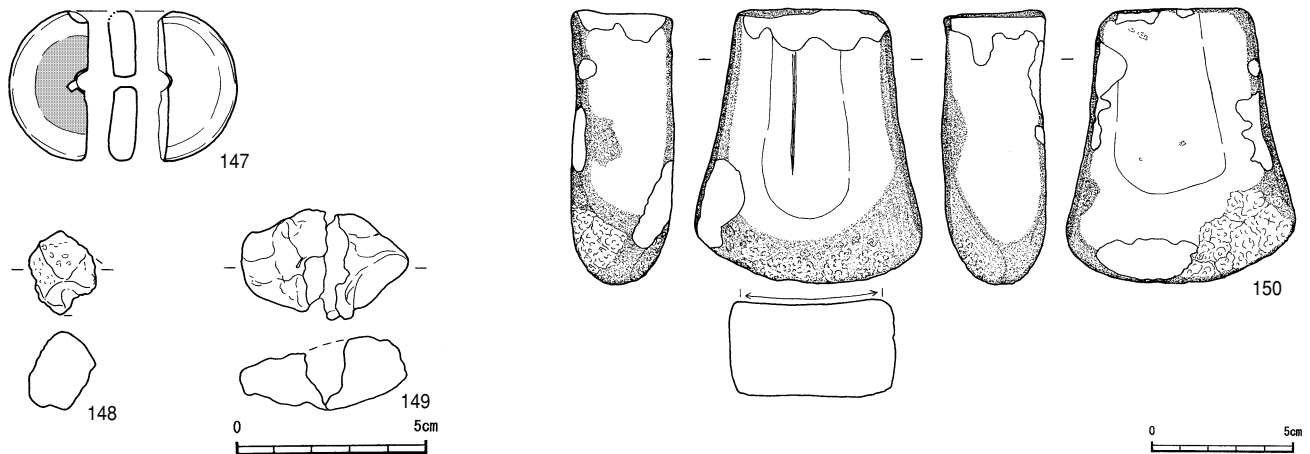
第65図 古代出土遺物実測図 5



第66図 古代出土遺物実測図 6



第67図 古代出土遺物実測図 7



第68図 古代出土遺物実測図 8

・遺物

古代の遺物は、I～F-8, 9を中心に出土し、掘立柱建物内とG-9区に遺物の集中が見られる。

土師器（第61～63図No15～82）

土師器の碗は、体部が真っ直ぐのびるものNo15～No18, 25と丸みを持つNo20があり、No19, 20は口縁部が若干外反する。高台が底部端に付き、やや外開きのものNo21～No25と、底端部をつまみ出し高台状にしたものNo26～29がある。体部の調整は横ナデで、底部内面に静止ナデが認められるものは、No23, 27であった。No21の外面に「山」字の刻書が、No18, No24には「×」字のヘラ記号が認められる。

土師器の坏は、体部が真っ直ぐのびるものが大部分で、丸みを持つものはNo53, 54である。底部切り離しは、ヘラ切りで、切り離し後に底端部のナデ調整を施すものが大部分を占めるが、No55～57は調整が認められない。ヘラ記号は、No58の底部内面に付けられている。

土師器の皿No59は、体部が真っ直ぐ立ち上がる小皿で、底部切り離し後のナデ調整が施されている。No60は、底部の形状から皿と判断した。

黒色土器は、口縁部が外に開くものNo61と体部が真っ直ぐのびるものNo62, 63、底端部に短く外開きの高台が付くものNo64、直行する高台のものNo65と円盤状の底部が付くものNo66があり、内面はミガキにより丁寧に仕上げられている。

墨書土器は、包含層から9点出土しているが小破片のため字体は判明していない。No67～74は、碗又は坏で、No75は、内面にケズリ痕が残る甕の胴部である。

土師器の甕は、口縁部がわずかに外反し、胴部が膨らむものNo76, 77, 82と、口縁部が水平方向に開くものNo78, 79、口唇部が丸く肥厚し外反するものNo80, 81がある。No78は、胴部器壁が厚く、内外面にケズリ痕が見られる。No79の胴部外面は丁寧な横ナデで、内面はケズリ

によって器壁を薄く仕上げる。No82は内面の口縁部と胴部の境目に横方向のケズリで稜を作る。

須恵器（第64～第67図No83～130）

調査区内から出土した須恵器は、大部分が大甕の胴部片で、赤焼きの比率が高い。表面がわずかに灰色を呈しているため、焼成時の還元不十分が原因と見られる。

甕の口縁部は、外反する口縁部の内外に段を有し頸部にヘラ書きを施す物No83, 84と、直立する長い頸部を持ち、胴部との接合痕が明瞭に残るものNo85～89がある。

胴部は大きく張る器形で、外面の調整は平行タタキが大部分を占め、格子目タタキは少数である。

No125, 126は、壺或いは瓶の口唇部で、横ナデで薄く仕上げ、焼成が良い。No127は壺の胴部で外面に緑色の自然釉がかかる。焼成は良く堅緻である。

焼塩土器（第67図No131～137）

焼塩土器は、G-8区を中心に62点の出土を確認した、接合できる物はなかったが、逆円錐形の器形で口唇端部が上方に尖る、内面には布目の圧痕が残る。

その他の遺物（第67, 68図No138～No150）

No138, 139は土師質の土器で、外面調整はタタキ目で器壁が厚い。東播系須恵器No140～142は、器種が不明である。No143～145は、同一個体の器壁の厚い土鍋状の容器で、内外面に粗い調整が施される、内面は、熱変を受け溶解したような痕跡が認められるため金属器生産の取瓶として使用された可能性がある。No147は、黒色土器の底部を用い、高台部分を研磨し紡錘車に仕上げた痕跡が伺える。No148, 149は、軽石や砂粒を含む土塊の全面に金属が付着した物で錆を帯びている。化学分析の結果主成分は鉄であった。No150は、砥石で、直線上の使用痕が表面に認められ、全面を研面に用いている。

第16表 古代出土遺物観察表 1

挿図 No.	報告 No.	取上No.	出土区	層位	器種	胎土	焼成	調整(内)	調整(外)	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	高台 (cm)	備考
58	1	1P6-1	1P6	—	椀	精緻	良	静止ナデ	時計回り, ナデ, ヘラ切り	13.6	—	—	—	
	2	1P4-1	1P4	—	内黒	精緻	良	ミガキ	反時計回り, ナデ	10.4	—	—	—	
	3	1P6 345	1P6 F-8	— IVa	内黒	精緻	良	ミガキ	ナデ, 回転ヘラ→ナデ	13.4	7.2	5.4	—	Pit内一括
	4	1P10 539	1P10 G-9	— III	坏(刻書)	精緻	良	ナデ	反時計回り, ヘラ切り→ナデ	—	6.8	—	—	Pit内一括
	5	2P1	2P1	—	椀	精緻	良	回転ナデ	反時計回り, ナデ	—	7	—	0.7	Pit内一括
	6	2P3 426	2P3 F-8	— IVa	坏	精緻	良	反時計回り, 静止ナデあり	反時計回り, ヘラ切り→ナデ	—	6	—	—	Pit内一括
	7	2P7-1	2P7	—	墨書	精緻	良	ナデ	時計回り, ナデ	—	—	—	—	字体不明
	8	2P5-11	2P5	—	墨書	精緻	良	反時計回り, ナデ	ナデ	—	—	—	—	字体不明
	9	2P5-8	2P5	—	焼塩	精緻	良	—	—	—	—	—	—	
	10	2P5-9	2P5	—	焼塩	精緻	良	—	—	—	—	—	—	
	11	1P5-1	1P5	—	甕	精緻	良	ケズリ, ナデ	ナデ	—	—	—	—	礫, 砂
	12	1P7-1	1P7	—	甕	精緻	良	ナデ	縦ハケ目, ナデ	28.6	—	—	—	砂
	13	2P3-4	2P3	—	甕	精緻	良	ケズリ, ナデ	横ハケ目, ナデ	20	—	—	—	礫, 砂
	14	1P1 2P1	1P1 2P1	— —	須恵器	精緻	良	同心円	格子目タタキ	—	—	—	—	Pit内一括 Pit内一括
61	15	133 153	D-8 D-8	III IVa	椀	精緻	良	時計回り, ナデ, ヘラ	時計回り, ナデ	11.5	—	—	—	赤
	16	1402 1659 1726	H-8 ↓ ↓	IVa ↓ ↓	椀	精緻	良	反時計回り, ナデ	反時計回り, ナデ	14.9	—	—	—	
	17	1955	H-8	IVa	椀	精緻	良	時計回り, ナデ	時計回り, ナデ	17.4	—	—	—	赤
	18	一括	—	—	椀(刻書)	精緻	良	時計回り, ナデ	時計回り, ナデ	12.5	—	—	—	×字, 赤
	19	一括	—	—	椀	精緻	良	反時計回り	反時計回り	14	—	—	—	赤
	20	一括	—	—	椀	精緻	良	時計回り	時計回り	12.1	—	—	—	赤, 礫, 砂
	21	一括	—	—	椀(刻書)	精緻	良	静止ナデ	時計回り, ナデ	—	6.6	—	0.85	山字
	22	915	G-8	IVa	椀	精緻	良	ナデ	ナデ	—	7	—	0.6	礫, 砂
	23	386	F-9	III	椀	精緻	良	静止ナデ消し	反時計回り, ナデ	—	7.6	—	0.7	
	24	260	E-8	III	椀(刻書)	精緻	良	時計回り, 回転ナデ	時計回り, ナデ残る	—	8.4	—	0.6	×字
	25	1849 1916	I-8 I-7	III IVa	椀	精緻	良	不明ナデ	反時計回り, ナデ	18	10.4	8.75	0.8	赤
	26	3049 3050 3051 3052 3055 3056	G-9 ↓ ↓ ↓ ↓ ↓	III ↓ ↓ ↓ ↓ ↓	椀	精緻	良	時計回り, ナデ消し	ヘラ切り→ナデ	—	7.6	—	0.25	赤
	27	629	G-9	III	椀	精緻	良	静止ナデ, ヘラ痕残る	反時計回り, ヘラ切り→ナデ	—	6.5	—	0.3	礫, 砂
	28	3105	G-9	III	椀	精緻	良	時計回り→ナデ	時計回り, ヘラ記号, ナデ	—	6.8	—	0.4	礫, 砂
	29	1476	H-8	IVa	椀	精緻	良	時計回り→回転ナデ	時計回り	—	6.8	—	0.3	赤さし?
	30	1563	G-8	III	坏	精緻	良	ナデ	反時計回り, ヘラ切り→ナデ	—	6	—	—	砂
	31	一括	—	—	坏	精緻	良	ナデ	時計回り, ヘラ切り→ナデ	—	6	—	—	赤
	32	一括	—	—	坏	精緻	良	ナデ	反時計回り, ヘラ切り→ナデ	—	6	—	—	砂
	33	291	F-8	III	坏	精緻	良	ナデ	時計回り, ヘラ切り→ナデ	—	7	—	—	砂
	34	376	F-9	IVa	坏	精緻	良	ナデ	ヘラ切り→ナデ	—	5.2	—	—	砂
	35	567	G-9	III	坏	精緻	良	ナデ	ヘラ切り→ナデ	—	5	—	—	赤
	36	一括	H-7	—	坏	精緻	良	ナデ	時計回り, ヘラ切り→ナデ	—	7.4	—	—	礫, 砂
	37	1864 1866	I-8 ↓	III ↓	坏	精緻	良	静止ナデ	時計回り, ヘラ切り→ナデ	—	6	—	—	
62	38	1412	H-8	III	坏	精緻	良	ナデ	ヘラ切り→ナデ	—	6.4	—	—	礫
	39	1598	G-8	III	坏	精緻	良	静止ナデ	時計回り, ヘラ切り→ナデ	—	6.8	—	—	赤
	40	252	F-8	III	坏	精緻	良	回転ナデ明瞭	時計回り, ヘラ切り明瞭	—	5.6	—	—	
	41	536	G-9	III	坏	精緻	良	回転ナデ	反時計回り, ヘラ切り→ナデ	—	7.6	—	—	
	42	1397	H-8	IVa	坏	精緻	良	ナデ	反時計回り, ヘラ切り→ナデ	—	5.6	—	—	赤
	43	1959	F-8	IVa	坏	精緻	良	ナデ	時計回り, ヘラ切り→ナデ	—	8.8	—	—	砂
	44	866	G-8	III	坏	精緻	良	ナデ	反時計回り, ヘラ切り→ナデ	—	5	—	—	
	45	456	F-9	IVa	坏	精緻	良	回転ナデ	反時計回り, ヘラ切り→ナデ	—	6.6	—	—	
	46	869	G-8	III	坏	精緻	良	ナデ	時計回り, ヘラ切り	—	6	—	—	
	47	101	D-9	III	坏	精緻	良	回転ナデ	時計回り, ヘラ切り→ナデ	—	5.6	—	—	砂
	48	一括	—	—	坏	精緻	良	ナデ	時計回り, ヘラ切り→ナデ	—	5.8	—	—	
	49	3048	G-9	III	坏	精緻	良	ナデ	反時計回り, ヘラ切り→ナデ	12	6.8	4.8	—	一括あり
	50	1473	H-9	IVa	坏	精緻	良	ナデ	時計回り, ヘラ切り→ナデ	—	7	—	—	
	51	1428	H-8	III	坏	精緻	良	ナデ	時計回り, ヘラ切り→ナデ	—	7.6	—	—	赤
	52	一括	—	—	坏	精緻	良	ナデ	時計回り, ヘラ切り→ナデ	—	7.2	—	—	赤
	53	一括	—	—	坏	精緻	良	ナデ	時計回り, ヘラ切り→ナデ	—	5.2	—	—	礫, 砂
	54	315	F-8	III	坏	精緻	良	静止ナデ	時計回り, ヘラ切り→ナデ	—	5.4	—	—	
	55	一括	C-20	—	坏	精緻	良	静止ナデ明瞭	反時計回り, ヘラ切り→ナデ	—	5.8	—	—	
	56	1901	H-8	IVa	坏	精緻	良	回転ナデ明瞭	反時計回り, ヘラ切り→ナデ	—	6	—	—	
	57	一括	G-10	IVa	坏	精緻	良	回転ナデ	時計回り, ヘラ切り→ナデ	—	6.6	—	—	
	58	一括	H-8	III	坏(刻書)	精緻	良	回転ナデ	時計回り, ヘラ切り	—	6.4	—	—	×字
	59	1210	E-6	III	皿	精緻	良	ナデ	時計回り, ヘラ切り→ナデ	8.8	6.6	1.85	—	赤
	60	460	F-9	III	皿	精緻	良	ナデ	時計回り, ヘラ切り	—	7.8	—	—	赤

第17表 古代出土遺物観察表 2

挿図 No.	報告 No.	取上No.	出土区	層位	器種	胎土	焼成	調整(内)	調整(外)	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	高台 (cm)	備考
63	61	546 632	G-9 ↓	Ⅲ ↓	内黒	精緻	良	ミガキ	時計回り, ナデ	18.3	—	—	—	礫
	62	3112 3113	G-9 ↓	Ⅲ ↓	内黒	精緻	良	ミガキ	反時計回り, 工具ナデ	14.7	—	—	—	
	63	290	F-8	Ⅲ	内黒	精緻	良	ミガキ	反時計回り	—	—	—	—	
	64	一括	G-9	Ⅲ	内黒	精緻	良	ミガキ	反時計回り	—	7.4	—	0.4	赤
	65	1455	H-8	IVa	内黒	精緻	良	ミガキ	時計回り, ヘラ切り→ナデ	—	8.2	—	1	砂, 礫, 赤
	66	509 674	G-9 ↓	Ⅲ ↓	内黒(坏)	精緻	良	ミガキ	反時計回り, ヘラ切り→ナデ	—	7.2	—	—	
	67	一括	H-7	—	墨書	精緻	良	ナデ	ナデ	—	—	—	—	字体不明, 砂
	68	3032	G-9	Ⅲ	墨書	精緻	良	ナデ	時計回り, ナデ	—	—	—	—	字体不明
	69	一括	—	—	墨書	精緻	良	ナデ	反時計回り, ナデ	—	—	—	—	字体不明, 赤
	70	691	G-9	Ⅲ	墨書	精緻	良	ナデ	時計回り, ナデ	—	—	—	—	字体不明, 赤
	71	一括	—	—	墨書	精緻	良	ナデ	時計回り, ナデ	—	—	—	—	字体不明
	72	1390	H-8	IVa	墨書	精緻	良	ナデ	反時計回り, ナデ	—	—	—	—	字体不明
	73	一括	G-9	Ⅲ	墨書(内黒)	精緻	良	ミガキ	反時計回り, ナデ	—	—	—	—	字体不明
	74	1903	H-7	Ⅲ	墨書	精緻	良	ナデ	反時計回り, ナデ	—	—	—	—	字体不明
	75	749	G-9	Ⅲ	墨書	精緻	良	ナデ	ケズリ	—	—	—	—	薨, 字体不明
	76	307 311 337 339 333	F-8 ↓ ↓ ↓ ↓	Ⅲ ↓ ↓ ↓ IVa	土師甕	精緻	良	ケズリ, ナデ	ナデ	24.4	—	—	—	
	77	一括	C-20	—	土師甕	精緻	良	ナデ, ケズリ	ハケ目, ナデ	24.4	—	—	—	
	78	一括	C-20	—	土師甕	精緻	良	ケズリ, ナデ	ナデ	24.9	—	—	—	
	79	3017 3082 3083 3084 3086 3087 3093	G-9 ↓ ↓ ↓ ↓ ↓ ↓	Ⅲ ↓ ↓ ↓ ↓ ↓ ↓	土師甕	精緻	良	ナデ, ケズリ	ナデ	30.6	—	—	—	
	80	一括	—	—	土師甕	精緻	良	ケズリ, ナデ	ケズリ, ナデ	13.2	—	—	—	
	81	3091	G-9	Ⅲ	土師甕	精緻	良	ケズリ, ナデ	ナデ	18.4	—	—	—	
	82	一括	E-15	IVa	土師甕	精緻	良	ケズリ, ナデ	ナデ	27.4	—	—	—	
64	83	1638	H-8	IVa	須恵器	精緻	赤焼	ナデ	ナデ, ヘラかき	—	—	—	—	
	84	889	G-9	IVa	須恵器	精緻	赤焼	ナデ	ナデ, ヘラかき	—	—	—	—	
	85	259	E-8	Ⅲ	須恵器	精緻	良	ナデ	ナデ	—	—	—	—	
	86	535 537 230	G-9 ↓ E-7	Ⅲ ↓ Ⅲ	須恵器	精緻	赤焼	ナデ	ナデ	—	—	—	—	
	87	543 886 898	G-9 ↓ ↓	Ⅲ ↓ IVa	須恵器	精緻	赤焼	ナデ, 同心円	平行タタキ→ナデ	—	—	—	—	
	88	1926	G-7	IVa	須恵器	精緻	赤焼	同心円→ナデ	格子目タタキ	—	—	—	—	
	89	867	G-8	Ⅲ	須恵器	精緻	赤焼	同心円→ナデ	格子目タタキ	—	—	—	—	
	90	250	F-7	Ⅲ	須恵器	精緻	赤焼	同心円	平行タタキ→ナデ	—	—	—	—	
	91	表採	G-8	I	須恵器	精緻	赤焼	同心円	平行タタキ→ナデ	—	—	—	—	
	92	1396	H-8	Ⅲ	須恵器	精緻	赤焼	同心円	同心円, 平行タタキ→ナデ	—	—	—	—	
	93	表採	G-8	I	須恵器	精緻	赤焼	同心円	平行タタキ	—	—	—	—	
	94	232	E-7	Ⅲ	須恵器	精緻	赤焼	同心円	平行タタキ	—	—	—	—	
	95	一括	H-8	Ⅲ	須恵器	精緻	赤焼	平行タタキ→同心円	平行タタキ	—	—	—	—	
	96	1372	I-8	IVa	須恵器	精緻	赤焼	平行タタキ→同心円	平行タタキ	—	—	—	—	
	97	1637	I-8	IVa	須恵器	精緻	赤焼	平行タタキ	平行タタキ	—	—	—	—	
	98	一括 一括	G-9 H-9	Ⅲ Ⅲ	須恵器	精緻	赤焼	平行タタキ	平行タタキ	—	—	—	—	
	99	495	F-9	Ⅲ	須恵器	精緻	赤焼	平行タタキ	平行タタキ	—	—	—	—	
	100	表採	G-8	I	須恵器	精緻	赤焼	平行タタキ	平行タタキ	—	—	—	—	
	101	一括	—	—	須恵器	精緻	赤焼	平行タタキ	平行タタキ	—	—	—	—	
65	102	一括	I-7	—	須恵器	精緻	赤焼	平行タタキ	平行タタキ	—	—	—	—	
	103	277 288	E-8 F-8	Ⅲ Ⅲ	須恵器	精緻	赤焼	平行タタキ	格子目タタキ	—	—	—	—	
	104	773	G-8	IVa	須恵器	精緻	赤焼	同心円, ナデ	格子目タタキ	—	—	—	—	
	105	119 822	D-8 G-8	Ⅲ Ⅲ	須恵器	精緻	赤焼	平行タタキ, 同心円, ナデ	格子目タタキ	—	—	—	—	
	106	1375 1636	I-8 H-8	IVa IVa	須恵器	精緻	赤焼	平行タタキ, 同心円, ナデ	格子目タタキ	—	—	—	—	カキ目?
	107	1379	H-8	IVa	須恵器	精緻	赤焼	同心円→平行タタキ	格子目タタキ	—	—	—	—	
	108	1377 1498 1575 1581 1585 1766	H-8 H-8 G-8 ↓ ↓ ↓	IVa Ⅲ Ⅲ ↓ ↓ IVa	須恵器	精緻	赤焼	同心円	平行タタキ	—	—	—	—	赤
	109	1376	H-8	IVa	須恵器	精緻	赤焼	同心円	平行タタキ	—	—	—	—	

第18表 古代出土遺物観察表 3

挿図 No.	報告 No.	取上No.	出土区	層位	器種	胎土	焼成	調整(内)	調整(外)	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	高台 (cm)	備考
66	110	1966	F-11	Ⅲ	須恵器	精緻	赤焼	平行タタキ→同心円,ナデ	平行タタキ	—	—	—	—	
	111	1633	I-8	IVa	須恵器	精緻	赤焼	同心円→平行タタキ	平行タタキ	—	—	—	—	
	112	1384	H-8	IVa	須恵器	精緻	赤焼	同心円→平行タタキ	平行タタキ	—	—	—	—	
	113	388	F-9	Ⅲ	須恵器	精緻	赤焼	同心円→平行タタキ	平行タタキ	—	—	—	—	
	114	249	E-7	Ⅲ	須恵器	精緻	赤焼	平行タタキ	平行タタキ	—	—	—	—	
	115	1585	G-8	Ⅲ	須恵器	精緻	赤焼	平行タタキ	平行タタキ	—	—	—	—	
	116	1729	G-9	Ⅲ	須恵器	精緻	赤焼	平行タタキ	平行タタキ	—	—	—	—	
	117	839	G-8	Ⅲ	須恵器	精緻	赤焼	平行タタキ	平行タタキ	—	—	—	—	
		1625	↓	↓										
	118	587	G-8	Ⅲ	須恵器	精緻	赤焼	平行タタキ→ナデ	平行タタキ	—	—	—	—	
		936	G-8	IVa										
	119	1527	H-8	IVa	須恵器	精緻	赤焼	平行タタキ	平行タタキ	—	—	—	—	
	120	112	D-8	Ⅲ	須恵器	精緻	赤焼	平行タタキ→ナデ	平行タタキ	—	—	—	—	
	121	一括	H-7	—	須恵器	精緻	赤焼	平行タタキ	平行タタキ	—	—	—	—	
	122	1586	G-8	Ⅲ	須恵器	精緻	赤焼	平行タタキ	平行タタキ	—	—	—	—	
		1838	G-8	IVa										
	123	一括	G-8	IVa	須恵器	精緻	赤焼	平行タタキ	平行タタキ	—	—	—	—	
	124	1585	G-8	Ⅲ	須恵器	精緻	赤焼	平行タタキ	平行タタキ	—	—	—	—	
		1708	↓	↓										
67	125	一括	G-9	—	須恵器	精緻	堅緻	ナデ	ナデ	—	—	—	—	
	126	903	G-9	IVa	須恵器	精緻	堅緻	ナデ	ナデ	—	—	—	—	
	127	746	G-9	Ⅲ	須恵器	精緻	堅緻	ナデ	ナデ,釉	—	—	—	—	胴部径19.8cm
	128	118	D-8	Ⅲ	須恵器	精緻	堅緻	同心円,ナデ	平行タタキ	—	—	—	—	
	129	516	G-9	Ⅲ	須恵器	精緻	軟質	同心円	格子目タタキ	—	—	—	—	
	130	3090	G-9	Ⅲ	須恵器	精緻	軟質	平行タタキ→同心円	平行タタキ	—	—	—	—	
	131	一括	G-9	Ⅲ	焼塩	精緻	軟質	—	—	—	—	—	—	礫
	132	3031	G-9	Ⅲ	焼塩	精緻	軟質	—	—	—	—	—	—	礫
	133	一括	H-7	—	焼塩	精緻	軟質	—	—	—	—	—	—	礫
	134	242	F-7	Ⅲ	焼塩	精緻	軟質	—	—	—	—	—	—	
	135	1630	I-8	IVa	焼塩	精緻	軟質	—	—	—	—	—	—	礫
	136	477	F-9	IVa	焼塩	精緻	硬質	—	—	—	—	—	—	礫
		3088	G-9	Ⅲ										
	137	1910	I-7	IVa	焼塩	精緻	硬質	—	—	—	—	—	—	礫
	138	1394	H-8	Ⅲ	土師質	精緻	軟質	平行タタキ	格子目タタキ	—	—	—	—	
	139	1964	G-11	Ⅲ	土師質	精緻	軟質	ナデ	格子目タタキ	—	—	—	—	
	140	一括	G-9	—	東播系須恵	精緻	硬質	タタキ?	ナデ	—	—	—	—	
	141	387	F-9	Ⅲ	東播系須恵	精緻	硬質	ナデ	ナデ	—	—	—	—	砂, 礫
	142	609	G-8	Ⅲ	東播系須恵	精緻	硬質	ナデ	ナデ	—	—	—	—	砂, 礫
	143	一括	—	—	とりべ	精緻	良	ケズリ, 指頭痕, 工具ナデ	ケズリ, 指頭痕, 工具ナデ	—	—	—	—	内面溶解, 砂, 礫
	144	3099	G-9	Ⅲ	とりべ	精緻	良	ナデ	ケズリ, 指頭痕, 工具ナデ	—	—	—	—	内面溶解, 砂, 礫
	145	3067	G-9	Ⅲ	とりべ	精緻	良	ナデ	ケズリ, 指頭痕, 工具ナデ	26	21.4	11.1	—	内面溶解, 砂, 礫
	146	3100	G-9	Ⅲ	とりべ	精緻	良	ナデ	ケズリ, 指頭痕, 工具ナデ	—	—	—	—	砂, 礫
68	147	一括	H-7	—	紡錘車	精緻	良	内黒, ミガキ	ナデ	—	—	—	—	土師碗底部加工
	148	1574	G-8	IVa	鉄塊系	—	—	—	—	—	—	—	—	
	149	685	G-9	Ⅲ	鉄塊系	—	—	—	—	—	—	—	—	

第18表 古代出土遺物観察表 3 (石器)

挿図No.	報告No.	取上No.	出土区	層位	器種	石材	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大高(cm)	重量(g)	備考
68	150	487	D-9	IVa	砥石	SA	9.8	8.1	3.6	463	

分析方法

蛍光X線分析

エネルギー分散型蛍光X線分析装置(堀場製作所製XGT-1000, X線管球ターゲット:ロジウム, X線照射径100 μ m)を使用した。

分析条件は、次のとおりである。

照 射 径:100 μ m 測定時間:100s

X線管電圧:50kV 電 流:700 μ A

定量補正法:スタンダードレス

XGT径	100 μ m	測定時間	100s
X線管電圧	50kV	電流	700 μ A
パルス処理時間	P 3		
X線フィルタ	なし	試料セル	なし
定量補正法	スタンダードレス		

元 素	ライン	質量濃度[%]	3 σ [%]	強度[cps/mA]
14Siけい素	K	7.5	0.85	24.78
20Caカルシウム	K	0.16	0.05	5.08
25Mnマンガン	K	2.36	0.12	158.61
26Fe鉄	K	89.98	0.83	5855.81

6 まとめ

1 縄文時代早期

縄文早期に該当する遺物は、個々の出土量が、極めて少なく、それぞれが単体或いは数個体での出土である。このことは全時期を通じてとも言え、土器型式毎に生活拠点として展開した様子は見られない。また、遺構からも見受けられ、縄文時代早期の集石は、全体的に礫数が少なく散在した形態を呈するものが多い。同時期では、永磯遺跡、供養之元遺跡、前原和田遺跡、高篠坂遺跡、九養岡遺跡、本報告書掲載の唐尾遺跡、中之迫遺跡で同様な状況が見受けられる。上野原遺跡や城ヶ尾遺跡、桐木耳取遺跡のように各時期の土器型式が網羅され生活拠点として使用された遺跡の周辺に、一時的に利用される遺跡が存在しているかのようである。

・遺構

縄文時代早期の遺構は、落とし穴3基、集石13基が検出されている。落とし穴は、Ⅸ層で検出された。埋土にP-13が含まれ、1号落とし穴は逆茂木痕を1つ伴っている。この時期の落とし穴は、東九州自動車道関連の桐木耳取遺跡で3基、関山遺跡で19基が薩摩火山灰層の上面より検出されている。桐木耳取遺跡の2号落とし穴状遺構は、底面の中央に逆茂木痕を1つ伴ない、平面形が楕円形で、上方に開く形状の断面を呈しており、形状が本遺跡1号落とし穴に酷似している。

集石は、緩やかに傾斜する微高地の尾根上に位置し、散在した形態を呈するものが多い。同様な集石の配置状況と形態が九養岡遺跡で見られ、谷を望む台地縁辺部の土地利用が伺える。

・遺物

Ⅰ類土器は、口縁部が直行し、直線的に平底の底部にいたる円筒土器で、早期前葉の岩本式土器である。Ⅰ類土器は、平坦な口唇端部にキザミ目を施し、口縁部に押し引き文を施す特徴がある。

岩本式土器は、口唇部内面に段を有し、口唇端部に深いキザミ目を施し小波状を呈するもの。口唇部がわずかに内湾して舌状を呈し、外側にキザミ目を施すもの。口唇部が平坦で、口唇部外側にキザミ目を施すものがあり、器面調整は、貝殻腹縁による丁寧な条痕、又は、繊維状の調整具による丁寧な仕上げが行われるものである。

これら岩本式の特徴とⅠ類土器とを比較すると、共通性と類似点が見られ、口縁部文様体に押し引き文を施すものが、西俣遺跡から出土していることから、岩本式土器の範疇に比定される。Ⅰ類土器と同様な器形及び施文の特徴をもつものに水迫式Ⅱ類土器がある。出土状況は、岩本式土器包含層の下層にあたる薩摩火山灰の混在層からの出土とされている。本遺跡内でのⅠ類土器の平面及び垂直（層位）分布の状況は、薩摩火山灰層の上層（Ⅷ層）からの出土で、後述するⅡ類・Ⅲ類土器と近接した

状況である。前述したとおり本遺跡では、個々の出土量が極めて少なく、限られた検証しかできないため、今後の類例を期待したい。

Ⅱ類土器は、前平式土器に比定される角筒土器である。本遺跡内での分布域は、東側のC-10区に限られる。

Ⅲ類土器は、加栗山式土器に比定される。本遺跡内での分布域がC-8～10区・18・19区の東側に限られ、Ⅰ類・Ⅱ類・Ⅳ類土器と近接した状況を示している。

Ⅳ類土器は、吉田式土器に比定され、本遺跡内での分布域が南端のC-18・19区に限られ、Ⅲ類土器と近接した出土状況を示す。

Ⅴ類土器は、石坂式土器に比定され、器形、施文の特徴から4つのパターンが示される。

Ⅵ類土器は、下剥峯式土器に比定され、胴部に、貝殻刺突文を施すものと、貝殻条線文を施すものに分けられる。5個又は6個体が出土している。

Ⅶ類土器は、押型文土器を包括した。変形撚糸文土器は、近年、東九州自動車道関係の発掘調査で出土例が増加しており、桐木耳取遺跡で良好な資料が出土している。また、関山遺跡では、大型の変形撚糸文土器の中に、赤色顔料の入った小型の変形撚糸文土器が入れ子状に入った資料が出土している。

楕円押型文土器の底部には、明瞭な網代痕が認められ、4本の経条と緯条を2つ越え2つ潜り1つ送りの綾編みにした網代を用いている。押型文土器の底部に同様な圧痕の残るものが、石打遺跡・車坂第3遺跡・山下第1遺跡・天ヶ城遺跡・木脇遺跡・関山西遺跡にあり、山形押型文を施すものに多く見られる。

Ⅷ類土器は、円筒形条痕文土器で、2個体が出土しており、1個体は2号集石内出土のものと接合し、底部側面の接合痕が明瞭で、土器制作状況の解る資料である。

Ⅸ類土器は、小破片のため全体の器形は不明であるが、胴部に貝殻条痕が施され、内面がナデ調整であることから、塞ノ神B式土器或いは苦浜式土器の可能性はある。

2 縄文時代中期

縄文時代中期の落とし穴は、アカホヤ火山灰層上面で6基検出された。埋土は御池火山灰の軽石である。底面から逆茂木痕が確認されたものは5基で、うち3基は、逆茂木を挿し換えた痕跡が解る資料であった。これらの落とし穴は、埋土の共通性と、形状、逆茂木痕などから同時期に使用された可能性が高い。落とし穴は、北側の谷状地形に配置され、長軸方向が傾斜に直行するものが4基、平行が1基であることから、北側の谷を意識した計画的な配置が伺える。

3 縄文時代後期・晩期

後期に該当するものは、Ⅹ類土器が、宮崎県南部から

大隅半島に見られる綾式土器の範疇に比定される。凹線文を口縁部付近に集約させ、胎土中に、細かな軽石を多く含む特徴がある。

XⅠ類土器は、指宿式土器の範疇に比定される。桐木耳取遺跡に見られるものと同様で、施文が口縁部付近に集約される。

晩期に該当するものは、XⅡ類土器で黒川式土器の範疇に比定できる。小型の深鉢型土器の胴部の屈曲部は上方に付く。

4 古代

本遺跡の古代に該当する部分は、遺物・遺構の量的な情報量が少ないため、本遺跡同様に眺望の良いシラス台地上に立地する東九州自動車道関連の遺跡と対比させて考察したい。建物跡内に焼土跡を伴う遺跡は、高篠遺跡、財部城ヶ尾遺跡、踊場遺跡、桐木遺跡、唐尾遺跡があり、ほぼ建物中央部に焼土跡を1基以上伴い検出されている。

建物配置、建物規模から見ると、高篠遺跡は、建物主軸が南北をとるものが大半を占め、建物建て替えも同様である。建物の密集度が高く、配置にも高い規格性が伺え、出土している遺物からも律令的影響が伺える。財部城ヶ尾遺跡・踊場遺跡・桐木遺跡は、主軸の大半が東西で方位ではなく地形に規定要因が認められ建物は分散している。唐尾遺跡は南北を主軸に取り、建物密集の傾向が伺える。

建物規模については、高篠遺跡・桐木遺跡・唐尾遺跡が柱間190cm前後と規格性が伺え、踊場遺跡は、250cm前後と通常より大型で、総柱建物跡が検出されていることから宗教関連施設を想起させ、建物分散の傾向から他と異なる様相を示している。

本遺跡の建物跡は、建て替えにより主軸を南北から東西に換え重複させているが、1号建物跡の東側桁行の軸に2号建物跡の東側梁行を重ねていることから、2号建物跡が東側を基点に建て替えた事が伺え、主軸の向きだけでなく建物規模も含め、何らかの規制又は規格が存在していた可能性を指摘できる。

古代の遺物から見てみると、本遺跡の坏には「×」のヘラ書きのあるものが多く、同様なものが高篠遺跡からも出土している。また、「山」の刻書が出土しているが、金峰町白樫野古代火葬墓では、蔵骨器に伴って墓坑の四隅から「山」字を墨書した土器が4点出土し、鉄滓が供献されている。これらから、鍛冶関連の様相が伺える。

高篠遺跡では、遺跡内から多くの鍛冶関連遺物と鉄製品、多量の焼塩土器が多く出土している。踊場遺跡では、鍛冶関連遺物と刀子、焼塩土器が出土している。高篠遺跡は、砂鉄原料鉄を素材とした鍛器制作の鍛冶作業が想定され、踊場遺跡では、砂鉄系荒鉄の不純物除去や成分調整を行った精錬鍛冶が想定されている。高古塚遺跡で

出土した鍛冶関連遺物は、鉄塊系遺物2点と砥石1点、取瓶1個体に留まり鉄滓などの鍛冶関連遺物が出土していないため、焼土跡が鍛冶に関連するものであるかは明らかでない。だが、他遺跡との共通性から見て、遺跡内で鍛冶に関する作業を行っていた事は言えるであろう。

出土遺物から、時期は8世紀末から9世紀後半に想定される。

引用・参考文献

「小牧3A・岩本遺跡」(15)

「柿内遺跡・大園遺跡・西俣遺跡」(24)

「九日田遺跡・供養之元遺跡・前原和田遺跡」(36)

「城ヶ尾遺跡」(60)

「高篠坂遺跡・永磯遺跡」(61)

「九養岡遺跡・踊場遺跡・高篠遺跡」(71)

「財部城ヶ尾遺跡」(90)

「桐木耳取遺跡」(91)

前迫亮一「石坂式土器再考」『研究紀要 縄文の森から創刊号』

川口雅之「鹿児島県における古代の鍛冶遺構について」『研究紀要・年報縄文の森から第2号』

坂本佳代子・岩澤和徳・松田朝由「墨書土器の性格－鹿児島を例として」『研究紀要・年報縄文の森から第2号』

以上 鹿児島県立埋蔵文化財センター

「水迫遺跡」指宿市教育委員会

下山 寛・鎌田洋昭「水迫式土器の設定」『どきどき縄文さがけ展図録』指宿市考古博物館・時遊館COCOはしむれ

黒川忠広「南九州貝殻文系土器研究の現状と課題」『大河』第7号 大河同人

黒川忠広「南九州貝殻文系土器Ⅰ～鹿児島編～」南九州縄文研究会

黒川忠広「南九州貝殻文系土器Ⅱ～宮崎・熊本・大分編～」南九州縄文研究会

前迫満子・前迫亮一「南九州縄文土器の底部圧痕に関する覚え書き－縄文時代草創期・早期の資料集成」『鹿児島大学考古学研究室25周年記念論集』鹿児島大学考古学研究室25周年記念論集刊行会編

山下大輔「下剥峯式及び桑ノ丸式土器の再検討」『南九州縄文通信No.16』

堂込秀人「南九州縄文晩期土器の再検討－入佐式と黒川式の細分」『鹿児島考古31号』

中村和美「鹿児島県における古代の在地土器」『鹿児島考古31号』

宮下貴浩「白樫野古代火葬墓と製鉄遺物」『鹿児島考古34号』

放射性炭素年代測定結果報告書

(AMS測定)

高古塚遺跡

(株)加速器分析研究所

(1) 遺跡の位置

高古塚遺跡は、鹿児島県曽於市大隅町に所在する。

(2) 測定対象試料

測定対象試料は、D-9区の遺物No.142付着炭化物(9:IAAA-70410)、I-6区の遺物No.2011付着炭化物(10:IAAA-70411)、合計2点である。

(3) 化学処理工程

- 1) メス・ピンセットを使い、根・土等の表面的な不純物を取り除く。
- 2) AAA (Acid Alkali Acid) 処理。酸処理、アルカリ処理、酸処理により内面的な不純物を取り除く。最初の酸処理では1Nの塩酸(80℃)を用いて数時間処理する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。アルカリ処理では0.001Nの水酸化ナトリウム水溶液(80℃)を用いて数時間処理する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。最後の酸処理では1Nの塩酸(80℃)を用いて数時間処理した後、超純水で中性になるまで希釈し、90℃で乾燥する。希釈の際には、遠心分離機を使用する。
- 3) 試料を酸化銅1gと共に石英管に詰め、真空下で封じ切り、500℃で30分、850℃で2時間加熱する。
- 4) 液体窒素とエタノール・ドライアイスの温度差を利用し、真空ラインで二酸化炭素(CO₂)を精製する。
- 5) 精製した二酸化炭素から鉄を触媒として炭素のみを抽出(水素で還元)し、グラファイトを作製する。
- 6) グラファイトを内径1mmのカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、加速器に装着し測定する。

(4) 測定方法

測定機器は、3MVタンデム加速器をベースとした¹⁴C-AMS専用装置(NEC Pelletron 9SDH-2)を使用する。134個の試料が装填できる。測定では、米国国立標準局(NIST)から提供されたシュウ酸(HOx II)を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。また、加速器により¹³C/¹²Cの測定も同時に行う。

(5) 算出方法

- 1) 年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用し

た。

- 2) BP年代値は、過去において大気中の¹⁴C濃度が一定であったと仮定して測定された、1950年を基準年として遡る¹⁴C年代である。

- 3) 付記した誤差は、次のように算出した。

複数回の測定値について、 χ^2 検定を行い測定値が1つの母集団とみなせる場合には測定値の統計誤差から求めた値を用い、みなせない場合には標準誤差を用いる。

- 4) $\delta^{13}\text{C}$ の値は、通常は質量分析計を用いて測定するが、AMS測定の場合に同時に測定される $\delta^{13}\text{C}$ の値を用いることもある。

$\delta^{13}\text{C}$ 補正をしない場合の同位体比および年代値も参考に掲載する。

同位体比は、いずれも基準値からのずれを千分偏差(‰; パーミル)で表した。

$$\delta^{14}\text{C} = [(^{14}\text{A}_\text{S} - ^{14}\text{A}_\text{R}) / ^{14}\text{A}_\text{R}] \times 1000 \quad (1)$$

$$\delta^{13}\text{C} = [(^{13}\text{A}_\text{S} - ^{13}\text{A}_\text{PDB}) / ^{13}\text{A}_\text{PDB}] \times 1000 \quad (2)$$

ここで、

$^{14}\text{A}_\text{S}$: 試料炭素の¹⁴C濃度: (¹⁴C/¹²C)_Sまたは(¹⁴C/¹³C)_S

$^{14}\text{A}_\text{R}$: 標準現代炭素の¹⁴C濃度: (¹⁴C/¹²C)_Rまたは(¹⁴C/¹³C)_R

$\delta^{13}\text{C}$ は、質量分析計を用いて試料炭素の¹³C濃度($^{13}\text{A}_\text{S} = ^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$)を測定し、PDB(白亜紀のベレムナイト(矢石)類の化石)の値を基準として、それからのずれを計算した。但し、加速器により測定中に同時に¹³C/¹²Cを測定し、標準試料の測定値との比較から算出した $\delta^{13}\text{C}$ を用いることもある。この場合には表中に〔加速器〕と注記する。

また、 $\Delta^{14}\text{C}$ は、試料炭素が $\delta^{13}\text{C} = -25.0(\text{‰})$ であるとしたときの¹⁴C濃度($^{14}\text{A}_\text{N}$)に換算した上で計算した値である。(1)式の¹⁴C濃度を、 $\delta^{13}\text{C}$ の測定値をもとに次式のように換算する。

$$^{14}\text{A}_\text{N} = ^{14}\text{A}_\text{S} \times (0.975 / (1 + \delta^{13}\text{C}/1000))^2$$

($^{14}\text{A}_\text{S}$ として¹⁴C/¹²Cを使用するとき)

または

$$= ^{14}\text{A}_\text{S} \times (0.975 / (1 + \delta^{13}\text{C}/1000))$$

($^{14}\text{A}_\text{S}$ として¹⁴C/¹³Cを使用するとき)

$$\Delta^{14}\text{C} = [(^{14}\text{A}_\text{N} - ^{14}\text{A}_\text{R}) / ^{14}\text{A}_\text{R}] \times 1000(\text{‰})$$

貝殻などの海洋が炭素起源となっている試料については、海洋中の放射性炭素濃度が大気中の炭酸ガス中の濃度と異なるため、同位体補正のみを行った年代値は実際の年代との差が大きくなる。多くの場合、同位体補正をしない $\delta^{14}\text{C}$ に相当するBP年代値が比較的良好でその貝と同一時代のものと考えられる木片や木炭などの年代値と一致する。

^{14}C 濃度の現代炭素に対する割合のもう一つの表記として、pMC (percent Modern Carbon) がよく使われており、 $\Delta^{14}\text{C}$ との関係は次のようになる。

$$\Delta^{14}\text{C} = (\text{pMC}/100 - 1) \times 1000 \quad (\text{‰})$$

$$\text{pMC} = \Delta^{14}\text{C}/10 + 100 \quad (\%)$$

国際的な取り決めにより、この $\Delta^{14}\text{C}$ あるいはpMCにより、放射性炭素年代 (Conventional Radiocarbon Age; yrBP) が次のように計算される。

$$T = -8033 \times \ln [(\Delta^{14}\text{C}/1000) + 1]$$

$$= -8033 \times \ln (\text{pMC}/100)$$

5) ^{14}C 年代値と誤差は、1桁目を四捨五入して10年単位で表示される。

6) 校正暦年代の計算では、IntCal04データベース (Reimer et al 2004) を用い、OxCal v3.10校正プログラム (Bronk Ramsey 1995, Bronk Ramsey 2001, Bronk Ramsey, van der Plicht and Weninger 2001) を使用した。

(6) 測定結果

D-9区の遺物No.142付着炭化物 (9:IAAA-70410) の ^{14}C 年代が $3180 \pm 30 \text{ yrBP}$ 、I-6区の遺物No.2011付着炭化物 (10:IAAA-70411) の ^{14}C 年代が $8700 \pm 50 \text{ yrBP}$ である。暦年校正年代 ($1\sigma = 68.2\%$) は、9が $1495 \sim 1470 \text{ BC}$ (22.1%)・ $1465 \sim 1420 \text{ BC}$ (46.1%)、10が $7750 \sim 7600 \text{ BC}$ である。化学処理および測定内容に問題は無く、妥当な年代と考えられる。

参考文献

Stuiver M. and Polash H.A. 1977 Discussion: Reporting of ^{14}C data, Radiocarbon 19, 355-363
Bronk Ramsey C. 1995 Radiocarbon calibration and analysis of stratigraphy: the OxCal Program, Radiocarbon 37(2), 425-430
Bronk Ramsey C. 2001 Development of the Radiocarbon Program OxCal, Radiocarbon 43(2A), 355-363
Bronk Ramsey C., van der Plicht J. and Weninger B. 2001 'Wiggle Matching' radiocarbon dates, Radiocarbon 43(2A), 381-389

Reimer, P.J. et al. 2004 IntCal04 terrestrial radiocarbon age calibration, 0-26cal kyr BP, Radiocarbon 46, 1029-1058

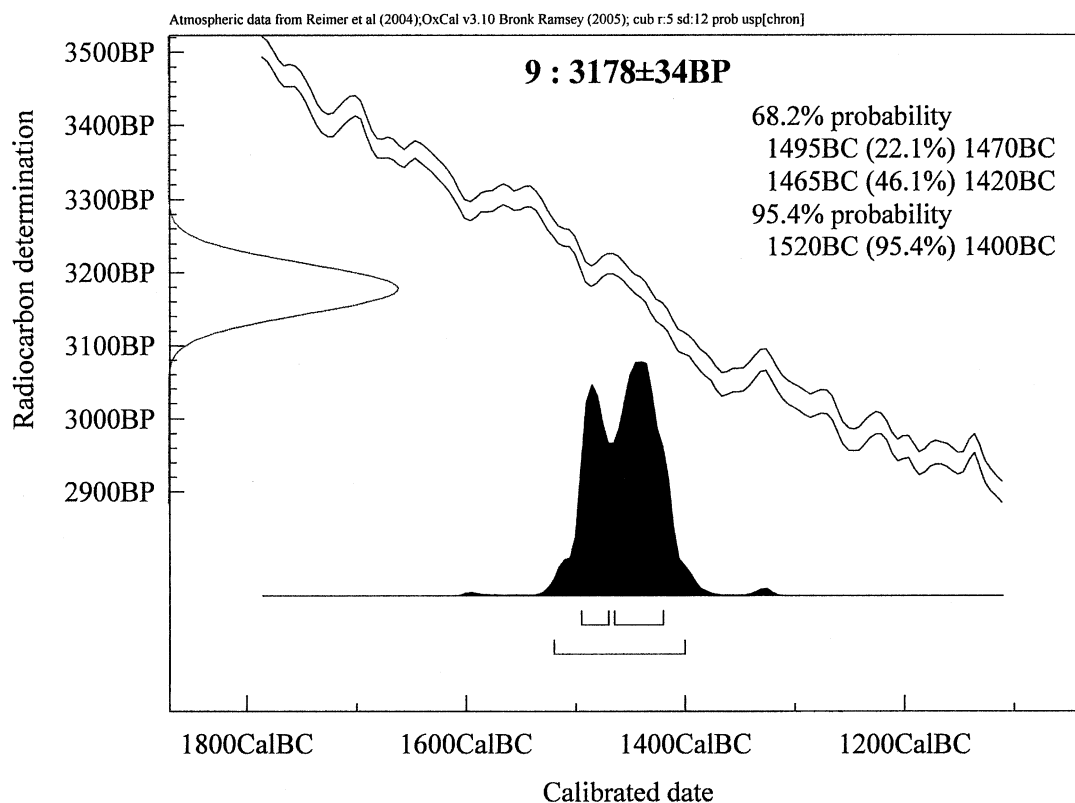
IAA Code No.	試料	BP 年代および炭素の同位体比
IAAA-70410	試料採取場所：曾於市大隅町 高古塚遺跡 試料形態：土器付着炭化物 試料名(番号)：9	Libby Age (yrBP) : 3,180 ± 30
		$\delta^{13}\text{C}(\text{‰})$, (加速器) = -21.47 ± 0.75
		$\Delta^{14}\text{C}(\text{‰})$ = -326.8 ± 2.8
		pMC (%) = 67.32 ± 0.28
#1774-1	(参考) $\delta^{13}\text{C}$ の補正無し	$\delta^{14}\text{C}(\text{‰})$ = -321.9 ± 2.7
		pMC (%) = 67.81 ± 0.27
		Age (yrBP) : 3,120 ± 30
IAAA-70411	試料採取場所：曾於市大隅町 高古塚遺跡 試料形態：土器付着炭化物 試料名(番号)：10	Libby Age (yrBP) : 8,700 ± 50
		$\delta^{13}\text{C}(\text{‰})$, (加速器) = -21.11 ± 0.71
		$\Delta^{14}\text{C}(\text{‰})$ = -661.4 ± 2.1
		pMC (%) = 33.86 ± 0.21
#1774-2	(参考) $\delta^{13}\text{C}$ の補正無し	$\delta^{14}\text{C}(\text{‰})$ = -658.7 ± 2.0
		pMC (%) = 34.13 ± 0.20
		Age (yrBP) : 8,640 ± 50

参考資料: 暦年較正用年代

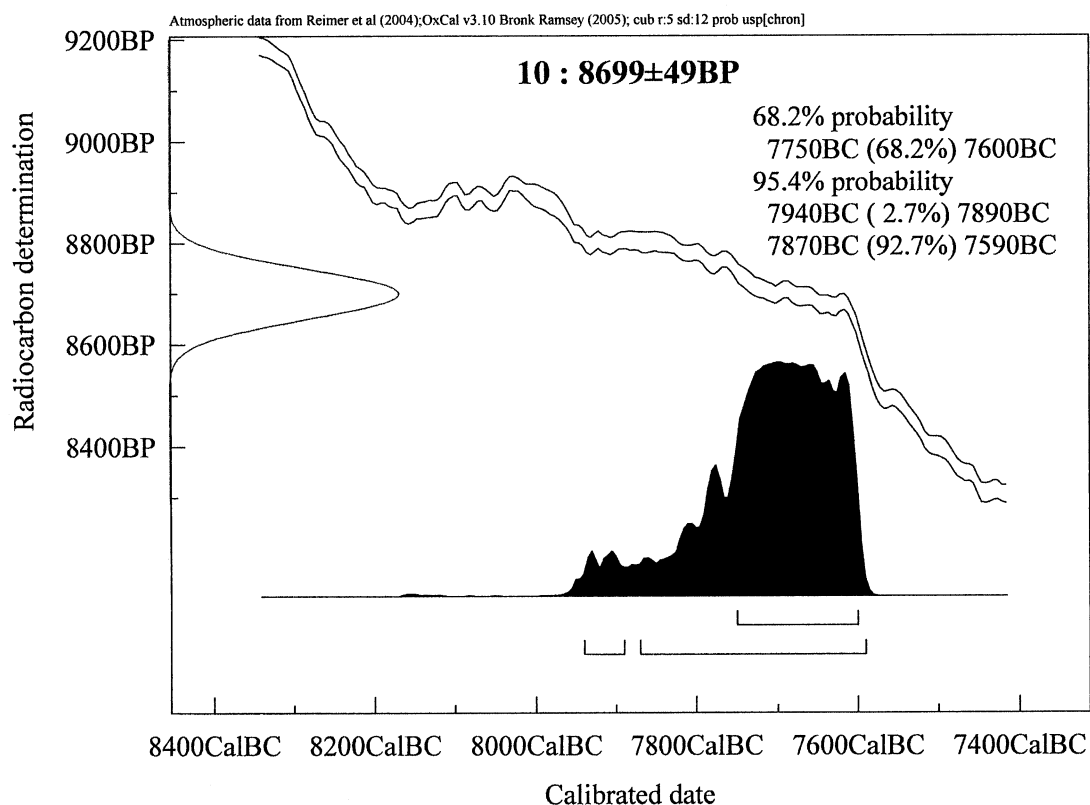
IAA Code No.	試料番号	Libby Age (yrBP)
IAAA-70410	9	3178 ± 34
IAAA-70411	10	8699 ± 49

ここに記載する Libby Age (年代値) と誤差は下 1 桁を丸めない値です。

【参考値：暦年補正 Radiocarbon determination】



【参考値：暦年補正 Radiocarbon determination】



放射性炭素年代測定結果報告書

(AMS測定)

高古塚遺跡

(株)加速器分析研究所

(1)測定対象試料

C-18区の遺構内から出土した炭化物No16 (IAAA-70824), F-7区の炭化物No17 (遺物No1135:IAAA-70825), 合計2点である。

(2) 化学処理工程

- 1) メス・ピンセットを使い, 根・土等の表面的な不純物を取り除く。
- 2) AAA (Acid Alkali Acid) 処理。酸処理, アルカリ処理, 酸処理により内面的な不純物を取り除く。最初の酸処理では1Nの塩酸(80℃)を用いて数時間処理する。その後, 超純水で中性になるまで希釈する。アルカリ処理では0.001~0.01Nの水酸化ナトリウム水溶液(80℃)を用いて数時間処理する。その後, 超純水で中性になるまで希釈する。最後の酸処理では1Nの塩酸(80℃)を用いて数時間処理した後, 超純水で中性になるまで希釈し, 90℃で乾燥する。希釈の際には, 遠心分離機を使用する。
- 3) 試料を酸化銅1gと共に石英管に詰め, 真空下で封じ切り, 500℃で30分, 850℃で2時間加熱する。
- 4) 液体窒素とエタノール・ドライアイスの温度差を利用し, 真空ラインで二酸化炭素(CO₂)を精製する。
- 5) 精製した二酸化炭素から鉄を触媒として炭素のみを抽出(水素で還元)し, グラファイトを作製する。
- 6) グラファイトを内径1mmのカソードにハンドプレス機で詰め, それをホイールにはめ込み, 加速器に装着し測定する。

(3) 測定方法

測定機器は, 3MVタンデム加速器をベースとした¹⁴C-AMS専用装置(NEC Pelletron 9SDH-2)を使用する。134個の試料が装填できる。測定では, 米国国立標準局(NIST)から提供されたシュウ酸(HOx II)を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。また, 加速器により¹³C/¹²Cの測定も同時に行う。

(4) 算出方法

- 1) 年代値の算出には, Libbyの半減期5568年を使用した。
- 2) BP年代値は, 過去において大気中の¹⁴C濃度が一定であったと仮定して測定された, 1950年を基準年とし

て遡る¹⁴C年代である。

- 3) 付記した誤差は, 次のように算出した。

複数回の測定値について, χ^2 検定を行い測定値が1つの母集団とみなせる場合には測定値の統計誤差から求めた値を用い, みなせない場合には標準誤差を用いる。

- 4) $\delta^{13}\text{C}$ の値は, 通常は質量分析計を用いて測定するが, AMS測定の場合に同時に測定される $\delta^{13}\text{C}$ の値を用いることもある。

$\delta^{13}\text{C}$ 補正をしない場合の同位体比および年代値も参考に掲載する。

同位体比は, いずれも基準値からのずれを千分偏差(‰; パーミル)で表した。

$$\delta^{14}\text{C} = [(^{14}\text{A}_\text{S} - ^{14}\text{A}_\text{R}) / ^{14}\text{A}_\text{R}] \times 1000 \quad (1)$$

$$\delta^{13}\text{C} = [(^{13}\text{A}_\text{S} - ^{13}\text{A}_\text{PDB}) / ^{13}\text{A}_\text{PDB}] \times 1000 \quad (2)$$

ここで,

$^{14}\text{A}_\text{S}$: 試料炭素の¹⁴C濃度: (¹⁴C/¹²C)_Sまたは(¹⁴C/¹³C)_S

$^{14}\text{A}_\text{R}$: 標準現代炭素の¹⁴C濃度: (¹⁴C/¹²C)_Rまたは(¹⁴C/¹³C)_R

$\delta^{13}\text{C}$ は, 質量分析計を用いて試料炭素の¹³C濃度($^{13}\text{A}_\text{S} = ^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$)を測定し, PDB(白亜紀のペレムナイト(矢石)類の化石)の値を基準として, それからのずれを計算した。但し, 加速器により測定中に同時に¹³C/¹²Cを測定し, 標準試料の測定値との比較から算出した $\delta^{13}\text{C}$ を用いることもある。この場合には表中に「加速器」と注記する。

また, $\Delta^{14}\text{C}$ は, 試料炭素が $\delta^{13}\text{C} = -25.0(\text{‰})$ であるとしたときの¹⁴C濃度($^{14}\text{A}_\text{N}$)に換算した上で計算した値である。(1)式の¹⁴C濃度を, $\delta^{13}\text{C}$ の測定値をもとに次式のように換算する。

$$^{14}\text{A}_\text{N} = ^{14}\text{A}_\text{S} \times (0.975 / (1 + \delta^{13}\text{C}/1000))^2$$

($^{14}\text{A}_\text{S}$ として¹⁴C/¹²Cを使用するとき)

または

$$= ^{14}\text{A}_\text{S} \times (0.975 / (1 + \delta^{13}\text{C}/1000))$$

($^{14}\text{A}_\text{S}$ として¹⁴C/¹³Cを使用するとき)

$$\Delta^{14}\text{C} = [(^{14}\text{A}_\text{N} - ^{14}\text{A}_\text{R}) / ^{14}\text{A}_\text{R}] \times 1000 \quad (\text{‰})$$

貝殻などの海洋が炭素起源となっている試料について

は、海洋中の放射性炭素濃度が大気中の炭酸ガス中の濃度と異なるため、同位体補正のみを行った年代値は実際の年代との差が大きくなる。多くの場合、同位体補正をしない $\delta^{14}\text{C}$ に相当するBP年代値が比較的よくその貝と同一時代のもと考えられる木片や木炭などの年代値と一致する。

^{14}C 濃度の現代炭素に対する割合のもう一つの表記として、pMC (percent Modern Carbon) がよく使われており、 $\Delta^{14}\text{C}$ との関係は次のようになる。

$$\Delta^{14}\text{C} = (\text{pMC}/100 - 1) \times 1000 \quad (\text{‰})$$

$$\text{pMC} = \Delta^{14}\text{C}/10 + 100 \quad (\%)$$

国際的な取り決めにより、この $\Delta^{14}\text{C}$ あるいはpMCにより、放射性炭素年代 (Conventional Radiocarbon Age; yrBP) が次のように計算される。

$$T = -8033 \times \ln[(\Delta^{14}\text{C}/1000) + 1]$$

$$= -8033 \times \ln(\text{pMC}/100)$$

5) ^{14}C 年代値と誤差は、1桁目を四捨五入して10年単位で表示される。

6) 較正暦年代の計算では、IntCal04データベース (Reimer et al 2004) を用い、OxCal v3.10較正プログラム (Bronk Ramsey1995, Bronk Ramsey 2001, Bronk Ramsey, van der Plicht and Weninger 2001) を使用した。

(5) 測定結果

C-18区の遺構内から出土した炭化物No16 (IAAA-70824) の ^{14}C 年代は $610 \pm 40 \text{ yrBP}$ 、F-7区の炭化物No17 (遺物No1135: IAAA-70825) の ^{14}C 年代は $3210 \pm 40 \text{ yrBP}$ である。暦年較正年代 ($1\sigma = 68.2\%$) は、No16が1300~1330AD (27.7%)・1335~1365AD (27.3%)・1380~1400AD (13.2%)、No17が1515~1440BCである。化学処理および測定内容に問題は無く、妥当な年代と考えられる。

参考文献

- Stuiver M. and Polash H.A. 1977 Discussion: Reporting of ^{14}C data, *Radiocarbon* 19, 355-363
- Bronk Ramsey C. 1995 Radiocarbon calibration and analysis of stratigraphy: the OxCal Program, *Radiocarbon* 37(2), 425-430
- Bronk Ramsey C. 2001 Development of the Radiocarbon Program OxCal, *Radiocarbon* 43 (2A), 355-363
- Bronk Ramsey C., van der Plicht J. and Weninger B. 2001 'Wiggle Matching' radiocarbon dates, *Radiocarbon* 43(2A), 381-389

Reimer, P.J. et al. 2004 IntCal04 terrestrial radiocarbon age calibration, 0-26cal kyr BP, *Radiocarbon* 46, 1029-1058

IAA Code No.	試料	BP 年代および炭素の同位体比
IAAA-70824 #1834-1	試料採取場所 : 鹿児島県 高古塚遺跡	Libby Age (yrBP) : 610 ± 40
	試料形態 : 炭化物	$\delta^{13}\text{C}(\text{‰})$, (加速器) = -25.17 ± 0.72
	試料名(番号) : 16	$\Delta^{14}\text{C}(\text{‰})$ = -72.9 ± 4.1
		pMC (%) = 92.71 ± 0.41
IAAA-70825 #1834-2 代替	(参考) $\delta^{13}\text{C}$ の補正無し	$\delta^{14}\text{C}(\text{‰})$ = -73.2 ± 3.9
		pMC (%) = 92.68 ± 0.39
		Age (yrBP) : 610 ± 30
IAAA-70825 #1834-2 代替	試料採取場所 : 鹿児島県 高古塚遺跡	Libby Age (yrBP) : 3,210 ± 40
	試料形態 : 炭化物	$\delta^{13}\text{C}(\text{‰})$, (加速器) = -26.28 ± 0.68
	試料名(番号) : 17	$\Delta^{14}\text{C}(\text{‰})$ = -329.8 ± 2.9
		pMC (%) = 67.02 ± 0.29
IAAA-70825 #1834-2 代替	(参考) $\delta^{13}\text{C}$ の補正無し	$\delta^{14}\text{C}(\text{‰})$ = -331.5 ± 2.8
		pMC (%) = 66.85 ± 0.28
		Age (yrBP) : 3,240 ± 30

参考

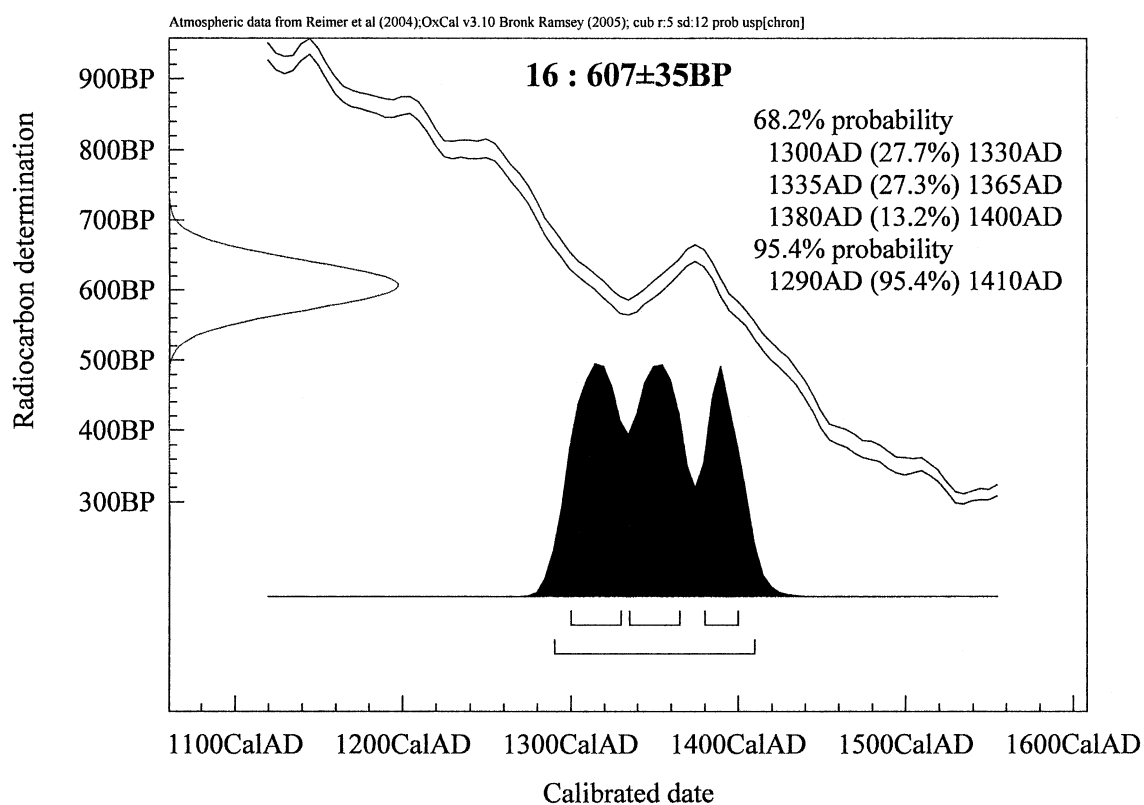
IAAA-70825に関しましては、代替試料を処理し測定した結果になります。

参考資料: 暦年較正用年代

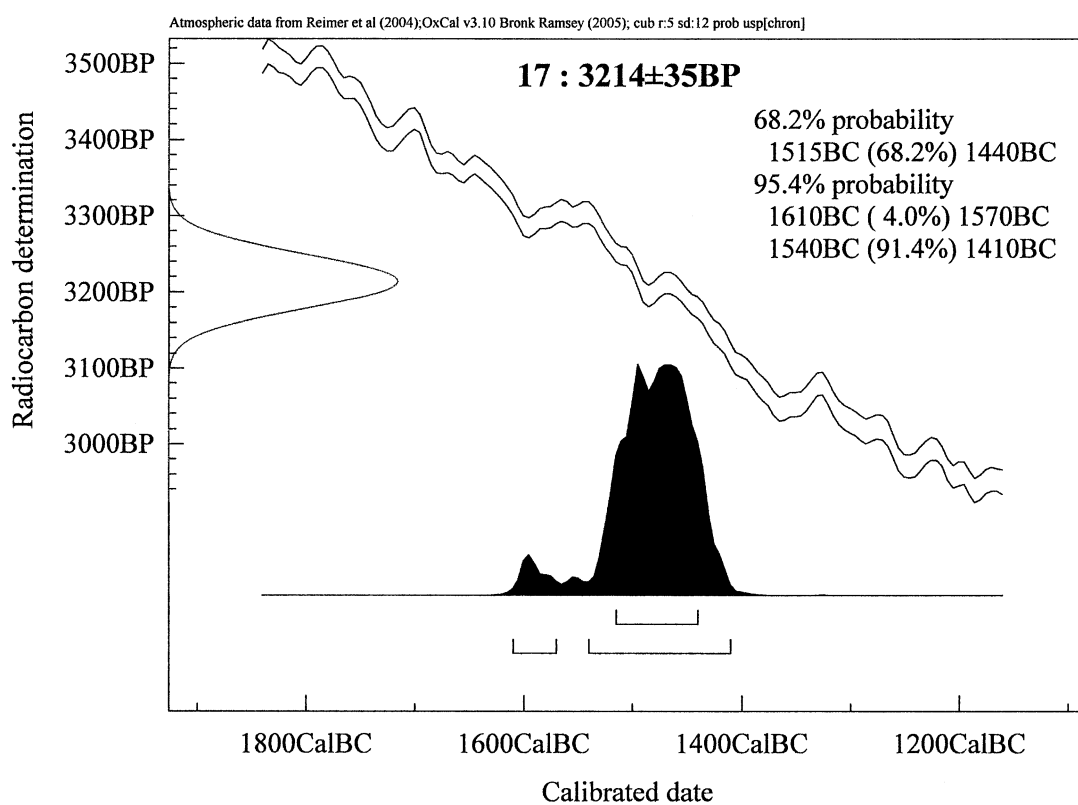
IAA Code No.	試料番号	Libby Age (yrBP)
IAAA-70824	16	607 ± 35
IAAA-70825	17	3214 ± 35

ここに記載するLibby Age (年代値) と誤差は下 1 桁を丸めない値です。

【参考値：暦年補正 Radiocarbon determination】



【参考値：暦年補正 Radiocarbon determination】



第3章 菅牟田・中之迫遺跡

第1節 発掘調査の概要

1 調査の概要

平成16年度に、菅牟田遺跡と中之迫遺跡の確認調査及び本調査を行った。

菅牟田遺跡

菅牟田遺跡は、遺跡の中央部分の町道を挟み、台地北側縁辺部と谷に挟まれた独立丘陵の南側に分かれる。

調査は、北側に5ヶ所、南側に1ヶ所のトレンチを設定し確認調査を行った。

調査の結果、良好な台地と思われた北側部分は、起伏に富み入り組んだ地形であったため、遺物、遺構は発見できなかった。また、南側も包含層が存在していなかったため、本調査にはおよばなかった。

調査は、平成16年5月17日から5月21日（実働3日）に実施した。調査経過については、日誌抄を持ってかえる。

2 調査の経過

菅牟田遺跡

日誌抄

5月17日～21日

- ・調査開始
- ・トレンチ設定（6箇所）掘り下げ（縄文～旧石器）
- ・遺物の出土なし、トレンチ位置図作成

中之迫遺跡

調査は、平成16年5月10日から7月27日（実働35日）に、確認・本調査を実施した。調査経過については、日誌抄を持ってかえる。

日誌抄

5月10日～28日

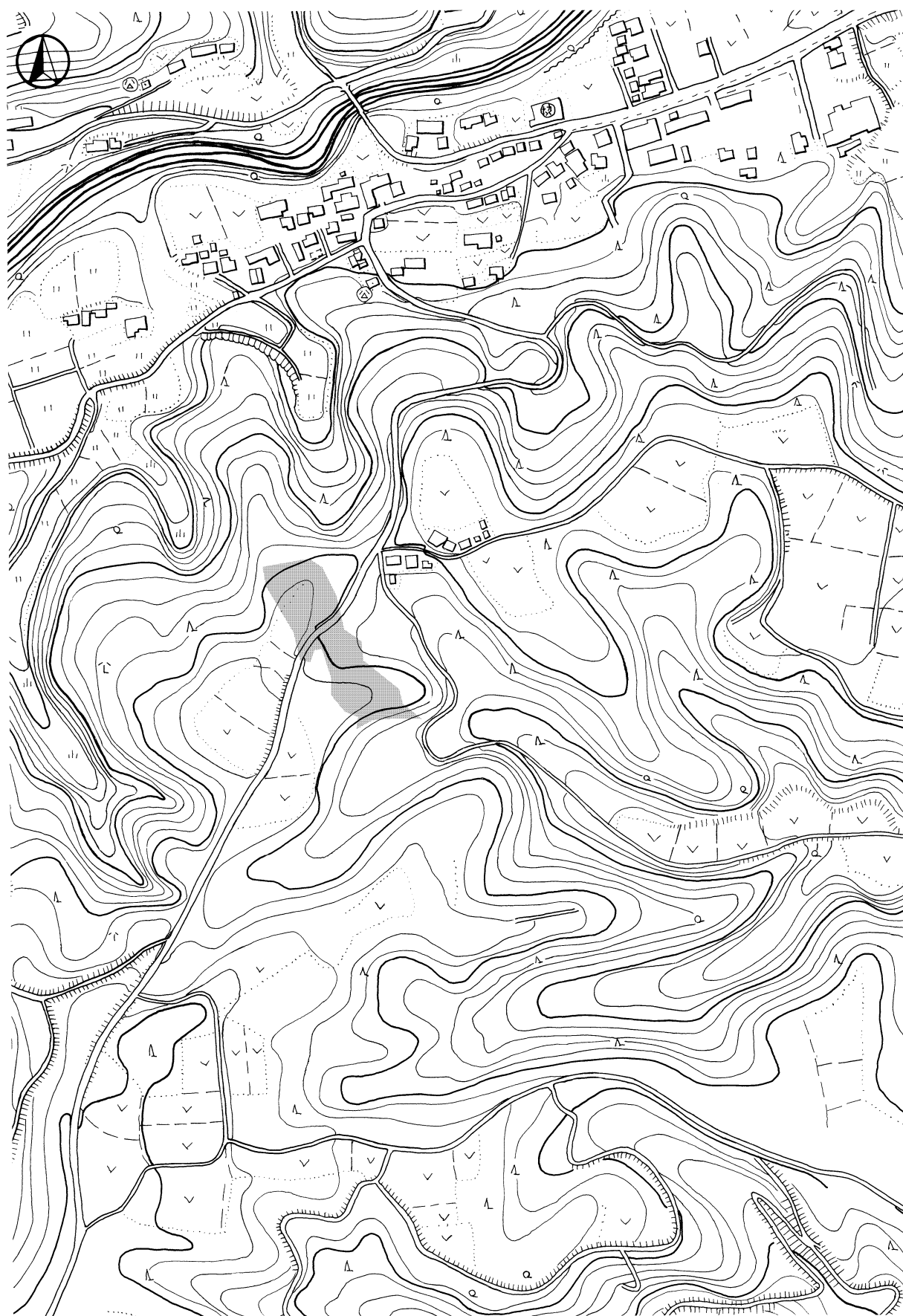
- ・調査開始（道路北側、工事用道路側から）
- ・トレンチ設定（5箇所）掘り下げ（縄文～旧石器）
- ・グリッド設定（杭打ち）
- ・E～G-4区Ⅴ～Ⅶ層掘り下げ、遺物取り上げ、土層断面実測（F-4区、G-5区）

6月1日～28日

- ・F-3～4区出土状況写真撮影、遺物取り上げ
- ・G-4～5区コンタ図作成
- ・土層断面実測（G-5区）
- ・EF-5～7区Ⅶ、Ⅷ層掘り下げ
- ・F-4区コンタ図作成
- ・B～D-4～7区Ⅳ、Ⅴ層掘り下げ、遺物取り上げ
- ・C-5区遺物出土状況写真撮影

7月5日～27日

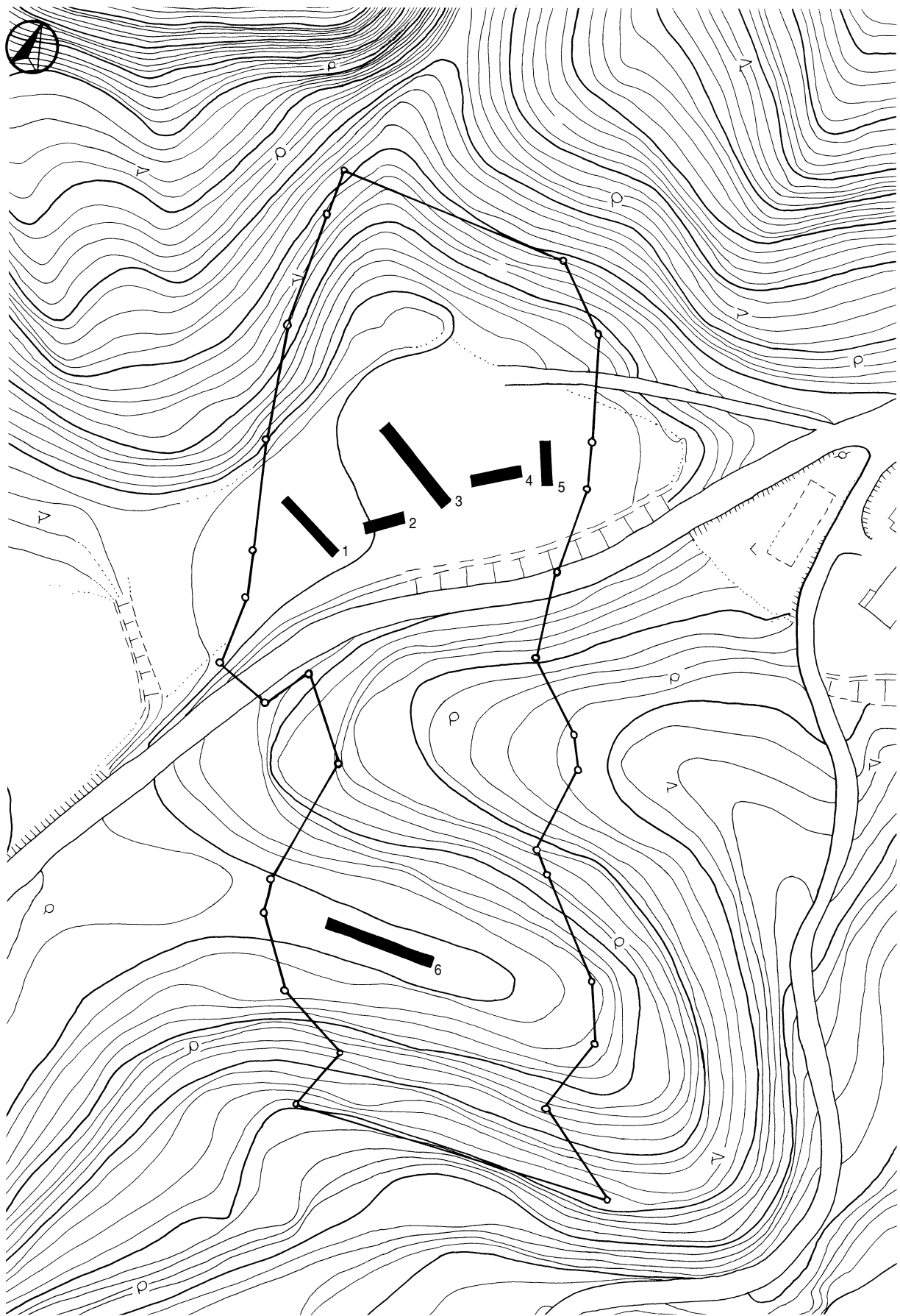
- ・B～D-4～7区Ⅳ、Ⅴ、Ⅶ、Ⅷ層掘り下げ、遺物取り上げ
- ・道路南側トレンチ設定、掘り下げ
- ・土層断面実測（D、E-4区）
- ・埋め戻し



第1図 菅牟田遺跡周辺地形図1 (1 : 5,000)



第2図 菅牟田遺跡周辺地形図2 (1 : 2,000)



第3図 菅牟田遺跡トレンチ配置図 (1 : 1,000)



第4図 中之迫遺跡周辺地形図1 (1:5,000)



第5図 中之迫遺跡周辺地形図2 (1:2,000)



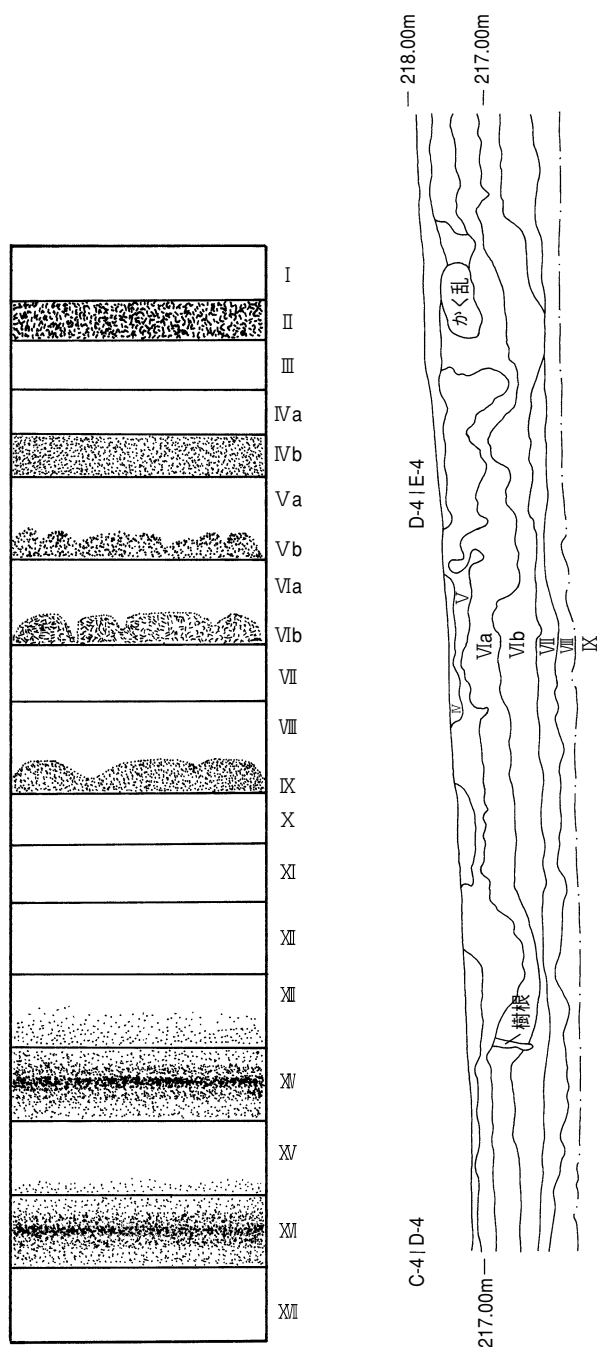
第6図 中之迫遺跡グリッド配置及びトレンチ配置図 (1 : 1,000)

3 遺跡の層位

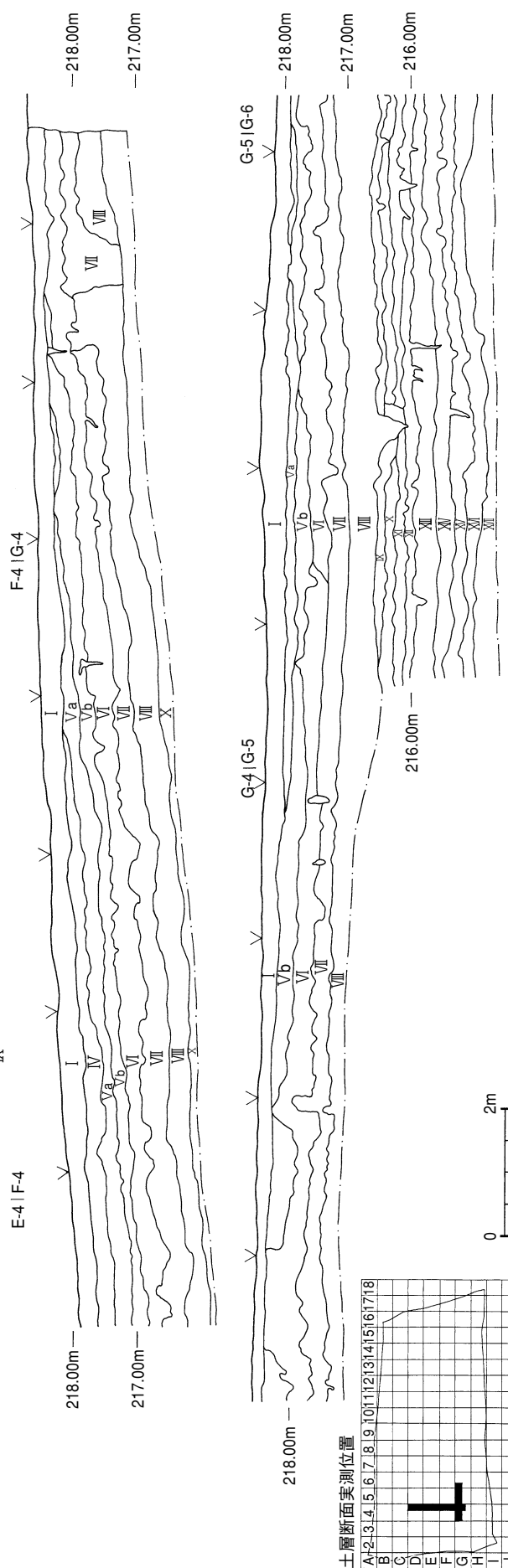
遺跡の層状

菅牟田遺跡・中之迫遺跡の層状は、曾於市末吉町と財部町に所在する桐木・耳取遺跡に準じた。各層位についての詳細は、高古塚遺跡編に記載した。

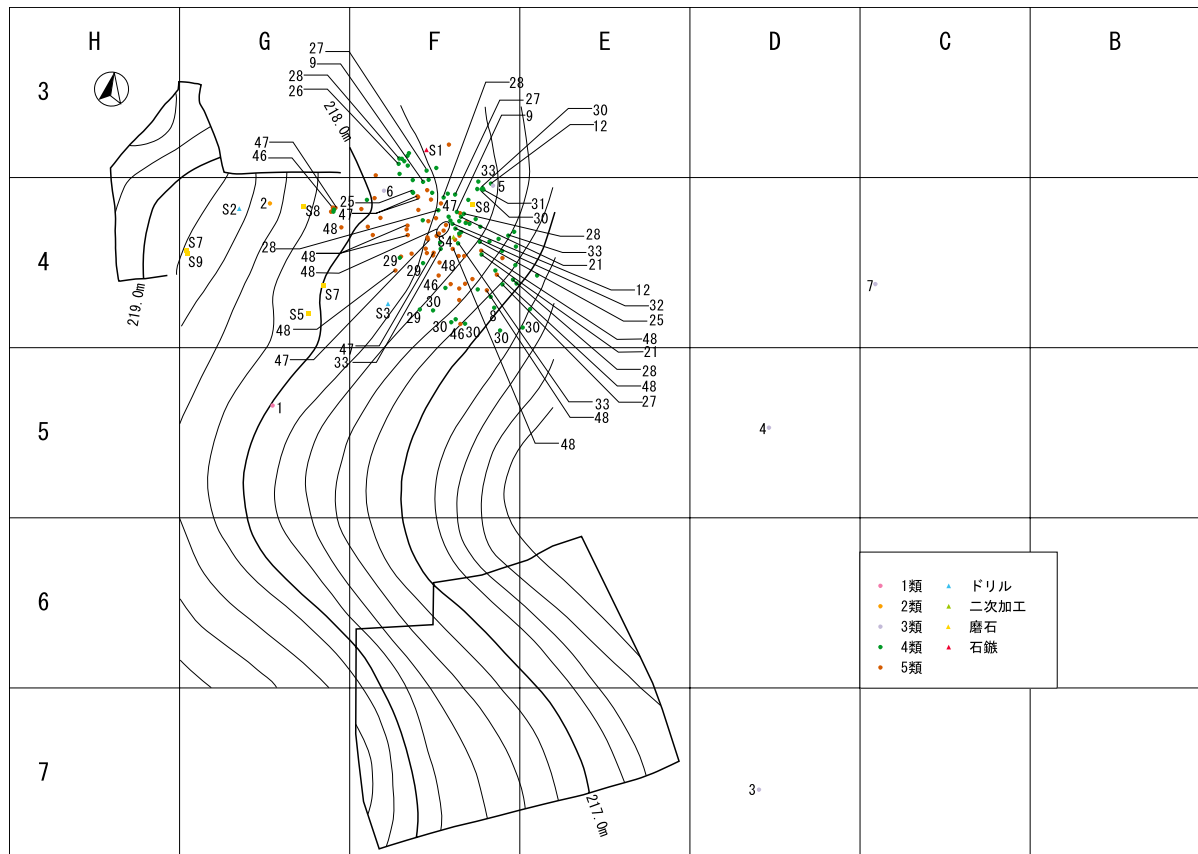
中之迫遺跡は、上位の層が削平を受けていたため、表土下は、Ⅳ層であった。Ⅴb層のアカホヤ火山灰とⅥb層は、整然とした堆積が確認できたが、Ⅸ層薩摩火山灰は、調査区が傾斜地であったためか、断面にわずかに確認できる程度であった。



第7図 基本土層柱状模式図



第8図 土層断面実測図



第9図 VIII層～VIa層遺物出土状況図

第2節 発掘調査の成果

1 縄文時代早期の調査

縄文時代早期の調査は、確認調査で遺物の出土が判明したC～H-3～7区で10m四方のグリッドを設定し、発掘調査を行った。

IX層（サツマ火山灰層）上面の地形は、遺跡の西側（H-3区）から東方向（E-3～7区）に谷状に下る地形である。調査区から遺構は、検出されなかった。

遺物は、傾斜面のE～G-4区に集中して出土し、包含層はⅦ層が中心である。（第9図）

・遺物（土器）（第10～13図No.1～48）

縄文時代早期に該当する土器は総数133点出土した。これら全ての土器の型式分類及び細別を行い、Ⅰ類～Ⅴ類の類型として分類し、図化不可能な小破片を除き84点、48個を本報告書に掲載した。

Ⅰ類土器（第10図No.1）

Ⅰ類土器は、Ⅶ層より1点出土した。器形的特徴は、口縁部から平底の底部まで直線的にいたる円筒形深鉢形土器である。施文の特徴は、内径し平坦面を呈する口唇部にヘラ状工具でキザミ目を施し、口縁部に横位の刺突を2条施す。胴部は横位の貝殻条痕を施す土器で、内面はナデ調整である。

Ⅱ類土器（第10図No.2）

Ⅱ類土器は、Ⅶ層より1点出土した。器形的特徴は、口縁部が外反し、胴部から平底の底部まで直線的にいたる円筒形深鉢形土器である。施文の特徴は、平坦面を呈する口唇部にキザミ目を施し、口縁部には、横位の貝殻刺突文を3条施す。胴部は縦位の貝殻刺突文を施す土器で、内面は丁寧なナデ調整である。

Ⅲ類土器（第10図No.3～7）

Ⅲ類土器は、口縁部に貝殻刺突文、胴部に貝殻条痕を綾杉状に施す円筒形深鉢形土器でⅦ層を中心に出土した。No.3～7は胴部で、No.3は、口縁部下の横位の貝殻刺突文が見られ、内面は丁寧にナデられている。No.4, 6は外面の条痕が不明瞭である。No.5は、貝殻条痕が明瞭で、No.7は、綾杉状の条痕が明瞭で、内面に横方向のナデ調整が施される。

Ⅳ類土器（第11, 12図No.8～No.33）

器形的特徴は、口縁部が内湾し、平口縁を呈しバケツ形の器形で、口縁部内面が肥厚し、口唇部は平坦面を呈し内傾する。施文の特徴は、口縁部から胴部に、短沈線を横位と斜位に施し、斜位の短沈線は羽状に施される。No.29, 30は、横位の短沈線間に斜位の短沈線を施し区画性が見られる。No.30～33の胴部下部から底部にいたる部



第10図 I 類～Ⅲ類土器実測図

位は無文である。No33は厚手の平底で側面の接合痕がC形に明瞭で、底部側面に粘土紐を貼り付けて胴部を立ち上げる状況が見られる。内面調整は、No9の口縁部内面は、ミガキに近い丁寧なナデ調整が施されているが、No10以下の胴部からNo33の底部まで、工具痕が残るナデ調整である。胎土中には、雲母と砂礫が多く含まれている。

V 類土器（第13図No34～No48）

V 類土器は、縄文時代早期で無文のものを包括した。器形的特徴は、口縁部が直行し、胴部から平底の底部に直線的にいたる器形である。

No34は平口縁で、口唇部は平坦面を呈し、内外の両端部に細かなキザミ目を施す。器面調整は、両面とも工具によるナデ調整で、胎土は、精選され、焼成も良く堅緻である。

No35～48は、同一の個体で、平口縁で、内傾する口唇部は平坦面を呈する。口縁部内面が肥厚し、一部が剥落している。胴部から底部は薄く仕上げ、器面調整は、両面ともナデ調整である。胎土中には砂礫を多く含む。

・遺物（石器）（第14, 15図S1～9）

縄文時代早期に該当する土器は総数22点出土した。図化不可能な小剥片を除き、9点を本報告書に掲載した。

石鏃（第14図S1）

頁岩を用いた石鏃で、左側縁の基部を欠損する。整形剥離が両面から施されるが、体部が厚手である。

石錐（第14図S2, 3）

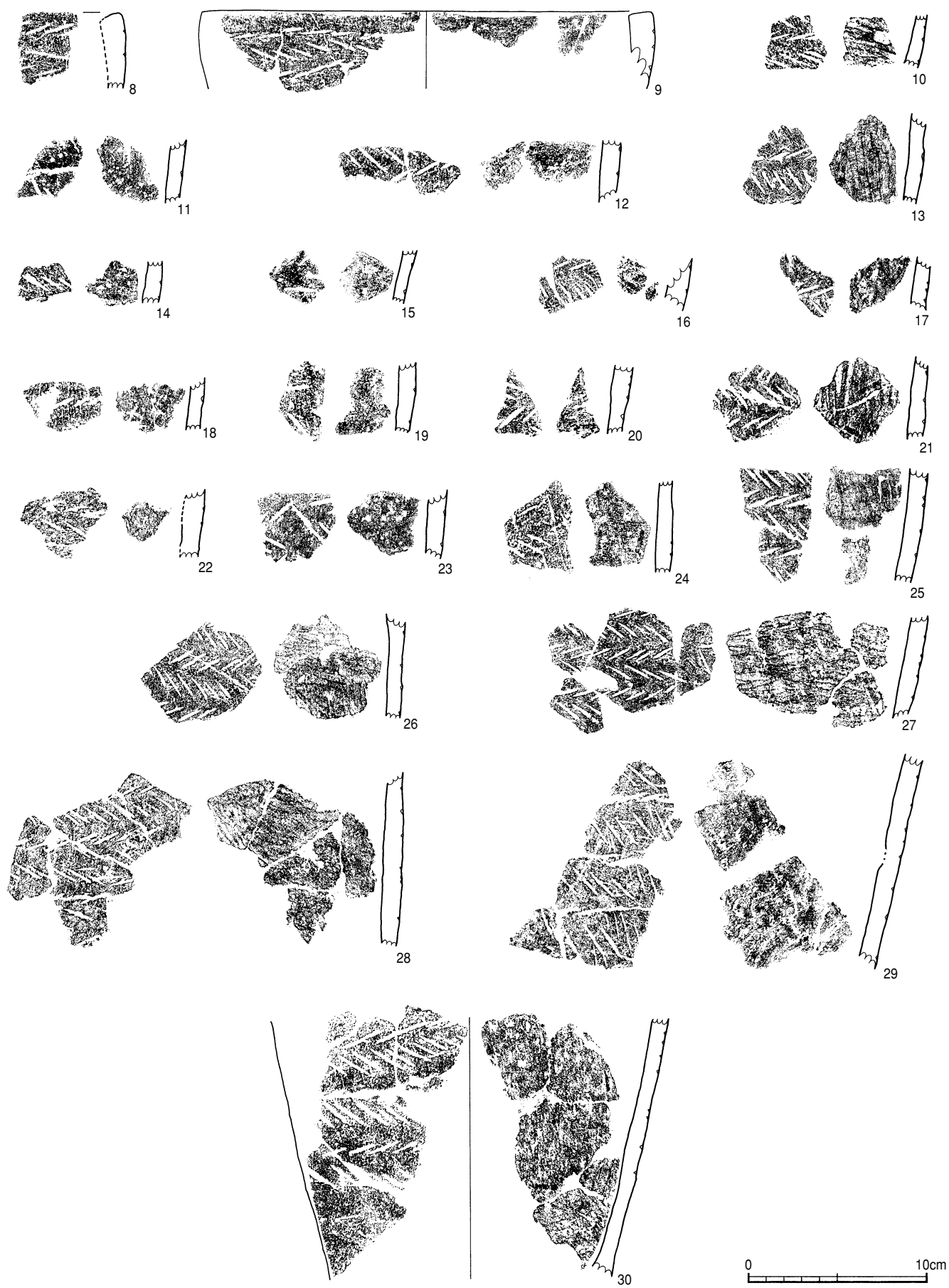
S2は、チャートを用いたもので、先端部に剥離が施されるが未完成品である。S3は、厚手の頁岩を用いたもので、両面から整形剥離が施され、先端部が尖る。

二次加工剥片（第14図S4）

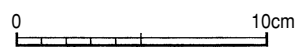
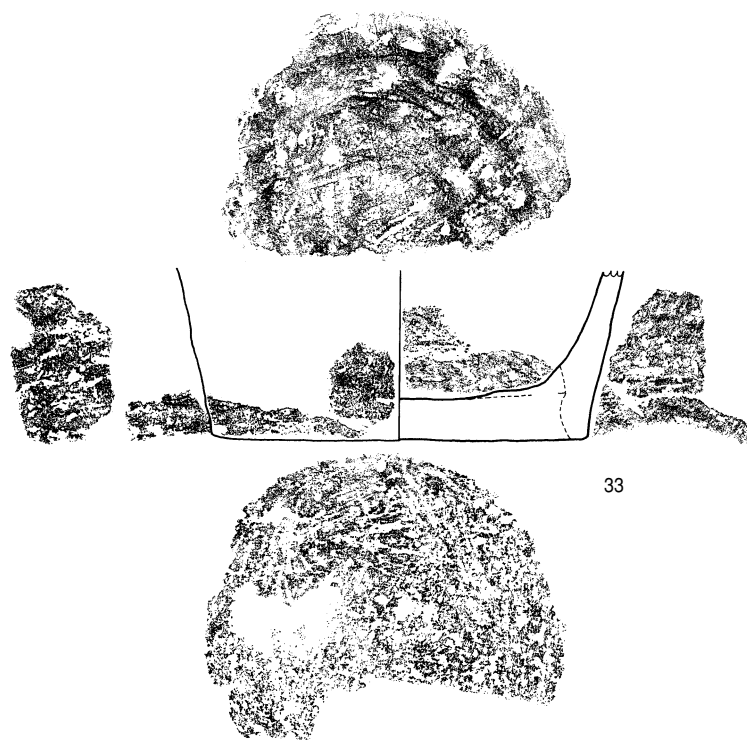
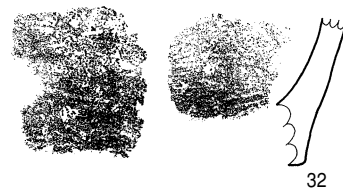
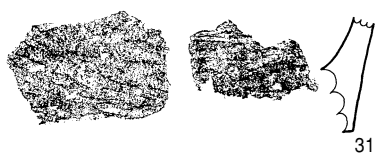
黒曜石の横長剥片の縁部に二次加工が認められる。

磨石・敲石（第14, 15図S5～S9）

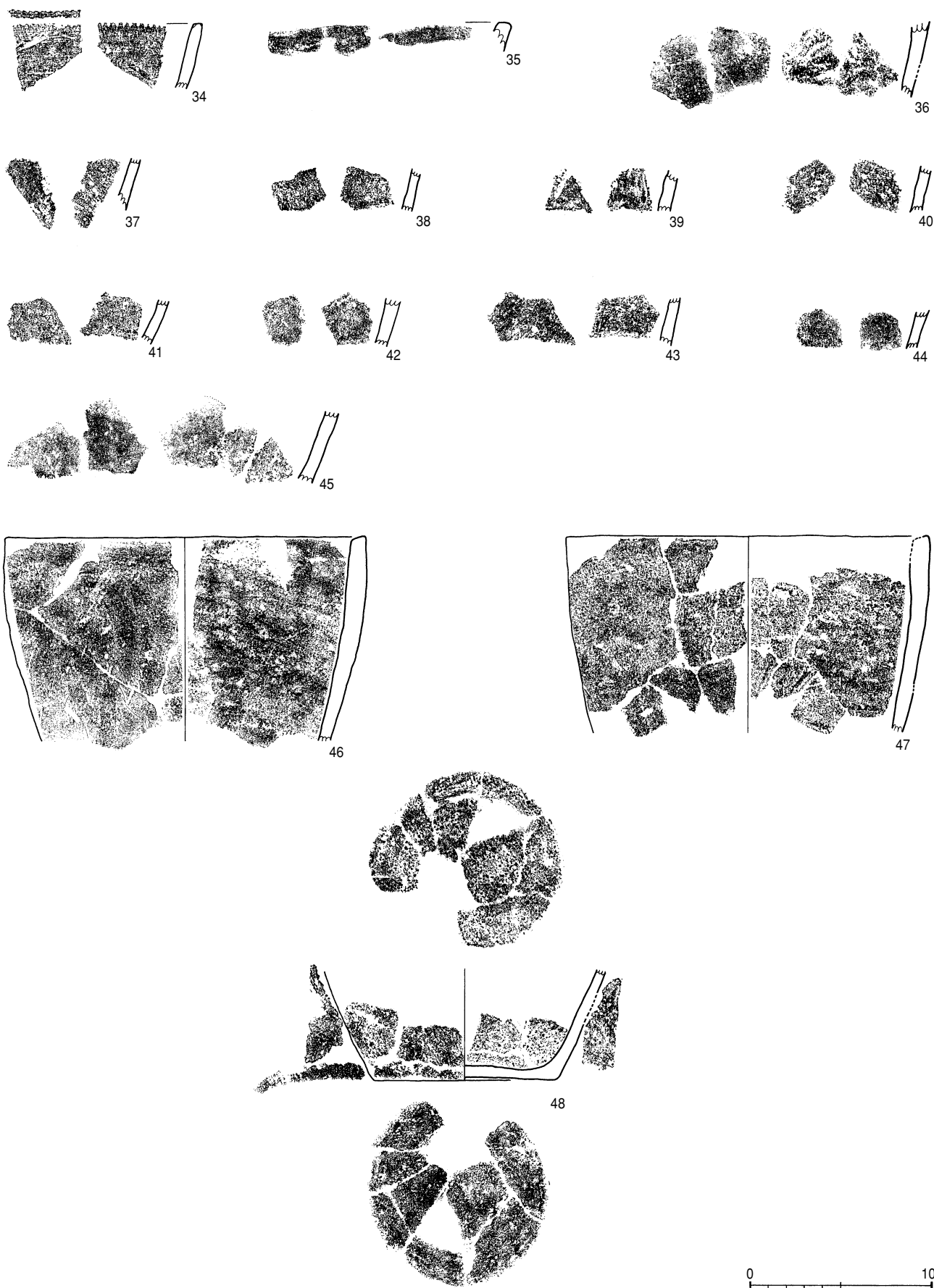
S5～S8は輝石安山岩を用いたもので、S5は、敲打痕が明瞭である。S6～S9は摩耗による平滑面が認められる。S8は、側縁に細かな敲打が施され面取りがなされている。S9は砂岩を用いたものである。



第11図 IV類土器実測図 1



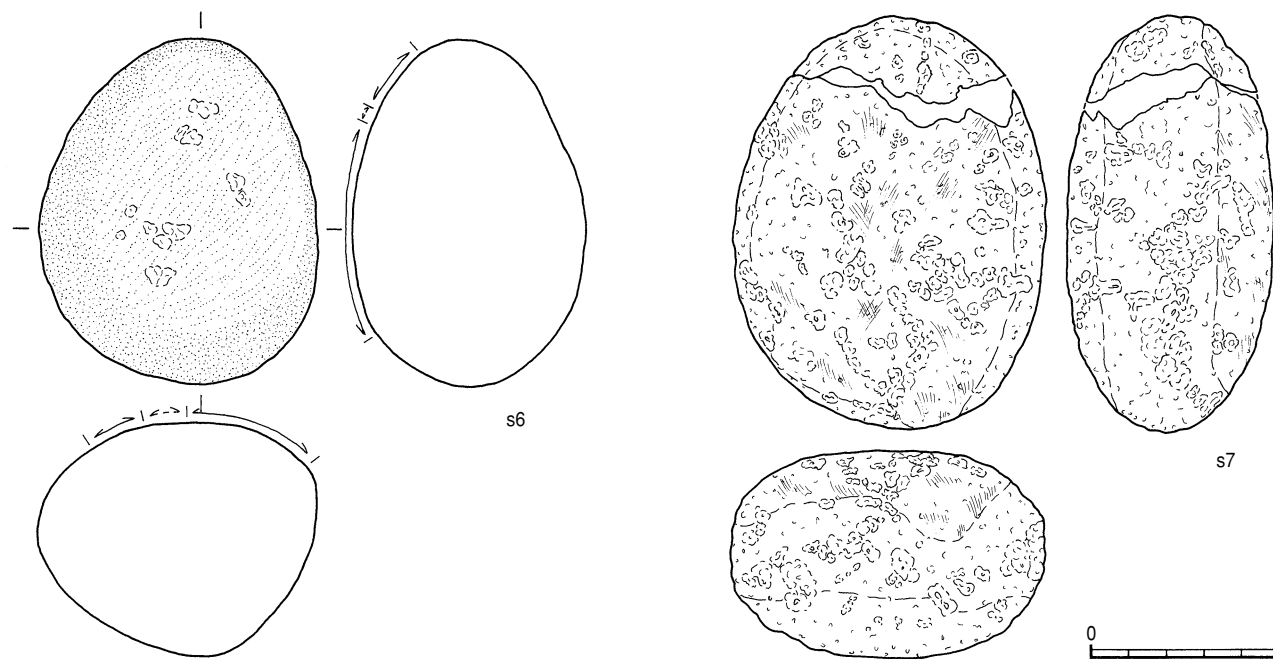
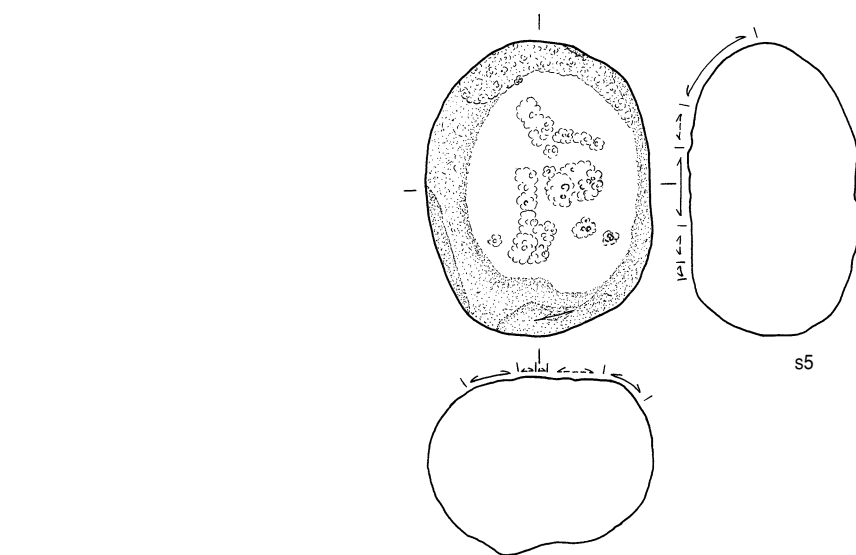
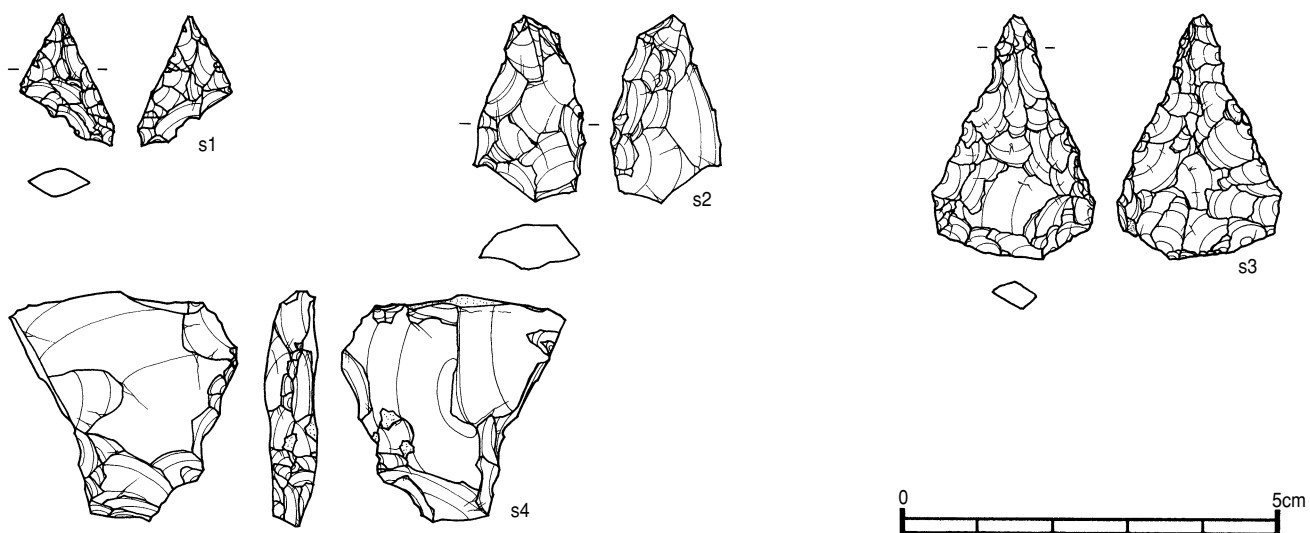
第12図 IV類土器実測図 2



第13図 V類土器実測図

第1表 I類～V類土器観察表

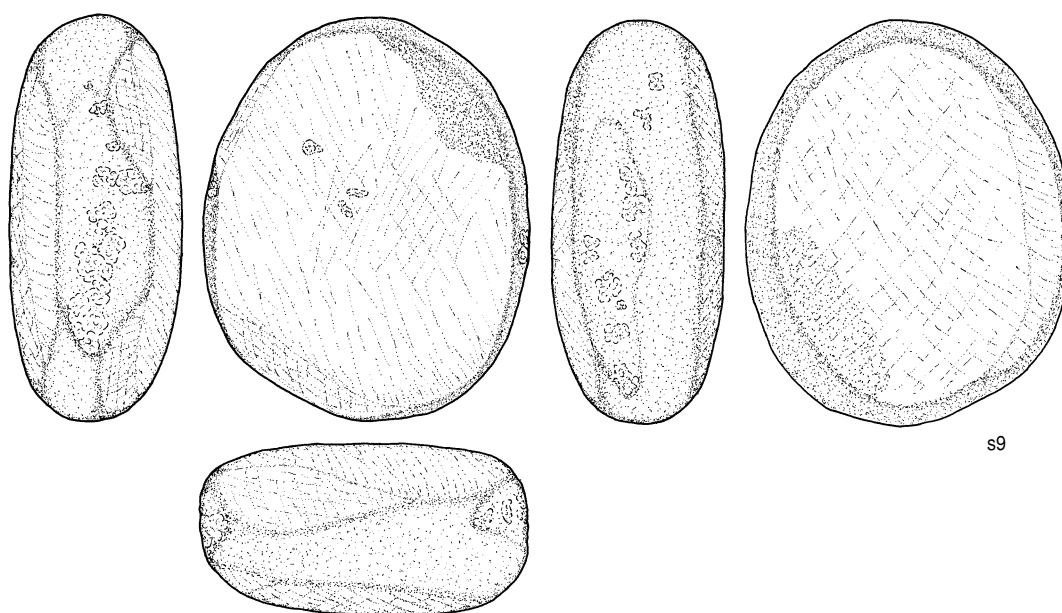
挿図No.	報告No.	取上No.	出土区	層位	分類	器種	外面調整	内面調整	胎土	備考
10	1	180	G-5	Ⅶ	1	深鉢	貝殻条痕	ナデ	石,長,角	口縁キザミ
	2	95	G-4	Ⅶ	2	深鉢	貝殻刺突	ナデ	石,長,砂,礫	
	3	268	D-7	Ⅶ	3	深鉢	貝殻条痕,貝殻刺突	ナデ	長,砂	
	4	236	D-5	Va	3	深鉢	ナデ	ナデ	石,長	
	5	65	F-4	Ⅶ	3	深鉢	貝殻条痕	ナデ	石,長,角,砂	
	6	73	F-4	Ⅶ	3	深鉢	貝殻条痕	ナデ	石,長,角,輝,砂	
	7	266	C-4	Ⅶ	3	深鉢	貝殻条痕	ナデ	石,長,角,輝,砂	
11	8	15	F-4	Ⅵa	4	深鉢	沈線	ナデ	長,雲,砂	
	9	132	F-4	Ⅶ	4	深鉢	沈線	ナデ	石,長,雲,砂	
		151	↓	↓						
	10	48	F-4	Va	4	深鉢	沈線	ナデ	長,雲,砂	
	11	16	F-4	Va	4	深鉢	沈線	ナデ	長,雲,砂	
	12	41	F-4	Ⅶ	4	深鉢	沈線	ナデ	石,長,雲,砂	
		66	↓	↓						
	13	164	F-3	Ⅶ	4	深鉢	沈線	ナデ	長,雲,砂	
	14	10	F-4	Ⅵa	4	深鉢	沈線	ナデ	長,雲,砂	
	15	156	F-4	Ⅶ	4	深鉢	沈線	ナデ	長,雲,砂	
	16	67	F-4	Ⅶ	4	深鉢	沈線	ナデ	長,雲,砂	
	17	133	F-4	Ⅶ	4	深鉢	沈線	ナデ	長,雲,砂	
	18	145	F-3	Ⅶ	4	深鉢	沈線	ナデ	長,雲,砂	
		147	F-4	↓						
	19	9	F-4	Ⅵa	4	深鉢	沈線	ナデ	長,雲,砂	
	20	18	F-4	Ⅶ	4	深鉢	沈線	ナデ	石,長,雲,角,砂	
	21	49	F-4	Ⅶ	4	深鉢	沈線	ナデ	長,雲,砂	
		59	↓	↓						
	22	175	F-3	Ⅶ	4	深鉢	沈線	ナデ	長,雲,砂	
	23	70	F-4	Va	4	深鉢	沈線	ナデ	長,雲,角,砂	
	24	3	F-4	Ⅶ	4	深鉢	沈線	ナデ	石,長,雲,角,砂	
	25	61	F-4	Ⅶ	4	深鉢	沈線	ナデ	石,長,雲,角,砂	
		148	↓	↓						
	26	176	F-3	Ⅶ	4	深鉢	沈線	ナデ	長,雲,角,砂	
	27	153	F-3	Ⅶ	4	深鉢	沈線	ヘラナデ	長,雲,砂	
		14	F-4	↓						
		155	↓	↓						
	28	4	F-4	Ⅵa	4	深鉢	沈線	ナデ	長,雲,角,砂	
		69	↓	↓						
		131	↓	↓						
		134	↓	↓						
		181	F-3	Ⅶ						
	29	112	F-4	Ⅶ	4	深鉢	沈線	ナデ	長,雲,角,砂	
		123	↓	↓						
		177	↓	↓						
	30	113	F-4	Ⅶ	4	深鉢	沈線	ナデ	長,雲,砂	
		116	↓	↓						
		118	↓	↓						
		120	↓	↓						
		121	E-4	↓						
		157	F-4	↓						
		167	↓	↓						
12	31	158	F-4	Ⅶ	4	深鉢	工具によるナデ	ナデ,指おさえ	石,長,雲,砂	
	32	50	F-4	Ⅶ	4	深鉢	工具によるナデ	ナデ,指おさえ	石,長,雲,砂	
	33	8	F-4	Ⅶ	4	深鉢	ナデ	ナデ	長,雲,砂	
		55	↓	↓						
13	34	一括	-	Ⅶ	5	深鉢	工具によるナデ	ナデ	長,角	
	35	102	G-4	Ⅶ	5	深鉢	ナデ	剥落	長,雲,砂	
	36	102	G-4	Ⅶ	5	深鉢	ナデ	ナデ	長,雲,砂	
	37	171	F-4	Ⅶ	5	深鉢	ナデ	ナデ	長,雲,砂	
	38	44	F-4	Ⅶ	5	深鉢	ナデ	ナデ	長,雲,砂	
	39	141	F-4	Ⅶ	5	深鉢	ナデ	ナデ	長,雲,砂	
	40	20	F-4	Ⅵa	5	深鉢	ナデ	ナデ	長,雲,砂	
	41	35	F-4	Ⅶ	5	深鉢	ナデ	ナデ	長,雲,砂	
	42	71	F-4	Ⅶ	5	深鉢	ナデ	ナデ	石,長,雲,砂	
	43	32	F-4	Ⅶ	5	深鉢	ナデ	ナデ	長,雲,砂	
	44	75	F-4	Ⅵa	5	深鉢	ナデ	ナデ	長,雲,砂	
	45	43	F-4	Ⅶ	5	深鉢	ナデ	ナデ	長,雲,砂	
		136	↓	↓						
	46	33	F-4	Ⅶ	5	深鉢	ナデ	ナデ	石,長,雲,砂	
		117	↓	↓						
	47	103	G-4	↓						
		34	F-4	Ⅶ	5	深鉢	ナデ	ナデ	長,雲,輝,砂	
		38	↓	↓						
		104	G-4	↓						
		135	F-4	↓						
		149	↓	↓						
		166	↓	↓						
	48	13	F-4	Ⅶ	5	深鉢	ナデ	ナデ	長,雲,砂	
		17	↓	Ⅵa						
		40	↓	Ⅶ						
		46	↓	↓						
		56	↓	↓						
		60	↓	Ⅵa						
		107	G-4	Ⅶ						
		122	F-4	↓						
		128	↓	↓						
		129	↓	↓						
		169	↓	↓						
		170	↓	↓						



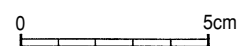
第14図 VIII層～VIa層出土石器実測図1



s8



s9



第15図 VIII層～VIa層出土石器実測図2

第 2 表 VII層出土石器觀察表

挿図No.	報告No.	取上No.	出土区	層位	器種	石材	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備考
14	1	162	F-3	VII	石鏃	SH	1.6	1.15	0.15	0.55	
	2	94	G-4	VII	石錐	CH	6.3	6.7	1.2	2.03	
	3	111	F-4	VII	石錐	SH	4.5	4.05	1	3.8	
	4	76	F-4	VII	剥片	OB	2.1	2.6	0.65	6.48	
	5	110	G-4	VII	磨石	KAN	11.4	10.3	6.5	1005	
	6	183	G-5	VII	磨石	KAN	10.2	7.9	4.5	450	
	7	80	G-4	VII	磨石	KAN	7.1	6.9	4.2	295	
		109	↓	↓							
15	8	97	G-4	VII	磨石	KAN	4.1	3.7	3.4	70	
		130	F-4	↓							
	9	81	G-4	VII	磨石	SA	7.2	5.9	5	290	

H	G	F	E	D	C	B
3						
4						
5						
6						
7						

第16図 Va層遺物出土状況図

2 縄文時代前期の調査

縄文時代前期の調査は、確認調査で遺物の出土が判明したB～E-4～6区で調査を行った。

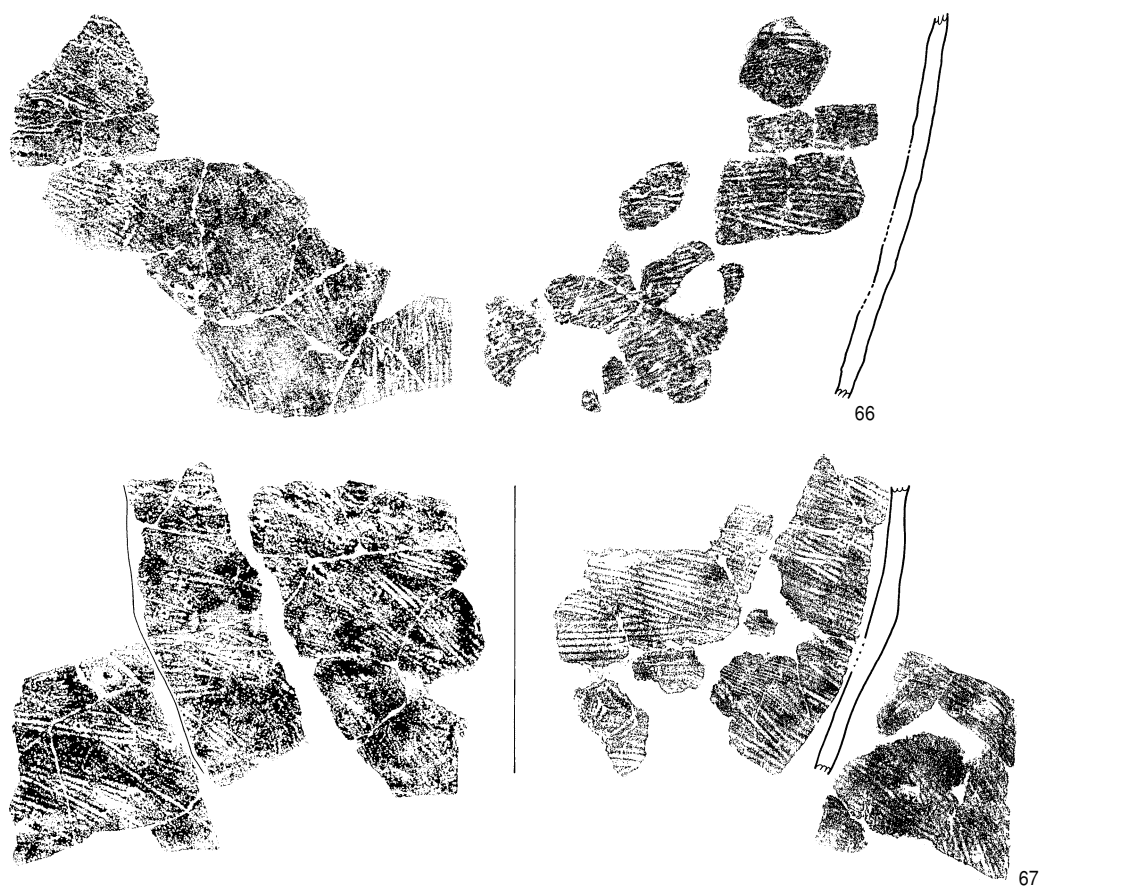
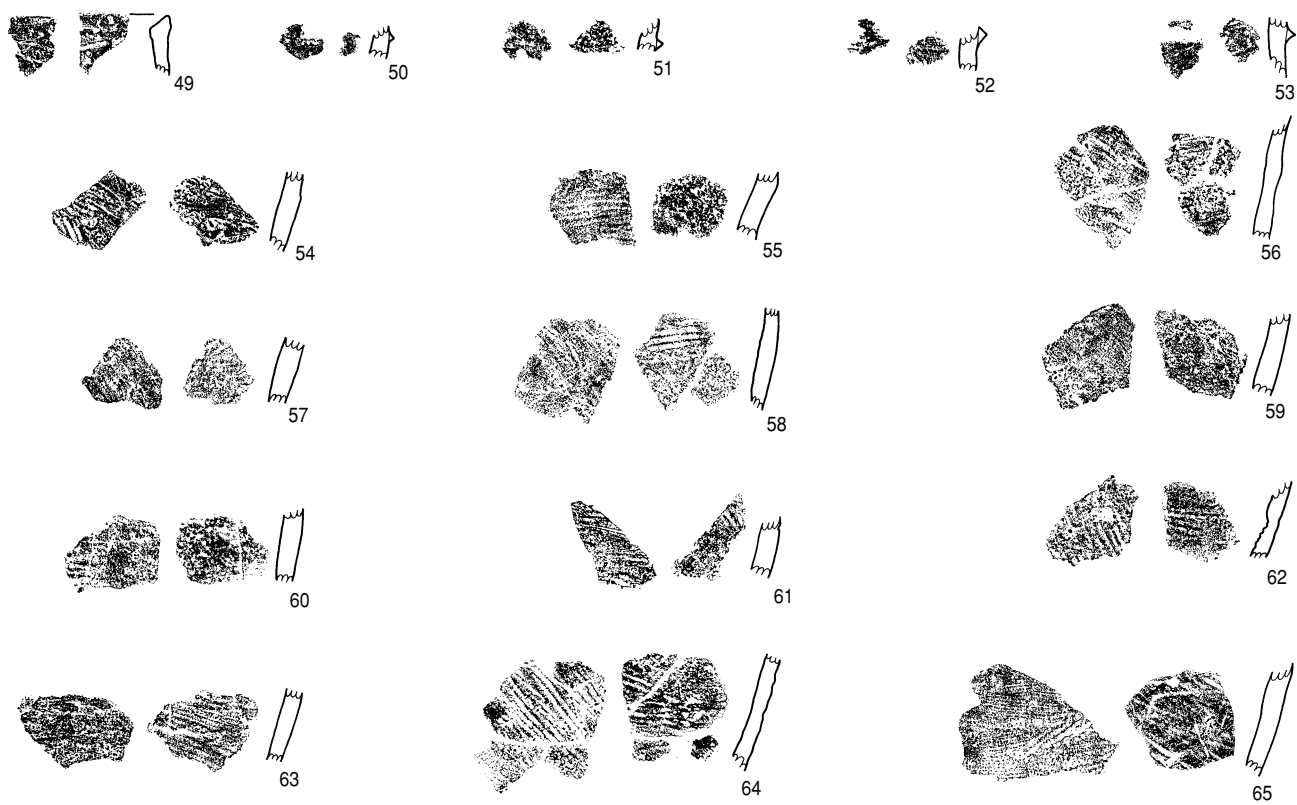
遺物は、アカホヤ火山灰の上層と御池火山灰に挟まれたVa層を中心に出土した。土器が1形式と頁岩のチップが2点出土している。(第16図)

VI類土器（第17図No49～No67）

内外面を貝殻条痕によって調整する土器で、外面に断面三角形の微隆起突帯を施す。外面は黒褐色をおび、総じて器壁が薄く、焼成不良のためか内面が剥落している。全体の接合ができず器形は不明である。

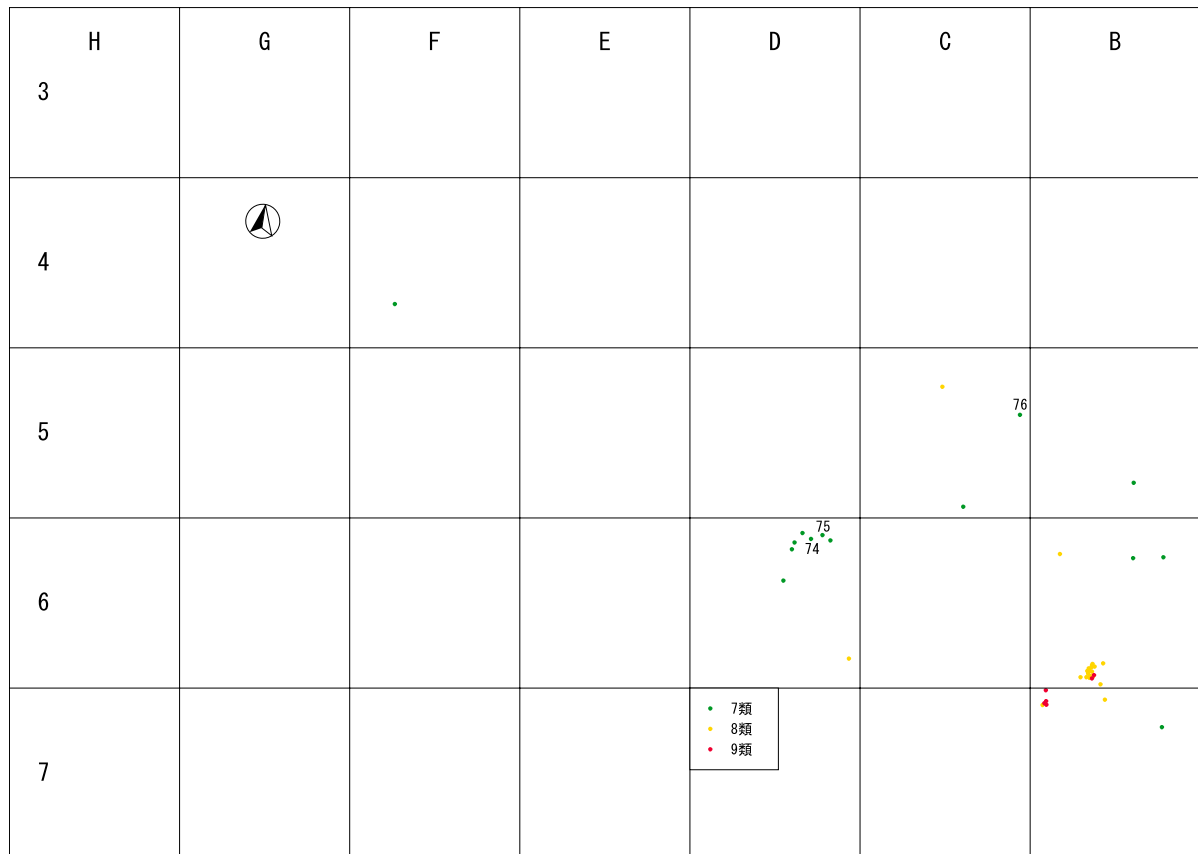
第3表 VI類土器観察表

挿図No.	報告No.	取上No.	出土区	層位	分類	器種	内面調整	外面調整	胎土	備考
17	49	237	E-4	Va	6	深鉢	ナデ	ナデ	長	
	50	239	D-5	Va	6	深鉢	貝殻条痕	貝殻条痕, ナデ	長, 輝	
	51	239	D-5	Va	6	深鉢	貝殻条痕	貝殻条痕, ナデ	長, 角	
	52	239	D-5	Va	6	深鉢	貝殻条痕	貝殻条痕, ナデ	長, 輝	
	53	239	D-5	Va	6	深鉢	貝殻条痕	貝殻条痕, ナデ	長	
	54	239	D-5	Va	6	深鉢	貝殻条痕	貝殻条痕, ナデ	長, 雲, 軽	
	55	239	D-5	Va	6	深鉢	貝殻条痕	貝殻条痕, ナデ	長, 角, 軽	
	56	239	D-5	Va	6	深鉢	貝殻条痕	貝殻条痕, ナデ	長	
	57	239	D-5	Va	6	深鉢	貝殻条痕	貝殻条痕, ナデ	長, 雲, 角	
	58	239	D-5	Va	6	深鉢	貝殻条痕	貝殻条痕, ナデ	長, 石	
	59	239	D-5	Va	6	深鉢	貝殻条痕	貝殻条痕, ナデ	長	
	60	239	D-5	Va	6	深鉢	貝殻条痕	貝殻条痕, ナデ	長, 角	
	61	217	D-5	IVa	6	深鉢	貝殻条痕	貝殻条痕, ナデ	長	
	62	213	C-5	IVa	6	深鉢	貝殻条痕	貝殻条痕, ナデ	石, 長, 角	
	63	239	D-5	Va	6	深鉢	貝殻条痕	貝殻条痕, ナデ	石, 長, 角, 軽	
	64	239	D-5	Va	6	深鉢	貝殻条痕	貝殻条痕, ナデ	長	
	65	239	D-5	Va	6	深鉢	貝殻条痕	貝殻条痕, ナデ	石, 長	
	66	239	D-5	Va	6	深鉢	貝殻条痕	貝殻条痕, ナデ	長, 軽	
	67	218	D-5	IVa	6	深鉢	貝殻条痕	貝殻条痕, ナデ	長, 雲	
		220								
		230		↓						
		239	↓	Va						



0 10cm

第17図 VI類土器実測図



3 縄文時代晩期の調査

縄文時代晩期の調査は、確認調査で遺物の出土が判明したB～D-5～7区を中心に調査を行った。

遺物は、御池火山灰の腐植土であるIVa層を中心に出土した。(第18図)

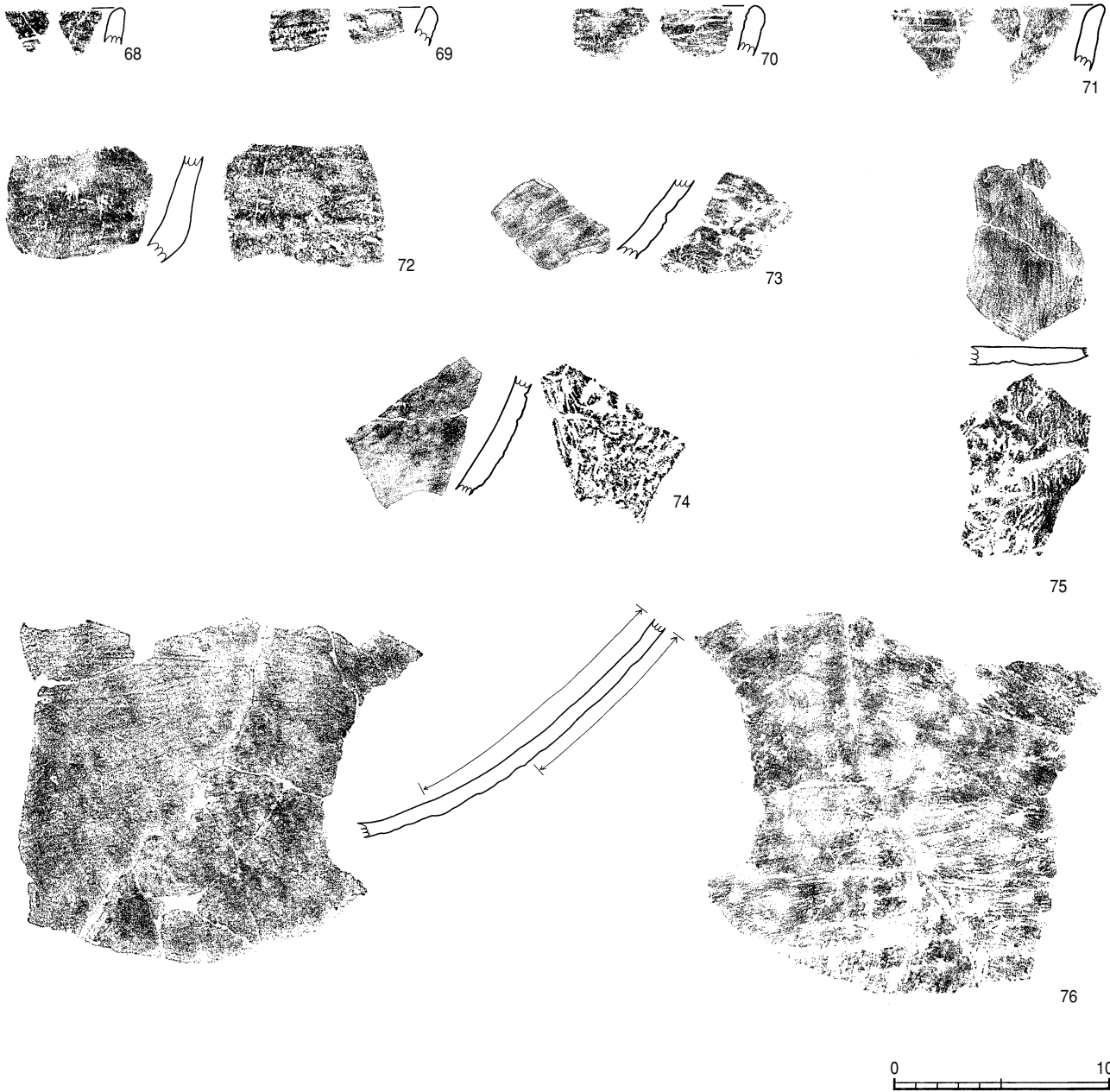
下部が斜め、胴部が横方向にミガキ調整が施されている。

Ⅷ類土器の胎土中には、長石が多く含まれ、精選された胎土で、色調は、内外とも赤橙色である。

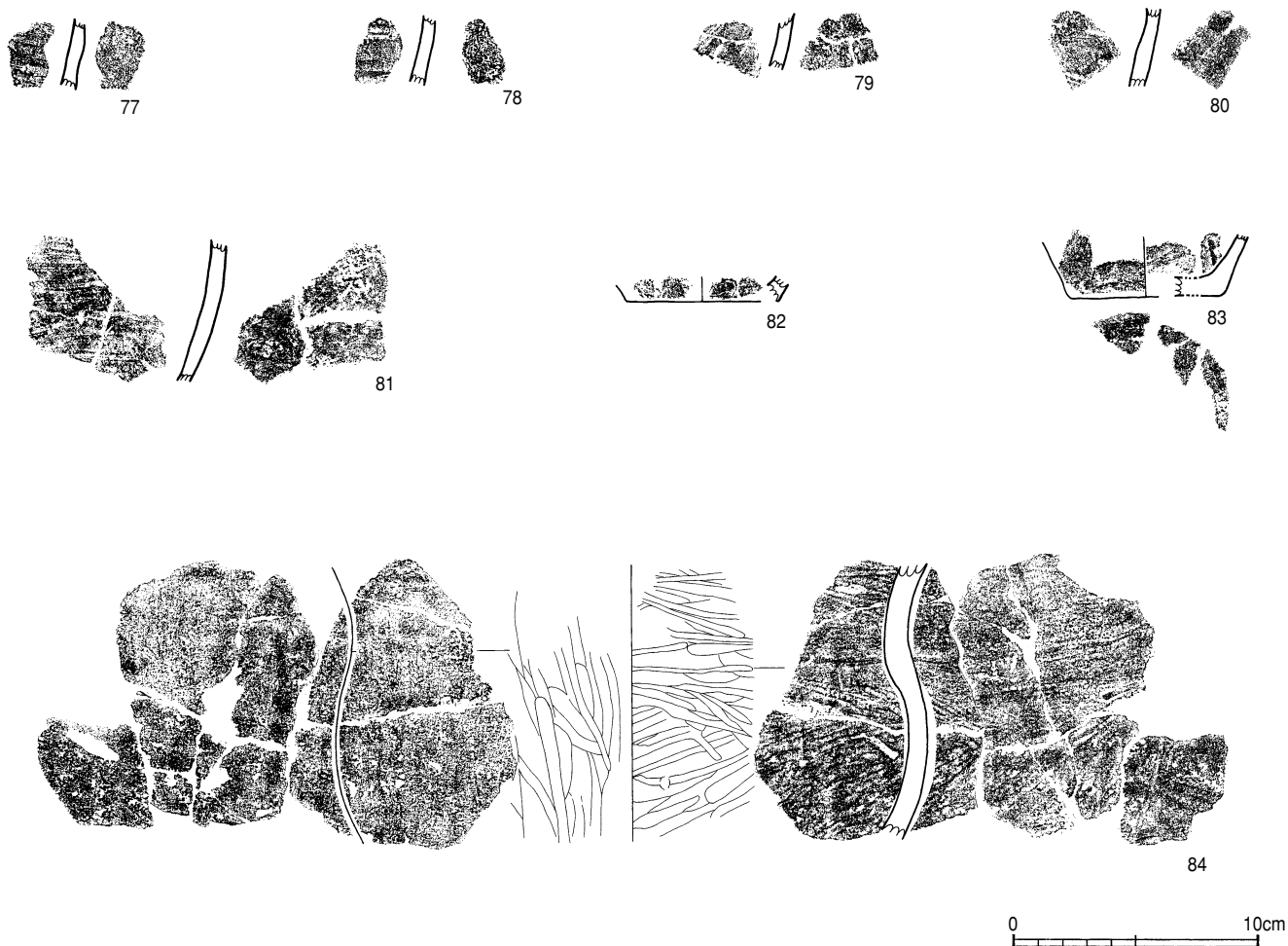
VII類土器 (第19図No.68~76)

No68～71は浅鉢形土器の口縁部で、外面は細条痕を伴う工具でナデ調整が施されている。内面は、No68が、ミガキで、No69～71がミガキに近い丁寧なナデ調整が施されている。No72は、「く」の字状に屈曲する胴部で、外面は、工具によるナデ調整で、内面はミガキが施されている。No73～76は外面に網布が圧痕された底部で、内面は丁寧に研磨されている。Ⅶ類土器の胎土は、精製されたものが用いられている。

No.77～81は深鉢形土器の胴部で、No.77, 78は内外面ともにミガキによって器面調整がなされている。No.79は外面がナデ調整、内面はミガキである。No.81は、内面に工具による横ナデの跡が残る。No.82, 83は胴部で、平底を呈し、両面とも丁寧なナデ調整が施される。No.84は、口縁部が外反し、頸部がわずかに締まり胴部がわずかに張る器形で、外面は、縦方向にミガキ調整がされ、内面は



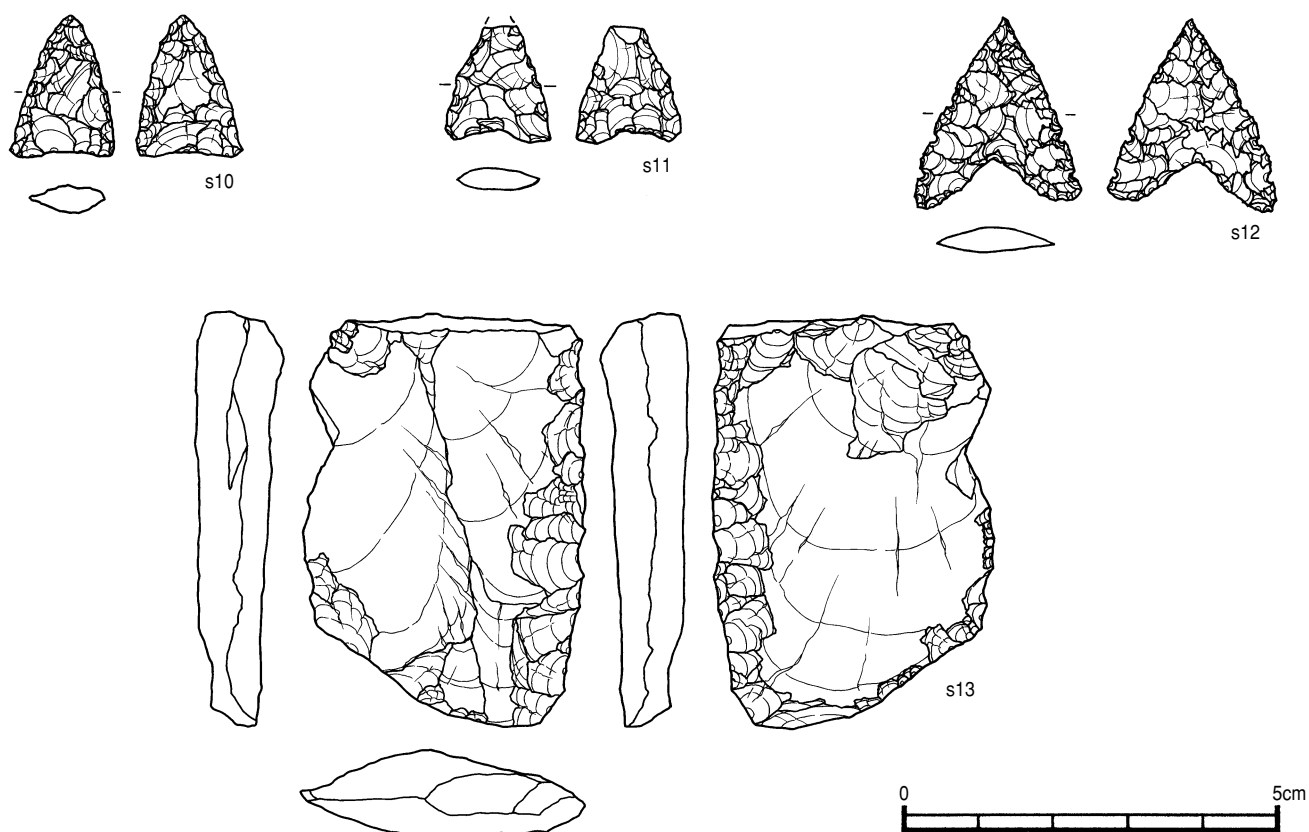
第19図 VII類土器実測図 1



第20図 VII類土器実測図 2

第 4 表 VII類～IX類土器観察表

挿図No.	報告No.	取上No.	出土区	層位	分類	器種	内面調整	外面調整	胎土	備考
19	68	194	B-6	IVa	7	浅鉢	ミガキ	工具によるナデ	長, 軽	
	69	263	D-6	IVa	7	浅鉢	ナデ	ナデ	長	
	70	258	D-6	IVa	7	浅鉢	ナデ	ナデ	石	
	71	193	B-6	IVa	7	浅鉢	ナデ	ナデ	長	
	72	203	B-5	IVa	7	浅鉢	ミガキ	工具によるナデ	長	
	73	261	D-6	IVa	7	浅鉢	ミガキ	工具によるナデ	長, 雲, 角	
	74	260	D-6	IVa	7	浅鉢	ミガキ	工具によるナデ	長	
	75	259	D-6	IVa	7	浅鉢	ミガキ	工具によるナデ	長	
20	76	212	C-5	IVa	7	浅鉢	ミガキ	工具によるナデ	長, 石	
	77	247	B-6	IVa	8	深鉢	ミガキ	ミガキ	長	
	78	224	B-6	IVa	8	深鉢	ミガキ	ミガキ	長	
	79	255	B-6	IVa	8	深鉢	ミガキ	ナデ	長	
	80	242	B-6	IVa	8	深鉢	ナデ	ナデ	長, 角	
	81	222	B-6	IVa	8	深鉢	ナデ	ナデ	長	
		246	↓	↓	↓					
	82	251	B-6	IVa	8	深鉢	ナデ	ナデ	長	
	83	241	B-6	IVa	8	深鉢	ナデ	ナデ	長	
		244								
		247								
		253	↓	↓	↓					
84	185	B-7	IVa	9	深鉢	ミガキ	ミガキ	長, 砂		
	186									
	187									
	226	↓	↓	↓	↓					



第21図 表採遺物実測図

第5表 表採遺物観察表

挿図No.	報告No.	取上No.	出土区	層位	器種	石材	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備考
21	10	276	—	I	石鏃	SH	3	2.85	0.6	0.96	
	11	275	C-6	I	石鏃	SH	1.9	1.5	0.5	0.5	
	12	277	—	I	石鏃	OB	2.05	2.2	0.3	1.15	
	13	278	—	I	削器	SH	11.7	6.6	2.35	26.01	

表採遺物（第21図S10～13）

表層出土と表採した石器を扱った。石鏃S10, 11は頁岩を用い、S10は平基の石鏃で主剥離面が残る。S11は先端を欠損する。S12は黒曜石を用いた基部の挟りが深く入る石鏃で、両側縁部の基部に微細な挟りが施される。

S13は頁岩を用いた削器で、右側縁部に両面からの整形で刃部を作出す。

4 まとめ

縄文時代に該当する遺物は、個々の出土量が、極めて少なく、それぞれが単体或いは数個体での出土であった。遺物は、Ⅰ類土器からⅦ類土器が出土している。

Ⅰ類土器は、口縁部が直行し、直線的に平底の底部にいたる円筒土器で、早期前葉の岩本式土器である。

岩本式土器は、口唇部内面に段を有し、口唇端部に深いキザミ目を施し小波状を呈するもの。口唇部がわずかに内湾して舌状を呈し、外側にキザミ目を施すもの。口唇部が平坦で、口唇部外側にキザミ目を施すものがあり、器面調整は、貝殻腹縁による丁寧な条痕、又は、繊維状の調整具による丁寧な仕上げが行われるものである。

Ⅱ類土器は、吉田式土器の範疇に比定される。本遺跡出土のものは、口縁部下の縦位の貝殻刺突文が特徴的である。

Ⅲ類土器は、石坂式土器に比定される。口縁部の出土資料はないが、胴部の綾杉状の条痕文が明瞭に解る資料である。

Ⅳ類土器は、主に大隅半島から宮崎県南部に見られる土器で、口縁部が直行ないし内湾し、バケツ形の器形で、口唇部が内側に肥厚するものもみられ、短沈線文が特徴的な辻タイプに比定される。これまでは、下剥峯式土器や桑ノ丸式土器と器形的特徴や施文の特徴が近似しているため、どちらかの型式に比定されていた土器である。

本遺跡出土のものは、底部側面の接合痕が明瞭で土器制作状況の解る資料である。

Ⅴ類土器は、下剥峯式土器から桑ノ丸式土器の器形的特徴を持つ無文の土器である。口縁部が内湾し、口唇内部が肥厚するが、胴部から底部にいたるまで器壁を薄く作り上げている。

Ⅵ類土器は、貝殻条痕によって内外面を調整し、口縁部外面に断面三角形の微隆起突帯を巡らし、外面が黒褐色を呈する特徴から、縄文時代前期の轟式土器の範疇に比定される。1個体が出土した。

Ⅶ類土器は、縄文時代晩期に該当する土器で、浅鉢形土器の底部に網布の圧痕が明瞭に残る資料がある。

引用・参考文献

「小牧3 A・岩本遺跡」(15)

「城ヶ尾遺跡」(60)

「九養岡遺跡・踊場遺跡・高篠遺跡」(71)

「桐木耳取遺跡」(91)

版
跡
遺
尾
圖
唐



唐尾遺跡周辺地形

国土画像情報（カラー空中写真） 国土交通省
昭和49年撮影



①縄文時代早期集石 2 号
②縄文時代早期集石 1 号

③土層断面



①縄文時代早期遺物出土状況 ②No.34土器出土状況
③No.61石斧出土状況

④No.65石匙出土状況
⑤No.57石斧出土状況



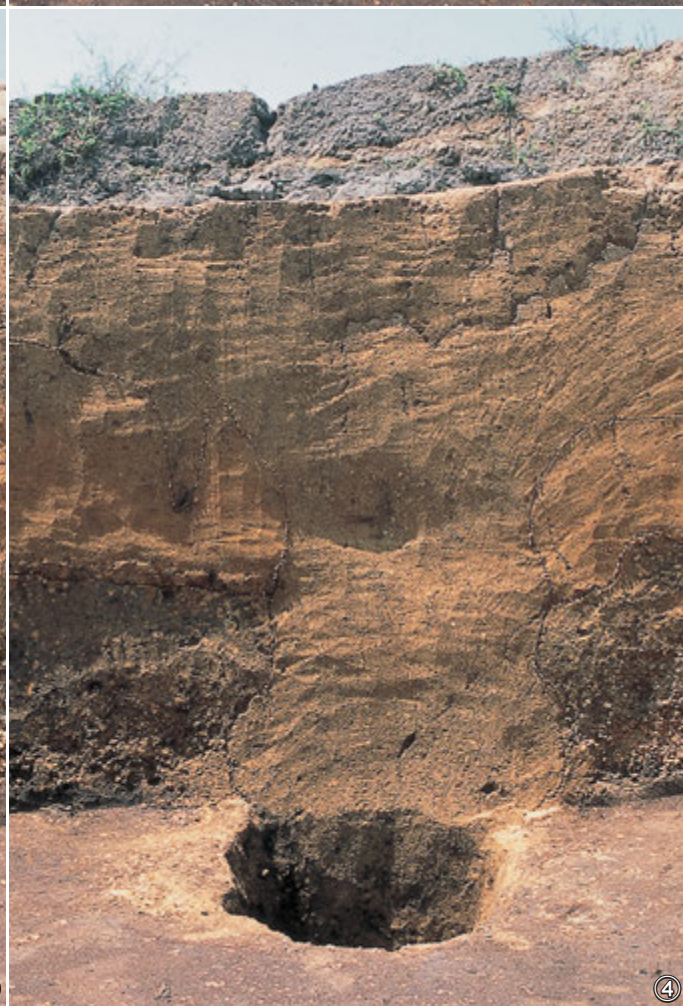
①落とし穴1号半裁状況
②落とし穴1号完掘状況



①落とし穴 2 号半裁状況
②落とし穴 2 号完掘状況



①落とし穴 3 号半裁状況
②落とし穴 3 号完掘状況



①落とし穴 5 号半掘状況
②落とし穴 5 号完掘状況

③落とし穴 6 号半掘状況
④落とし穴 6 号完掘状況



①落とし穴 4 号完掘状況
②落とし穴 7 号検出状況



①落とし穴7号半裁状況
②落とし穴7号完掘状況



①落とし穴 8 号半裁状況
②落とし穴 8 号完掘状況



①



②



④



③



⑤

①縄文時代晩期竪穴住居跡

②・③遺物出土状況

④No.92土器出土状況

⑤No.93土器出土状況



①

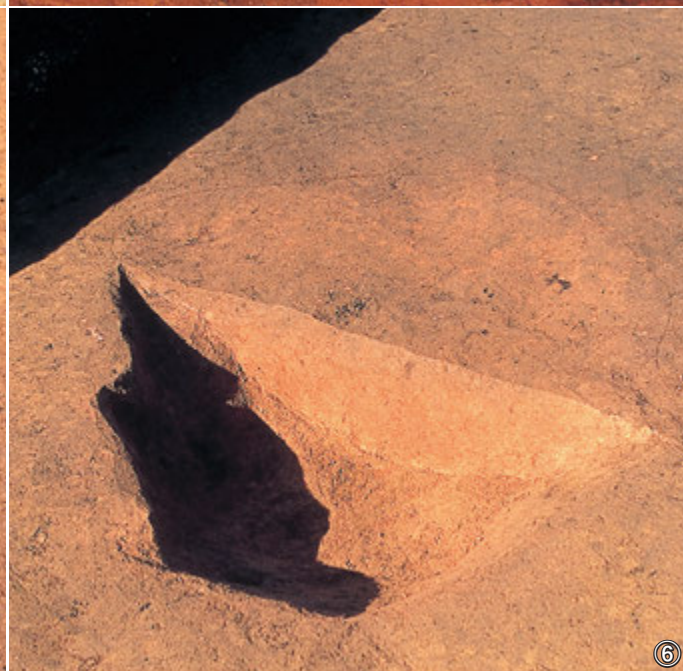


②

①奈良・平安時代掘立柱建物跡 1 号
②奈良・平安時代掘立柱建物跡 2 号



①奈良・平安時代掘立柱建物跡 3 号
②奈良・平安時代掘立柱建物跡 4 号



①ピット2号半裁遺物検出
③焼土跡3号

②ピット1号

④4号掘立柱建物跡ピットNo.9柱痕跡
⑤大型掘立柱ピットNo.3土器出土

⑥焼土跡2号



①奈良・平安時代軽石集石 1 号
②奈良・平安時代軽石集石 2 号



①



②



④



③



⑤

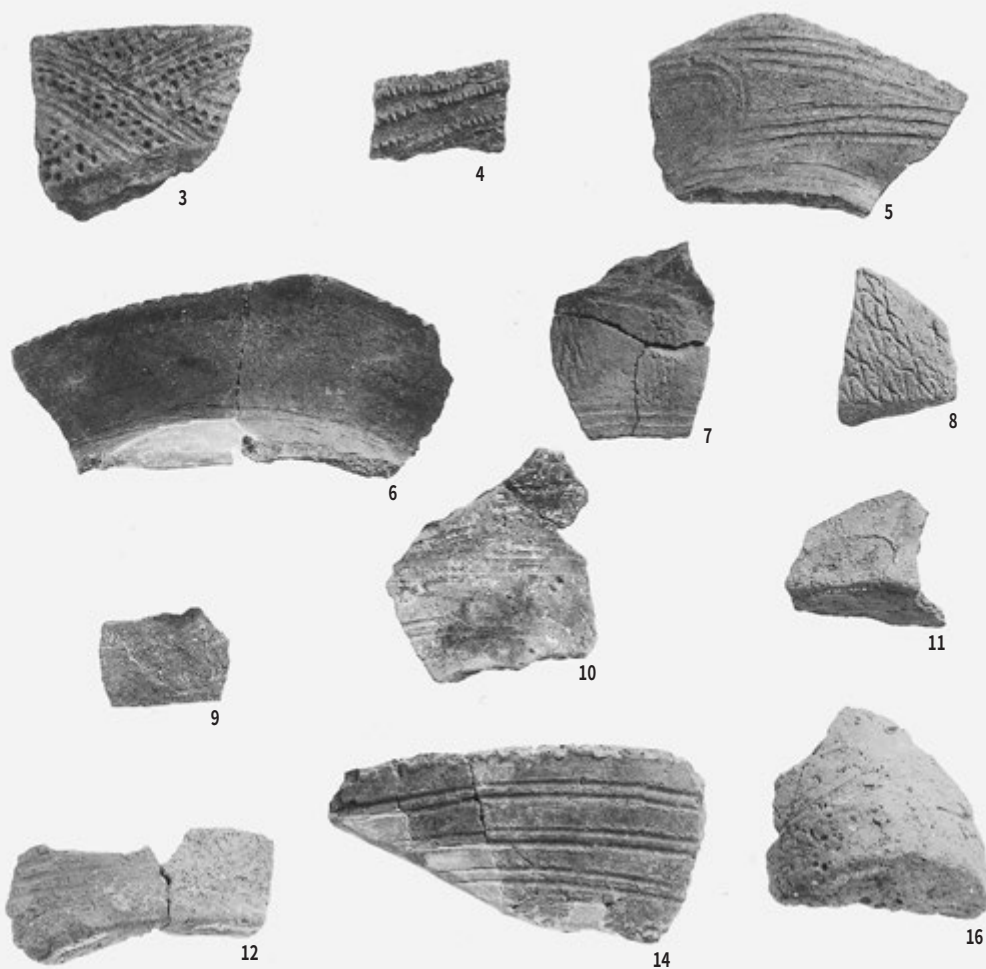
①奈良・平安時代遺物出土状況
③土師器甕等集中出土状況

②土師器甕出土状況

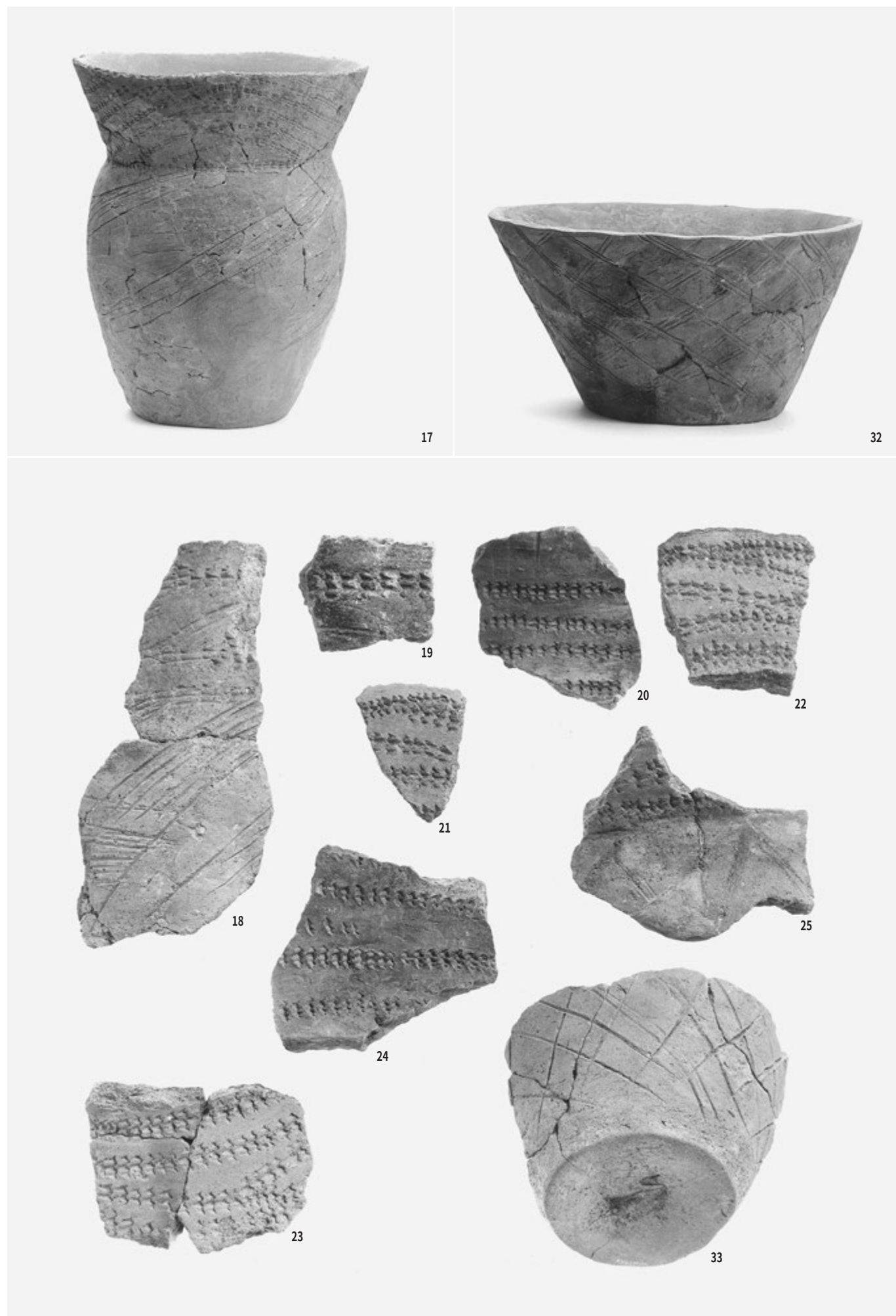
④・⑤調査風景



2



縄文時代早期出土遺物（土器1）



縄文時代早期出土遺物（土器2）



34



35



37



38



41



42



44

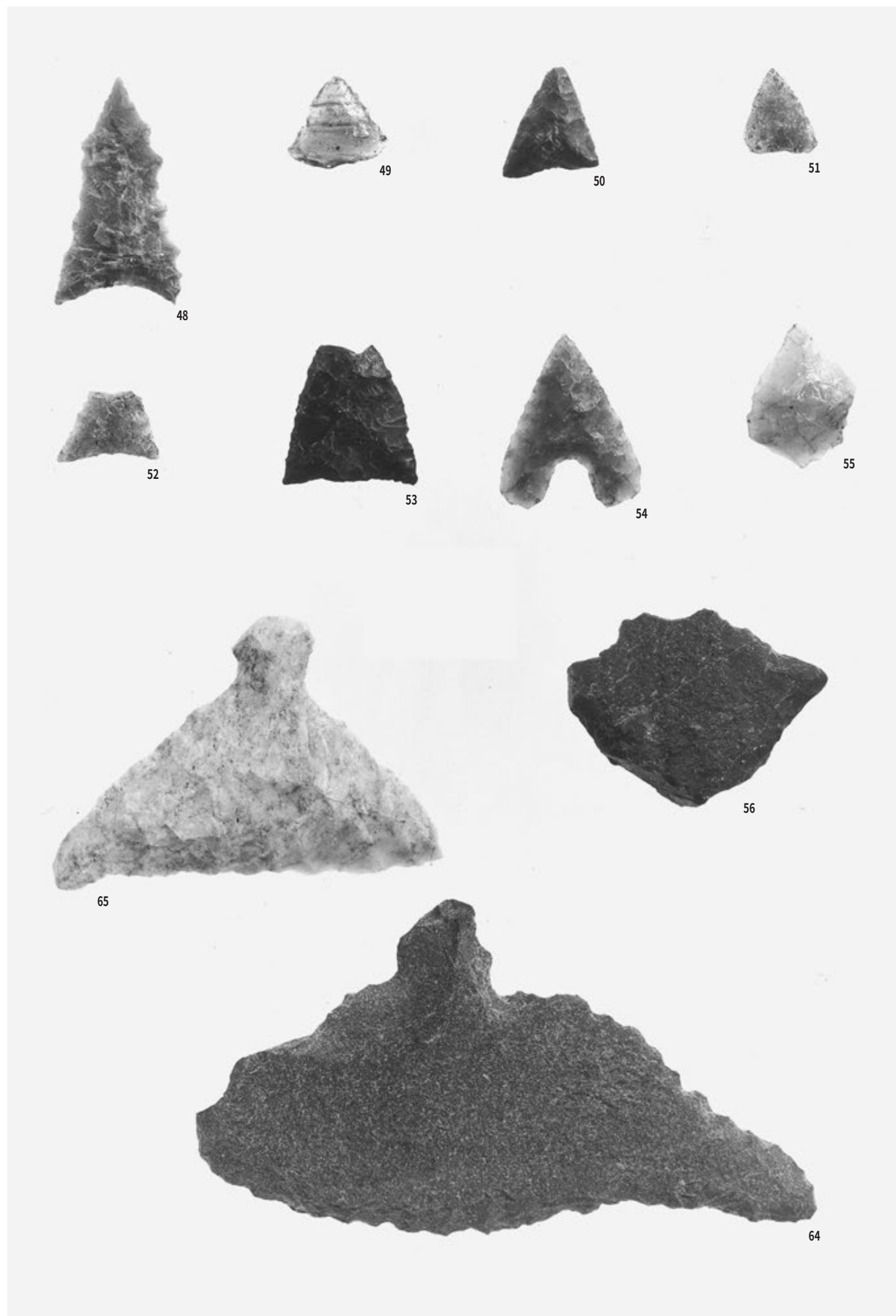


46



47

縄文時代早期出土遺物（土器3）



縄文時代早期出土遺物（石器1）



57



58



59



60



61



62

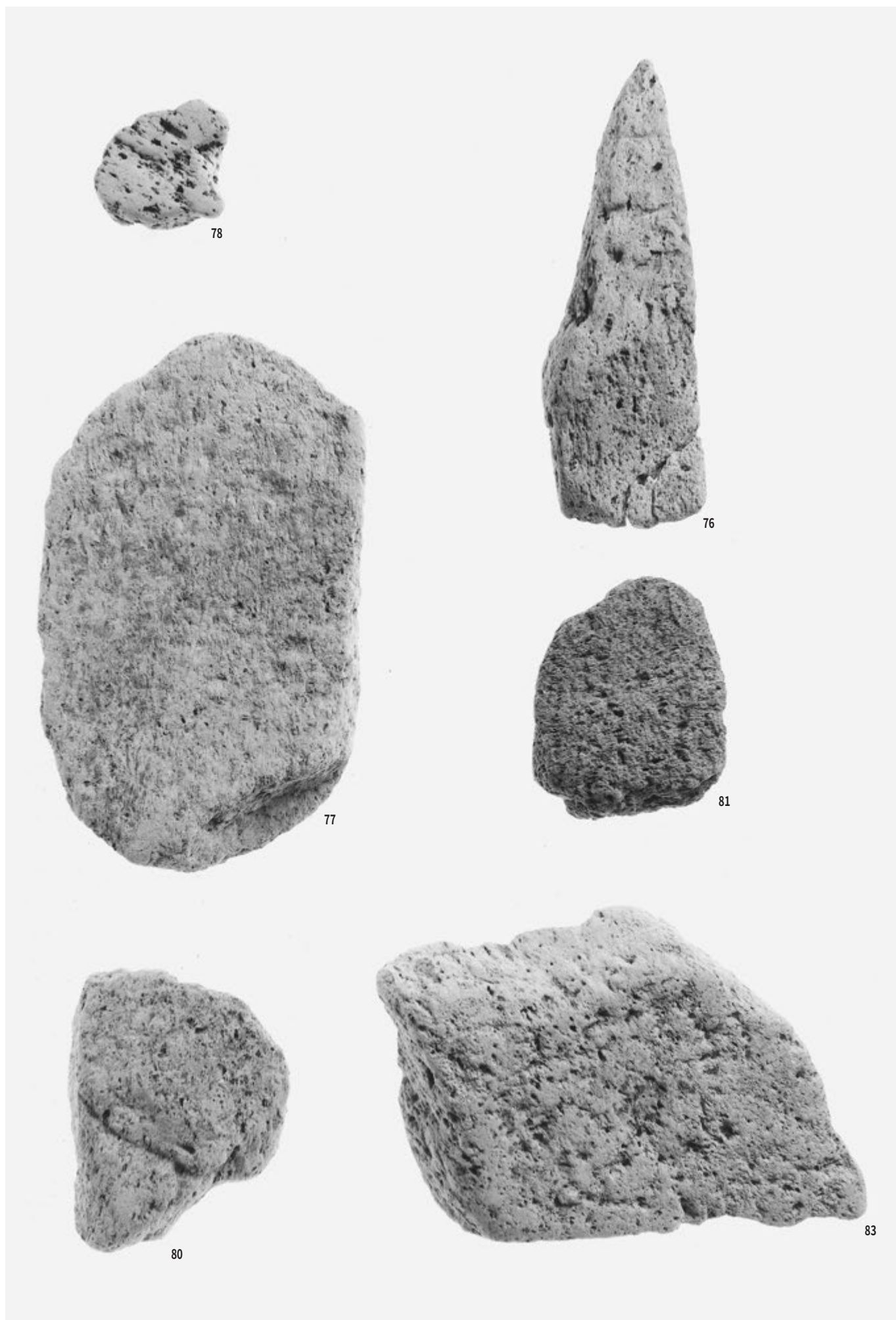


63

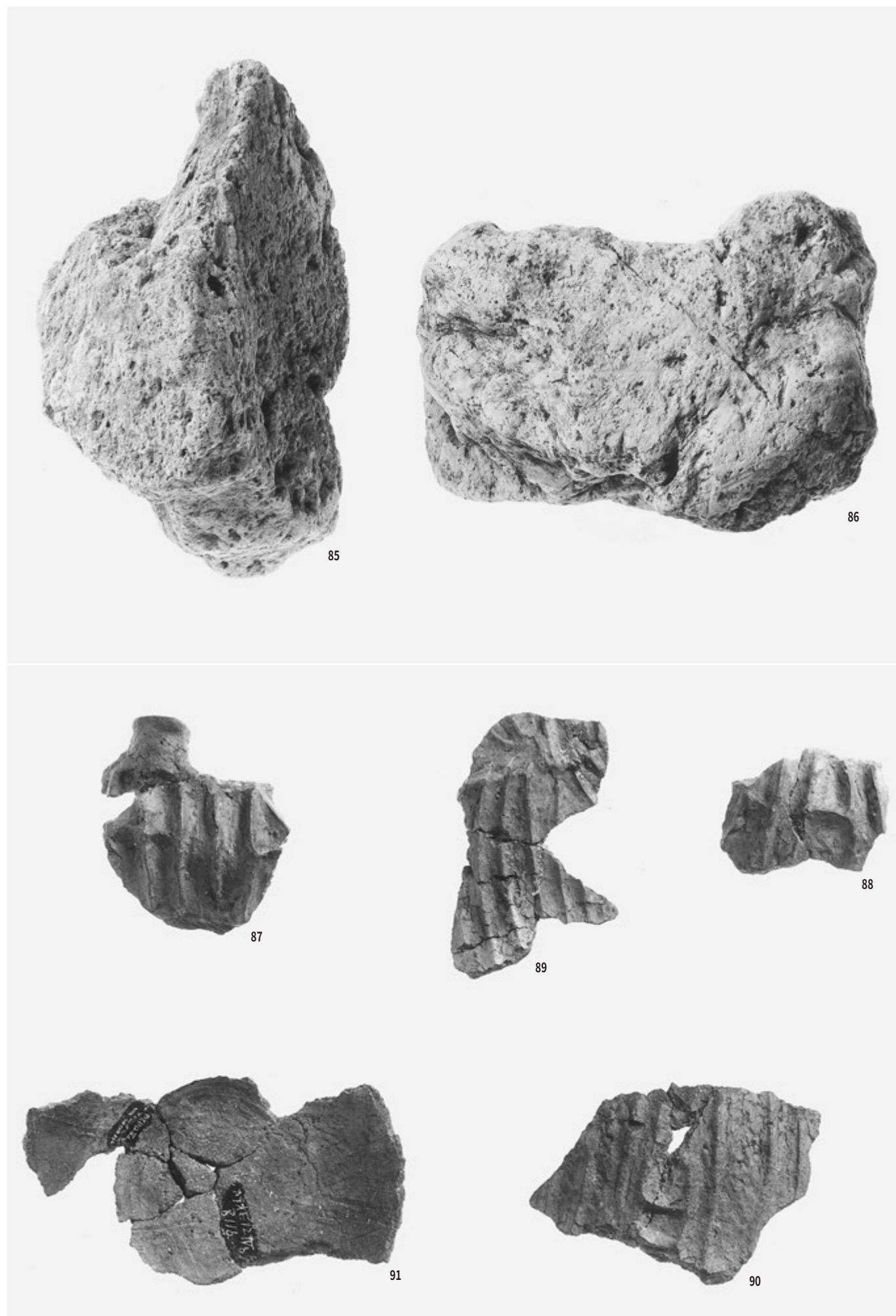
縄文時代早期出土遺物（石器2）



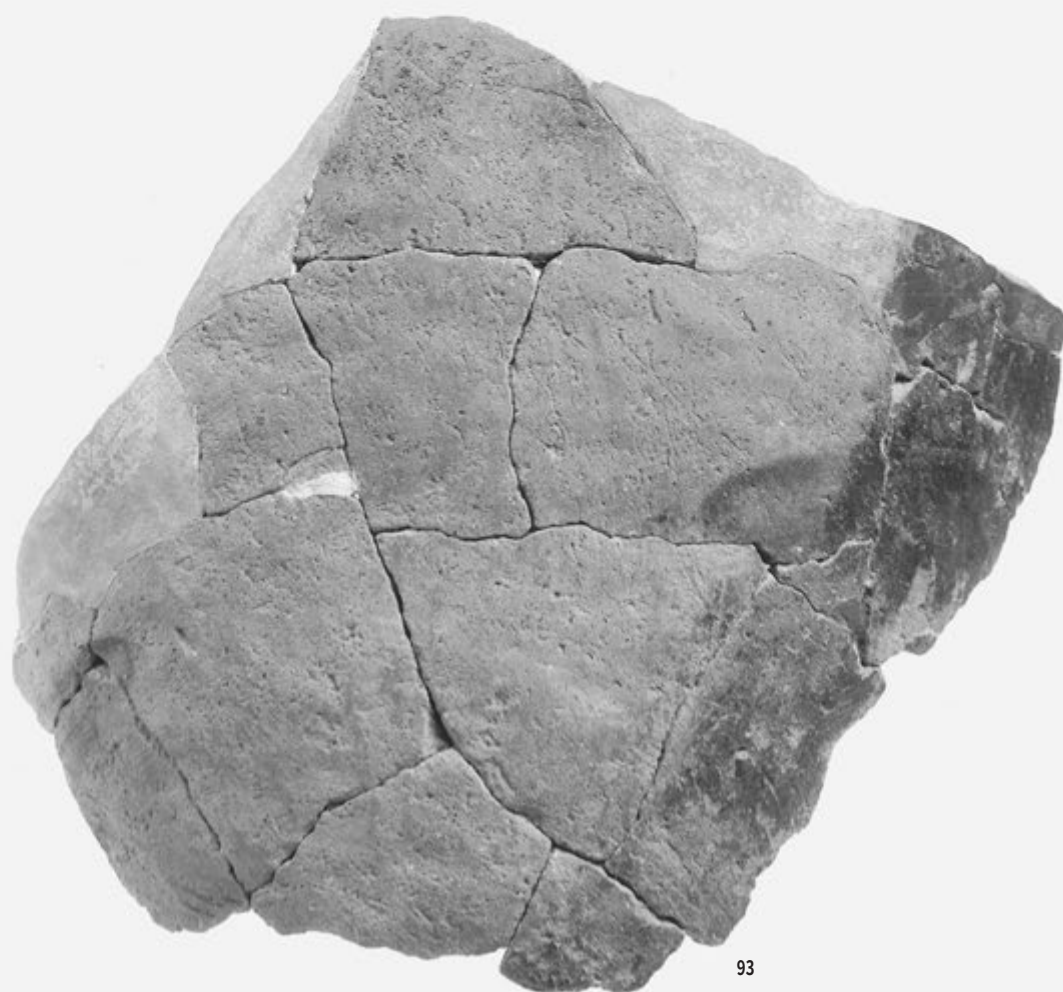
縄文時代早期出土遺物（石器3）



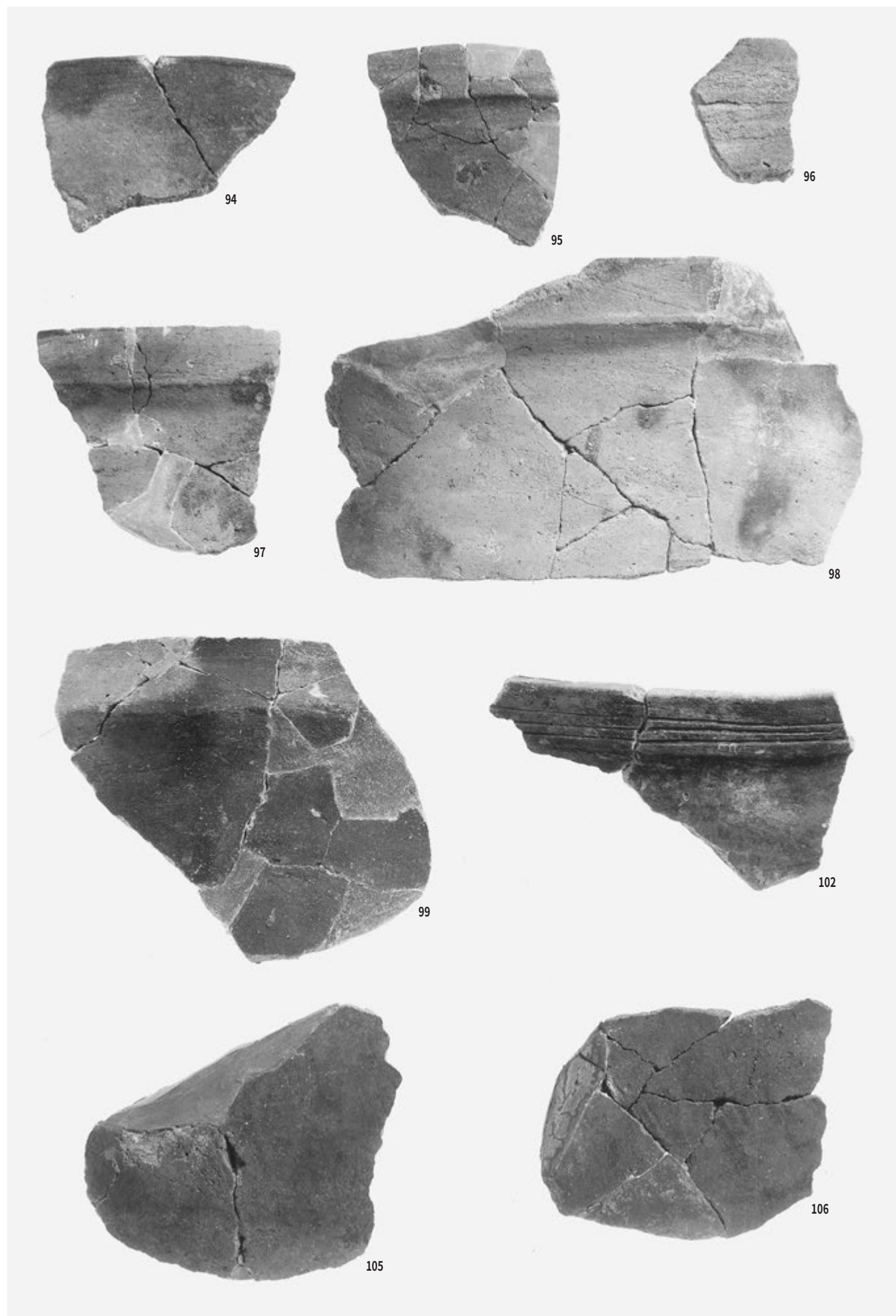
縄文時代早期出土遺物（軽石製品1）



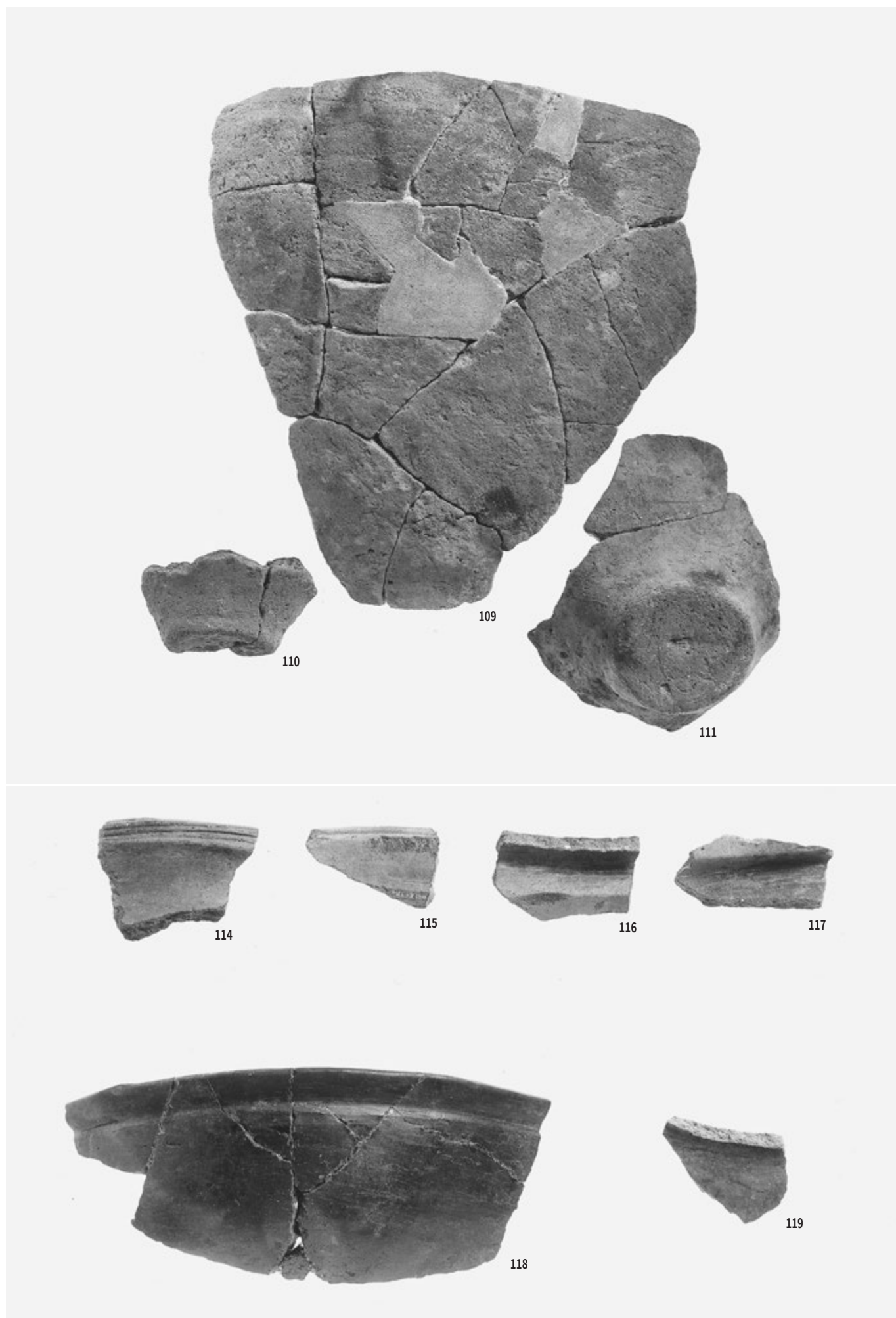
縄文時代早期（軽石製品2）・中期出土遺物（土器）



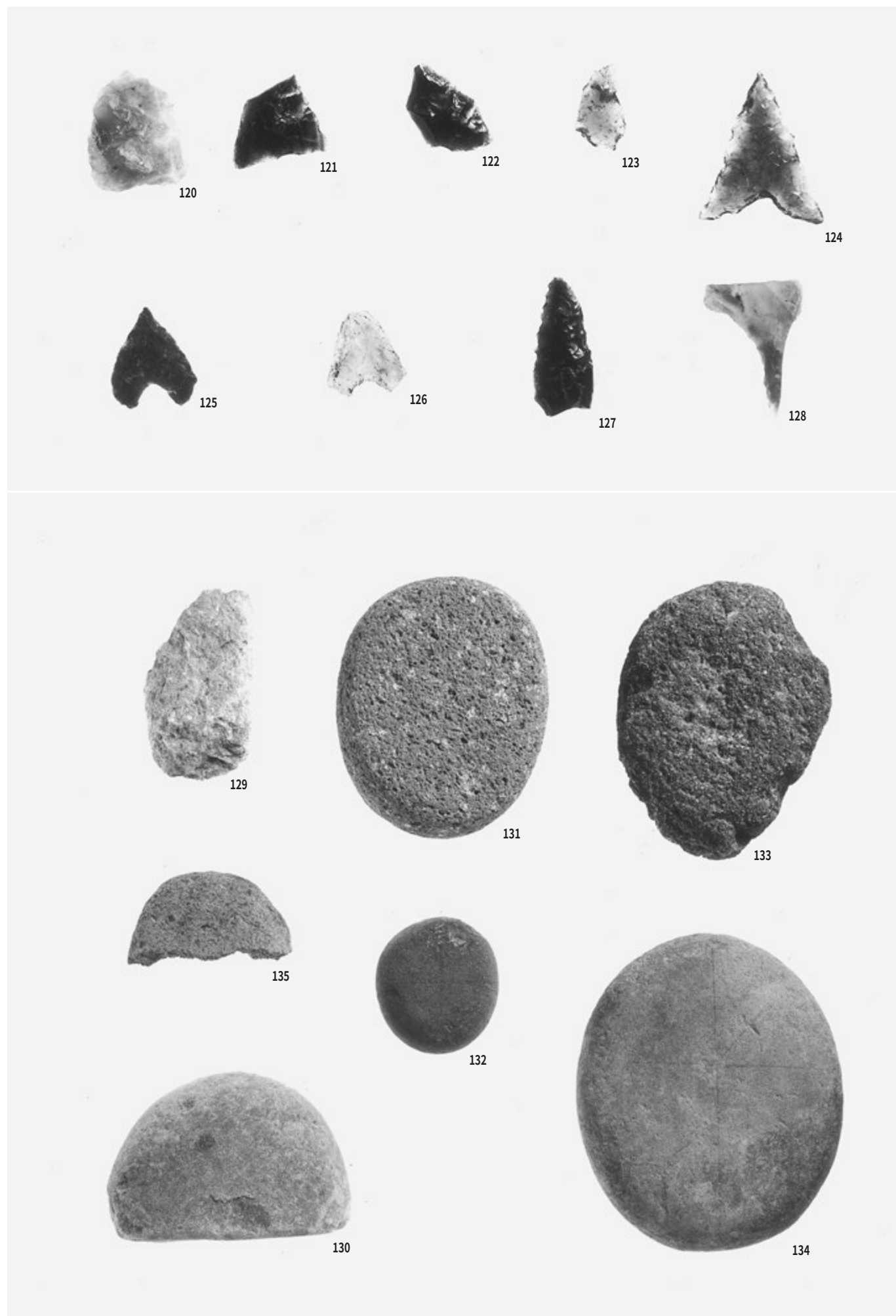
縄文時代晩期出土遺物（土器1）



縄文時代晩期出土遺物（土器 2）



縄文時代晩期出土遺物（土器3）



縄文時代晩期出土遺物（石器）



136



138



149

奈良・平安時代出土遺物（甕1）



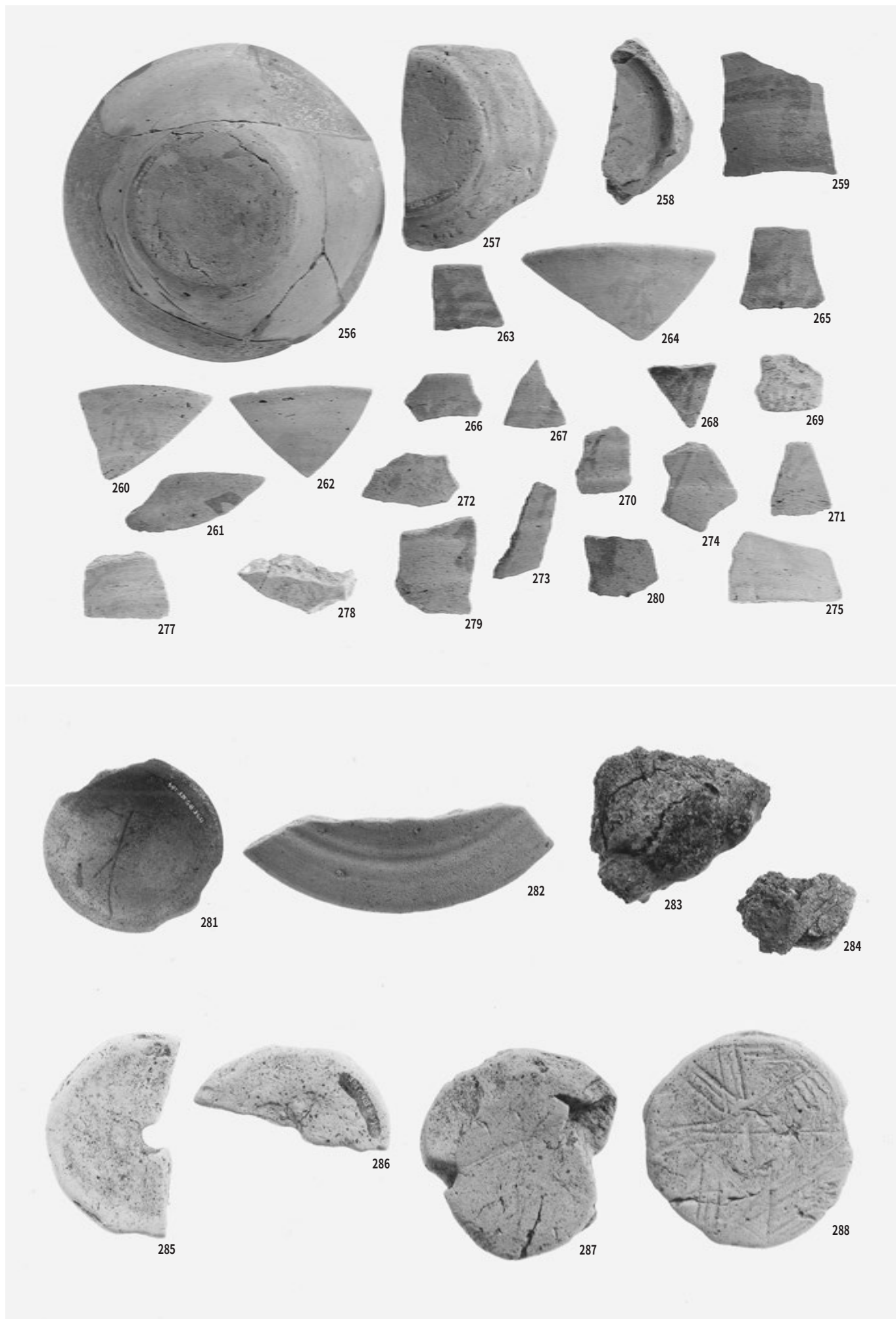


191 192 193
 194 195 196
 197 198
 208 209 210
 211 213

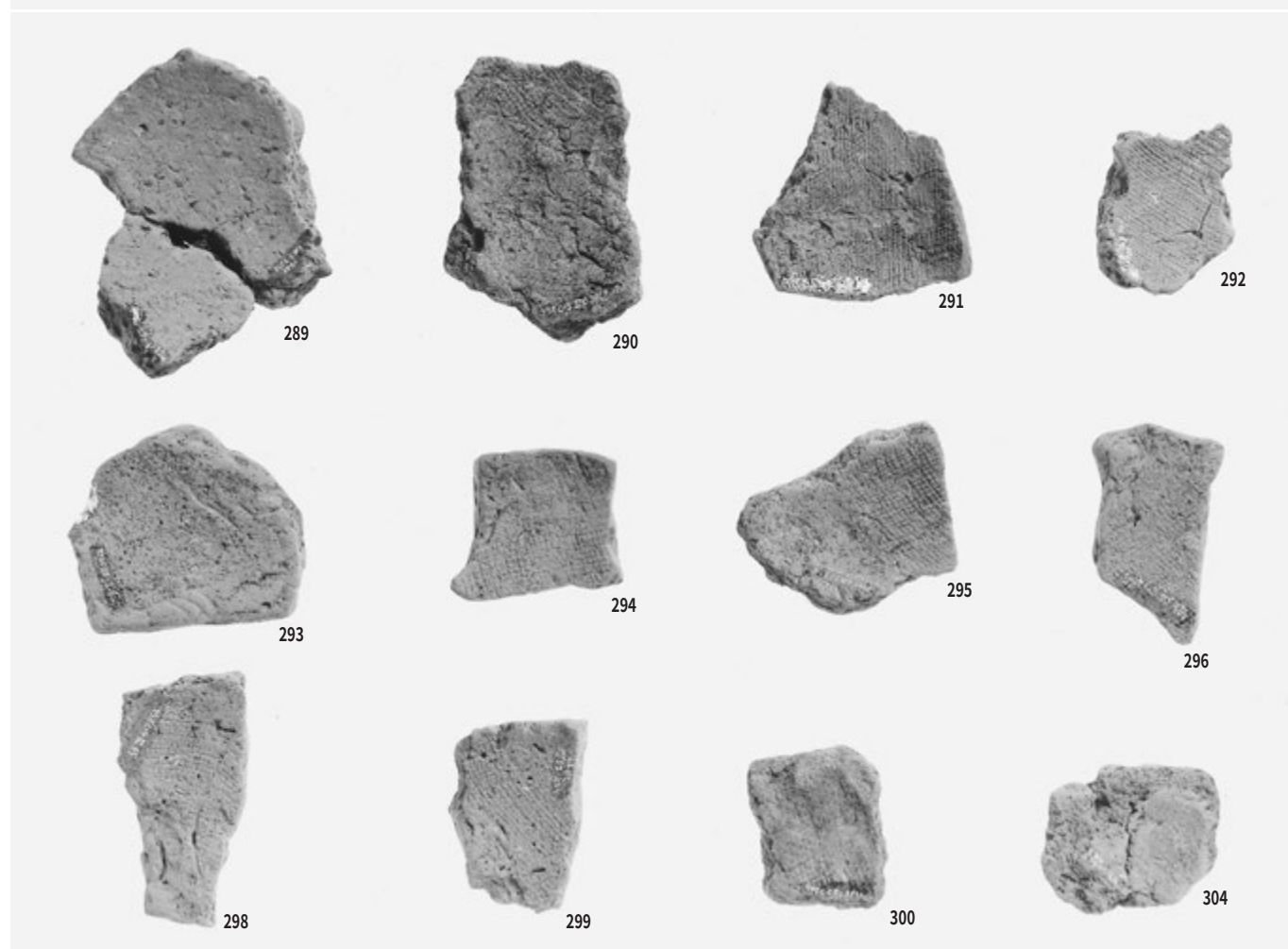
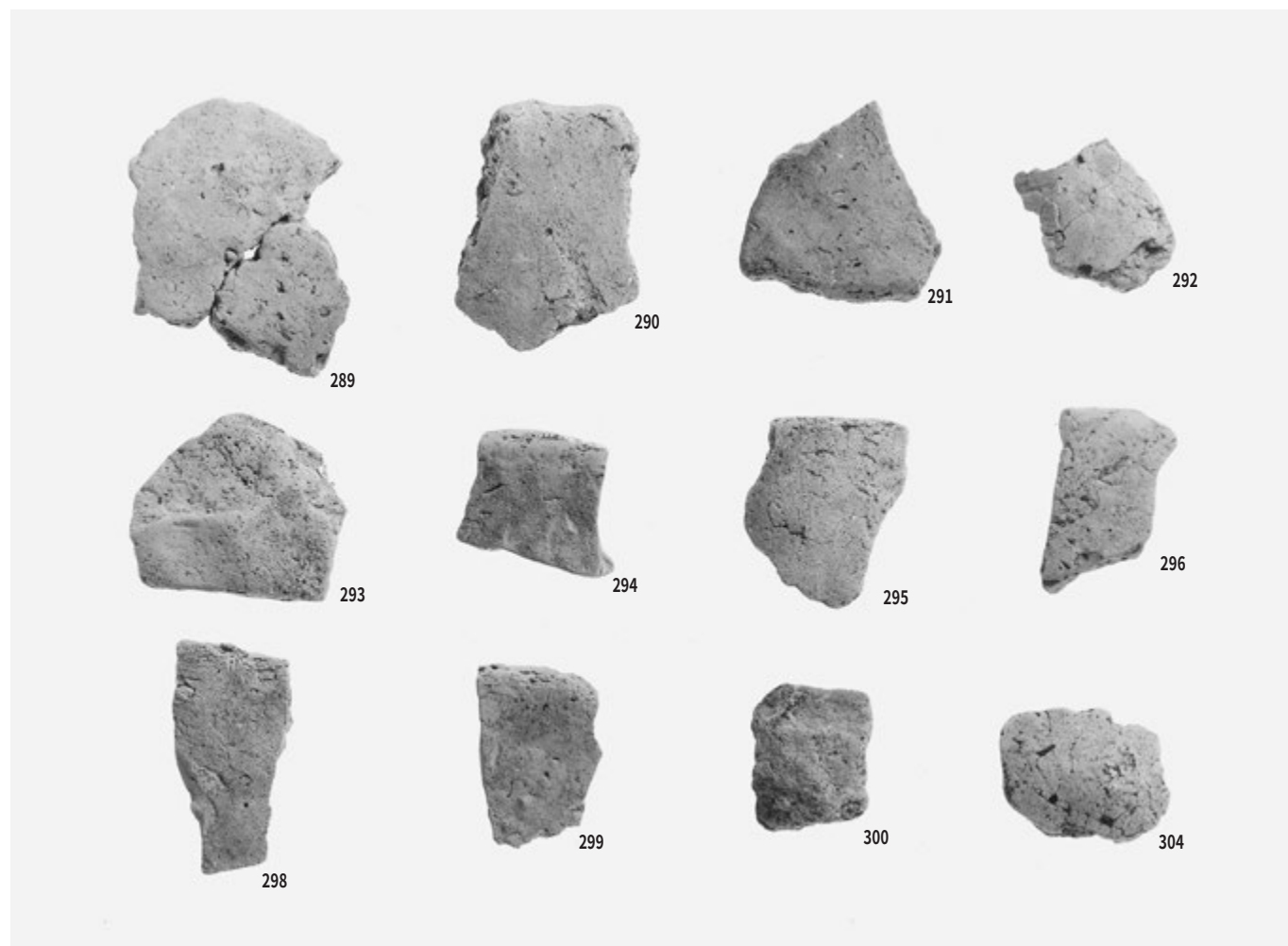
奈良・平安時代出土遺物（坏）



奈良・平安時代出土遺物（碗・内黒碗）



奈良・平安時代出土遺物（墨書土器）ほか



奈良・平安時代出土遺物（焼塩土器）



奈良・平安時代出土遺物（須恵器・砥石）



318
319 317
320
321

奈良・平安時代出土遺物（軽石製品）

版
圖
高古塚遺跡
中之迫遺跡



高古塚遺跡遠景



高古塚遺跡周辺地形

国土画像情報（カラー空中写真）国土交通省
昭和49年撮影



①



②



③



④

①縄文時代早期 1 号落とし穴完掘状況
②検出状況

③逆茂木完掘状況

④断面

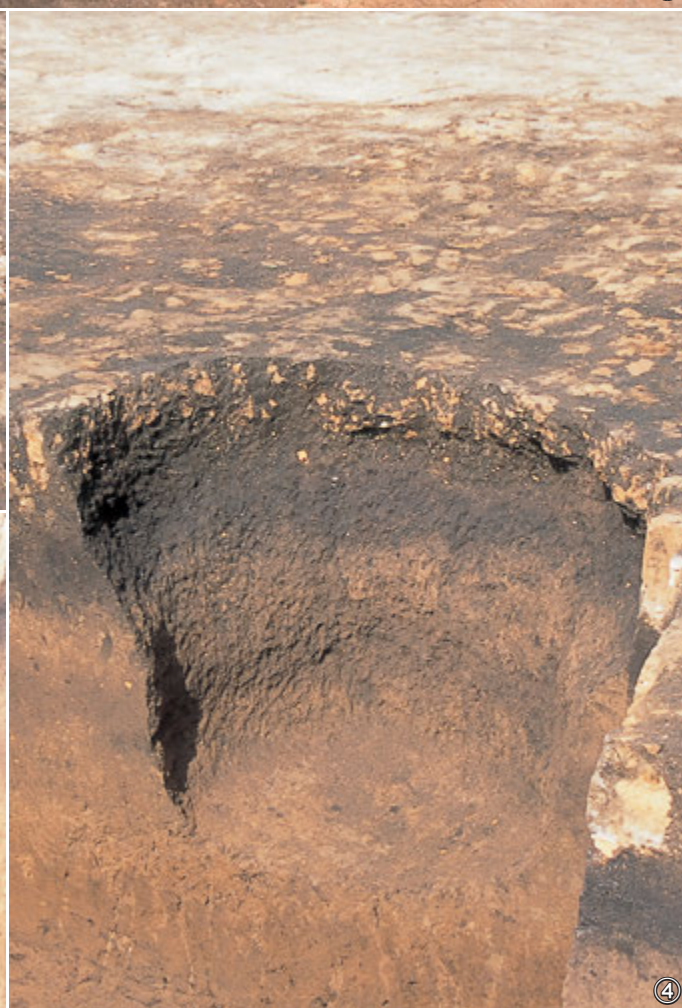


①縄文時代早期 2 号落とし穴断面

②検出状況

③半掘状況

④完掘状況

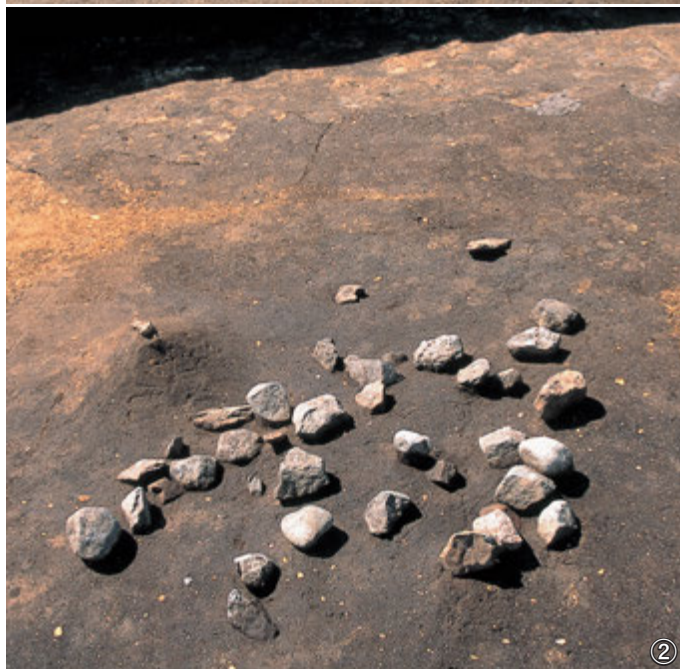


①縄文時代早期2号・3号落とし穴検出状況

②3号落とし穴検出状況

③3号落とし穴断面

④完掘状況



①縄文時代早期 1 号集石
② 2 号集石 ③ 3 号集石

④縄文時代早期 4 号集石
⑤ 5 号集石 ⑥ 6 号集石



①



④



②



⑤



③



⑥

①縄文時代早期 7 号集石
② 8 号集石 ③ 9 号集石

④縄文時代早期10号集石
⑤11号集石 ⑥12号集石



①縄文時代中期 1 号落とし穴完掘状況

②検出状況

③半掘状況

④逆茂木検出状況

⑤逆茂木完掘状況



①縄文時代中期 2 号落とし穴検出状況
②半掘状況

③半掘状況
④逆茂木検出状況
⑤完掘状況



①縄文時代中期 3号落とし穴完掘状況

②検出状況

③半掘状況

④半掘状況

⑤逆茂木検出状況



①縄文時代中期 2号・3号・4号落とし穴
②4号半掘状況 ③完掘状況

④半裁状況



①縄文時代中期 5号落とし穴完掘状況

②検出状況

③半掘状況

④逆茂木検出状況

⑤逆茂木完掘状況



①縄文時代中期 6 号落とし穴検出状況
②半掘状況 ③半裁状況

④逆茂木完掘状況
⑤完掘状況



①



②



③



④

①縄文時代早期遺物出土状況 1

②遺物出土状況 2

③遺物出土状況 3

④遺物出土状況 4



①



②



⑥



③



⑦



④



⑧



⑨

①No.50出土状况
②No.60出土状况

③No.61出土状况
④No.58出土状况

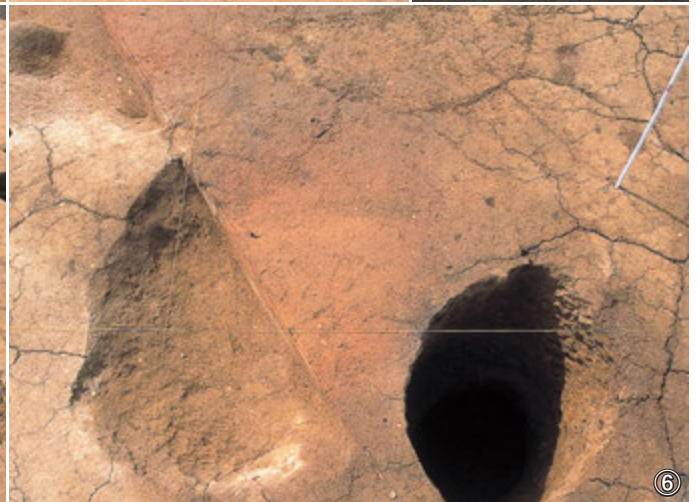
⑤No. 1 出土状况
⑥No.68出土状况

⑦No.70出土状况
⑧No. S 15出土状况

⑨No. S 30出土状况



掘立柱建物跡



①掘立柱建物跡検出状況

②焼土跡検出状況

③焼土跡半掘状況

④灰土跡 2 半掘状況

⑤柱穴検出状況

⑥焼土 1 と柱穴 2 P-5 の切り合い



①古代遺物出土状況
③断面

②1号土坑検出状況

④2号土坑検出状況1
⑥完掘状況

⑤2号土坑完掘状況2



①



②



③



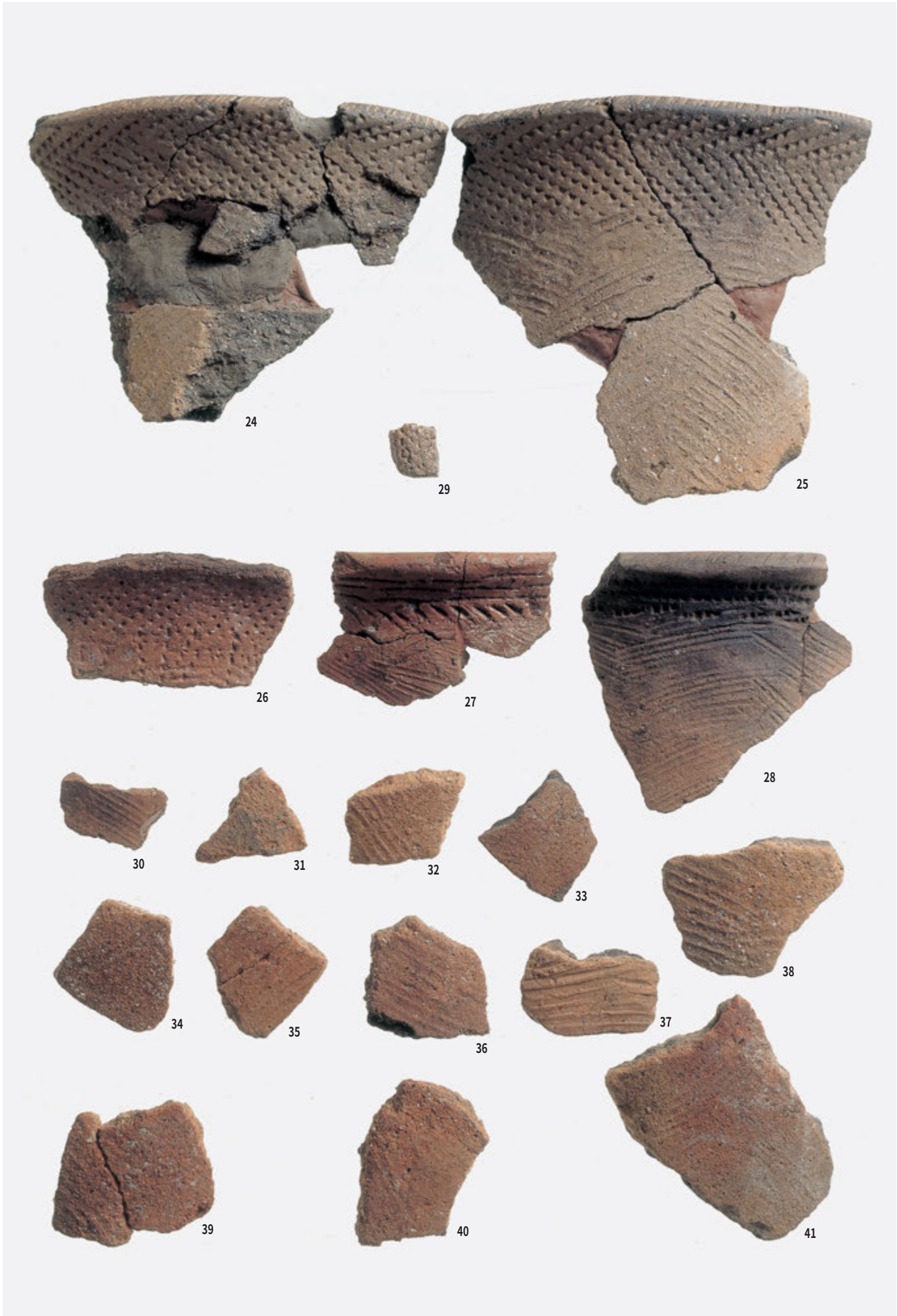
④

①～③土層断面

④発掘調査風景



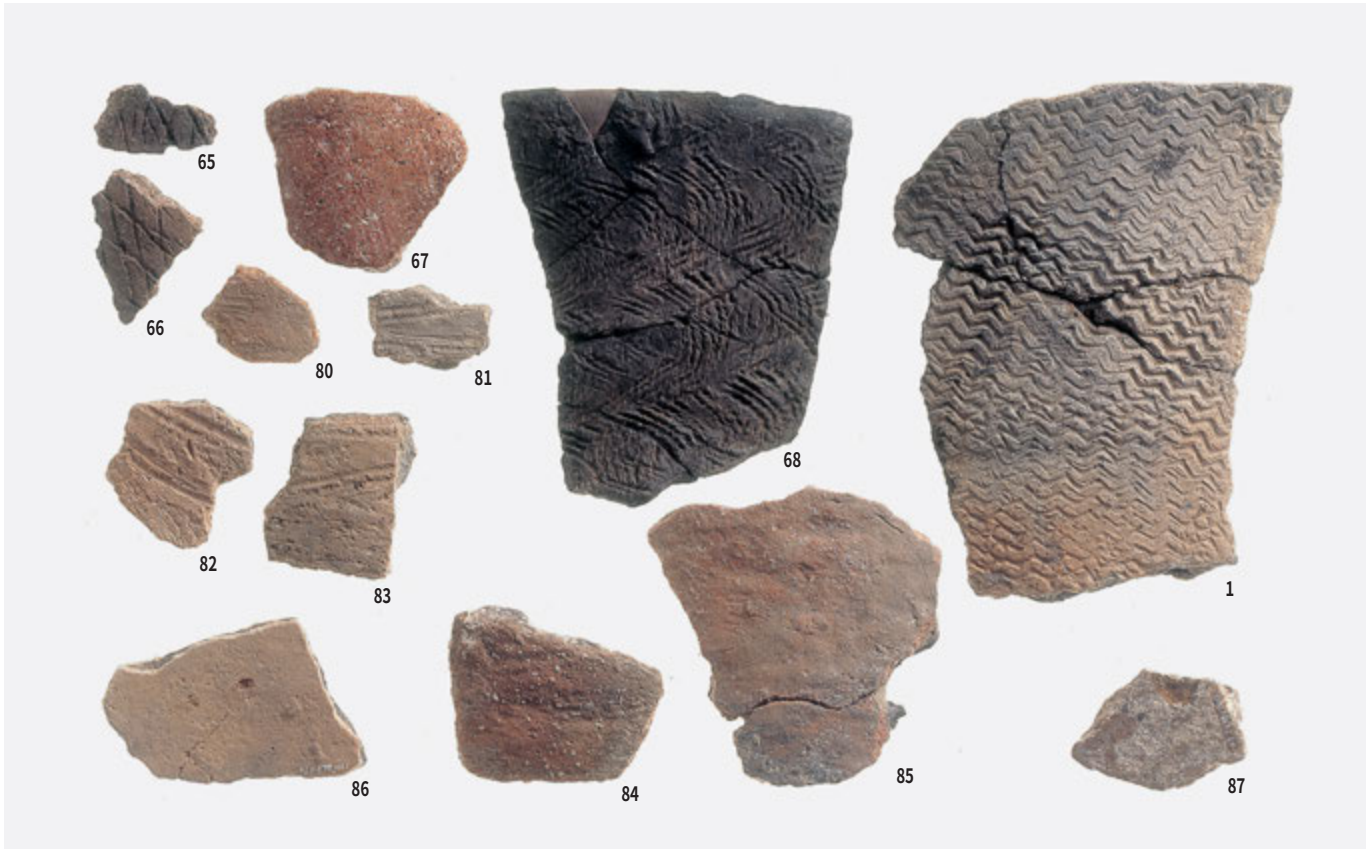
I 類～IV類土器



V類土器



VI類土器

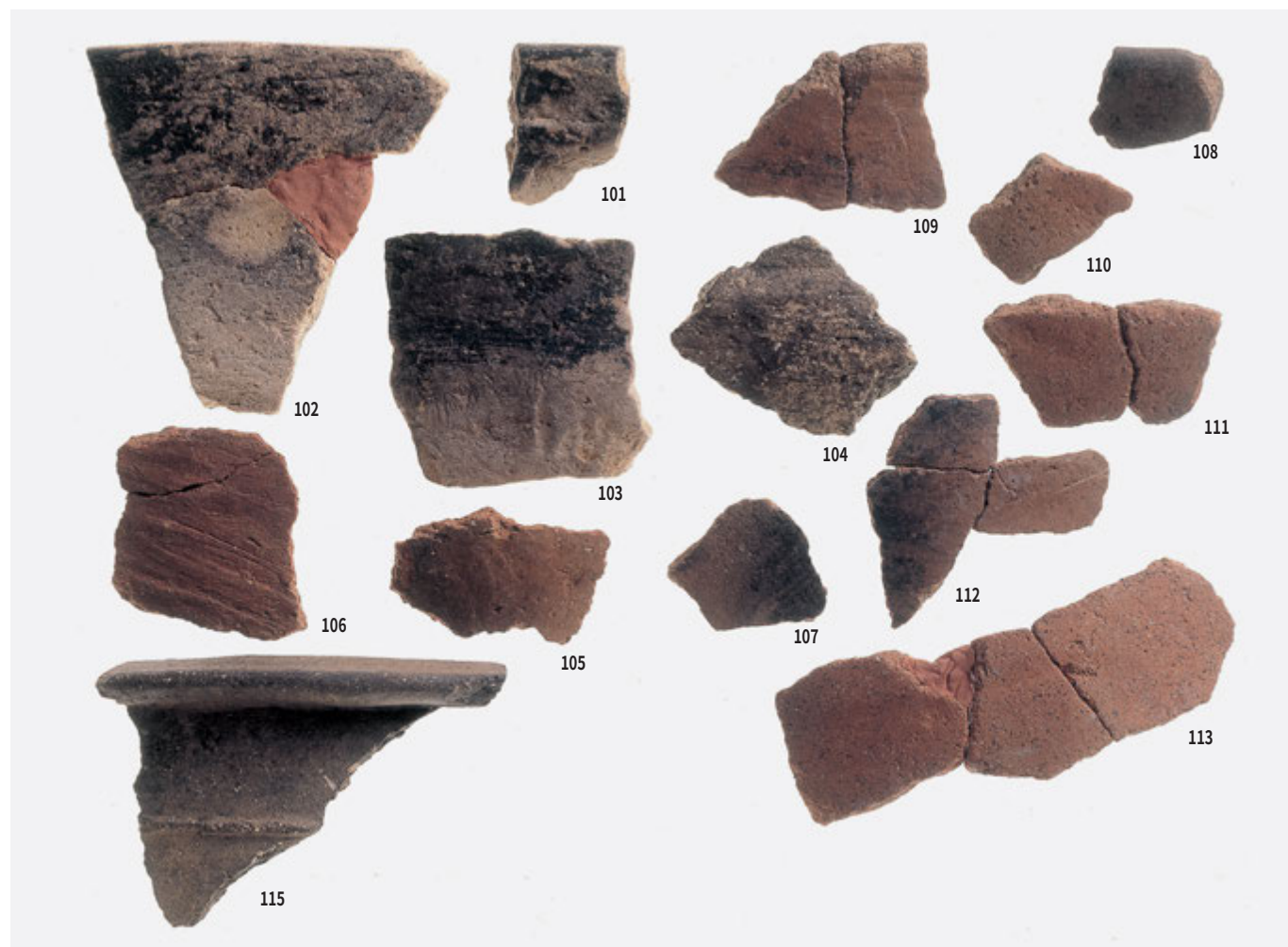


Ⅶ類・Ⅸ類土器





X類・XI類土器





縄文時代出土石器

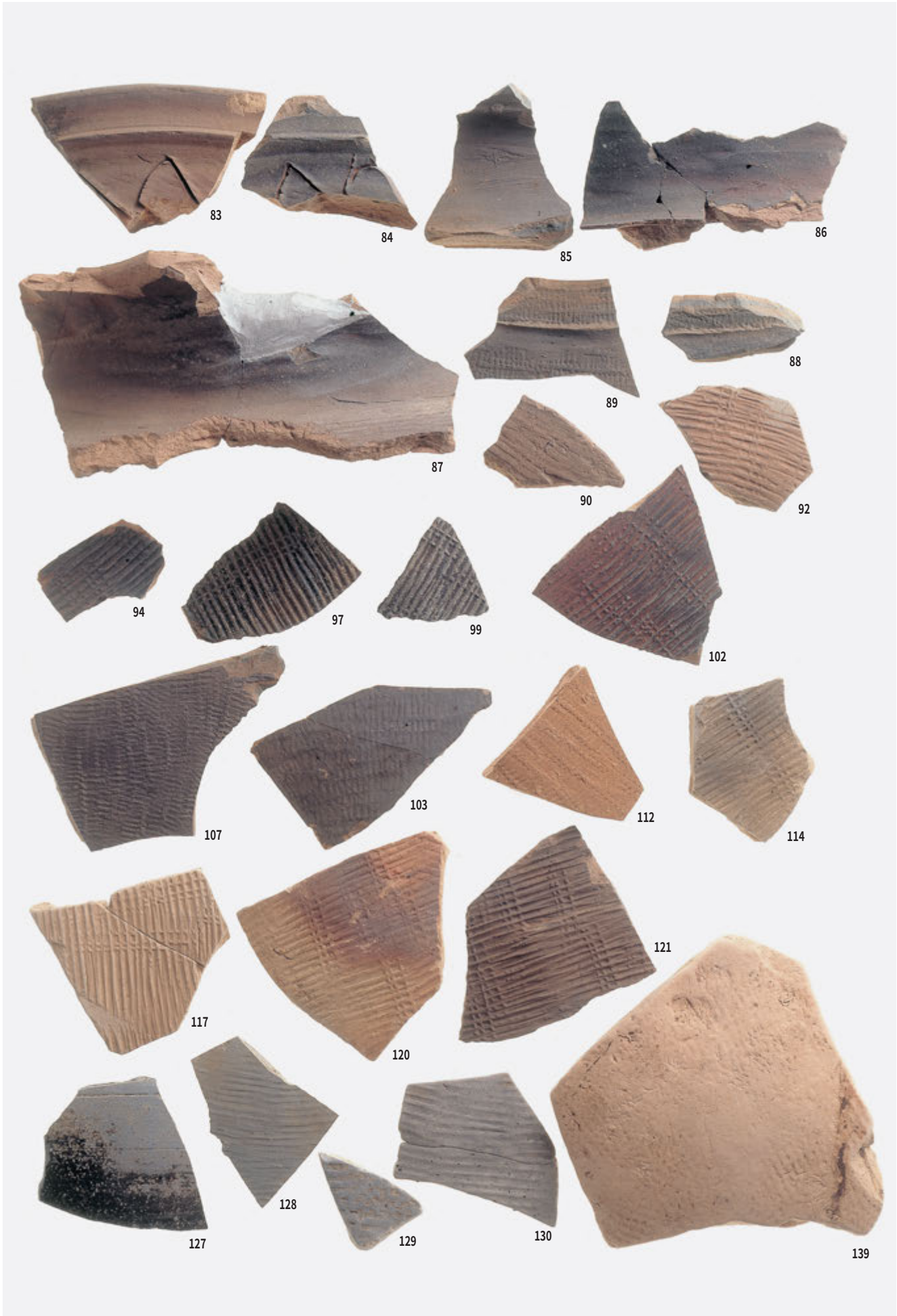


掘立柱建物跡出土遺物ほか



古代出土遺物 1





古代出土遺物 3



①中之迫遺跡周辺地形

国土画像情報(カラー空中写真)国土交通省 昭和49年撮影

②～④遺物出土状況

⑤調査風景



① T完掘状況
⑤調査風景

④区層上面検出状況

② 4 T完掘状況
⑥土層断面

③ 5 T完掘状況



I 類～IV類土器ほか



IV類・V類土器



あ と が き

唐尾遺跡・高古塚遺跡・菅牟田遺跡・中之迫遺跡の発掘調査は、平成16年度～平成18年度までの3年間、東九州自動車道建設に伴い実施された。

高古塚遺跡の調査では、アカホヤ火山灰層で落とし穴を発見したため、夏場のピーカンの空の下、オレンジ色の中にレモン色を探すのに神経を注いだ。さっき迄は、見えていたのに、「見えない！」在るはずのものが無い！無いはずのものが見えたのか？

また、古代の焼土跡が検出されてからは、建物があるかな？とみえない埋土に格闘した。黄色の検出面に夏の太陽、「見えな—い！」と頭を抱えながらも、絶対あると確信して検出に努めた。出てくるのは汗ばかり！カメラを抱えて、高い位置に登って見たら、くっきりと柱列が見え、夢中でシャッターを切った。「近くで見えねば引いて見よ」であった。

そんな中、調査終了間際に台風17号が襲来した。休日だったこともあり、上陸した割りには、大した事ないな—と安心していたら、谷を挟む地形のせいか竜巻に襲われ、現場のプレハブはさんざんな目に遭い、翌日から消え去った図面や資料を探すため、蒸し暑い中、谷底の藪を山狩りと称して探し回った。まるで、自然や先人達からあざ笑われているかのようであった。

こんな、ドタバタの調査を多くの作業員さんが支えてくれた。思えば、我々調査員は遠い過去の先人が残してくれた物を追いかけて、過去の人々の活動を追求する事に夢中になってしまう。だが、目の前には、自分達よりも先の時間を生き、多くの経験と体験をしてきた数多くの先達がいる。残念ながら今の我々は、彼らのそれには追いつけない。遠い過去の事象ばかりでなく、近き過去の時間にも耳目を傾けて、それらも明日の世界を築くために、未来へ繋いで行く必要があるのでは無いだろうか。

本年度の整理作業、報告書刊行は、失われつつある調査時の記憶を掘り起こしながらの作業が続いた。多くの貴重な情報が遺跡から得られたため、「一つでも多くの情報を記録したい」と努力したが、情報を整理・統合し、十分に活用できたかは、時間的な制約と担当者の力量不足のため、恥ずかしながら疑問に思うところである。

本報告において、実測等の作業を続けながら開発によって消えゆく遺跡の記録保存がこれで良いのかと不安に駆られ疑問に思い続けながらの1年であった。次回からは、より多くの正確な情報を整理・統合して活用し、提供できるようにしていきたい。

今回の発掘調査報告書を発刊するにあたり、多くの汗を流し発掘調査に携わってくださった地元の作業員さん、報告書作成のために努力して下さった整理作業員さんに厚くお礼を申し上げ感謝の言葉といたします。

担当者一同

唐尾班をはじめ、ご協力いただいた多くのみなさんありがとうございました。

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（127）

唐尾遺跡 高古塚遺跡
菅牟田遺跡 中之迫遺跡

発行日 平成20年 3 月19日

発行者 鹿児島県立埋蔵文化財センター
〒899－4318 鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森 2 番 1 号
T E L (0995) 48－5811

印刷所 株式会社あすなろ印刷
〒899－0041 鹿児島市城西2－2－36
T E L (099) 250－7033